

米子市教育文化事業団文化財報告書7

かやほら おくいん だ
萱原・奥陰田 I

一般国道180号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

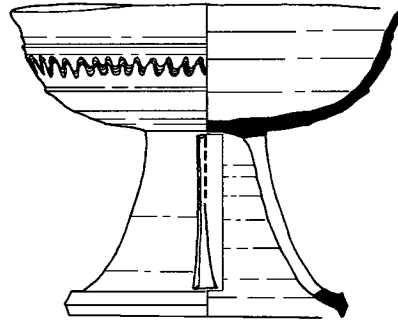


1994・3

鳥取県道路課
財団法人米子市教育文化事業団

かやほら おくいんだ
萱原・奥陰田 I

一般国道180号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



1994・3

鳥取県道路課
財団法人米子市教育文化事業団

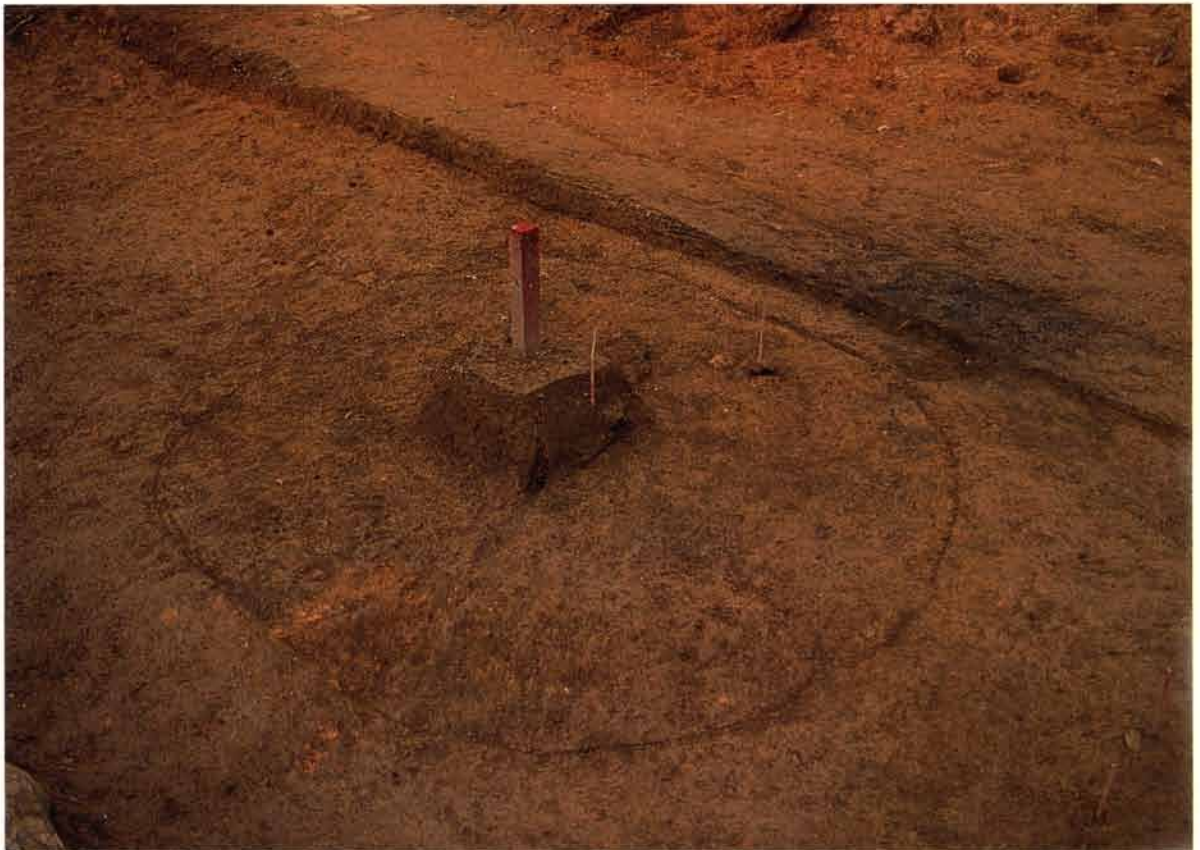


▲調査地

手前より山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡・下山遺跡
山向うは島根県安来市・中海干拓地（南東より）

◀上空からの遠望

成実平野・法勝寺川・長者原台地・大山



鍛冶関係遺構（山田遺跡3区第2テラス）
上 テラス近景色（北より）
下 炉跡状土坑 焼土・炭溜検出状況



土器溜 (山田遺跡1区)



山田7号墳珠文鏡出土状況
小型土器棺 (山田遺跡2区G-2グリッド)

古式須恵器の出土 (研石山遺跡5区-東谷)
谷-流路の堆積 (研石山遺跡5区-東谷)

序

中海・日本海に面し、秀峰大山を望む鳥取県西部の米子市周辺地域は、豊かな自然と歴史環境に恵まれた地域です。

周辺には、旧石器時代から中近世に至る多彩な遺跡が数多く存在し、初期水稻農耕文化を伝える目久美遺跡、西日本最大級の古代集落遺跡で国指定史跡の青木・福市両遺跡、本州唯一の国重要文化財の「石馬」、仏教壁画を持つ上淀廃寺など、山陰を代表する遺跡も少なくありません。

これらの文化財を、地域の文化遺産として保存活用し、後世に継承してゆくことは大変大切なことであり、様々な角度から検討し、努力を重ねているところであります。

一般国道180号道路改良工事に伴う発掘調査は、米子市南西部の新山と陰田地内において平成元年(1989)度から実施しているもので、当初は米子市教育委員会が担当し、平成4年(1992)度から当事業団がこれを引継ぎ、現在も継続しています。

調査では、縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代の各期にわたる遺構遺物を確認しましたが、古代の重要産業であった製鉄関係遺跡、畿内との活発な交流を示す古式須恵器、古代祭祀を物語る分銅形土製品・子持勾玉など、当初の予想をはるかに越える貴重な成果を得ることができました。

調査の成果と経験は、歴史研究のみならず、今後の地域文化を考えるうえでも大いに役立つものと思います。

本書は、調査がほぼ終了した新山での調査内容を中心に取りまとめました。この報告書が、文化財への理解と地域文化向上への一助となることを願ってやみません。

最後に、調査及び報告書の作成にあたり、ご指導ご協力を賜りました関係各機関ならびに各位に対し、心より感謝の意を申し上げます。

平成6（1994）年3月

財団法人米子市教育文化事業団

理事長 森田隆朝

例 言

1. 本書は、鳥取県道路課の依頼を受けて米子市新山・陰田両地内で行っている国道180号道路改良工事（米子バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
2. 調査は1989（平成元）年度から行っており現在も継続中である。1991（平成3）年度までは、米子市教育委員会が「国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団」を組織して行い、1992（平成4）年度からは、米子市の文化財体制の見直しにより財団法人米子市教育文化事業団が担当している。
3. 調査報告書は2回に分けて刊行する予定である。本書はその第1冊であり、1992年3月までに終了した新山地内の調査成果を中心に取りまとめた。第2冊は現地調査終了後に、陰田地内の調査内容と調査全体にわたる問題点について報告する予定である。

報告書名は遺跡所在地である米子市新山萱原（かやはら）と奥陰田（おくいんだ）に因む。

4. 調査では遺跡名称として次のような略号を用い遺物の注記にも使用した。

山田古墳群・山田遺跡3区（旧5区）…NY Y C 研石山遺跡…………NY T G

山田遺跡1～2区（旧1～4区）…………NY Y S 下山遺跡…………NY S M

なお、整理報告にあたり調査地区名を次のように改めた。

当初	山田遺跡1区	2区・3区・4区	5区
変更	1区	2区	3区

5. 古墳の名称は、遺跡踏査・試掘調査で使用した小字名による呼称「山田古墳群」「谷の上古墳」「研石山古墳」を用いたが、米子市における古墳等の名称は基本的に古墳は大字名、横穴墓は村落名を使用してきた。今回の小字による呼称は支群名・俗称名となる。各古墳の公式名称は本文中に記した。
6. 挿図中、土器断面の表記は次のようにした。
縄文・弥生・土師器：白抜き 須恵器：ベタ 陶磁器：アミ
また、遺物は挿図遺物番号のほかに取上番号を（ ）内に記した。
8. 本書に使用した方位は国土座標（V系）の軸方位である。
9. 本書の作製は財団法人米子市教育文化事業団埋蔵文化財調査室が行った。
各章の執筆分担は、目次に（ ）で記した。記名のない章は調査担当者の意見をもとに杉谷愛象がとりまとめた。なお、付表1遺物観察表は事業団調査員藤原裕子が作成した。
10. 出土遺物、図面、写真等の資料は米子市教育委員会が保管している。
11. 調査及び本報告書の作成にあたって、下記の方々に協力・指導・助言をいただいた。記して謝意を表す。（敬称略・順不同）

赤木三郎 穴沢義功 井上貴央 ト部吉博 大西郁夫 大村雅夫 大森 孟
岡田善治 角田徳幸 神谷正弘 佐古和枝 佐藤 豊 杉本良巳 田中 敦
田中秀明 田中義昭 高木正文 中原 斉 橋本久和 平井 勝 平野芳英
船越元四郎 三辻利一 南前孝明 村上 勇 渡辺貞幸 園 俊朗
鳥根県埋蔵文化財調査センター 鳥取県埋蔵文化財センター

調査組織（1993・3現在）

国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団（1989・4～1992・3）

団 長（米子市教育長） 板見甲子夫（'89・4～'91・6） 山岡 宏（'91・7～'92・3）
監 事（社会教育課長） 亀山 良（'89・4～'91・3） 松本 清治（'91・4～'91・6）
田代 祐嗣（'91・6～'92・3）
事務長（文化係長） 田代 祐嗣（'89・4～'91・7） 小原 貴樹（'91・8～'92・3）
調査主任（社会教育科主任） 杉谷 愛象（一部兼務）
調査員（*） 太田 正康（'89・4～'90・3）・西浦日出夫（'89・4～'91・3）
加納 真人（'89・4～'92・3）・灘脇 敏彦（'94・4～'92・3）
（*鳥取県教育委員会・鳥取県教育文化財団派遣）

事務員 細川 和郎
調査指導委員 船越元四郎 大村雅夫 杉本良巳 田中秀明 南前孝明 園 俊朗

財団法人米子市教育文化事業団（1992・4～1993・3）

理事長 森田 隆朝（米子市長）
専務理事 山岡 宏（米子市教育長）
事務局長 松本 清治
事務員 細川 和郎
調査員 中曾 千里（事業団調査員）・加納 真人（鳥取県教育委員会・鳥取県教育文化財団派遣）
灘脇 敏彦（同）・杉谷 愛象（米子市教育委員会・調査室担当）
調査指導委員 船越元四郎 大村雅夫 杉本良巳 田中秀明 南前孝明 園 俊朗

調査参加者

《作業員》 相見 孝寿 青田さち子 青田 光生 吾郷 琴江 石山 慎二 石山 忠重 井塚 嗣芳
稲田 愛子 井上 淳 井上三千代 入江 晴子 岩佐 修一 岩佐 美子 岩指 澄 内田 忠雄
江原 孝光 遠崎 礼子 遠藤 国男 遠藤 裕司 大江 静代 大森 孟 岡田 光昭 岡田 満江
小笠原美枝 小椋 邦江 尾崎三重子 加川 都 加藤かおる 加藤千代子 加藤美須津 亀山 祐治
亀山 佳子 河村富士江 菊地 伸介 木村 達子 国坂 秀夫 倉敷 寛美 倉敷みさ子 栗林 聡
桑本 貴子 小松原京子 斉木 薫 斉木 民治 斉木 利夫 斉木 則男 斉木 胖志 斉木 三枝
斉木 由和 佐藤 功憲 佐藤 静香 佐藤 省三 佐藤 太昭 佐藤 直樹 左藤 博 佐野 明德
佐野 康雄 杉田千津子 杉原 丑子 鷺見 勘二 鷺見シズ子 瀬尾恵利子 高崎 勢康 高田 茂
竹内日出夫 竹中 栄子 竹中 敏郎 田中 恵子 田村あさ子 田村 一正 田村 重治 田村 芳夫
手嶋 一夫 徳中 繁野 徳中 静枝 仲田いづみ 仲田 岩夫 仲田 茂 中田 文子 仲田 政子
長瀬 勝 中谷 康子 中曾 英子 中祖 義孝 西山 和郎 野口 洋一 野口 稔 乗田 久市
乗本 治 乗本 重子 乗本 年子 乗本美代子 乗本八重子 橋谷 美和 羽柴ぬい子 畑山 貞江
畑山 昇 樋口 誠亮 樋口 友枝 平林 安子 福長千保子 福本 蓉子 細田 幹人 堀尾 周作
本田 美雪 前田 純子 前田 慶子 前田ひとみ 前田 道博 牧浦ゆき子 牧野千代子 松本 一彦
松本 堅 松本 幸延 三浦 祥子 三好 睦 毛利 菊代 森田 覚 諸田 淳一 諸田美智栄
山上 森雄 山川 秋江 山根 礼吉 山本 省行 八幡 定己 吉井 秀昭 吉田 一子 吉田 茂
吉本スガ子 義久 正人 脇坂 茂子 渡部 篤子
《大学生》 有馬 美保 大塚 雅之 小野真理子 加治 柴保 児玉 和子 白石 麻保 新竹 由美
多賀まゆみ 高原 愛 田村 和美 中村 栄嗣 円羽 信之 橋本 維文 長谷川昌代 林 ひろみ
村田 幸子 八木奈諸美 山中 伸介 山中 啓介
《補助員》 植 佐知子 川本 芳江 木村 聡子 佐伯 憲昭 篠田 明子 滝川 友子 福嶋 昌子
福田 寛子 永田 公子

目 次

序

例 言・調査組織・調査参加者

本文目次

第 I 章 位置と環境	1
1. 地学的環境 (松本 哲)	3
2. 位置と歴史的環境.....	7
3. 新山地域の歴史 (加納真人) ...	8
第 II 章 調査の経過	15
1. 調査に至る経過.....	15
2. 調査の経過.....	19
第 III 章 調査の内容	20
1. 調査の概要.....	20
2. 山田古墳群.....	24
3. 山田遺跡 1 区.....	45
4. 山田遺跡 2 区.....	51
5. 山田遺跡 3 区.....	103
6. 研石山遺跡 1・4 区.....	119
7. 研石山遺跡 2 区.....	135
8. 研石山遺跡 3 区.....	140
9. 研石山遺跡 5 区.....	147
10. 下山遺跡.....	192
第 IV 章 出土遺物	198
1. 縄文土器.....	198
2. 弥生土器.....	199
3. 土師器.....	207
4. 須恵器.....	233
5. 土師質土器.....	259
6. 陶磁器類.....	262
7. 土製品.....	264
8. 石器・石製品.....	264
9. 木器・木製品.....	265
10. 鉄器・鉄製品.....	265
11. 古銭等.....	266
第 V 章 出土遺物の検討	280
1. 子持勾玉について (灘脇俊彦)	280
2. 珠文鏡について (小泉千絵)	284
3. 円筒埴輪について (小泉千絵)	287
第 VI 章 ま と め	291
特 論 自然科学的分析	297
1. 新山山田遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析 (奈良教育大学 三辻利一)	297
2. 新山研石山遺跡および陰田隠れが谷遺跡出土須恵器の蛍光 X 線分析 (奈良教育大学 三辻利一)	303
3. 新山遺跡出土鉄滓の調査 (日立金属株式会社安来工場 和鋼記念館)	309

挿 図 目 次

I					
挿図1	調査地の位置と周辺遺跡	1	挿図42	山田遺跡2区第14号住居跡遺構遺物	72
挿図2	米子市南部地域を中心とする地質図	2	挿図43	山田遺跡2区第15号住居跡	73
挿図3	山田遺跡2区土層断面略図	4	挿図44	山田遺跡2区第15号住居跡遺物	74
挿図4	第四紀後期における大噴火の歴史	4	挿図45	山田遺跡2区第16号住居跡	75
挿図5	古代山陰道推定図	9	挿図46	山田遺跡2区第16号住居跡遺物	76
挿図6	新山地区小字名	13	挿図47	山田遺跡2区第17号住居跡	77
II			挿図48	山田遺跡2区第17号住居跡遺物(1)	78
挿図7	工事ルートと調査遺跡	16	挿図49	山田遺跡2区第17号住居跡遺物(2)	79
挿図8	調査遺跡範囲図(萱原地区)	17~18	挿図50	山田遺跡2区第18号住居跡遺構遺物	80
III-1			挿図51	山田遺跡2区第19号住居跡遺構遺物	81
挿図9	山田古墳群分布図	25~26	挿図52	山田遺跡2区第20号住居跡	82
挿図10	山田2号墳遺構遺物	27~28	挿図53	山田遺跡2区第20号住居跡遺物	83
挿図11	山田3号墳遺構遺物	29	挿図54	山田遺跡2区炭・焼土、集石分布	84
挿図12	山田4号墳遺構遺物	31~32	挿図55	山田遺跡2区土坑図(1)	86
挿図13	山田5号墳遺構	33	挿図56	山田遺跡2区土坑図(2)	87
挿図14	山田6号墳、10号墳遺構遺物	34	挿図57	山田遺跡2区土坑図(3)	88
挿図15	山田7号墳遺構遺物	35~36	挿図58	山田遺跡2区工坑図(4)	89
挿図16	山田8号墳遺構遺物	37~38	挿図59	山田遺跡2区土坑図(5)	90
挿図17	山田1号横穴墓遺構図	39~40	挿図60	山田遺跡2区土坑図(6)	91
挿図18	山田1号横穴遺物(1)	42	挿図61	山田遺跡2区土坑図(7)	92
挿図19	山田1号横穴遺物(2)	43	挿図62	山田遺跡2区土坑図(8)	93
挿図20	山田1号横穴遺物(3)	44	挿図63	山田遺跡2区土坑図(9)	94
III-2			挿図64	山田遺跡2区土坑関係遺物(1)	95
挿図21	山田遺跡1区土層図	46	挿図65	山田遺跡2区土坑関係遺物(2)	96
挿図22	山田遺跡1区遺構遺物分布図	47~48	挿図66	山田遺跡2区溝	97
挿図23	山田遺跡1区土器溜遺溝	49	挿図67	山田遺跡2区溝遺物	98
挿図24	山田遺跡1区土坑図	50	挿図68	山田遺跡2区溝遺構遺物	99
III-3			挿図69	山田遺跡2区段状遺構遺物	100
挿図25	山田遺跡2区遺構分布図	52	挿図70	谷ノ上1号墳遺物	101
挿図26	山田遺跡2区土層図	53	挿図71	谷ノ上1号墳遺構	102
挿図27	山田遺跡2区第1号住居跡遺構遺物	57	III-4		
挿図28	山田遺跡2区第2号住居跡	58	挿図72	山田遺跡3区遺構分布図	105~106
挿図29	山田遺跡2区第2号住居跡遺物	59	挿図73	山田遺跡3区第1住居跡	107
挿図30	山田遺跡2区第3号住居跡	60	挿図74	山田遺跡3区段伏遺構	108
挿図31	山田遺跡2区第4・6号住居跡 (第1・2号建物跡)	61	挿図75	山田遺跡3区第1土坑遺溝遺物	109~110
挿図32	山田遺跡2区第4・6号住居跡断面遺物	62	挿図76	山田遺跡3区第2、第10土坑	111
挿図33	山田遺跡2区第5号住居跡遺構遺物	63	挿図77	山田遺跡3区第3・4土坑	112
挿図34	山田遺跡2区第7、8号住居跡	64	挿図78	山田遺跡3区その他土坑	113
挿図35	山田遺跡2区第7号住居跡遺物(1)	65	挿図79	山田遺跡3区第2テラス遺構分布図	115
挿図36	山田遺跡2区第7号住居跡遺物(2)	66	挿図80	山田遺跡3区鍛冶関係建物跡	116
挿図37	山田遺跡2区第9号住居跡遺構遺物	67	挿図81	山田遺跡3区第鍛冶関係遺構	116
挿図38	山田遺跡2区第10、11号住居跡遺構遺物	68	挿図82	山田遺跡3区第2テラス関係遺物	117
挿図39	山田遺跡2区第12号住居跡遺構遺物	69	挿図83	山田遺跡3区伏鉢1	118
挿図40	山田遺跡2区第13号住居跡	70	挿図84	山田遺跡3区縄文・弥生散布状況	118
挿図41	山田遺跡2区第13号住居跡遺物	71	III-5		
			挿図85	研石山遺跡1~4区遺構分布図	121
			挿図86	研石山遺跡1区遺構遺物分布図	122

挿図 87	研石山遺跡 1 区住居・建物跡(1)	123	挿図133	研石山遺跡 5 区第 2 テラス遺溝	180
挿図 88	研石山遺跡 1 区住居・建物跡(2)	124	挿図134	研石川遺跡 5 区第 2 テラス遺物	181
挿図 89	研石山遺跡 1 区住居・建物跡(3)	125	挿図135	研石山遺跡 5 区第 3 テラス西遺構	182
挿図 90	研石山遺跡 1 区溝・段状遺構(1)	126	挿図136	研石山遺跡 5 区第 3 テラス東遺構	183
挿図 91	研石山遺跡 1 区溝・段状遺構(2)	127	挿図137	研石山遺跡 5 区第 3 テラス関係遺物	184
挿図 92	研石山遺跡 1 区溝・段状遺構(3)	128	挿図138	研石山遺跡 5 区 9 号建物跡	184
挿図 93	研石山遺跡 1 区溝・段状遺構(4)	129	挿図139	研石山第 3 号墳(小石棺)遺構遺物	186
挿図 94	研石山遺跡 1 区土坑図	130	挿図140	研石山遺跡 5 区土坑	187
挿図 95	研石山遺跡 1 区関係遺物(1)	132	挿図141	研石山遺跡 5 区溝・段状遺構(1)	188
挿図 96	研石山遺跡 1 区関係遺物(2)	133	挿図142	研石山遺跡 5 区溝・段状遺構(2)	189
挿図 97	研石山遺跡 1 区関係遺物(3)	134	挿図143	研石山遺跡 5 区溝・段・土坑遺物(1)	190
挿図 98	研石山遺跡 4 区炭溜り遺構	134	挿図144	研石山遺跡 5 区溝・段・土坑遺物(2)	191
III - 6			III - 9		
挿図 99	研石山遺跡 2 区遺構分布図	135	挿図145	下山遺跡遺構分布図	193~194
挿図100	研石山遺跡 2 区第 1 住居跡	136	挿図146	下山遺跡 1 号建物跡	195
挿図101	研石山遺跡 2 区建物・段状遺構	137	挿図147	下山遺跡土坑図	196
挿図102	研石山遺跡 2 区土坑(1)	138	挿図148	下山遺跡遺構関係遺物	197
挿図103	研石山遺跡 2 区土坑(2)	139	IV		
III - 7			挿図149	縄文土器	201
挿図104	研石山遺跡 3 区遺溝分布・断面図	141~142	挿図150	弥生土器(前期)	202
挿図105	研石山 1 号墳埋葬施設	143~144	挿図151	弥生土器(中期一壺・甕類)	203
挿図106	研石山 2 号墳埋葬施設	145~146	挿図152	弥生土器(中期・後期一壺・甕類)	204
III - 8			挿図153	弥生土器(中期・後期一高坏)	205
挿図107	研石山遺跡 5 区遺構分布図	149	挿図154	弥生土器(中期・後期一底部)	206
挿図108	研石山遺跡 5 区遺物分布概要	151	挿図155	土師器(壺)	208
挿図109	研石山遺跡 5 区土層図	152	挿図156	土師器(壺)	209
挿図110	研石山遺跡 5 区遺物分布(1)	153~154	挿図157	土師器(甕)	210
挿図111	研石山遺跡 5 区遺物分布(2)	155~156	挿図158	土師器(甕)	211
挿図112	研石山遺跡 5 区第 1 号、3 号住居跡遺溝	157	挿図159	土師器(甕)	212
挿図113	研石山遺跡 5 区第 1 号住居跡遺物	158	挿図160	土師器(甕)	213
挿図114	研石山遺跡 5 区第 4 号住居跡遺構遺物	159	挿図161	土師器(甕)	214
挿図115	研石山遺跡 5 区第 7 号、11号住居跡遺構	160	挿図162	土師器(甕)	215
挿図116	研石山遺跡 5 区第 7 号、11号住居跡断面	161	挿図163	土師器(甕)	216
挿図117	研石山遺跡 5 区第 8 号住居跡、1 号建物	162	挿図164	土師器(甕)	217
挿図118	研石山遺跡 5 区第 8 号住居跡遺物	163	挿図165	土師器(甕)	218
挿図119	研石山遺跡 5 区第 9 号住居跡遺溝遺物	164	挿図166	土師器(甕)	219
挿図120	研石山遺跡 5 区第12号、13号住居跡	167	挿図167	土師器(小型丸底壺・低脚坏・小鉢)	221
挿図121	研石山遺跡 5 区第12号、13号住居跡遺物	168	挿図168	土師器(器台・小型器台)	222
挿図122	研石山遺跡 5 区第14号、15号住居跡	169	挿図169	土師器(高坏)	223
挿図123	研石山遺跡 5 区第16号住居跡	170	挿図170	土師器(高坏)	224
挿図124	研石山遺跡 5 区第16号住居跡遺物	171	挿図171	土師器(碗)	225
挿図125	研石山遺跡 5 区第17~19号住居跡	172	挿図172	土師器(甌)	227 228
挿図126	研石山遺跡 5 区第17~19号住居跡関係遺物	173	挿図173	土師器(甌)	229
挿図127	研石山遺跡 5 区第 2 号建物跡	174	挿図174	山田遺跡出土土師器(1)	230
挿図128	研石山遺跡 5 区第 3 号建物跡	175	挿図175	山田遺跡出土土師器(2)	231
挿図129	研石山遺跡 5 区第 4 号建物跡	176	挿図176	古式須恵器(1) 蓋坏・高坏(山田)	235
挿図130	研石山遺跡 5 区第 5 号建物跡	177	挿図177	古式須恵器(2) 蓋坏・高坏(山田)	237
挿図131	研石山遺跡 5 区第 6 号・7 号建物跡	178	挿図178	古式須恵器(3) 蓋坏(研石山)	238
挿図132	研石山遺跡 5 区第 6 号・7 号建物跡遺物	179	挿図179	古式須恵器(4) 蓋坏(研石山)	239

挿図180	古式須恵器(5) 有蓋高坏(研石山)	240
挿図181	古式須恵器(6) 無蓋高坏(研石山)	241
挿図182	古式須恵器(7) 罎(山田・研石山)	242
挿図183	古式須恵器(8) 壺	243
挿図184	古式須恵器(9) 壺・甕	244
挿図185	古墳時代後期の須恵器(1) 蓋坏(研石山)	246
挿図186	古墳時代後期の須恵器(2) 蓋坏(研石山)	247
挿図187	古墳時代後期の須恵器(3) 罎・壺類	248
挿図188	古墳時代後期の須恵器(4)	249
挿図189	奈良時代以降の須恵器(1) 坏・皿	251
挿図190	奈良時代以降の須恵器(2) 坏類	252
挿図191	奈良時代以降の須恵器(3) 坏類	253
挿図192	奈良時代以降の須恵器(4) 皿・壺	254
挿図193	奈良時代以降の須恵器(5) 壺・蓋等	255
挿図194	山田遺跡出土須恵器・墨書土器	256
挿図195	奈良時代以降の土師器	260
挿図196	陶磁器・土師質土器	261
挿図197	焼締陶器・土師質土器	263.
挿図198	鏡・土製品	267
挿図199	土製・石製模造品類	268

挿 表 目 次

挿表1	調査遺跡一覧表	21
挿表2	遺構一覧表(住居・建物・古墳)	22, 23
挿表3	陶磁器出土比較表	262
挿表4	掲載石器一覧表	279
挿表5	子持勾玉出土一覧表	281
挿表6	鳥取県内鏡出土一覧表	286
挿表7	鳥取県内出土珠文鏡一覧表	286
挿表8	胎土分析試料一覧表	296

挿図200	石器類(石鏃)	269
挿図201	石器類(石鏃)	270
挿図202	石器類(剝片)	271
挿図203	石器類(石斧・石包丁・砥石)	272
挿図204	石器類(砥石・叩き石)	273
挿図205	木器・木製品	274
挿図206	木器・木製品	275
挿図207	鉄器類・古銭	276
挿図208	移動式竈	277~278
挿図209	須恵器比率計測図	279

V

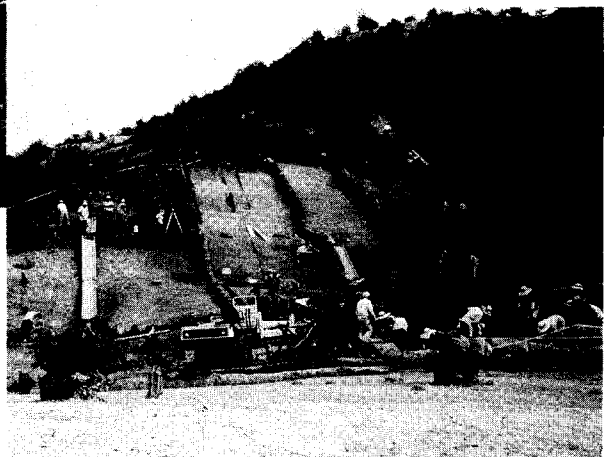
挿図210	鳥取県内子持勾玉出土分布図	281
挿図211	鳥取県内鏡出土状況比較図	285
挿図212	山田8号墳出土埴輪実測図	289

VI

挿図213	遺跡形成過程概略図	291
挿図214	胎土分析結果比較図	294
挿図215	胎土分析領域未定群比較	295
挿図216	胎土分析土器形態と領域比較	295

付 表 目 次

附表1	遺物観察表	319
附表2	土坑一覧表	332



谷を掘る・斜面を掘る(研石山遺跡5区)

図 版 目 次

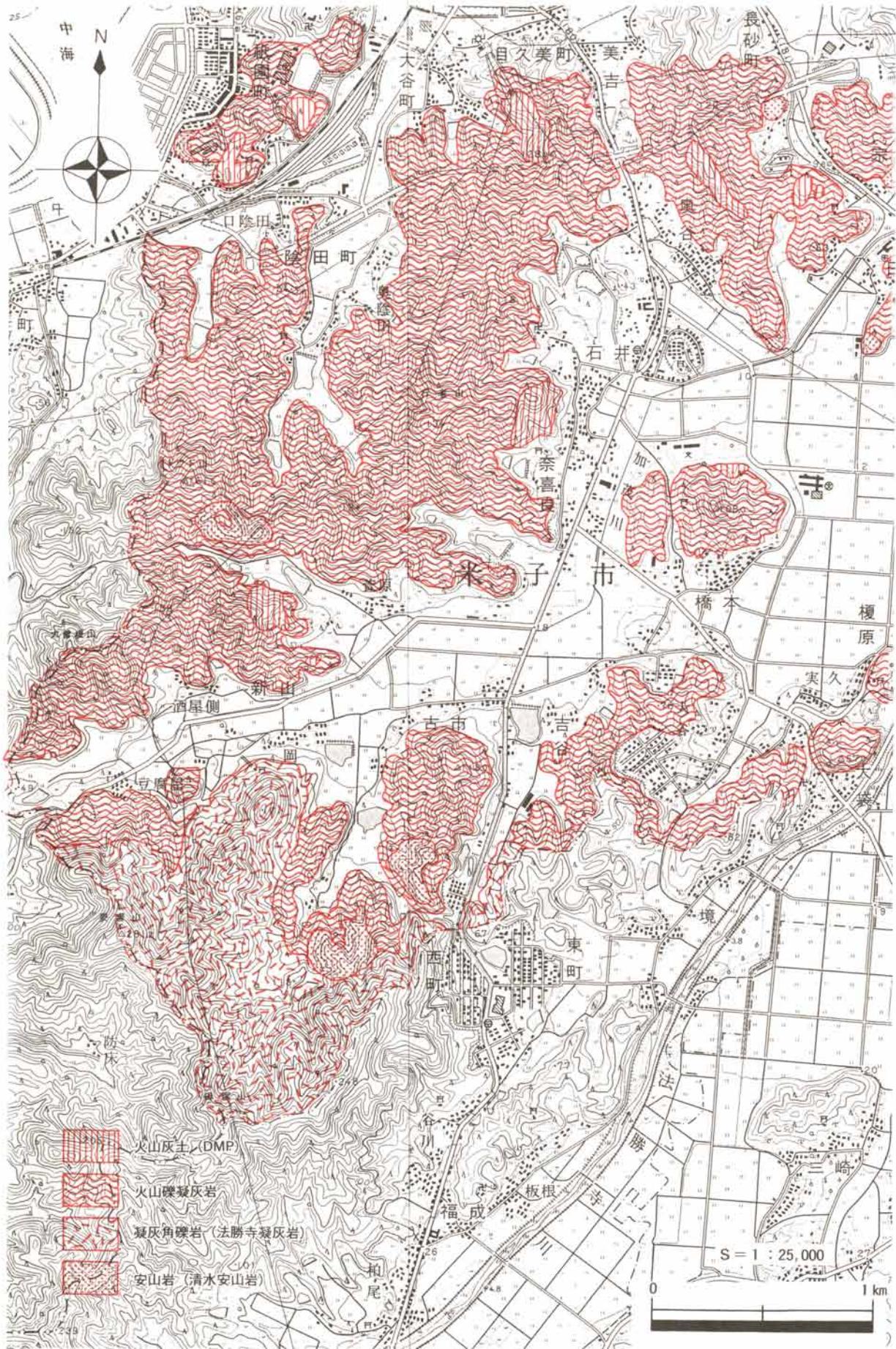
- | | | | |
|------|-------------------|------|---------------------|
| 図版 1 | 山田遺跡空中写真 | 図版41 | 山田遺跡 3 区土坑（貯蔵穴？） |
| 図版 2 | 研石山遺跡空中写真 | 図版42 | 山田遺跡 3 区鍛冶跡 |
| 図版 3 | 調査地の周辺 | 図版43 | 山田遺跡 3 区鍛冶跡 |
| 図版 4 | 周辺の地形（平野遠望） | 図版44 | 研石山遺跡 1 区遺構分布 |
| 図版 5 | 調査地遠望 | 図版45 | 研石山遺跡 1 区建物跡 |
| 図版 6 | 山田古墳群 | 図版46 | 研石山遺跡 1 区建物跡 |
| 図版 7 | 山田 2 号墳 | 図版47 | 研石山遺跡 1 区テラス |
| 図版 8 | 山田 2 号墳 | 図版48 | 研石山遺跡 1 区溝遺物 |
| 図版 9 | 山田 3・4 号墳 | 図版49 | 研石山遺跡 1 区溝遺物 |
| 図版10 | 山田 4 号墳周溝外施設 | 図版50 | 研石山遺跡 2 区 |
| 図版11 | 山田 5～8 号墳調査前状況 | 図版51 | 研石山遺跡 4 区炭溜り |
| 図版12 | 山田 5・6・10号墳 | 図版52 | 研石山遺跡 3 区眺望 |
| 図版13 | 山田 7 号墳 | 図版53 | 研石山遺跡 3 区全景 |
| 図版14 | 山田 7 号墳埋葬施設 | 図版54 | 研石山遺跡 3 区第 1 埋葬施設 |
| 図版15 | 山田 8 号墳 | 図版55 | 研石山遺跡 3 区第 1 埋葬施設 |
| 図版16 | 古墳断面 | 図版56 | 研石山遺跡 3 区第 1・2 埋葬施設 |
| 図版17 | 古墳断面 | 図版57 | 研石山遺跡 3 区小石棺・石蓋土壙 |
| 図版18 | 萱原 1 号横穴墓 | 図版58 | 研石山遺跡 5 区・下山遺跡調査前 |
| 図版19 | 萱原 1 号横穴墓 | 図版59 | 研石山遺跡 5 区遺構分布 |
| 図版20 | 萱原 1 号横穴墓 | 図版60 | 研石山遺跡 5 区遺構分布 |
| 図版21 | 山田遺跡遠望 | 図版61 | 研石山遺跡 5 区住居・建物 |
| 図版22 | 山田遺跡 1 区古代流路 | 図版62 | 研石山遺跡 5 区住居・建物 |
| 図版23 | 山田遺跡 1 区敷石遺構 | 図版63 | 研石山遺跡 5 区住居・建物 |
| 図版24 | 山田遺跡 1 区土器溜り | 図版64 | 研石山遺跡 5 区第 2 テラス・遺物 |
| 図版25 | 山田遺跡 1 区ピット群、炭溜り | 図版65 | 研石山遺跡 5 区石棺 |
| 図版26 | 山田遺跡 1 区土層断面 | 図版66 | 研石山遺跡 5 区住居・遺物出土状況 |
| 図版27 | 山田遺跡 1 区土坑 | 図版67 | 研石山遺跡 5 区土層 |
| 図版28 | 山田遺跡 2 区遺構分布・調査風景 | 図版68 | 研石山遺跡 5 区古代流路（北谷） |
| 図版29 | 山田遺跡 2 区遺構分布 | 図版69 | 研石山遺跡 5 区古代流路（東谷） |
| 図版30 | 山田遺跡 2 区遺構分布 | 図版70 | 下山遺跡 |
| 図版31 | 山田遺跡 2 区竪穴住居跡 | 図版71 | 出土遺物（1） |
| 図版32 | 山田遺跡 2 区竪穴住居跡 | 図版72 | 出土遺物（2） |
| 図版33 | 山田遺跡 2 区竪穴住居跡 | 図版73 | 出土遺物（3） |
| 図版34 | 山田遺跡 2 区建物跡 | 図版74 | 出土遺物（4） |
| 図版35 | 山田遺跡 2 区土層・遺物出土状況 | 図版75 | 出土遺物（5） |
| 図版36 | 山田遺跡 2 区弥生貯蔵穴 | 図版76 | 出土遺物（6） |
| 図版37 | 山田遺跡 2 区神社跡遺構 | 図版77 | 出土遺物（7） |
| 図版38 | 山田遺跡 2 区土層 | 図版78 | 出土遺物（8） |
| 図版39 | 山田遺跡 3 区住居跡・土坑 | 図版79 | 出土遺物（9） |
| 図版40 | 山田遺跡 3 区土坑（貯蔵穴？） | 図版80 | 調査参加者説明会 |



A 萱原遺跡群 B 奥陰田遺跡群

1. 陰田遺跡群 2. 米子城跡 3. 四日市町遺跡 4. 目久美遺跡 5. 池ノ内遺跡 6. 長砂遺跡
7. 東宗像遺跡 8. 奥谷堀越谷遺跡 9. 石井遺跡 10. 奈嘉良遺跡 11. 吉谷上ノ原山遺跡 12. 吉谷トコ遺跡
13. 福市遺跡 14. 青木遺跡 15. 諸木遺跡
- a. 門生窯跡群 b. 穴観横穴 c. 岡横穴 d. 陰田1号墳 e. 陰田41号墳 f. 陰田横穴墓群 g. 大塔山横穴墓群
- h. 宗像古墳群 i. 日原6号墳 j. 榎原瓦窯跡 k. 御崎殿山古墳 l. 普段寺古墳 n. 大亀塚古墳 m. 後塔山古墳

挿図1 調査地の位置と周辺遺跡



挿図2 米子市南部地域を中心とする地質図

第 I 章 位置と環境

1. 地学的環境 —米子市新山・陰田地区を中心とする地質について—

1. はじめに

米子市新山・陰田地区並びにその周辺の丘陵地の地質を、平成6年2月に調査した。これはその成果の概略であり、土質については肉眼鑑定によるものである。

なお、地盤を構成する地質は厚さ30～60kmの近くの大部分を占める岩石と、表層のごく浅い所をおおう土層に分類され、純粹の地質学では未固結の土も岩石の一種として扱われるが、ここでは岩石は固結したもの、土は未固結ないし半固結のもので土質工学の対象となるものとして取り扱った。

2. 米子市南部丘陵の地形と地質

米子市南部丘陵の地形は、広義には日野町と西伯町との町境に聳える鎌倉山（730.8m）を中心地とした小分水界により区分された西伯山地に属し、さらに法勝寺川右岸の大山ロームにおおわれた段丘地形^(註1)と左岸の浸食作用により浅丘化した小起伏山地に大別される。

前者は米子市別所地区から福市地区にかけての丘陵で、会見町越敷山（226.5m）を模式地とする緩やかな平坦面で構成された段丘地形^(註2)を呈し、津ノ井段丘^(註2)にほぼ対比される。後者は米子市新山地区から陰田地区にかけての丘陵で、西伯町境の母塚山（272m）、島根県境のドウド山（161.5m）と、いずれも浸食を受けた小起伏山地を主体とする。



写真1 母塚山々頂から新山・陰田地区丘陵を望む

なお、米子市南部の沖積平野を概観すると、法勝寺川流域では良好な埋積谷低地、米子駅付近の加茂川河口では低湿地が発達し、泥がち堆積層が卓越している。特に米子市目久美遺跡ではデルタ堆積物中から縄文時代前期～古墳時代の遺跡が出土し、この地域の地形発達史を考える上で重要な手がかりを提供している。

一方、米子市南部丘陵、特に新山・陰田地区周辺の地質は、ほ乳類の時代でもある新生代新第三紀中新統^(註3)（2300万年前）や人類の発達した時代であり、また寒冷な氷河期が繰り返し訪れたことにより氷河時代とも呼ばれている新生代第四紀^(註4)に形成されたものがみられる。新生代新第三紀中新統のものは米子市南部から西伯町北部に広く分布し、基盤岩類を不整合におおい、^(註5)下位より不淘汰角礫岩層^(註6)・母里流紋岩層^(註7)・清水安山岩層^(註8)・法勝寺凝灰岩層^(註9)に区分される。後者の新生代第四紀はテフラの時代と言っても過言ではないが、当地域では更新統の大山松江テフラ^(註10)（DMP）^(註11)が丘陵上平坦面と斜面部との斜面変換点や丘陵裾部に点在している。（挿図2）

3. 米子市新山山田遺跡2区の丘陵上の地質

米子市新山山田遺跡内では、調査終了後、一般国道180号線改良工事に伴う道路法面掘削工事が完了した所があり、土層断面の一部が確認できる。(写真2・挿図3) 山田遺跡2区であり、東方に緩やかに下る丘陵上で、稜線に沿ってすぐ南側に形成された凹地を含む。この凹地には上位から①表土・漸移層、②黒ボク層・茶褐色ローム層、③大山松江テフラ層 (DMP)、④黄灰色

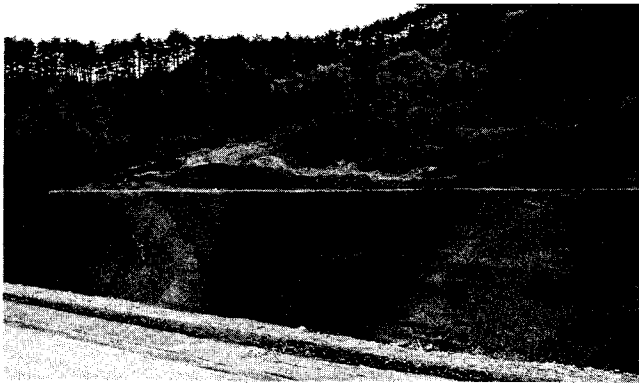
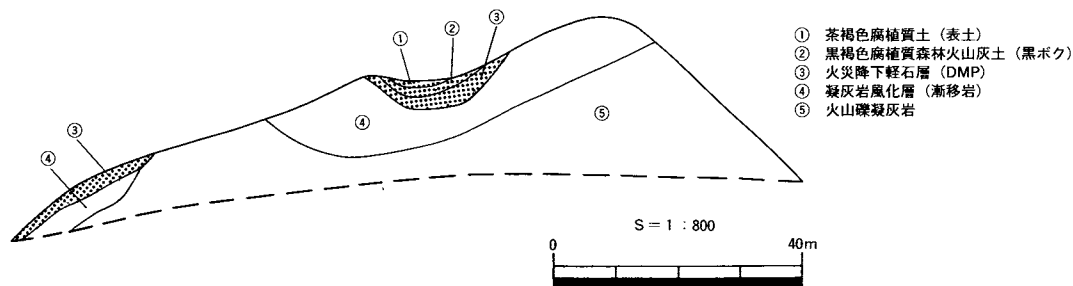


写真2 土層断面 (東から)

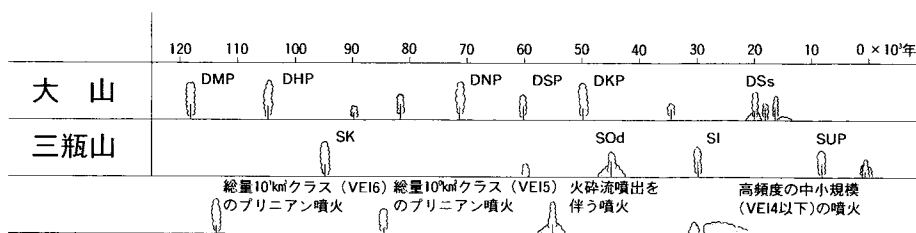
凝灰岩風化層 (漸移層)、⑤青灰色、濃灰色、赤黄色と呈色作用を受けた軟岩Ⅱ類以下の硬度を保つ凝灰岩と言う層序がみられ、本遺跡の中では唯一、会見町越敷山を模式地とする平坦面に堆積する層序を示す。特に②黒ボク層は、その質から上位、黒褐色。下位、漆黒色に区分され、上位のものは弥生時代中期の遺物を包含している。下位のものからは時期を決定する遺物がみられず、明確にし得ないが、本凹地同様の土層堆積をもつ西伯町清水谷遺跡^(註12)の黒ボク層からは縄文早期 (黄島式～高山寺式) の楕円形押型文土器が出土している事を考え合わせると、②黒ボク層下位は縄文時代にさかのぼる可能性は高いものと推察される。



挿図3 山田遺跡2区土層断面略図

4. まとめ

今回の地質調査は、前述したとおり肉眼鑑定によるものであり、しかも丘陵部に限定し、短期間で行ったものである。したがって、得られた成果は概略的にならざるを得なかった。特に、新山・陰田両地区の遺跡内の地質については、その広がりから土質のみならず硬度など、個々の遺跡の中での特性にも、もう少し触れたかったが、なし得ず、今後に多くの問題を残す結果となった。いずれ機会があれば、さらに検討を加えたいと思う。



挿図4 第四紀後期 (過去12.5万年間) における大噴火 (10°10'km³のテフラを出したプリニアン噴火) の歴史、大山・三瓶山

(註1) 段丘地形 沖積平野部との比較差が10~20mの平坦地で形成される低位段丘と、比較差が40m前後の平坦地で形成される高位段丘に大別される。

(註2) 津ノ井段丘 鳥取平野縁辺部の津ノ井付近では海拔10~25mの範囲に良好な段丘がみられる。この段丘の構成物資は粘土層(津ノ井粘土)で、その中に介在する埋木の年代は3万年B.P以上である。また、この段丘上には大山の中部ロームが載る。

(註3) 新生代第三紀中新統 表1. 地質時代の区分を参照。

(註4) 新生代第四紀 表2. 第四紀の時代区分を参照。

代(界)	絶対年代(百万年)	紀(系)	世(統)
新 生 代	0.01 1.8~2	第 四 紀	沖積世(完新世) 洪積世(更新世)
	23		新第三紀 鮮新世 中新世
	70		古第三紀 漸新世 始新世 暁新世
中 生 代	125 180 220	白 亜 紀 ジ ュ ラ 紀 三 疊 紀	
	古 生 代	270	二 疊 紀
		350	石 灰 紀
400		デ ボ ン 紀	
440		シルリア紀	
490		オルドビス紀	
600	カンブリア紀		
先カンブリア紀	4600	(原 生 代) (始 原 代)	

表1 地質時代の区分

第四紀相対年代					地層
絶対年代(万年前)	相 対 年 代			考古(日本の年代区分)	
	時代区分	氷期区分	歴史		
0	完 新 世	後 氷 期	歴史	完(沖新積統)	
1			弥生・古墳		
			縄文時代		晩期
					後期
					中期
13	更 新 世	最 終 氷 期	前期		
			中期		
			最終間氷期		
70	180	前 期	旧石器時代	更(洪新積統)	
180					

表2 第四紀の時代区分

(註5) 基盤岩類 中性代白亜紀に噴出、もしくは貫入した流紋岩質岩石及びその碎屑物と鮮新世火山岩類。いずれも流紋岩質岩石を中心としているものの安山岩質岩石まで包含している。

(註6) 不淘汰角礫岩層 基盤岩類と中新統との境界付近に分布する。礫径80cm以下の基盤岩類の角礫ないし亜角礫とその細粒碎屑物からなる不淘汰な角礫岩で最大層厚は約30mである。

(註7) 母里流紋岩層 流紋岩質からデイサイト質の同質火砕岩からなる。火砕岩は一部で溶結構造を示す。最大層厚は150m以上である。

(註8) 清水安山岩層 安山岩質の溶岩と火砕岩からなり、下位の母里流紋岩層を一部指交関係で整合におおる。火砕岩は一部で溶結構造を示す凝灰角礫岩から火山礫凝灰岩からなる。最大層厚は200m以上である。

(註9) 法勝寺凝灰岩 流紋岩質からデイサイト質の火砕岩で、石英及び長石の斑晶と軽石を多く含む凝灰角礫岩や火山礫凝灰岩からなり、広い範囲で溶結構造を示す。下位の清水安山岩層を一部指交関係で整合におおい最大層厚は300m以上である。

(註10) テフラ 火砕物、広義の火山灰と同義である。テフラはその定義により降下物・火砕流堆積物を含むが溶結したものを除く・溶結、非溶結を問わず全てを含むなど色々使い方に違いがあるが、ここでは後者の溶結、非溶結を問わず全てを含むものとして扱う。

(註11) 大山松江テフラ(DMP) 分布主軸を西方にもつとともに、大山東方から近畿北部にも分布するという珍しい分布域をもつテフラで、噴出年代が最終間氷期とみられること、カミングトン閃石を包含するという特性をもつことなど注目すべきテフラである。中新統を不整合におおい、最大層厚は15m以下である。

ところで、中国・四国・近畿地方に分布し、第四紀研究の指標となるテフラは三瓶山と大山から噴出したテフラと九州を主とする遠隔地からもたらされたテフラを主とするが、三瓶山と大山のものの大部分は中国地方日本海沿岸地域から近畿地方にかけて分布する。三瓶山は第四紀後期に数回のプリニアン噴火をおこし、特徴的な鉱物組成をもつテフラをもたらし、その活動は完新世に及ぶ。一方、大山は更新世中・前期から活動してきた火山で、更新世後期にも挿図4に示すような諸テフラを噴出した。しかし、完新世には活動を沈静化している。なお、プリニアン噴火とは多量の軽石、スコリア、火山灰をガスとともに爆発的に噴出し、火口上に高い噴煙柱を定常的に形成するタイプのものである。また、挿図4に示したDHP（大山蒜山原テフラ）・DNP（大山生竹テフラ）・DSP（大山関金テフラ）・DKP（大山倉吉テフラ）・DSs（大山笹ヶ平テフラ）・SK（三瓶木次テフラ）・SOD（三瓶大田テフラ）・SI（三瓶池田テフラ）・SUP（三瓶浮布テフラ）である。

(註12) 清水谷遺跡 西伯町教育委員会 1992

参考文献

- 新井房夫^{ほか} 『地層の知識』 東京美術 1987
- 鳥取県 『10万分の1鳥取県地質図および同説明書』 鳥取県 1966
- 経済企画庁 『土地分類図31 鳥取県』 経済企画庁 1974
- 町田 洋^{ほか} 『日本列島とその周辺』 『火山灰アトラス』 東京大学出版会 1992
- 池田俊雄 『わかりやすい地盤地質学』 鹿島出版会 1986
- 『目久美遺跡』 米子市教育委員会 1986

(株)TMS 業務部調査課
課長 松本 哲



2. 位置と歴史的環境

調査地は、米子市^{にいやま}新山字山田南・山田・谷ノ上南・トギ石山・谷ノ下西・下山に所在する。

米子市は、鳥取県の西端に位置する面積約100km²、人口13万余人の地方都市である。位置環境から県西部の中核であると共に、特に商業を中心とする山陰の拠点都市である。東南には中国地方最高峰の大山（海拔1,711m）、北には弓浜半島・日本海・美保湾、西には中海があり、境港市、西伯郡西伯町・会見町・岸本町・大山町・淀江町・日吉津村、島根県安来市、能義郡伯太町に接している。平野の中央を一級河川日野川が貫流し、米子平野はこの沖積作用によって形成され、右岸の箕蚊屋平野、左岸中流域の法勝寺平野、下流域の低位砂地の米子平野からなる。

新山は米子市の市街地から南西に約4 kmの位置にあたり、西伯町、島根県伯太町に接する農村地帯である。要害山と北側のドウド山に挟まれた東西に細長い地勢で、谷平野に面した山裾部に酒屋側、岡、豆腐屋側、萱原の各集落が点在している。東側の谷口を国道180号線が南北に走り、谷筋には県道米子広瀬線が通っている。

古来より要衝地域として知られ、谷筋は古代山陰道のルートとも考えられ、峠は出雲風土記の『手間割』にも比定されている。律令期には会見郡12郷のうち半生郷に属していたと考えられる。中世には標高287mの要害山上に新山要害（長台寺城）が築かれ、会見町の手間要害などと共に出雲・伯耆の国境地帯の重要拠点となっていた。谷口の橋本集落裏の独立山塊には七尾城（宝石城）も存在する。近世には荷拔改所の指定や木戸の設置もあった（豆腐屋、萱原）。

米子市街地を流れる加茂川はこの新山に源を発し、平野を流れて中海に通じており、流域には、有舌尖頭器・弥生集落の¹⁰奈喜良遺跡をはじめ、古墳前期の方墳日原6号古墳、¹竪穴系横口式石室・⁶横穴式石室・⁷横穴等の宗像古墳群・⁷東宗像古墳群、⁶縄文～古墳の低湿地遺跡長砂遺跡・⁵池ノ内遺跡・⁴目久美遺跡など主要遺跡が存在する。また、平野を東進すれば法勝寺川を経て国史跡青木遺跡・¹⁴福市遺跡のある¹³長者原台地に達し、正面には秀峰大だい山せんを眺望できる。池ノ内遺跡は弥生前期～古墳中期の水田・古代流路跡で、田舟（弥生前・中期）をはじめ大量の木製品が出土した。目久美遺跡は縄文～弥生の標識遺跡で、縄文前期初頭～晩期の貯蔵穴・土器・獣骨類、弥生前期～中期の水田跡・集落跡。福市・青木遺跡は縄文落し穴、弥生中期～奈良時代の集落跡、古墳群。

山を越えた陰田地区には、九州羸系との関係を示す縄文前期初頭の陰田第9遺跡¹、丘陵性の弥生後期集落跡陰田第1遺跡・第6遺跡¹、10代の女性を埋葬主体とする陰田41号墳⁶（円墳25m・中期）、山陰最大級の陰田横穴墓群、土馬出土地などがある。南東側の会見町では、三角縁神獣鏡出土の普段寺1号墳・2号墳¹、西伯耆最大の三崎殿山古墳^k（全長110m・中期）、画文帯神獣鏡出土の浅井11号墳など主要古墳が集中する。南側の西伯町では、弥生前期の環濠集落清水谷遺跡、マケン堀横穴群、朱塗り頭蓋骨出土の春日山古墳（後期）などがある。

この地における遺跡は開発による緊急度も少なく、永らく未踏査地域として残り、岡横穴や若干の小古墳のほかは余り知られてはいなかったが、近年の調査によって、周辺の山麓台地な

どで吉谷トコ¹²（古墳中期）、吉谷上ノ原山¹¹（弥生後期）などの集落跡や、前方後円墳を含む古墳群等の存在が明らかになりつつある。立地的にも、今後かなりの遺跡の存在が望まれる地域である。

3. 新山地域の歴史

1. 古代山陰道と新山

伯耆国の古代山陰道に関する論考としては、『鳥取県史』^(註1) 1をはじめ各市町村市史で断片的に取り上げられているが、まとまったものとしては、管見の限りでは中林保氏の^(註2)一連の研究が唯一のものであった。

中林氏はその研究の中で、それまで通説とされていた古代官道の2つの想定ルート、つまり

(ア) 現在の国道9号線とほぼ同じく海岸線を東西に走行するルートで、相見駅の位置する日野川西岸の米子市車尾付近とするもの^(註3)

(イ) 米子平野南域を迂回するもので、相見駅の位置として旧五千石村（現米子市）、幡郷村（現岸本町）地域とするもの^(註4)

の2説を地籍図などから検討して、

(イ) 説をベースとし、(ウ) 和奈駅から会見郡に達し、壺瓶山の南麓より現在の米子市尾高付近を経て日野川を渡り、八幡・新庄付近を経て岸本町大殿・坂長付近に想定される会見郡家や相見駅に達する。さらに岩屋谷・諸木・天万を経て、出雲国境の「手間割」に達する米子平野の南側を迂回するルート^(註5)を提唱されている。

『出雲国風土記』には「通道。国の東の堺なる手間割に通ふは41里1百80歩なり」とあり、古代山陰道は出雲と伯耆の国境にある「手間割」^(註6)を通過するとされている。

加藤義成氏の研究によれば、「手間割」の具体的な比定地として伯太町安田関付近が考えられている^(註7)。ここは新山の谷を伯太町方面に越えたところであり、新山付近を古代山陰道が通過していた可能性が高いと思われる。しかし、中林氏の研究では具体的なルートが地形図上に記入されておらず、主要な点をおさえた段階にとどまっていた。

この問題について、主要な点を線として繋ぎルート化したのが日野尚志氏の研究^(註8)である。

日野氏は地籍図だけでなく、文献史料や考古学的な発掘調査の成果を十分活用して官道ルートの復元をすすめられているが、特に注目されているのが、①日野川流域の条里^(註9)。②会見郡家と推定される長者原遺跡^(註10)の発掘調査成果。③前方後円墳の分布などである。

氏の想定されているルートは、(エ) 淀江平野の長者ヶ平古墳の西から会見郡の旧小波村と泉村境にあたる大地を横切り米子市尾高付近を通り、福万の集落を経て、日野川を渡る。さらに、米子市と岸本町境付近を通り、長者原遺跡付近に存在すると考えられる会見駅を経て、岸本町岩屋谷から会見町諸木を通り、『古事記』に大国主命の伝承が残る天万から寺内に至り、通称「清水川越し」といわれる小径を抜けて、西伯町原から鳥取藩の安痘祈願所ともなっていた鷲神社がある渡田峠（疱瘡峠）を越えて出雲国へ入るコースであり、従来考えられてきたものとは異なり新しい見解を提示している。（挿図5参照）

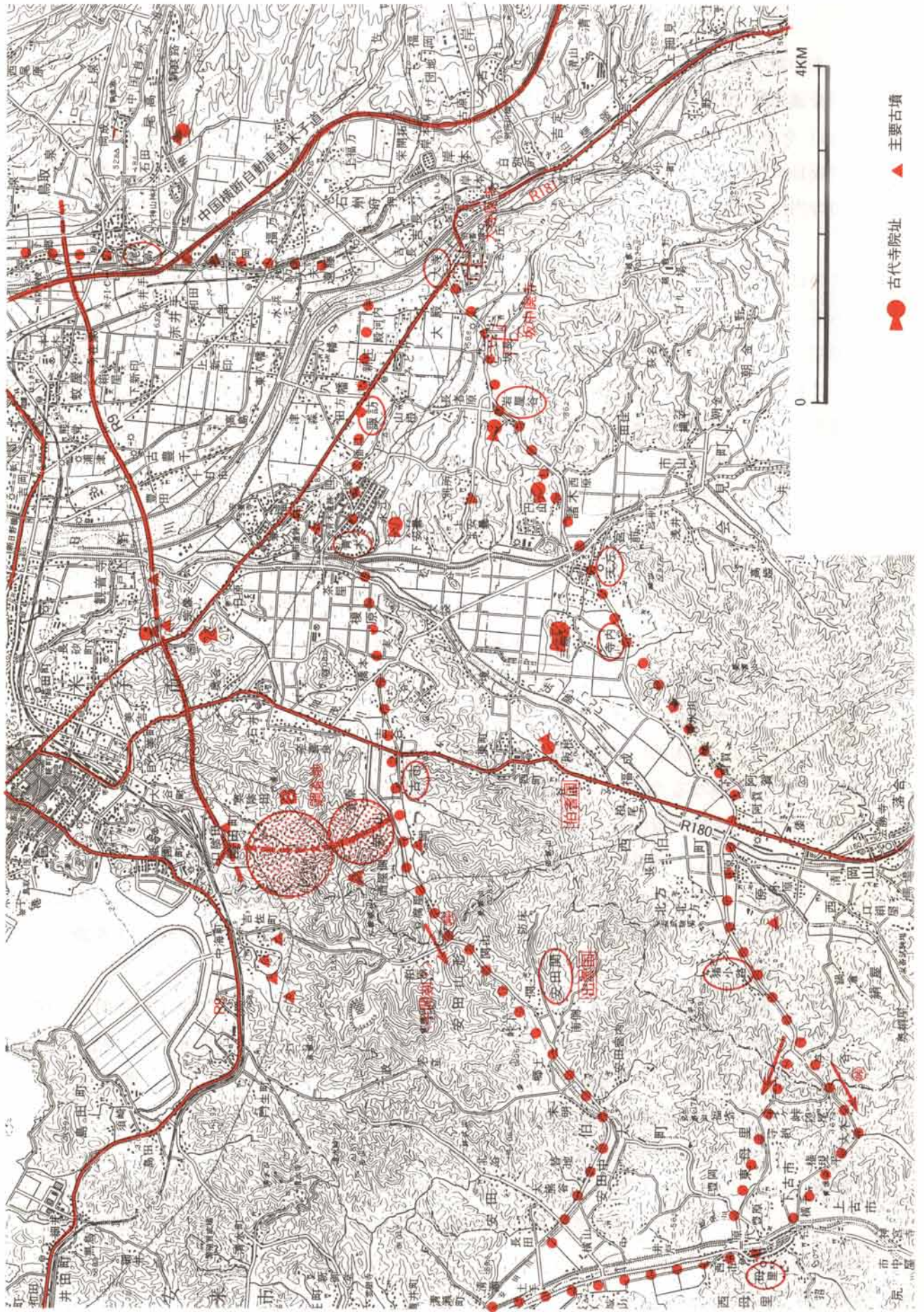


插图 5 古代山陰道推定图

従来の説と全く異なる点は、『出雲国風土記』の「手間割」の有力な比定地である伯太町安田関を通過する関山越えのルート（標高約70m）をとらずに、渡田峠越えのルート（標高約150m）をとることである。（エ）のルート上にあたる部分の小字地名を検討すると、現在の岸本町坂長には「馬ノ子橋上・馬ノ子橋下」の地名が、会見町天万にはカフマ（甲馬で馭馬か）、隣の寺内には乙馬（伝馬か）の地名があり、律令制下の駅・駅路の存在を想定させるものである。^(註11)

この日野氏の（エ）説を批判して、中林氏の（ウ）説を継承・発展させたのが、中村太一氏^(註12)である。中村氏は、中林氏の研究では不十分であった具体的なルートの設定を試み、特にこれまで空白であった法勝寺川の西側から「手間割」までの区間で駅路のルートを地図上に落とした。これは、（オ）米子市福万から日野川を渡り、新庄から諏訪を経て青木に至り、さらに法勝寺川を渡り、榎原・橋本を通り、古市から新山を経て「手間割」の比定地である伯太町安田関にぬける関山越えのルートである。（図5参照）

日野説については、主に、①駅路が郡家推定地の長者原遺跡付近を通過するという点と、②駅路が『古事記』の伝承が残り、前方後円墳の分布が密である会見町から西伯町にかけての平野をぬけ、西伯町原から渡田峠を越えて伯太町宮田・宮内に入る点の2点について、それぞれ、駅路が郡家に沿うか否かはケースバイケースであり、伯太町安田関付近に比定される「手間割」は駅路の通過地点として捨象できない要素である、と批判する。

さらに、①・②の問題点から、日野氏の想定ルートは大化前代の交通路であり、律令制下において伝路とされたものではないかと考えている。

中村氏の説は、基本的には中林説と同様に新山から関山越えのルートを想定しているが、中林説と決定的に異なる点は、（ウ）説が駅路が郡家付近を通過するという考えから米子市八幡・新庄から岸本町大殿・坂中付近の会見郡家推定地（この時点では長者原遺跡発掘調査は行われていない）に南進し、会見町天万を経て「手間割」へ至る米子平野の南側を迂回するルートをとるのに対して、中村氏は①でも述べたように、駅路は必ずしも郡家付近を通過するものではないという考えから、郡家推定地からやや離れた米子市新庄から青木にぬけるルートを設定していることである。

以上の諸説の相違点は、（A）『出雲国風土記』の「手間割」の比定地である伯太町安田関を通過する関山越えのルートを採用するか否か、（B）駅路は郡家付近を通過するものとして、会見郡家推定地である長者原遺跡付近を通過するルートを想定するか否かの2点に要約できる。

ここで、（C）古代駅路は直線的路線をとる計画道路である^(註13)という近年の研究で明らかになってきている古代駅路の特質を考慮して中林・日野・中村三氏の各説を分析すると、

中林説（ウ）は、（A）（B）の条件とも満たそうとすために米子平野の南側を迂回するルートになり（C）の条件は満たされず、また長者原遺跡の発掘調査以前の説のため郡家推定地を岸本町坂長付近に誤って設定しており、発表された当時は画期的であったが現在では少しくなりすぎた観がある。

日野説（エ）は、（B）（C）の条件を満たそうとすために（A）の条件は全く無視され、

考古学的な成果を重視しすぎるあまり『出雲国風土記』の研究成果が生かされていない。

中村説(オ)は、(A)(C)の条件を重視するために(B)の条件が軽視され、想定ルートについては一応論理的整合性が高いが周辺に重要遺跡の分布が少ないという難点が残る。等、諸説一長一短で、かなり問題点も多く決定的ではない。ただ、ルート上に遺跡の分布が少ないという点については、調査の不十分さから未発見遺跡が存在する可能性もあり再検討の余地はかなりある。

このように考えると、現在の時点では3つの説の中で中村説が最も妥当性が高いということが出来るだろう。中村説によれば、古代の駅路は新山付近を通過する関山越えのルートをとる。このことは、新山遺跡の性格を考える上で非常に重要な要素になると思われる。若干の推論が許されれば、新山遺跡の性格は古代の駅路が伯耆から出雲にぬける国境周辺の遺跡ということになるだろう。また、近代まで土地の人々が新山～陰田方面にぬけるルートや新山～島根県吉佐方面にぬけるルートとして利用していた峠越えの小径も存在しているので、これらの枝道が駅路から分岐する交通の結節点としての性格も推定される。

いずれにせよ、新山地区の考古学的な解明はまだ第一歩を踏み出したばかりであり、いたずらに推論を重ねることは慎まなければならない。地道な分布調査や発掘調査により環境を明らかにし、駅路の遺構の所在を考古学的に解明していく作業が今後の課題とされよう。

2. 中世の新山

中世の新山を代表する遺跡は、標高約280mの要害山に所在する新山城(別名:長台寺城)である。その山麓の伯太町安田および安田関については、「古代山陰道と新山」の項で概述したが、『出雲国風土記』の「手間割」の比定地は安田関付近であったといわれ、この付近を山陰道が通過していたと考えられる。鎌倉時代には、安田宮内を中心にすでに石清水八幡宮領安田荘が成立していて、この荘園は、15世紀半ば室町時代まで存続していたことが明らかになっている。安田宮内の南側の丘陵上には、平安期に勧請されたという伝承が残る八幡宮があり、この地域の荘園の開発が平安期までさかのぼる可能性を示している。

新山城はその築城の時期は特定できないが、戦国期末の永録6年(1563)～9年(1566)11月に至る、毛利氏の対尼子戦の終期で雲・伯耆国境方面での戦闘が激化した時期に史料上に現れる城である。周知のように、この戦いの結果、永録9年(1566)11月21日に尼子義久は富田城を開城、毛利氏に降伏して、これ以後、伯耆国は毛利氏の領国支配の中に組み込まれることになる。尼子方の城番については、『森脇覚書』などの記述が正しいとすれば、福山肥後守綱信が推定される。新山城の戦略上の機能としては、尼子対毛利の一連の攻防で、尼子方が富田城―新山城―天万山城の兵站線を死守しようとしていることから、西伯耆屈指の要害である天万山城を富田城から後方支援する中継地点としての役割が強いと考えられる。また、富田城―新山城―天万山城を結ぶ防衛ラインは、尾高城方面の勢力と法勝寺城方面の勢力を分断する目的があったと考えられる。この間の戦闘経過と城郭については、高橋正弘氏の研究に詳しく述べられているので、そちらに譲りたい。^(註1)

考古学的な調査としては、近年、安田要害山城跡調査団によって踏査と部分的な測量調査が行われている。^(註4)規模は戦国期の山城としてはかなり大がかりなもので、主郭から各方向にのびる尾根上に連続して多数の小郭が削平されているのが特徴的である。谷部水田面からの比高差が大きいこと、地形が急峻であること、立地が出・伯国境であることなどを考え合わせると、竈城などの実践的要素の強い軍事的拠点としての新山城の機能が推定できる。また鳥取県側では分布調査により、中世城郭が存在したという橋本要害山や、新山から榎原に抜ける谷の北側の丘陵の萱原地区付近と南側丘陵の古市～吉谷にかけての間に、それぞれ尾根上に山城の郭と推定される遺構が確認されている。これらの遺構は、中世において新山の谷筋が軍事的に重要なルートであったことを想定させるものであり、今後の精査が期待される。

新山城の城下町について、明治23年の地籍図から復元を試みたい。^(註2)

地籍図に見える新山地区の小字は、1番～83番までである。そのうち城下町に関係する小字は、9番「カイ原（垣原カ）」・10番「カイ原山」・27番「ルイノ出口」・31番「柿ノ内山（垣ノ内山カ）」・32番「柿ノ内ノニ」・40番「柿ノ木（垣ノ木カ）」・52番「掛ノ前（垣ノ前カ）」・57番「寺ノ前」・58番「廣屋山」・64番「神田」・65番「西神田」・66番「豆腐屋」・73番「屋敷」・75番「カハヤ原前」・76番「カハヤ原前北」・77番「野圓寺北山」・78番「野圓寺南山」・79番「西堀山」・81番「西堀」であり、これらの小字の他に大字として、「酒屋側」・「豆腐屋」などがある。^(註3)

城下町関連の字名は、前述の中村太一氏の研究の古代山陰道の関山越えルートの推定路線上に沿うかたちで分布しており、古代山陰道を継承した街道沿いにマチの形態が発展しつつあったことがうかがわれる。しかし、地籍図では整然とした短冊型地割や方形地割などは認められないので、新山城主などの政治権力によって意図的に形成されたとは考えにくく、街道沿いに自然発生的に成立したものと考えるのが自然であろう。

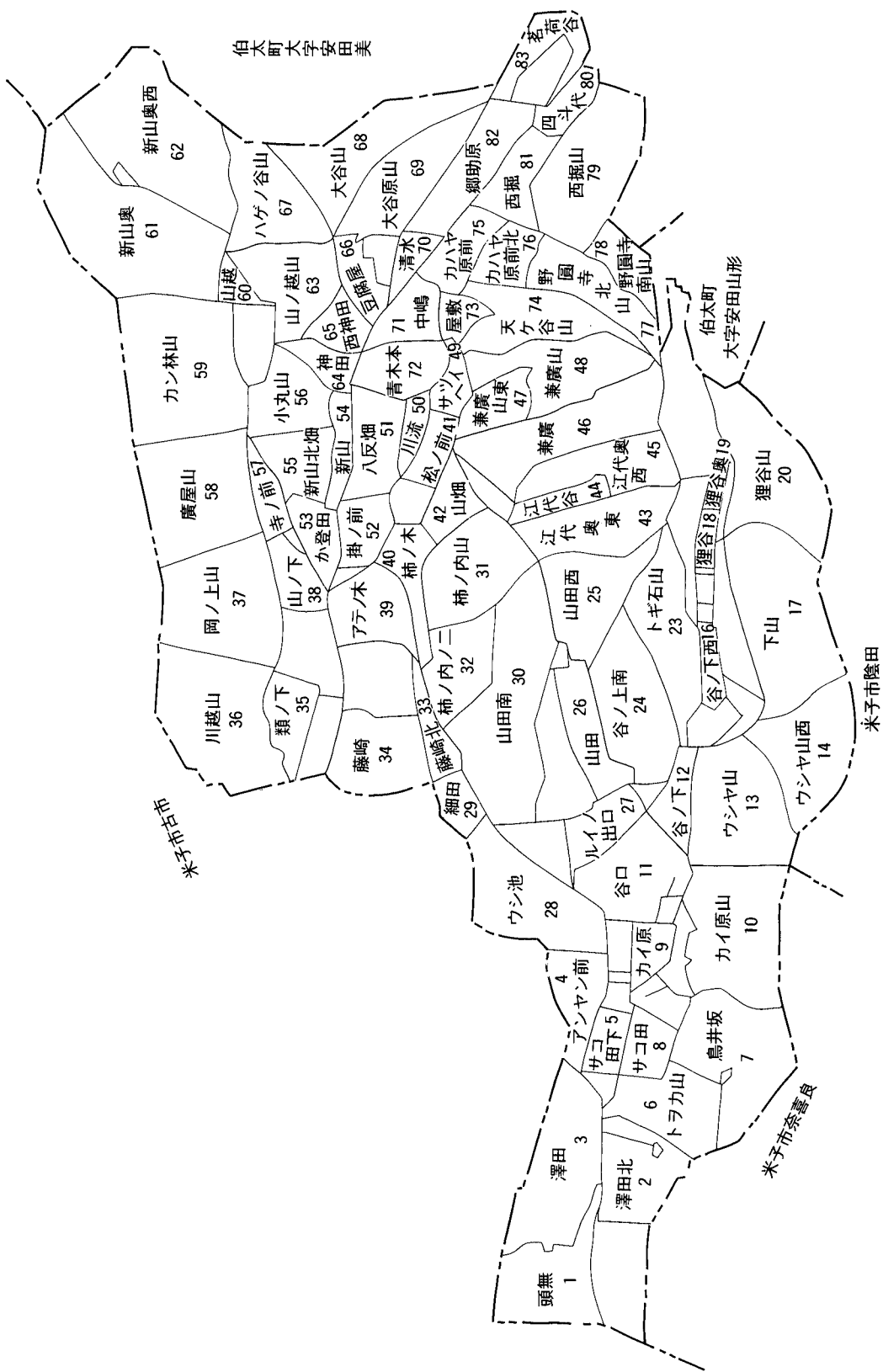
また、マチの平面的な広がりには認められず、街道に平行して両側に細長いマチの形態で、長さも推定約500m程度という比較的小模なものである。さらに新山村の西側隣村には、古市村があるが、ここは新山城下町に隣接して存在した市町の跡であると推定される。

以上の点から、『新山城下町』は戦国期の在地小領主の城郭の山下付近を通過する街道に沿って自然発生的に成立した小規模なマチであり、領主による積極的な政治的経営が行われないうまま、経済的機能については近隣の市町に依存した状態で、城下町自体は政治的・軍事的機能（新山城は国境という立地から特に軍事的機能）が強い段階のマチであるといえるだろう。これは、織豊期以降の近世城下町が、領主の政治的意図の下で、整然と区画整理された平面プランを呈し、積極的に周辺市町のもつ経済的機能を吸収・包含して成立しているという歴史的な特徴とは対照的で、極めて中世的な特徴を示すものと考えられる。

3. 近世の新山

近世の新山について『伯耆志』と明治23年の地籍図を中心に見てみたい。^(註1)^(註2)

近世の新山村は、鳥取藩領で伯耆国会見郡新山村として存在する。



挿図6 新山地区小字名

立地は、雲・伯国境に位置し、隣村へは、東の奈喜良村10町、北の陰田村へ18町、南の出雲国境へは12町・西の出雲国境へは10町で、享保4年(1919)には藩の抜荷改所に指示されている。村高は、拝領高524石余、「元禄郷村帳」567石余、「天保郷帳」605石余(うち新田高80石余)、「元治郷村帳」612石余、「旧高旧領」620石余で、時代が下がるにつれて^(註3) 増の傾向がある。地誌は、林が53町、戸数50戸、人口655人で、村内は9つの集落に分かれ、その集落名と戸数は、萱原15戸・加登7戸・金広4戸・清水4戸・豆腐屋4戸・寺前2戸・加戸5戸・岡15戸・紙籠越2戸である。

寺院は、「寺ノ前」・「野圓寺山」などの小字が存在しているため1～2寺あったようだが、所在ははっきりしていない。新山地区に米子の桂住寺の檀家が多いのは、野圓寺が名前を変えて桂住寺に移ったためだという伝承もあるが、根拠は不明である。

神社としては、産土神の比波山白山権現があり要害山の東に鎮座する。白山信仰は、もともとの起源は中国の太白山信仰にあり、日本では越前国の白山を中心にこの女神を白山神として信仰した。白山神社の祭神については、一説に、イザナギノミコト・イザナミノミコトを合祭するという伝承が残るが根拠は明らかでない。その他村内には小祠7、辻堂7が存在していた。

註

- 1-1 鳥取県『鳥取県史』1(原始・古代編)1972年
- 1-2 中林保「駅家を中心とした古代山陰道の歴史地理学的考察一特に、但馬、因幡、伯耆の三国について」『人文地理』vol 23の1、1971年
同 「伯耆国」『古代日本の交通路』Ⅲ 大明堂 1978年
- 1-3 吉田東伍『大日本地名辞書』 富山房 1901年
井上通泰『上代歴史地理新考』 北海道・山陰道・山陽道・北陸道 三省堂 1941年
- 1-4 鳥取県『鳥取県郷土史』 1932年
- 1-5 前掲註1
- 1-6 加藤義成『修訂出雲国風土記参究』 今井書店 1957年
- 1-7 前掲註6
- 1-8 日野尚志「伯耆国の駅路について」『佐賀大学教育学部研究論文集』vol 38-2-I 1991年
- 1-9 岩永実「鳥取県における条里地域の研究(第Ⅱ報)」『鳥取県地誌考』 岩永実先生記念論文集刊行会 1973年
- 1-10 岸本町教育委員会『長者原遺跡発掘調査報告書』1982年
- 1-11 岩永実「鳥取県の地名研究(Ⅱ)」『鳥取県地誌考』 岩永実先生記念論文集刊行会 1973年
- 1-12 中村太一「『出雲国風土記』に関する一考察一意宇郡を中心として」『出雲古代史研究』vol 2、1919年
- 1-13 木下良『日本古代律令期に敷設された直線的計画道の復元的研究』 国学院大学 1990年
- 2-1 高橋正弘『因伯の戦国城郭一通史編一』1986年
- 2-2 米子市役所所蔵『新山旧々図』明治23年11月12日制作の地籍図
- 2-3 米子市役所『米子境港都市計画図』1/25000による
- 2-4 安田要害山城跡調査団「伯太町・安田要害山城跡調査報告」『松江考古』vol 8 松江考古学談話会 1992年
- 3-1 景山肅『伯耆志』「因伯叢書」所収、名著出版1972年
- 3-2 米子市役所所蔵『新山旧々図』明治23年11月12日制作の地籍図
- 3-3 「享保10年拝領高」「元禄14年郷帳」「元治元年郷帳」「天保郷帳」は『鳥取藩史』vol 5 所収の史料による

第Ⅱ章 調査の経過

1. 調査に至る経過

調査は、一般国道180号道路改良工事（米子バイパス）に伴うものである。

一般国道180号は中国山地を南北に横断し、鳥取県米子市と岡山市を結ぶ県西部の生活文化を支える幹線道路である。バイパスは、米子市陰田町の国道9号米子バイパス・陰田ランプを起点として、トンネルで山越えし、同市新山を経て南進し西伯町へと結ぶ四車線道路である。交通渋滞の緩和と、より活発な交流促進を期して計画され、1981年、地元「国道180号バイパス建設促進期成同盟会」が発足し、1986年に県の事業として建設費が予算化された。当面、新山地内の県道（主要地方道母里・伯太・新山線）までを第1期工事として事業実施することとなった。延長約2km。完成は1997（平成9）年度の予定である。

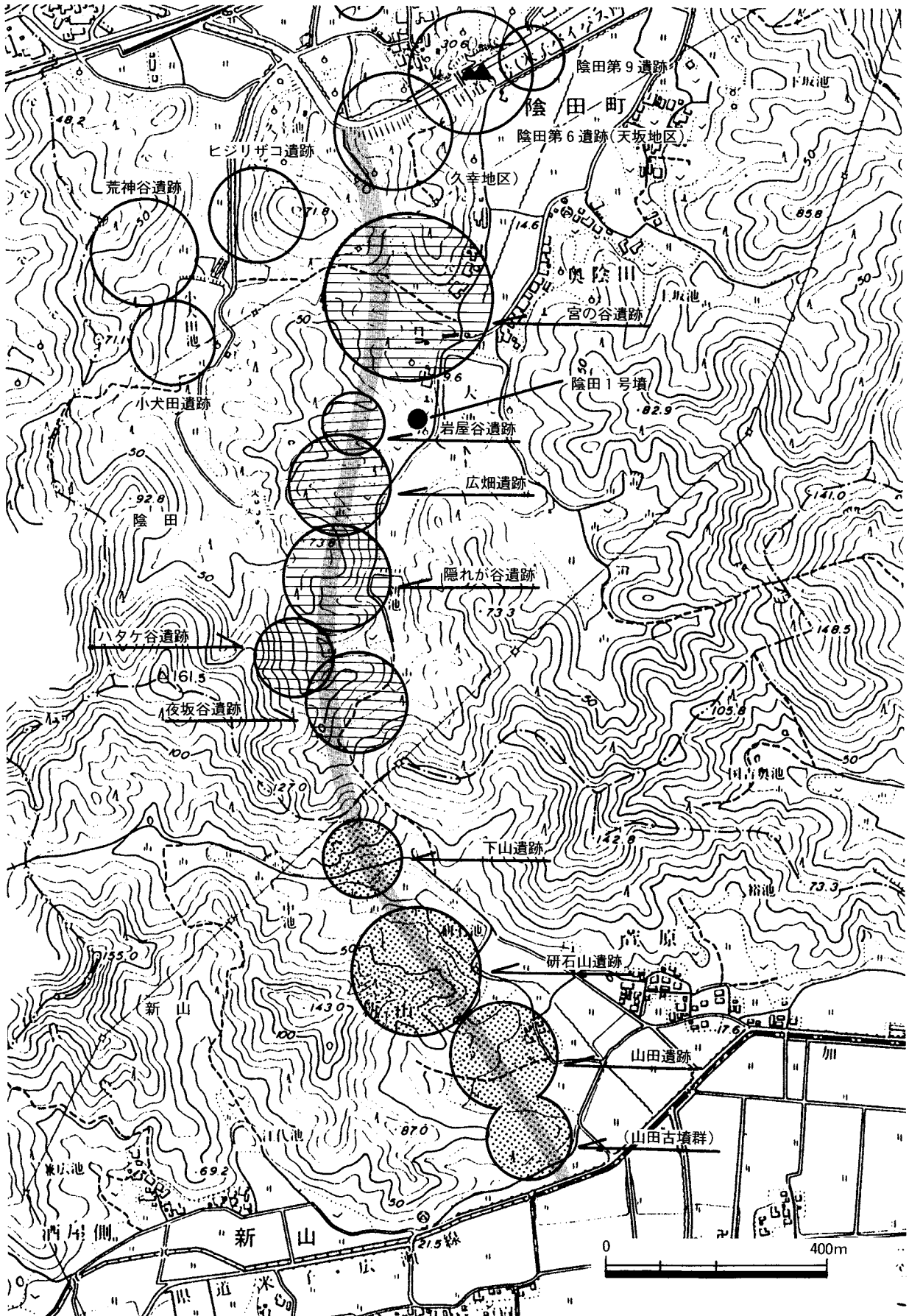
1984（昭和59）年12月14日、米子土木事務所から米子市教育委員会に対して、ルートを選定に先立つ埋蔵文化財の有無と取扱いについての照会協議があった。その後、鳥取県道路課・米子土木事務所・鳥取県文化課・米子市教育委員会による協議調整を行い、現地踏査、試掘調査等を経て、米子市教育委員会が発掘調査を行うこととなった。なお、工事が県事業であることや調査規模が大きいことなどに鑑み、県文化課の協力支援を受け、財団法人鳥取県教育文化財団から調査員の派遣協力を得た。

当初計画では、第1年次に新山地内、第2年次に陰田地内、第3年次に陰田の残りの調査と調査全体の整理報告として終了する予定であったが、その後工事内容の変更等により今日まで継続している。この間、遺跡そのものも分布範囲・内容・密度など、当初の見通しをはるかに越える内容となり、調査計画の見直しも行った。

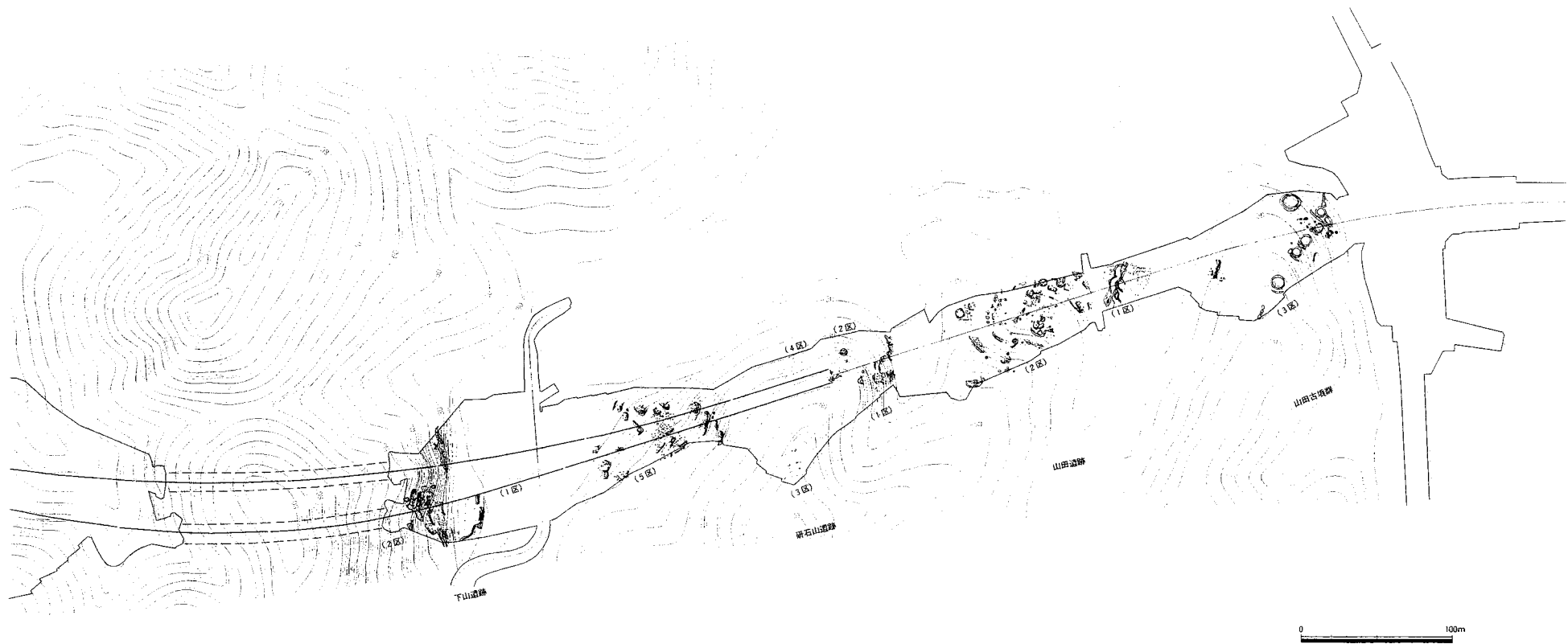
1994（平成6）年3月現在、調査は継続中である。

調査報告書は二分冊とすることとした。第1冊は、1992年度までに調査した新山地内分を中心に、第2冊は現地調査終了後に、陰田地内分を中心にその後の発掘・整理作業の成果を含め、全体的に取りまとめ刊行する予定である。

- 1984. 12. 14 ルート選定に先立つ埋蔵文化財の有無・取扱いについての照会協議（米子土木事務所→米子市教育委員会）
- 1985. 1. 29 現地踏査（米子土木事務所・鳥取県文化課・米子市教育委員会）
- 1988. 1. 19 ルート決定に基づく再協議（関係四者）
調査手法、調査主体等の検討
- 1988. 4～9 新山地内試掘調査（米子市教育委員会）
新山山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡で遺構確認
（『一般国道180号道路改良工事に伴う試掘調査報告書』 米子市教育委員会 1989）
- 1989. 4～ 委託契約。発掘調査



挿図7 工事ルートと調査遺跡



挿図 8 調査遺跡範囲図 (壹原地区)

2. 調査の経過

1989年（平成元年）4月から地形測量・杭打ち等の準備作業に入り、同年6月26日から本格的に開始した。以後、範囲再確認・試掘調査を行いつつ年度毎に継続し今日に至っている。

調査にあたり『国道180号バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団』（団長・米子市教育長）を組織して実施したが、その後、米子市の文化財体制の見直しに伴い、1992年4月より調査主体が教育委員会から財団法人米子市教育文化事業団（理事長 森田隆朝）に移行した。

第1次調査 1989（平成元）年4月1日から1990年3月31日まで。

新山地内の山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡を調査した。研石山遺跡の発掘調査は1区～4区のみで、丘陵北側の5区は伐開と範囲詳細確認（トレンチ調査）を行った。

対象面積は約24,000m²、調査費は68,192,180円である。

第2次調査 1990（平成2）年4月1日から1991年3月31日まで。

陰田地内の夜坂谷遺跡・隠れが谷遺跡（1区・2区）・宮の谷遺跡・岩屋谷遺跡・広畑遺跡、新山地内の研石山遺跡（5区）・下山遺跡を対象とした。発掘調査は夜坂谷遺跡・隠れが谷遺跡のみであり、研石山遺跡は微地形測量、以外の宮の谷遺跡・岩屋谷遺跡・広畑遺跡・下山遺跡は範囲詳細確認である。岩屋谷遺跡には対象区域に明確な遺構は確認できなかった。

対象面積は約16,000m²、調査費は57,000,000円である。

調査概報『新山 山田古墳群・山田遺跡・研石山遺跡』を刊行した。

第3次調査 1991（平成3）年4月1日から1992年3月31日まで。

新山の研石山遺跡5区と下山遺跡の林道下部分、陰田の宮の谷遺跡（1区）を調査した。対象面積は約16,000m²、調査費は70,000,000円である。

調査概報『陰田 夜坂谷遺跡・隠れが谷遺跡』を刊行した。

第4次調査 1992（平成4）年4月1日から1993年3月31日まで。

新山の下山遺跡の林道上部分と陰田の夜坂谷遺跡・隠れが谷遺跡（3区）・ハタケ谷遺跡・広畑遺跡（1区）・宮の谷遺跡（2区）を対象とした。対象面積は17,100m²、調査費は70,000,000円である。

調査概報『新山遺跡群・奥陰田遺跡群』を刊行した。

第5次調査 1993（平成5）年4月1日から1994年3月31日まで。

陰田の夜坂谷遺跡・ハタケ谷遺跡を対象とした。対象面積は4,500m²、調査費は53,000,000円である。当初は広畑遺跡（2区）も予定していたが工事との調整により変更した。調査概報『奥陰田遺跡群』と、調査報告書『萱原・奥陰田Ⅰ』を刊行した。

第三章 調査の内容

1. 調査の概要

概要 山田遺跡（山田古墳群）・研石山遺跡・下山遺跡の3遺跡約32,000m²を対象とし、この内約21,900m²を発掘調査した。谷口から谷奥に向かって、山田遺跡（山田古墳群）、研石山遺跡、下山遺跡と続き、前二者は萱原集落を見下ろす東向き及び北向きの丘陵に位置し、下山遺跡はこれらと谷を隔てた対面の南向き斜面に立地する。遺跡立地標高は約25～70mである。

調査によって、縄文時代早期末から中世にわたる250以上の遺構とコンテナ700箱（取上番号約9,000）の遺物を検出した。

調査区の設定 調査に当たっては、各遺跡毎にそれぞれの調査区画を設定した。

山田遺跡は谷間の水田部を1区、北側丘陵を南から40m毎に2～4区、南側丘陵を5区として調査した。今回報告をまとめるにあたり遺跡の立地、性格等を考慮し、2～4区を「2-1～3区」、5区を「3区」と改称した。「3区」は山田古墳群と重複する。

山田遺跡1区は工事ポイントNa（89を基点とし、磁北を求めて基準ラインとし、10×10m単位のグリッドを10箇所設定した。

2区は工事ポイントNa85とNa90を結ぶラインを基準線とし、Na85から双方・左右に10m毎に杭を打った。北端の杭をA-0、順次南にB-0・C-0…J-0とし、西側を「-（マイナス）区」、東側を「+（プラス）区」とし、「A-1区」「A+1区」…と呼称した。

3区は山田古墳群での杭設定に準じたが、遺物の散布や遺構分布を考慮し便宜上、山田4号墳と5号墳の間で上方、下方に分け、それぞれ「A区」「B区」とし、また、北側斜面に見られた高低二箇所の平坦面を「第1テラス」「第2テラス」と呼称した。

研石山遺跡は標高70mの尾根を頂点として南・東・北の山裾斜面・低位丘陵に分布する。南側山裾斜面を1区、東向きの中腹尾根部を2区、頂部を3区、2区下の斜面凹部を4区、北側の山裾斜面・低位丘陵部を5区とした。

1～4区は中腹の工事ポイントNa79を起点に地形に即して区画設定をした。

5区は工事ポイントNa71とNa72を結ぶラインを基準線とし、Na72から双方・左右に10m毎に杭を打った。南端の杭を1-0、順次南に2-0・3-0～11-0とし、それぞれ西側を「1W1区」「1W2区」…、東側を「1E1区」「1E2区」…と呼称した。

下山遺跡は工事ポイントNa66とNa72を結ぶラインを基準線とし、Na66から双方・左右に10m毎に杭を打った。南端の杭をA-0、順次北にB-0・C-0～H-0とし、それぞれ西側を「AW1区」「AW2区」…、東側を「AE1区」「AE2区」…と呼称した。調査の工程上、林道下の斜面と水田部を1区、上を2区とした。

遺物の取上 遺物の取上は、山田古墳群は古墳毎、山田遺跡は旧1～5区の、研石山遺跡も1区～5区の小区域毎、下山遺跡は全域を対象に番号を付した。遺物は水洗・補強後、それぞれ遺跡略号・遺構（地区）名・取上番号・取上年月日を記し、分類整理した。

挿表1 調査遺跡一覧表

遺跡名	調査面積 〈対象〉 《発掘》m ²	古墳	横穴	竪穴住居	掘立柱建物	土坑	溝	段	伏鉢	その他	合計	遺物	備考
山田古墳群 (山田遺跡3区)	< 6,000> 《 3,500》	9	1	1	1*	12		2	2	散布地 (縄文・弥生・石器)	28+	縄文(晩)・弥生(前)・土師器 須恵器・石鏃・石斧・銅先・鉄斧 焼締陶器・土師質土器・鉄刀・鉄 人骨・古銭・砥石 等	*鍛冶工房か
山田遺跡1区	< 1,000> 《 1,000》				(ピット群)	6				流路 土器羅1	7+	縄文(晩)・弥生(前・中・後) 土師器・須恵器・焼締陶器・勾玉 鏡片・甗・甗・輸入陶磁器・石鏃 石斧・石製円盤・石包丁・砥石 石製紡錘車・ミニチュア土器 土師質土器・土製支脚 等	
山田遺跡2区	< 5,000> 《 5,000》	1		24 (重複含む)		40	12	3		土器棺1	80	弥生(中・後)土師器・須恵器 近世陶磁器・石鏃・石斧・鉄製品 鉄滓・分銅形土製品・赤色土器等	
研石山遺跡	<12,000>												
研石山遺跡1・4区	< 2,100>			2	6	10	6	4			28	弥生(後)・土師器・須恵器 鉄製品・鉄滓・鉄鏃・土製支脚 石鏃・甗・甗 等	
研石山遺跡2区	< 400>			1		5		2			8	弥生(後)・土師器・須恵器 石鏃 等	
研石山遺跡3区	< 500>	2*									2	鉄剣・刀子・ヤリガンナ	*石積割竹木棺1 木棺直葬 小石棺 石蓋土坑 3
研石山遺跡5区	< 5,000> 《 5,000》	1*		22 (重複含む)	11	17	13	3		谷・流路3 テラス ピット群	68+	縄文(早)・弥生(前・後) 土師器・須恵器・輸入陶磁・甗 甗・土師質土器・鉄製品・鉄滓 土製支脚・石製紡錘車・子持勾玉 石鏃・石製品・有効円盤・古銭 木器 等	*小石棺
下山遺跡	< 5,000> 《 4,400》				10	10	7			流路	27	縄文(晩)・弥生(後)・土師器 須恵器・鉄製品・鉄滓・土製支脚 赤色土器・甗・甗・古銭・石鏃等	鍛冶集落 (奈良後半～平安初)
合計	<32,000m ² > 《21,900m ² 》	13	1	50	30	100	38	14	2	5+	254+		8,700点

挿表2 調査遺構一覧表
(竪穴住居跡)

遺跡・遺構名	平面形	外周規模 -最大壁高 m	床面規模 m	床面積 ㎡	床面標高 m	特種 ビット	備考
山田2区 SI01	円形	4.6 × 4.6 -0.65	4.2 × 3.9	17	30.75	中央	青木Ⅲ
SI02	隅丸方形	5.65 × 5.7 -0.35	5.5 × 5.5	29	38.45	中央	青木Ⅴ・Ⅵ～Ⅶ
SI03	隅丸(多角)	5.0 × -0.35		23	37.7		青木Ⅲ
SI04	(隅丸?)	不明			41.0		青木Ⅶ
SI05	方形	4.5 × -0.45	4.3 × (4.3)	(18)	34.3	壁寄	TK23・青木Ⅸ
SI06	(隅丸?)	不明			41.0		青木Ⅶ～Ⅷ
SI07	方形	5.8 × -0.6	5.8 × 5.8	33.6	35.2		青木Ⅶ(Ⅷ)
SI08		不明 -0.3			35.2		SI07より古
SI09	方形	4.5 × -0.5	4.45 × (4.45)	(20)	35.6		青木Ⅶ
SI10	方形	3.8 × -0.3	(3.6) × (3.6)	(13)	34.25		(古墳・中～後?)
SI11		4.0 × -0.4	(4.2) × (4.2)	(18)	34.8		(")
SI12	方形	6.5 × -0.55	5.6 × (5.6)	(31)	39.9	壁寄・溝	青木Ⅷ
SI13a	円形	6.2 × -0.6	(5.8) × (5.8)	(28)	29.4	中央	青木Ⅲ
SI13b	楕円形	(5.4) × 4.6 -0	(5.2) × 4.6	(20)	29.4	中央	青木Ⅱ
SI14	方形	(5.6) × (5.6) -0.4	(5.6) × (5.6)	(28)	29.5		青木Ⅸ
SI15	長方形	5.9 × -0.25	5.8 × (5)	(29)	30.4	壁寄・溝	TK23・青木Ⅹ
SI16	長方形	6.2 × -0.25	5.7 × (5)	(28.5)	30.7		TK47・青木Ⅹ～Ⅹ
SI17	円形	6.0 × 5.8 -0.3	4.6 × 4.6	17	29.70	中央	青木Ⅱ～Ⅲ
SI18	方形	(6) × -0.45	(4.3) × (4.3)	18.5	29.55		TK23・青木Ⅸ
SI19	方形	5 × -0.25	4.9 (4.5)	22	27.95	壁寄・溝	青木(Ⅶ～)Ⅷ
SI20a	方形	(6) × -0.8	(5) × (5)	(25)	27.45	壁寄	TK23・青木Ⅹ～Ⅹ
SI20b		× -0			27.3	壁寄	青木Ⅸ
SI21	(円形)		(径4.6)	(17)	37.7		(弥生・後?)
山田3区 SI01	長方形	5.0 × 4.0 -1.0	4.5 × 3.2	14.7	37		青木Ⅴ・Ⅵ
研石山1区 SI01	方形	× -0.4			36.25		(古墳・中?)
SI02	方形	× -0.35			35.85		(")
研石山2区 SI01	楕円形	4.3 × 3.6 -0.7	3.4 × 3.2		46		青木Ⅲ
研石山5区 SI01	方形	7.3 × -0.45	6.7 ×	(45)	33.55	壁寄	03に切られる 青木Ⅸ
SI02					33.55		01に重複
SI03	胴張方形	5.40 × -0.65	4.75 ×	(22.6)	33.35		01を切る 青木Ⅹ
SI04a	方形	5.35 × -0.35	4.95 ×	(24.5)	33.65	壁寄	04a→04b 古墳・中
SI04b	(方形)	5.0 × -0.35	4.6 ×	(21)	33.65	壁寄	
SI05					35.20		掘立SB06・07 TK208
SI06					32.05		段状遺構
SI07	方形	5.65 × -0.25	5.6 × (5.6)	(27)	34.15	壁寄	11を切る TK47
SI08	方形	3.5 × 3.2 -0.55	3.0 × 2.9	(9)	34.15	中央	古墳・前
SI09	(方形)	-0.15			36.10		掘立柱建物か 青木Ⅹ
SI10	(方形)	不明 -0.25			39.6		(青木Ⅶ)
SI11	方形	(6.0) × -0.2	(5.7) × (5.7)	(31)	34.35		07に切られる 青木Ⅶ
SI12	長方形	5.12 × -0.3	4.9 × (3.9)	(24.5)	35.65	壁寄	13を切る 青木Ⅹ
SI13a	(長)方形	6.0 × -0.4	5.3 × (4.5)	(24)	36.00	壁寄	13a→13b 青木Ⅸ
SI13b	方形	6.8 × -0.4	5.6 × (5)	(28)	36.00	壁寄	
SI14		6.0 × -0.5	(5.5 × 5.5)		36.90		住居跡不確定 (青木Ⅸ)
SI15	不明	× -0.4			36.75		住居跡不確定子持勾玉
SI16a	方形	4.65 × -0.7	4.20 × (4.2)	(17.6)	33.86		16b→16a青木Ⅶ(～Ⅷ?)
SI16b	方形	3.75 × (3.75) -0.1	3.75 × (3.75)	(14)	33.7		青木Ⅶ
SI17	(方形)	-0.05			33.3		(青木Ⅹ)
SI18	方形	(3.7) × -0.1	(3.6) × (3.6)	(12)	33.2		18→19 (青木Ⅶ～Ⅷ)
SI19	方形	3.70 × -0.2	3.7 × (3.7)	(14)	33.0		19→17 (青木Ⅸ)

挿表 2 - 2

(掘立柱建物跡)

遺跡・遺構名	形態 梁×桁(間)	規模 桁行×梁間 m	床面積 ㎡	床面標高 m	主軸方位	備考
山 田2区 SB01	1×—	1.9×—	—	41.0	N-50°-E	焼土坑 SK06を持つ 奈?
SB02	1×3	(1.9×5.7)	10.8	41.0	N-35°-E	奈?
SB02	1×3	(1.8×4.7)	8.5	41.0	N-40°-E	奈?
研石山1区 SB01	2×2	3.0×4.7	14.1	33.9	N-50°-E	SD10, SK02(焼土坑) 7C前~中
SB02	(2×2)	—×4.45	—	35.05	N-52°-E	SD08 7C前~中
SB03	2×3	3.4×5.3~5.6	18.5	37.85	N-81°-E	SD04, SD05, 上下二層 7C前~中
SB04	(2×3)	(3.9×5.4)	—	36.75	N-47°30'-E	SD05と重複 7C前~中
SB05	2×3	3.6×6.0	21.6	36.75	N-55°-E	SD06, SB04→05 7C前~中
SB06	—	—	—	36.95	N-38°-W	SD03 奈~平
研石山5区 SB01	(1)×2	—×3.9	—	34	N-39°-E	SB09と重複 古・中~後
SB02	2×2	2.4~2.6×2.7	7.16	35.15	N-69°-W	総柱・庇(2.5×1.8m) 古・後後
SB03	2×3	2.75×4.25	11.6	36.65	N-50°-W	SD09 古・後後
SB04	2×2	3.4×5.0	16.5	34.9	N-35°-W	古・後後
SB05	2×3	3.3×4.65	14.3	38.2	N-85°-W	SD10, 蓄坏・紡錘車等 古・後後
SB06	(2)×4	—×5.5	—	35.2	N-S	(当初S I05),小ピット列2列 古・中~後の
SB07	(2)×4	—×5.5	—	—	—	SB07→06, 大形竈, 竈等
SB08	—×3	—×3.5	—	39.5	N-88°-W	第2テラス西 古・後後
SB09	—×3	—×3.9	—	34	N-33°-E	SB01と重複, SB09→01 古・後?
SB10	(2×3)	—	—	44.6	N-81°-E	第1テラス西, 炭多し, 重複あり 古・後後, 奈
SB11	—×(3)	—×(4.05)	—	36.3	N-72°-W	古・後?
下 山 SB01	1×4	(3.7)×5.4	(20)	39.6	N-17°-E	奈・後
SB02	1×2	3.8×6.3	23.9	—	—	奈・後
SB03	2×3	3.8×6.5	24.7	—	—	奈・後

(下山遺跡SB04以下割愛)

挿表 2 - 3

(古墳・横穴)

古 墳 名	墳 形	規 模 (墳丘径-一周溝幅-高さ) (m)	埋葬施設	周溝底標高 (m)	備 考
山 田1号墳(新山2号墳)	円	11-3-1.4			調査範囲外・未調査
山 田2号墳(新山3号墳)	円	9.2-3-0.8~1.25	木棺直葬	50.1	周溝内より須恵器竈・甕(TK208) 土師器甕・高坏
山 田3号墳(新山4号墳)	円	7-2-0.8		43.2	
山 田4号墳(新山5号墳)	円	8.5-2.6-1	周溝内土坑	41.4	高坏・壺・円筒埴輪 弥生・古墳前期住居に重複
山 田5号墳(新山6号墳)	円	6-1.8-0.75		40.15	
山 田6号墳(新山7号墳)	円	7-3.4-1.1		37.95	1号横穴後背墳丘に再利用?
山 田7号墳(新山8号墳)	円	10.5-2.2-1.2	木棺直葬	34.8	珠文鏡(棺内) 土師器埴輪・壺(周溝内)
山 田8号墳(新山9号墳)	円	8-2.3-0.65	木棺直葬	32.65	方墳か?、円筒埴輪・須恵器甕
山 田9号墳(新山14号墳)	円	6-			SI01(古墳前期)に重複
山 田10号墳(新山13号墳)	円	6-2.6-0.6		37.8	
谷の上1号墳(新山26号墳)		推定10m程度			円筒埴輪・須恵器壺・蓋坏、 土師器
研石山1号墳(新山27号墳)	円 (方?)	12-13-0.4~1.5	石積割竹形木棺1	70.45	鉄剣1、鉄鏃・ヤリガンナ
研石山2号墳(新山28号墳)	方	一辺7~8-0.2	石蓋土坑2		
研石山3号墳(新山29号墳)	円	推定6m	小石棺	42.7	須恵器蓋坏2、平瓶1 蓋坏枕転用
横 穴 名	形 態	全 長	玄室奥行×幅-高さ	備 考	
萱原1号横穴墓	断面三角形妻入	8.5	2.2×2.4~2.8-(推定)2	人骨、石棺、須恵器蓋坏・高坏・提瓶・大甕 土師器甕、鉄刀・鉄鏃・刀子・鉄斧・不明鉄器	

2. 山田古墳群

位置 平野に向って東に突き出す標高約50mの丘陵上に存在する。ドウド山々系の南端に当たり、加茂川や平野を挟み南側の母塚山山系と対峙する。比高差10m～40m。尾根上からは成実なるみや五千石ごせんごく地区の平野や丘陵、更には遙か大山を一望できる景勝の地である。

古墳群 標高50mの最高位に位置する1号墳から、標高20mの丘陵先端部の8号墳まで、10基を確認し、今回は2号墳から10号墳までの9基を対象とした。また、東側の突端斜面では横穴墓1基を確認し調査した。古墳はいずれも6～10m前後の小円墳であり、尾根の上側を掘削して弧状の周溝とし、墳丘は地山整形と盛土からなる。1号墳と2号墳は離れて単独で存在するが、他の古墳は、位置的な関係から3-4号、5(-9号)、6-10号、7-8号という2基単位のまとまりを指摘できる。最高位の1号墳を盟主墳として古墳時代中期から後期初頭にかけて形成された在地的小豪族の古墳群と思われる。

埋葬施設 盛土の流出が著しく施設の確認は難しかったが、地山掘削をするものと、それには至らない二つの埋葬・築造方法がある。埋葬施設は2号・4号・7号・8号墳で確認した。2号・7号・8号墳は軟岩質の地山を掘込んだ木棺直葬であり、他の古墳も中心主体は木棺直葬であったと思われる。4号墳は周溝内の二次埋葬施設である。尾根東側先端部の6号・10号墳は位置的に横穴の後背墳丘かあるいはそれへの再利用と考えられる。

横穴墓 萱原1号横穴墓が東側突端斜面に築かれる。石棺を有し、人骨と鉄刀・鉄鏃・須恵器などが出土した。古墳時代後期後半期であり、円墳群との間に時間的断絶がある。

遺物 遺物は少ない。2号墳で須恵器甕1・竈1、4号墳で土師器壺1・高坏9+・埴輪小片、7号墳で珠文鏡1・土師器壺1・坏(埴)10、8号墳で須恵器と埴輪が出土したのみである。4号墳と7号墳には土師器高坏と坏(埴)という相関性が見られた。

山田2号墳(新山3号墳)(挿図10、図版7・8) 調査古墳中最高位に位置する。尾根上部を弧状に掘削した周溝で区画し、地山掘削と盛土により築く。径9.2mの円墳で、現存高は上方0.8m、下方1.25mを測る。地山加工はほぼ全周に及び、下方でも幅約1.5mの平坦地形を確認した。周溝は断面U字状を呈し幅3m-深さ0.6m。周溝底標高50.1m。埋葬施設は墳丘中央にあり地山を二段に掘削する。上辺長さ2.44×幅0.9m-深さ0.95m、中段長さ2.2×幅0.58m-深さ0.35m。中央に木棺を埋納したものである。頭位方向は北北東である。棺内に遺物はなかった。北西側周溝底で須恵器甕1・竈1・土師器甕片を検出した。

須恵器はTK208に並行し、古墳時代中期後葉期に比定できる。

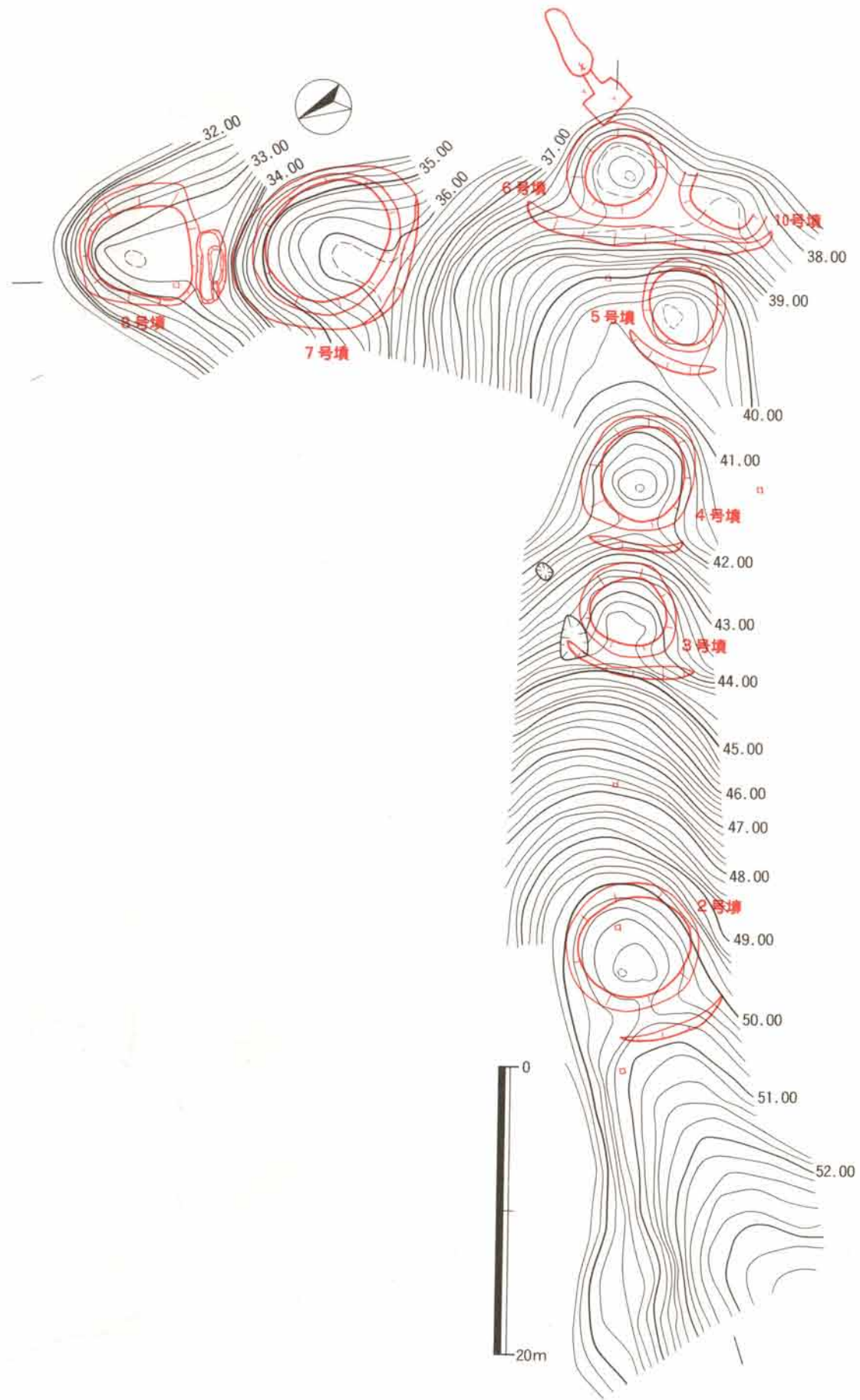
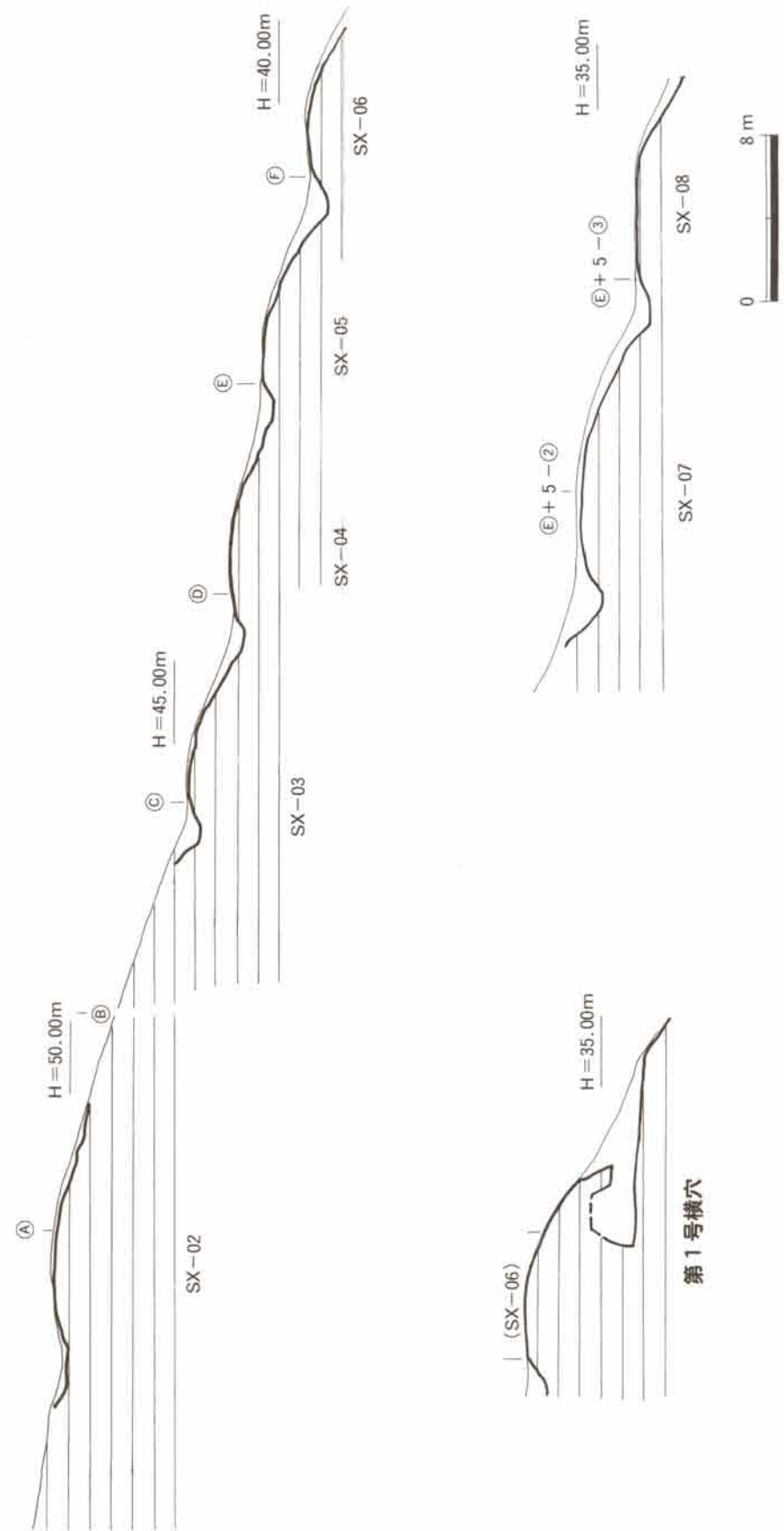
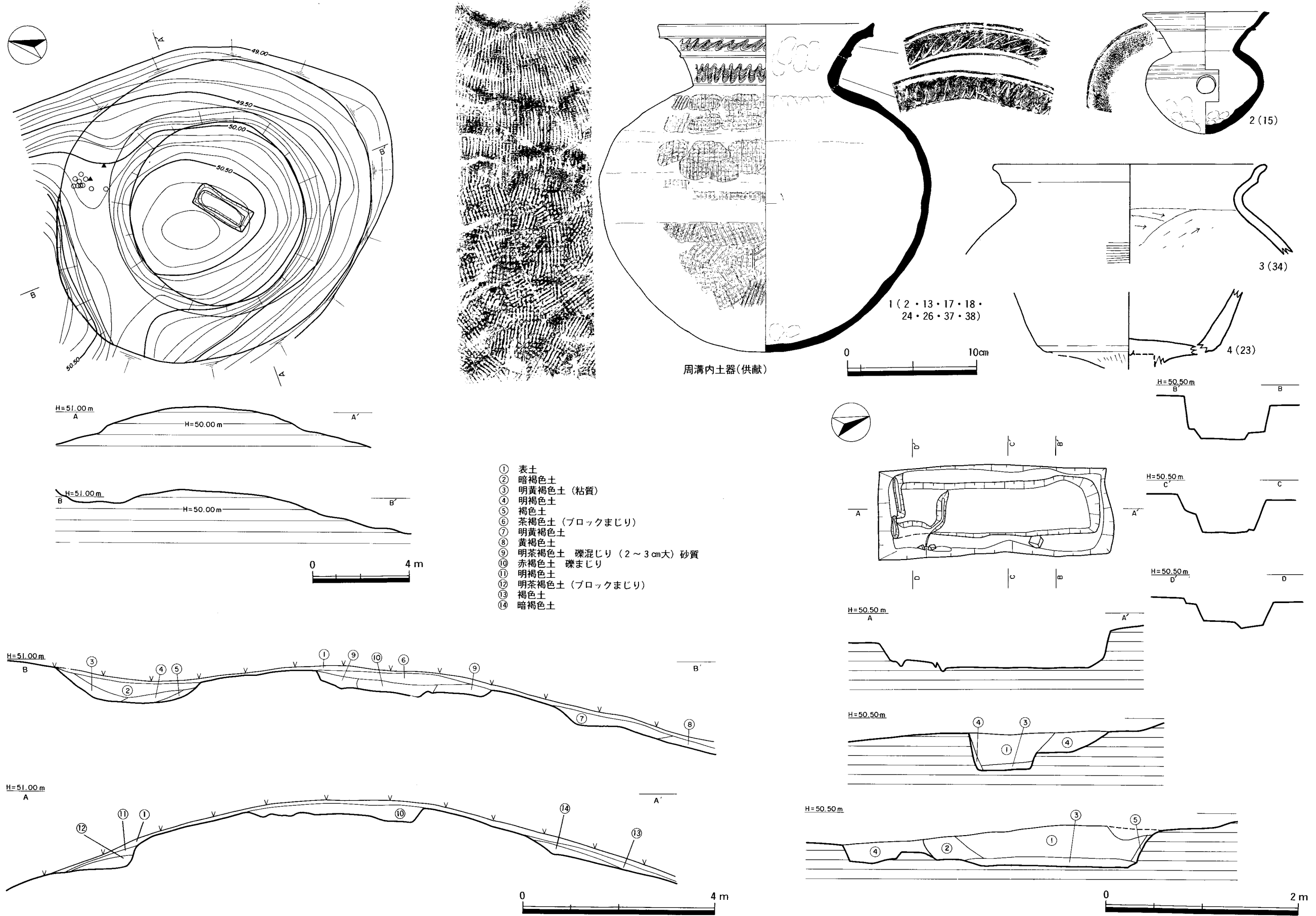


插图9 山田古墳群分布图



第1号横穴



挿図10 山田2号墳遺構遺物

山田3号墳（新山4号墳）

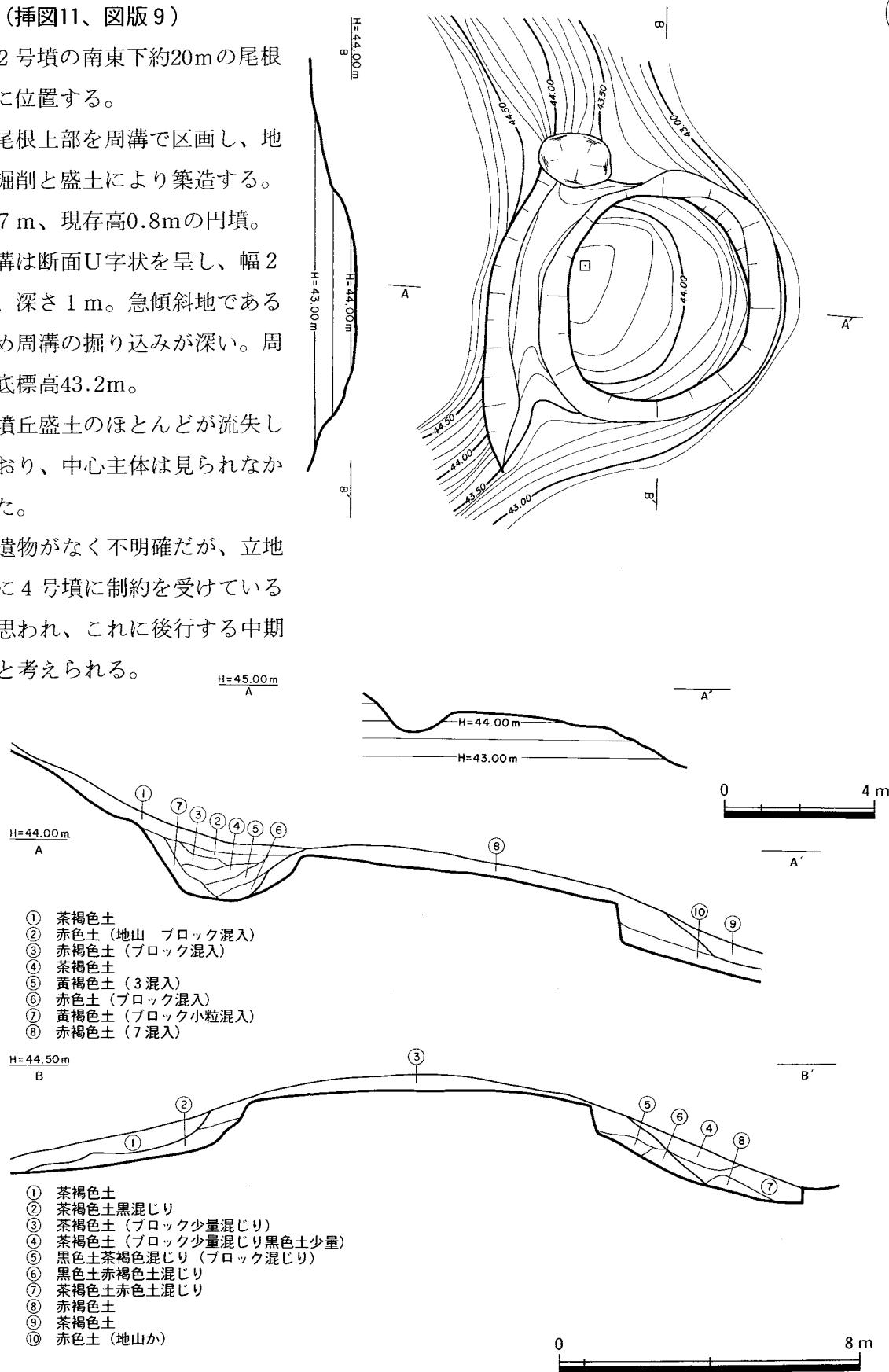
（挿図11、図版9）

2号墳の南東下約20mの尾根上に位置する。

尾根上部を周溝で区画し、地山掘削と盛土により築造する。径7m、現存高0.8mの円墳。周溝は断面U字状を呈し、幅2m、深さ1m。急傾斜地であるため周溝の掘り込みが深い。周溝底標高43.2m。

墳丘盛土のほとんどが流失しており、中心主体は見られなかった。

遺物がなく不明確だが、立地的に4号墳に制約を受けていると思われ、これに後行する中期末と考えられる。



挿図11 山田3号墳遺構図

山田4号墳（新山5号墳）（挿図12、図版9・10） 3号墳の南東直下に隣接する。

径8.5m、現存高1mの円墳である。尾根上部を弧状の周溝で区画し、地山掘削と盛土により築く。周溝は断面U字状を呈し幅2.6m、深さ0.8m。周溝底標高41.4m。盛土の流失が著しい。中心主体は、墳丘断面に旧地表面掘込み部も認められたが、特定には至らなかった。西側周溝内で小埋葬施設を検出した。周溝外壁部を拡張加工して長さ約2m×幅0.6～0.8mのテラスを造り、長さ0.9×幅0.3m－深さ0.25mの小坑を掘る。

土師器壺1・高坏9十・埴輪小片があり、主に墳丘西側斜面を中心に出土した。

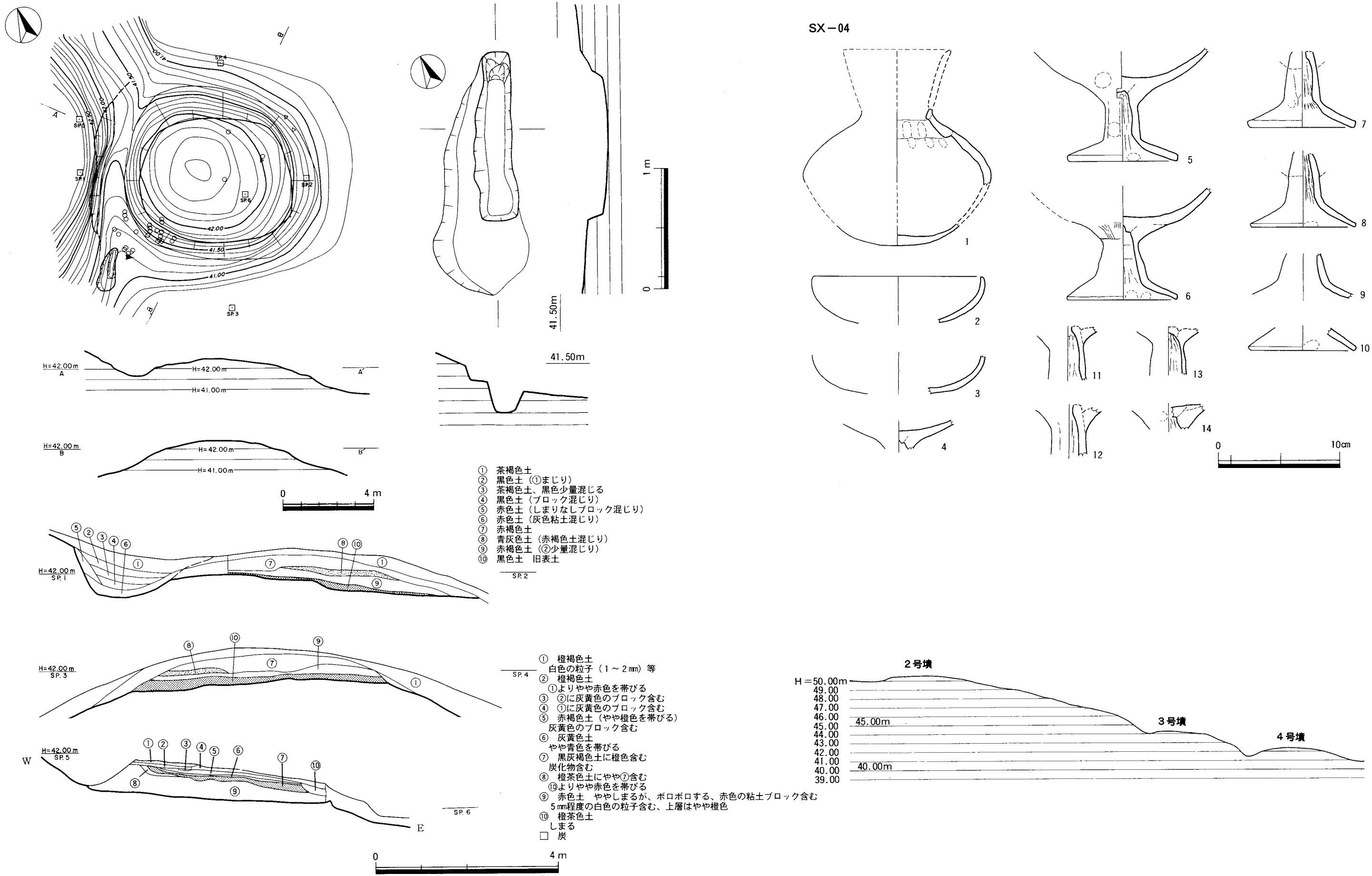
なお、盛土内からは弥生前期土器・古式土師器・黒耀石片等の出土があり、当該期の遺構に重複して存在したことを窺わせた。遺物から古墳時代中期後葉期に比定できる。

山田5号墳（新山6号墳）（挿図13、図版12） 4号墳と10号墳の間に位置し、丘陵先端に近い小平坦地に造られる。尾根上方部を幅1.8m、深さ0.6mの周溝で区画し、僅かな地山掘削と盛土により築かれる小円墳。径6m、現存高0.75m。周溝底標高40.15m。埋葬主体は検出できなかった。周溝内より土師器甕が出土した。古墳時代中期後半期と思われる。

山田6号墳・10号墳（新山7号墳・13号墳）（挿図14、図版12） 丘陵東突端部に位置し、北に6号墳、南に10号墳が隣接し併存する。後背地を大きく掘削して溝を掘り、前面に墳丘を造り出す。6号墳は全面盛土で築いた径約7m、現存高1.1mの円墳。周溝は断面U字状を呈し幅3.4m、深さ0.9m。周溝底標高37.95m。10号墳は地山掘削と盛土により築かれた径約6m、現存高0.6mの小円墳。盛土はほとんどが流失。周溝は断面U字状を呈し幅2.6m、周溝底標高37.8m。6号・10号共に墳丘内に埋葬施設は確認できなかった。6号が先行し、10号が後に築かれる。

なお、双方の周溝底部には二次的に掘削された幅40cm、深さ10cm程度の溝が走る。横穴墓築造に伴う後背墳丘として再利用された可能性が強い。6号墳西周溝内で須恵器甕破片、10号墳周溝南で土師器小片を検出した。須恵器甕は1号横穴に関係すると考えられる。

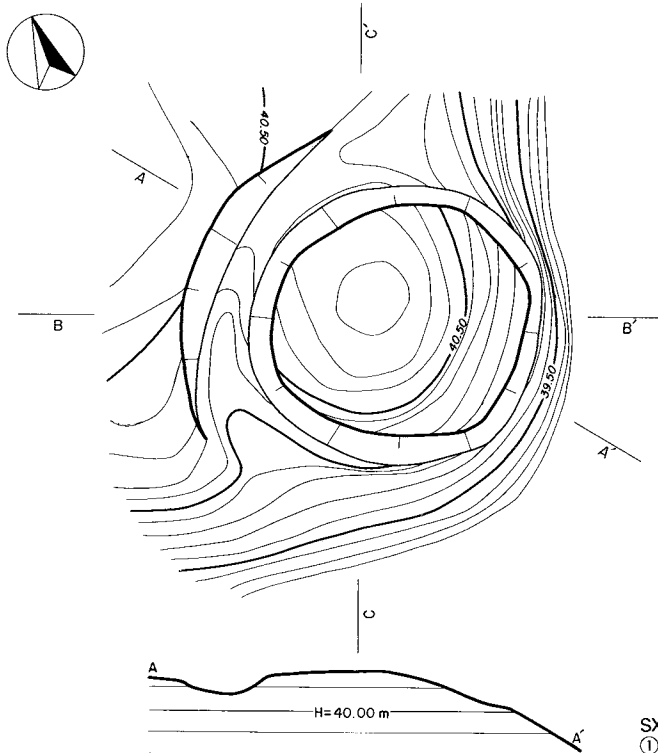
山田7号墳（新山8号墳）（挿図15、図版14） 丘陵先端部から北北東へと派生して延びる尾根上に立地し、8号墳の南直上に位置する。地山掘削と盛土による円墳で、径10.5m、現存高1.2mを測る。周溝は断面U字状で、尾根上方を大きく掘削し、幅2.2m、深さ1.1m。周溝底標高34.8m。埋葬主体は木棺直葬と思われ、墳丘中央で地山を掘削した墓坑を検出した。主体部は長さ1.8×幅0.85～0.75m－深さ0.2m、掘方は3.5×2.1mである。坑底の北寄りには棺台と思われる割石2個があった。頭位方向は北北東と思われる。主体部北東寄りで珠文鏡1面を検出した。墓坑底部から10cm、棺台状石の上面6cmの位置である。南西の周溝底で土師器壺1・坏（埴）10を検出した。いずれも上向きで、単品あるいは重ねた状態で出土した。時期は、古墳時代中期後半期と思われる。



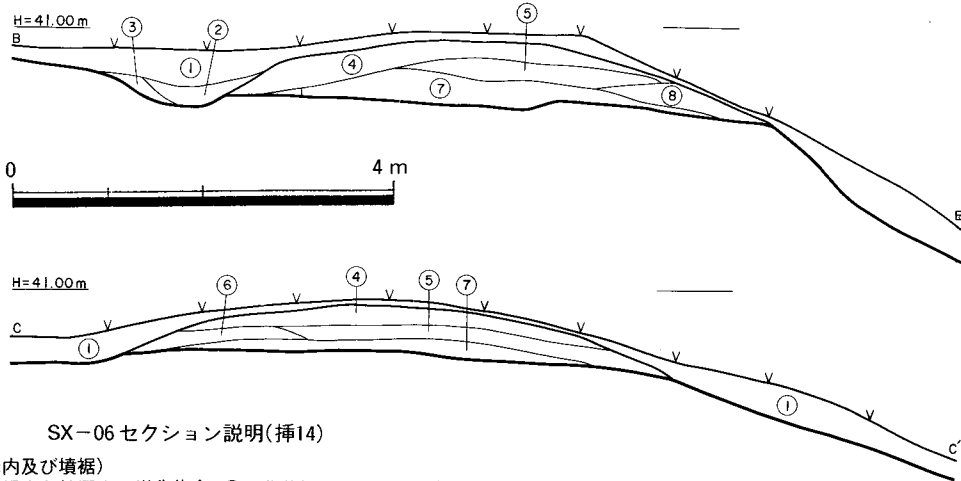
- ① 茶褐色土
- ② 黒色土 (①まじり)
- ③ 茶褐色土、黒色少量混じる
- ④ 黒色土 (ブロック混じり)
- ⑤ 赤色土 (しまりなしブロック混じり)
- ⑥ 赤色土 (灰色粘土混じり)
- ⑦ 赤褐色土
- ⑧ 青灰色土 (赤褐色土混じり)
- ⑨ 赤褐色土 (②少量混じり)
- ⑩ 黒色土 旧表土

- ① 橙褐色土
白色の粒子 (1~2mm) 等
 - ② 橙褐色土
 - ③ ①よりやや赤色を帯びる
 - ④ ②に灰黄色のブロック含む
 - ⑤ ①に灰黄色のブロック含む
 - ⑥ 赤褐色土 (やや橙色を帯びる)
 - ⑦ 灰黄色土
やや青色を帯びる
 - ⑧ 黒灰褐色土に橙色含む
炭化物含む
 - ⑨ 橙茶色土にやや⑦含む
 - ⑩ ⑨よりやや赤色を帯びる
 - ⑪ 赤色土 ややしまるが、ポロポロする、赤色の粘土ブロック含む
 - ⑫ 5mm程度の白色の粒子含む、上層はやや橙
 - ⑬ 橙茶色土
 - ⑭ しまる
- 炭

挿図12 山田4号墳遺構遺物



- SX-05
- ① 茶褐色土
 - ② 茶褐色土 (黒色土混じり、小ブロック混じり)
 - ③ 赤褐色土 (ブロック混じり)
 - ④ 赤茶褐色土 (白い2~3mmの粒子あり、炭なし・しまる)
 - ⑤ 茶褐色土 (白い2~3mmの粒子あり、上層やや灰色、しまる)
 - ⑥ ⑤と同じで⑤よりやや橙色を帯びる
 - ⑦ 橙茶色土 (白い2~3mmの粒子あり、しまる)
 - ⑧ ⑦と同じで⑦より明るい。

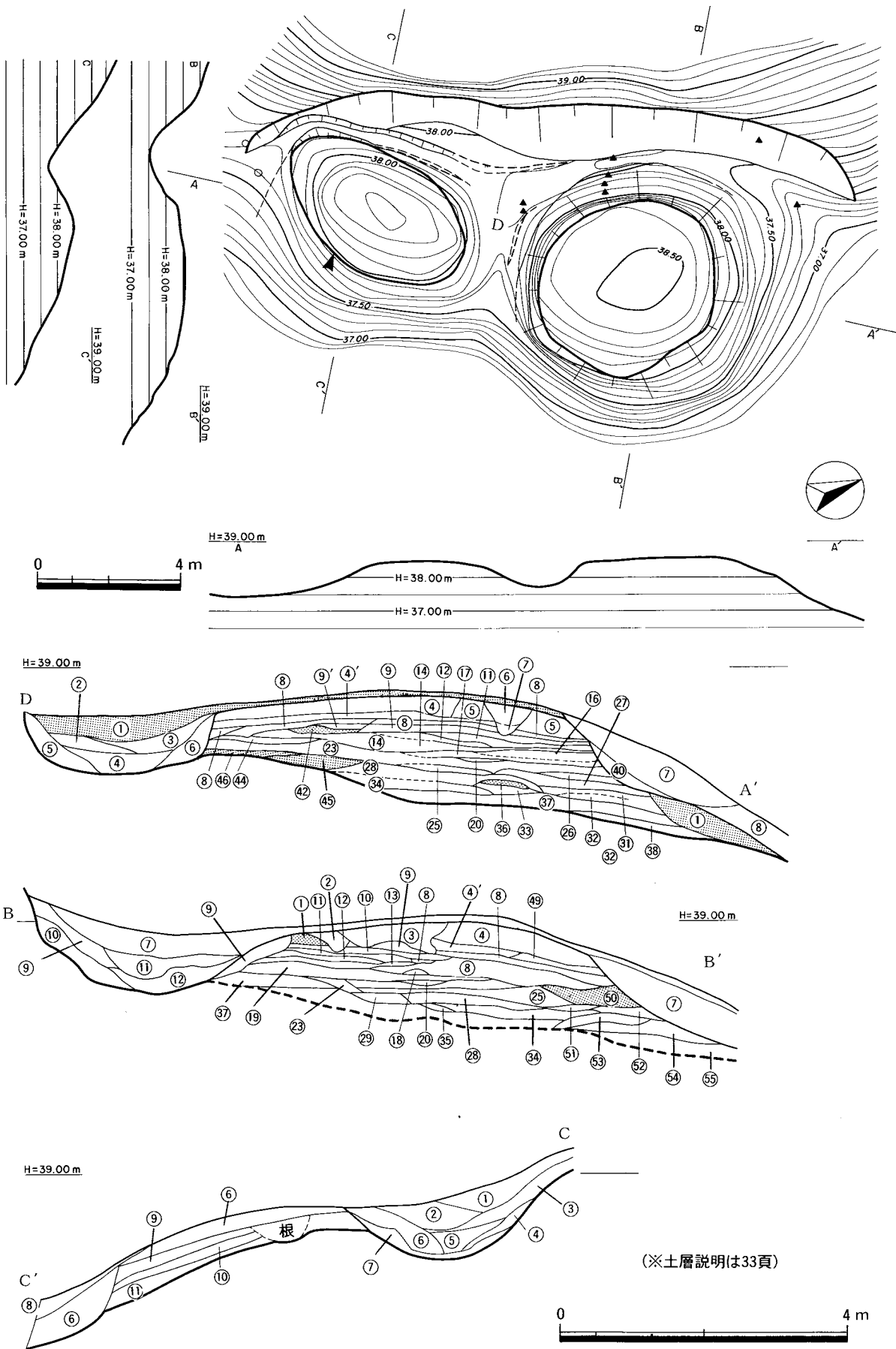


SX-06 セクション説明(挿14)

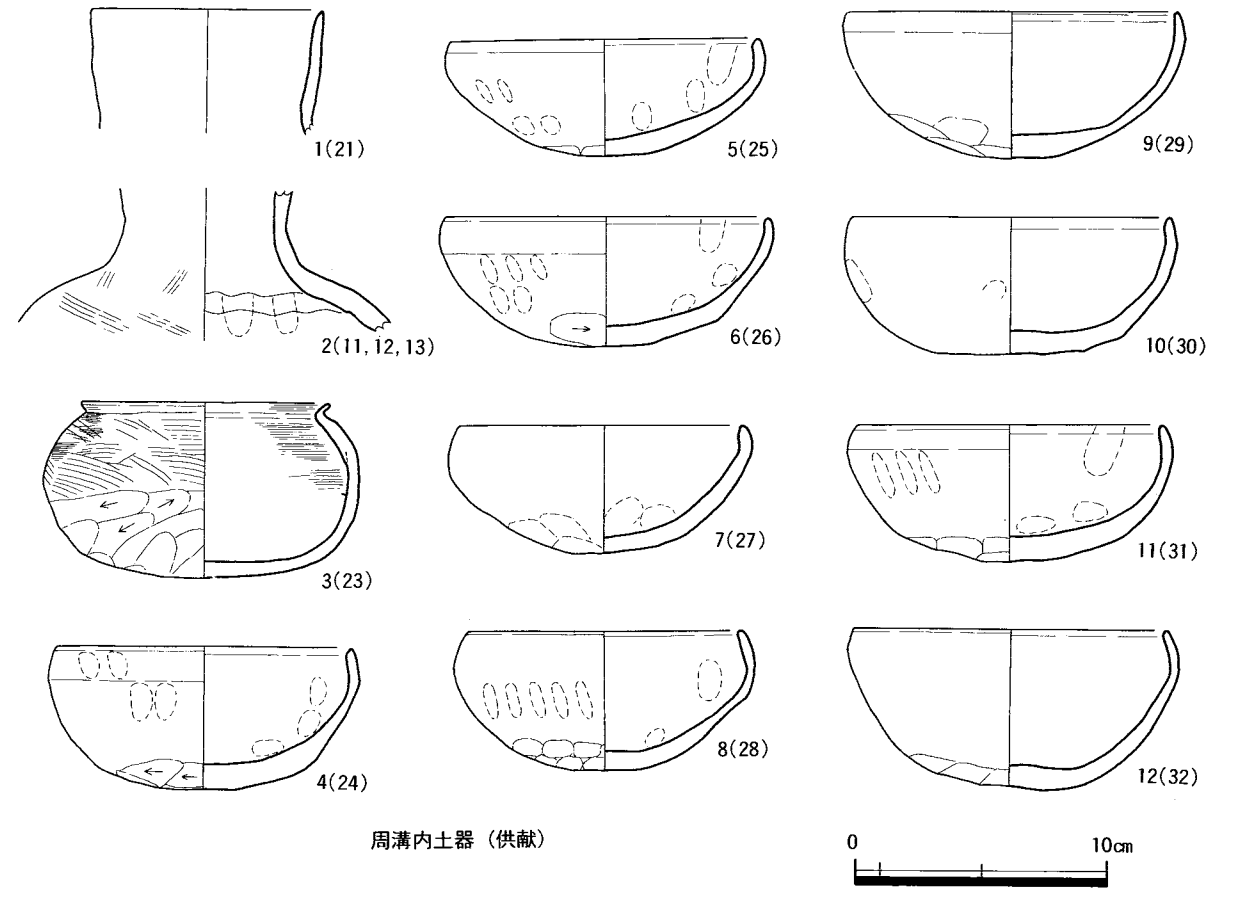
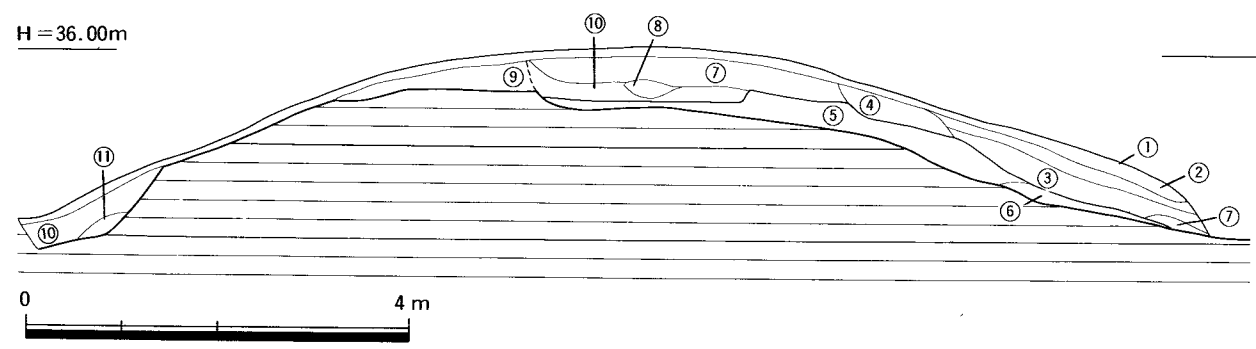
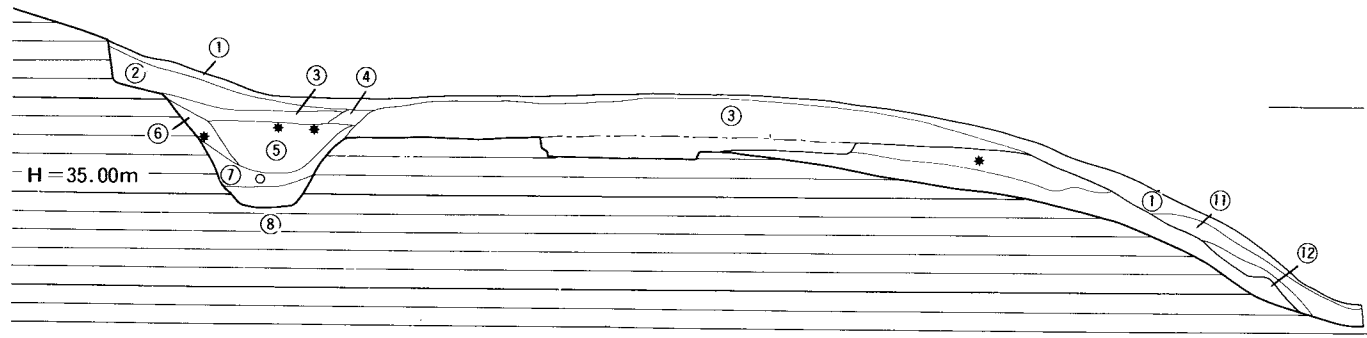
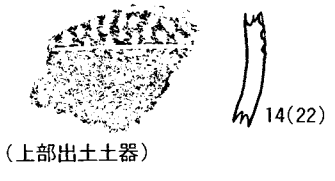
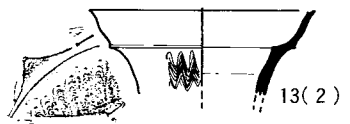
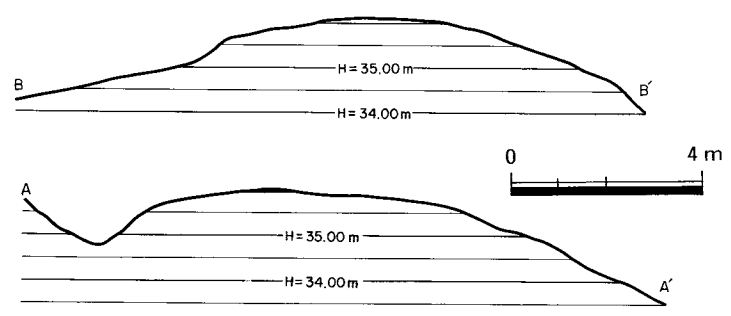
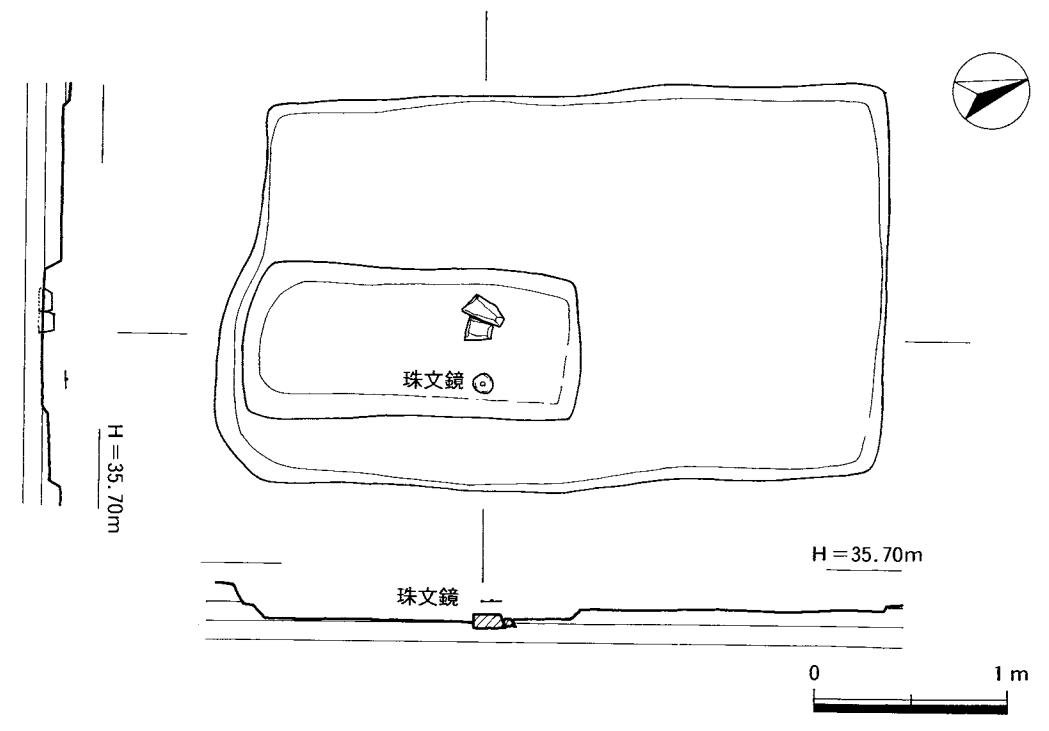
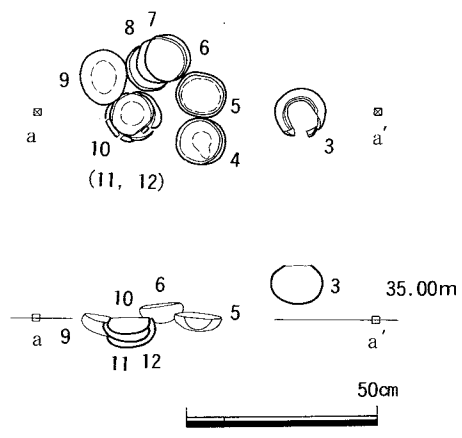
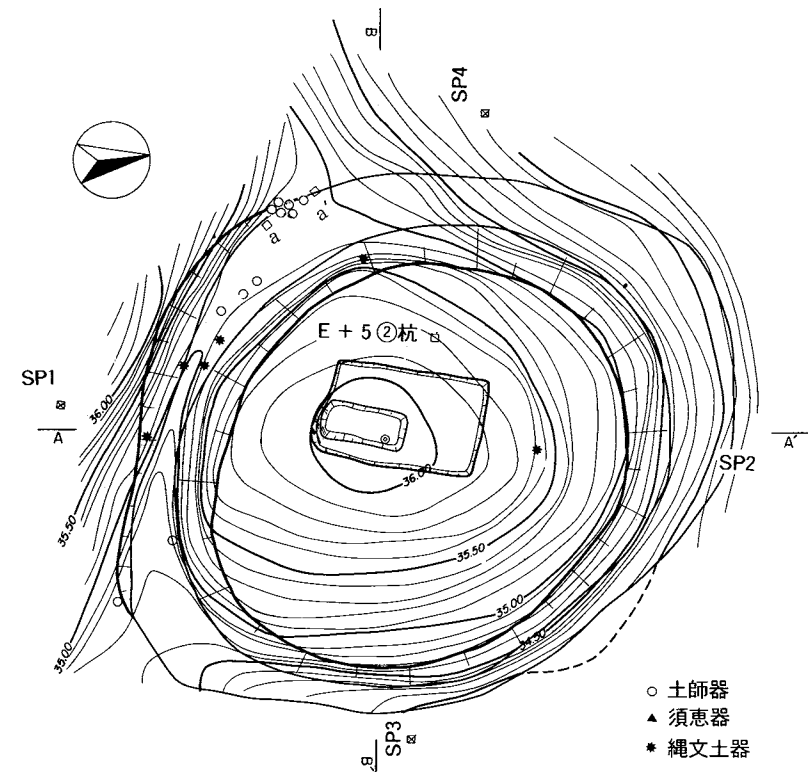
- (周溝内及び墳裾)
- ① 黄褐色粘質土 炭化物含
 - ② 灰茶褐色粘質土
 - ③ 黄茶白色粘質土 炭化物含
 - ④, ⑤ 黄灰白シルト~粘質土
 - ⑥ 灰茶褐色粘質土
 - ⑦, ⑧ 茶褐色土
 - ⑨, ⑫ 黄茶褐色土
 - ⑩ 黄茶色土よくしまる
 - ⑪ 茶褐色粘質土
- (墳丘盛土)
- ① 茶色粘質土 炭少々
 - ② 黄茶褐色土
 - ③ 茶褐色土 炭含
 - ④~⑨ 黄茶~茶褐色土
 - ⑩~⑮ 茶色~茶褐色粘質土
 - ⑯, ⑰ 灰茶色粘質土
 - ⑱ 橙茶色土
 - ⑲ 黄茶褐色土シルト質
 - ⑳~㉔ 淡茶~茶色粘質土
 - ㉕ 黄茶褐色土 やや灰色
 - ㉖ 橙茶色土
 - ㉗ 茶褐色土
 - ㉘~㉚ 暗茶褐色粘質土
 - ㉛~㉝ 黄灰~淡茶色粘質土
 - ㉞ 暗茶褐色土 炭化物含
 - ㉟ 黄灰茶色土
 - ㊱, ㊲ 暗茶褐色土 粘土ブロック含
 - ㊳, ㊴ 茶色土
 - ㊵, ㊶ 茶褐色土 炭少々
 - ㊷ 黄灰色砂質土 炭少々
 - ㊸ 暗褐色土 炭少々
 - ㊹~㊻ 茶~暗茶褐色土
 - ㊼ 茶褐色土 炭少々
 - ㊽~㊿ 暗茶褐色粘質土
 - ① 黄茶色土
 - ② 黄茶色土 (①よりやや粘質)
 - ③ 暗黄茶色粘質土
 - ④ 黄茶色土
 - ⑤ 暗茶褐色粘質土
 - ⑥ 黄灰白色粘質土
 - ⑦ 黄灰白色土 白色ブロック含
 - ⑧ ⑦より黒灰色を帯びる 粘質
 - ⑨ 黄褐色土
 - ⑩ 黄灰色土
 - ⑪ 茶褐色粘質土

SX-10 セクション説明(挿14)

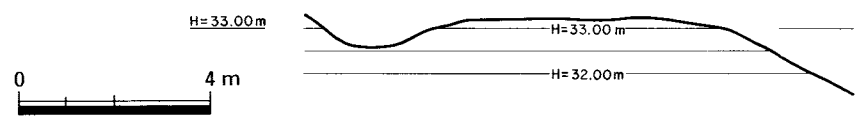
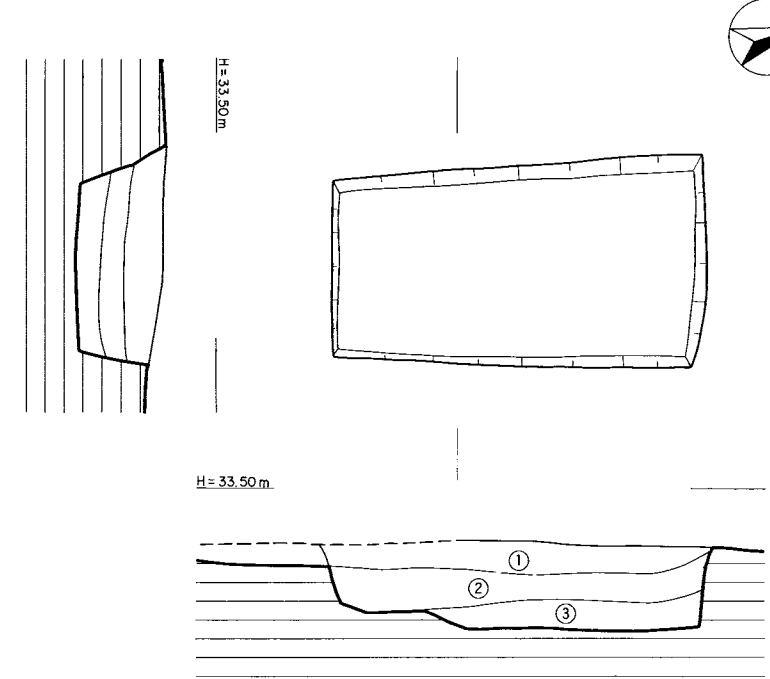
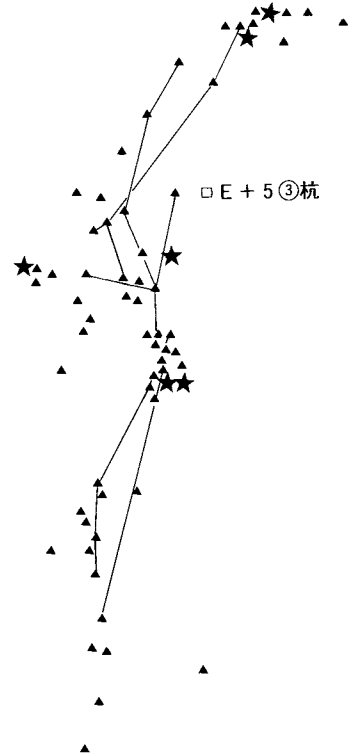
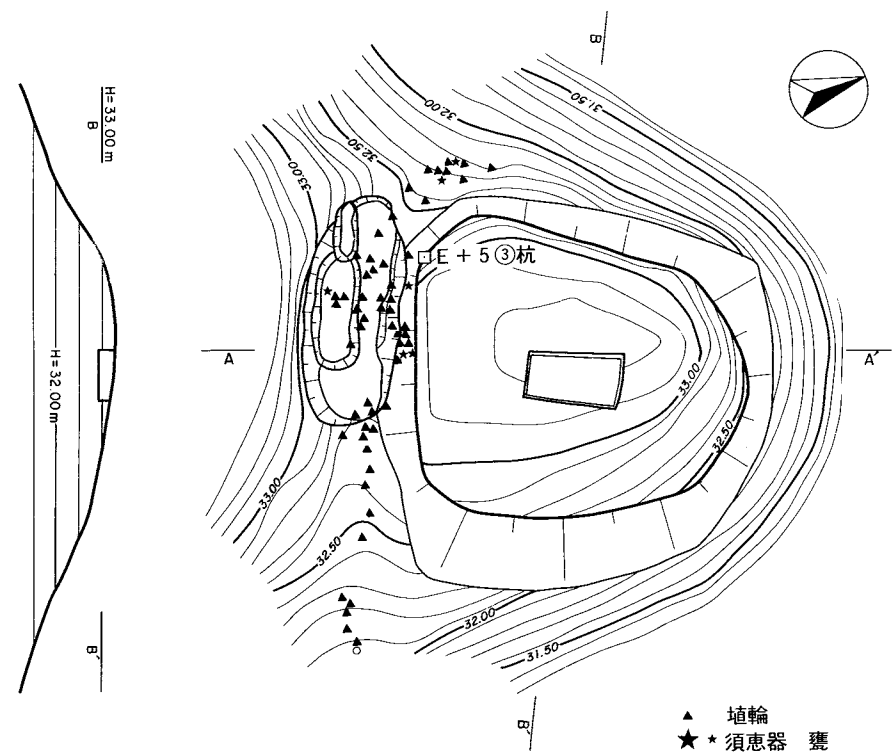
挿図13 山田5号墳遺構



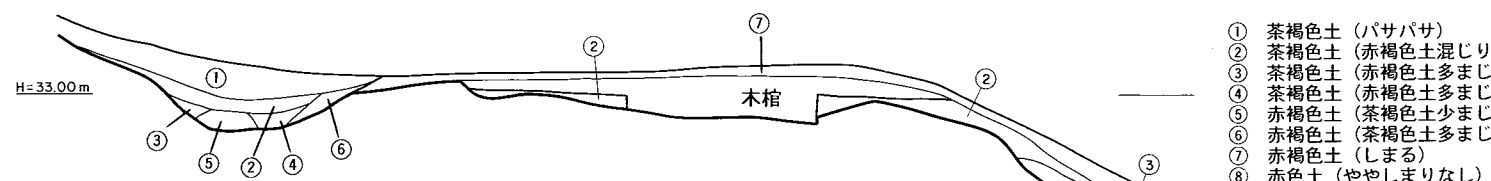
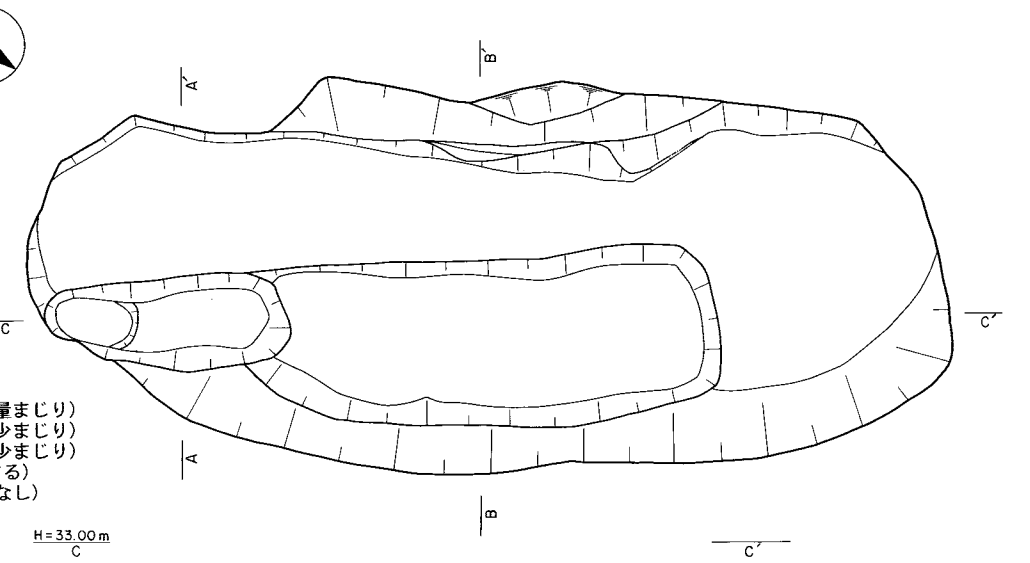
挿図14 山田6号墳、10号墳遺構遺物



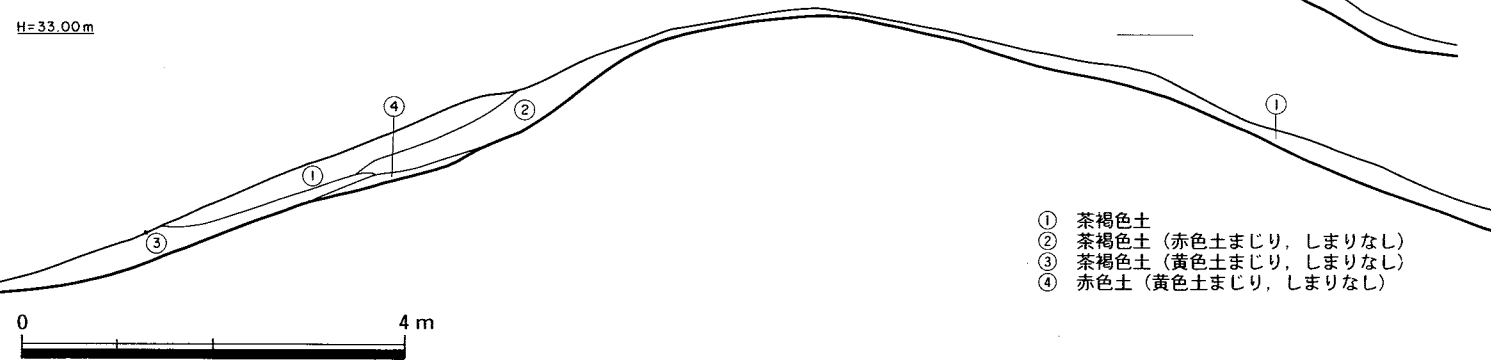
挿図15 山田7号墳遺構遺物



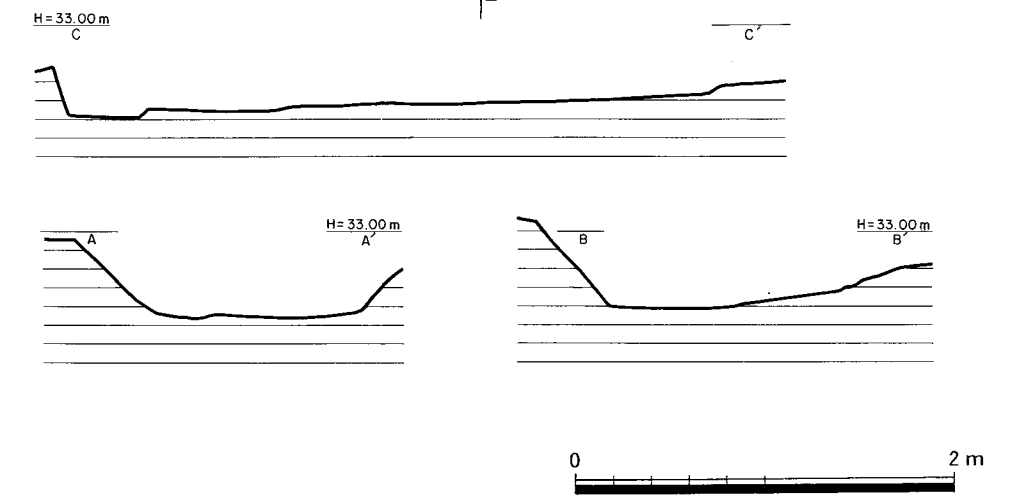
(埴輪接合関係)



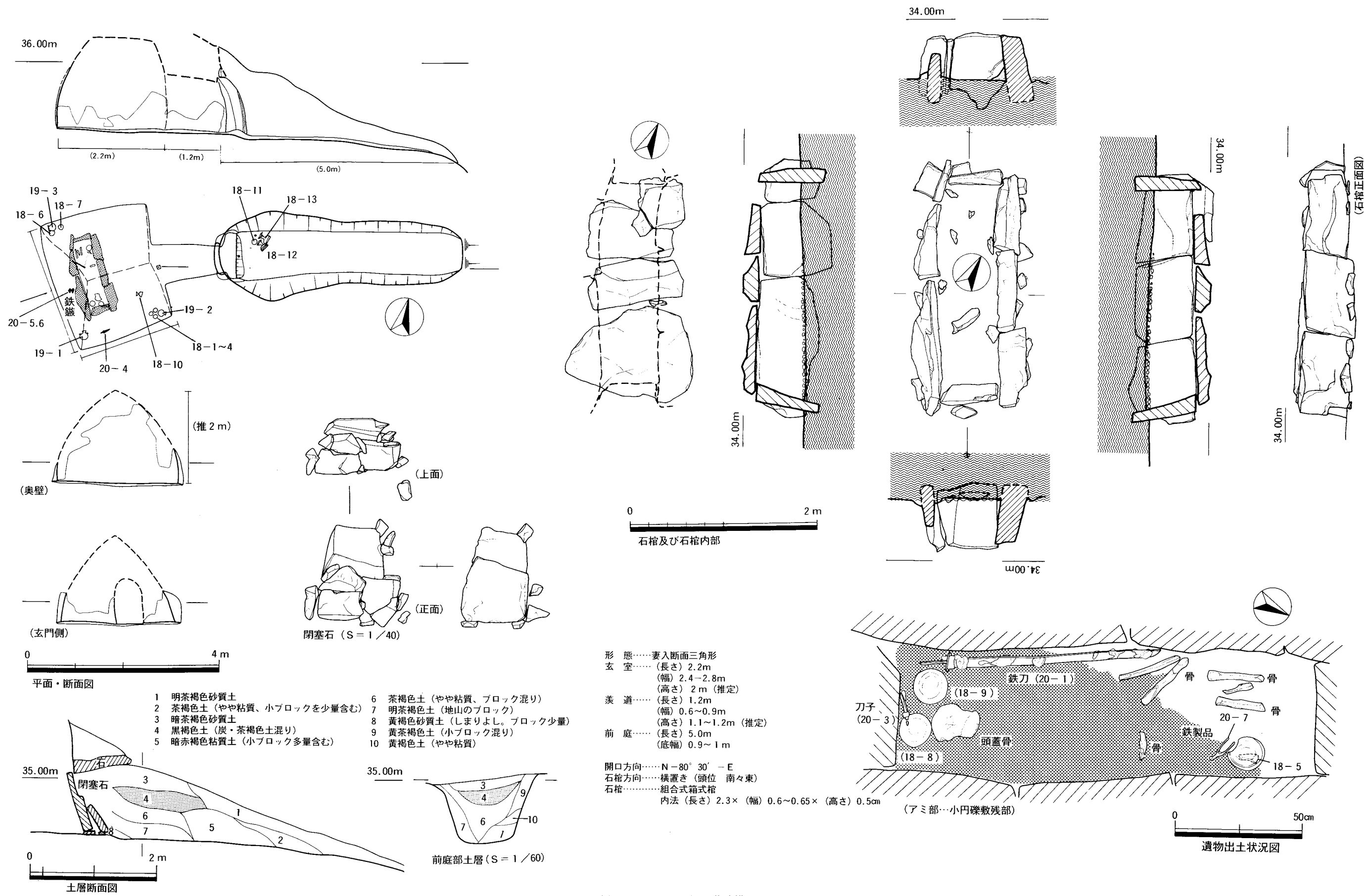
- ① 茶褐色土 (バサバサ)
- ② 茶褐色土 (赤褐色土混じり) (黒色土少量まじり)
- ③ 茶褐色土 (赤褐色土多まじり) (黒色土少量まじり)
- ④ 茶褐色土 (赤褐色土多まじり) (黒色土少量まじり)
- ⑤ 赤褐色土 (茶褐色土少量まじり, よくしまる)
- ⑥ 赤褐色土 (茶褐色土多まじり) (しまりなし)
- ⑦ 赤褐色土 (しまる)
- ⑧ 赤色土 (ややしまりなし)



- ① 茶褐色土
- ② 茶褐色土 (赤色土まじり, しまりなし)
- ③ 茶褐色土 (黄色土まじり, しまりなし)
- ④ 赤色土 (黄色土まじり, しまりなし)



挿図16 山田8号埴輪遺構遺物



挿図17 山田1号横穴墓遺構図

山田 8号墳 (新山 9号墳) (挿図16、図版15) 7号墳の北下にあり、北北東へ派生して延びる尾根の先端部に立地し、本古墳群中最も低い位置にあたる。地山掘削と盛土による築造で、径8m、現存高0.65mを測る。墳形は円墳と思われるが、上方の墳裾・周溝部の形状や遺物の散布状況がやや直線的に見える。周溝は上方のみに設けられ、断面U字状を呈し、幅2.3m、深さ0.55m。周溝底標高32.65m。墳丘中央で地山に掘り込んだ長さ2×幅1.15～0.95m－深さ0.35mの墓坑を検出した。頭位方向を北北東にとる木棺直葬と思われる。内部に遺物・遺体は検出できなかった。南側(上方)墳裾・周溝部で須恵器甕と埴輪の破片の散布を検出した。接合状況では墳丘肩部の中央に収斂し、元来この箇所にもまとめて置かれていたものと推定された。

古墳時代中期末から後期前葉と思われる。(出土埴輪は第V章－3で詳述)

山田 9号墳 (新山14号墳) (挿図73・77参照) 5号墳から南に派生する標高37～38mの尾根の突出部に立地する。6号墳・10号墳からは西横に巡る位置にあたる。S I 01の埋没箇所重複するため、掘削が地山に達しておらず明確な周溝や墳丘の検出はできなかった。僅かに、断面に盛土状況を観察し、山側で周溝内土坑とS K 04を検出した。径6m程度の小円墳であったと思われる。

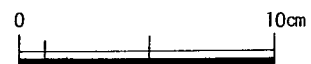
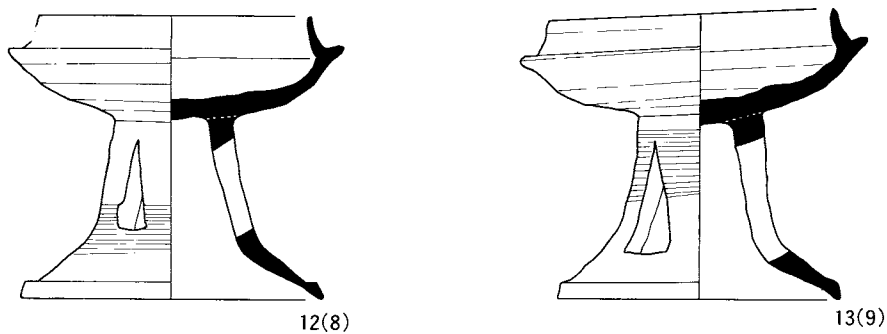
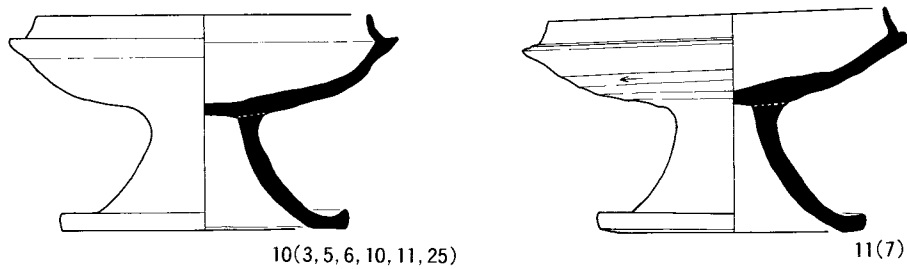
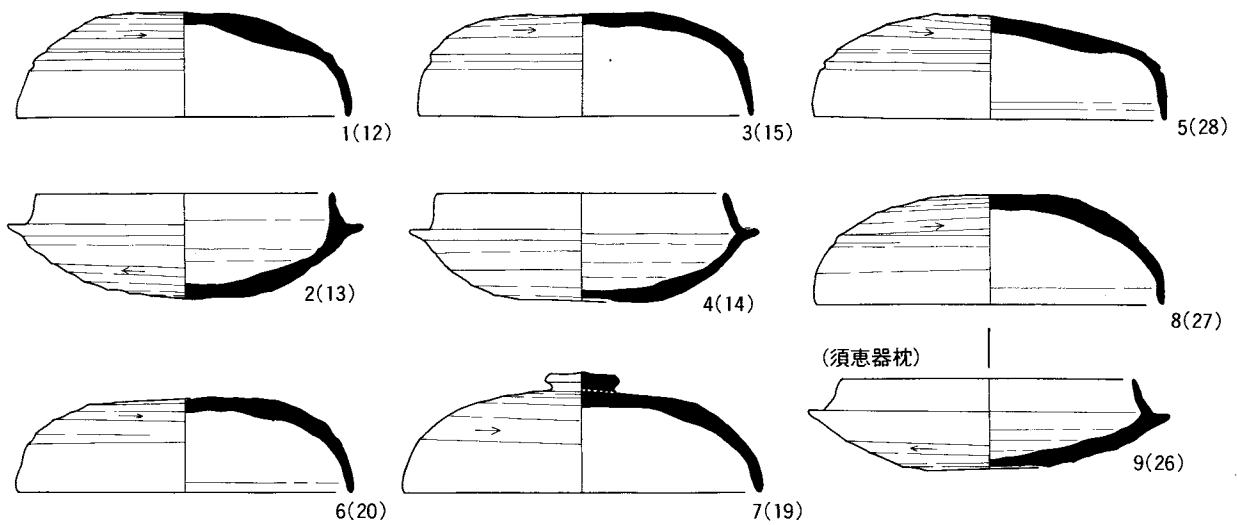
萱原 1号横穴墓 (挿図17～20、図版18～19) 丘陵先端部の標高35mの東向き斜面に立地し、大山の高峰を真正面に見る。山田6号墳々裾下に位置し、後背墳丘として取入れていると考えられる。平野との比高差は15mである。

形態は三角形断面妻入型。全長8.5m、玄室奥行2.2m×幅2.4～2.8m、高さ(推定)2m。床面標高34.5m。玄室の平面形は方形で前庭部はU字形をなし幅狭で細長い。羨道・羨門部と玄室の主軸方位は異なり、玄門開口方向はほぼ東方向(N-80°30'-E)、玄室は北東方向(N-57°-E)に向く。入口は1枚の切石で閉塞し、これを割石で押さえる。玄室・羨門部共に天井部の大半を欠くが、玄室の各隅角は明瞭であり、壁面は丸みを持って立ち上る。玄室は右側(奥壁に向かって)が広く、左側が狭い。玄門もやや左に寄る。排水溝などの施設は無いが、中央が僅かに窪み羨門に向かって傾斜を見せる。

玄室内中央奥に、組合式石棺が置かれる。内法長さ2.3×幅0.6～0.65m、高さ0.5m。厚さ30～10cmの切石と割石を使用し、両側面各3・小口各1、天井石4枚。側石で小口を挟む。床面には2～4cm大の栗石が敷かれる。内部より頭蓋骨・大腿骨・脛骨等一体分の人骨を検出した。頭位方向を南南東にとり、セットの蓋坏を枕とする。

遺物は、棺内で蓋坏3(内2は枕転用)・鉄刀1・刀子1・その他鉄器1、羨門前で高坏3、玄室左袖部で高坏1・蓋坏4・壺1、右奥隅で蓋2・土師器甕1、棺側で鉄鏃2・刀子1・提瓶1、前庭部上位で大・中甕2を検出した。耳環・玉類はない。大・中甕は埋葬終了後の祭祀に関係すると思われる。

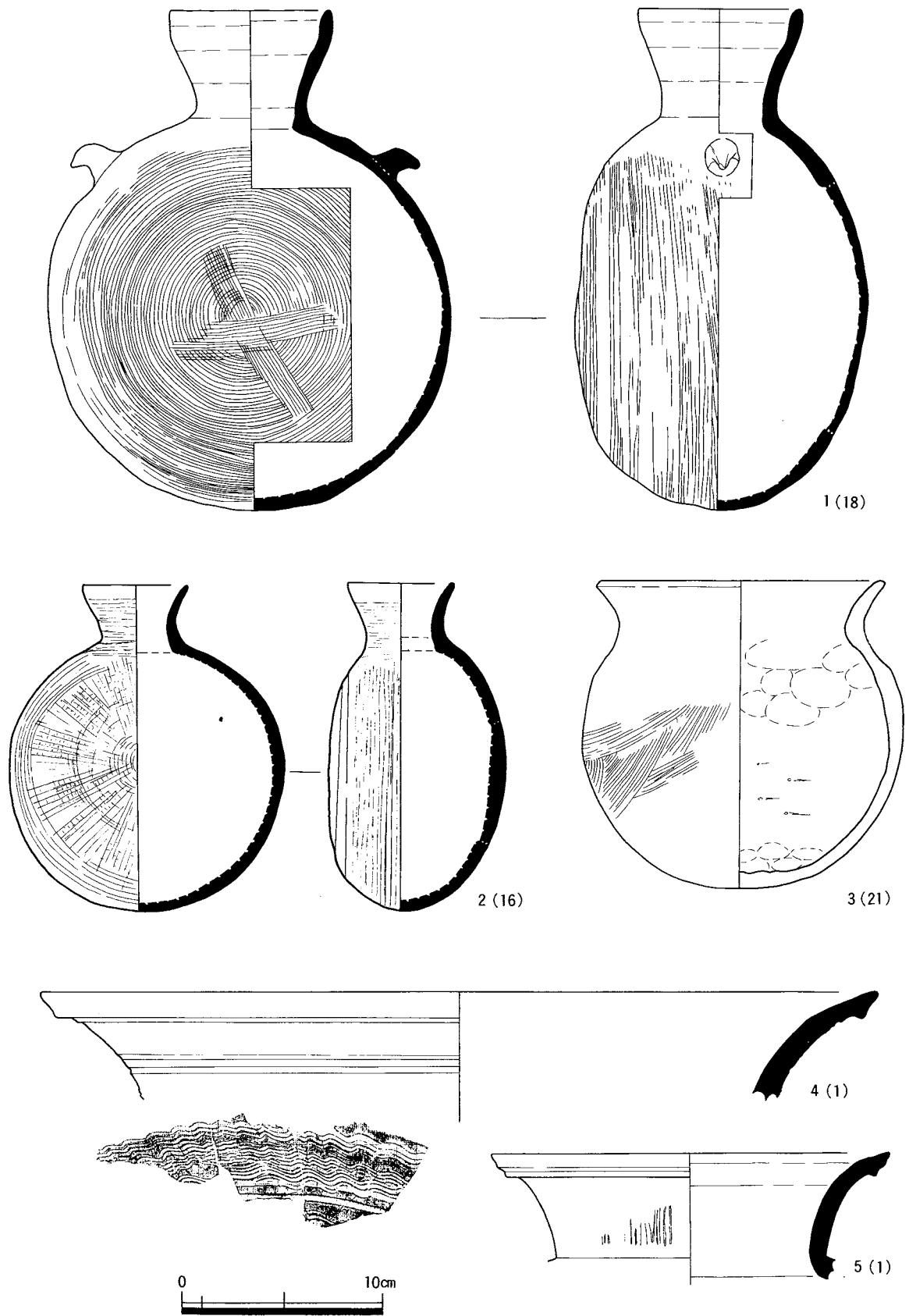
遺物や出土状態から前後2回の使用が考えられるが、時期差は少ない。形態的に陰田横穴墓



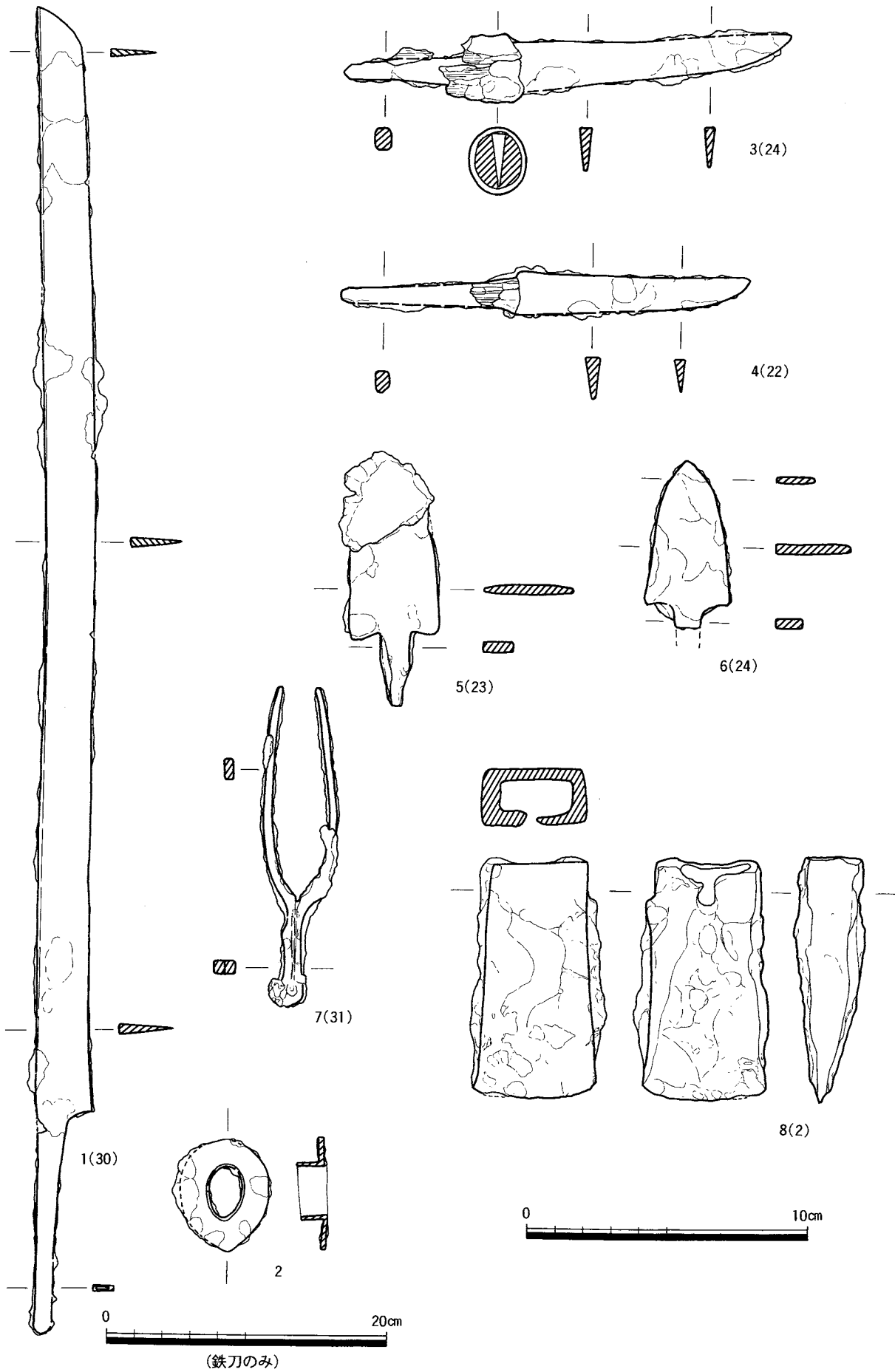
挿図18 山田1号横穴遺物(1)

群のⅠ期第3段階に相当し、横穴墓制導入後のしばらくの時期にあたる。

陰田横穴墓群ではⅠ期の段階で丸天井→中高天井→断面三角形天井と変化し、以後幅広の前庭部を持ち定形化する傾向が指摘されている。時期は陰田須恵器編年4期（陶邑TK43併行）にあたる。（『陰田』米子市教育委員会 1984）



挿図19 山田1号横穴遺物(2)



挿図20 山田1号横穴遺物(3)

3. 山田遺跡1区(挿図21～25、図版24～27)

山田古墳群(山田遺跡3区)と山田遺跡2区丘陵にはさまれた谷部分に位置する。水田の下から古代流路・土坑・ピット群・土器溜・敷石等の遺構や、縄文土器(晩期)・弥生土器(前期・中期・後期)・土師器・須恵器・焼締陶器、石器等の遺物を検出した。鏡片・ミニチュア土器・勾玉・紡錘車などの祭祀的遺物や、炭・焼土に混って甗の出土なども見られた。流路は、谷あいを通る自然流路で、幅0.4～2m、深さ15～40cm程度の小規模で緩やかな流れが蛇行しつつ重複する。木材や炭の溜まった池状の深みや、1m以上の落差を持つ落ち水、流路を跨ぐように配置された敷石遺構など人工的な管理のあともうかがえる。北半は2区丘陵集落の縁辺部でもあり、流路を挟んで北側に土器溜りや焼土炭溜り、南側にピット群があり、更には古墳群を仰ぐ位置にある。集落の端での斎場としての位置も占めていたと思われる。

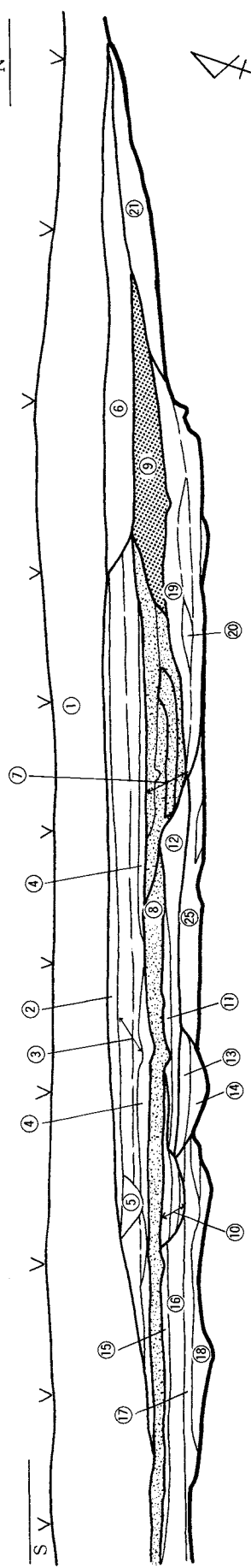
土層堆積(挿図21、図版26) 基本的に三層である。I層は客土及び水田耕作層。II層は黒色の粘質腐蝕土層で、3G～6Gを中心とする径約20mの範囲に分布する。谷が塞ぎ止められて水流が停滞し湿潤化した事を窺わせる。平安後期の土坑がこの層を掘り込んでおり、奈良～平安期の堆積と思われる。III層は古代堆積層で、流路の影響を受けシルト・砂の堆積が著しい。縄文～古墳時代後期の遺物が分布する。中央東西ベルト部分では水田面より70～80cm下が古墳中～後期初頭、90～100cm下が弥生層である。

土器溜り(挿図23、図版24) 古代流路中の標高24.7mの中洲状地形上に位置する。古式の須恵器高坏(有蓋)2・同蓋1、蓋坏12・土師器甕1・高坏2を検出した。60×70cmの範囲に丸くまとまり、断面では僅かに窪みが認められるもののほぼ平坦に近く、この位置に並べて置かれたものと考えられる。須恵器は陶邑のTK23～TK47に併行する。

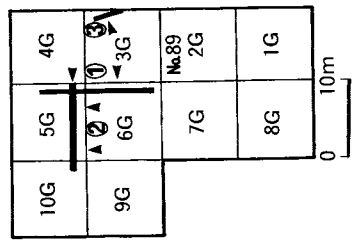
中世土坑(挿図24、図版27) 6基を発掘した。標高24.5m内外の流路辺りに沿って並ぶ。浅い皿状の円形土坑で、現状では大小があるが、元は径約1.5m、深さ50cm程度であったと思われる。長方体の河原石(15×6×4cm大)数個を持つものがある。埋土は基本的に上層：砂、鉄分含み黒褐色土、中層：黒色粘質シルト、下層：黒灰色粘質土の三層である。黒色粘質土層の上から掘込まれ地山・褐色土層に達す。SK06で土師質坏・皿(挿図196-3・4)を検出した。掘込層や遺物から平安時代の古墓と思われる。

ピット群(図版25) 古代流路南側に分布する。ピット規模は径約20～30cmと小振りである。それぞれのつながりは特定しきれなかった。時期性格は不明であるが、位置的に鍛冶遺構の山田3区第2テラスの直下であり、また、周辺の土中にカナケ(鉄分)が多く含まれることなど、奈良期の鍛冶関連遺構であった可能性が高い。

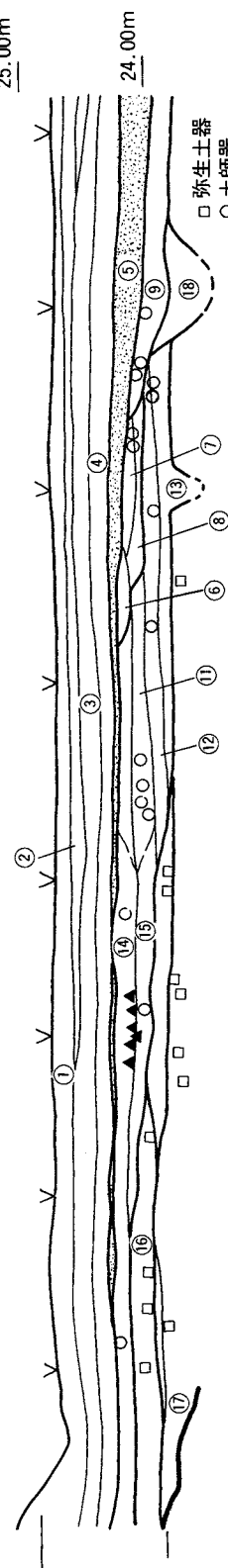
25.50m
N



1 中央南北ベルト



2 中央東西ベルト

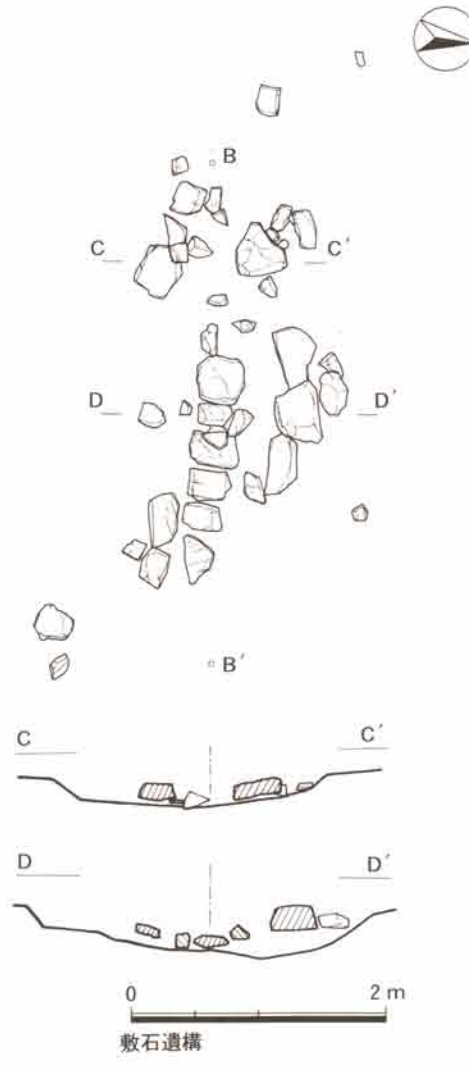
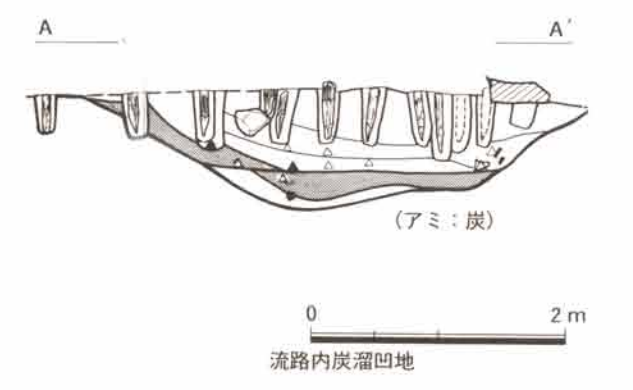


3 流路断面



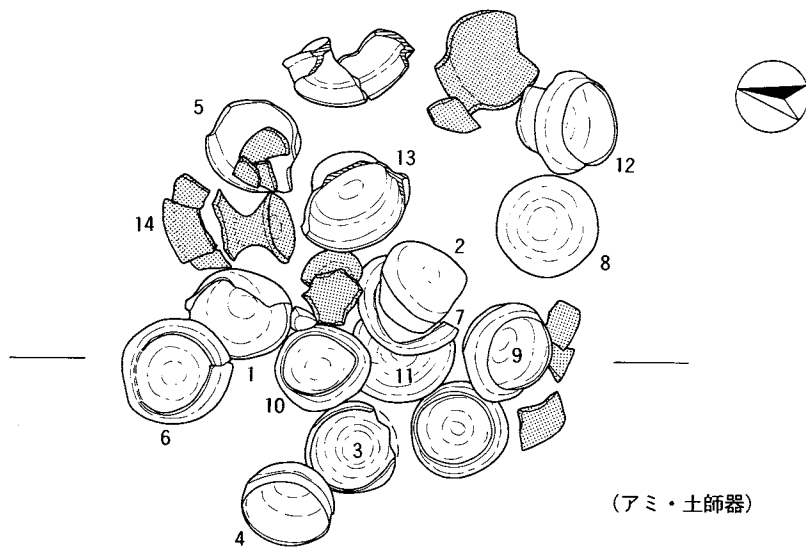
- 1 中央南北ベルト**
- ① 冬土 (耕作土)
 - ② 青灰色土
 - ③ 灰褐色土 (田床土)
 - ④ 茶褐色土
 - ⑤ 褐色土 (粘質と砂質百層)
 - ⑥ 黒色土 (平安~中世)
 - ⑦ 黒褐色土 (炭混)
 - ⑧ 暗褐色土 (流路)
 - ⑨ 暗灰色シルト (粘質)
 - ⑩ 暗灰色シルト (粘質)
 - ⑪ 灰色と茶色混土 (粘質)
 - ⑫ 灰色と茶色混土 (粘質)
 - ⑬ 暗灰色茶土と薄茶土混土 (粘質強)
 - ⑭ 明るい灰色土 (粘質)
 - ⑮ 明るい黄色土 (砂粒子多)
 - ⑯ 青灰色土
 - ⑰ 淡灰色と茶色混土 (砂粒子多)
 - ⑱ 茶色土
 - ⑳ 茶色土混 (砂粒子多)
- 2 中央東西ベルト**
- ① 耕土
 - ② 灰色土 (床土)
 - ③ 灰茶褐色土
 - ④ 灰色土 (旧床土)
 - ⑤ 黒色土 (平安~中世)
 - ⑥ 灰茶まじり茶褐色土
 - ⑦ 明茶褐色土
 - ⑧ 茶褐色土
 - ⑨ 暗茶褐色土
 - ⑩ 黄褐色土
 - ⑪ 茶まじり灰色土
 - ⑫ 明黄褐色土
 - ⑬ 淡灰色砂質土
 - ⑭ 灰色まじり暗茶褐色土 (土器)
 - ⑮ 茶色まじり暗灰色土 (土器)
 - ⑯ 淡灰色砂質土 (弥生)
 - ⑰ 暗灰色粘質土
- 3 流路断面**
- ① 耕作土
 - ② 灰褐色シルト (砂粒多)
 - ③ 赤褐色土
 - ④ 明灰色土 (砂粒多)
 - ⑤ 暗褐色土
 - ⑥ 暗茶褐色土
 - ⑦ 茶粒子混灰色土
 - ⑧ 砂粒混淡茶色土
 - ⑨ 明灰色砂質シルト
 - ⑩ 砂粒混灰色土
 - ⑪ 砂粒混灰白色土
 - ⑫ 暗灰色土 (炭混り)
 - ⑬ 暗褐色土
 - ⑭ 明青灰色土 (砂粒多)
 - ⑮ 灰褐色土 (よくしまる)

插图21 山田遺跡1区土層図



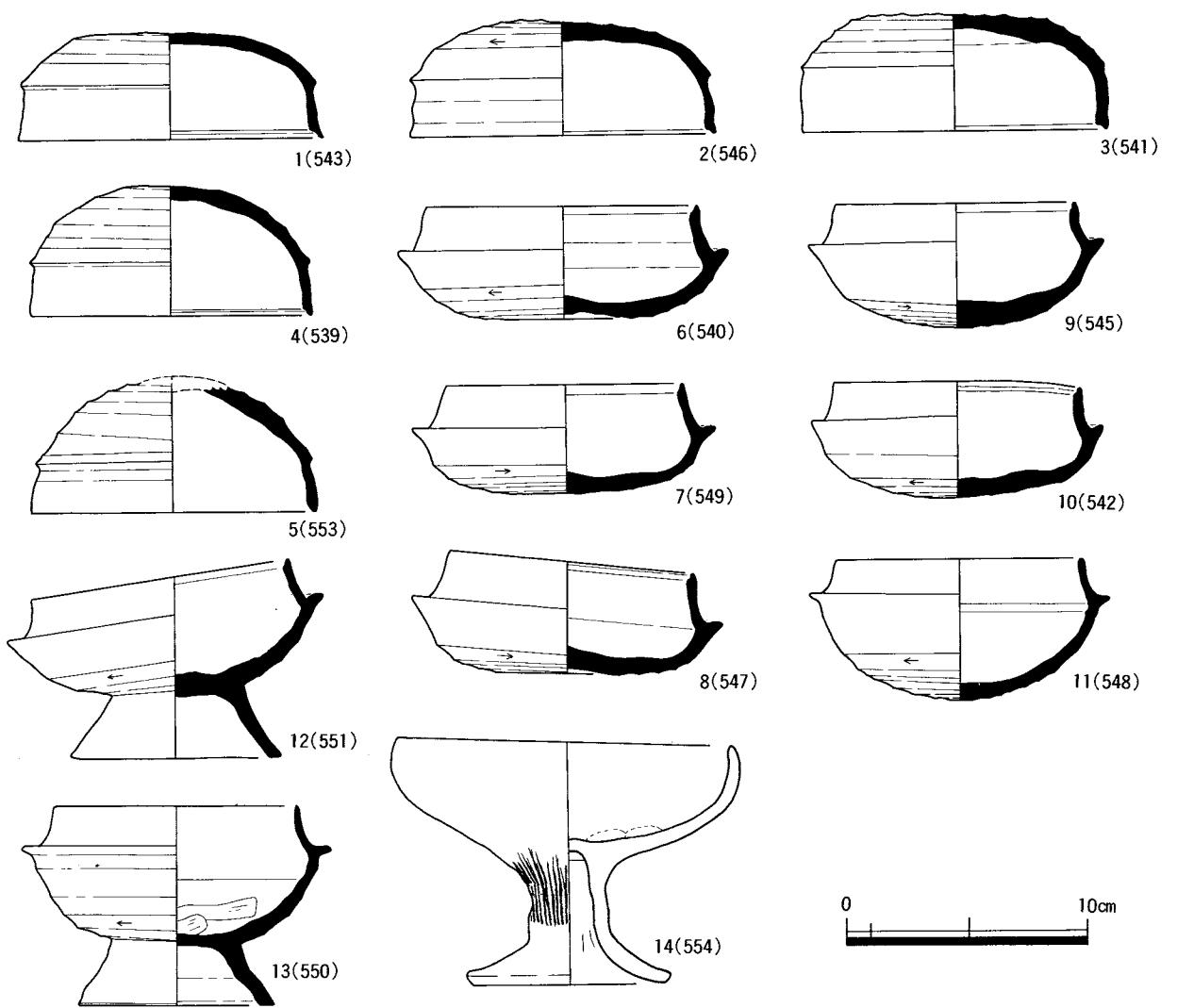
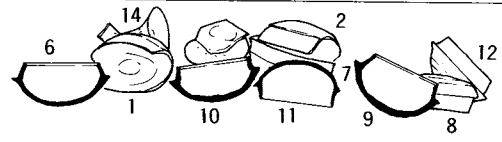
- 弥生中期
- 弥生後期
- ▲ 須恵器
- △ 土師器
- ▲ 石製品
- ⊙ てづくね
- ★ 鏡
- ★ 鉄

挿図22 山田遺跡1区遺構遺物分布図



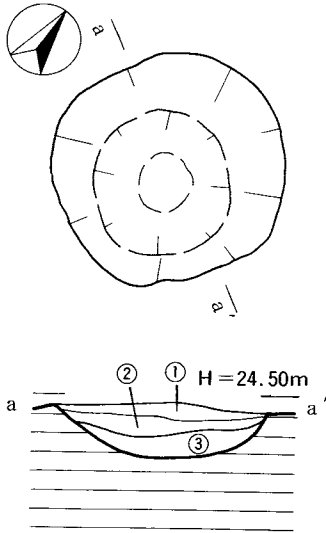
(アミ・土師器)

H=24.80m



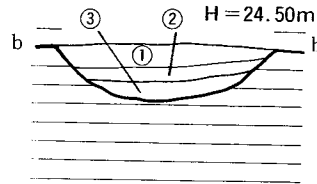
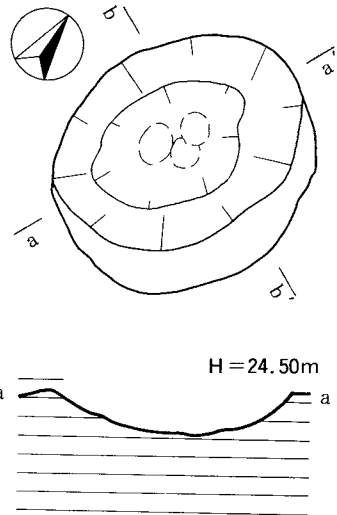
挿図23 山田遺跡1区土器溜遺溝

SK-01

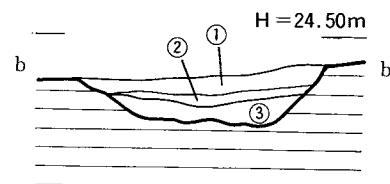
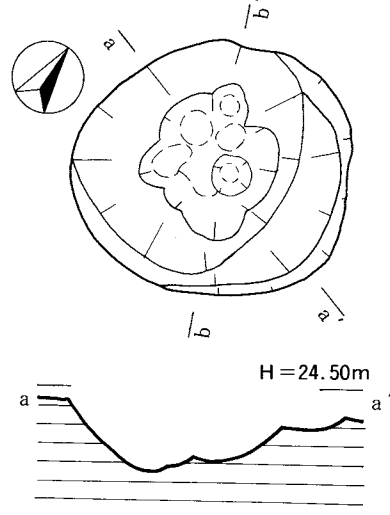


- ① 黒褐色土 (砂少々、鉄分含む)
- ② 黒色粘質シルト
- ③ 黒灰色粘質土

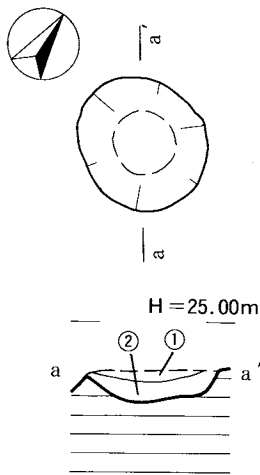
SK-02



SK-03



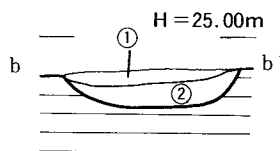
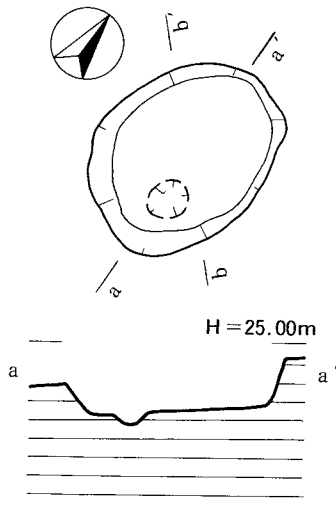
SK-04



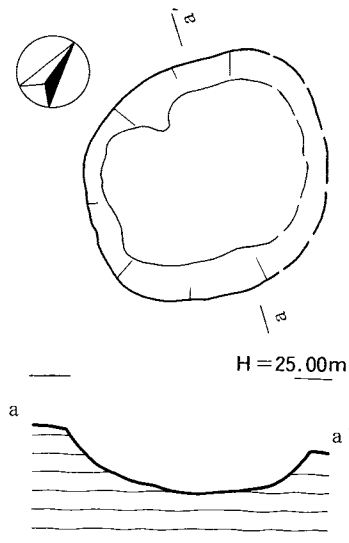
- ① 黒灰粘質土
- ② 黒色粘質シルト

- ① 黒色土
- ② 黒灰色粘質土

SK-05



SK-06



挿図24 山田遺跡1区土坑図

4. 山田遺跡2区

概要 標高25～50mの緩やかな傾斜の低位丘陵に位置する。丘陵中央部に小規模の谷地形があり、遺跡はこれを巡るような形で形成されている。現状では、戦後の土地造成により尾根部の高所は削平され谷部は埋め立てられていた。

竪穴住居跡21・掘立柱建物跡2・溝状遺構1・段状遺構3・土坑40・その他神社跡・ピット群・焼土跡・石積遺構等を検出した。また、北西側稜線部で古墳時代後期前半期の古墳1基を確認した。遺物では、弥生土器・土師器・須恵器・近世陶磁器・石器（石鏃・石斧・砥石）・鉄製品などがある。分銅形土製品2点も出土した。

地層 地層の堆積は黄～黄褐色粘質土を地山とし、基本的に、Ⅰ・表土、Ⅱ・黒褐色土層、Ⅲ・黒色土層、Ⅳ・褐色土層の4層である。遺構や遺物散布の大半は第Ⅲ層・黒色土層以降の層に集中した（挿図26）。

遺跡の変遷 概ね次のような変遷をなす。

1期 縄文時代。陥穴状土坑、風倒木状土坑等があり、石鏃・剥片などの散布があった。陥穴状土坑は尾根筋を小谷に向かって降りるような配置である。狩猟地としての利用がなされている。時期は明確ではないが、第Ⅲ層・黒色土層上から掘込むものと下層以下のものがあり、古・新双方に大きな隔たりが認められた。

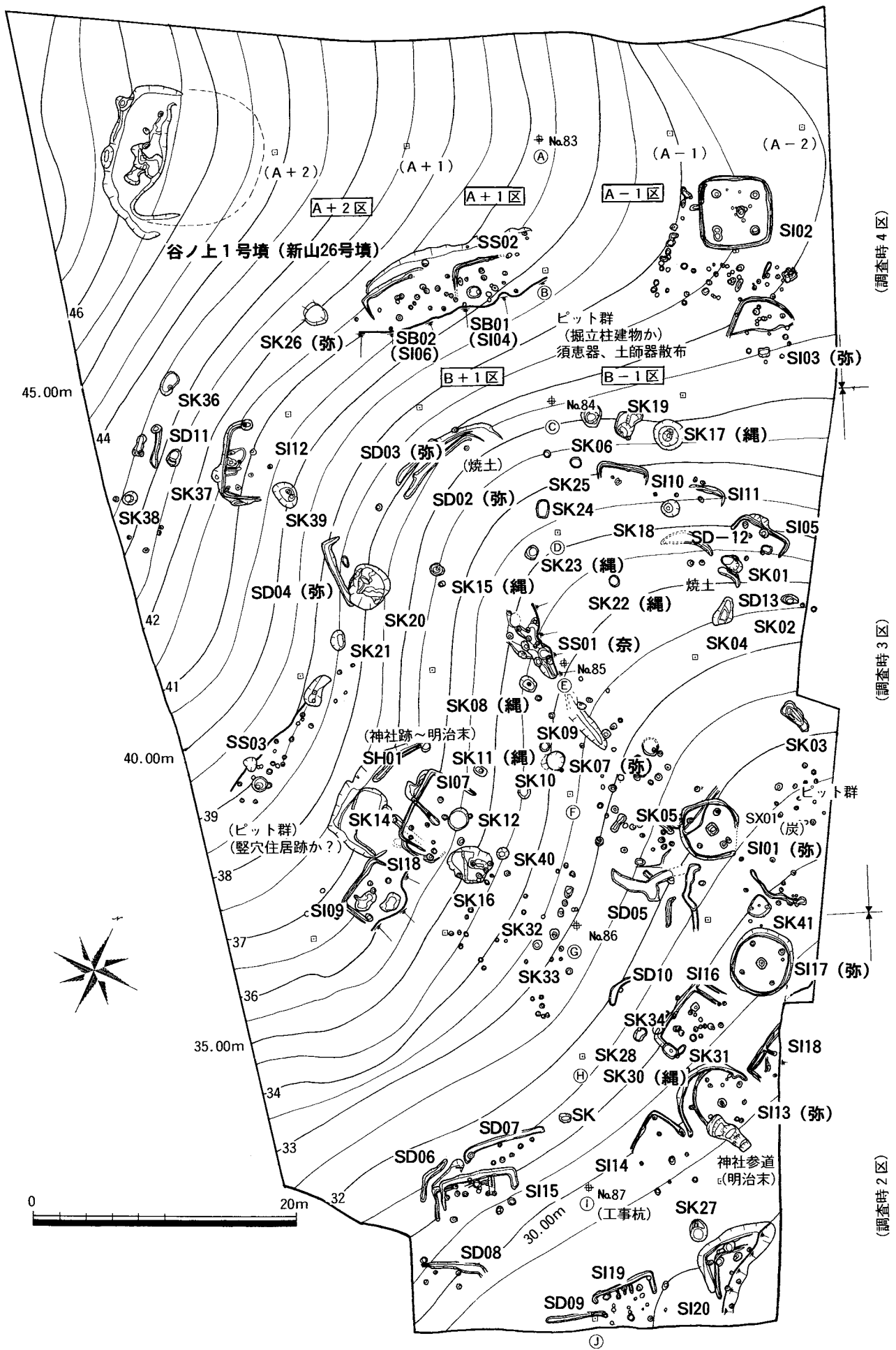
2期 弥生時代中期後葉～古墳時代後期初頭。丘陵尾根部や谷を巡る斜面部に竪穴住居跡・袋状貯蔵穴・溝状遺構等が築かれ集落が形成される。大まかに中期後葉～後期前葉、後期後葉、古墳時代前期～中期前半、中期後半～後期初頭の4段階が見られ、弥生後期後葉はそれぞれ小谷を巡る傾斜地・丘陵中位・裾部を中心に立地する。

弥生時代中期後葉から後期初頭は遺物は存在するが遺構が少ない。掘り込みが浅く痕跡が薄いために後世に削平・流失したものと思われる。弥生土器・土師器・須恵器のほかに、分銅形土製品2・磨製石斧などもある。

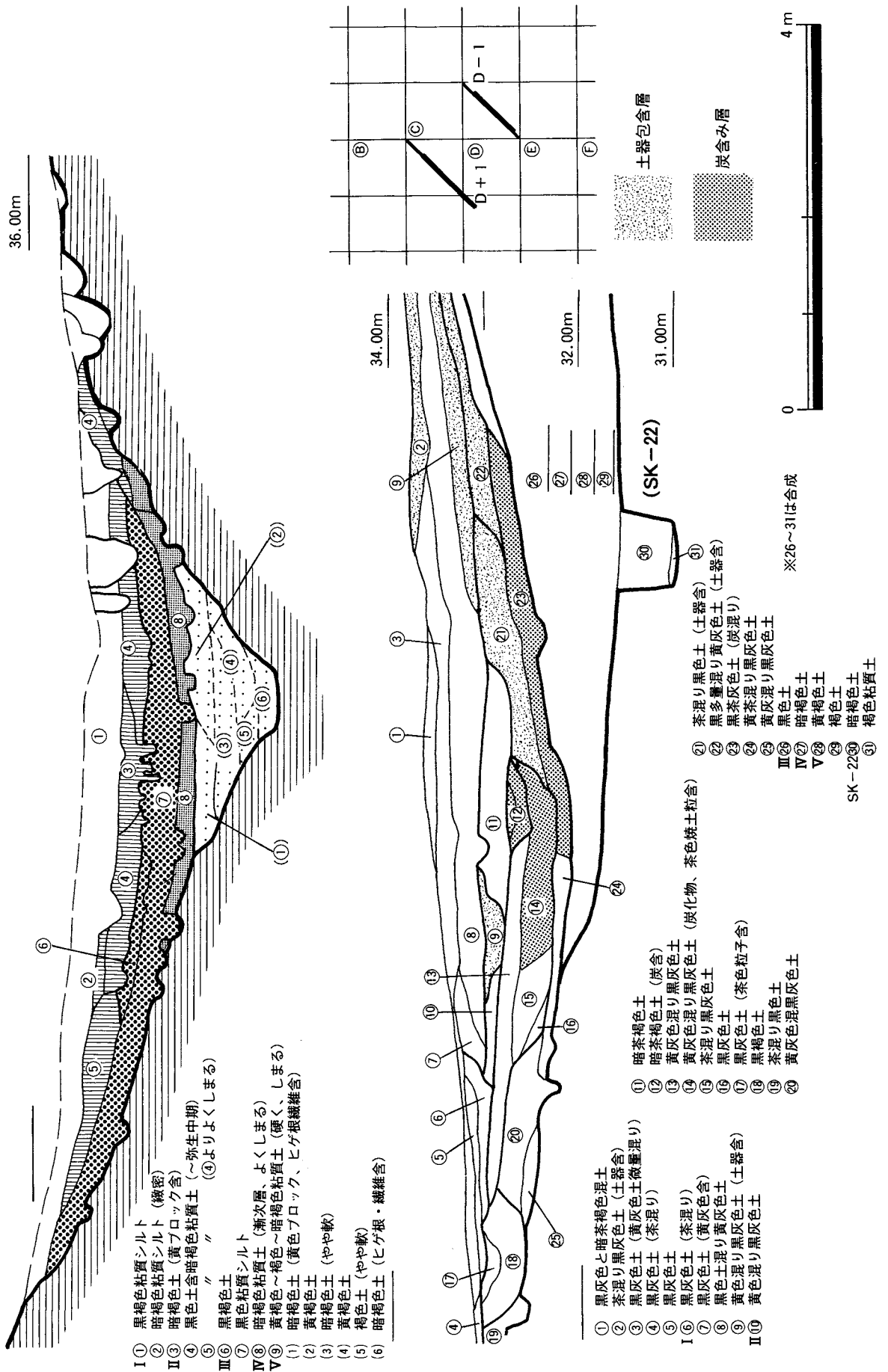
3期 古墳時代後期前半。集落が途絶えた後に北西の尾根部に古墳が築かれる。1基を検出したのみであるが小古墳群を形成していたものと思われる。埴輪と須恵器壺・蓋坏が出土した。陶器MT15～TK10併行である。

4期 古墳時代末～奈良時代。掘立柱建物跡2・段状遺構1を検出した。須恵器・土師器があるが少量でもある。段状遺構から赤色塗皿が出土した。中心は奈良時代と思われる。鉄滓・鉄製品もこの時期のものと思われる。

5期 近世・近代。明治時代に合祀廃絶された村社跡である。社殿地の平坦面と参道・階段地形・石積・鳥居等を検出した。石積遺構や焼土跡の一部は神社に伴うものと思われる。カワラケ・陶器製灯明皿・唐津・伊万里焼などが出土した。



挿図25 山田遺跡2区遺構分布図



補図26 山田遺跡2区土層図

竪穴住居跡

21棟分を確認した。円形、隅丸方形、方形の各形態がある。多角形は1棟のみである。傾斜による流失が著しく完在するものは少ない。規模は径（一辺）3.8～6.2mで、円形は6m大、隅丸方形は5m大、方形は4.5m～6m大にまとまる。青木Ⅲ～Ⅳに該当し、弥生時代後期後半から古墳時代後期初頭のものである。時期により立地に偏りが見られる。

S I 01（挿図27、図版31） 小谷に面する北向きの緩傾斜地に立地し、下方の北東側の壁面は流出している。平面形は胴張りの隅丸方形でほぼ完存する。壁肩4.6×4.6m、床面4.2m×3.9m、床面積17㎡を測る。床面標高30.75m。ピットは7個を検出。主柱穴はP 2～4・6の4個と思われ、柱間隔はP 2から右回りに2.25、2.3、2.35、2.3cmを測る。P 4底には20cm角の根固め石が入る。中央のP 5は方形を呈し、上縁90×80、底40×30、深さ20cm、断面逆台形である。炉跡と思われ、内部には炭混りの土が入り、周囲には炭混りの砂質土が固く締まりやや盛上がる。また、南東部のP 2－P 6間には焼土跡が認められ、北側コーナーの周溝および床面では15cm大の楕円形の河原石を検出した。

遺物は少ない。甕底・高坏各1が出土した。青木Ⅲに該当し、弥生時代後期後半である。

S I 02（挿図28・29、図版31） 丘陵の北側尾根上に位置する。平面形は隅丸方形で、完存する。壁肩5.65×5.7m、床面5.1×5.1m、床面積29㎡を測る。主柱穴は4個（P 1～4）で、柱間隔はP 1から右回りに2.75、3.0、2.8、2.9cm。中央に特殊ピットP 5を持つ。P 5内部と周囲2～3mに炭の堆積が見られた。

遺物が多く、床面及び埋土中から土師器壺・甕・高坏・器台等が出土した。青木Ⅴ・Ⅵ～Ⅶに該当し、古墳時代前期後半である。

S I 03（挿図30、図版31） 丘陵の北側尾根の東側肩部に位置し、S I 21に重複し、S I 02に近接する。当初P 1～P 11も含めて一つの住居跡としていたが、S I 21を摘出し別個のものの重複と考えた。傾斜面のため東側下半を欠くが、5m規模の胴張り隅丸方形ないしは五角形の住居跡と思われる。柱穴としてP 12・13・15が考えられ、隅丸方形ではP 12－15、五角形ではP 12－13－15が該当すると考えられる。床面積標高37.7m。

床面近くで砥石、埋土内で弥生後期土器片を検出した。弥生後期後半期のものとする。

S I 04・06（挿図31・図版34） 谷奥の傾斜面肩部に幅15m、奥行4～5mの平坦面（S S 02）が形成され、内部にL字状とコの字状の溝が巡り、ピット34個、焼土坑1を検出した。テラスは南東方向に面し、南西－北東方向に長い。東側をS I 04、西側をS I 06とした。一辺5m程度の方形住居跡と思われるが、全容は不明である。後世の掘立柱建物（S B 01・02）との重複があると考えられ、焼土坑は掘立柱建物に伴うものと思われる。柱穴の特定は出来兼ねた。

青木Ⅴ・Ⅵ～Ⅶ期の土器が出土しており、古墳時代前期～中期初頭と思われる。

S I 05 (挿図33・図版32)

小谷に面した南側斜面中腹に位置し、高低差1m内外に同規模のS I 10、S I 11が近接して並ぶ。床面標高34.3m。下方2/3を流失するが、山側に幅20cm、深さ5cmの側溝がコの字状に残る。壁肩4.5m、床面4.3m規模の方形住居跡と思われる。奥壁中央に径60~70cm、深さ40cmの挿鉢状ピットP 3を設ける。柱穴は中央寄りに並ぶP 1とP 2の2本柱が考えられるがはっきりしない。

床面に近い埋土中より、土師器甕・須恵器(蓋・無蓋高坏)等を検出した。

形態・遺物より古墳時代中期後半~後期初頭期と考えられる。

S I 07・08 (挿図34~36、図版32) 南側尾根の中腹に位置し、S I 09に隣接する。後世神社敷地にもなっており、上層はかなりの攪乱を受けていた。S I 07は傾斜地のため東半を消失するが、一辺5.8m、床面積33.6m²の方形住居跡と思われる。支柱穴はP 5~7、9の4個と思われる。S I 08は07に重複して存在するが、僅かに側溝状に認められるのみであり住居跡であるか否かは不明である。08は07に先行する。

遺物はS I 07の南西側と南側の壁寄りに集中した。土師器の甕・高坏・小型丸底壺がある。青木Ⅷに該当し、古墳時代中期前半期と考えられる。

S I 09 (挿図37) S I 07の南側に並行し、傾斜地と攪乱のため東半を消失する一辺4.5m、床面積20m²の方形住居跡と思われる。4個のピットを検出したが支柱穴の特定は出来かねた。南から西側の壁寄りの埋土から土師器の甕・高坏を検出した。甕は単純口縁が主体である。

青木Ⅶ~Ⅷに該当し、古墳時代前期末~中期前葉と考えられる。

S I 10 (挿図38) S I 05、S I 11と共に小谷に面した南側斜面中腹に並ぶ。小規模な方形住居跡と思われ。尾根側にコの字状に側溝を残し、側辺3.8mを測る。

S I 11 (挿図38、図版32) 小谷に面した南側斜面中腹に位置し、S I 05とS I 10間に存在する。僅かに側溝を残すのみであるが、一辺4m程度の小規模な方形住居跡と思われる。埋土中より弥生後期の器台、古式土師器の高坏細片を検出した。直接の遺物はない。

S I 12 (挿図39、図版33) 北東に開く谷奥斜面に位置する。床面標高39.9mで、調査住居跡中最高位にある。北東側半分は流失しているが、一辺6.5mの隅丸方形と思われる。周囲に幅10~20cm、深さ8cmの側溝が巡る。支柱穴は特定し難いが中央のP 2・P 3の2個が考えられる。住居奥の南西壁際に50×50cm-深さ60cmの方形ピット(P 4)があり、平行する小溝に挟まれる。溝周辺とP 4内には炭の堆積が見られた。

壁際の床面に近い位置で古式土師器の甕を検出した。青木Ⅷに該当し、古墳時代中期前半期と考えられる。

S I 13 a・b (挿図40・41、図版30) 丘陵低位の尾根上に位置し、S I 14・S I 18・S I 16に隣接する。床面標高29.4m。径6.2mの円形住居である。東側を傾斜と神社参道で一部を失う。立替え拡張による重複が見られ、床の周囲に幅15～30cm、深さ8cmの側溝が半円状に巡り、また、北西の側溝から床面の内側に弧状の溝が延びる。内側の溝は幅25～30cm、深さ8cmを測る。内側をS I 13 a、外側をS I 13 bとした。支柱穴はS I 13 aのものとしてP 1・P 2・P 3・P 4の4個、S I 13 bはP 1とP 2を共有し、P 6・P 7とP 2-P 7間に1個を想定した。5本柱と考えられる。中央ピットP 5は円形で径75cm-深さ20cmを測る。浅く底に小さな窪みを持つ。新旧共有と考えられる。

北西側で弥生土師器の壺・甕・高坏・蓋を検出した。多くは第7層に集中し床面に付着するものは少ない。青木II期のものも混じるが主体は青木IIIである。

弥生時代後期前葉から中葉期のものと考えられる。

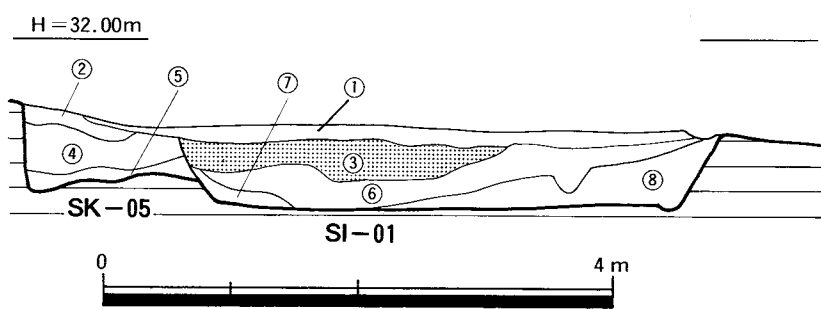
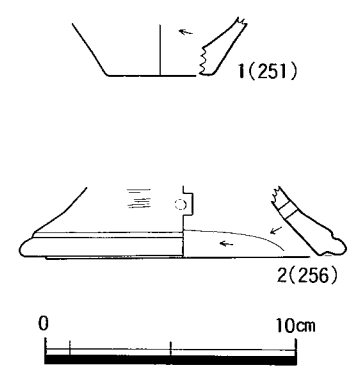
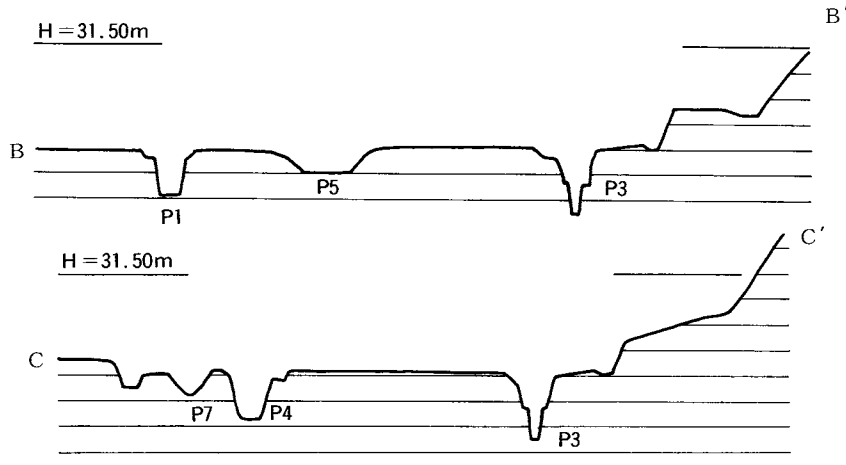
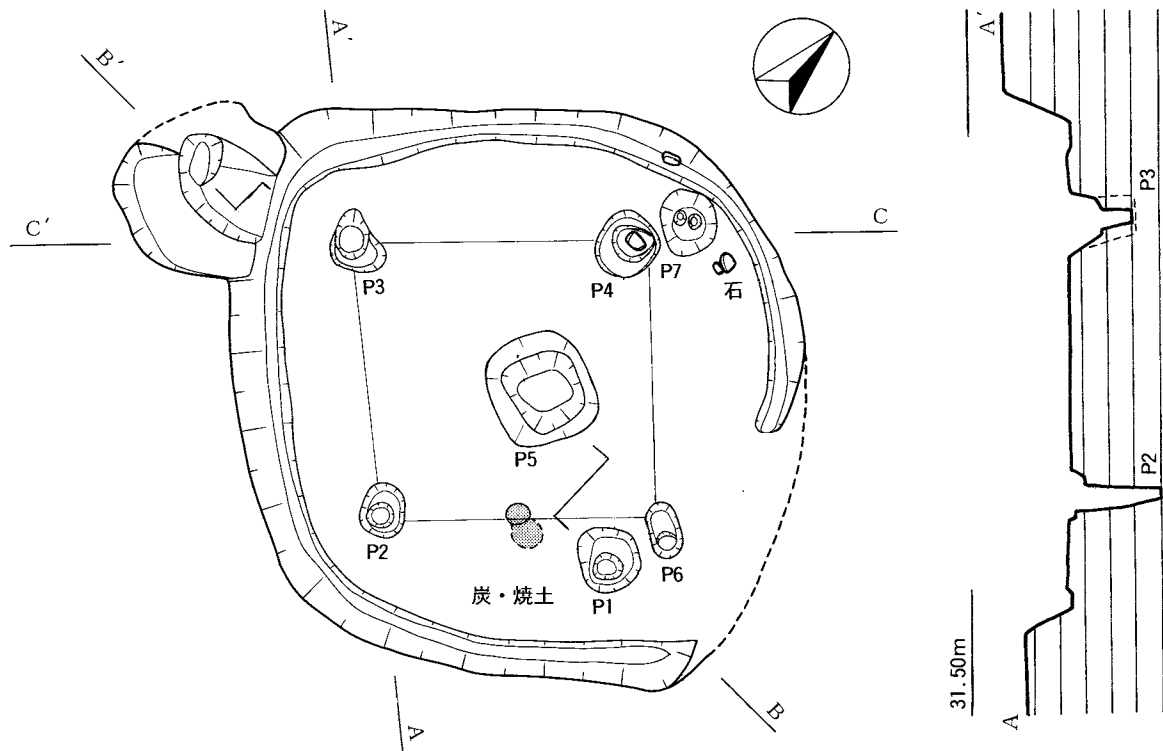
S I 14 (挿図42、図版30) S I 13の南に隣接する。床面標高29.5m。地傾斜により東と南の一部を失うが、山側にL字状に壁面が残る。一辺5mの方形住居跡と思われ、主軸方向は南北方向である。床の周囲に幅15～30cm、深さ8cmの側溝が巡る。支柱穴はP 1～P 4の4個で、柱間隔は約2.5mで方形である。中央東寄りに径45×60cm-深さ13cmの楕円形ピットP 5、北西コーナーに径45-深さ12cmの円形ピットP 8がある。遺物は土師器の甕・埴・甗片と須恵器坏身1がある。土師器は北西寄りの床面直上やP 8内であるが、坏身は浮いた位置からの出土である。

青木IXに該当し、古墳時代中期末～後期初頭と考えられる。

S I 15 (挿図43・44、図版33) 1区の谷部に近い丘陵裾の低位傾斜面に位置し、S D06・S D07に隣接する。S D08にも近い。主軸方向は北東-南西方向で、南東方向に向く。床面標高30.4m。地傾斜により南東半を失うが、山側にコの字状に壁面・側溝が巡る。一辺6mの方形住居跡と思われる(S I 15 a)。南西側にややずれて同様の溝があり建替えと思われる(S I 15 b)。15 bが古く、15 aが新しい。側溝は幅30～45cm、深さ8cm。北東寄りの位置から北東壁に平行する形で、幅30cm、深さ10cmのV字状の溝が間仕切状に延びる。住居内には10個以上のピットが検出されたが、支柱穴としては特定出来かねた。北西の床端中央のピットは径55cm-深さ30cm、内部に土師器片が入り込んでいた。

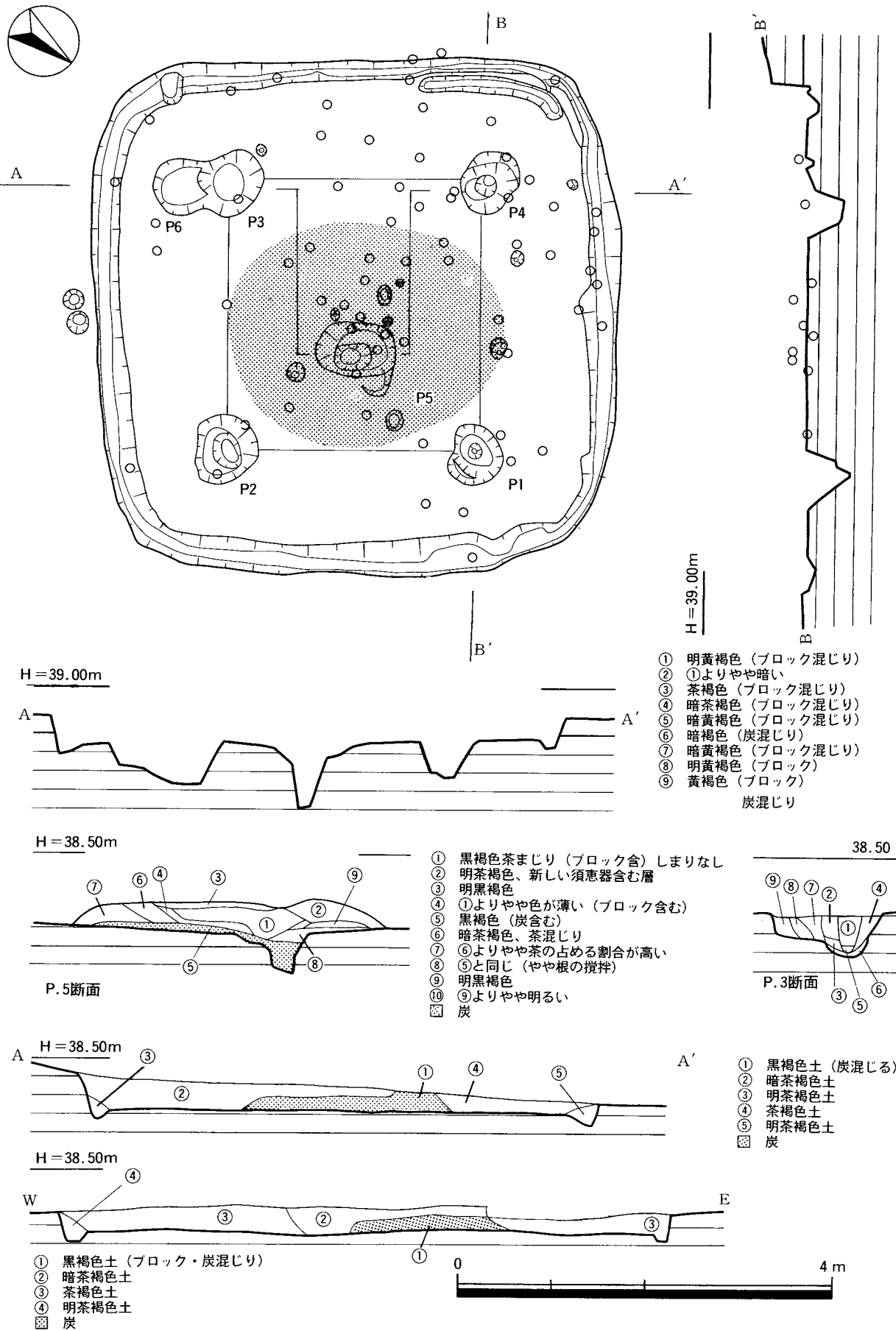
住居床面で土師器の甕・高坏(挿図44-5・8)、上面及び壁外で土師器の甕・高坏・埴・古式須恵器蓋坏が出土した。古式須恵器等はS D06・S D07に伴うものと考えられる。

床面土器は青木VIIIに該当し、古墳時代中期前半と考えられる。

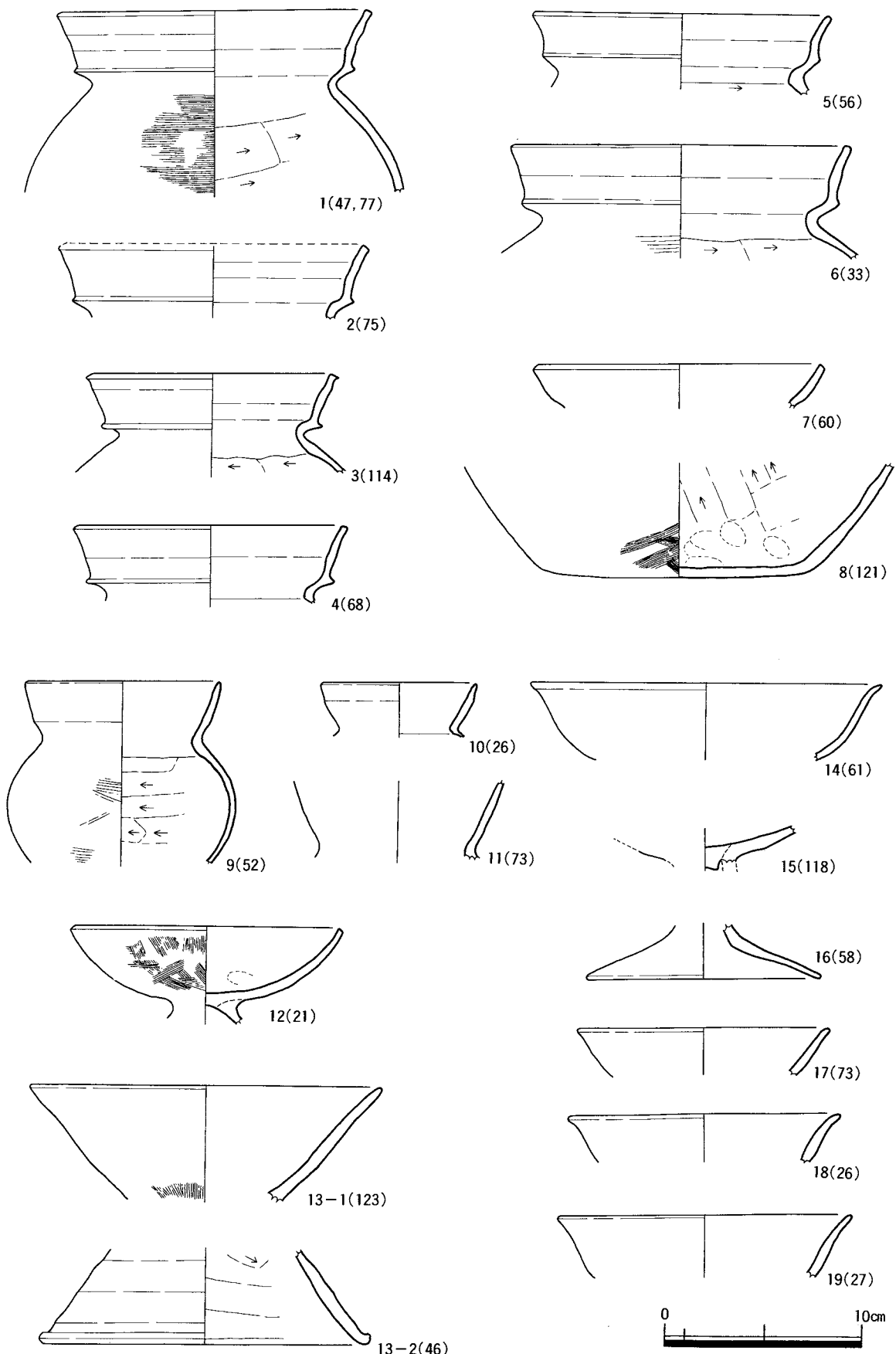


- ① 黄茶白色土 (灰色まじり) ややもろい
- ② 灰褐色土
- ③ No.1の④と同じでやや黒色強い、炭あり
- ④ 黒褐色土
- ⑤ 黄白色土 (粘質)
- ⑥ 黒茶褐色土
- ⑦ No.1①と同じ
- ⑧ ⑦よりやや黒色強い
- 炭

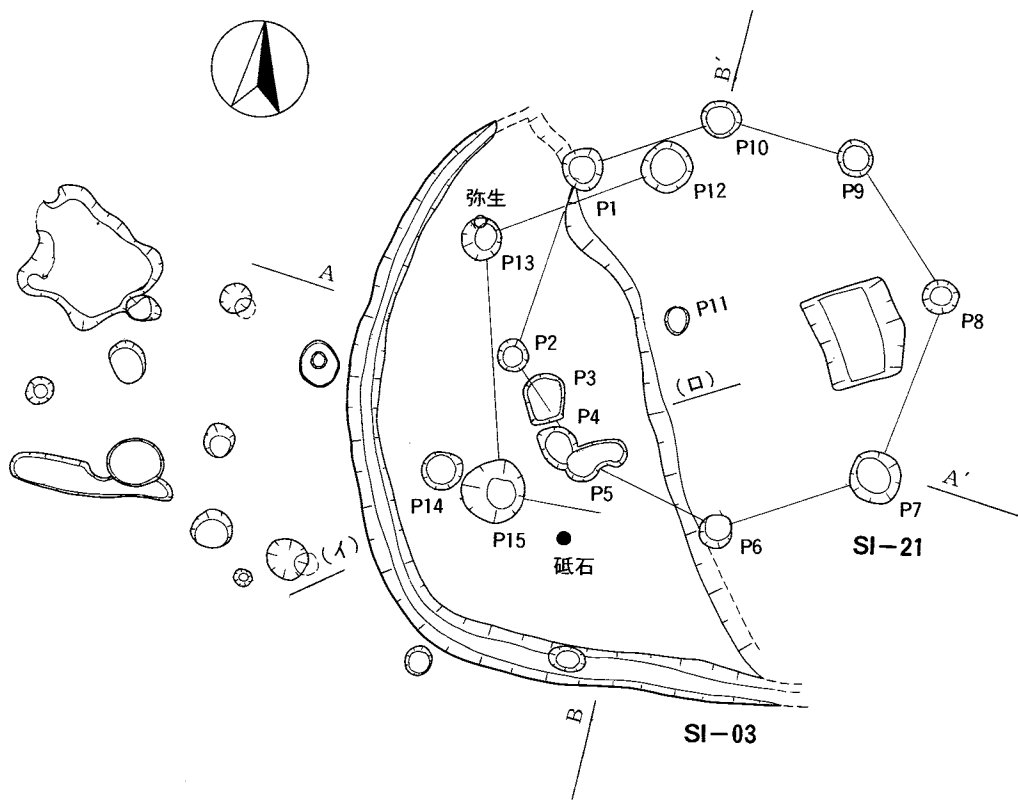
挿図27 山田遺跡2区第1号住居跡遺構遺物



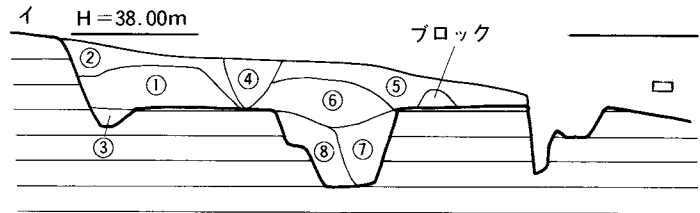
挿図28 山田遺跡2区第2号住居跡



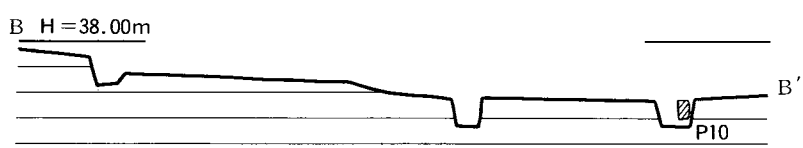
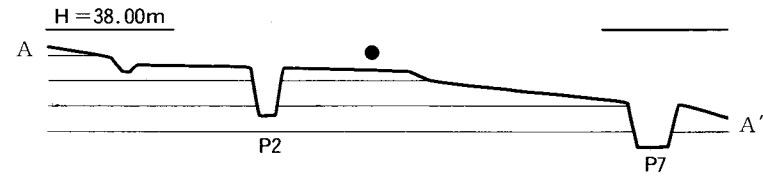
挿図29 山田遺跡2区第2号住居跡遺物



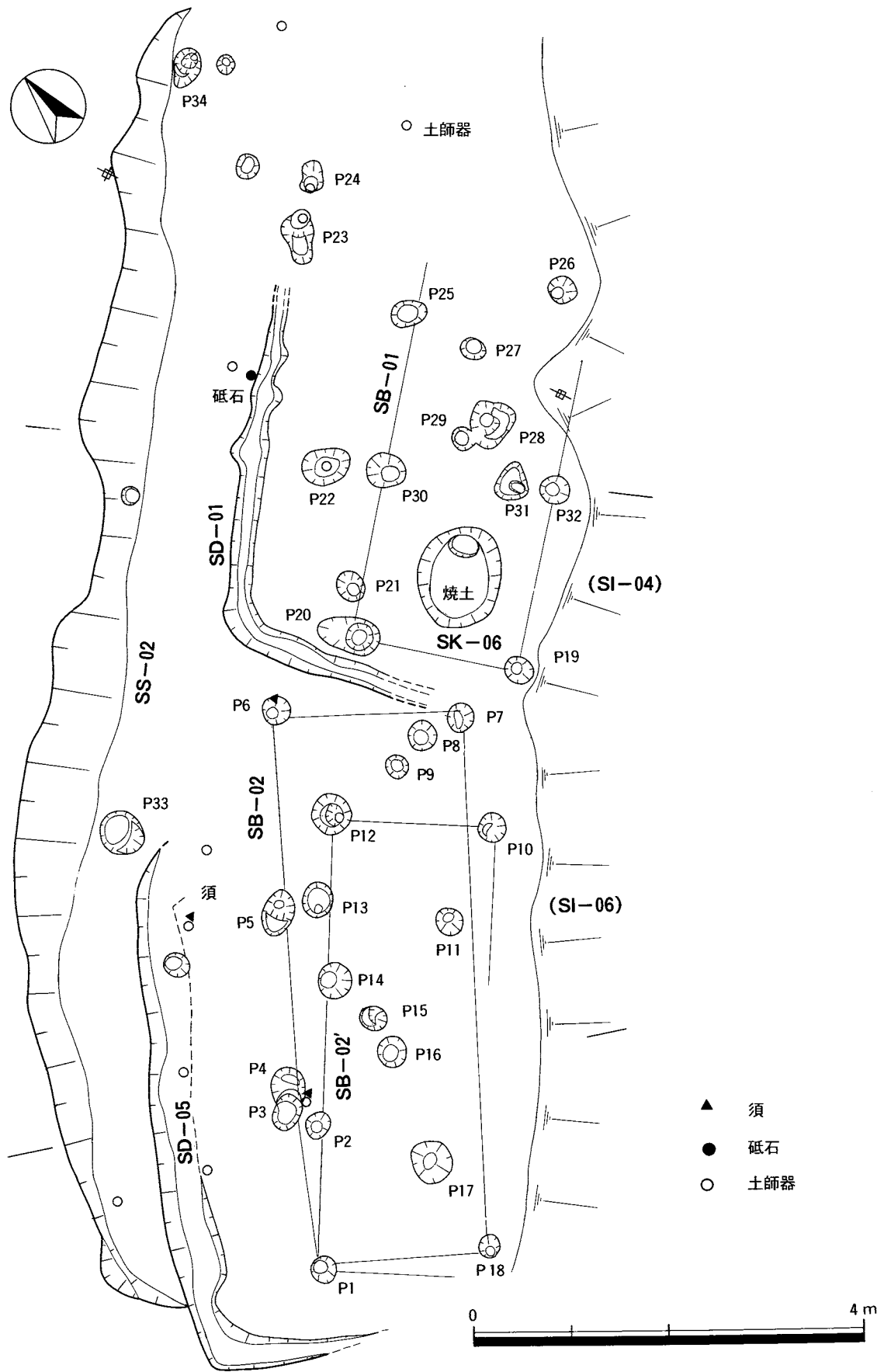
- ① 暗黄褐色 (ブロック)
- ② 茶褐色
- ③ 明黄褐色
- ④ 暗茶褐色
- ⑤ ②よりやや暗い
- ⑥ ①よりやや暗い (ブロック)
- ⑦ 明赤茶褐色
- ⑧ ⑦より少し明るい



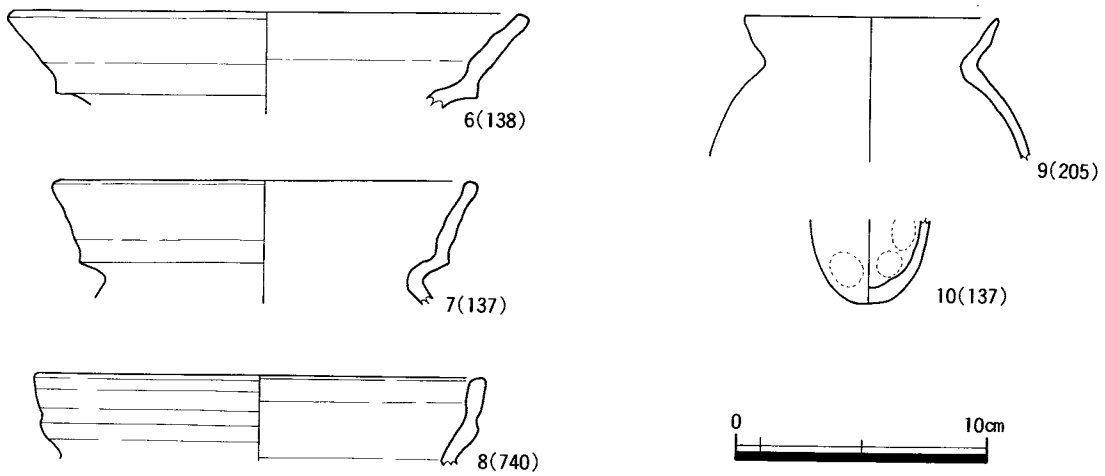
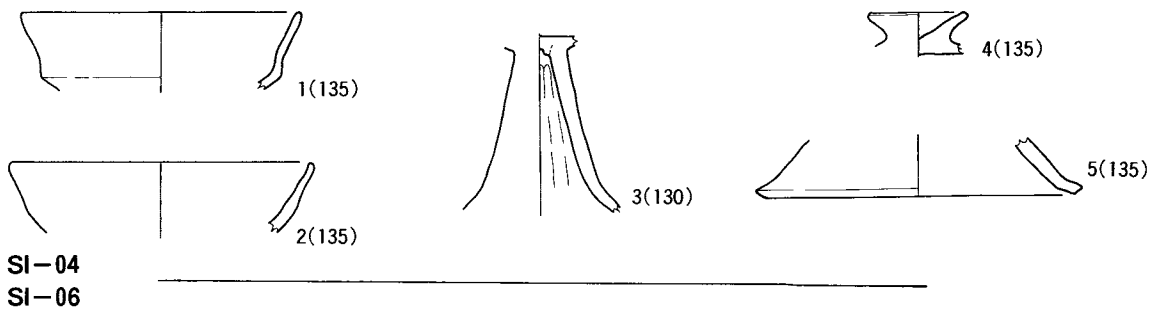
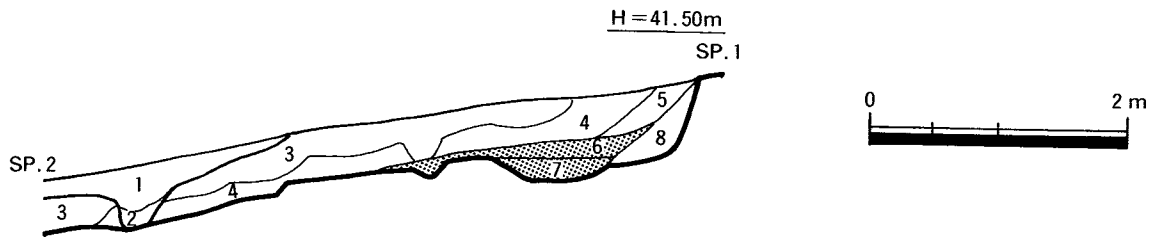
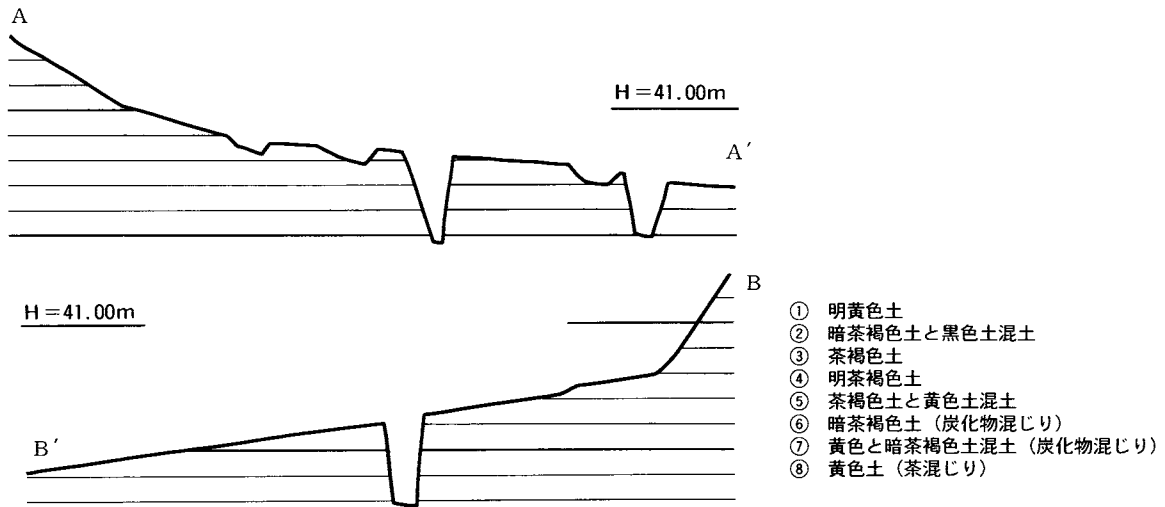
(S=1:40)



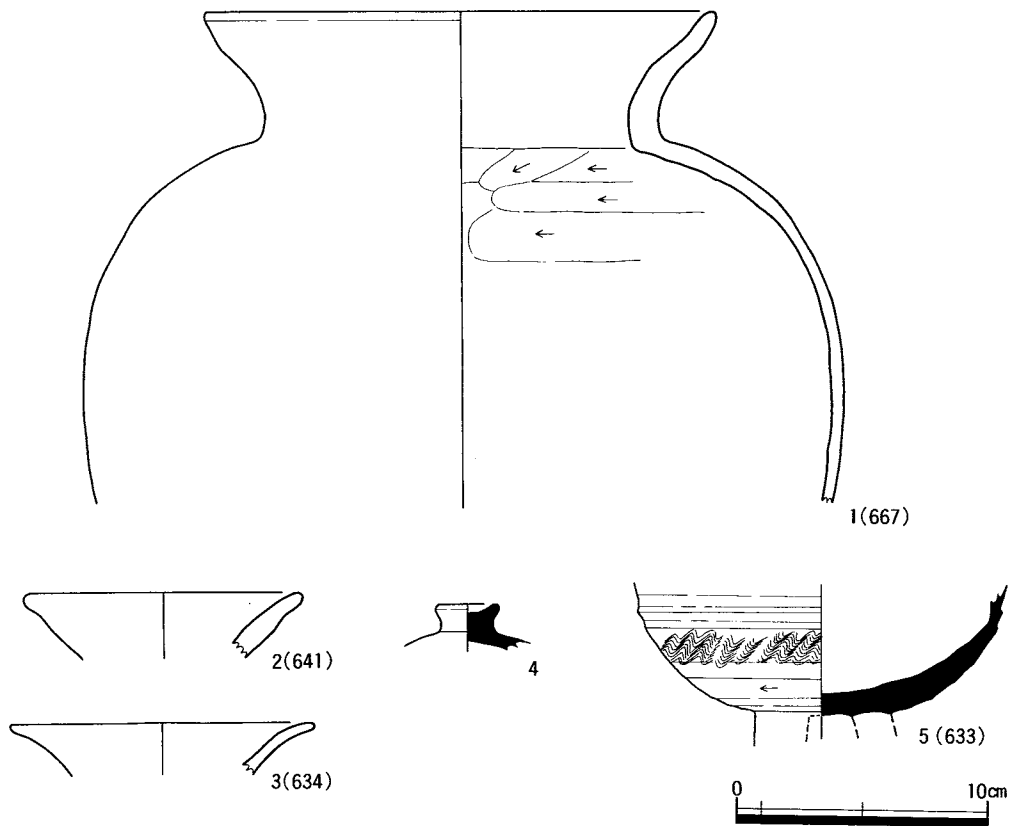
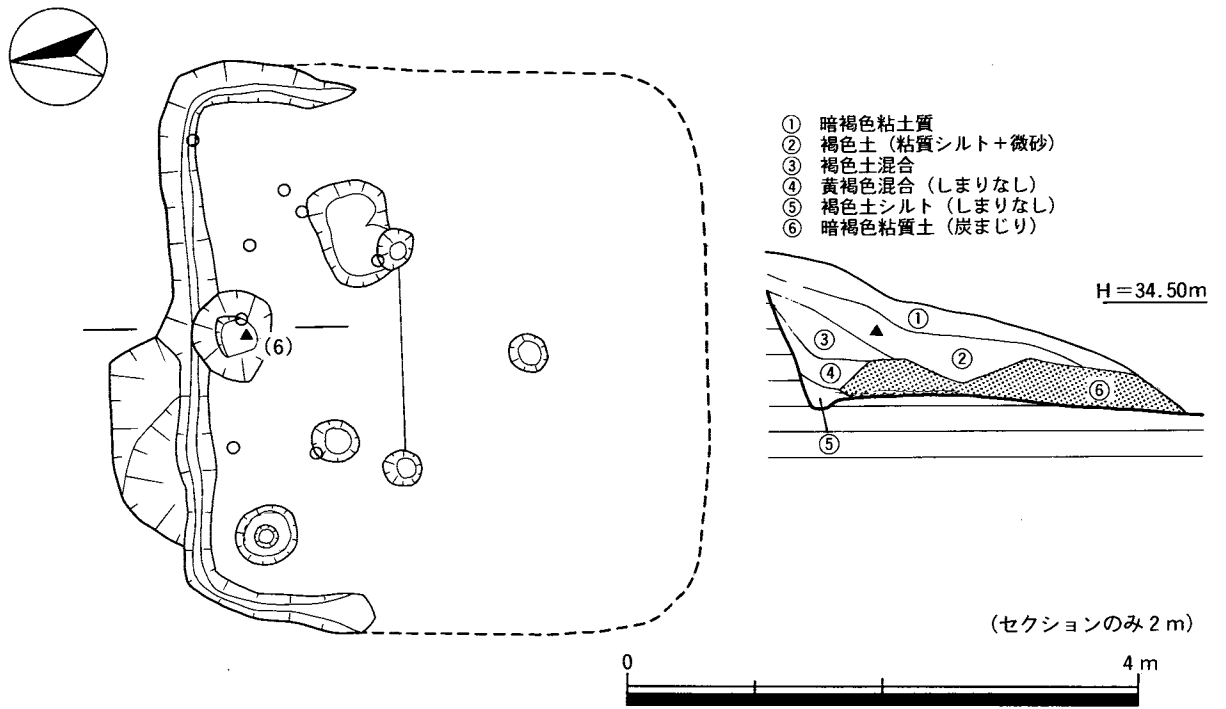
挿図30 山田遺跡2区第3号住居跡



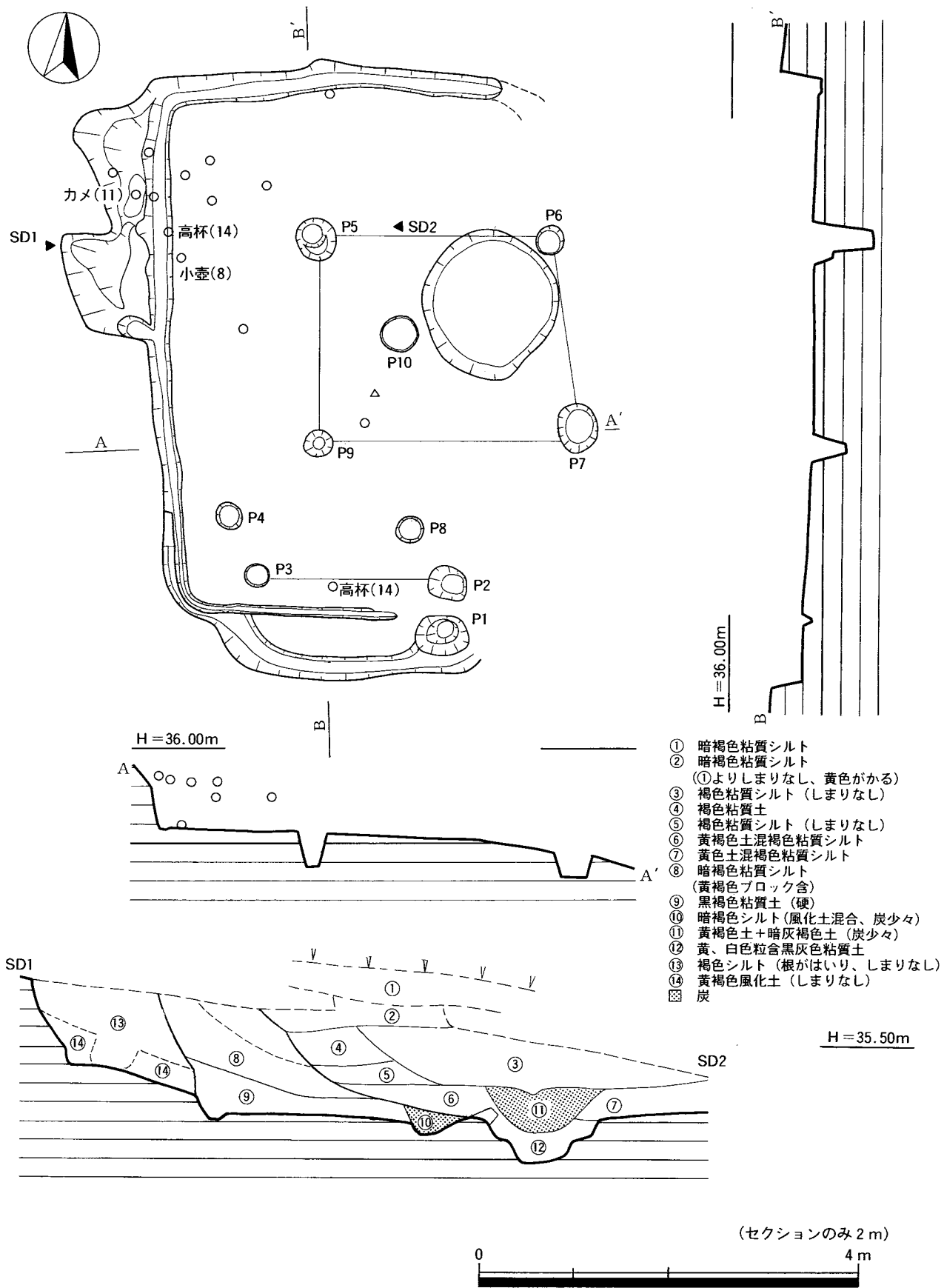
挿図31 山田遺跡 2区第4・6号住居跡 (第1・2号建物跡)



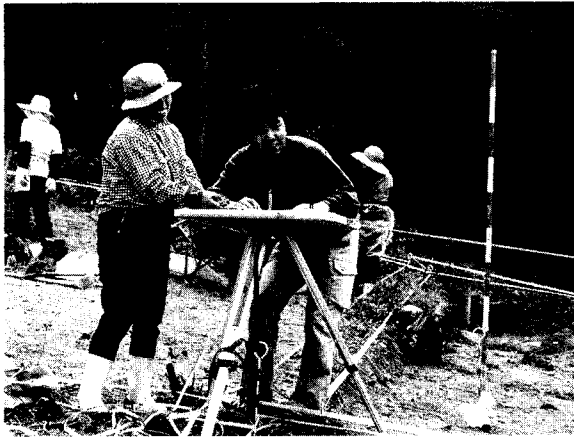
挿図32 山田遺跡2区第4・6号住居跡断面遺物



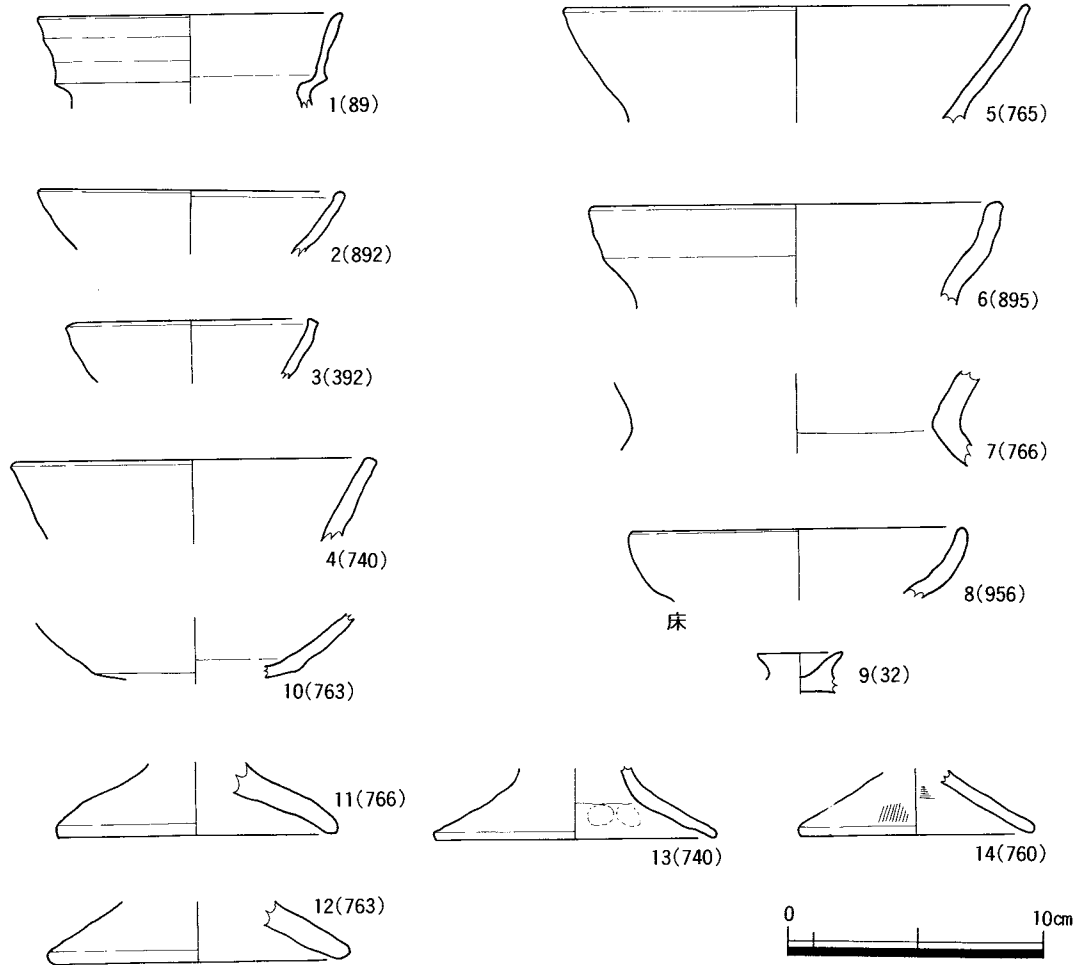
挿図33 山田遺跡 2区第5号住居跡遺構遺物



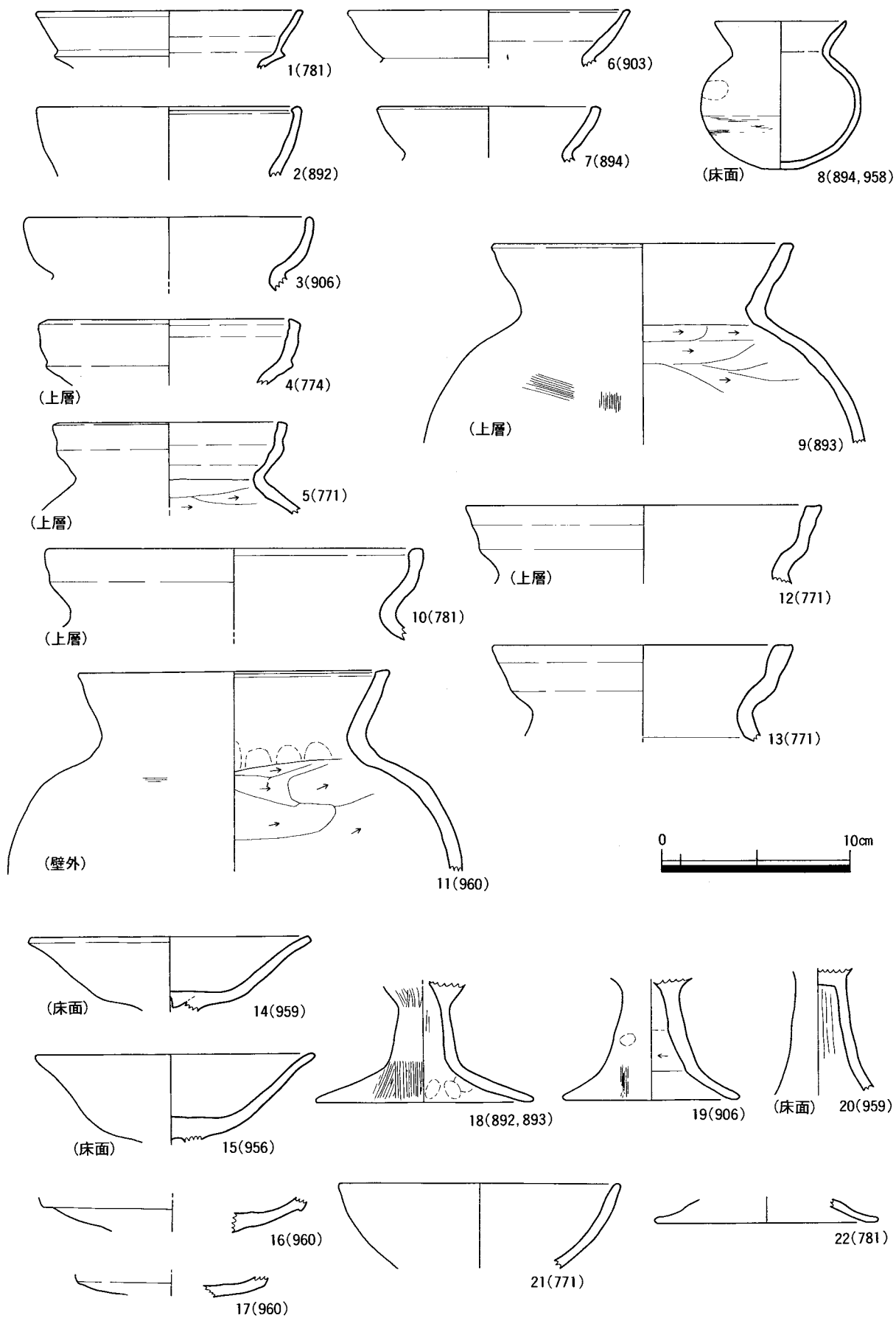
挿図34 山田遺跡 2区第7、8号住居跡



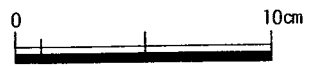
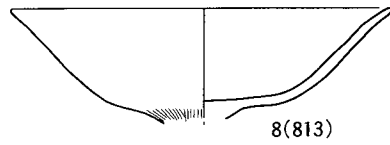
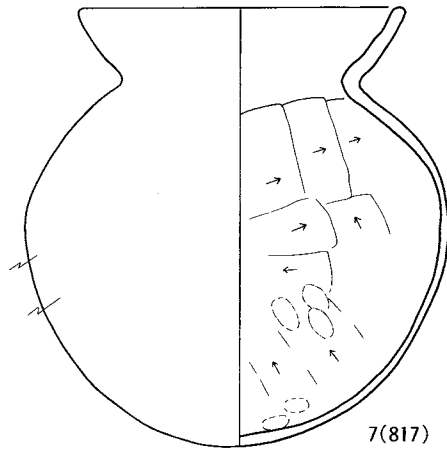
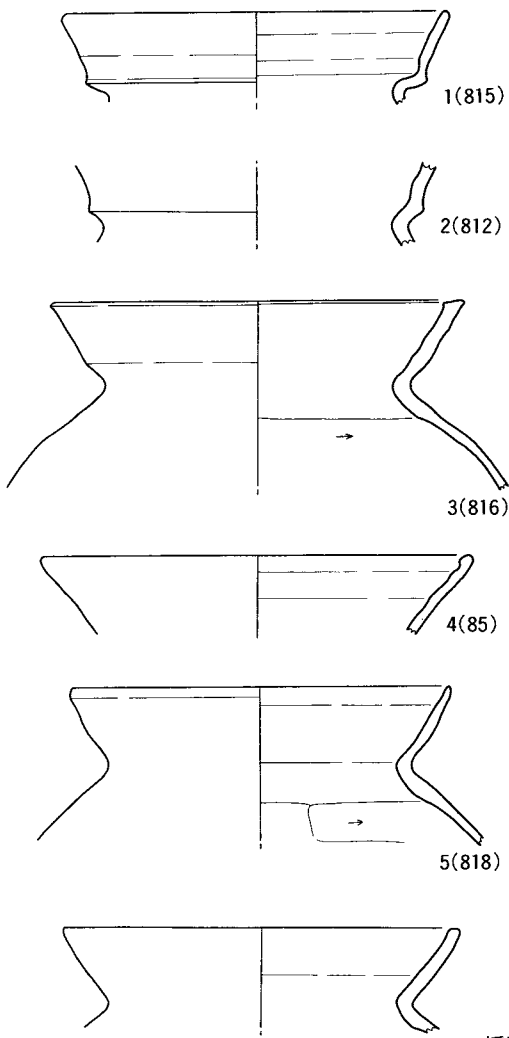
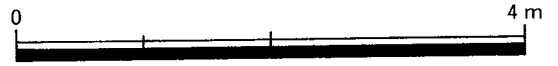
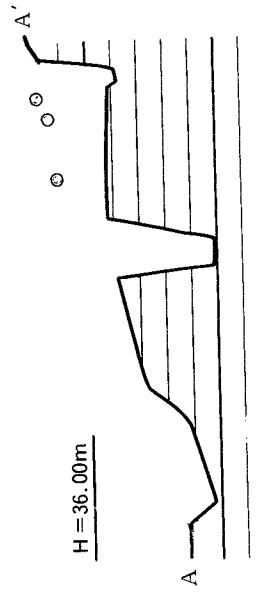
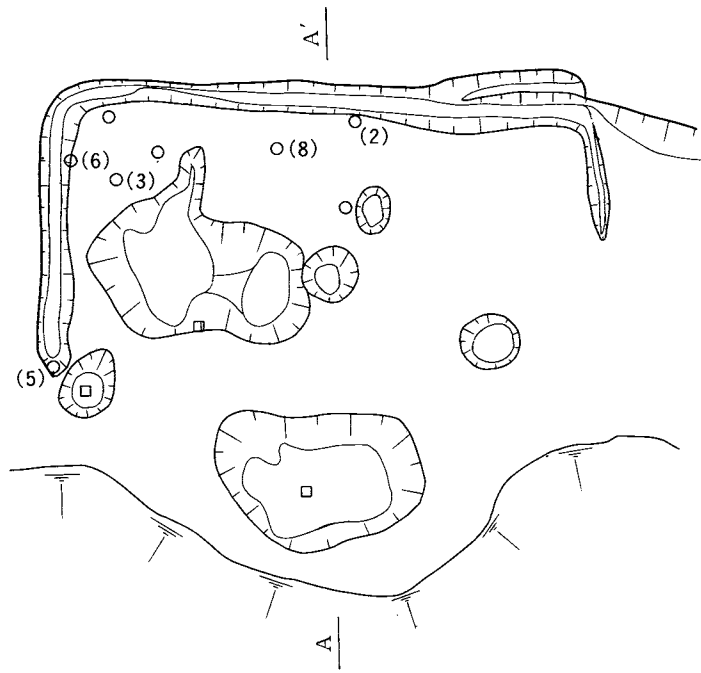
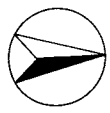
(調査風景)



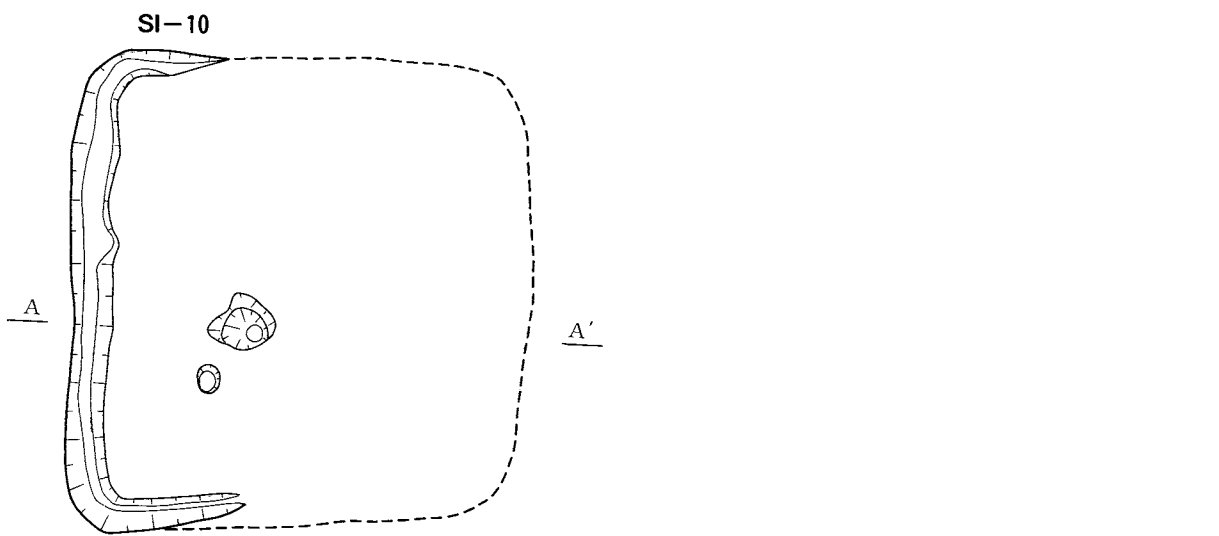
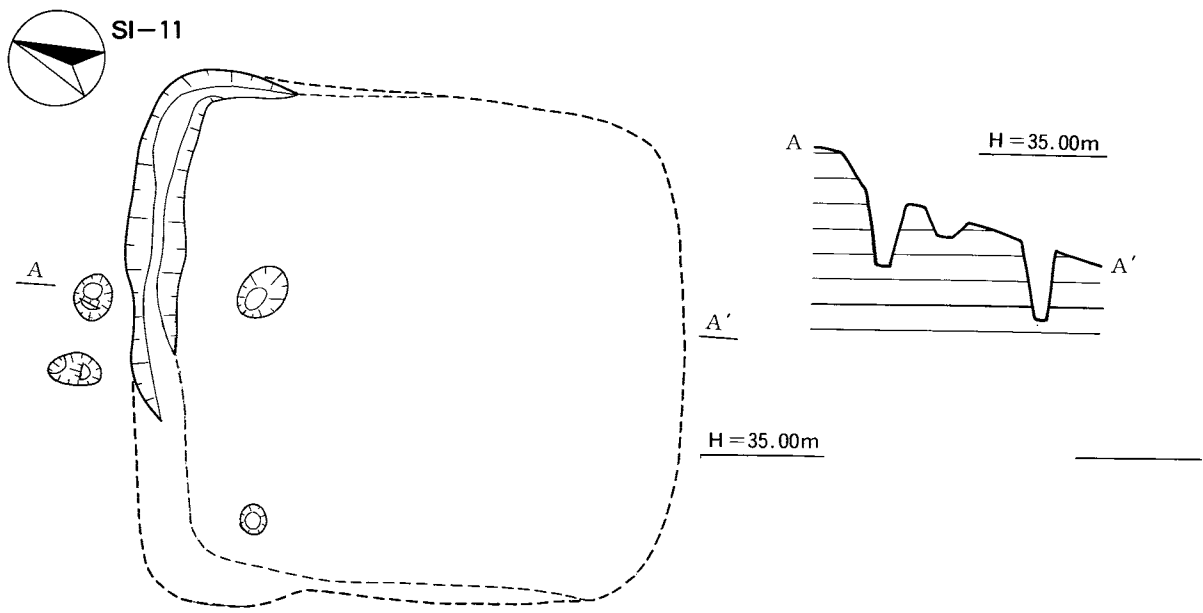
挿図35 山田遺跡 2区第7号住居跡遺物(1)



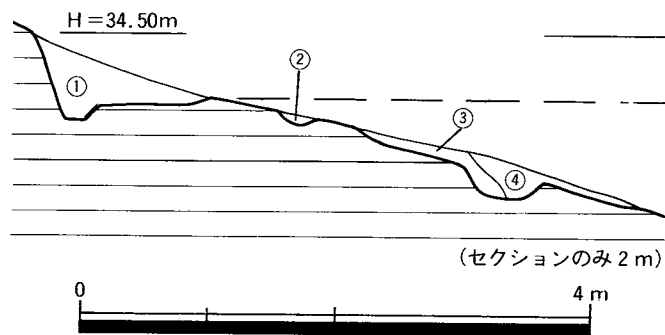
挿図36 山田遺跡 2区第7号住居跡遺物(2)



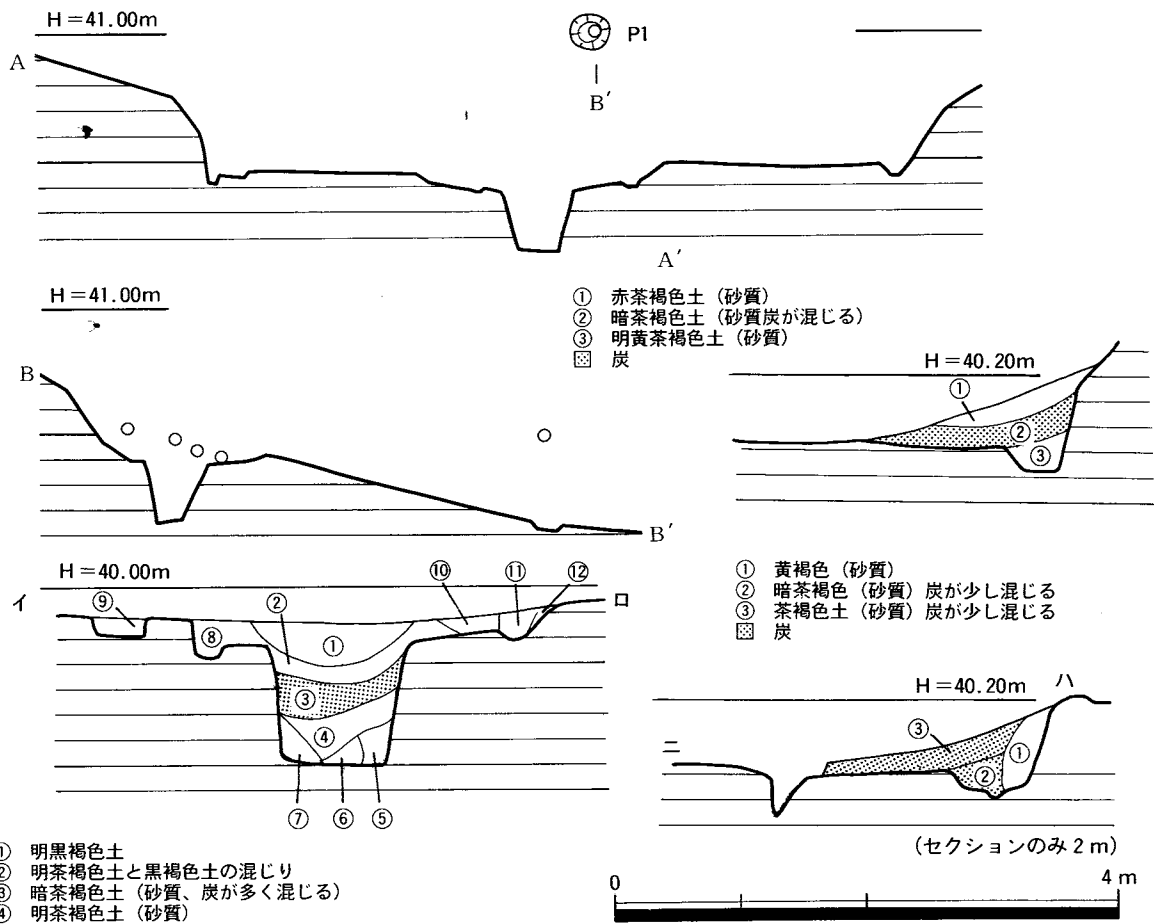
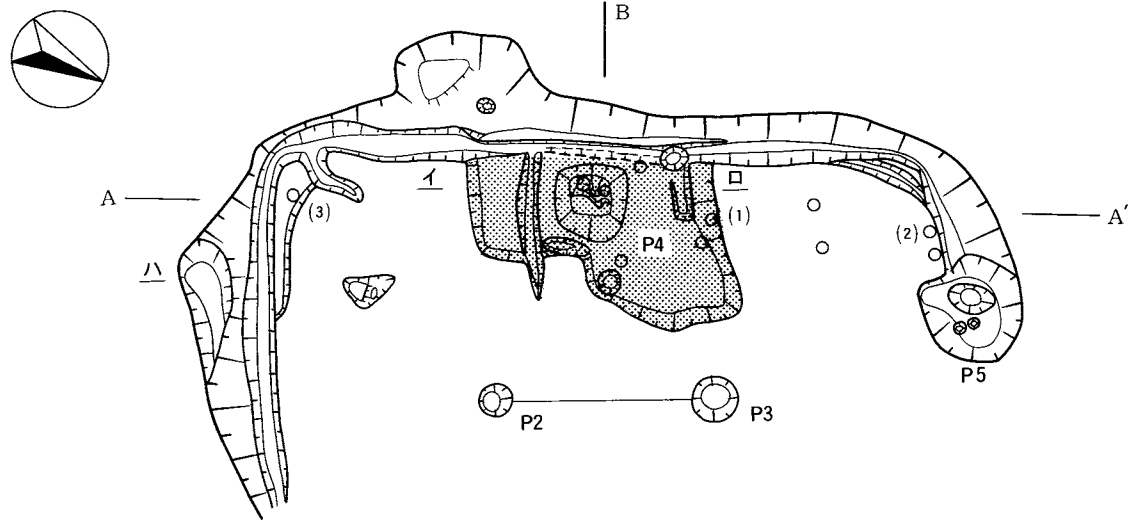
挿図37 山田遺跡2区第9号住居跡遺構遺物



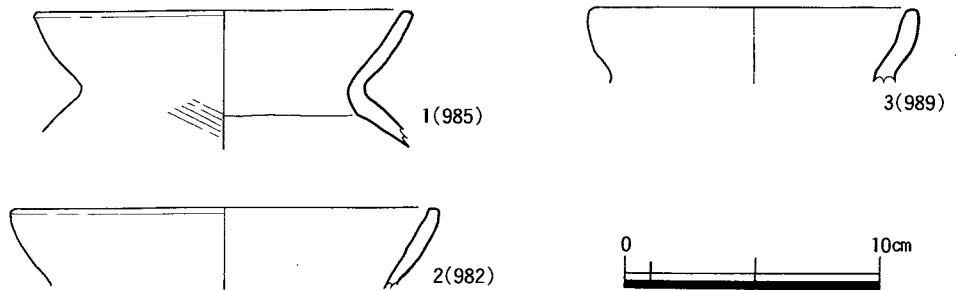
- ① 暗茶褐色土（しまり良し）
- ② 茶褐色土（粘質）
- ③ 黄褐色と茶褐色の混じり
- ④ 黒色と茶褐色の混じり



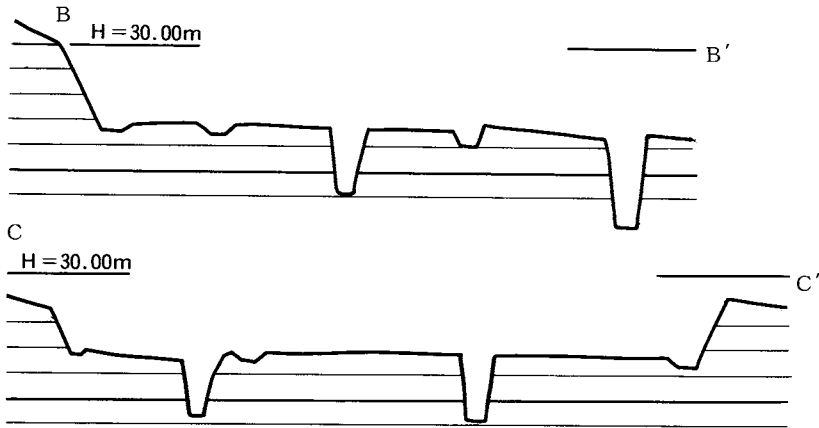
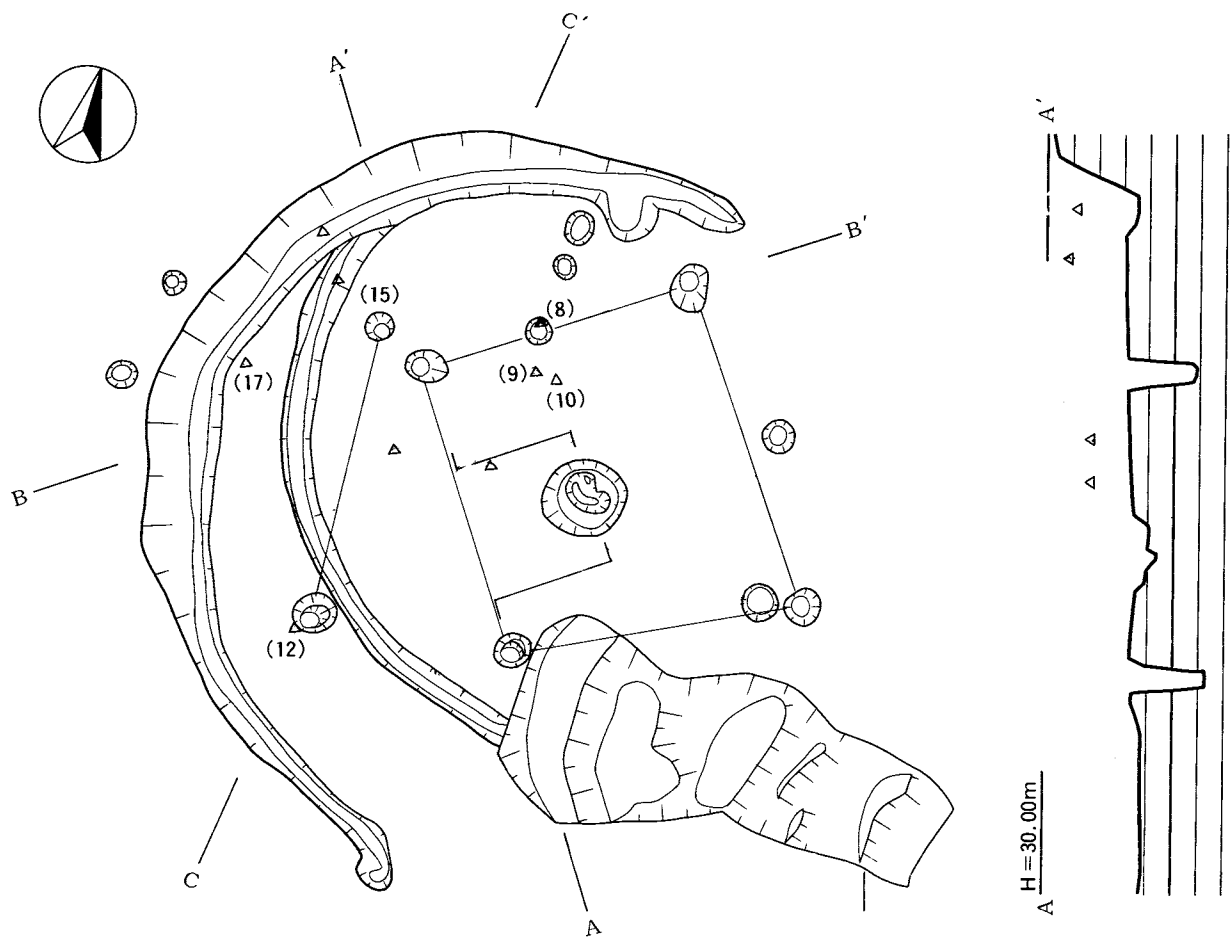
挿図38 山田遺跡 2区第10、11号住居跡遺構遺物



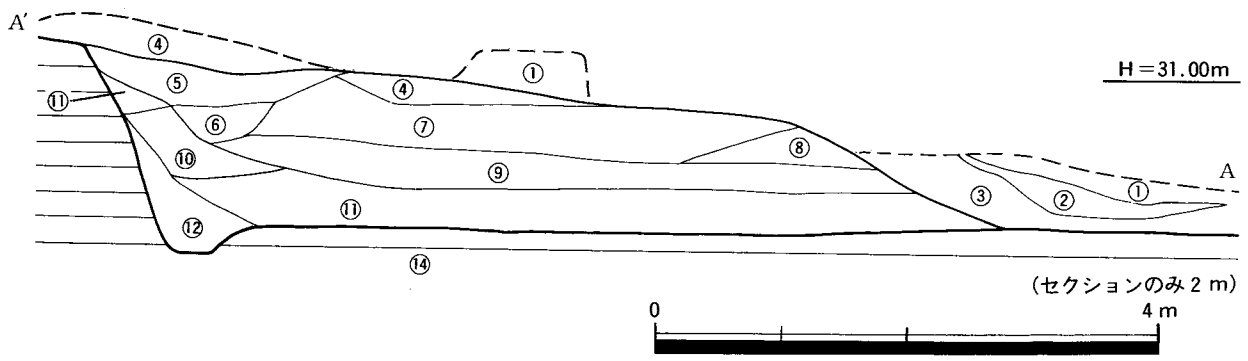
- ① 明黒褐色土
- ② 明茶褐色土と黒褐色土の混じり
- ③ 暗茶褐色土 (砂質、炭が多く混じる)
- ④ 明茶褐色土 (砂質)
- ⑤ 茶褐色土 (砂質)
- ⑥ 暗黄褐色土
- ⑦ 暗茶褐色土
- ⑧ 暗黄褐色土
- ⑨ } 黄褐色土 ⑫とほぼ同じ
- ⑩ } 暗黄褐色土
- ⑪ } 黄褐色土 ⑩とほぼ同じ
- ⑫ } 炭



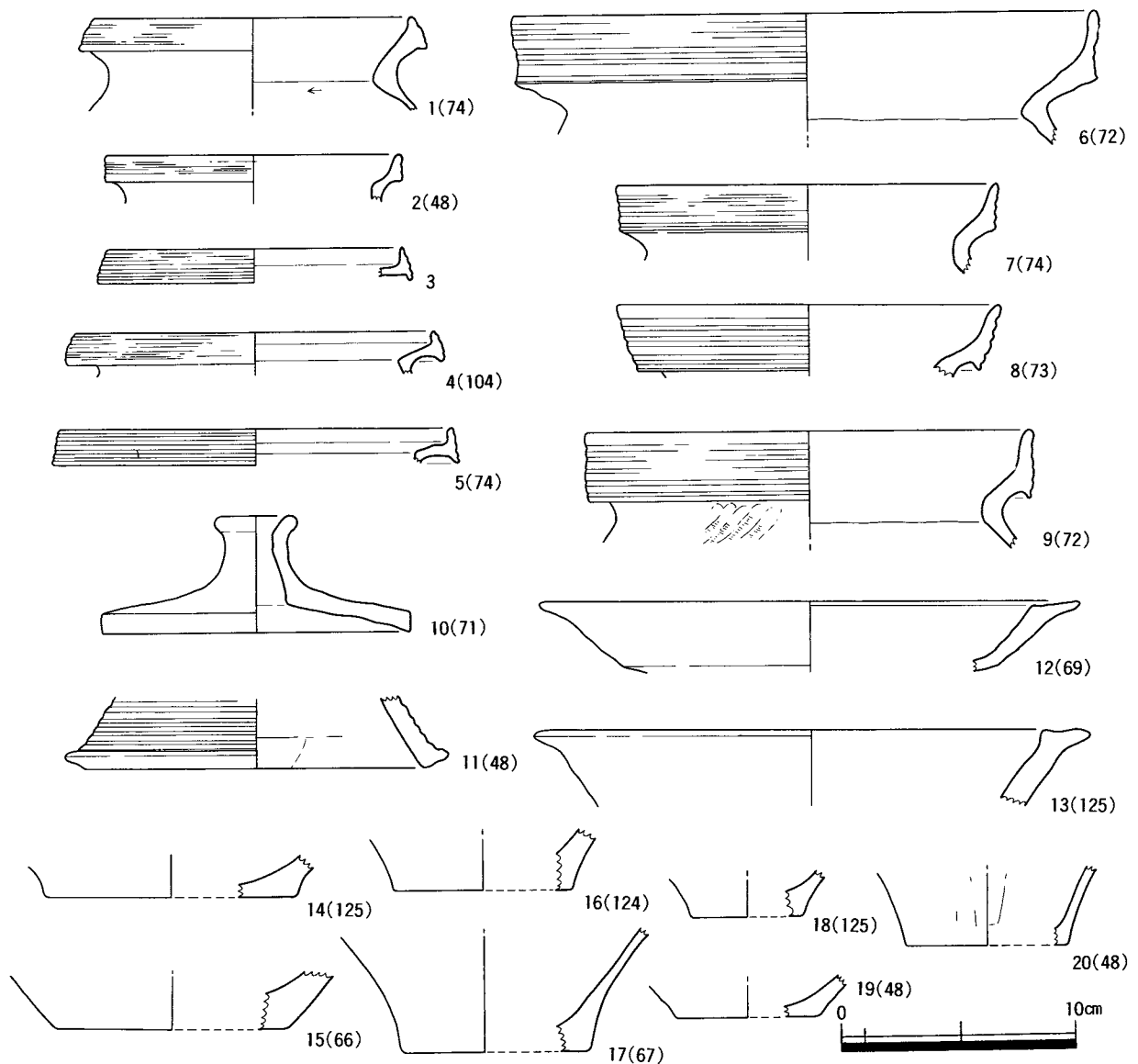
挿図39 山田遺跡 2区第12号住居跡遺構遺物



1. 現代盛土 (竹根)
2. 黒灰色 (炭堆積)
3. 褐色土 (しまりなし)
4. 暗褐色シルト
5. 炭混黒褐色土 (軟らかい)
6. 褐色土 (軟らかい)
7. 暗褐色粘質シルト
(土器片、白・黄褐色粒子含む、炭少々)
- 7' 褐色土 (遺物多し)
8. 褐色シルト (小粒子含む)
9. 暗褐色粘質シルト (白・黄褐色粒子含む
—7の粒子よりやや大)
10. 黒褐色土黄橙粒混じり
11. 黄~橙粒と黒褐色土の混合土
(粘質多くよくしまる)
12. 黄~橙粒と黒褐色土の混合土
(11より黄~橙粒大、多く含む)
13. 褐色シルト (旧表土)
14. 黄~橙粘質土 (硬い)

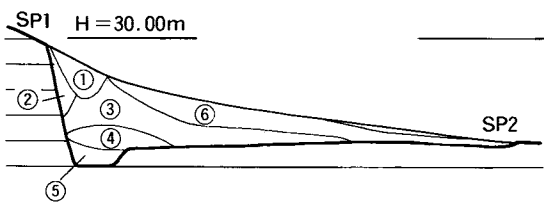
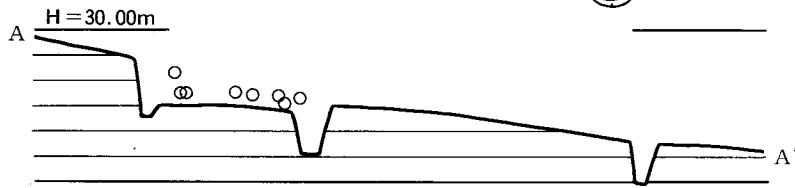
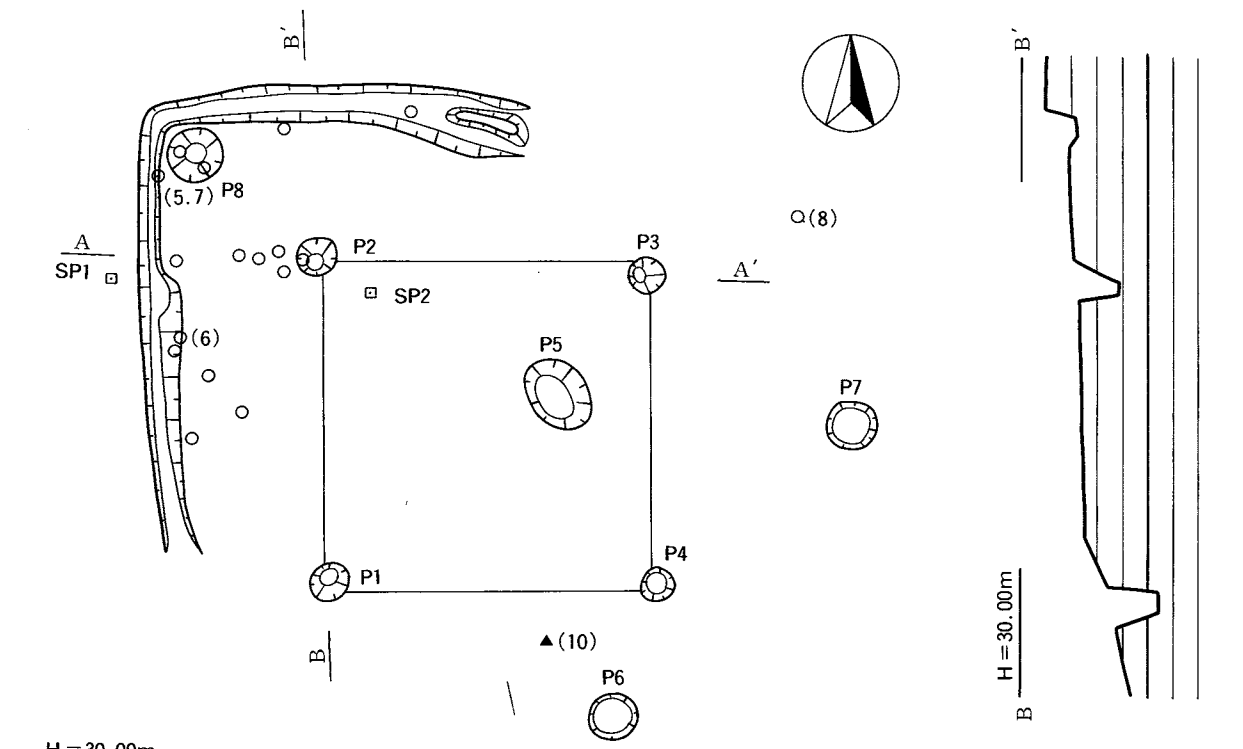


挿図40 山田遺跡 2区第13号住居跡

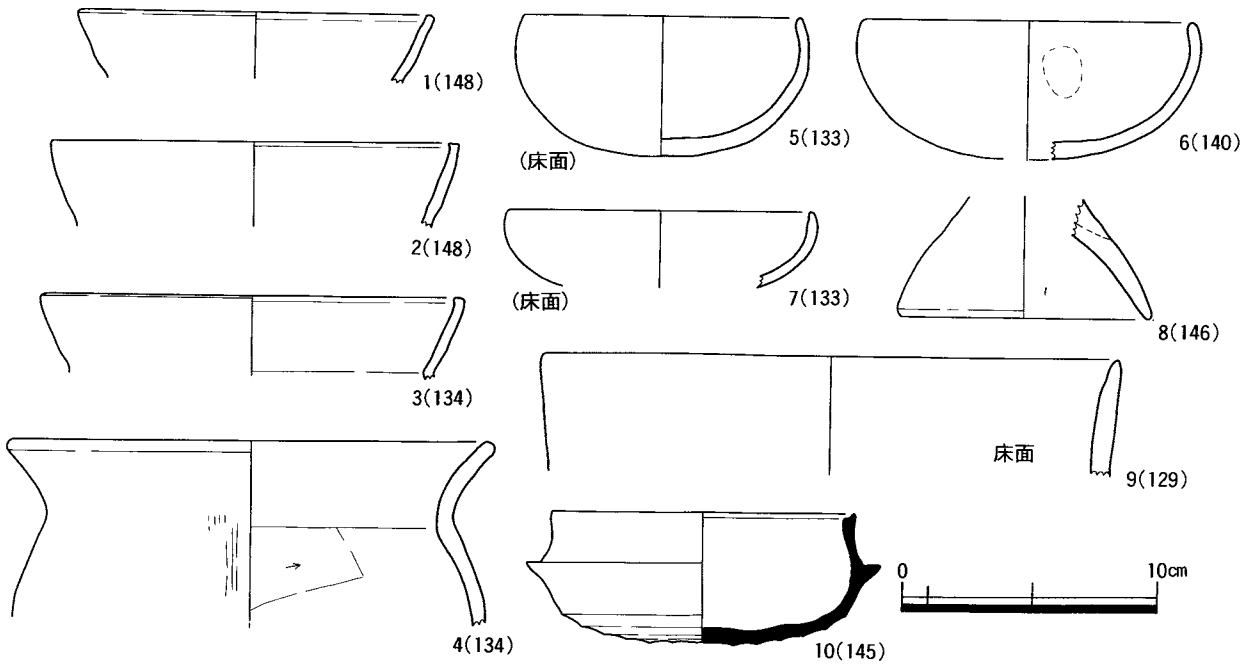


挿図41 山田遺跡 2区第13号住居跡遺物

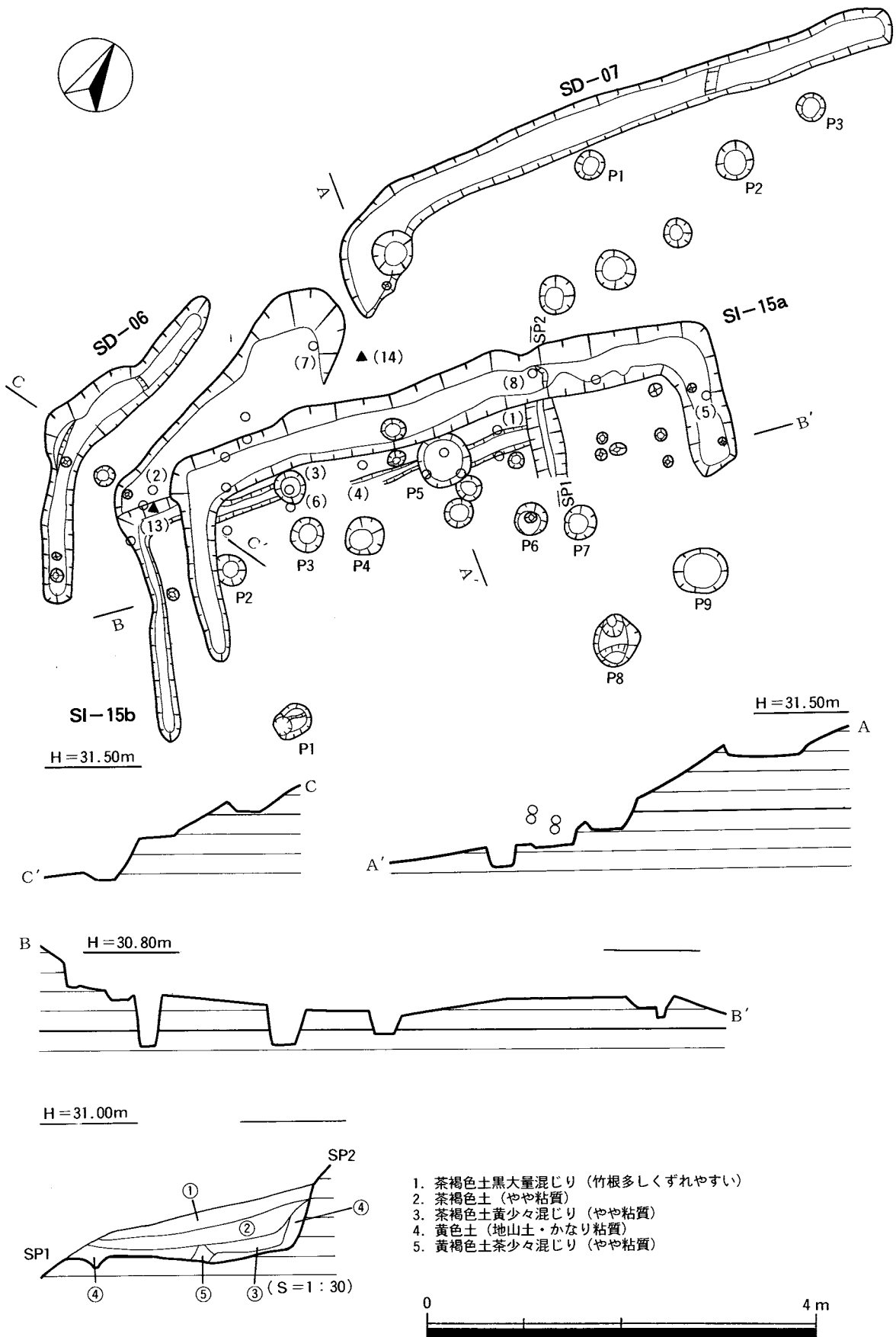




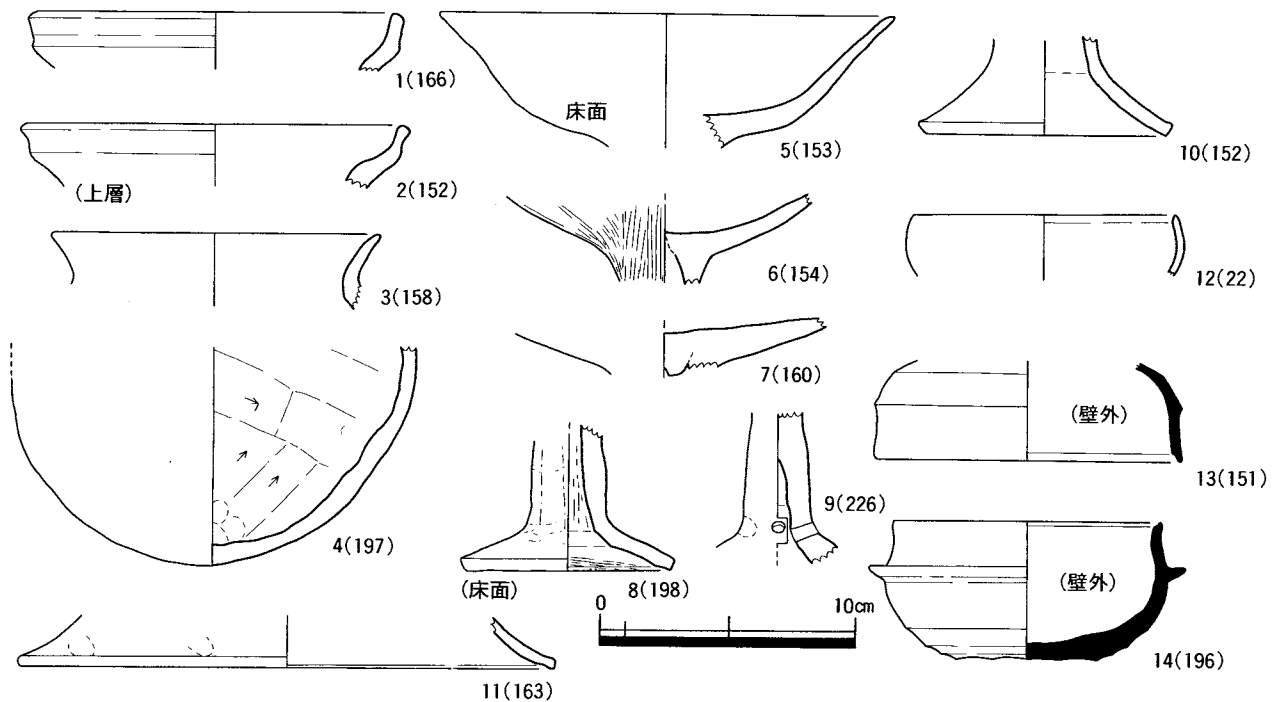
1. 茶褐色土砂質
2. 暗茶褐色土 (しまりよし)
3. 明黒褐色土 (ブロックを含む)
4. 2よりやや暗い暗茶褐色土
5. 暗黄褐色土 (ブロックを含む) 砂質
6. 黒褐色土砂質



挿図42 山田遺跡2区第14号住居跡遺構遺物



挿図43 山田遺跡2区第15号住居跡

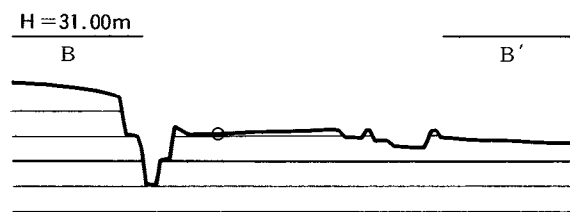
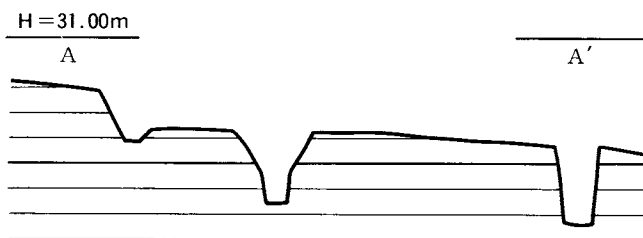
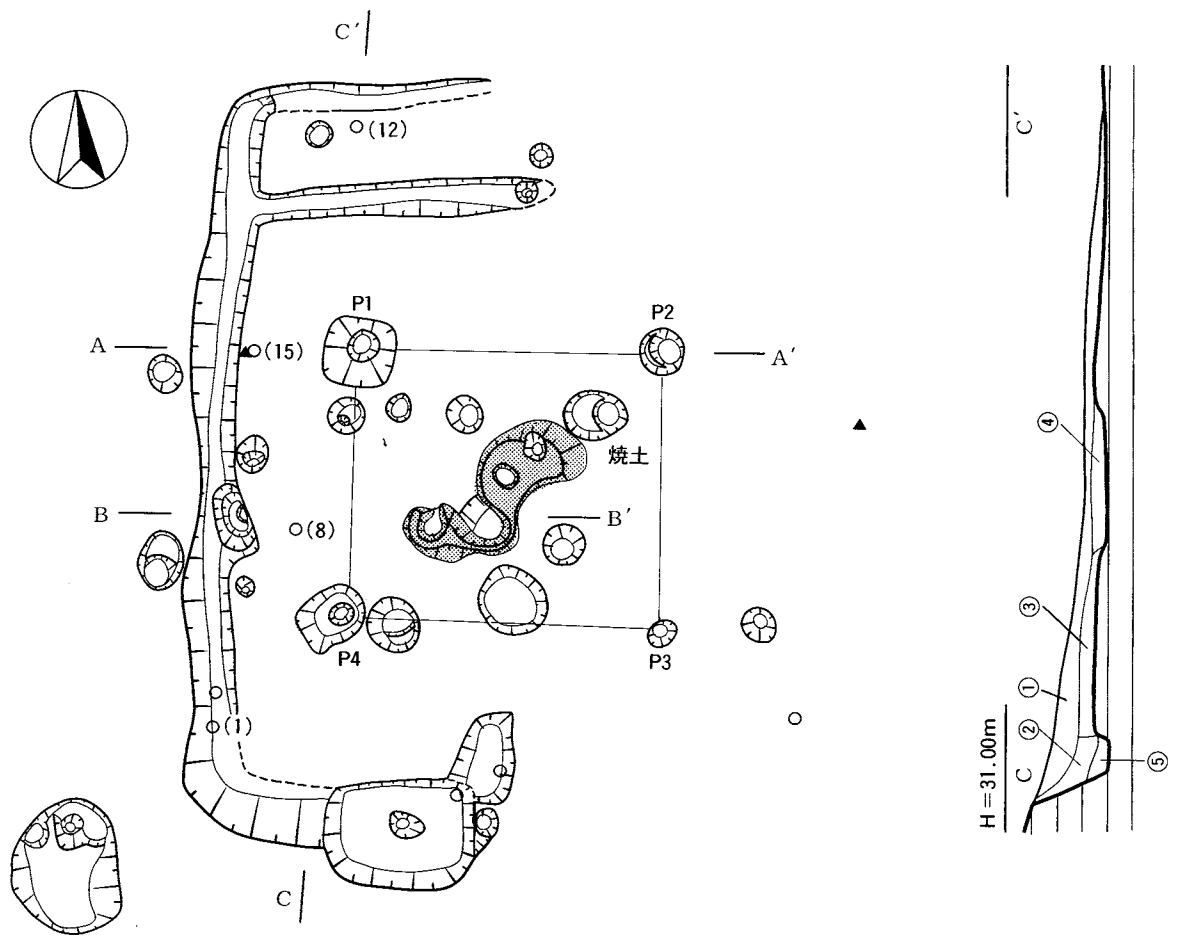


挿図44 山田遺跡2区第15号住居跡遺物

S I 16 (挿図45・46、図版33) 丘陵裾部の低位尾根傾斜面に位置し、東下にS I 13・S I 18、北横にS I 17、やや離れて南南東にS I 14がある。主軸方向はほぼ南北方向であり、東に向く住居である。床面標高30.7m。地傾斜により東と東側は流失するが、山側にコの字状に壁面・溝が巡る。一辺6.2mの方形住居と思われる。側溝は幅25cm―深さ8cm、北寄りの位置から北壁に平行する東西方向の間仕切状の溝が延びる。支柱穴はP 1～P 4の4個で、柱間隔はP 1から右回りに2.45、2.2、2.5、2.15mを測る。その他のピットは支柱穴周辺に集る。支柱、或いは小規模な改築痕とも考えられる。西壁中央から床中央部にかけて炭混り、焼土混りの土が分布する。中央部焼土混入土部は浅い窪みを見せる。時期的、形態的に隣接のS I 14・S I 18に類似し、関連し合うものと思われる。また、間仕切りを持つ形態はS I 15と同類である。

遺物は西壁寄りに多く、東端部でも出土した。土師器の甕・高坏、碗、甑片と須恵器坏蓋1・高坏脚裾片1・その他軽石1がある。土師器は青木X、須恵器は陶邑TK47に該当すると思われる、古墳時代後期初頭と考えられる。

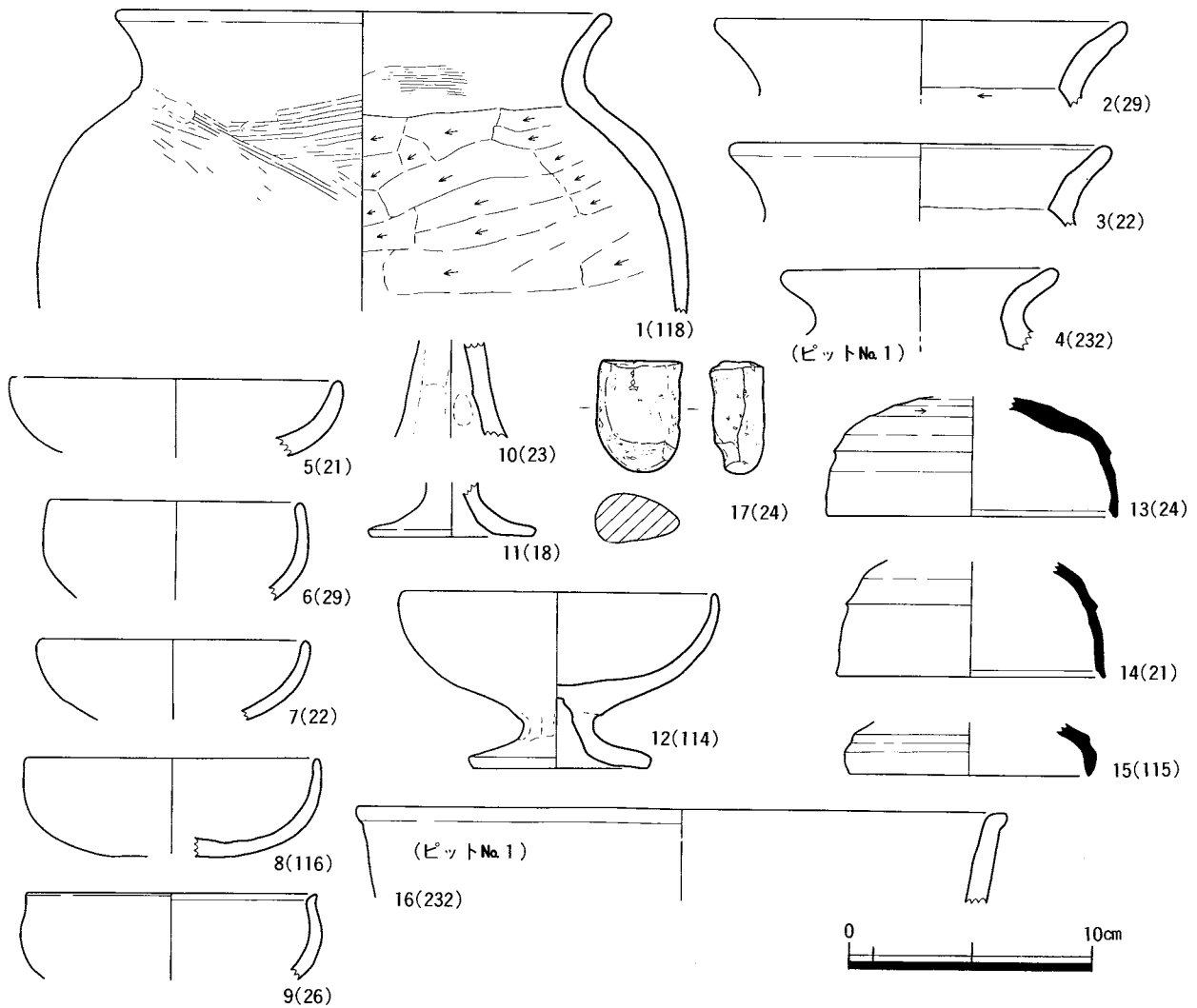
S I 17 (挿図47～49、図版32) 丘陵裾部の低位傾斜面に位置し、S I 16の北横に隣接する。弥生住居S I 01は北西約6mに位置する。平面形は円形を呈し、四周が完存する。壁肩南北6×東西5.8m、床内南北4.2×東西4m、床面積17m²を測る。床面標高29.70m。ピットは7個検出した。支柱穴はP 1～4の4個で、柱間隔はP 1から右回りに2.3、2.4、2.4、2.4mを測る。中央のP 5は径60cm、深さ10cmの皿状の円形ピットで、底部は更に5cm程度の窪みを持つ。



1. 茶褐色砂質ブロック少々混じる
2. 茶褐色地山ブロックが多量混じる
3. 暗茶褐色ブロック・炭少々混じる
4. 5よりやや明るくブロックが多い
5. 茶褐色砂質ブロック少々混じる



挿図45 山田遺跡2区第16号住居跡



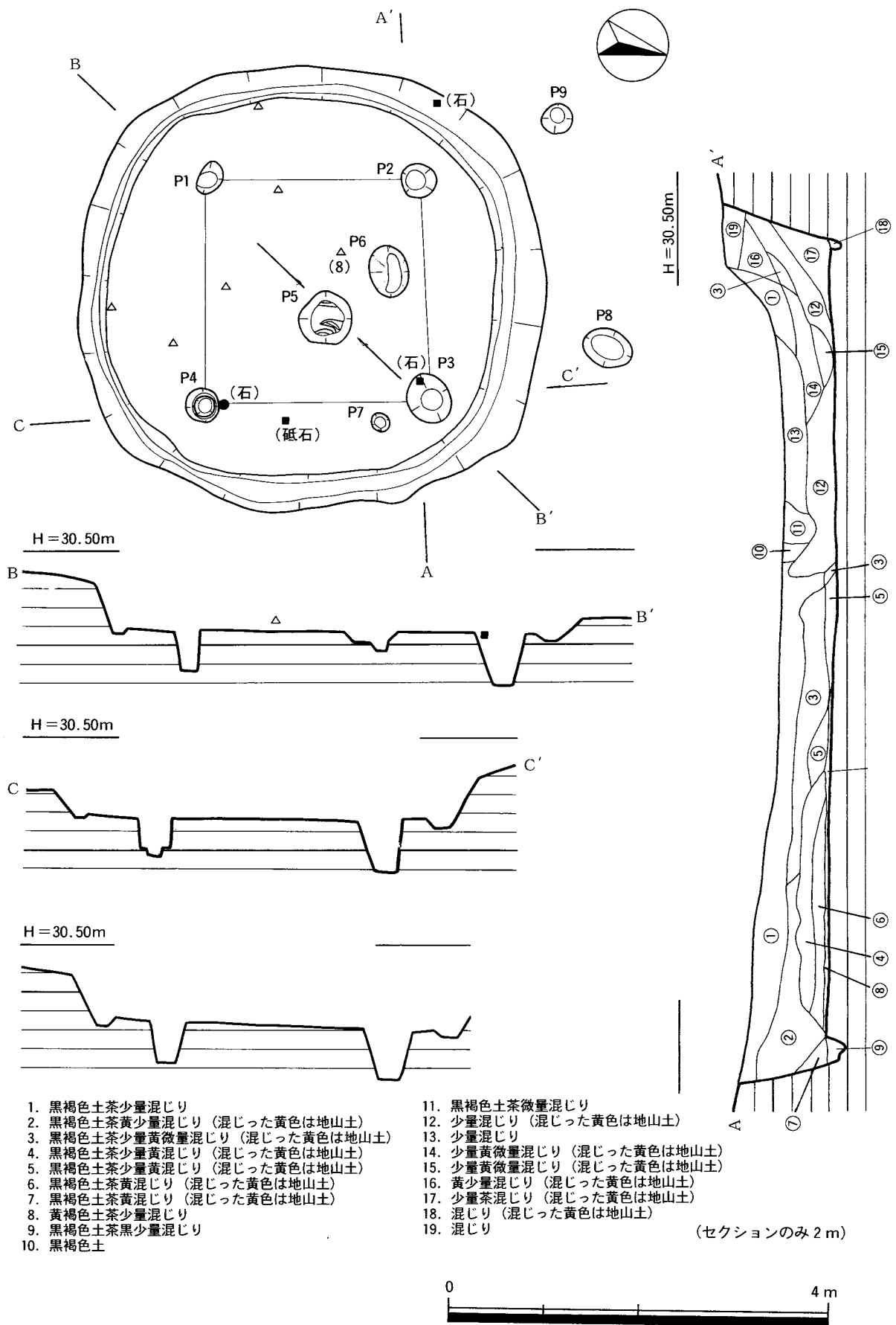
挿図46 山田遺跡 2区第16号住居跡遺物

埋土には炭が混る。床面及び埋土中から壺・甕・高坏・その他砥石等が出土した。遺物は青木Ⅱ・Ⅲに該当し、Ⅲ古が多く、後期中葉を主体とする。なお、埋土流入遺物として分銅形土製品（挿図198-1）がある。

S I 18 (挿図50) 丘陵裾部の低位尾根傾斜面に位置し、S I 13に南接する。S I 16にも近い。流失と調査境界にかかるため全容は不明である。現状では壁面・溝がL字状に確認できるのみである。一辺4.5m程度の方形住居跡と思われる。主軸はほぼ南北方向であり、東に向く。床面標高29.55m。西壁やや内側に溝が平行し、また壁際から幅20cm、長さ11mの溝が延びる。埋土には炭が混り、堆積も見られた。

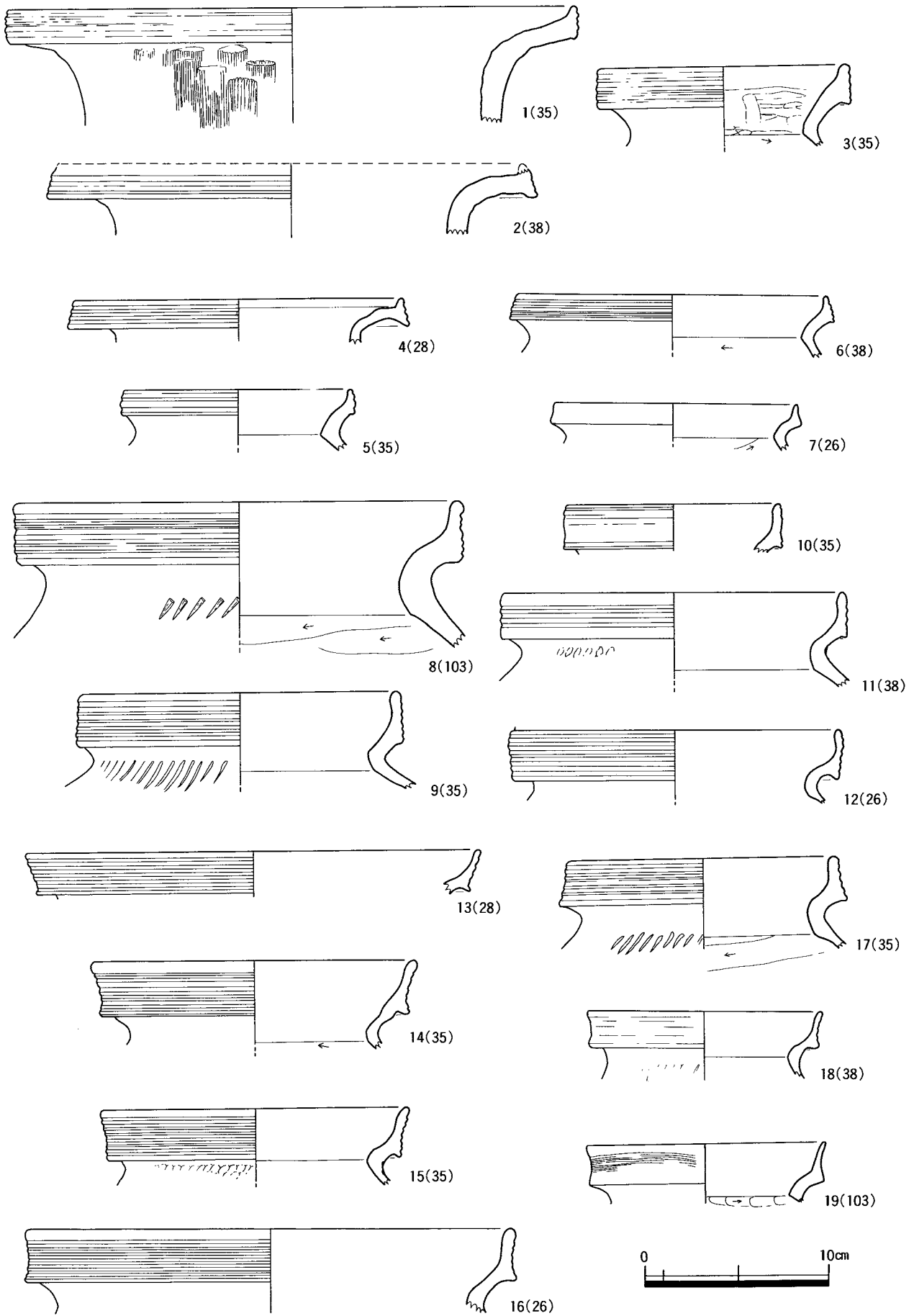
床面及び埋土中から土師器の甕・高坏・碗と須恵器礫小片が出土した。

土師器は青木Ⅸ古段階が主流であり、須恵器はTK23に該当すると思われ、古墳時代中期後半と考えられる。

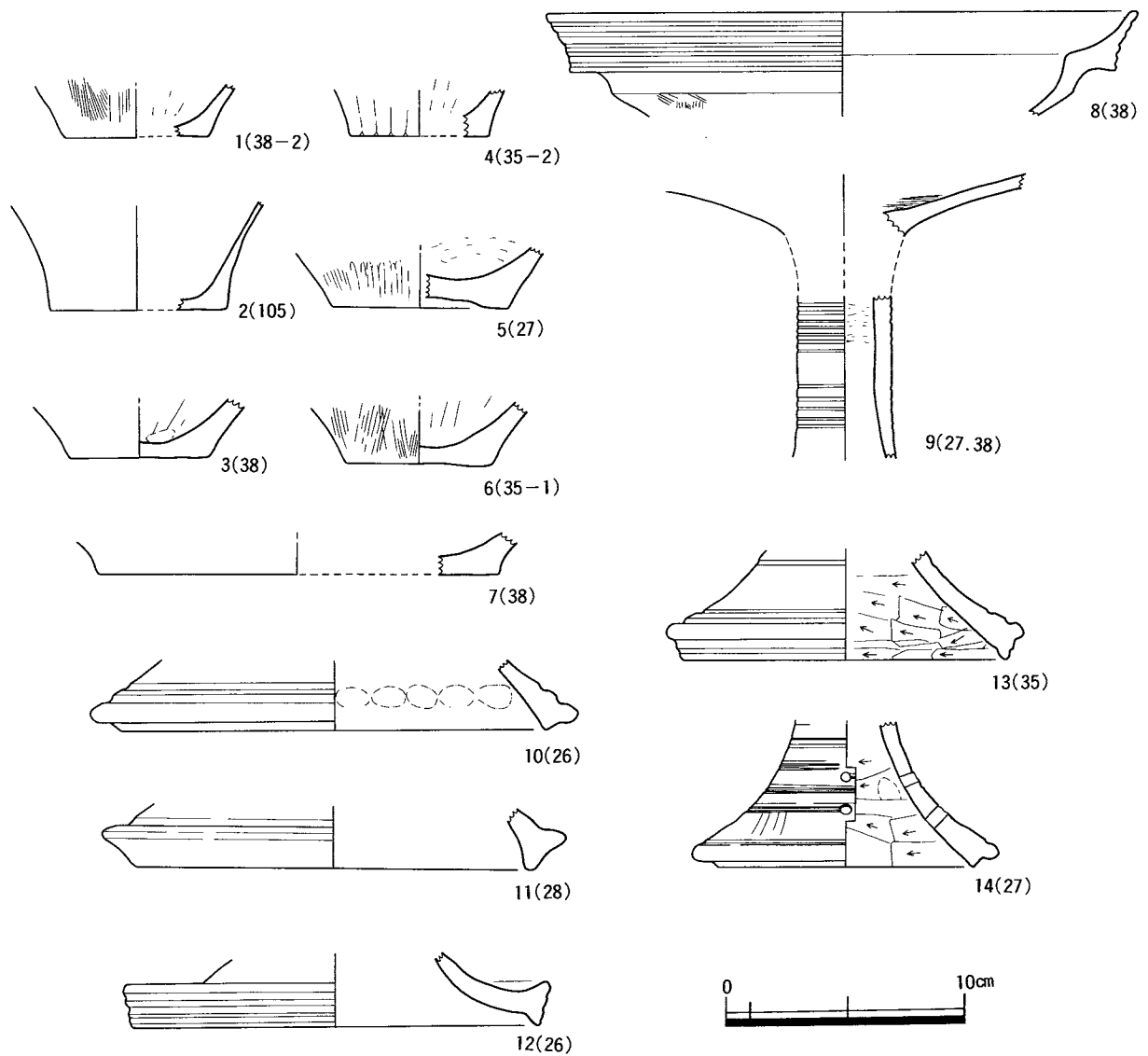


- | | |
|-------------------------------|---------------------------|
| 1. 黒褐色土茶少量混じり | 11. 黒褐色土茶微量混じり |
| 2. 黒褐色土茶黄少量混じり (混じった黄色は地山土) | 12. 少量混じり (混じった黄色は地山土) |
| 3. 黒褐色土茶少量黄微量混じり (混じった黄色は地山土) | 13. 少量混じり |
| 4. 黒褐色土茶少量黄混じり (混じった黄色は地山土) | 14. 少量黄微量混じり (混じった黄色は地山土) |
| 5. 黒褐色土茶少量黄混じり (混じった黄色は地山土) | 15. 少量黄微量混じり (混じった黄色は地山土) |
| 6. 黒褐色土茶黄混じり (混じった黄色は地山土) | 16. 黄少量混じり (混じった黄色は地山土) |
| 7. 黒褐色土茶黄混じり (混じった黄色は地山土) | 17. 少量茶混じり (混じった黄色は地山土) |
| 8. 黄褐色土茶少量混じり | 18. 混じり (混じった黄色は地山土) |
| 9. 黒褐色土茶黒少量混じり | 19. 混じり |
| 10. 黒褐色土 | |

挿図47 山田遺跡 2区第17号住居跡



挿図48 山田遺跡 2区第17号住居跡遺物(1)

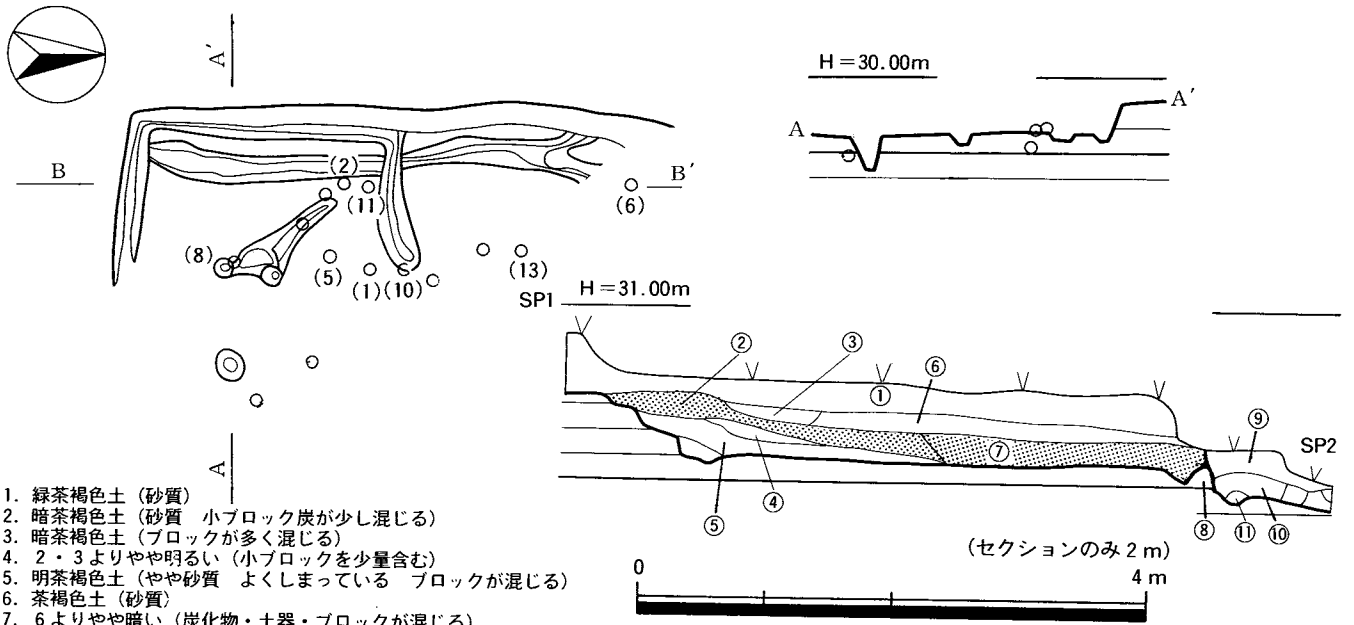


挿図49 山田遺跡 2区第17号住居跡遺物(2)

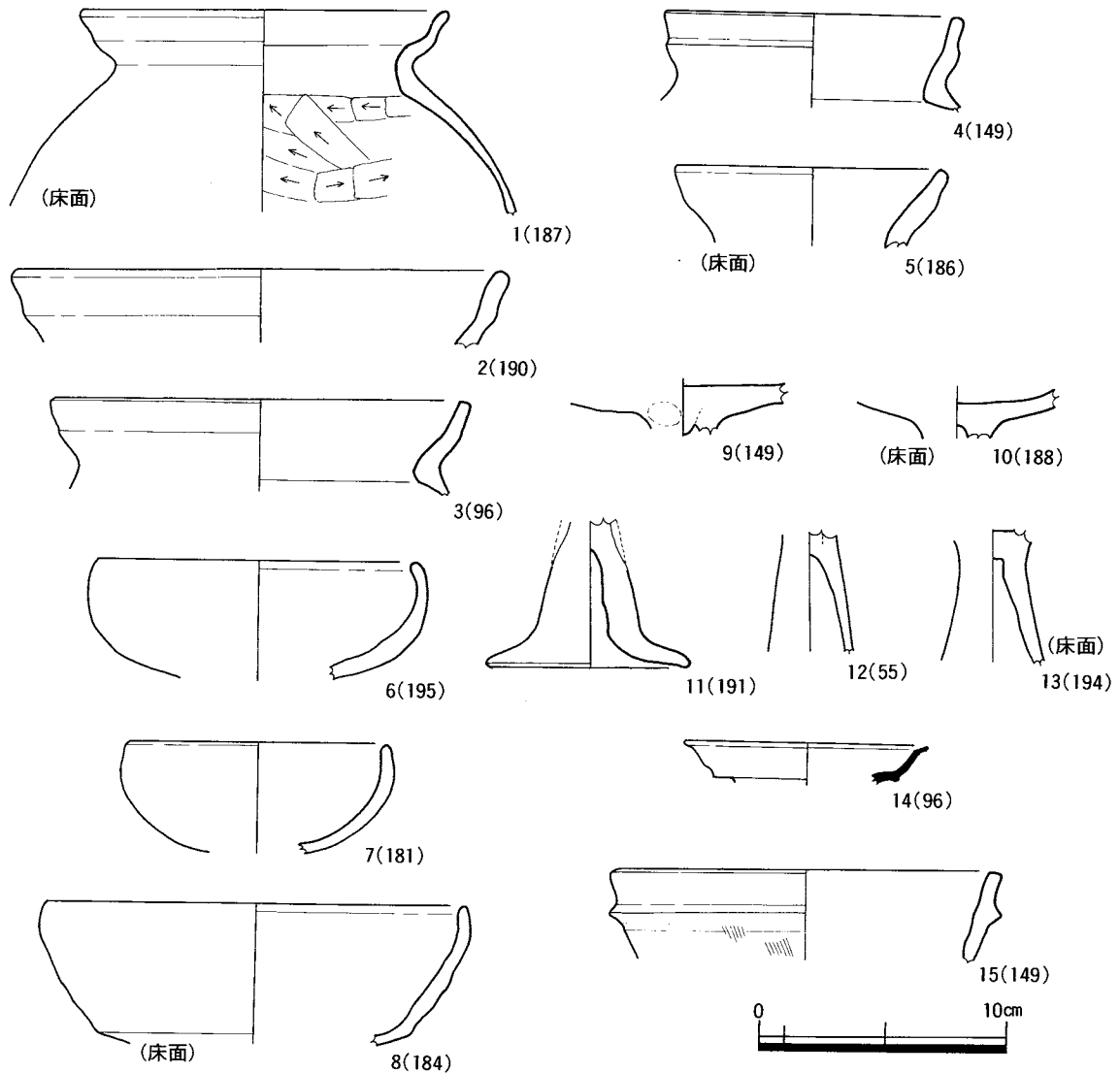
S I 19 (挿図51) 丘陵裾部の低位緩斜面に位置し、2区調査区の南東端に当たる。北東横にS I 20が近接し、S D09は南西壁が重複する。地傾斜により南東側は流失するが山側にコの字状に壁面・溝が巡る。主軸はほぼ北東-南西方向であり、南東に面した住居である。床面標高27.95m。平面形は方形と思われ、壁肩5m、床面4.3mを測る。側溝は幅30~35cm、深さ10cm。北西壁寄り中央に径40cm、深さ50cmの円形ピット(P6)があり、両横を小溝が囲む。主柱穴はP1~P4の4個と思われ、柱間隔はP1から右回りに1.9・2.5・2.0・2.2mを測る。北隅部のP7は径40cm、深さ65cmの円形ピットで内部から土師器片が出土した。

土師器の甕・高坏と須恵器坏蓋片1がある。須恵器は壁肩部の出土であり後世の混入と思われる。甕は複合口縁、高坏は有段高坏もある。

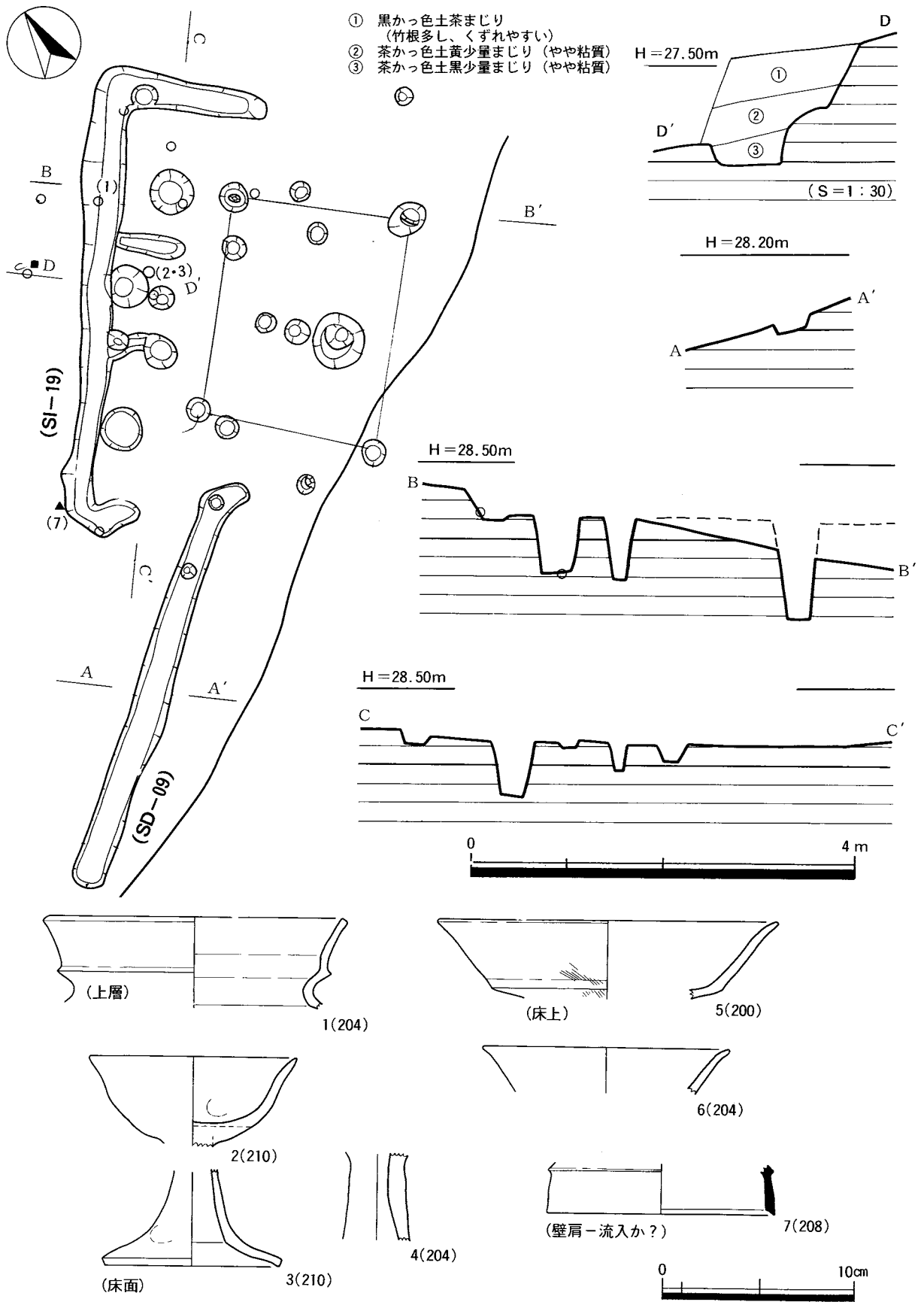
青木VII~VIII古に該当し、古墳時代前期末~中期前半と考える。



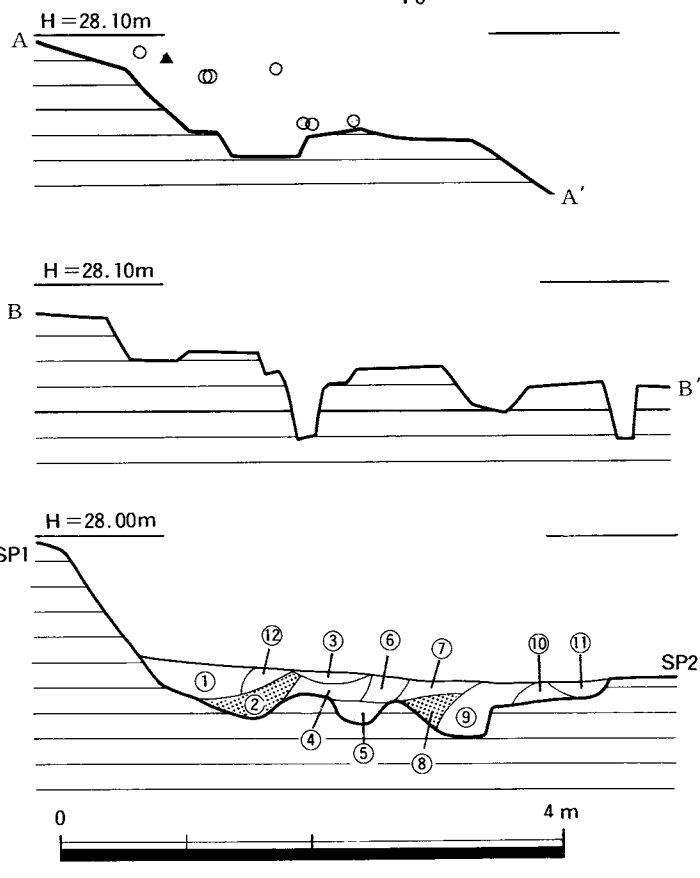
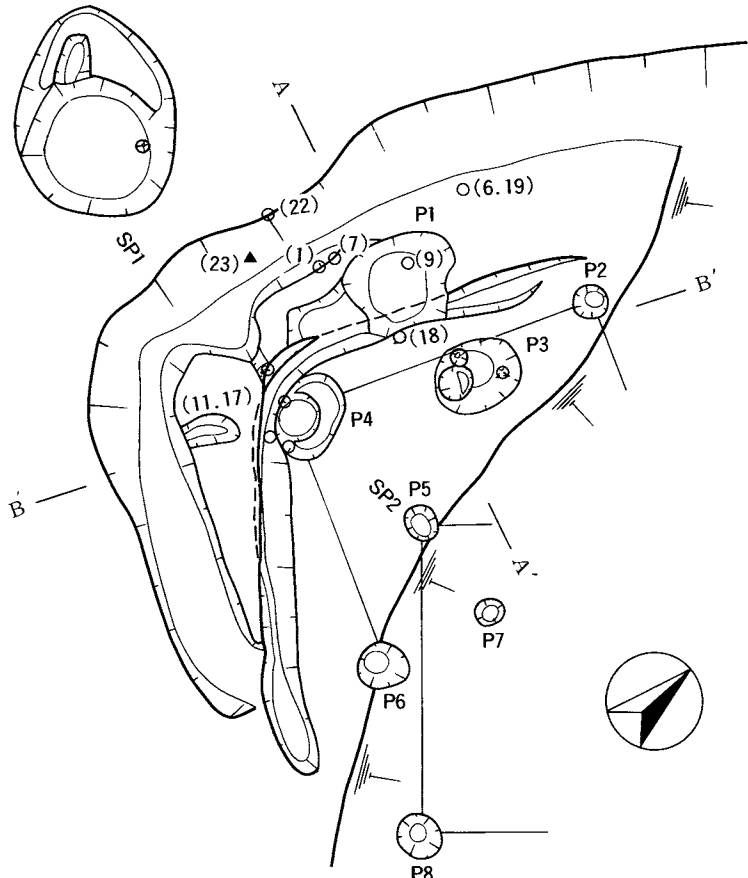
1. 緑茶褐色土 (砂質)
2. 暗茶褐色土 (砂質 小ブロック炭が少し混じる)
3. 暗茶褐色土 (ブロックが多く混じる)
4. 2・3よりやや明るい (小ブロックを少量含む)
5. 明茶褐色土 (やや砂質 よくしまっている ブロックが混じる)
6. 茶褐色土 (砂質)
7. 6よりやや暗い (炭化物・土器・ブロックが混じる)
8. 黄茶褐色土 (地山か)
9. 暗茶褐色土 (2・3より暗い)
10. 黒色土と暗茶褐色土の混じり
11. 黒色土



挿図50 山田遺跡 2区第18号住居跡遺構遺物



挿図51 山田遺跡 2区第19号住居跡遺構遺物



1. 暗茶褐色土 (黄色ブロック混じり)
2. 茶褐色土 (黄色ブロック炭少量混じり)
3. 茶褐色土 (砂質 ブロック少量)
4. 茶褐色土 (黄色ブロック大粒少量混じる)
5. 暗茶褐色土 (ややしまりが良い)
6. 明茶褐色土 (黄色ブロック混じり)
7. 暗茶褐色土 (ブロック少量)
8. 暗茶褐色土 (黄色ブロック炭少量混じり)
7より少し暗い
9. 暗茶褐色土 (黄色ブロック大粒が多量混じる)
10. 黄色土 (地山?)
11. 暗茶褐色土 (黄色ブロック少量混じり、しまりが良い)
12. 黄色土

挿図52 山田遺跡 2区第20号住居跡

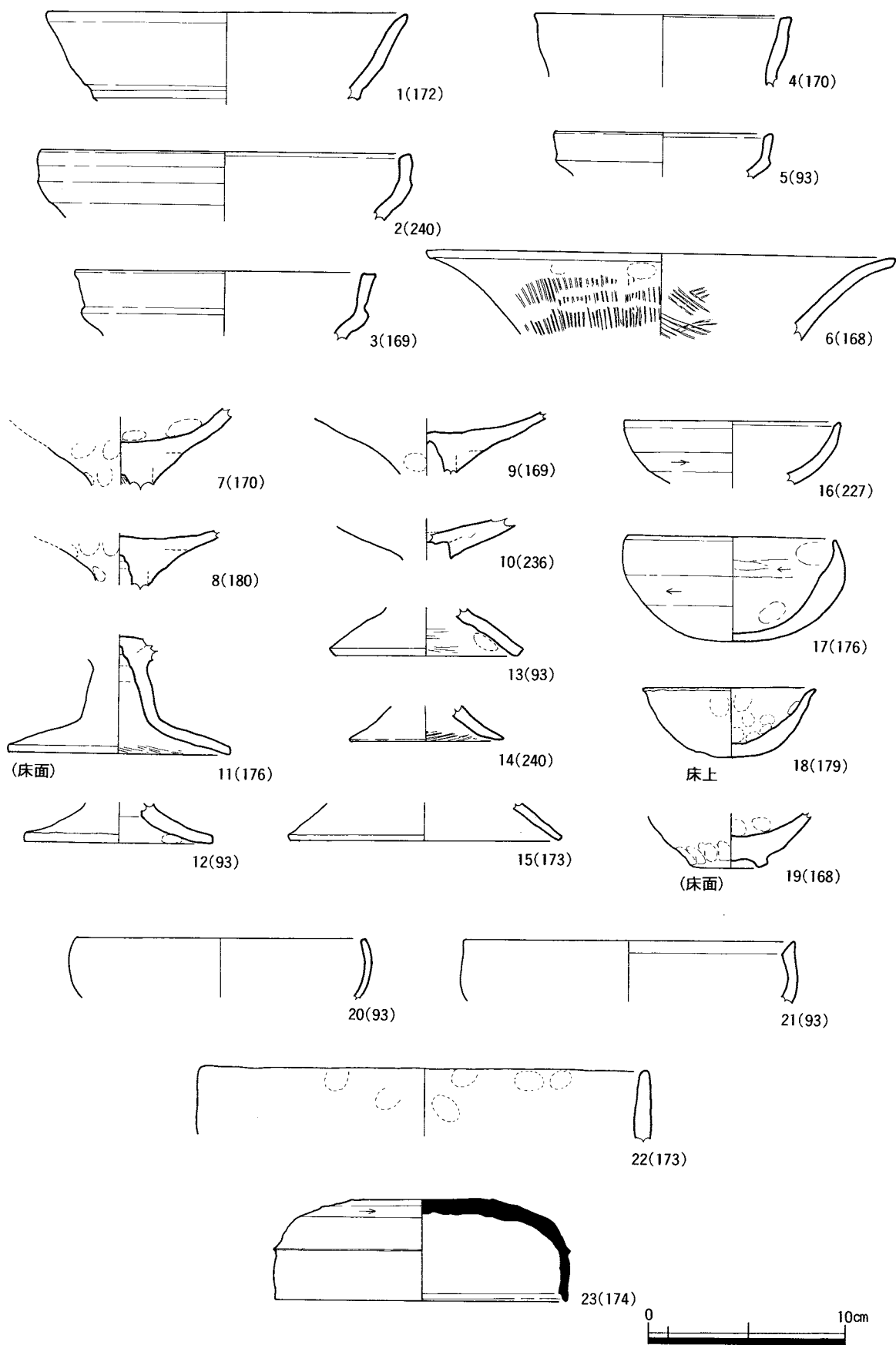
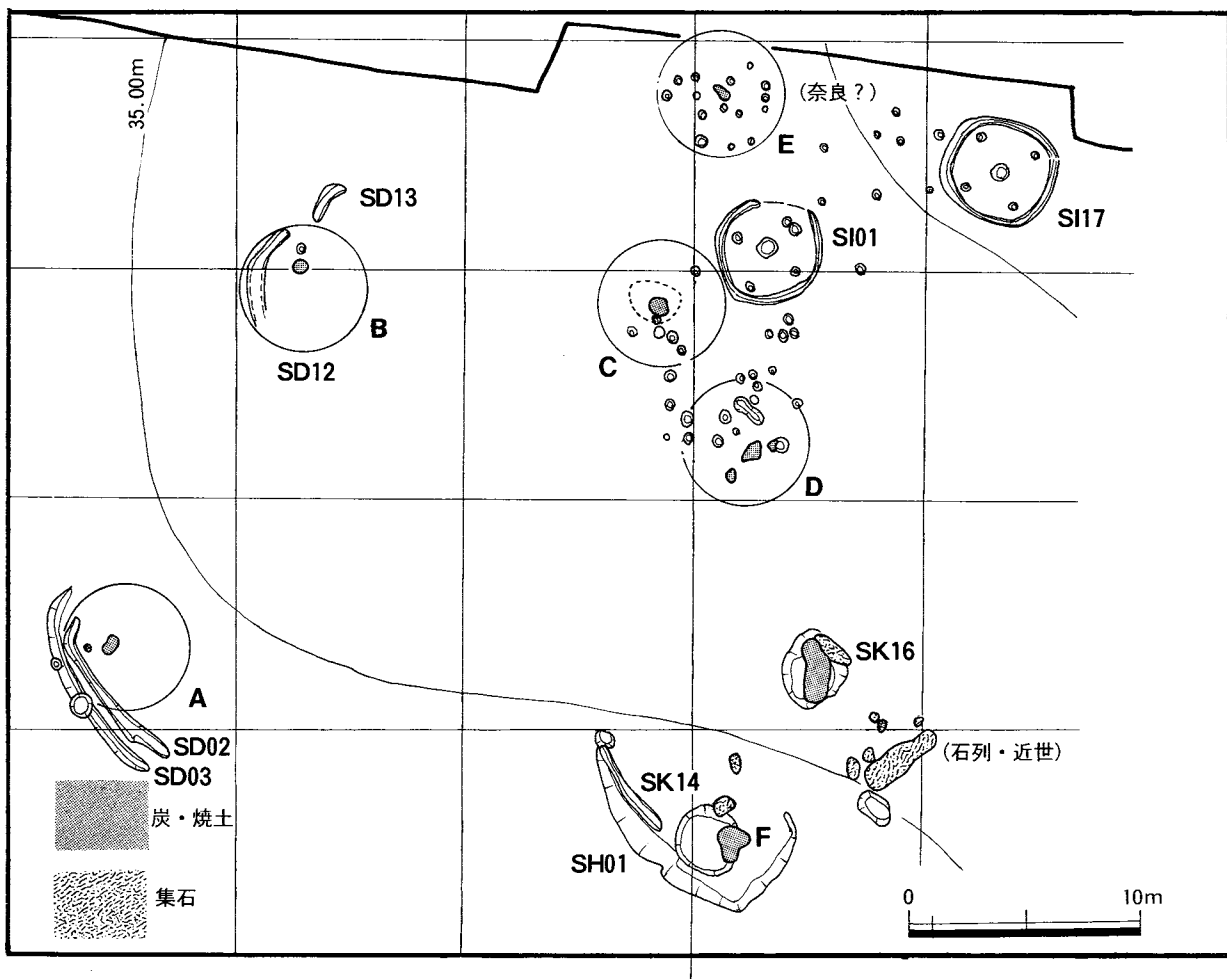


插图53 山田遗迹2区第20号住居迹遗物

S I 20 a · b (挿図52・53) 丘陵裾部の低位緩斜面に位置し、南西に隣接してS I 19が並ぶ。2区調査区の南東端に当たり、地傾斜と神社参道により南東側1/3を消失する。建替えが行われておりやや方向の異なる二重の側溝・壁が残る。平面形は共に4本柱の方形と思われ、北東側の壁寄り中央に円形ピットを持つ。山側-北西側が新しく(S I 20 a)、裾側-南東側が古い(S I 20 b)。

S I 20 aは、床面標高27.45m、主軸方向は北北東。主柱穴はP 2 - () - P 4 - P 6であり、東側1個を欠く。柱間隔はP 4 - P 2間が2.6m、P 4 - P 6間2.0mである。壁寄りのピットP 1は不整形円で径70cm、深さ20cmを測る。側溝は幅30~50cm、深さ8cm。S I 20 bは、床面積27.3m、主軸方向は北東。主柱穴は北、東を欠きP 5、P 8の2個のみ残る。P 5 - P 8間隔は2.5mであり、20 a とほぼ同規模であったと思われる。壁寄りのピットP 3は70×58cm - 深さ20cmを測る。側溝は幅25cm、深さ10cm。

遺物は土師器甕・高坏・埴・甑片・須恵器坏蓋がある。土師器甕は退化した複合口縁、須恵器坏蓋は直立する口縁で天井部との境界はつまみ出して鋭い稜をなし、口縁端面は段をなす。土師器は青木IX、須恵器は陶邑TK208に該当し、古墳時代中期後葉と思われる。



挿図54 山田遺跡2区炭・焼土、集石分布

S I 21 (挿図30) 丘陵の北側尾根の東側肩部に位置し、S I 03に重複し、S I 02に近接する。当初S I 03として認識していたが検討の結果重複する二者として別個に扱うこととした。径25、深さ20～40の小ピット8個が1～1.5m間隔で繋がり、P11を中心に巡る。対角径は約3.3mである。遺物もなく確証はないが、形状やピットが小型であること、柱間隔が狭いこと等から縄文時代住居跡の可能性も考えられる。

掘立柱建物跡 (挿図31・32、図版34)

S B 01・S B 02・S B 02' の3棟を想定した。北西尾根近くのテラスS S 02に位置し、S I 04・06と重複する。明確には峻別でき兼ねたが1×3間(梁行長1.9×桁行長4.2m程度)あるいは1～2×3間(梁行長1.9～×桁行長4～4.7m程度)の細長い建物と思われる。S B 01の南西壁寄りには焼土坑S K 06があり、一体のものと思われる。S K 06は径0.8×0.7mー深さ0.2mの円形の浅鉢状土坑で壁面は赤く酸化し、炭混じり土が堆積していた。建物の主軸方位にはずれがあり、それぞれ別個に存在したものと考えられる。明確ではないが奈良時代以降と思われる。

土坑 (挿図55～65)

40基を確認した。縄文時代の落とし穴状土坑8・風倒木状土坑2・その他土坑2、弥生時代の袋状貯蔵穴2、その他(不確定・不定形)26である。

落とし穴は底部中央ピットを持つもの以外に、断面砲弾形のS K 17も考えられる。

風倒木状土坑はS K 16とS K 20であり、旧表土と思われる黒色土を地山土混じりの土が挟む形で堆積する。平面円形・断面U字状を呈し、規模は径3.4、深さ0.8m程度である。

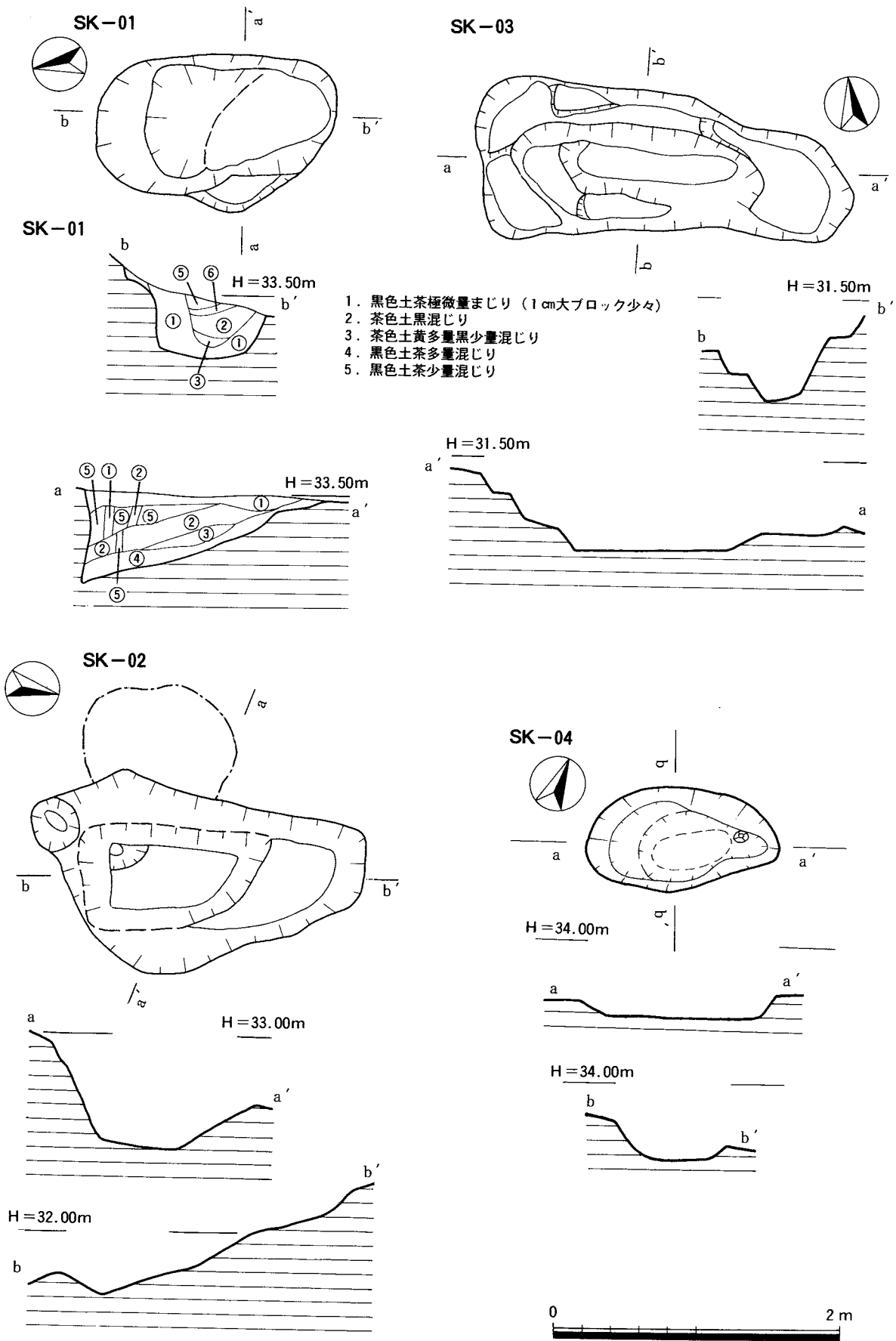
S K 22とS K 23は、掘込み面と埋土状況から第Ⅲ層黒色土層以前であり縄文時代の古段階のものである。平面径0.8～1.1mの円形で底面は平坦である。明確ではないが、形態・規模の類似するS K 09・13・25・32～34・40等も同類の可能性はある。

S K 07は袋状貯蔵穴で、谷部中位に位置する。削平により上方を欠き、底径1.42×1.70m、深さは現存0.65mである。底面は円形でほぼ平坦であるが中央部がやや凹む。内部には炭混じりの土が入り込み、底面近くから甕約20・高坏5個体分と角石、河原石が出土した。青木Ⅱに該当し、弥生時代後期初頭～前葉のものである。

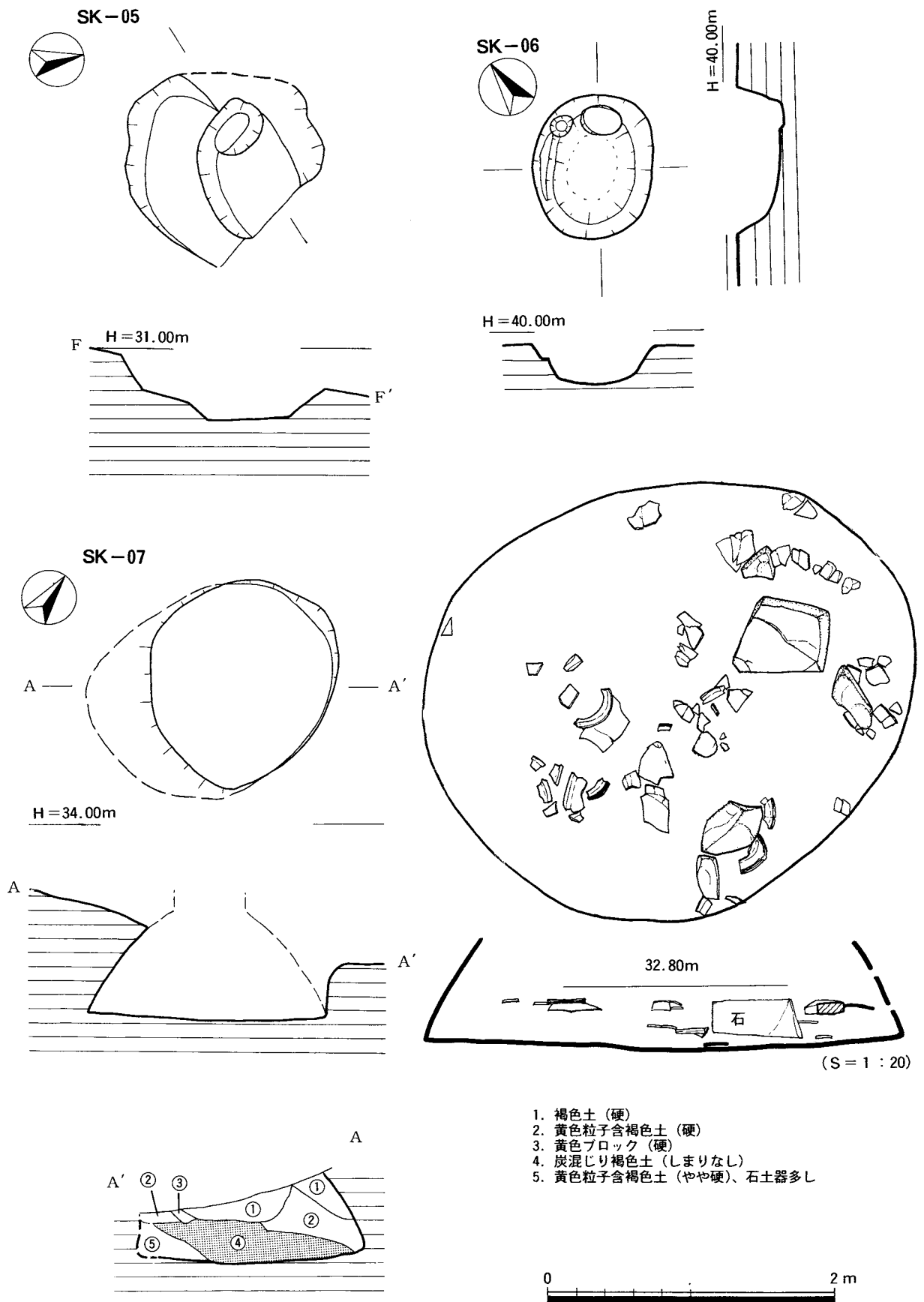
S K 26も袋状貯蔵穴。谷部上位に位置し、削平を受けて上方部の一部を欠く。底径1.74×1.42m、深さ現存1.50mを測る。底の周囲には幅20ー深さ8cmの溝を巡らす。底面近くより大甕1・高坏1を検出した。青木Ⅰに該当し、弥生時代中期後葉のものである。

炭・焼土・ピット群 (挿図54)

炭・焼土溜りやピット群を検出した。元来住居・建物に伴っていたものの上部が流失・削平されたものと思われる。炭・焼土溜りA・BはS D 02・12、C～Eはピット群、FはS H 01に関連するものと考えられる。炭溜りEの炭は年代測定では奈良時代に比定された。

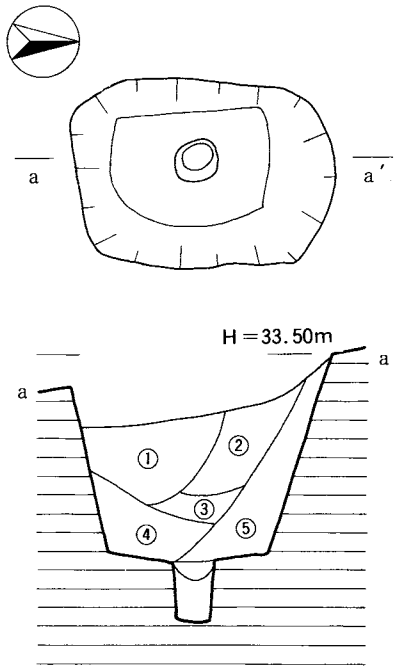


挿図55 山田遺跡 2区土坑図(1)

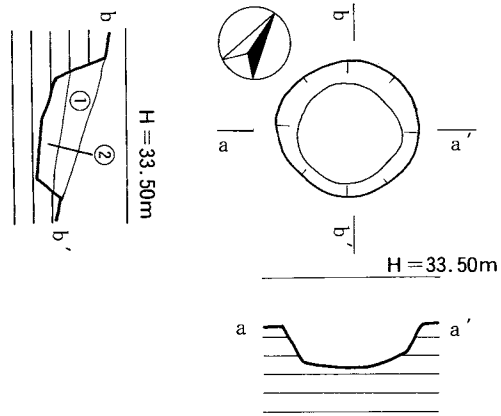


挿図56 山田遺跡 2区土坑図(2)

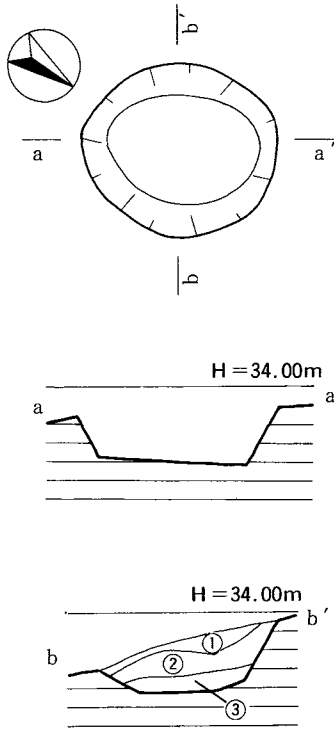
SK-08



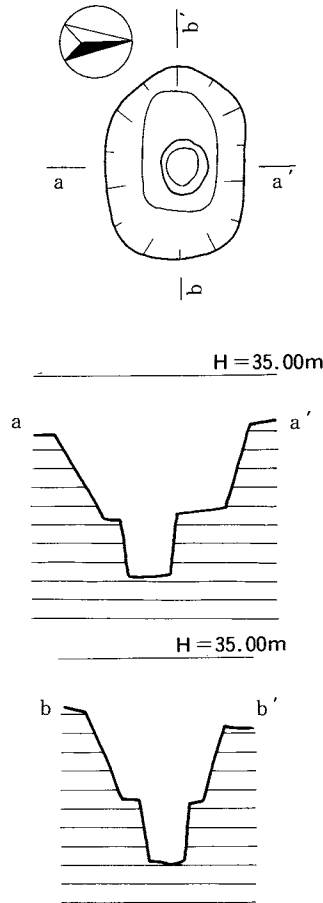
SK-09



SK-10



SK-11



(SK-08)

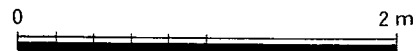
1. 黒褐色粘質土 (硬い)
2. 黄褐色粘質土
3. 黒褐色粘質土 (しまりなし)
4. 黒褐色粘質土
5. 黄色ブロック含む黒褐色土

(SK-09)

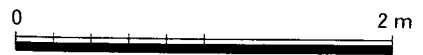
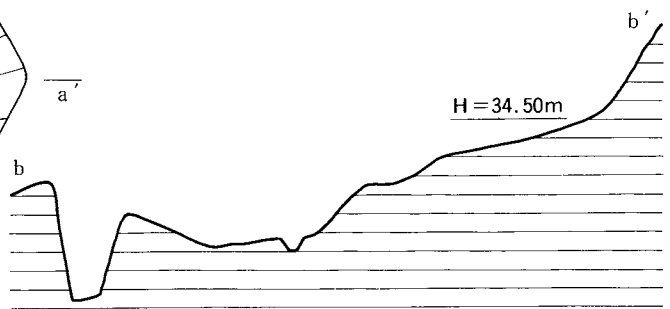
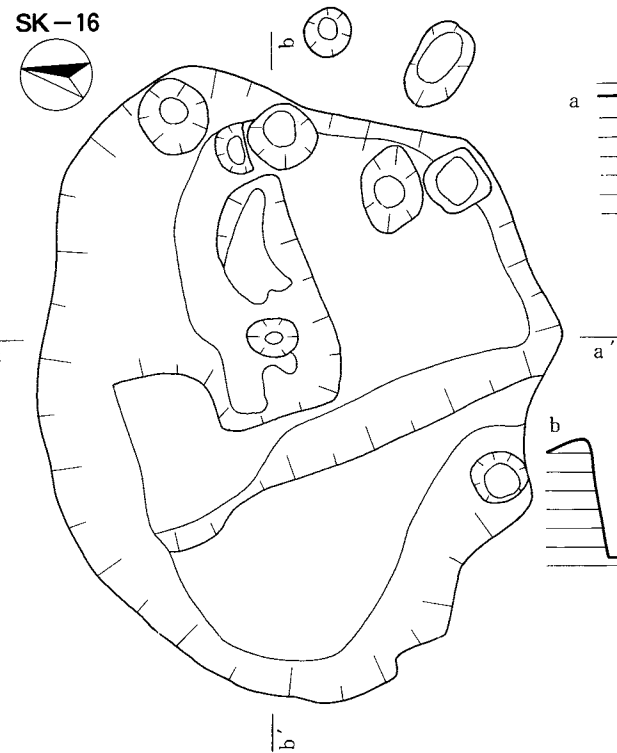
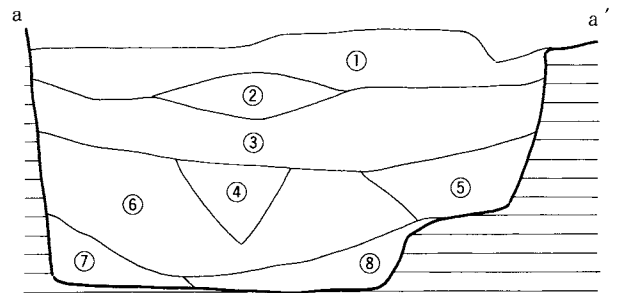
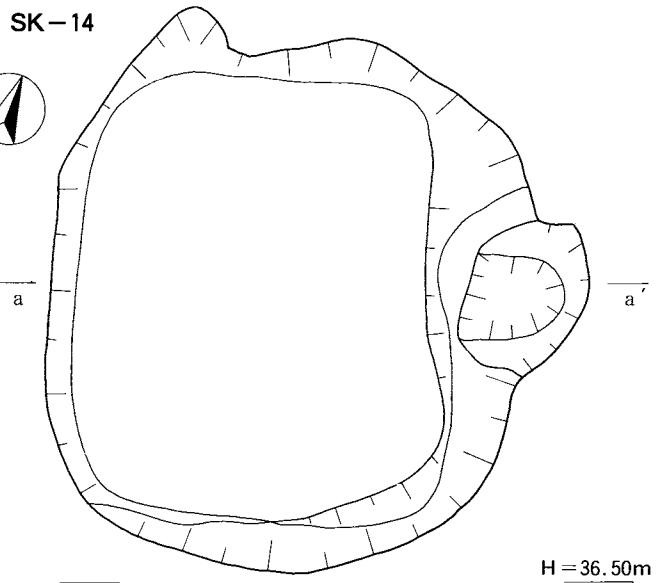
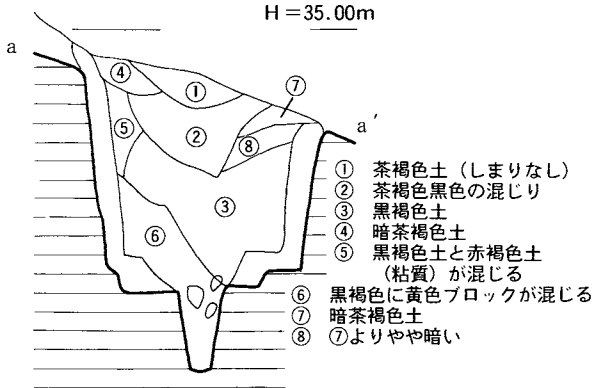
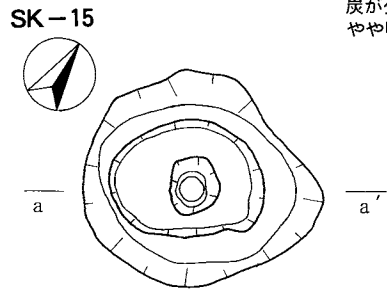
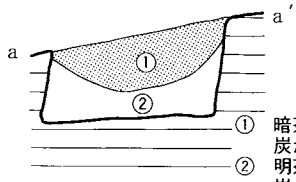
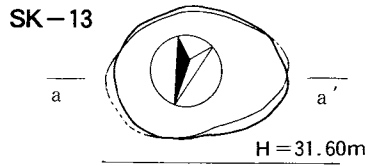
1. 黒褐色土茶混じり
2. 黒褐色土黄混じり (地山混じり)

(SK-10)

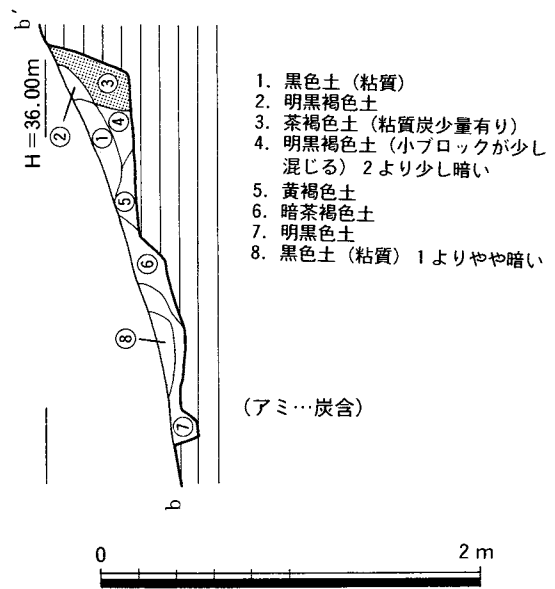
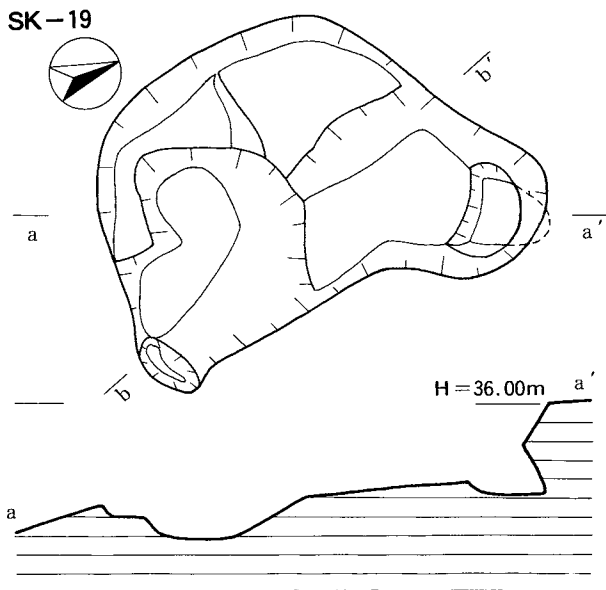
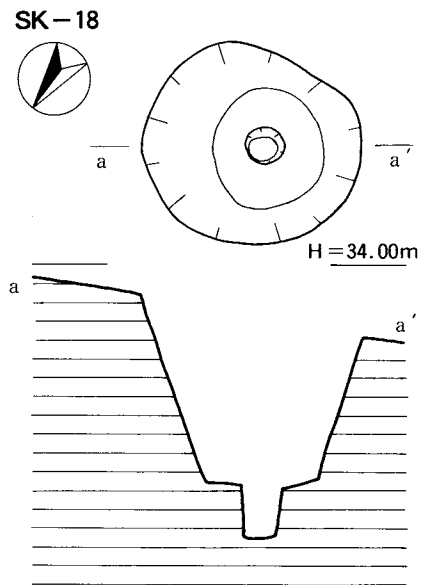
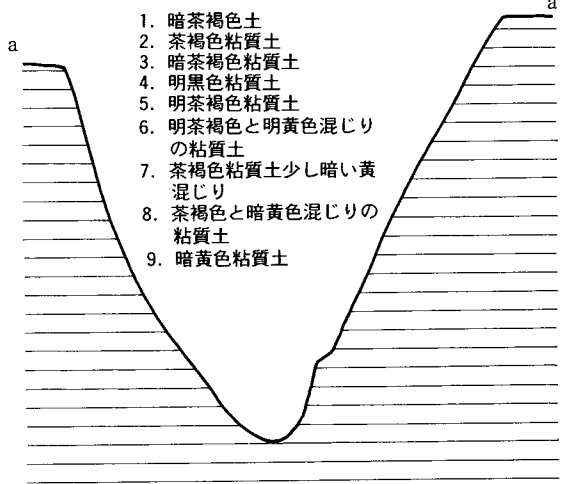
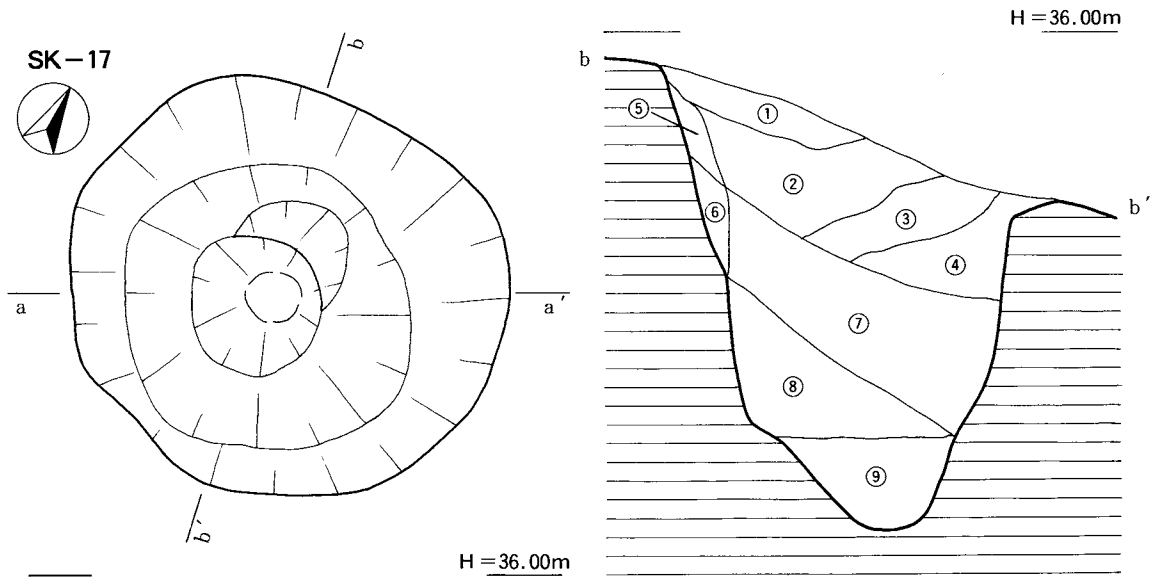
1. 茶褐色土黄色混じり (黄は地山土)
2. 黄色土茶色少々混じり (黄は地山土)
3. 黄色土黒色微量混じり (黒は竹根によるかくらんか)



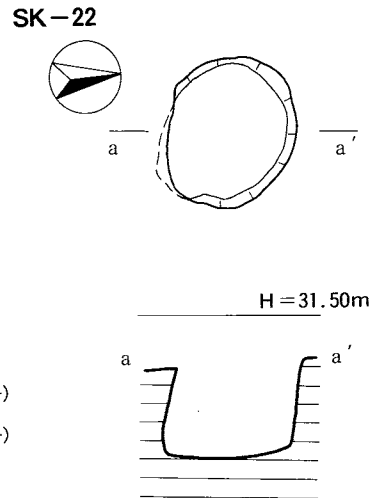
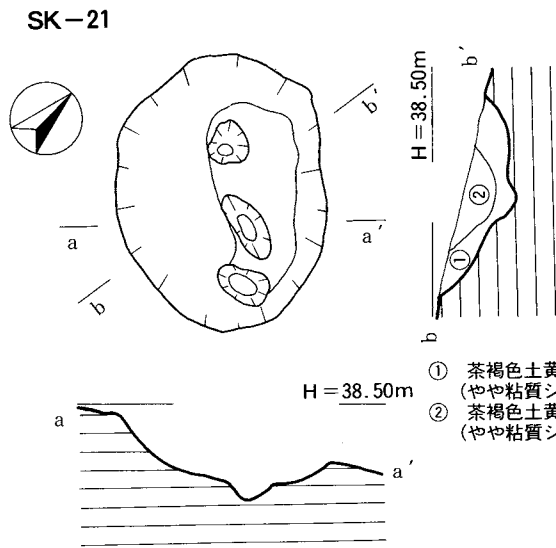
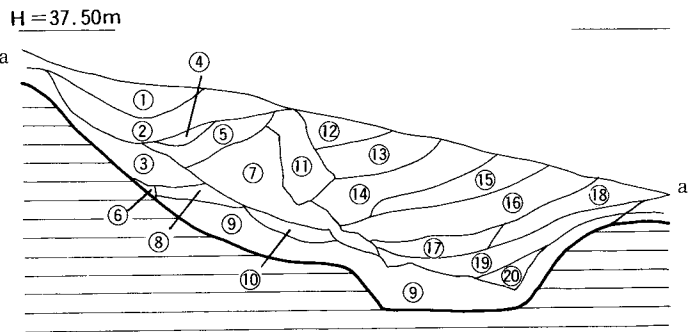
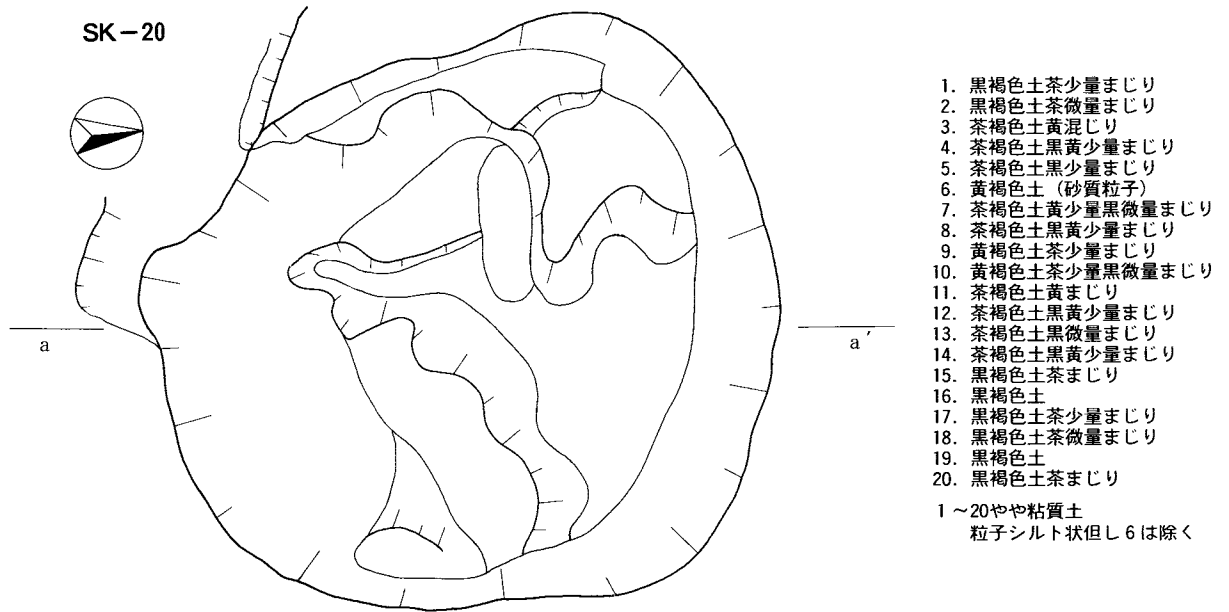
挿図57 山田遺跡 2区土坑図(3)



挿図58 山田遺跡 2区土坑図(4)

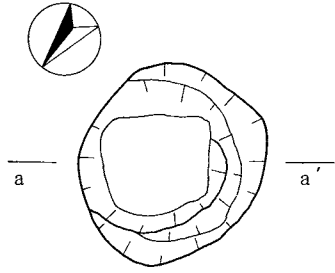


挿図59 山田遺跡 2区土坑図(5)

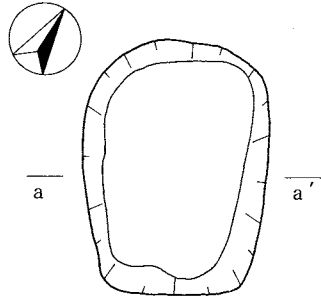


挿図60 山田遺跡 2区土坑図(6)

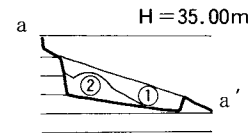
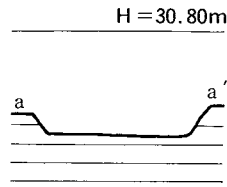
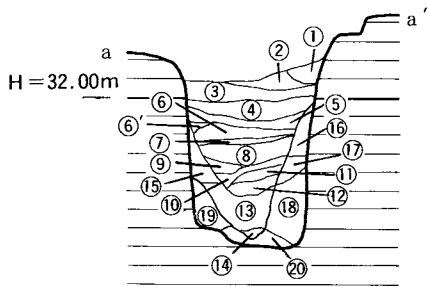
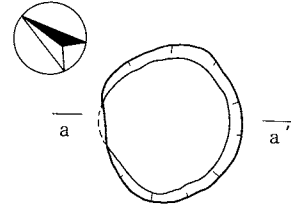
SK-23



SK-24

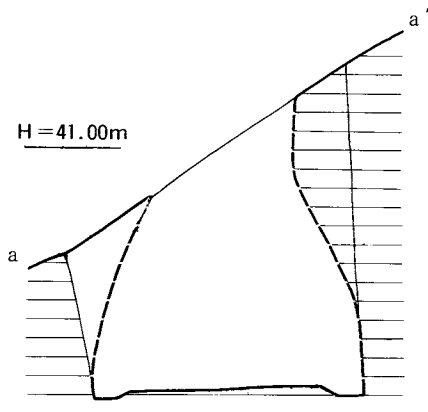
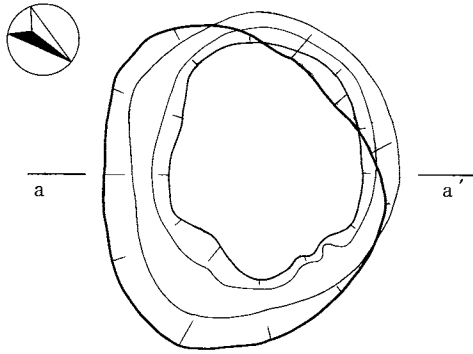


SK-25



- ① 黒褐色土、茶少量混じり
- ② 茶褐色土

SK-26

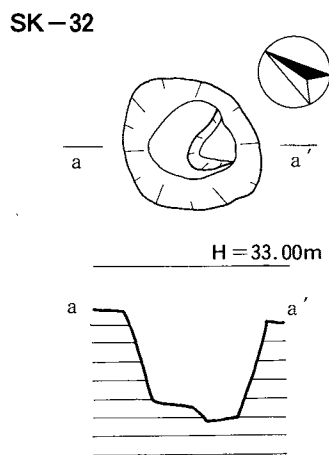
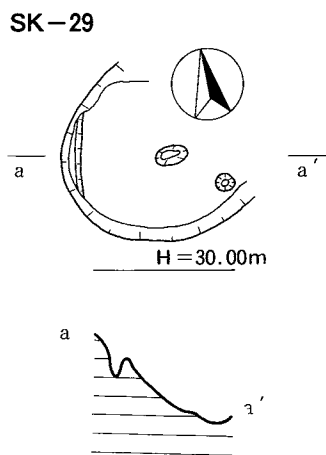
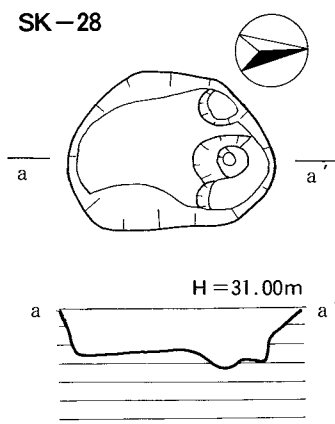


(SK-23)

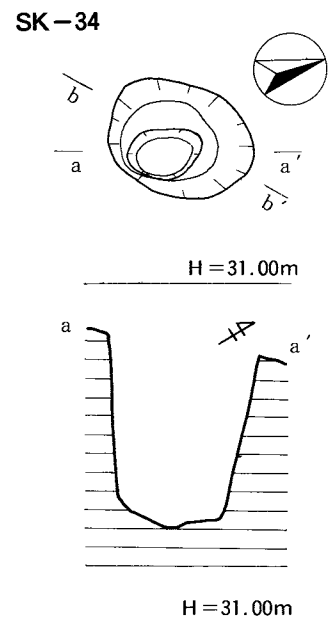
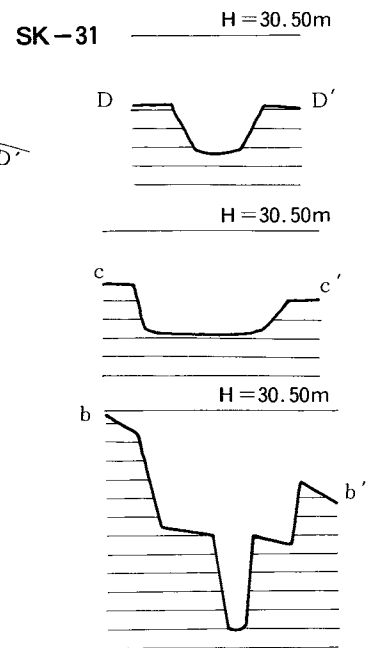
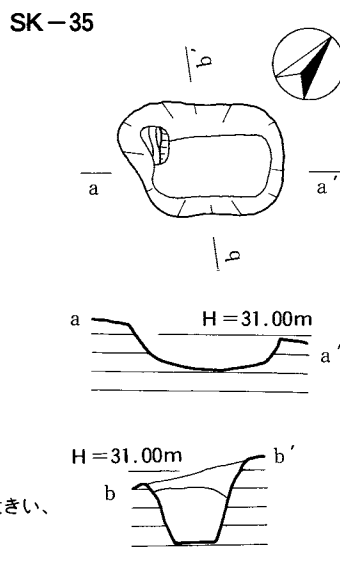
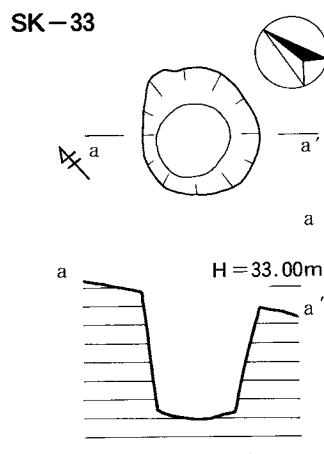
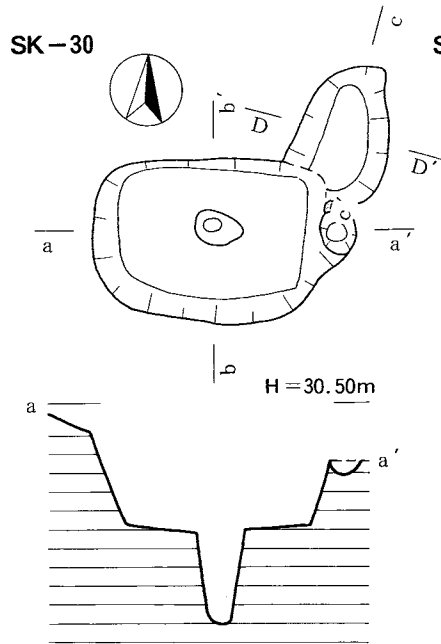
- (1~12) 暗~黒褐色の互層
 - 1. 粘質土
 - 2. 粘質シルト (しまりなし)
 - 3. 粘質土
 - 4. 粘質シルト (しまりなし)
 - 5. 粘質土
 - 6. 粘質シルト (しまりなし)
 - 7. 粘質土
 - 8. 粘質シルト (しまりなし)
 - 9. 粘質シルト (ややしまる)
 - 10. 粘質土
 - 11. 粘質シルト (しまりなし)
 - 12. 粘質シルト (ややしまる)
 - 13. 黄褐色粒含暗褐色粘質土
 - 14. 黄褐色粒含暗褐色粘質土 (ややしまる)
 - 15. 黄褐色粒含暗褐色粘質シルト
 - 16. 黄色粒少々含暗褐色粘質シルト
 - 17. 暗褐色と淡褐色粘質シルト
 - 18. 白黄色粒含
- 一次の埋土



挿図61 山田遺跡 2区土坑図(7)



- ① 黒褐色土茶混じり
(竹根多い、やわらかい表土か)
- ② 黄褐色土茶、少量混じり
(①よりややかたい、①より粒子が大きい、
黄色土=真砂土+茶褐色土)

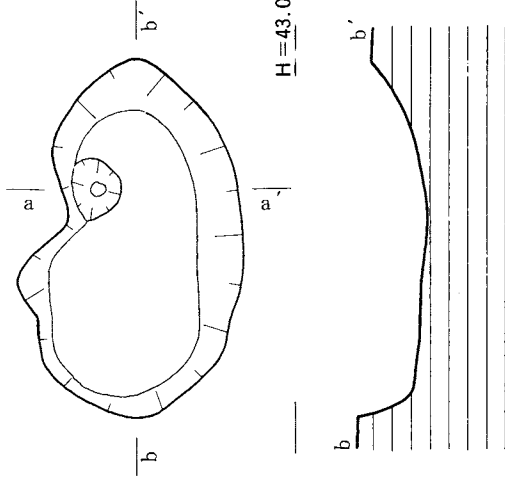


- ① 黒色土
- ② 茶褐色土と黒褐色土の混じり
- ③ 黒褐色土 (①よりやや茶色っぽい)
- ④ 茶褐色土
- ⑤ 暗茶褐色土 (⑥よりやや濃い)
- ⑥ 暗茶褐色土

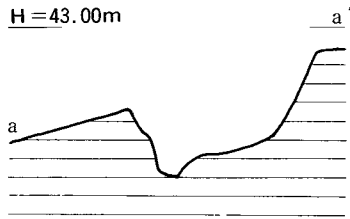


挿図62 山田遺跡2区土坑図(8)

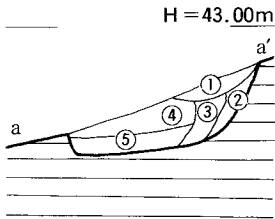
SK-36



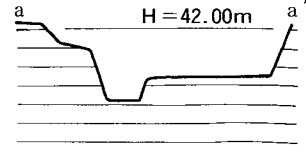
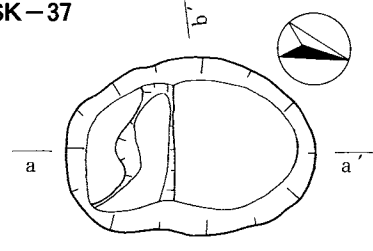
H=43.00m



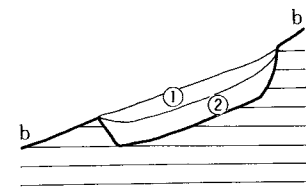
H=43.00m



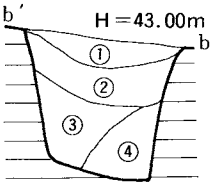
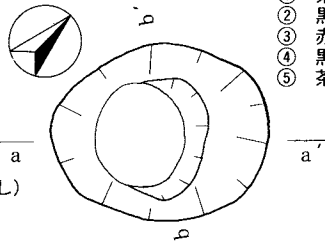
SK-37



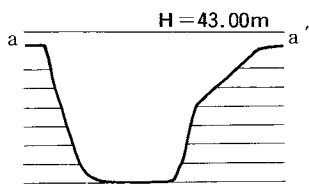
H=43.00m



SK-38



H=43.00m



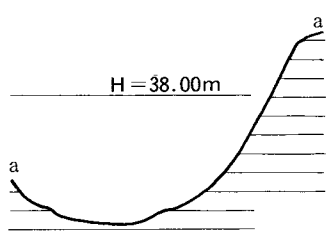
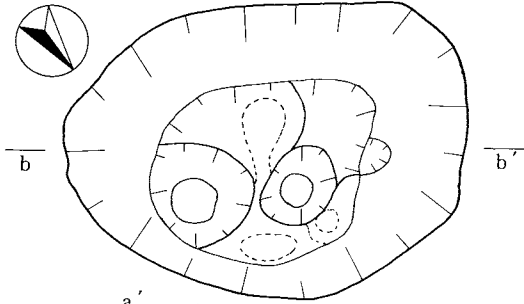
H=43.00m

- ① 茶褐色土
- ② 黒褐色土 (④よりやや暗い)
- ③ 赤茶褐色土 (しまりは良くない)
- ④ 黒褐色 (やや粘、よくしまる)
- ⑤ 茶褐色と黒褐色の混在

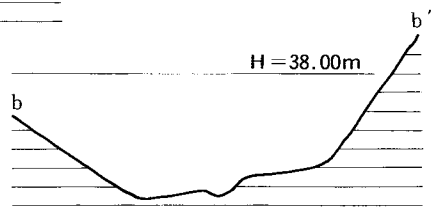
- ① 黒褐色と茶褐色の混在
- ② 赤茶褐色 (砂質)

- ① 暗茶褐色土 (しまりよい)
- ② ①よりやや暗い (しまりよし)
- ③ ①②より茶褐色が強い
- ④ 明黒褐色土 (しまりよい)

SK-39

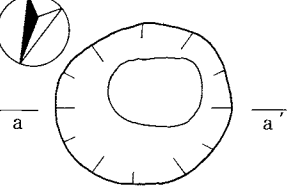


H=38.00m

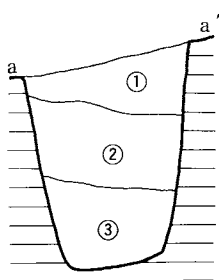


H=38.00m

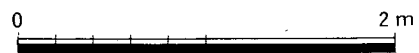
SK-40



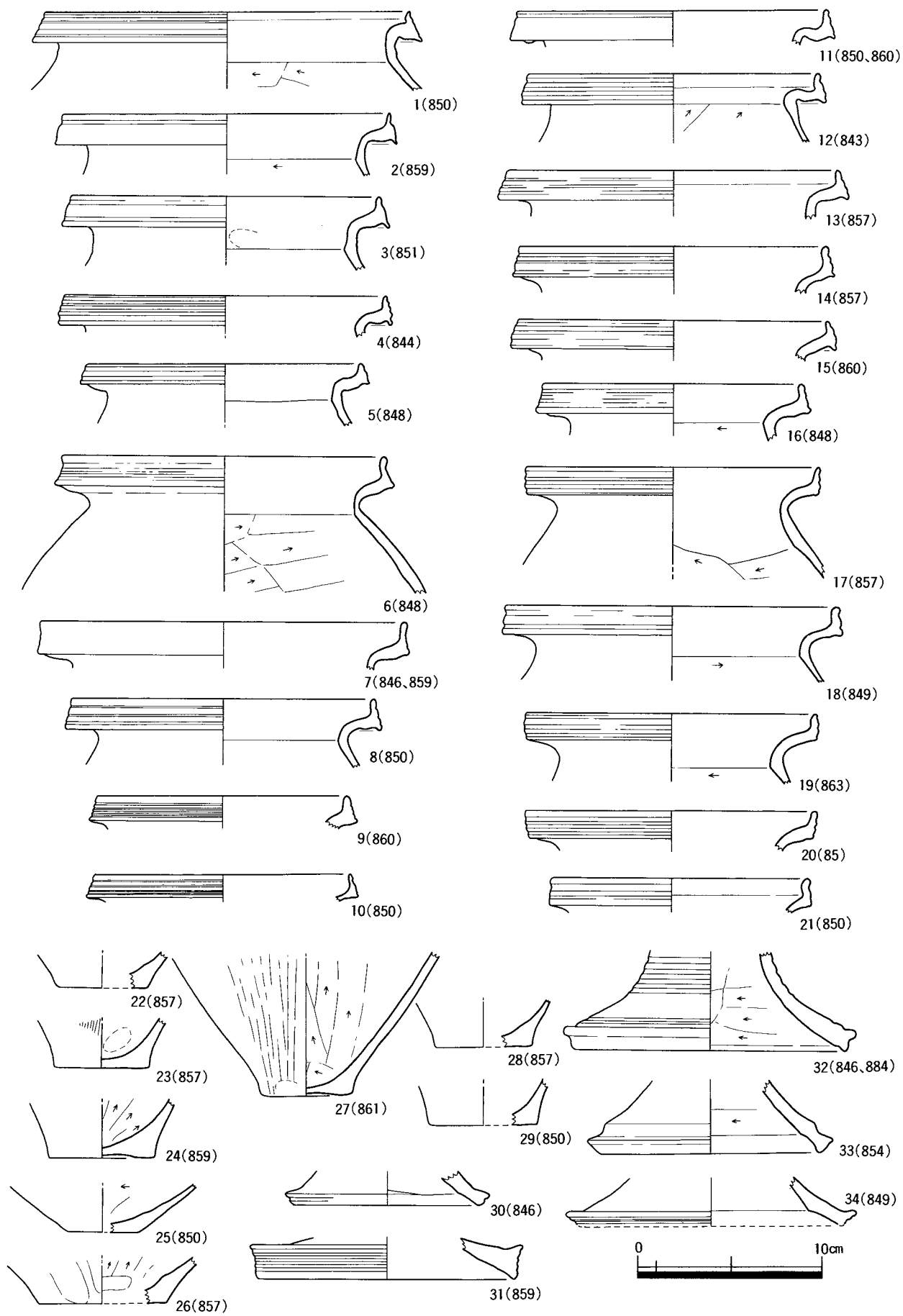
H=34.50m



- ① 暗褐色土 (砂質) (しまりよし)
- ② 茶褐色土 (しまりよし)
- ③ 明茶褐色土



挿図63 山田遺跡 2区土坑図(9)



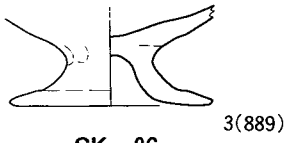
挿図64 山田遺跡2区土坑関係遺物(1)



1(889)

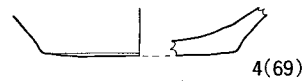


2(889)



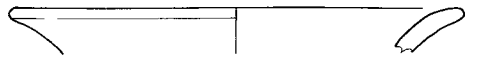
3(889)

SK-06



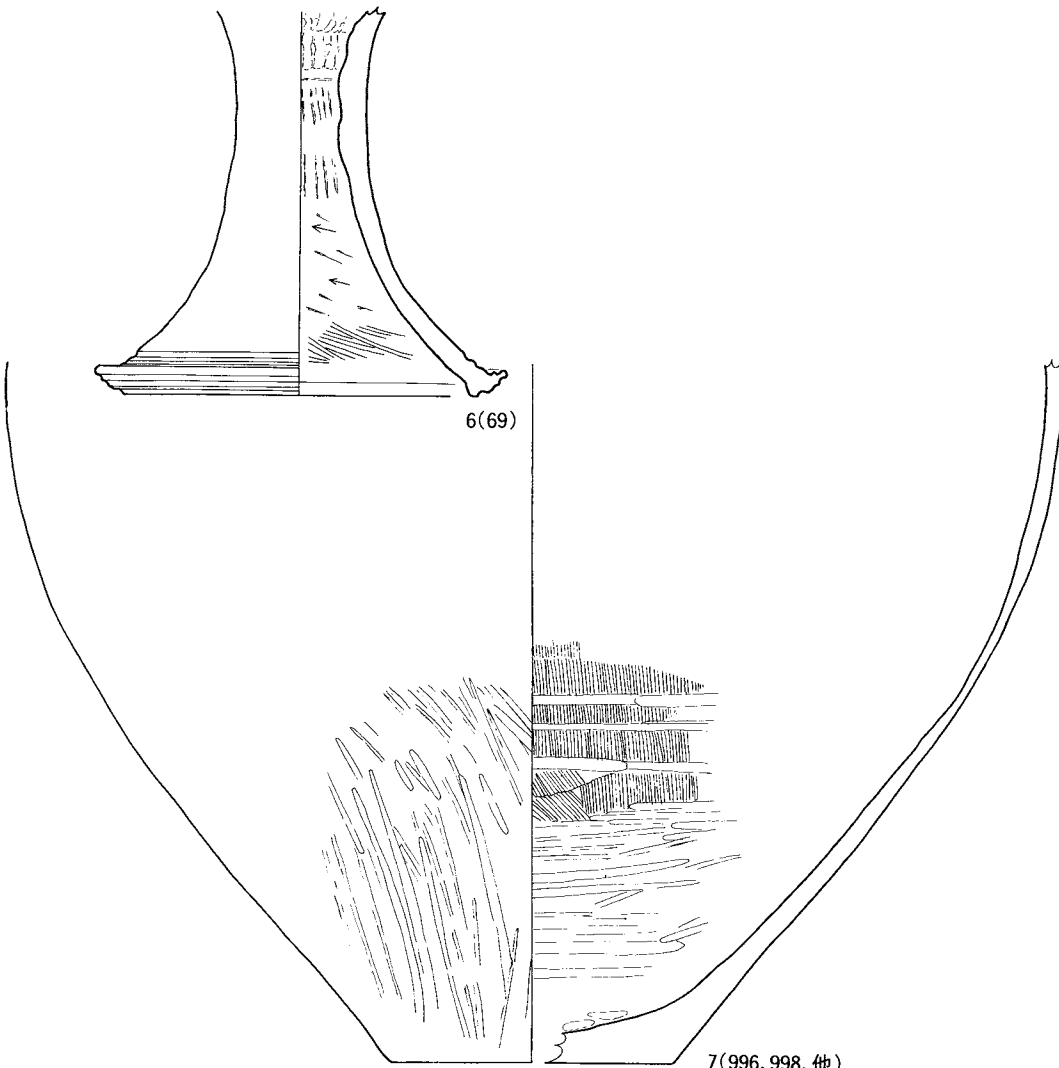
4(69)

SK-29



5(217)

SK-31



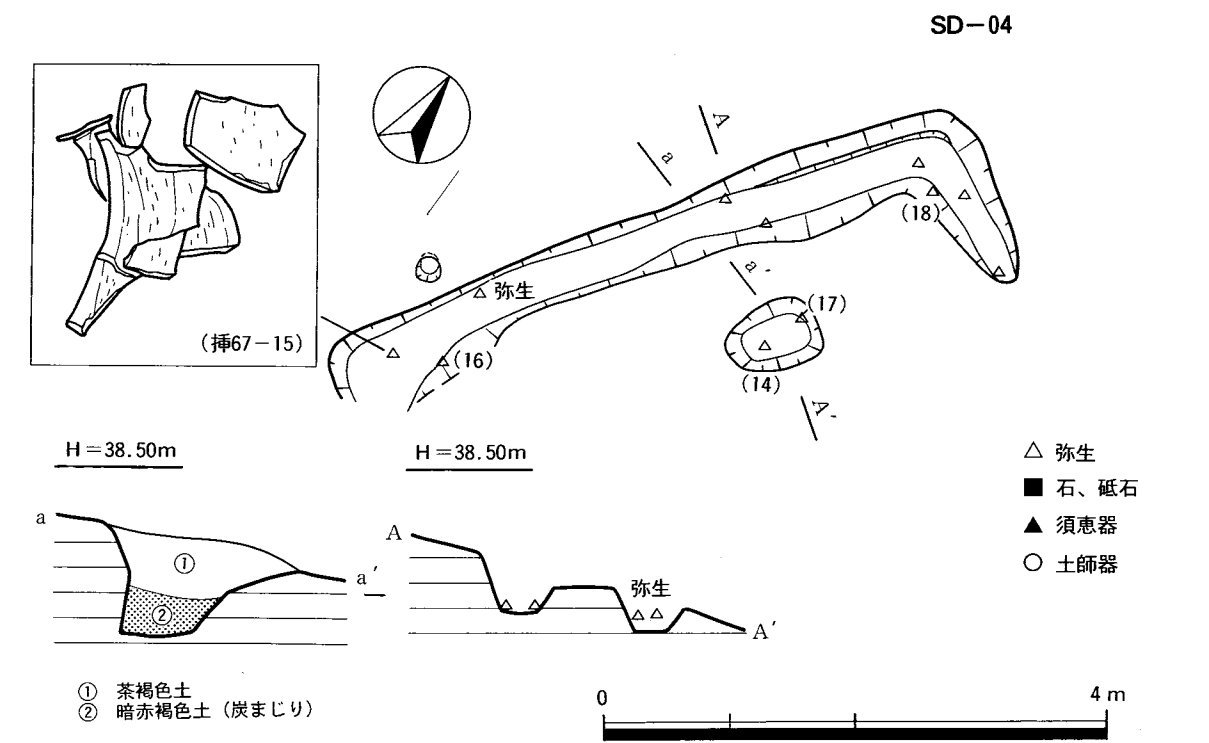
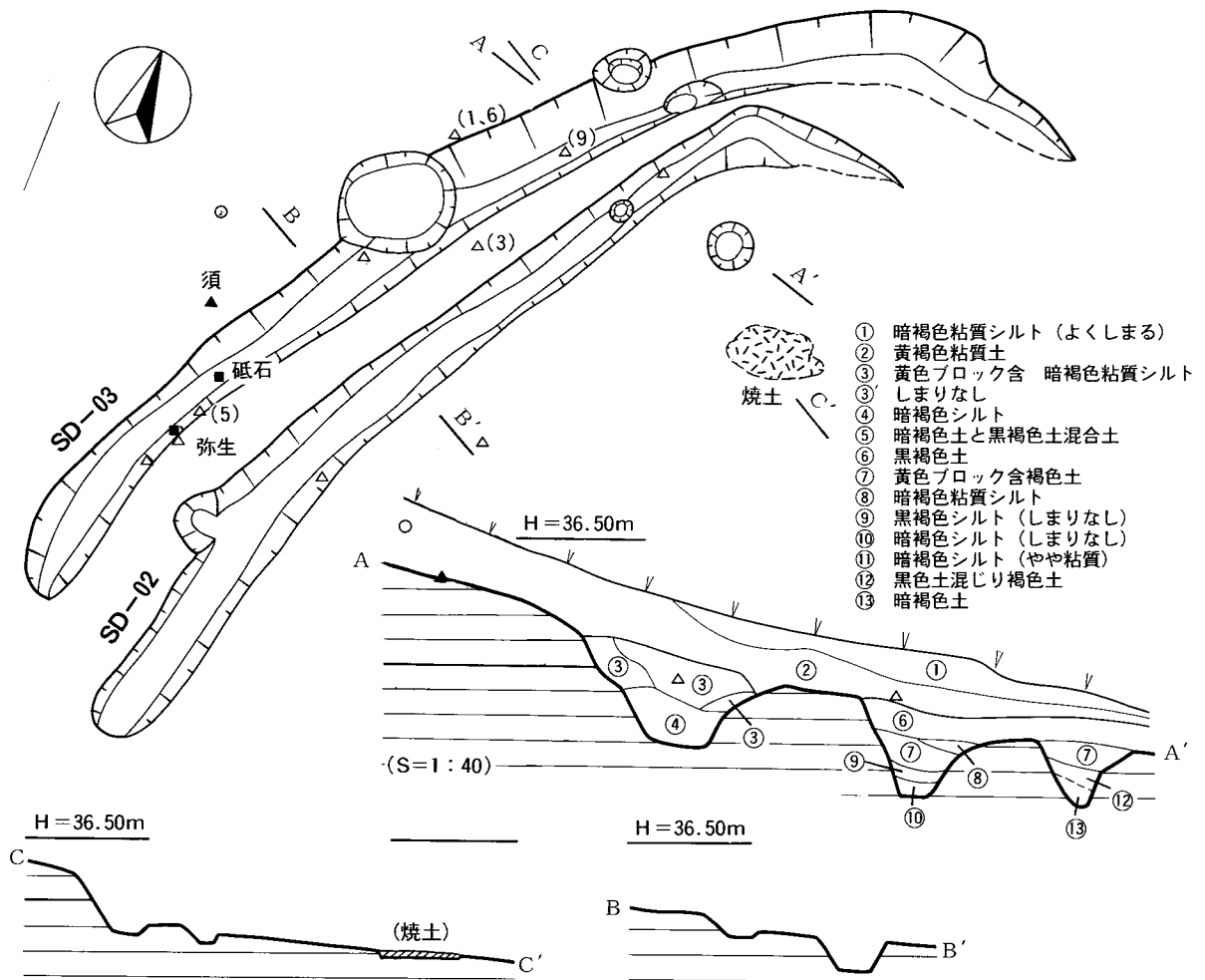
6(69)

7(996, 998, 他)

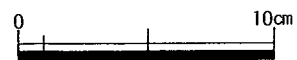
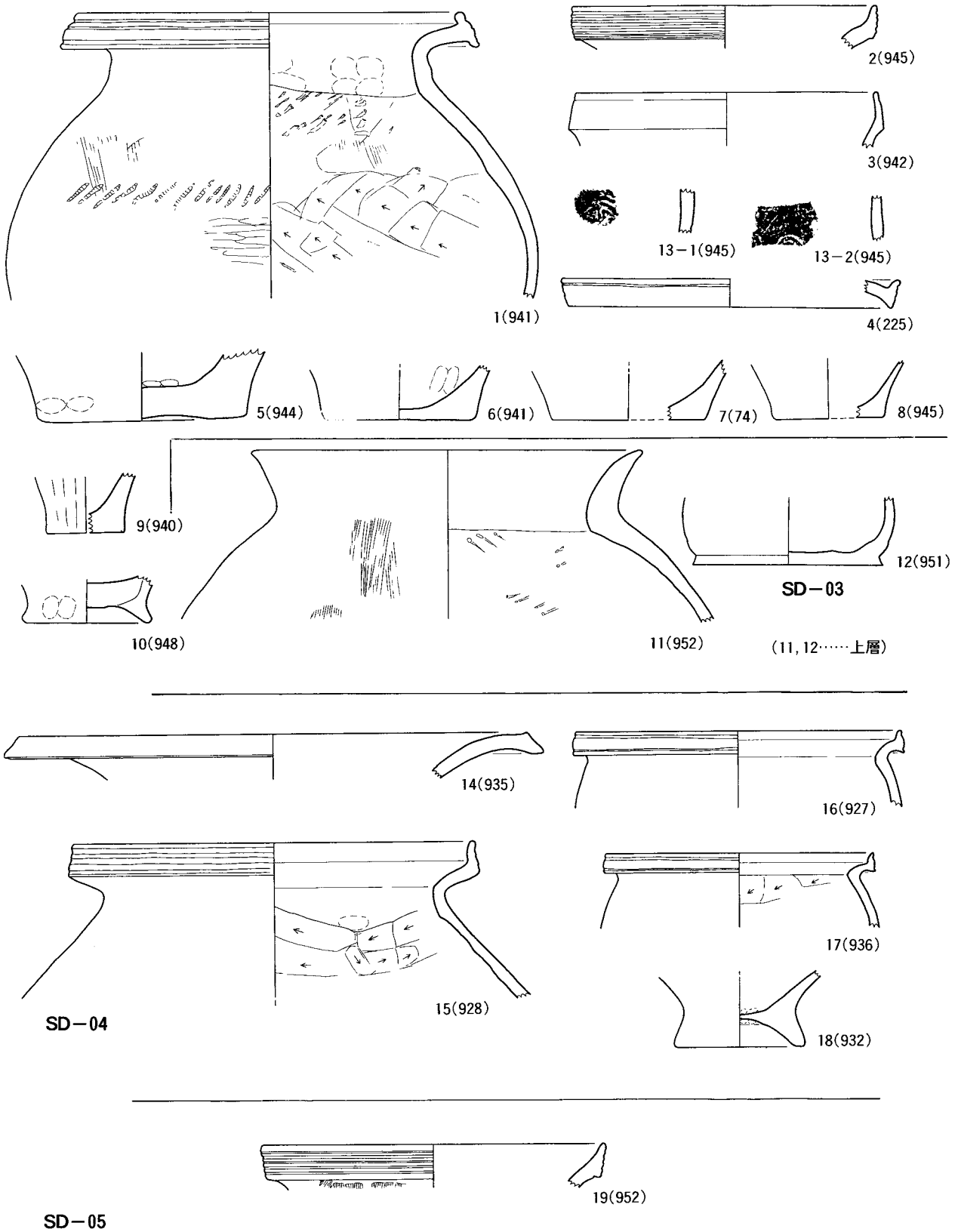
SK-26



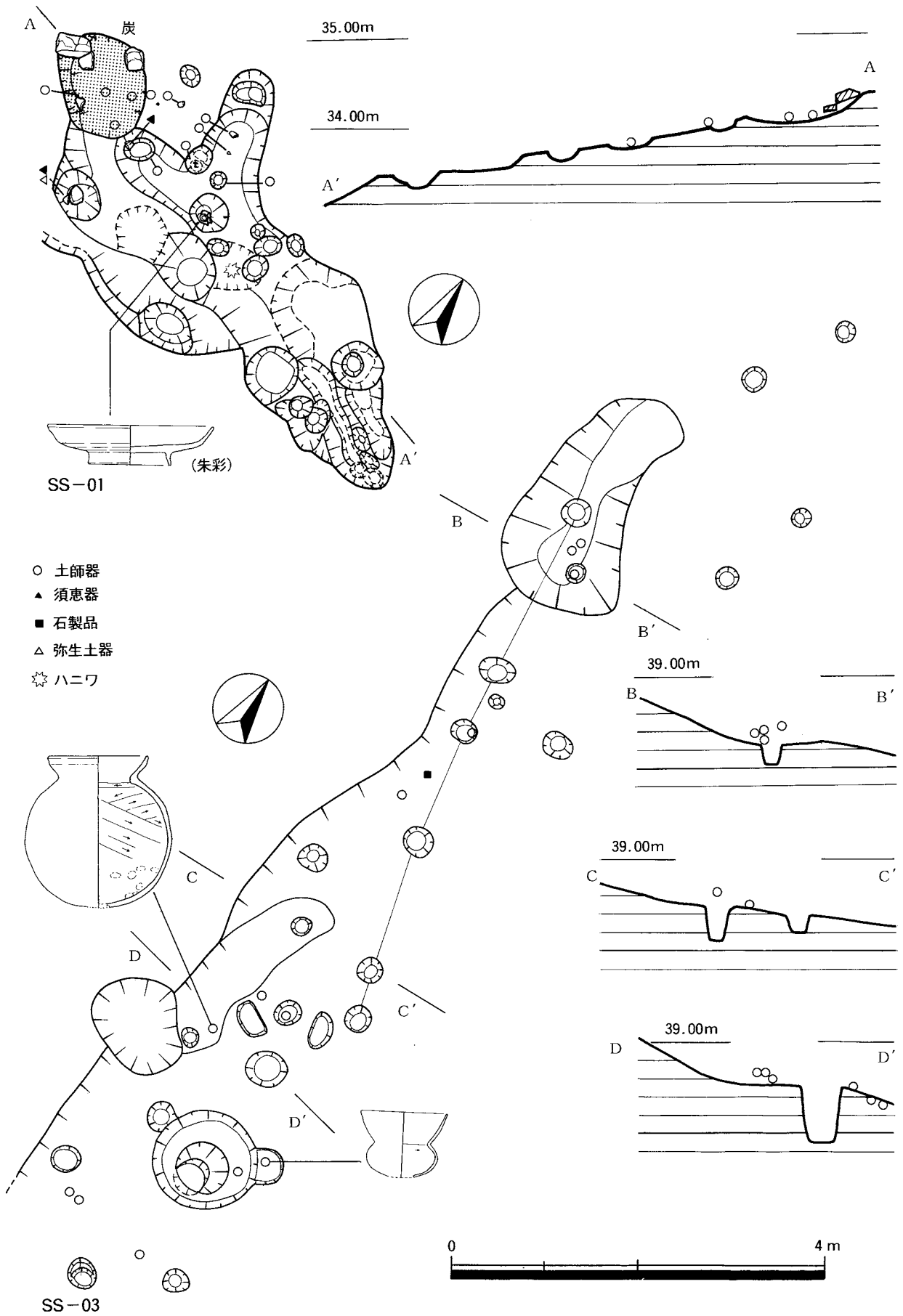
挿図65 山田遺跡 2区土坑関係遺物(2)



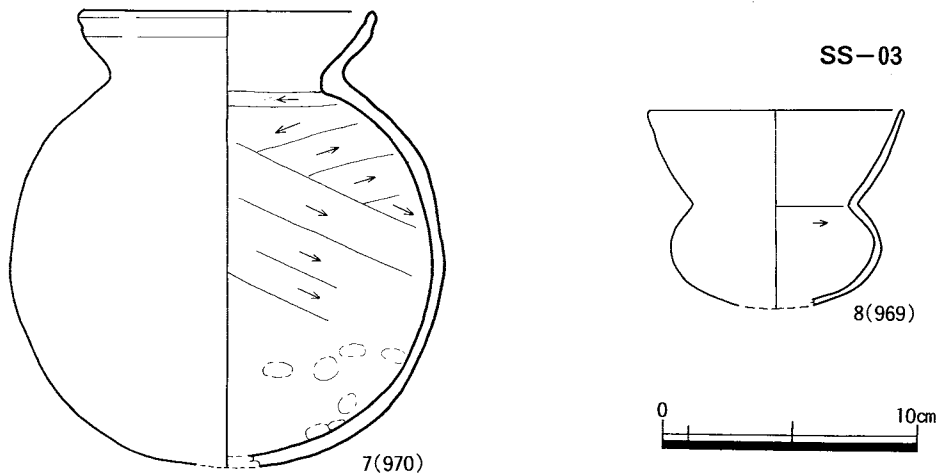
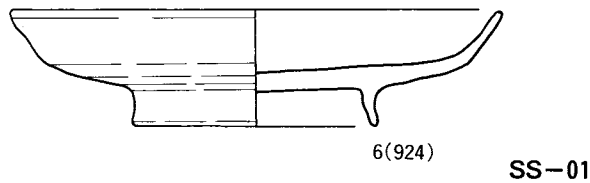
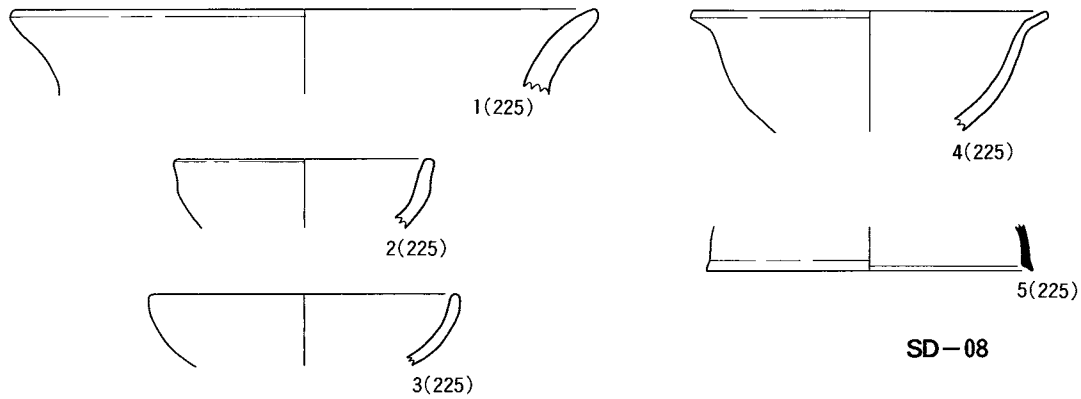
挿図66 山田遺跡2区溝



挿図67 山田遺跡2区溝遺物



挿図68 山田遺跡2区溝遺構遺物



挿図69 山田遺跡2区段状遺構遺物

溝状遺構・段状以降（挿図66～69）

溝状以降は、住居・建物に伴うものと思われる。遺物・立地・形態等からSD02～05・12・13は弥生時代後期前葉、SD06～09は古墳時代中期後葉～後期初頭期と思われる。

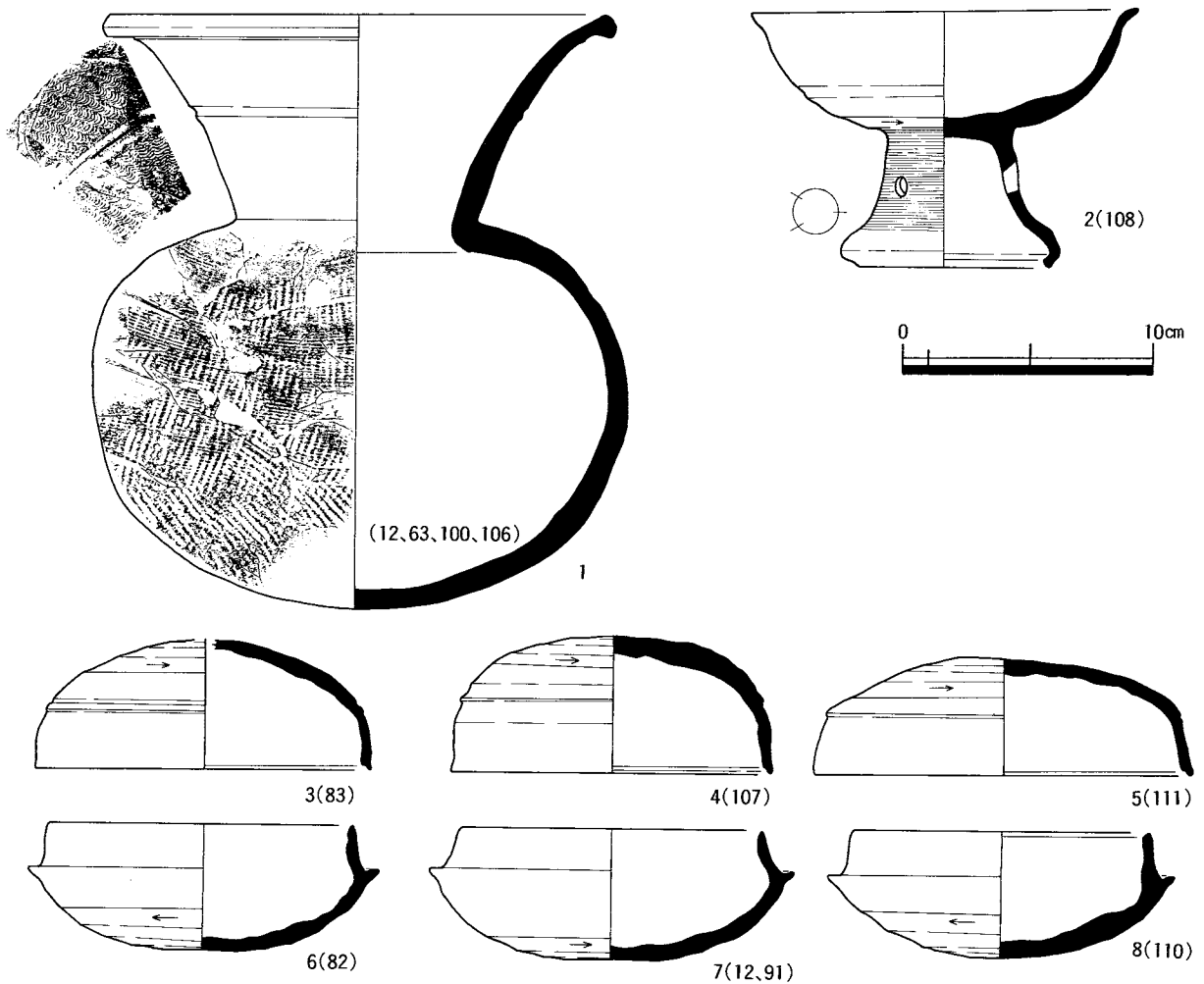
SS01は、標高33.4～34.4mの間の階段状遺構。上方には径1.00×1.15m－深さ20cmの浅皿状の凹みがあり、土師器片が出土した。凹みには石があり炭混じり土が埋まっていた。また中段部からは奈良時代の赤彩土師器皿（69－6）が出土した。

SS03は西寄りの山側高所にあり、南北方向に延びる。柵列状のピット群を伴い、内側1から土師器甕・小形丸底壺等が出土した。青木VII～VIII期にあたる。

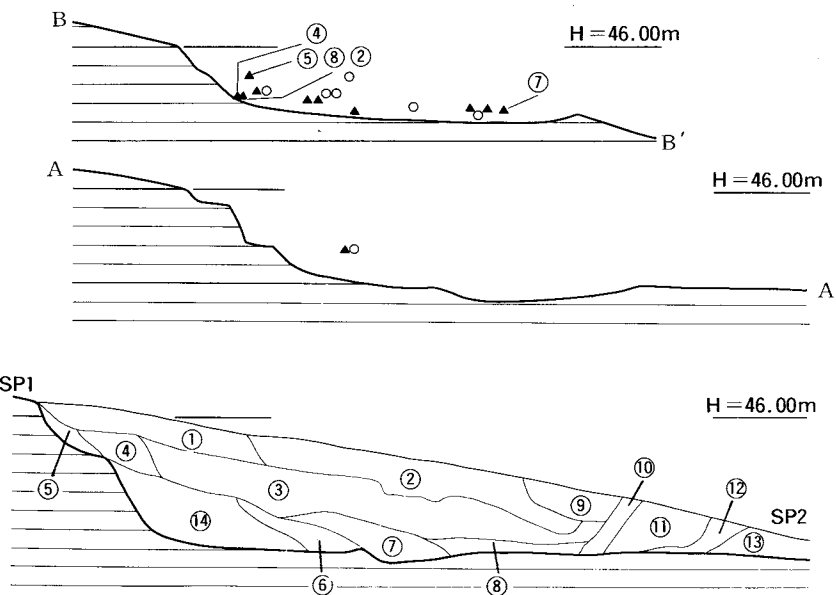
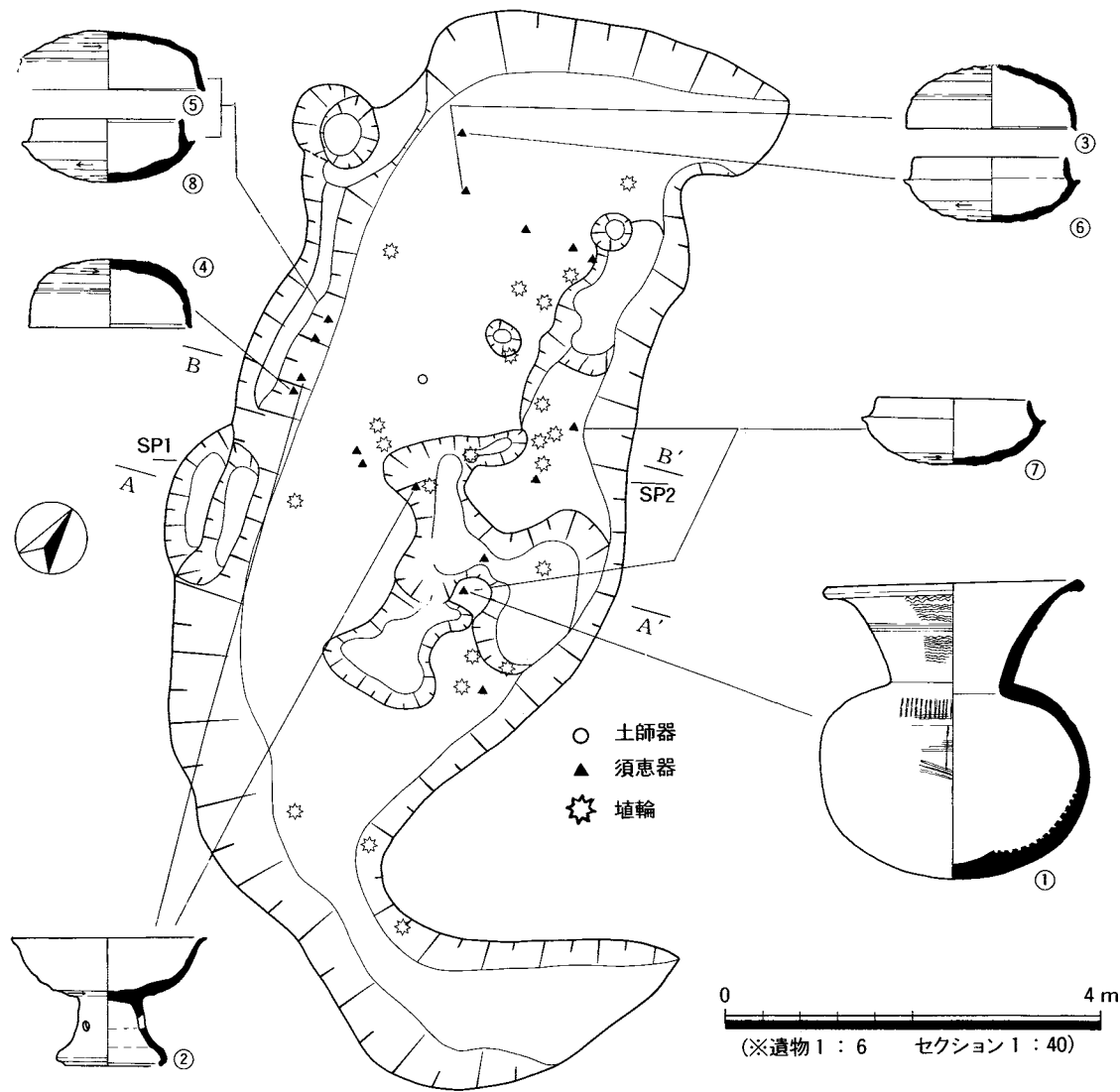
谷の上1号墳(新山26号墳) (挿図70)

山田遺跡2区(旧4区)北側の丘陵上に周溝と思われる幅4m、深さ0.8mのコの字状の溝があり、内部より埴輪、須恵器壺1、蓋坏蓋3・身3、無蓋高坏1、土師器片を検出した。10m強の規模の円墳と推定され、戦後の牧草地造成による削平を受けて消失したと思われる。周辺では当該期の須恵器、埴輪の散布も見受けられた。現状ではほかに古墳の痕跡は認められなかったが、元来尾根の上下にも数基の古墳が存在し、小規模な古墳群を形成していたものと思われる。

遺物はMT15、TK10併行と思われ、古墳時代後期前半期に前後二次期にわたって使用される。この地での集落が廃絶した後に、南側の山田古墳群の次に続いて築造された格好となる。



挿図70 谷ノ上1号墳遺物



- ① 暗茶褐色土
- ② 黒色土
- ③ 茶褐色土 (黒色、黄褐色が少し混在)
- ④ ③より少し明るい
- ⑤ ④より少し明るい
- ⑥ 黄褐色土 (黄色土が混在)
- ⑦ 暗茶褐色土 (黒色が混在)
- ⑧ ③より少し暗い
- ⑨ 暗茶褐色 (黄色混じり)
- ⑩ 黄色土 (地山と同じ)
- ⑪ 茶褐色土
- ⑫ 明茶褐色土
- ⑬ 黄褐色土
- ⑭ 黄褐色土

挿図71 谷ノ上1号墳遺構

5. 山田遺跡3区 (挿図72~84、図版39~43)

竪穴住居跡1・段状遺構2・土坑11(落し穴状2・貯蔵穴4等)・掘立柱建物(鍛冶工房跡)・伏せ鉢遺構2・その他散布地・焼土・炭溜り等を確認した。特定には至らなかったが、山田4号墳の墳丘下にも住居跡状の加工痕跡と土器の出土があった。南側斜面の竪穴住居跡・段状遺構と北側斜面第1テラスの貯蔵穴状土坑は一連のものと考えられる。

縄文後晩期・弥生前期・古墳時代前期・奈良時代・古代末~中世の各期があるが、各時期共に単発的である。

竪穴住居跡

S101 (挿図73、図版39) 山田5号墳から南に派生する尾根上の平坦面に位置する。床面標高37m。後に9号墳が重複して築かれ、床面中央部は掘削を受けて凹む。長方形を呈し、東西5m×南北4m(床面4.5m×3.2m)。壁面に沿って幅20~30cm、深さ10cmの側溝が巡る。壁面最大高約1m。床面に3個のピットを検出した。北側奥中央に径60cm、深さ15cmの円形ピットP1がある。支柱は中央部に東西2本があったと考えられるが、西側にP3を確認したのみである。中央西側で土師器片、南壁外で黒耀石・土師器片が出土した。出土状況からほとんどが後世の古墳関係(SK04)や流入品と思われる。

僅かに古式土師器片があることと、遺構の切合い関係より古墳時代前期のものとする。

段状遺構 (挿図74)

山田4号墳下の標高約38~39mの南側斜面に位置する。SS01は幅40cm、深さ5cmの溝が等高線に並行してコの字状に巡り、長さ6m、幅1~2mのテラスを形成する。床直上で古式土師器の甕・高坏を検出した。埋土中には炭が混じる。SS02は東側に隣接して存在し、長さ6m、幅1~2mを測り、土師器・鉄器を検出した。いずれも全面が傾斜により流失しているが、埋立整地され住居・建物が存在していたものと考えられる。時期は古墳時代前期である。

土坑 (挿図75~78、図版39~41)

11基を検出した。落し穴状土坑2・貯蔵穴4・古墳周溝内土坑1・その他4である。

落し穴状土坑 (SK08・09) 一応、縄文時代の落し穴としたが不確定な面もある。

SK08は標高37mの南向き尾根肩部に立地する。上縁楕円形(1.75×1.45m)、下縁長方形(90×60m)、深さ1.35m。底面は平坦、底面ピット等はない。SK09は第2テラスにあり、製鉄関係建物の溝肩に接する。標高30mの北向き山裾斜面である。1.34×1.00mの楕円形を呈し、深さ0.85m。底部は0.65m×0.50mで底がすぼまる。中央に底面ピットを持つ。

貯蔵穴 (SK01~03・10) 標高約50mの第1テラスに位置する。丘陵尾根の北側肩部の幅14×奥行き5mの平坦地に4基の土坑が弧状に並ぶ。東からSK01、02と10(切合重複)、や

や離れて03が存在する。断面フラスコ形を呈し、貯蔵穴と思われる。規模は底面径1.80～2.45 m、深さ1.5～2.0mと大型で、底面は中央がやや凹むがほぼ平坦に仕上げられる。

いずれも上面の検出面で炭の分布・堆積が認められ、S K01では2固体の大型土師器壺が立て並べられた状態で出土した。てづくね土器4個も伴う。S K02でも小形の土師器甕1が出土した。最終段階での祭祀の存在を示唆する。貯蔵穴内部の遺物は、僅かにS K02内の土器細片1点のみである。

埋土状況は、基本的に1次崩落・流入→2次流入→祭祀坑・祭祀関係炭混土→後世自然堆積である。S K01は一次崩落流入後、浅い状態のままに整地再活用、S K02・10は02崩落後10を新しく造り、さらに10は底を深く掘り直し再活用する。S K03は底面がやや丸味を帯び、壁面の掘り込みも不十分であり未完成の可能性もある。築造の順序はS K02→(03)、10→01が考えられる。位置的にS K01・03・10は共存していた可能性が高い。

S K01壺1は口径30.5、器高62、最大胴径54.5cm。ハの字に開く複合口縁で胴体部倒卵形、底部は偏平(径11cm)である。内外面ハケメ仕上げ。黄褐色を呈し、焼成はやや良、胎土は白色粒混り緻密。壺2も1とほぼ同様で、口径30.5、器高62、最大胴径50.5cm。ハの字に開く複合口縁に当卵形の胴体部を持ち、底部も偏平(径11cm)である。自重による歪みのためか最大胴径は中央位にき、接合部もやや角張る。内外面ハケメ仕上げ。黄褐色を呈し、焼成はやや良、胎土は白色粒混り緻密。てづくね土器3～6は小形で薄めの3・4、やや大型で厚めの5・6がある。いずれも指圧痕跡が良く残り、褐色～黒褐色、やや軟質である。3・4は口径5.0、器高5.0cm。5は(推)口径7.0、器高8.0cm。6は口径9.5、器高10.8cm。

S K02甕7は手捻りの粗雑な作りである。複合口縁であるが、稜部は丸みを帯び端部は波を打つ。内面は口縁・体部共に粗いヘラケズリ。赤褐色を呈し、胎土は緻密、やや軟質。

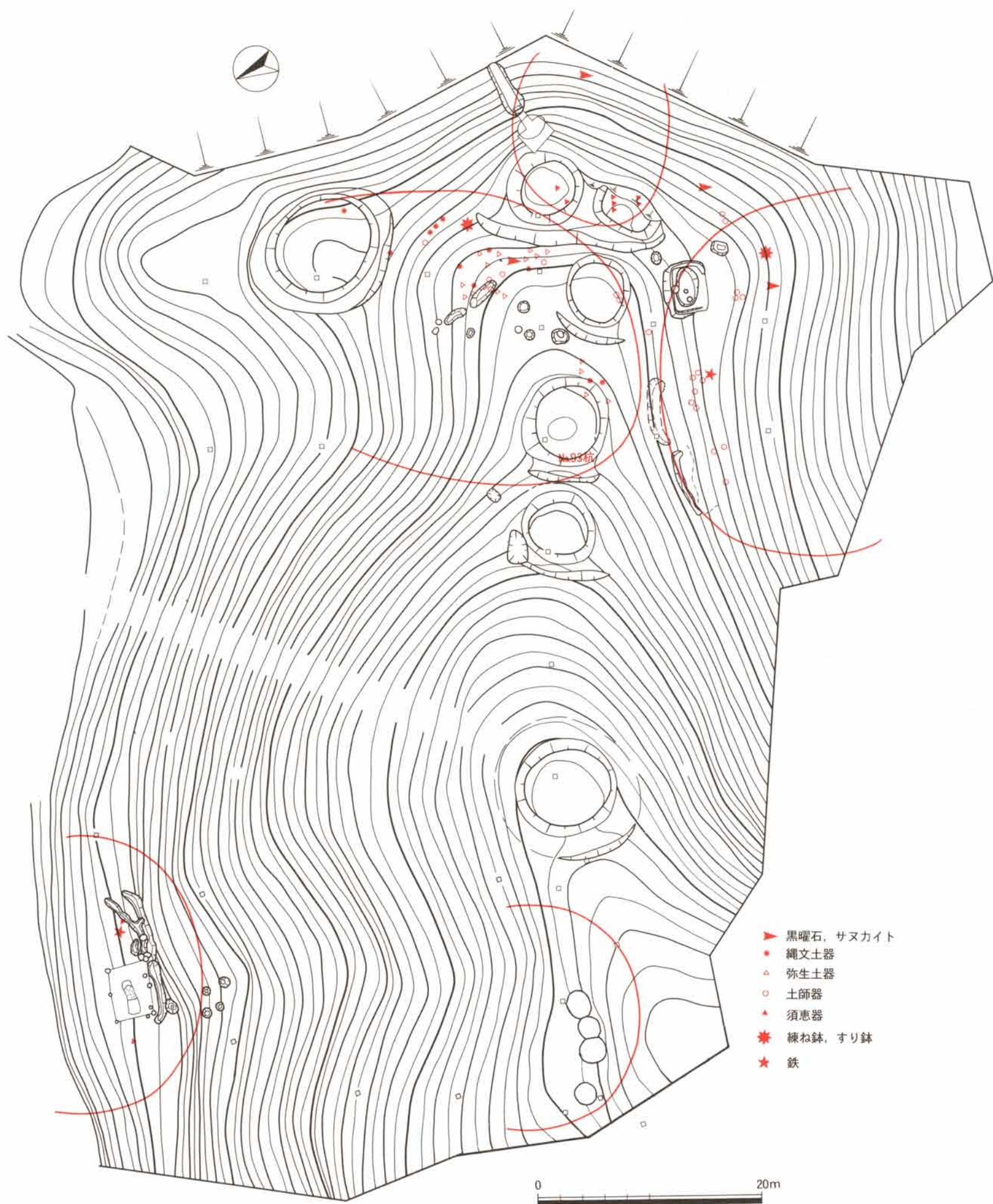
壺1・2は青木V・VIに該当し畿内庄内式新段階に相当する。壺類を貯蔵穴廃棄に伴う関連遺物とすると、古墳時代初期前後のものと考えられる。

その他土坑(S K05～07・11) 径80～1.65m、深さ30～45cmの比較的小形で浅い円形・楕円形土坑。5号墳周辺の標高38～41mの丘陵尾根突端部の平坦面や緩傾斜地に分布する。S K06・11では底部埋土に炭の混在がみられた。一律には語れないが、位置的に伏鉢遺構との関連もうかがえ、平安末～中世の古墓の可能性もある。

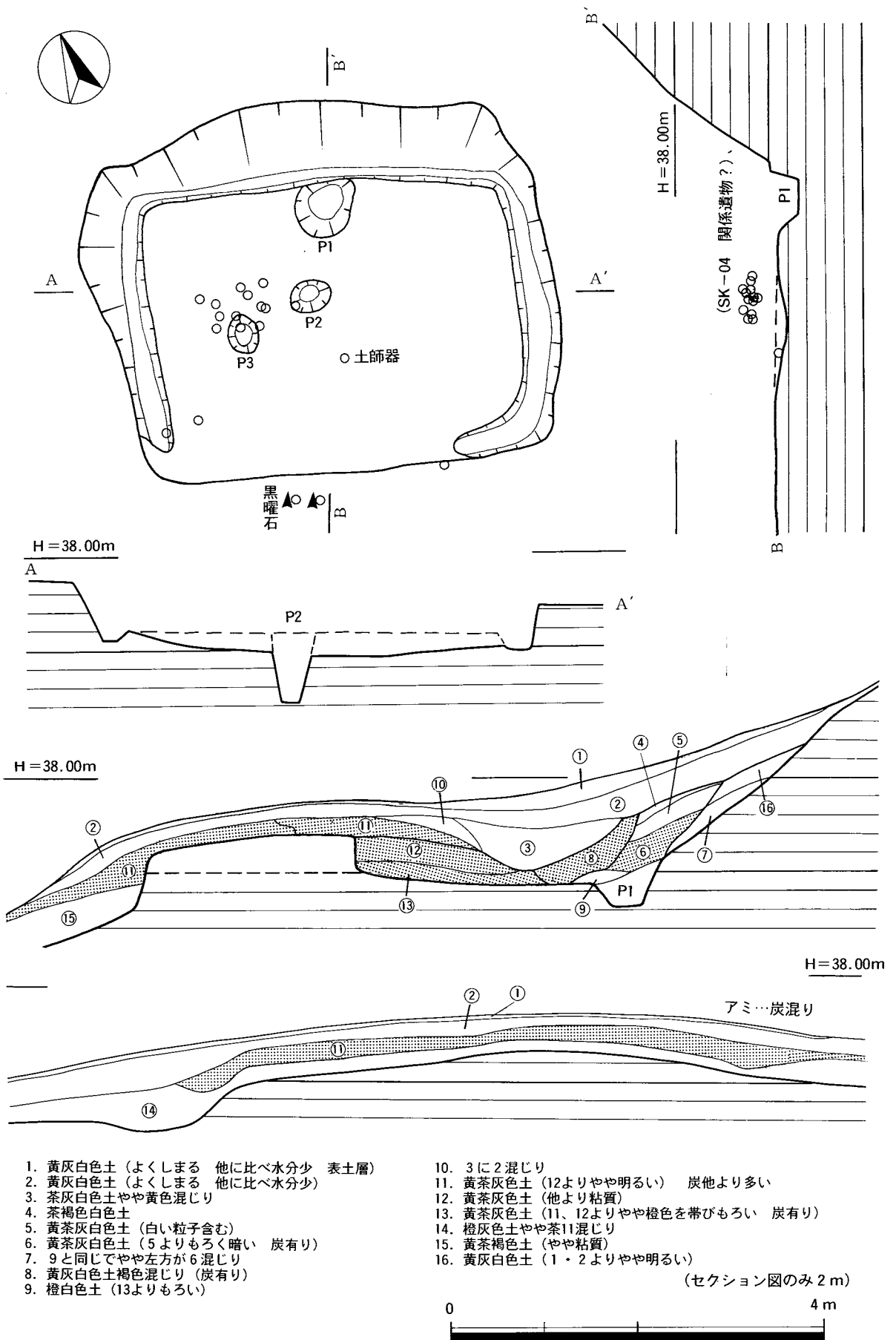
鍛冶関係遺構(挿図80～82、図版42・43)

北側山裾斜面の第2テラスに位置する。谷間の水田に面し、比高差は6～7m。床面標高は約30.5mである。掘立柱建物と炉跡状の炭・焼土堆積があり、鉄滓・鋤先・須恵器等が出土した。また、後背の上方斜面部では数箇所の焼土・炭溜りを確認した。

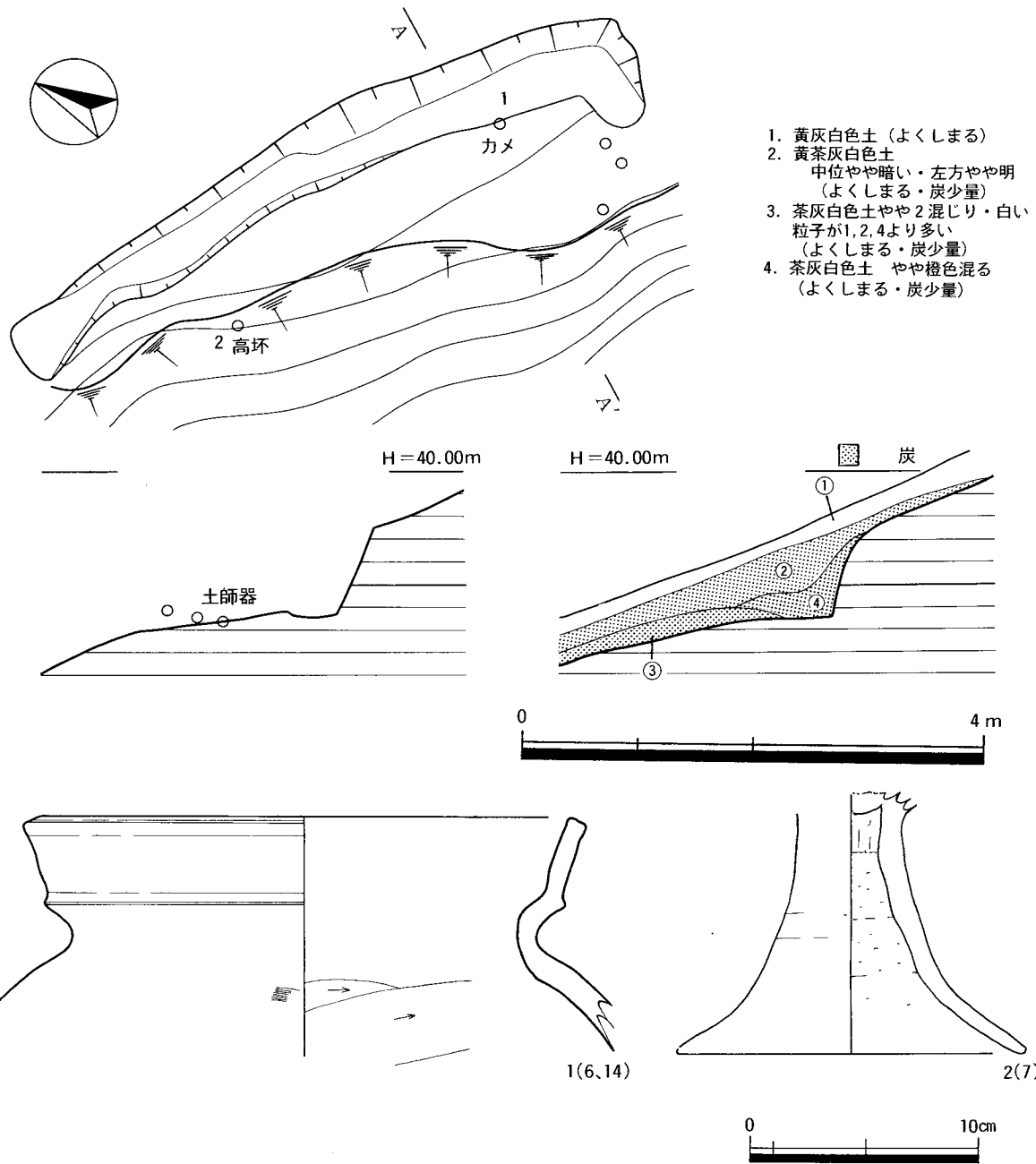
テラスは山側をL字に切削加工し、北側を埋め立てた東西約22.6m、南北約6.3mの東西に長いテラスである。東側2/3(A区)と西端側(B区)に分かれ、A区は東西約15m、南北4m、壁際を幅40～50cm―深さ10cmのコの字状の溝で区画する。B区は約40cm高い位置にあり、東西5m、南北2～3mと狭く溝などの施設は見受けられない。A区の西半部に掘立柱建物



挿図72 山田遺跡3区遺構分布図



挿図73 山田遺跡 3区第1住居跡

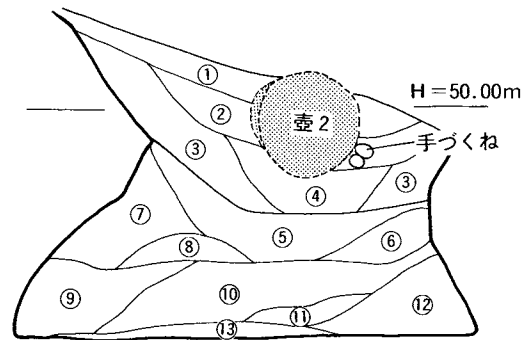
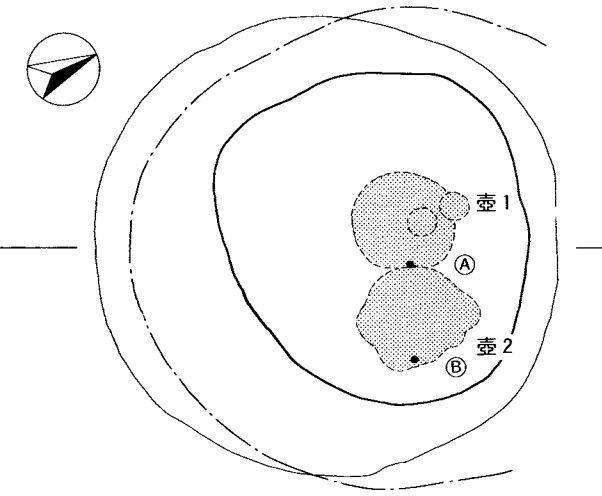


挿図74 山田遺跡 3区段伏遺構

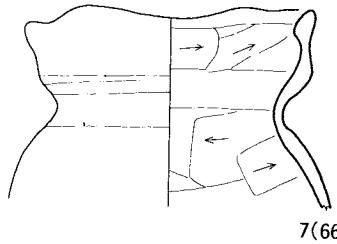
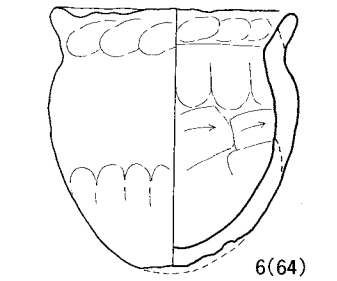
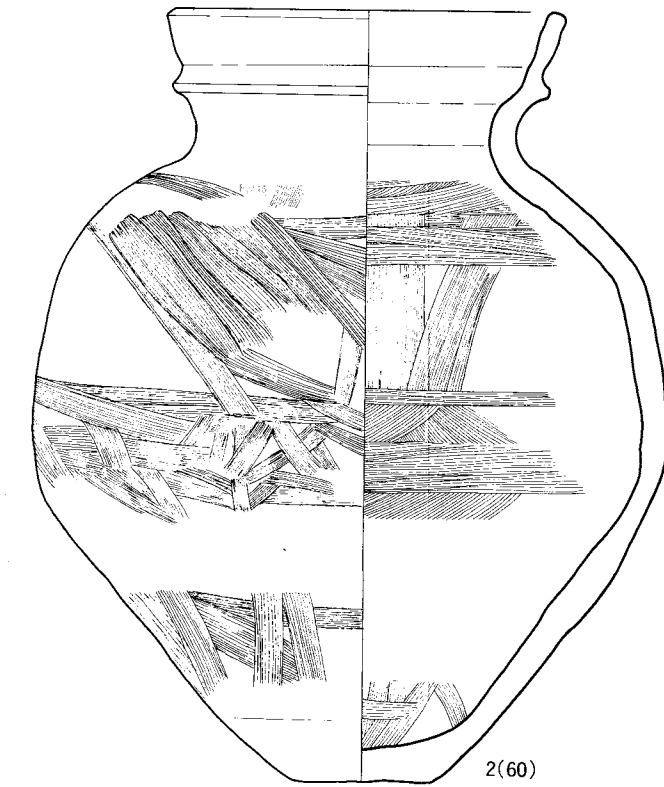
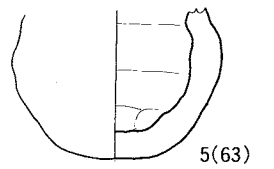
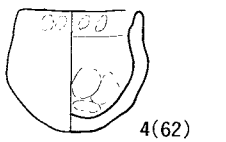
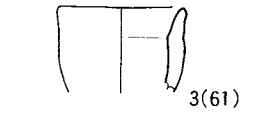
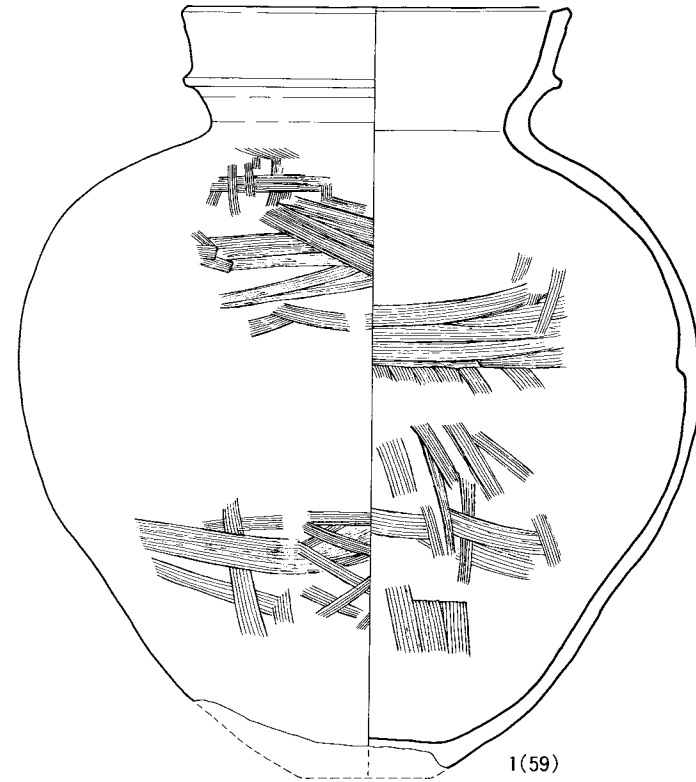
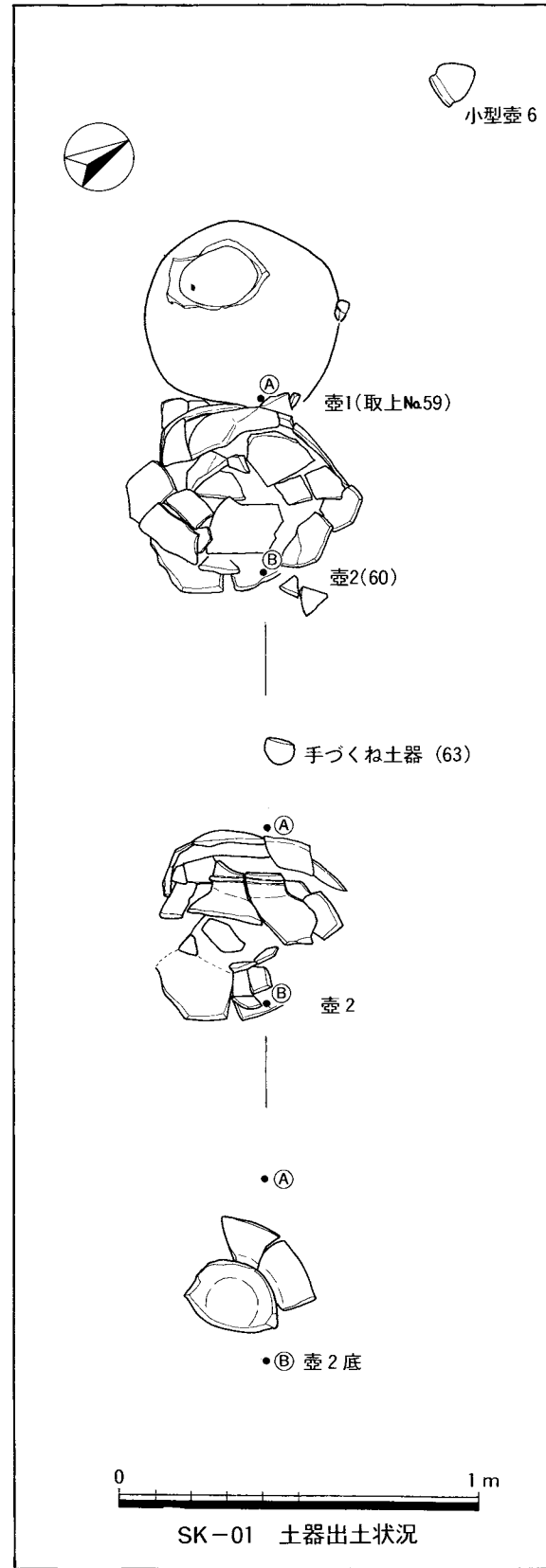
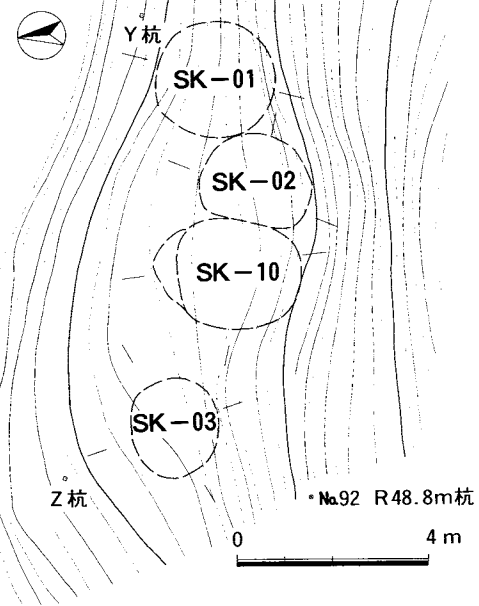
S B01があり、建物内部西側中央に鍛冶炉と思われる炭・焼土堆積の凹みがあった。東半部は遺構もなく遺物も少ない空白地である。

掘立柱建物跡は、梁間3.6×桁行4.8m（12尺×18尺）、1間×2間で東西に長い。内部西側中央に東西3.1×南北1.0mの長方形に、炭・焼土混りの堆積があり、特に中央が濃く盛上がり、厚く堆積する（0.7×1m－厚さ約35cm）。底面は不規則な凹凸面をなす。また遺構中央部から谷側に向けた約1×1.8mの範囲に炭・焼土が掻き出されたような状態で分布し鉄滓や鉄器が散乱していた。

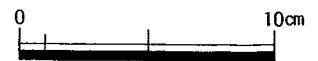
SK-01



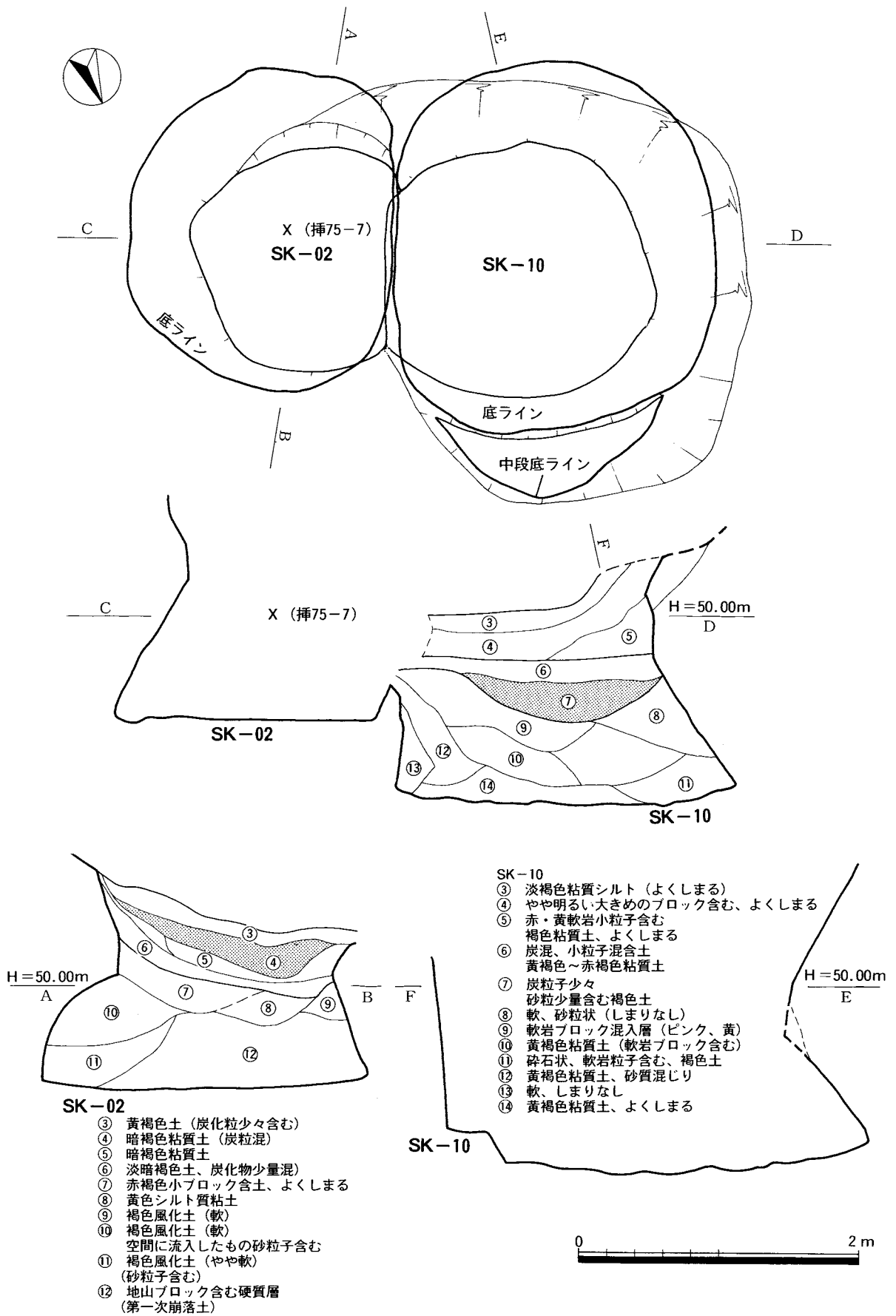
- | | |
|------------------|--------------------|
| ① 暗黄褐色粘質土 | ⑨ 黄～赤褐色ブロック含む褐色土 |
| ② 暗褐色粘質土(軟) | ⑩ 黄褐色粘質土 |
| ③ 淡茶色粘質土(よくしまる) | ⑪ 赤色軟岩ブロック含む褐色粘質土 |
| ④ 淡茶色粘質土(やや軟) | ⑫ 崩落土(赤色軟岩小ブロック含む) |
| ⑤ 暗黄褐色粘質土 | ⑬ 黄褐色粘質土 |
| ⑥ 軟岩小ブロック含む、やや軟) | |
| ⑦ 暗黄褐色粘質土 | |
| ⑧ 褐色風化土(軟) | |
| ⑧ 軟岩ブロック | |



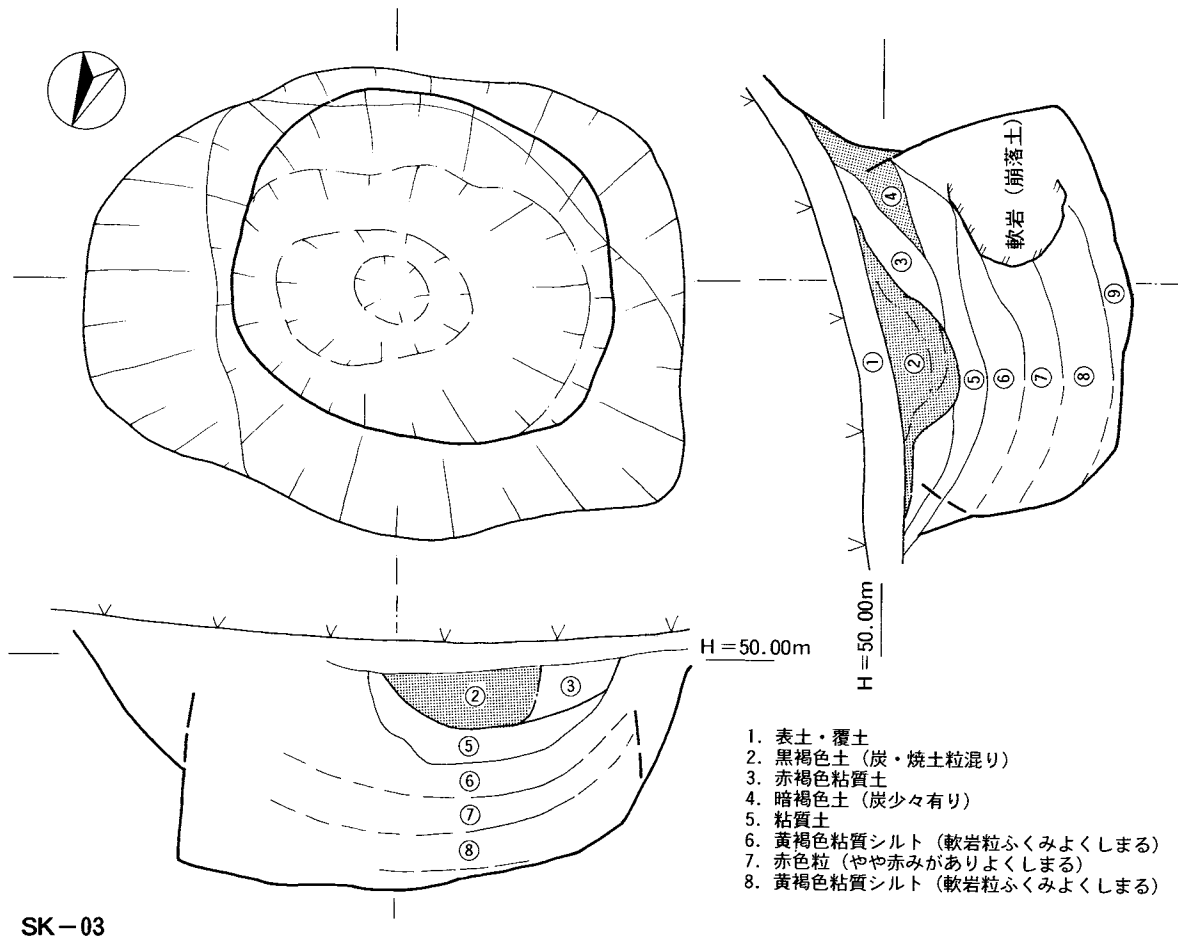
- 1, 2 (S=1/6)
 3~7 (S=1/3)
 1~6...SK-01
 7...SK-02



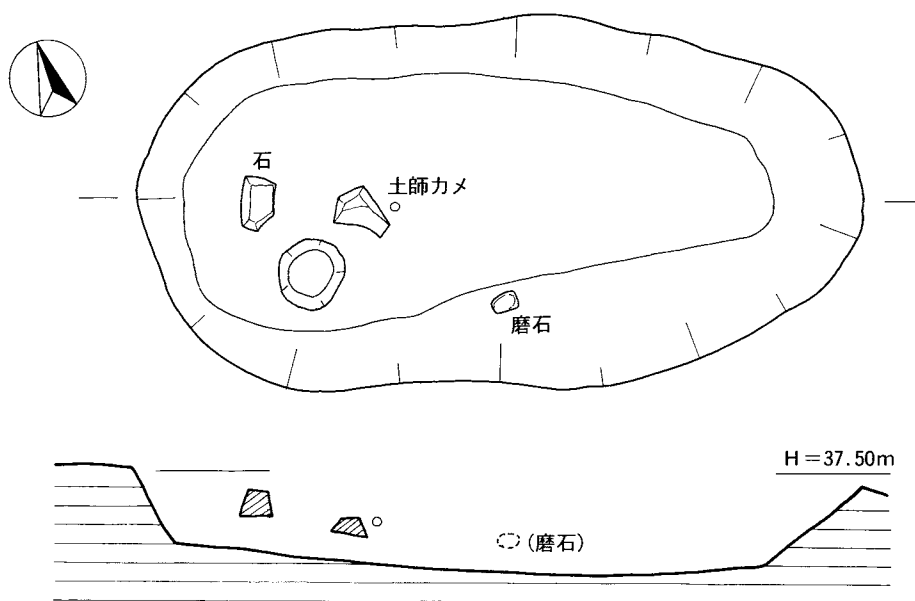
挿図75 山田遺跡3区第1土坑遺溝遺物



挿図76 山田遺跡3区第2、第10土坑



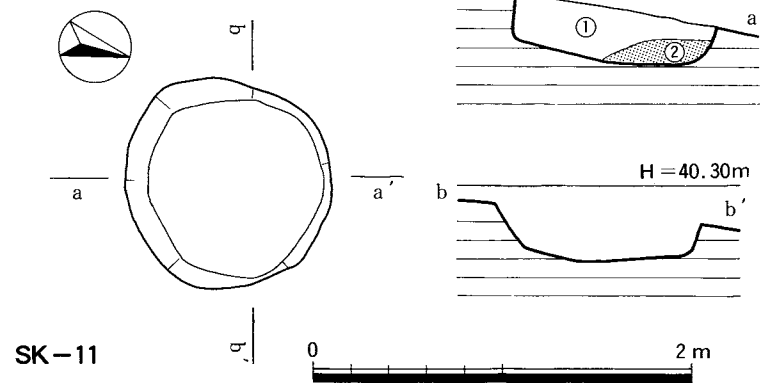
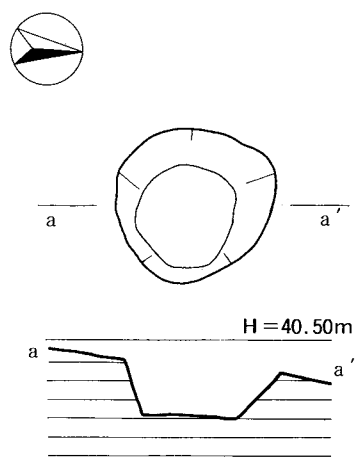
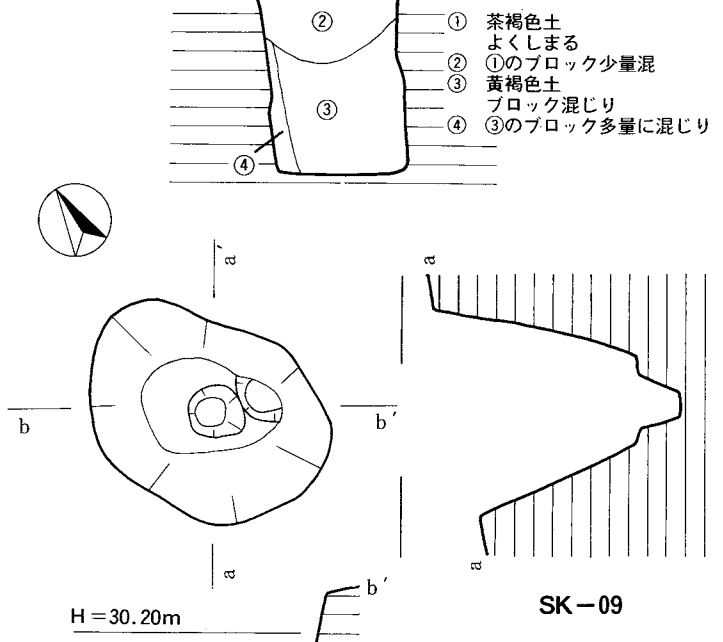
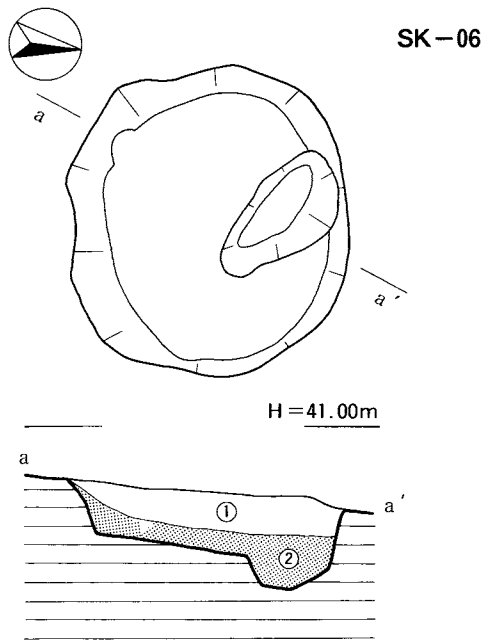
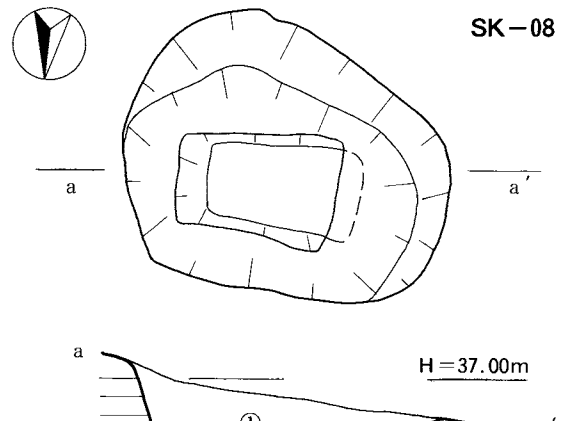
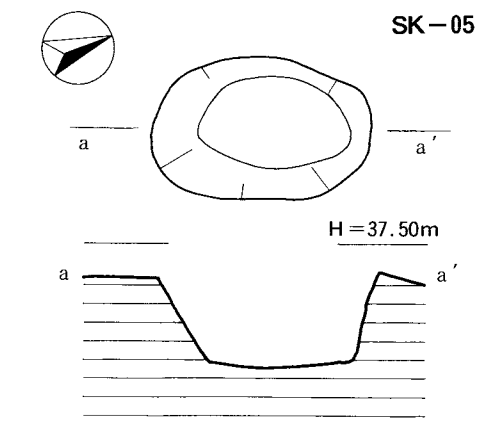
SK-03



SK-04



挿図77 山田遺跡3区第3・4土坑



挿図78 山田遺跡3区その他土坑

分布は建物北側面を越えて外側に広がっており、この方面には明瞭な壁はなく、吹き抜けか筵（むしろ）などで覆った程度の簡単な作りであったようである。

出土した鉄滓は、成分分析したものはすべてが精錬鍛冶滓であった（第V章特論3参照）。この結果に従えば、第2テラス遺構は鍛冶工房跡と思われ、中央の炭・焼土堆積遺構は精錬鍛冶の炉としての可能性が高く、下部構造が残ったものと思われる。

しかし、外郭3.1×1.0mはもとより、円形中央部0.7×1mという大きさは、鍛冶炉の規模としてはやや大きすぎるように思われる。規模・形態は、むしろ竪型炉のそれに類似している。転用や再活用といったことも考えられ、上部構造や施設の性格付けについては、さらに検討が必要である。

遺物は、鉄滓・U字状鋤先・須恵器（蓋・坏・皿・甕破片）等があるが、少量である。建物・炉跡部分は試掘調査時のトレンチに当たっており、この際にも鉄滓・U字状鋤先等が出土している。また、整地前の旧斜面表土面より古墳時代後期の須恵器蓋坏が出土した。

時期は、7世紀後葉から平安初期までの様相が窺えるが、良好な遺物が少なく決め手を欠く。基本的に奈良時代後半期を主体とするものと思われる。

伏せ鉢遺構（挿図83、図版77）

尾根突端の南北両斜面の二箇所で見出した。共に、12世紀以降の古代末～中世初期のものと思われる。性格については供養・古墓のほかには鎮魂祭祀跡が考えられる^(註)。

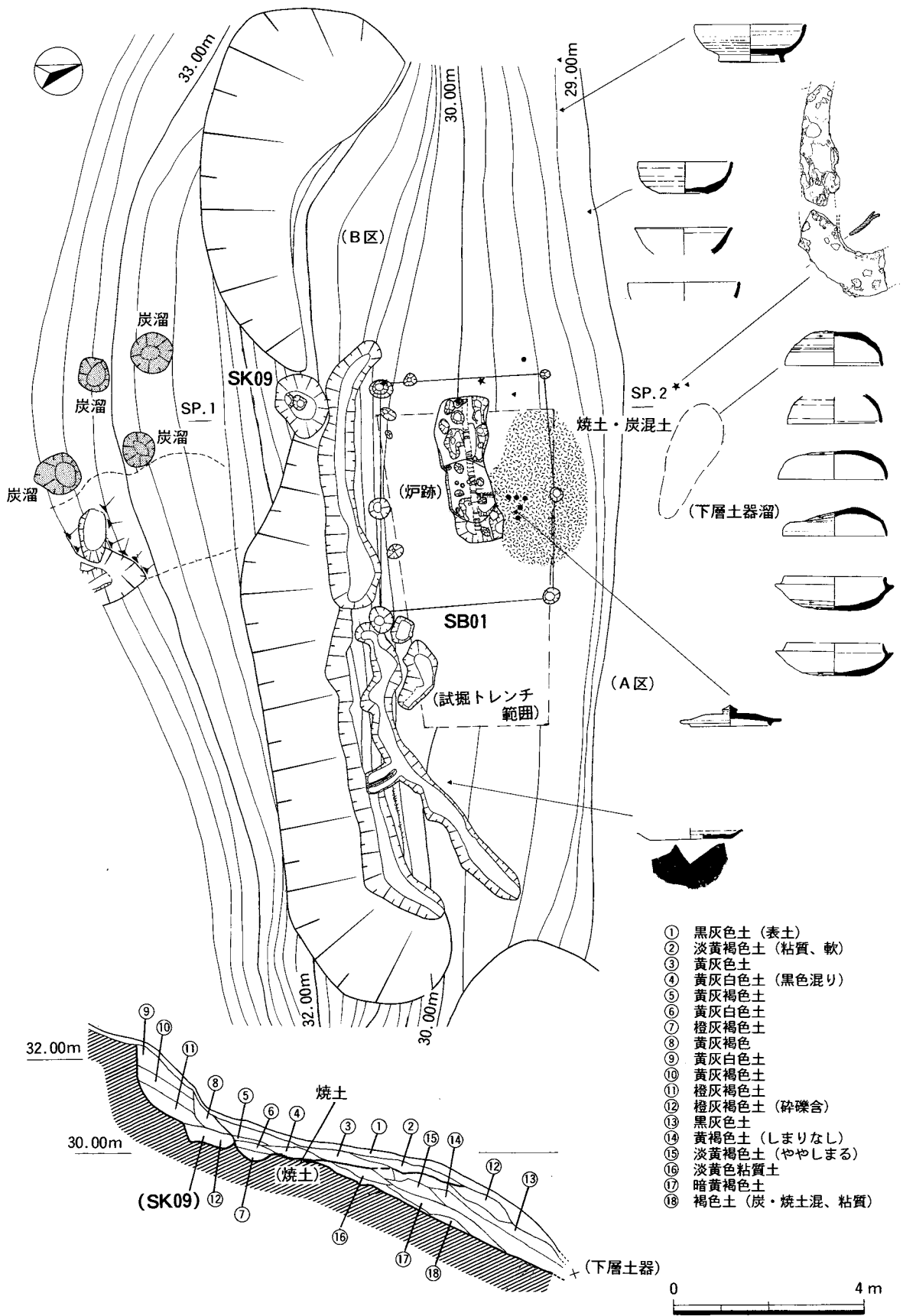
(註) 三宅博士「土師質土器を伴う石鉢について」『島根県考古学会誌 第2集』島根県考古学会 1985.11

伏せ鉢1 南に派生して延びる標高37.5mの尾根肩部に存在する。位置的にS I 01、9号墳の南端にあたる。内部に鎌1・古銭3枚を納め、土師質のすり鉢を伏せて覆う。掘込みなどの痕跡は窺えなかった。古銭は喜祐元宝（初鑄1056年・北宋）1・熙寧元宝（初鑄1068年・北宋）1・不明1。鉢は口径30cm、高さ12.5cm、注口を持ち内部に薄く3～4条のすり目を施す。

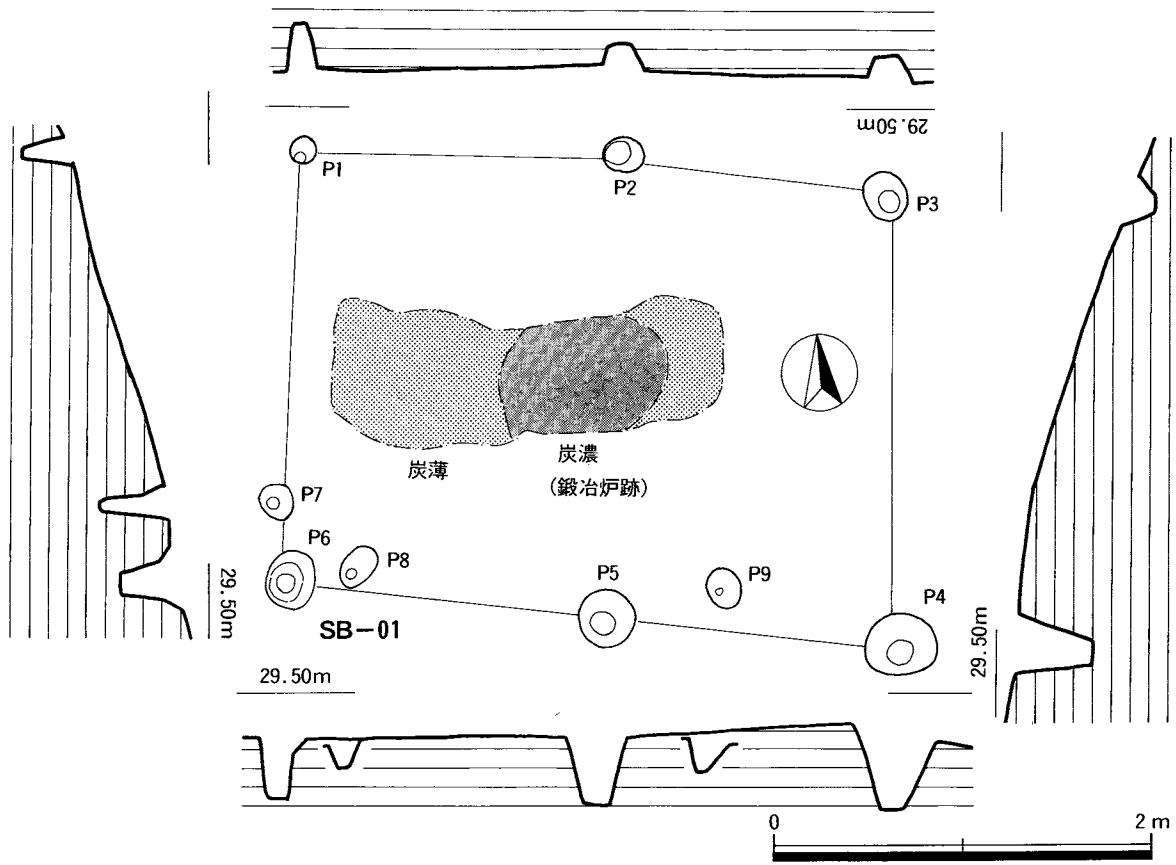
伏せ鉢2 標高36.5mの山田7号墳周溝上の位置で焼締こね鉢と、近くで古銭1枚を見出したものである。元位置からずれた状態であったが、伏鉢1と同類のものと思われる。古銭は、元豊通宝（初鑄1078年・北宋）。鉢は口径29cm、高さ14.3cm、高台と注口を持つ。

散布地（挿図84）

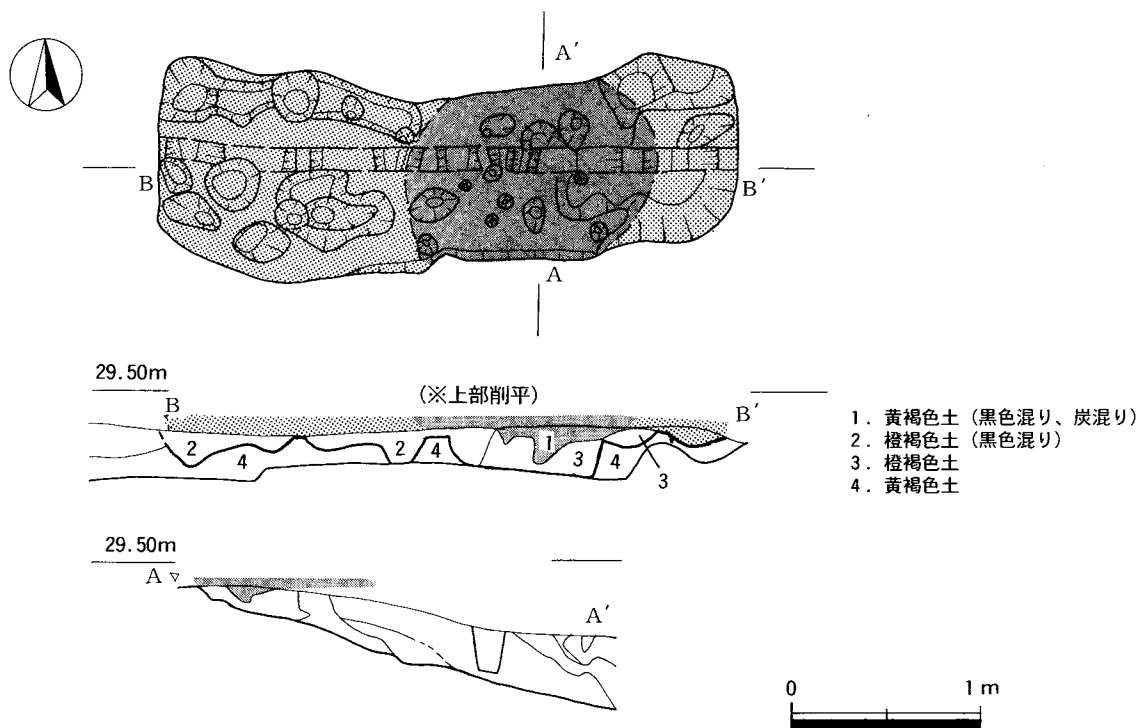
山田4号墳上と、山田5号墳から山田7号墳にかけての尾根上および斜面において、縄文晩期土器、弥生前期土器、石器・剥片（黒耀石・サヌカイト）等の集中散布が見られ、また、山田6・10・9号墳周辺でも石器・剥片（黒耀石・サヌカイト）が出土した。幅1.2m、長さ2～3m、深さ0.5～1mの楕円形の土坑もあり、一部では縄文土器と弥生土器の混在も見られた。丘陵の北東および東～南側の突端地域に、縄文晩期から弥生前期にかけての住居・工房遺構が存在していたと思われる。



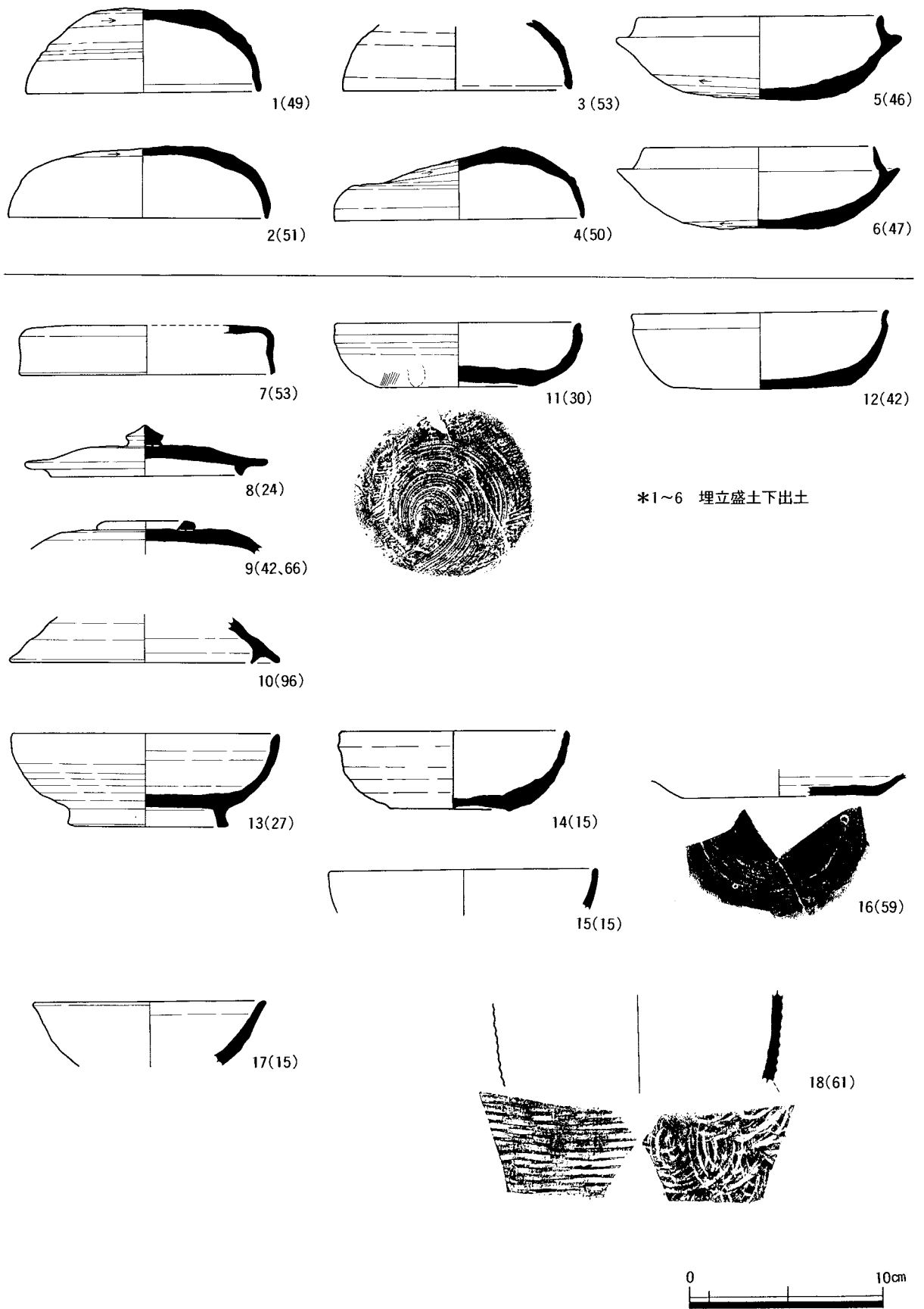
挿図79 山田遺跡3区第2テラス遺構分布図



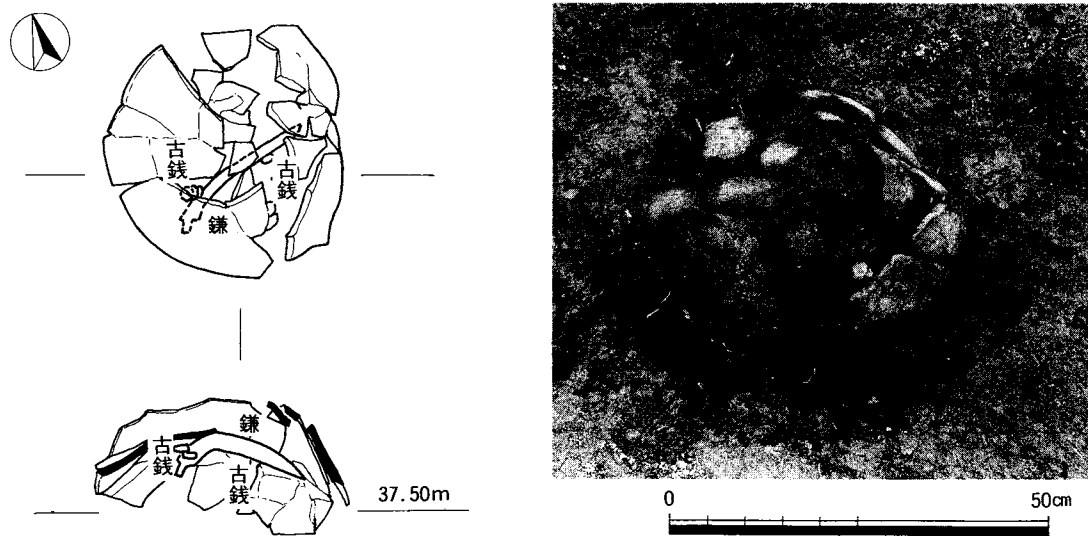
挿図80 山田遺跡 3区鍛冶関係建物跡



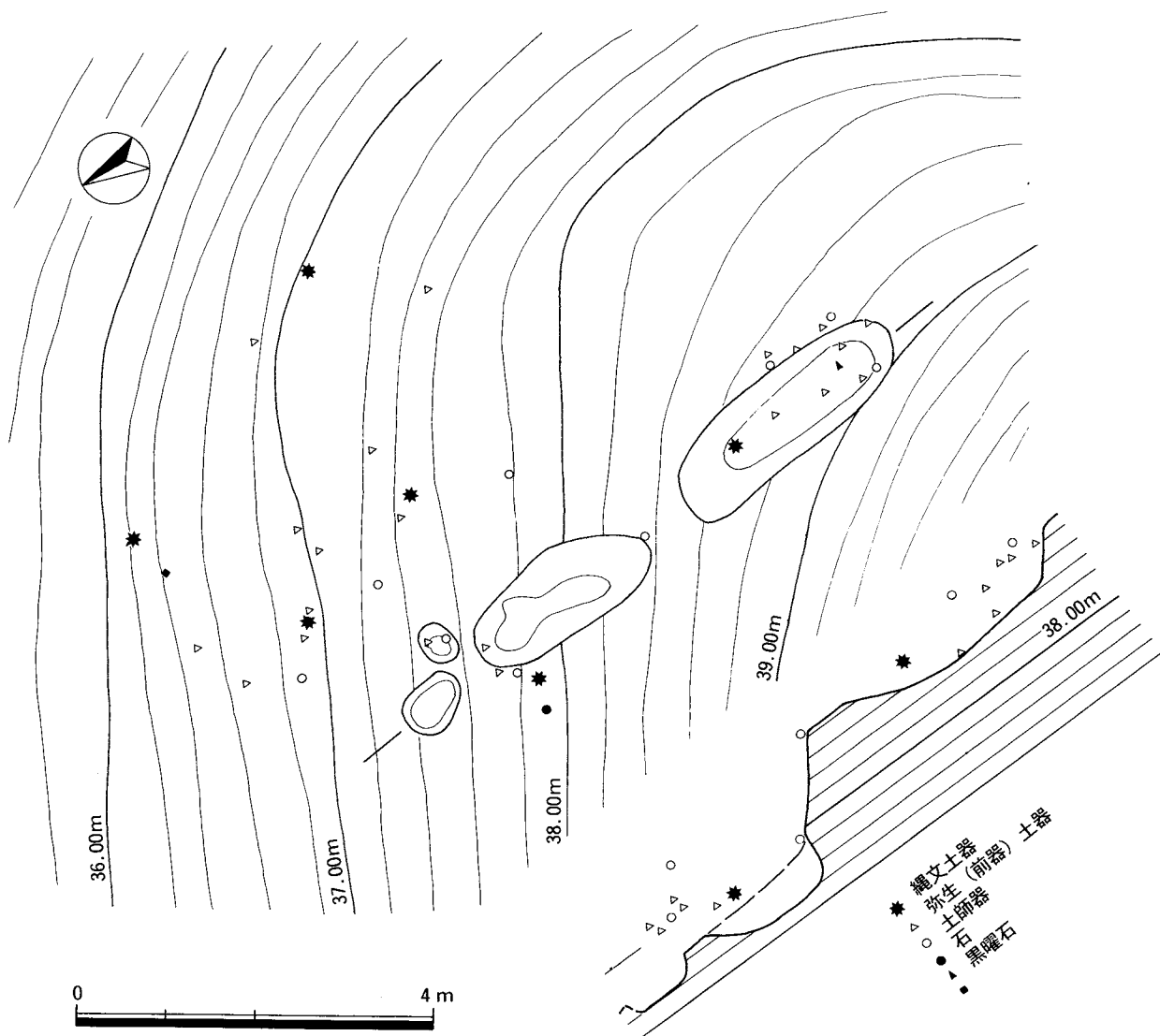
挿図81 山田遺跡 3区第鍛冶関係遺構



挿図82 山田遺跡3区第2テラス関係遺物



挿図83 山田遺跡 3区伏鉢 1



挿図84 山田遺跡 3区縄文・弥生散布状況

6. 研石山遺跡1区・4区（挿図87～98、図版44～49・51）

概要 1区は、南東に面する山裾斜面にあたり、標高34～43m前後の斜面を段々に加工してテラスをつくり遺構が築かれる。遺構は、掘立柱建物6・堅穴住居跡2・段状遺構6・溝状遺構10・落とし穴（縄文時代）2等、遺物は、弥生土器（後期）・須恵器（蓋坏・坏・高坏・甕・横瓶）、土師器類（甕・鉢・注口付鉢・高坏・移動式竈・土製支脚）、羽口、鉄器類（鉄滓・鉄鏃・鉄斧等）、石器類等がある。遺構の周辺では遺物の散布や焼土面が見られた。特にSS02・SS03・SB03では完形品を含むまとまった出土があった。4区は、1区から東側に回った位置にあり、谷部の凹地で炭溜りを検出した。

遺構の立地 立地・遺物状況により、第I群―第1・第2テラス（標高約34～35m）、第II群―第3テラス（約36～37m）、第III群―第4テラス東下（約37m）、第IV群―第4テラス東上（約40m）、第V群―第4テラス西半（約38～42m）、第VI群―第5テラス（約43m）の6群に分けられる。第VI群は上方斜面に位置し、幅1m程度のテラスで構成されるが、SS04では移動式竈が出土した。祭祀的な箇所でもあったと考えられる。

遺物の分布 漠然とではあるが遺構と遺物分布に相関性が認められる。特に鉄滓の分布はI群3箇所（SK02・SS02・SB02周辺）、II群2箇所（SB05・他1）、IV群2箇所（SD03、他1）、V群1箇所（SB03）であり、それぞれの位置にも一定の間隔を持つ。焼土分布ともほぼ一致し、この辺りで鍛冶等の生産が行われたことを示す。また、竈や甕の分布も、I群―SK02（SS03）、V群―SD07、VI群―SS04にあり、鉄関係箇所や高所斜面への偏りを見せ、占地や目的に確たる意志が働いていることを窺わせる。

遺跡の変遷 概ね次の通りである。

1期 縄文時代～弥生時代。縄文時代の落とし穴状土坑が造られ、石鏃が出土した。僅かに狩猟地として利用されるのみである。弥生時代も後期土器があるが、量が少なく散発的である。上部の2区からの転落とも考えられ積極的な活用はうかがえない。

2期 古墳時代中期～後期初頭。第II群で堅穴住居跡が築かれるが、重複する2棟があるのみで遺物も少ない。後世の削平も考えられるが、活用は小規模である。

3期 古墳時代後期～末期。陰田5式から9式にかけての須恵器を伴う時期である。まず、裾部に近い第I群・II群で掘立柱建物が形成され、やや遅れて、山寄りの第III～VI群で形成される。建物は1～2棟を単位として一定のまとまりが見られる。遺跡の最盛期であり、遺構も遺物量も多い。須恵器（蓋坏・高坏・甕・横瓶）・土師器類（甕・高坏・鉢・注口付鉢・甕・移動式竈・土製支脚）・鉄器類（鉄滓・鉄鏃・鉄斧等）が出土し、炭・焼土溜りや焼土坑もある。建物方向に差異が認められ、前者は南東方向、後者は南に面して立地する。鍛冶生産を中心とした工房・集落と考えられる。

4期 奈良時代後期～平安時代初期。糸切底の須恵器を伴う時期である。引続き掘立柱建物建物が存在するが、位置的に第IV群のみであり、遺物量も減少し小規模となる。

遺跡は、裾部から開発が進み次第に奥部へ拡張されて行ったようである。

掘立柱建物（挿図87～90、図版45・46）

コの字状の溝に囲まれた建物跡6棟分を確認した。建物は2×3間を基本とし南ないし南東を向く。SD03、SD05なども本来は掘立柱建物に伴っていたものと思われる。出土遺物は7世紀中葉期の様相を示すものが多いが、位置的に最終段階と思われる箇所での出土であり、遺構としては7世紀前葉から形成されたものと考えられる。

SB01（挿図87、図版45） 第1テラスに立地し、主軸を北東－南西にとる。床面標高33.9m。梁間2×桁行2間、妻通長3.0×梁行長4.7m、床面積14.1m²を測る。柱穴はP1－P2－P4－P5－P6－P14－（ ）－P8であり、各柱間隔はP1より順に2.3、2.2、1.5、1.5、2.2、(2.3)、(1.5)、1.5mを測る。補足柱としてP3、P19が考えられる。山側（北西側）に幅0.5～0.8m、深さ10cmのコの字状の溝（SD10）が巡る。溝上部より古墳時代後期の須恵器が出土した。溝外壁面に重複して焼土坑SK02が掘込まれる。SK02は径1m－深さ30cmの浅鉢状を呈し、壁全面が熱による変質を受けている。7世紀前半代と思われる。

SB02（挿図87、図版45） 第2テラスに立地する。SB01の斜め西上方にあり、主軸もほぼ同様の北東－南西にとる。床面標高35.05m。後世の掘削（池など）や地傾斜により東－南西側を欠き全容は不明であるが、山側に柱穴3個が並び（P1－P2－P3）、壁長4.4mを測る。梁間は北東コーナーのP1から南東方向にP4があるが、柱間距離2.1mでこれで完結するとすればやや狭く、建物としてはSB01と同様、梁間2×桁行2間であり、規模も近似したものであったと思われる。山側（北西側）に幅0.5m、深さ10cmのコの字状の溝（SD08）が巡る。鉄滓が多い。7世紀前半代と思われる。奈良・平安期遺物が上面に流入する。

SB03（挿図88、図版46） 第4テラス西半に位置し、主軸を東西方向にとる。南西コーナーがやや歪ではあるが、梁間2×桁行3間、妻通長3.4×梁行長5.3～5.6m、床面積は約18.5m²を測る。山側（北側）に幅0.4m、深さ5cmのコの字状の溝SD04、SD05が巡る。床面標高37.85m。柱穴はP1～P10であり、各柱間隔はP1より順に1.8、1.7、1.8、1.9、1.5、1.9、1.8、1.9mを測る。P1の上には50×30×20cm大の石が乗り、周辺には焼土面が見られた。須恵器（蓋坏・壺・甕）・土師器甕・鉄斧・鉄滓がP1－P10の西壁外側に沿うように帯状に出土した。石はピット全体を覆わず北東半分にかかる形であり、柱に接して存在していたものと思われる。標高37.95mを境に上下に新旧が見られ、石・鉄斧・鉄滓は上層、須恵器・土師器類は下層で標高37.8m付近に集中する。焼土面は上下にある。建物は当初SD05を伴って築かれ、後に柱はそのままに床を10cmほど埋立て、SD04を伴い再度利用されたことを示す。

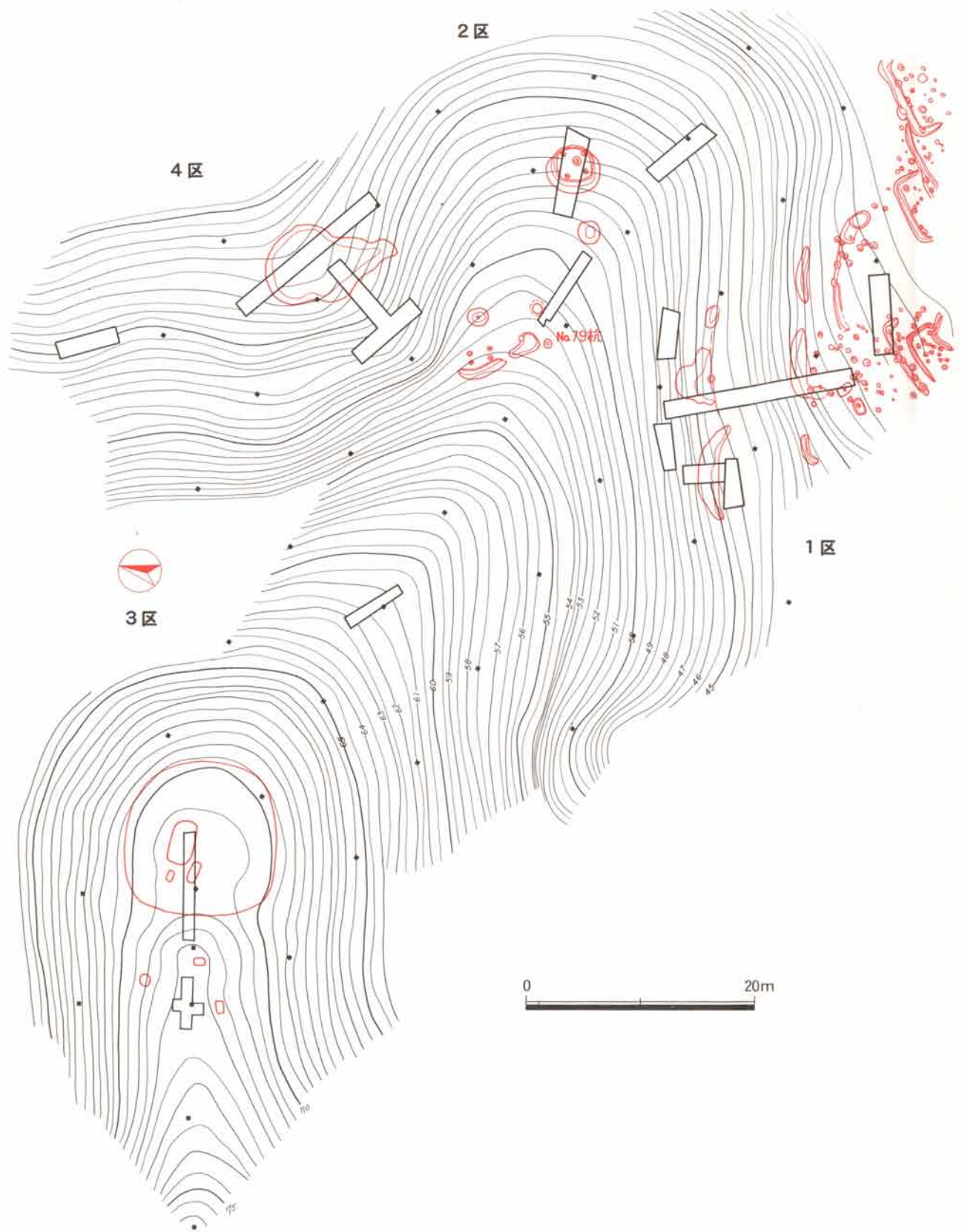
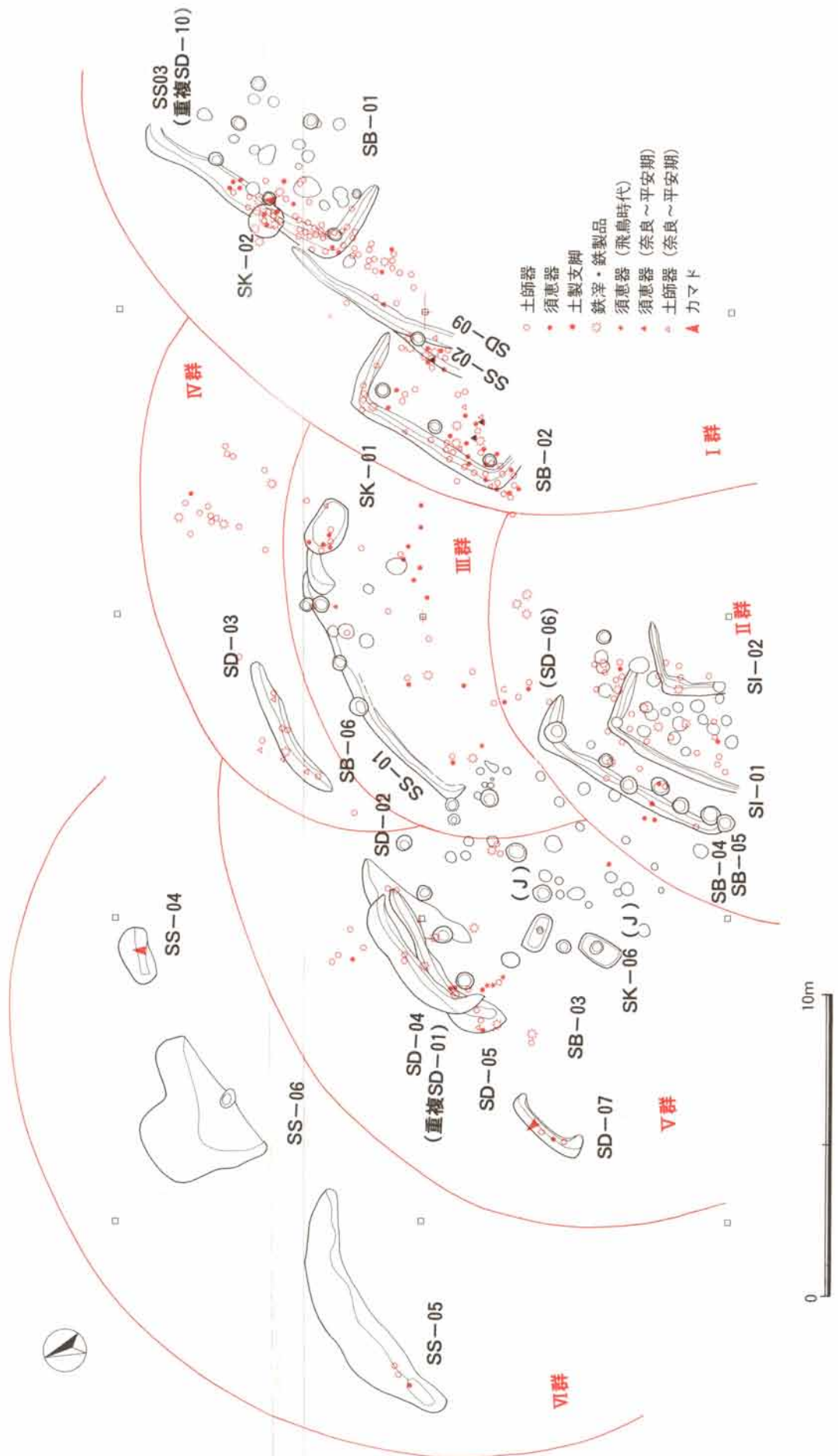


插图85 研石山遗址1~4区遗构分布图



挿図86 研石山遺跡1区遺構遺物分布図

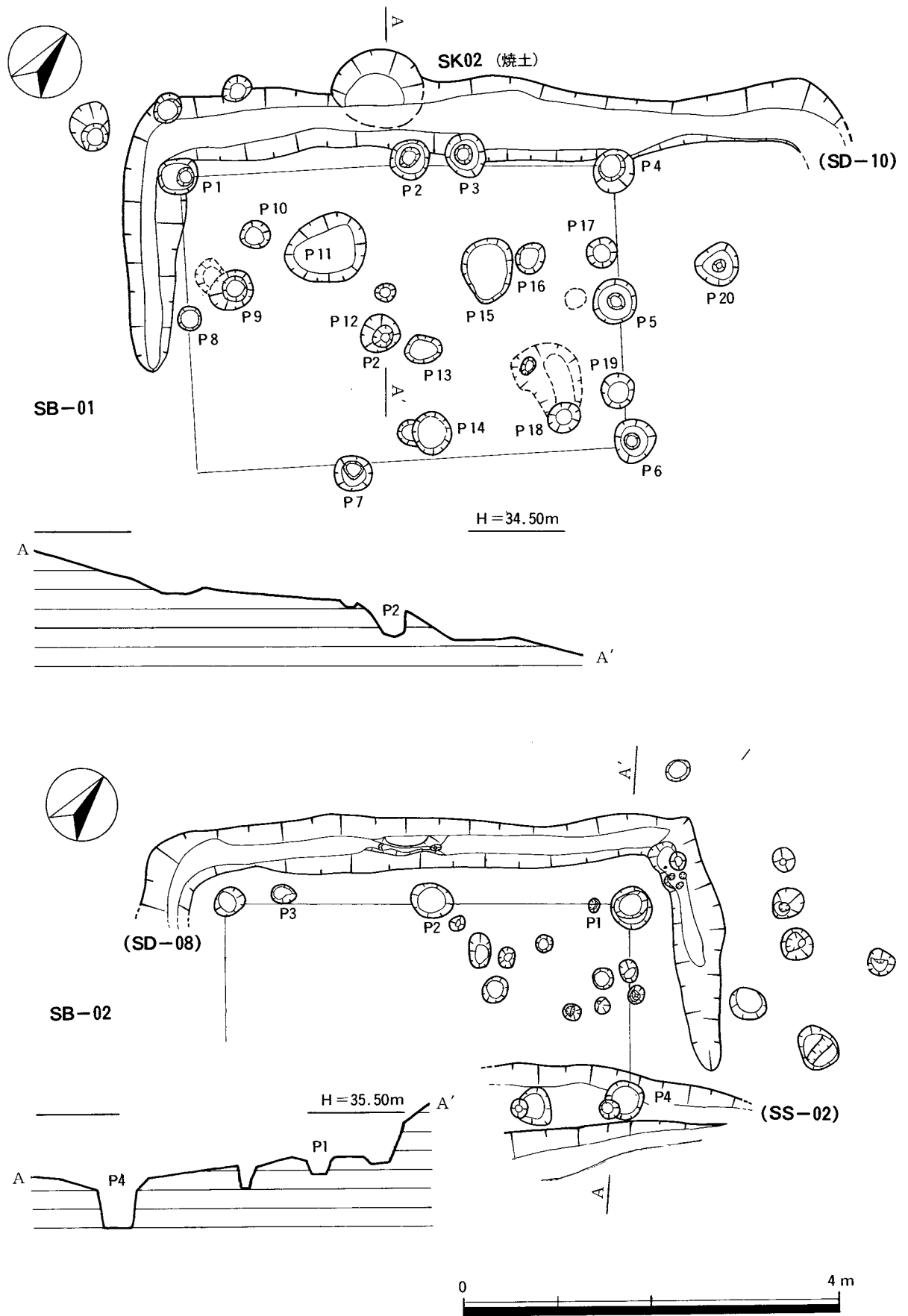
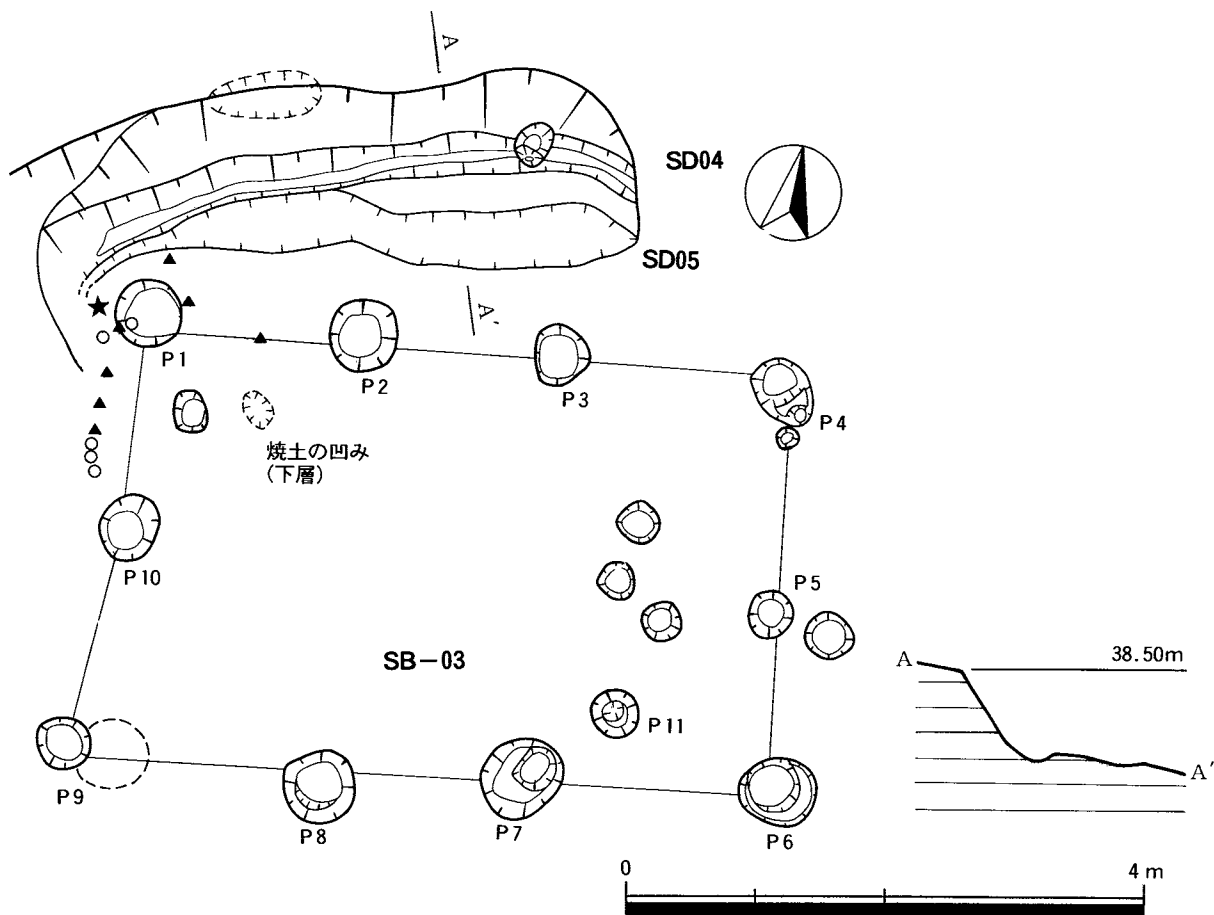
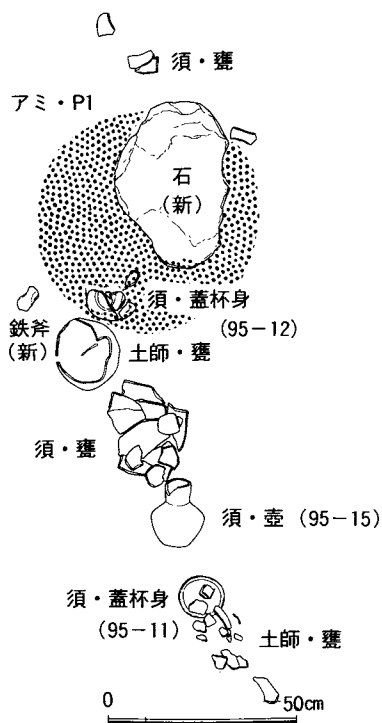


插图87 研石山遺跡1区住居・建物跡(1)



新旧にさほど極端な時間差は窺えない。
7世紀後半代と思われる。



SB04・SB05 (挿図89、図版45)

第3テラスに立地し、双方重なるように存在する。主軸はSB04がやや北に振るがほぼ北東-南西方向にとる。南東に向く建物跡である。7世紀代と思われる。

SB04はP3を北東コーナーとする梁間2×桁行3間、妻通長3.9×梁行長5.4m規模の建物と思われる。柱穴は南西部が不明であるが、P1～P3・(P16)・P25があり、柱間隔はP1-P2-P3間それぞれ1.80mを測る。柱穴は、径50～60-深さ40cmを測り、底は平坦にしつかりと掘り込まれる。

挿図88 研石山遺跡1区住居・建物跡(2)

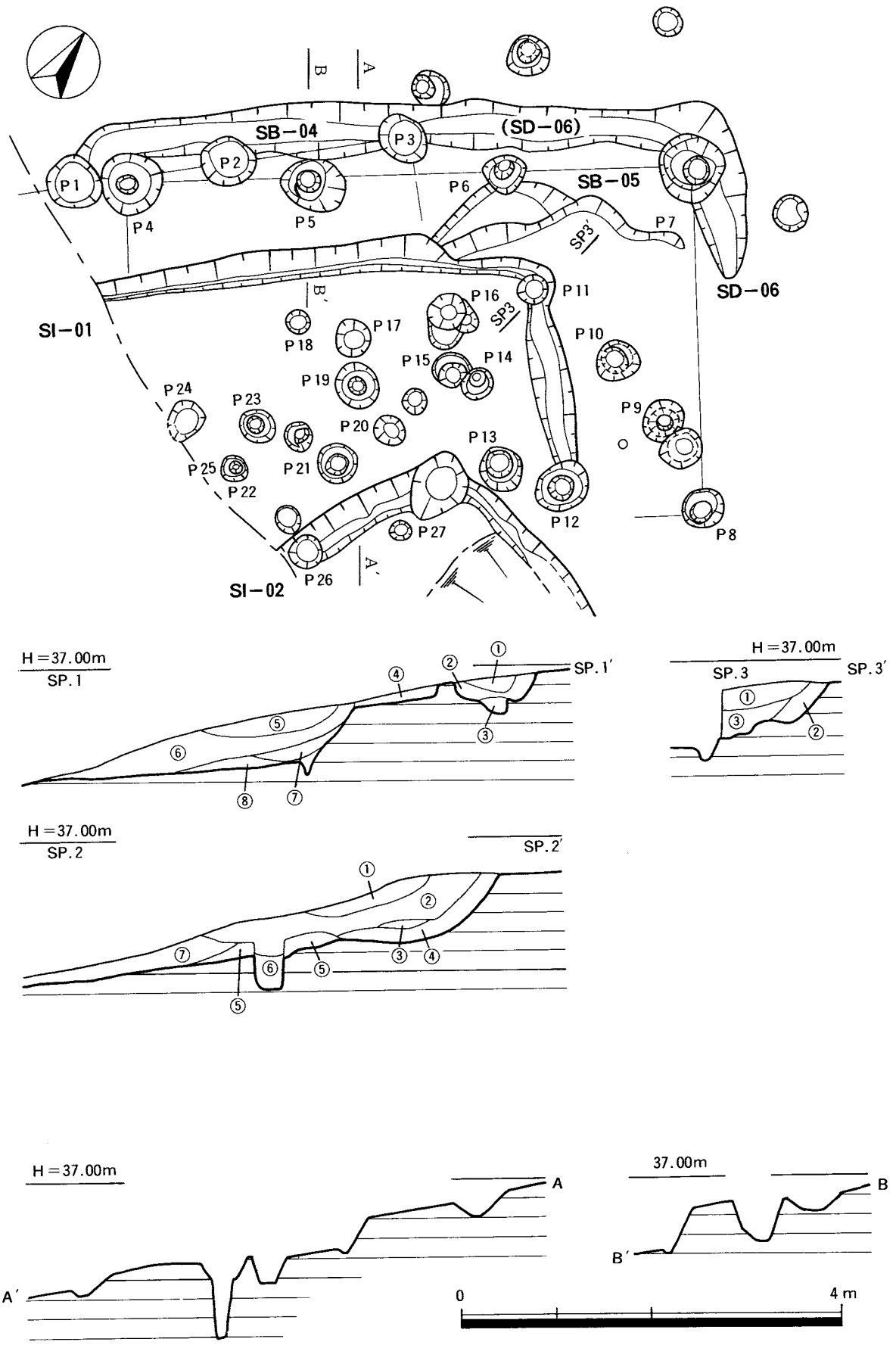
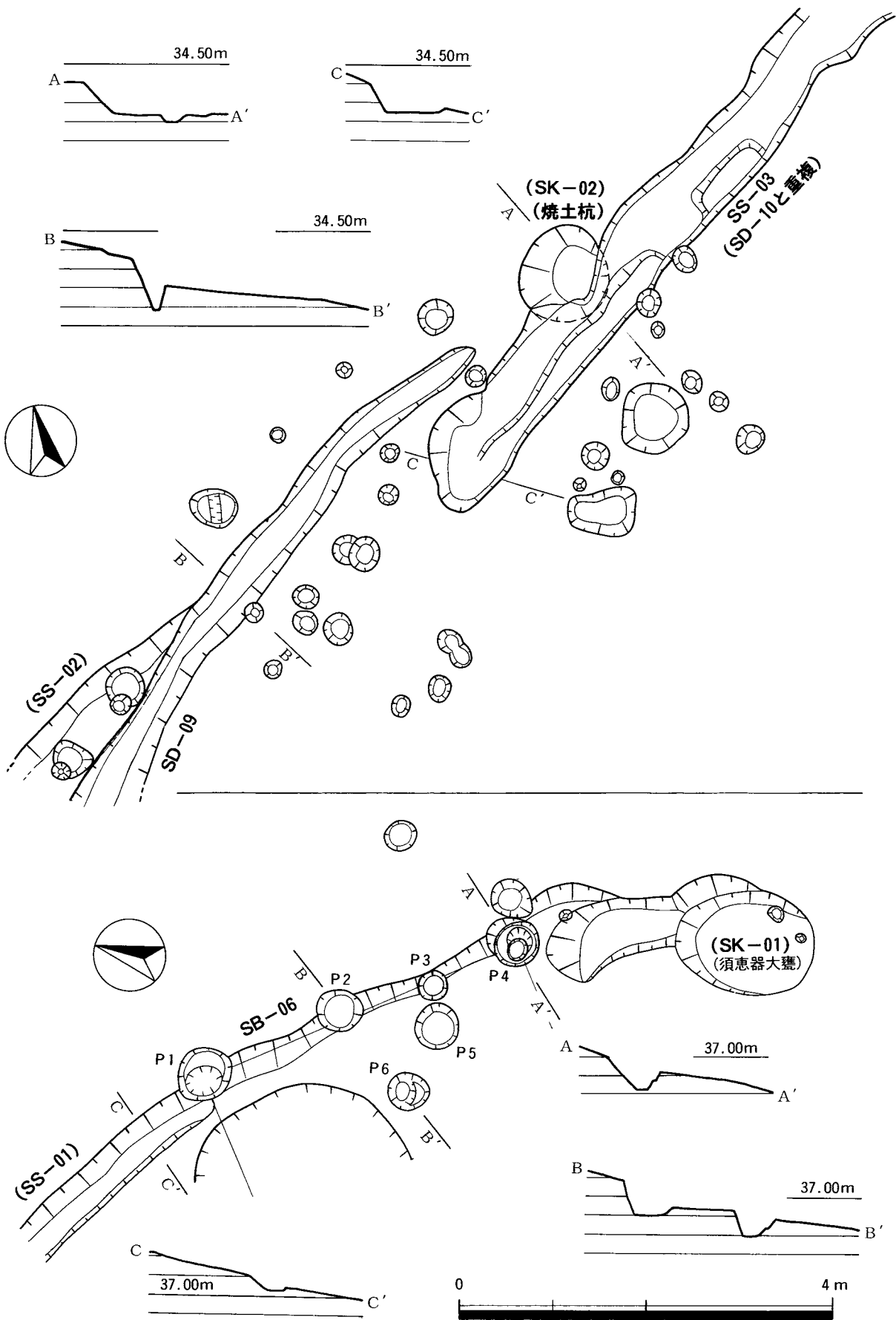
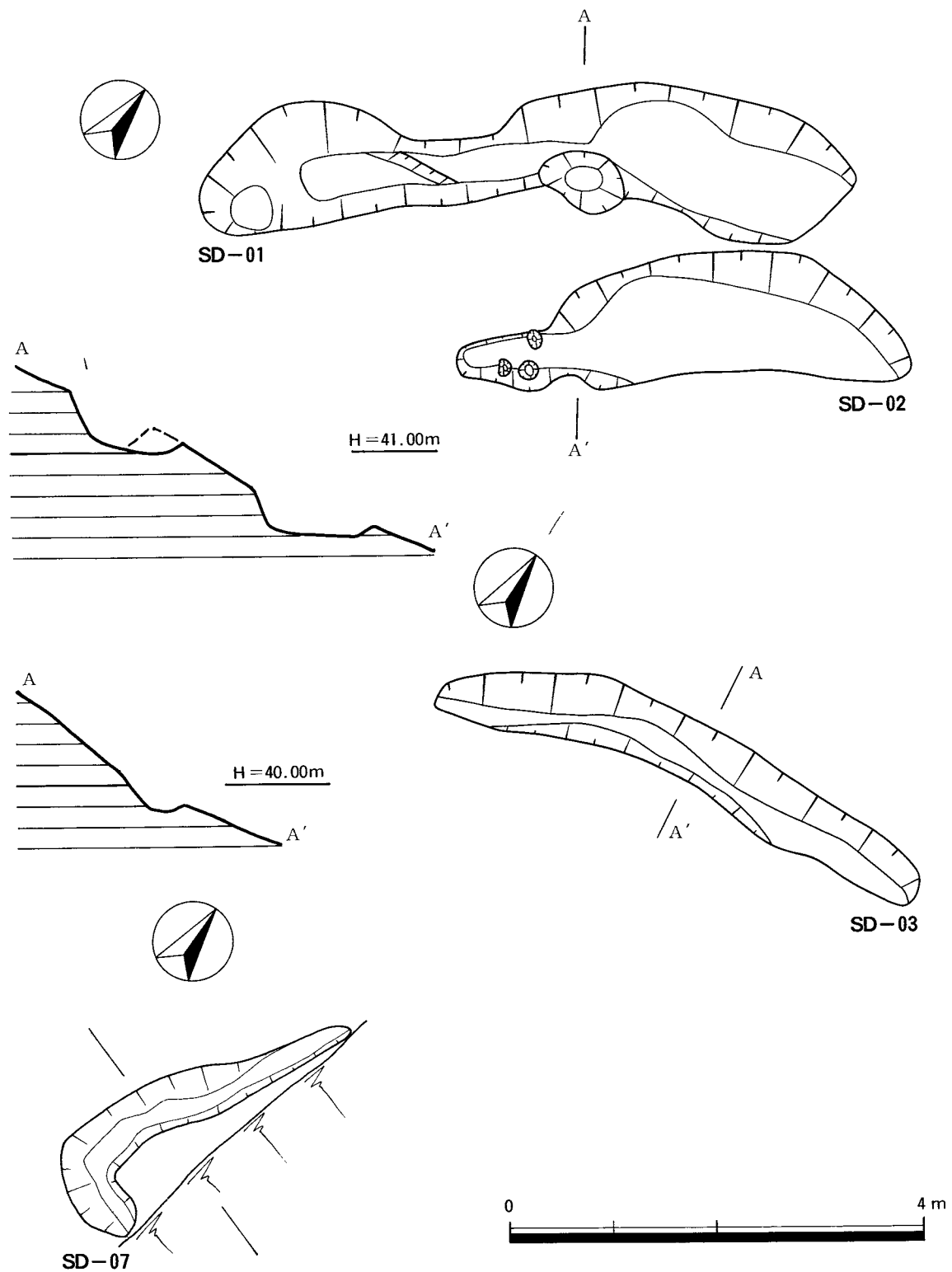


插图89 研石山遺跡1区住居・建物跡(3)

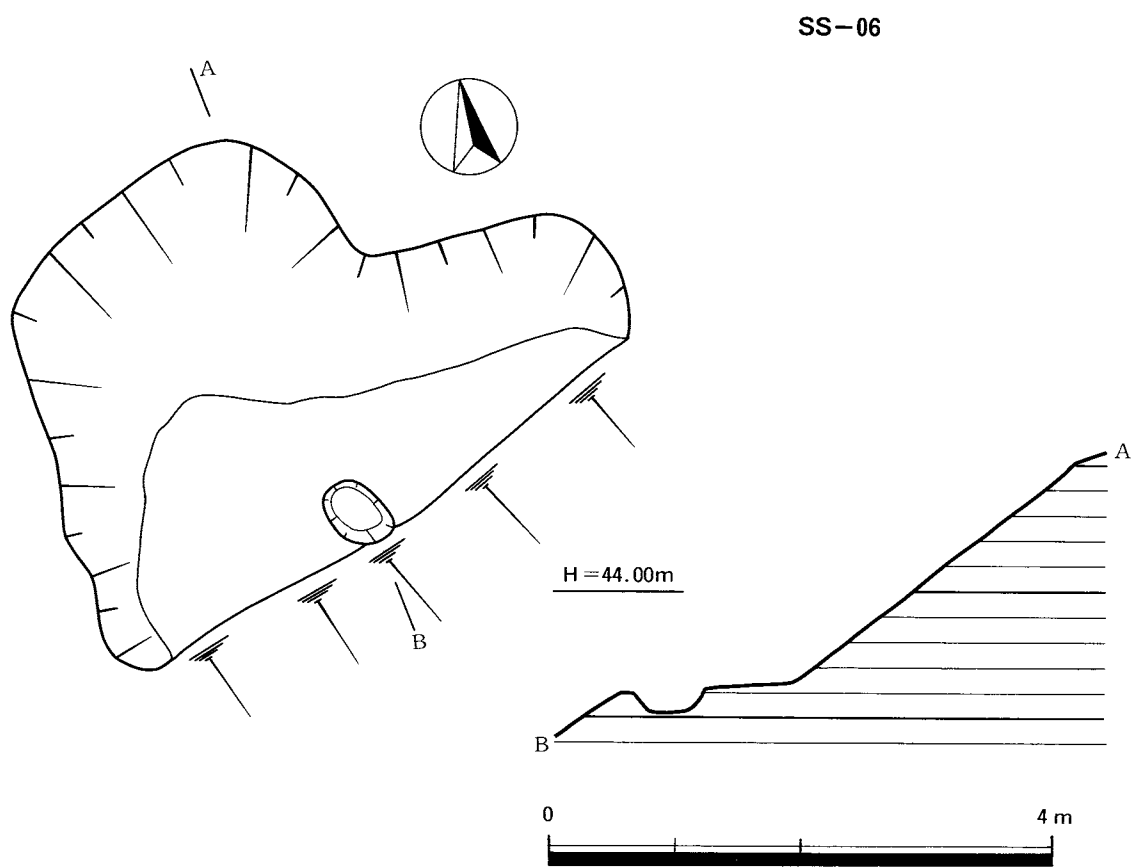
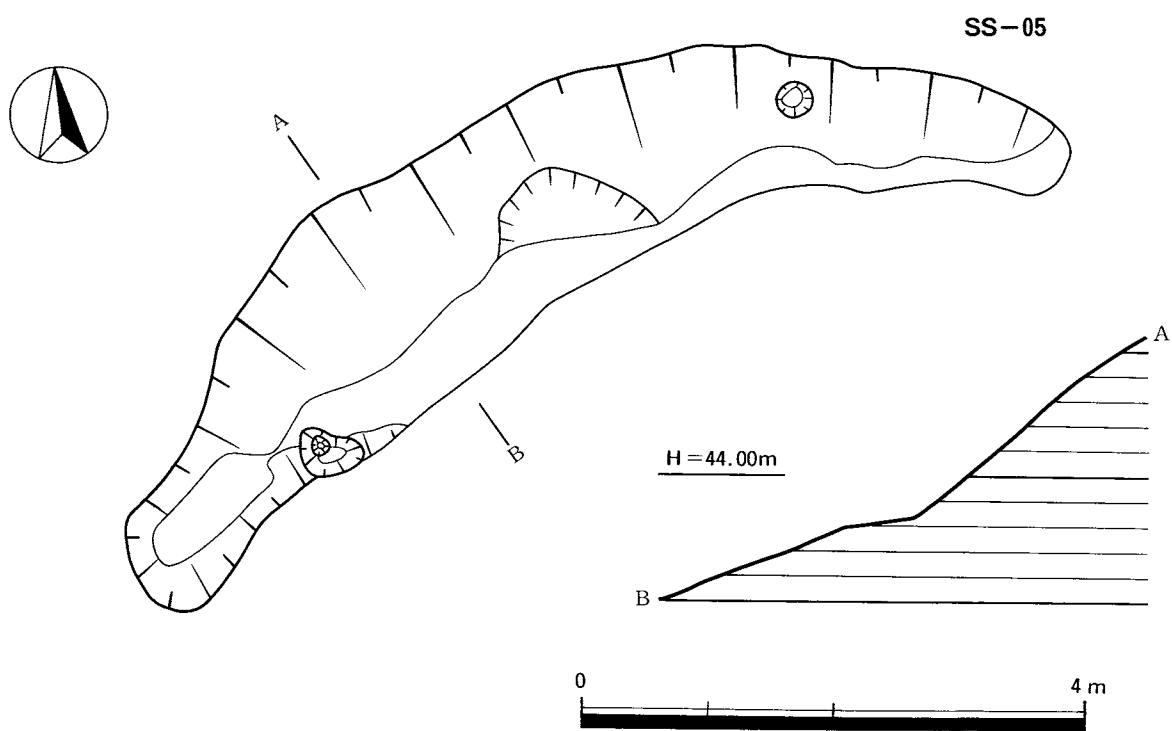


挿図90 研石山遺跡1区溝・段状遺構(1)

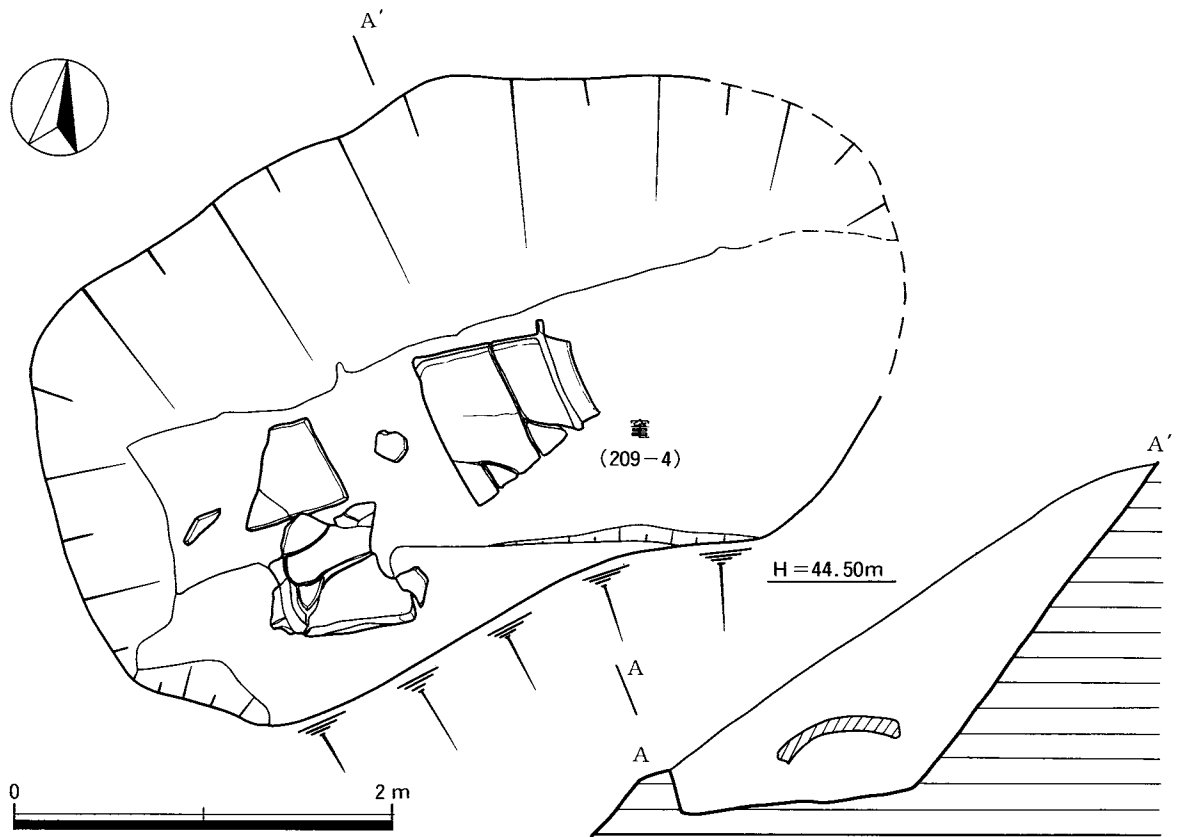


挿図91 研石山遺跡1区溝・段状遺構(2)

S B05はP 4を北西、P 7を北東コーナーとする梁間1間ないし2×桁行3間、妻通長3.6×梁行長6.0m規模の建物と思われる。柱間隔はP 4－P 5－P 6－P 7間それぞれ2.00mを測る。妻側のP 7－P 8間は3.6mとやや間隔が広く、間に柱のあった可能性もある。柱穴径50～70cm、深さ50cm、柱根径約25cm。山側に、柱穴列に沿うように幅0.5～0.6m－深さ0.15mのSD06がコの字状に巡る。床面標高は36.75mである。建物内部東側の位置で焼土面を検出し、周辺から鉄族、鉄滓が出土した。切合いからS B04が古く、S B05が新しい。



挿図92 研石山遺跡1区溝・段状遺構(3)

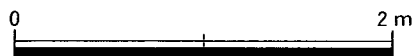
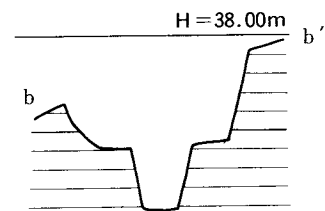
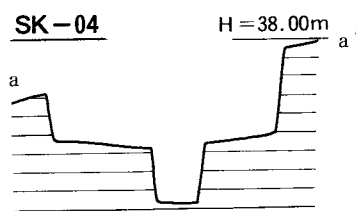
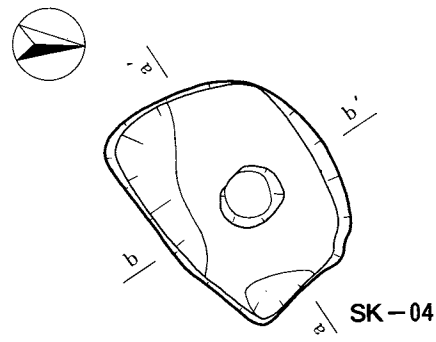
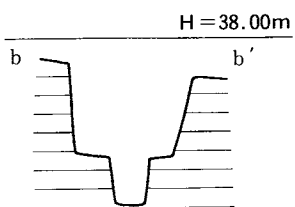
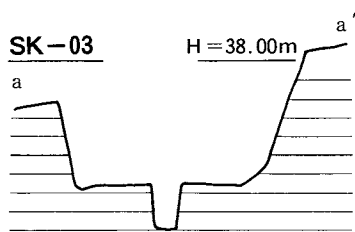
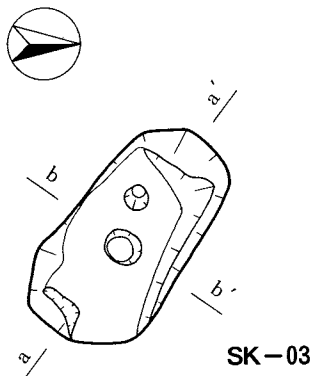
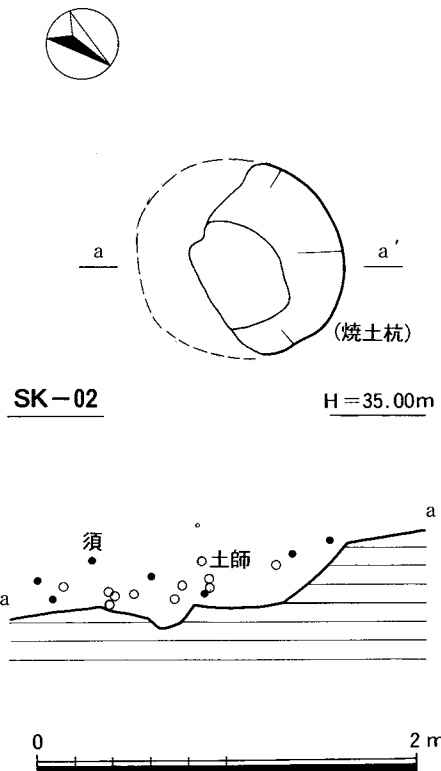
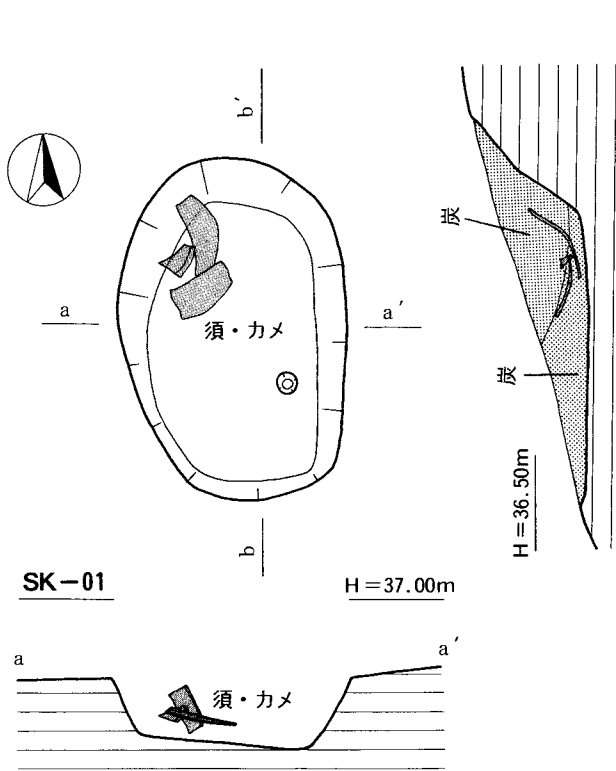


挿図93 研石山遺跡Ⅰ区溝・段状遺構(4)

S B06 (挿図90) 第3テラス東半に位置し、S S01の肩部に重複しS D03の前方に並行する。径0.6ー深さ0.4mの同規模のピットP 1・P 2・P 4が1.7m、1.9m間隔で東西に並ぶ。規模・内容は不明であるが、S D03を後背の側溝とした建物が存在したものと思われる。東側に位置する炭混り土坑S K01も一連のものと考えられる。

竪穴住居跡 (挿図89、図版45)

第3テラスのS B04・S B05の下部で2棟分を検出した。調査区域外に延び、溜池で掘削されており全容は不明である。一辺5 m～6 m程度の方形住居跡と思われる。共に幅約10×深さ6 cmの断面V字の側溝を持つ。S I 01は南東(N-140° -W)方向に向き、床面標高36.25m。S I 02は東南東(N-115° -W)方向に向き、床面標高35.90m。S I 02が古くS I 01が新しい。切合い等から、掘立柱建物に先行する古墳時代中期のものと思われる。



挿図94 研石山遺跡1区土坑図

溝状遺構・段状遺構（挿図89～93、図版47・49）

溝状遺構10、段状遺構6を確認した。多くは建物跡に伴う後背区画・廃水溝と考えられる。SD01とSD04、SD09とSS02、SD10とSS03は調査時は別個に考えたが同一遺構の土層堆積の上下である可能性が強い。

SS02・SS03からは須恵器（蓋坏・高坏）・土師器（甕・鉢・注口付鉢・高坏・移動式竈・土製支脚）・鉄滓・鉄器等が出土した。完形のものが多く、この位置に並べて置かれていたものと思われる。遺物より、古墳時代後期後半のものと思われる。

SS04～SS06は第5テラスに位置し、標高43～45mの急斜面を加工した、幅約1～2m×長さ25mの幅狭のテラスに、東よりSS04・SS06・SS05と並ぶ。傾斜面による流失が激しい。

SS04は岩盤を彫り込んで3.50×1.1m－深さ30cmほどの凹地をつくり、竈1個体分（209-4）が横転した状態で出土した。岩盤のため壁・床表面は凸凹が著しい。床面標高43.65m。火を焚いたり使用した痕跡はない。祭祀に関わる遺構と考えられる。この辺りから流出したと考えられる分布遺物から第Ⅲ期に属すと考える。

SS05は幅約0.5m×長さ8.3mの三日月形。床面標高43.60m。土師器片が出土した。

SS06は奥行き最大2.0m×東西長さ4.0m、床面標高43.30m。床面はほぼ平坦である。奥壁から70cm手前に径0.5×0.4m－深さ0.2mのピットがある。

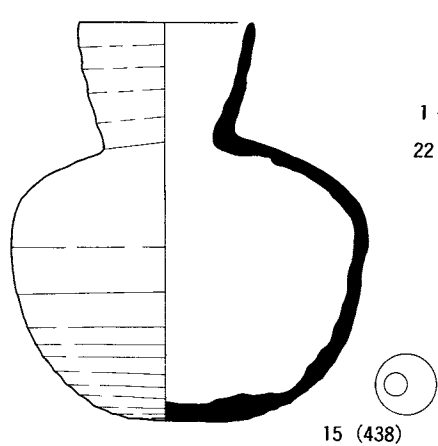
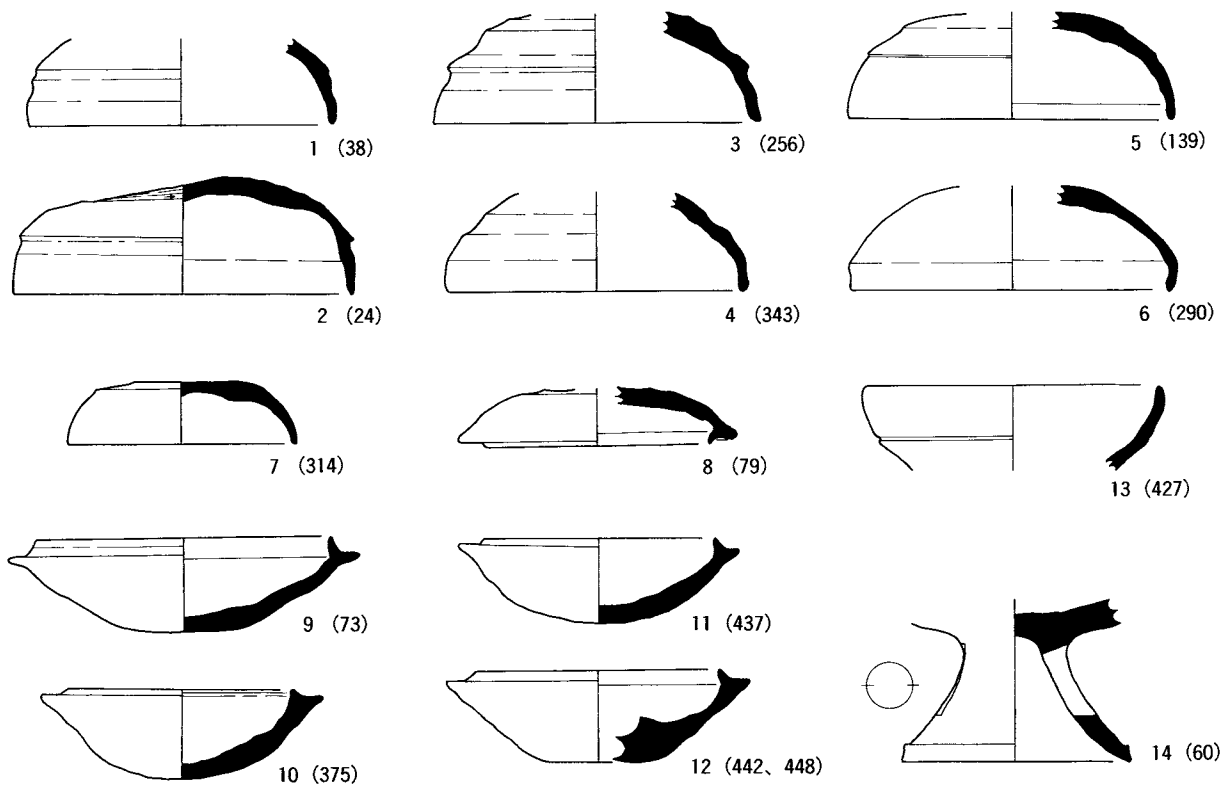
SD07は第4テラス上部の標高約40mの斜面に立地し、山側を掘削した幅0.4～0.5m、深さ0.1～0.2mのL字状の溝である。傾斜面のため盛土が流失しているが、元来コの字状に巡り建物を伴っていたものと思われる。溝内より土師器甕（挿図96-14）・須恵器・竈片を検出した。

土坑（挿図94）

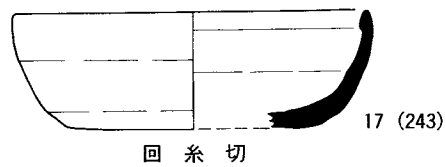
SK01 楕円形を呈し、長軸1.85×短軸1.20m－深さ0.65m。主軸方向N-2°-E、底面は平坦で標高36.24m。埋土には炭が混じり、底面やや上方で須恵器大甕が出土した。

SK01 平面円形で浅鉢状を呈す焼土坑。SS03・SD10・SB01の北側に重複する。径1.05m－深さ0.35m、底面標高33.97m。埋土には炭が混じり、底面は焼成を受け赤い。調査時は差異を確認できなかったが、SS03関係とした遺物群の内、竈・鉄滓は特にこの土坑周辺に集中しており、遺物群の一部はSK02に伴う可能性がある。

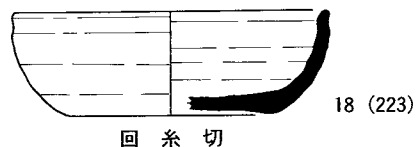
SK03・SK04 縄文時代の落し穴と思われる。双方とも遺物はない。約1.35×0.7m－深さ0.7m。SK03は楕円形を呈し底面中央に径20×16m－深さ25cm、西側に径12cm－深さ15cmのピットを持つ。主軸方向N-52°-W、底面標高37.35m。埋土はやや砂質の灰茶褐色土。SK04は不正楕円形を呈し、底面中央に径33×30m－深さ35cmのピットを持つ。主軸方向N-56°-E、底面標高37.40m。埋土はカキゴ混じりの黄灰茶褐色土・黄褐色土。



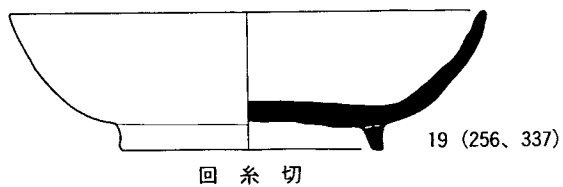
1~21... 1区
22・23... 2区



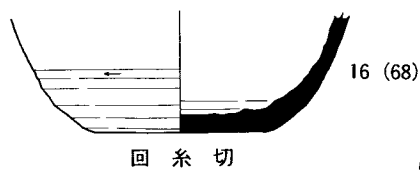
回糸切



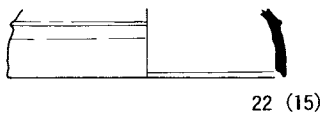
回糸切



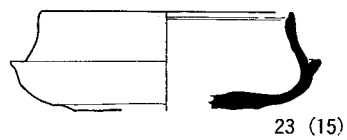
回糸切



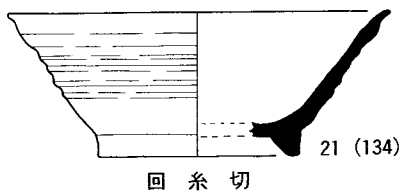
回糸切



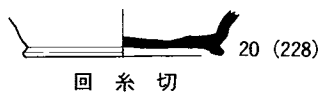
22 (15)



23 (15)



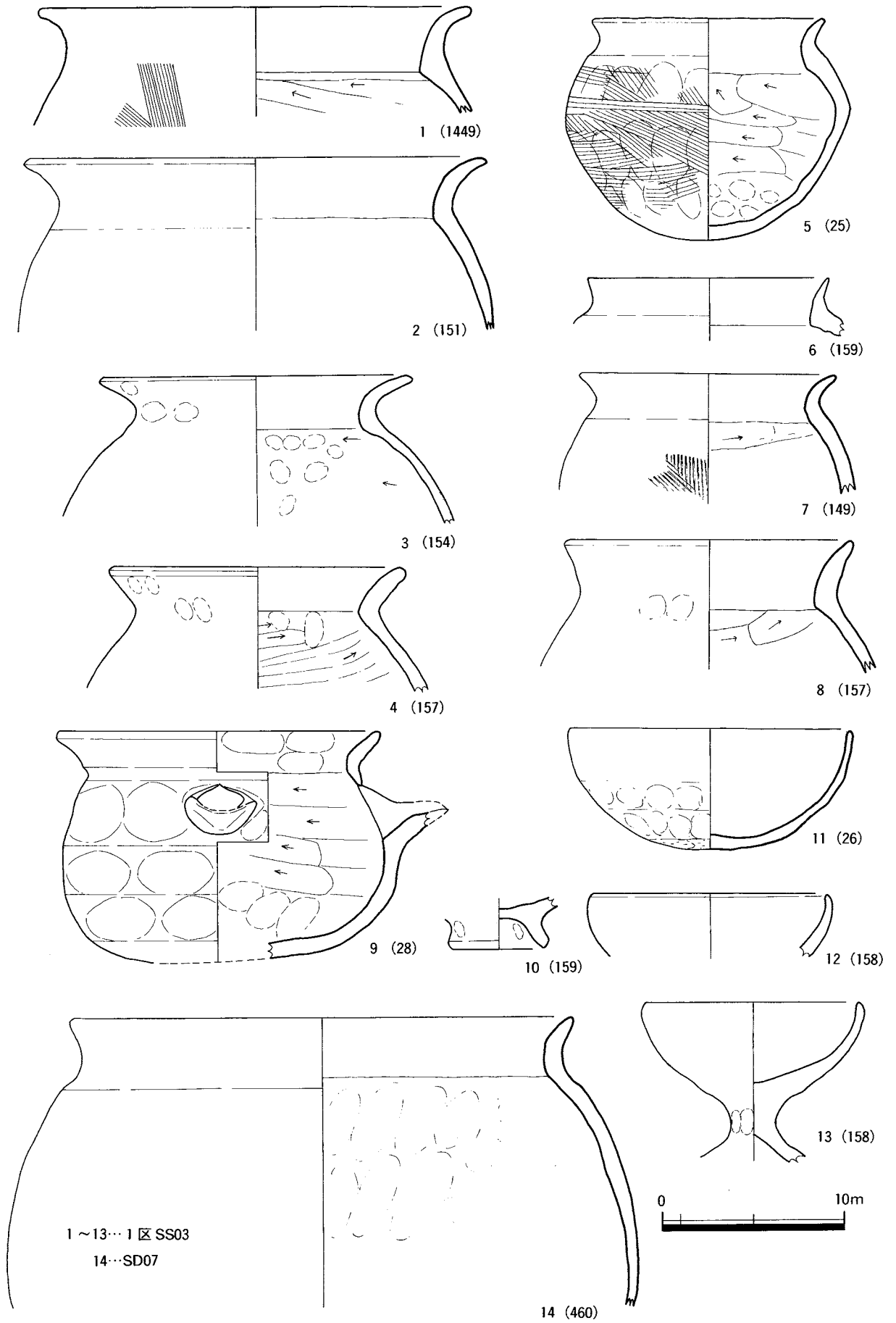
回糸切



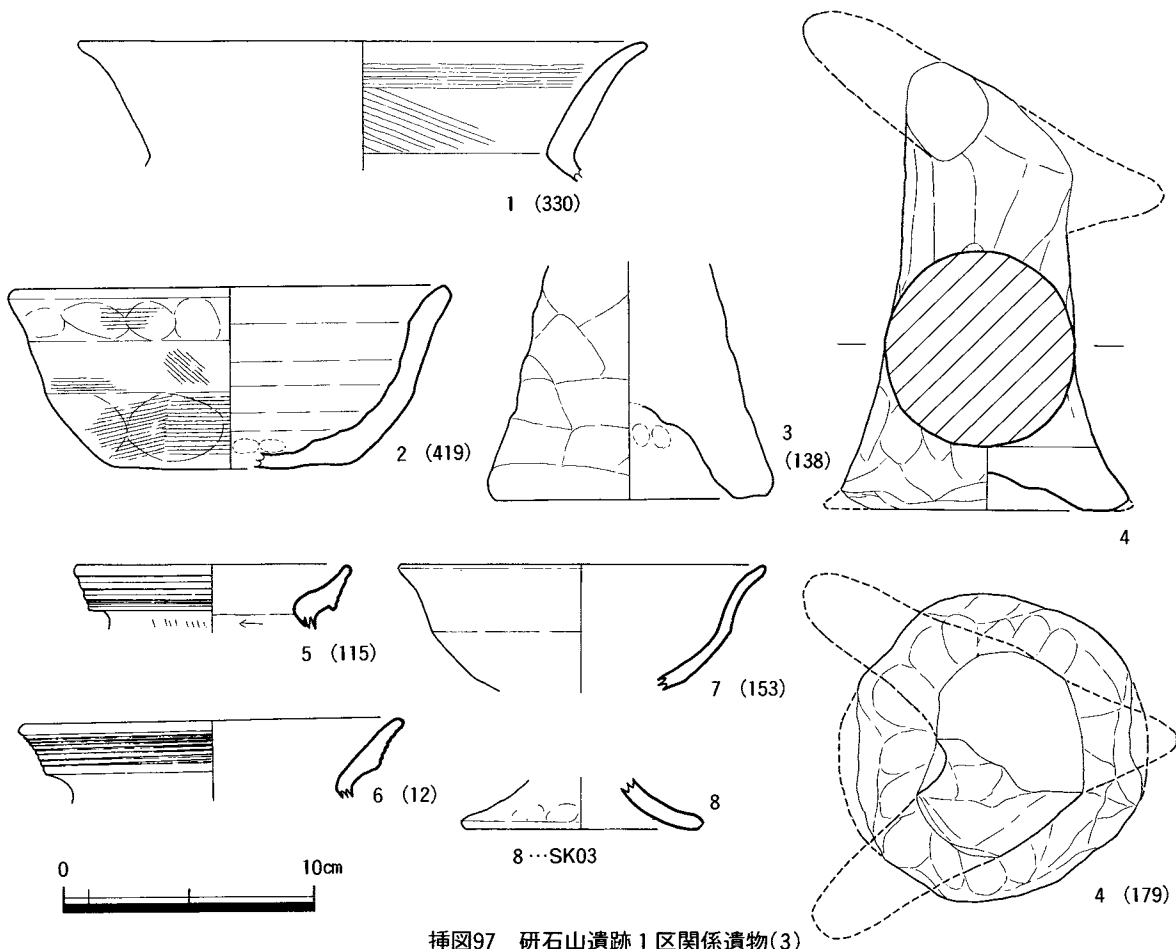
回糸切



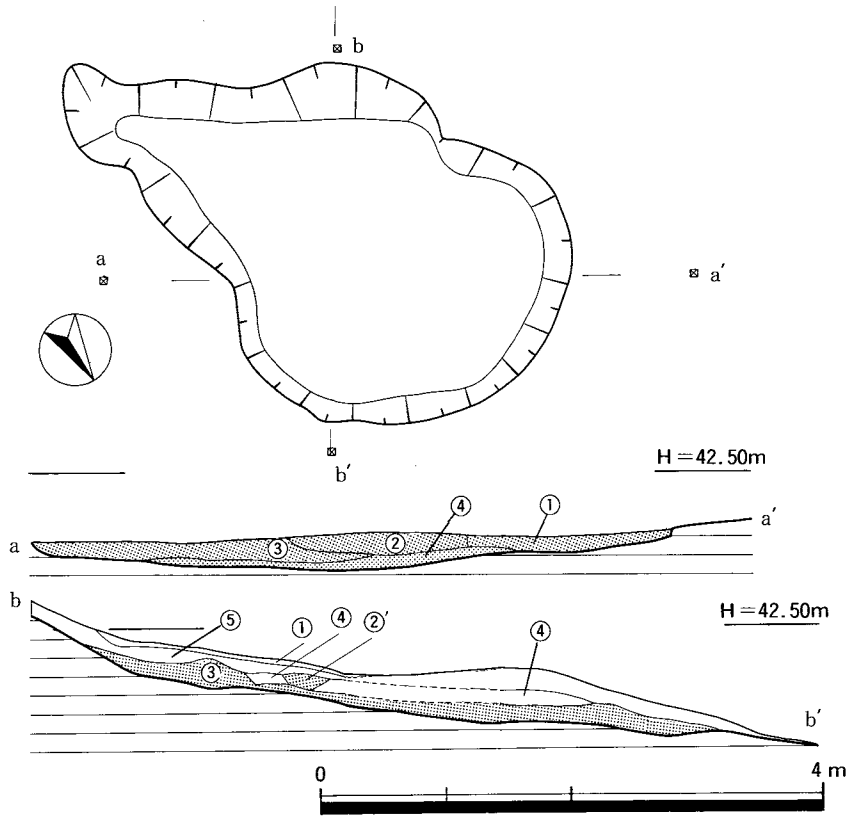
挿図95 研石山遺跡 1区関係遺物(1)



挿図96 研石山遺跡1区関係遺物(2)



挿図97 研石山遺跡1区関係遺物(3)



挿図98 研石山遺跡4区炭溜り遺構

SK05 (挿図98)

標高約42.5mの斜面中腹の谷部に位置する。第4区として調査した。約5.8×3.3mの不正円形で、炭の堆積は最大20cmを測る。遺物はないが、研石山1・4区のⅢ～Ⅳ期の鉄器生産に関する炭焼き跡と思われる。

7. 研石山遺跡 2区

(挿図100、図版50)

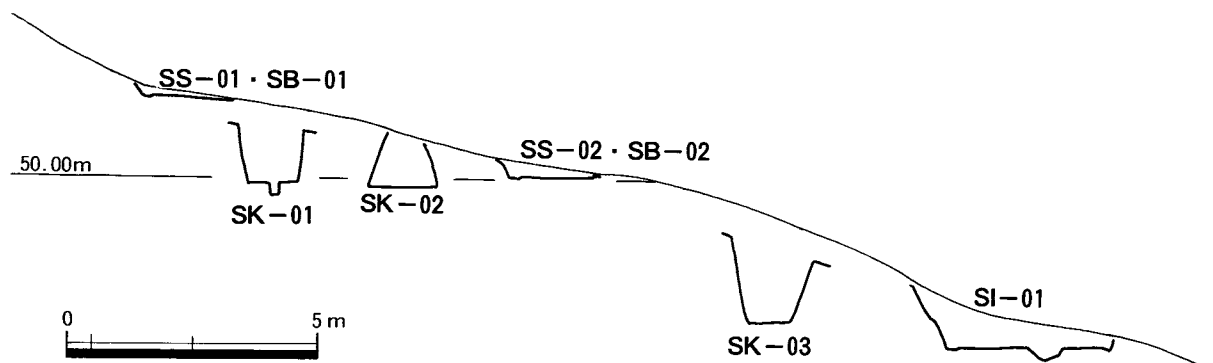
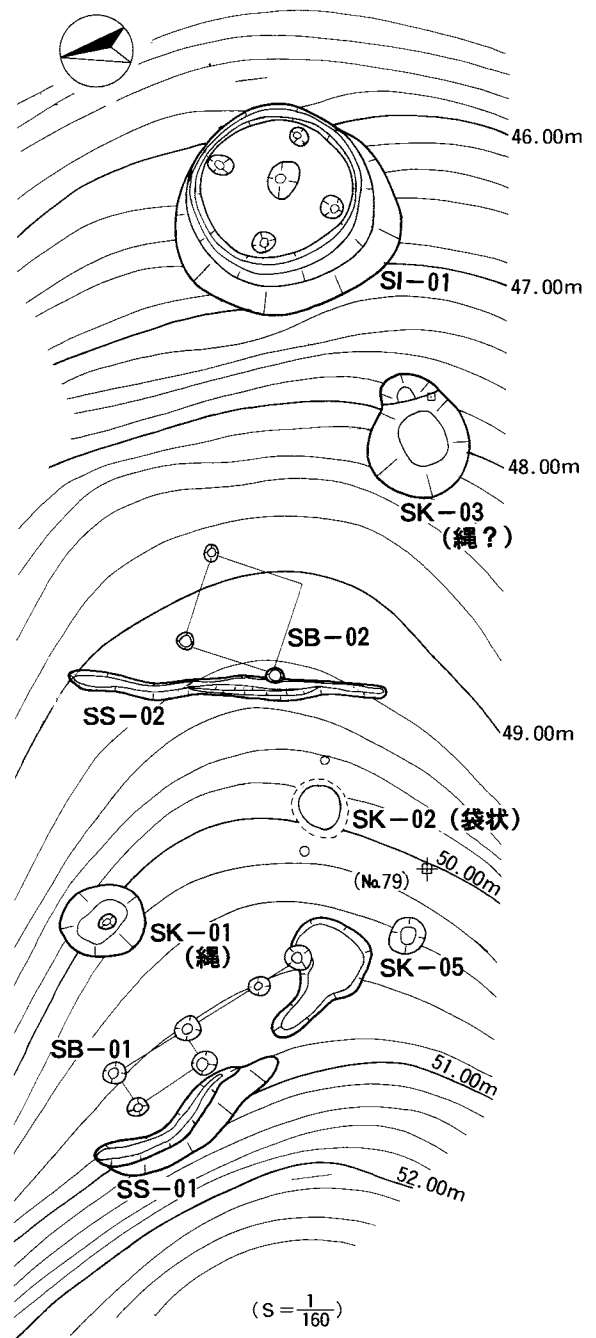
標高43~55mの東側に面した尾根部とこれに連なる谷部であり、尾根中腹部の緩傾斜地で、竪穴住居跡1・段状遺構(建物跡)2・土坑4(SK01~03、05)、北側に迂回した突出部で、土坑1(SK04)を検出した。

竪穴住居跡 (挿図100、図版50)

S I 01 標高46mに立地する。径2.85~3.15mの小型の円形住居跡で、後背地の斜面を階段状に加工する。壁高は最大70cm、壁際に幅10~25cm、深さ5cm前後の側溝が巡る。柱穴は4穴。中央部やや南東寄りに特殊ピットP5がある。P5は上円下方の二段掘りで、深さ29.0cm。埋土には炭が混じる。住居内より弥生後期の土器片を検出した。

段状遺構 (挿図101、図版50)

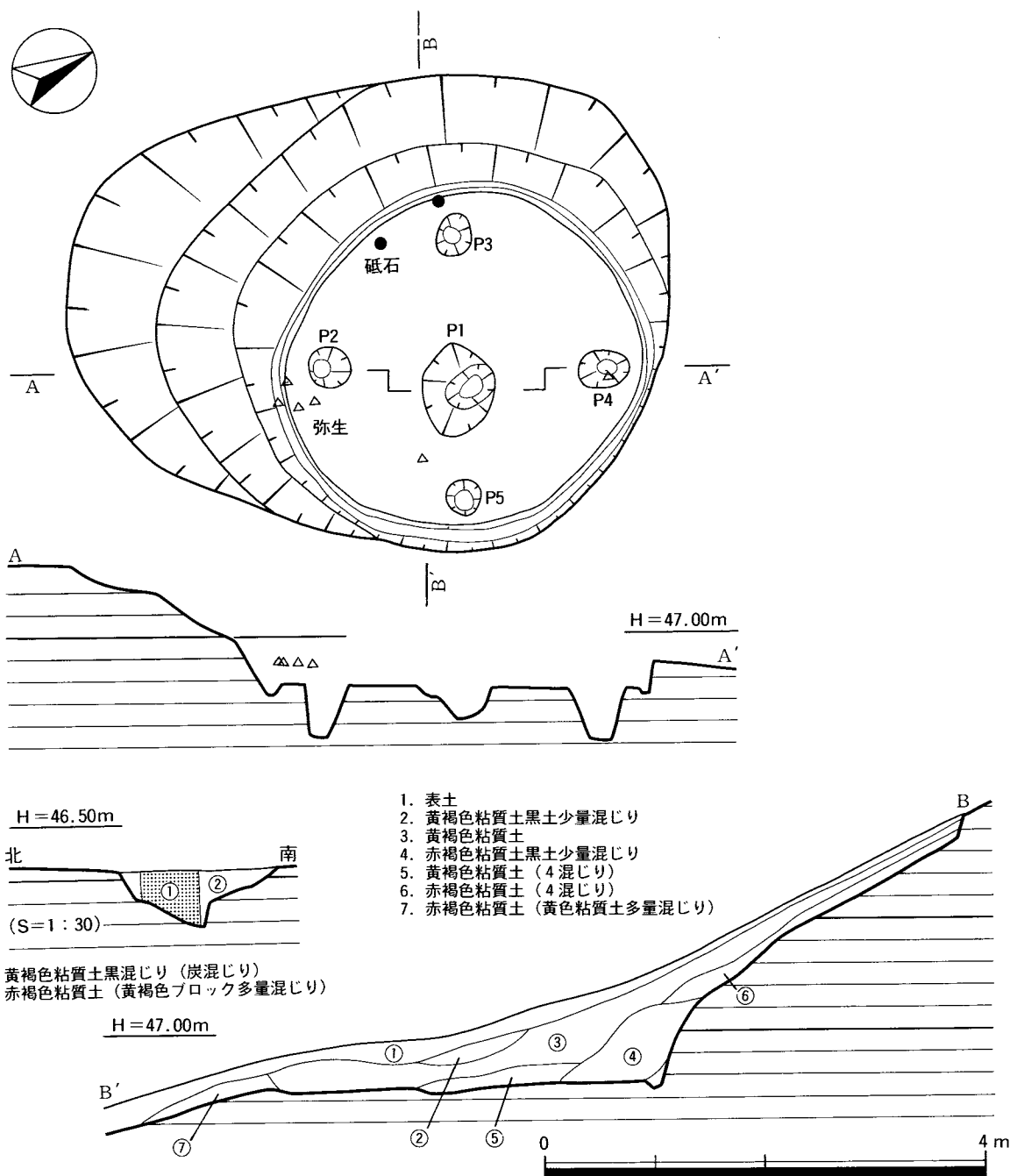
S S 01 標高51.9m。2区の最高所に立地し、約6×2mの南北に長い平坦部を持つ。壁際には幅30~50cm、深さ3~6cm程度の溝が掘られ、径24~47cm、深さ20~45cmのピット



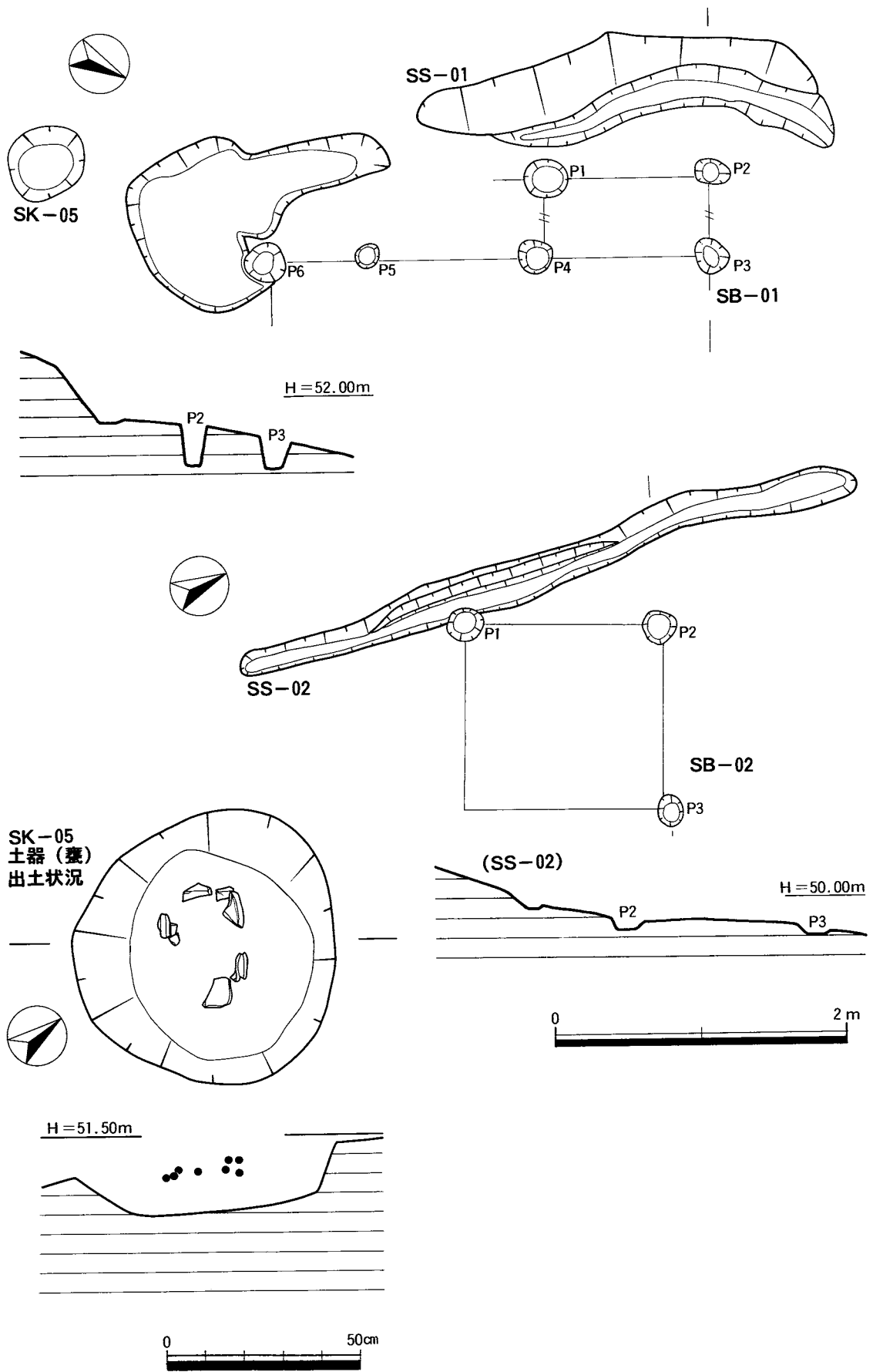
挿図99 研石山遺跡 2区遺構分布図

トも検出した。小規模な建物があったと思われる。P3～P6が南北約4.5mに一直線上につながり建物の一边を成すと思われる。南端のP1と中央部壁寄り須恵器と土師器片が出土した。奈良時代のものと思われる。

SS02 標高50m、2区の間中に立地する。SS01同様南北約7×東西約2mの平坦部が造り出され、溝、ピットもある。小規模な建物が在ったと思われ、P1-P2-P3をつなぐと一辺約1.8m四方の1×1間の建物が想定できる。溝幅30～50cm、深さ3～6cm。ピット径32～38cm、深さ10～20cmを測る。立地、形態から奈良時代のものと思われる。



挿図100 研石山遺跡2区第1住居跡



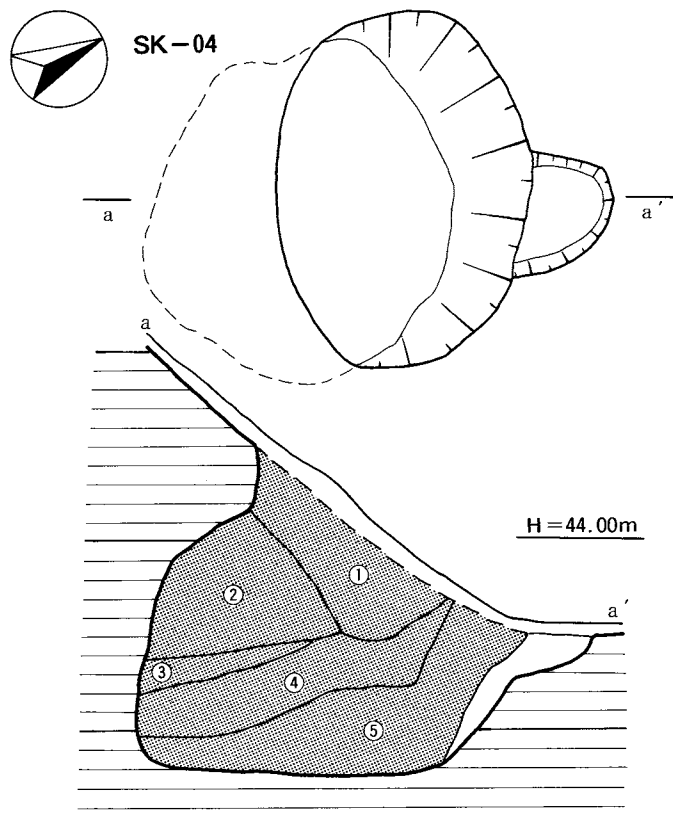
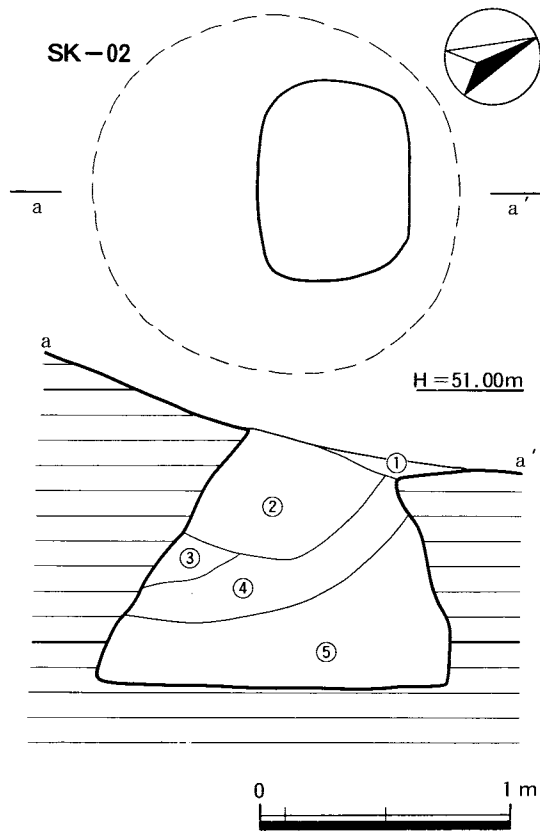
挿図101 研石山遺跡2区建物・段状遺構

土坑 (挿図102~103)

4基を検出した。縄文時代落とし穴状土坑1、弥生時代袋状土坑1、その他2である。

SK01 縄文時代の落とし穴状土坑。標高51mの尾根中央部やや北寄り、SS01の北東側に位置する。上半部不正円形、下半部楕円形を呈し、上縁部径約1.6m、底部径1.1×0.6m—深さ1.4mを測る。底部は平坦で中央に直径20cm、深さ20cmの小孔を有す。

SK02 袋状貯蔵穴。標高約51mの尾根部中央部、SS01の北西側に位置する。上縁楕円、底部円形、断面フラスコ形を呈し、上縁径0.8×0.6m、底面径1.4m—深さ1.1mを測る。底面はほぼ平坦。遺物は無い。



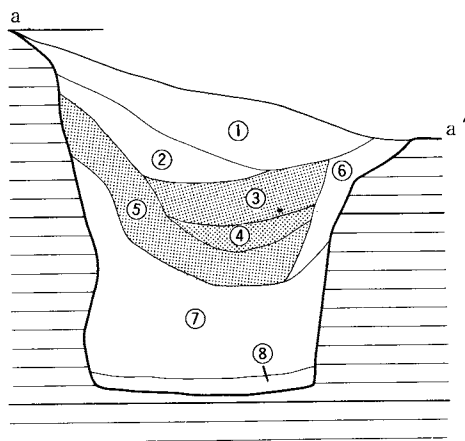
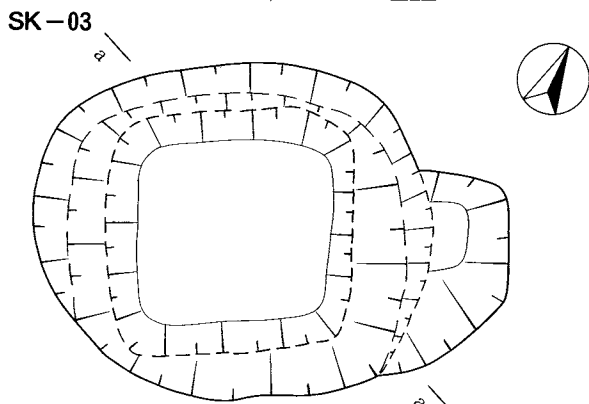
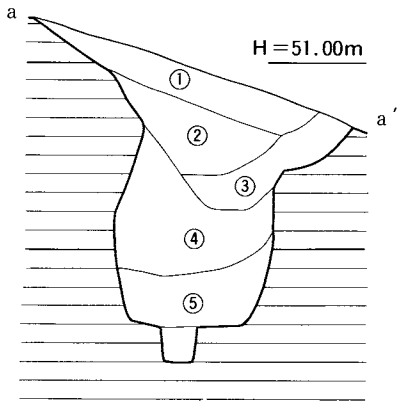
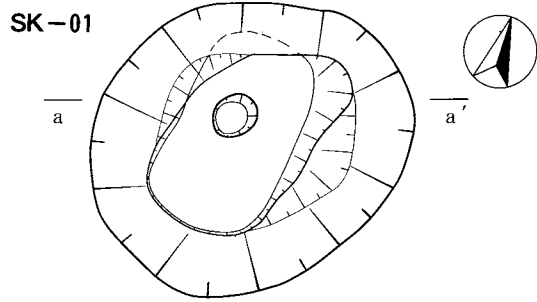
(SK-02)

- ① 黄褐色粘質土 (ブロックまじり)
- ② 黄褐色粘質土 (赤色粘質土多量まじり)
- ③ 黄褐色粘質土 (炭まじり)
- ④ 黄褐色粘質土 (③まじり)
- ⑤ 赤色粘質土 (②まじり)

(SK-04)

- ① 黄褐色粘質土 (黒色土まじり) (炭まじり)
- ② 黄褐色粘質土 (炭まじり) (黒色土少量まじり)
- ③ 黄褐色粘質土 (炭まじり)
- ④ 黄褐色粘質土 (小ブロックまじり) (炭まじり)
- ⑤ 黄褐色粘質土 (ブロックまじり) (炭多まじり)

挿図102 研石山遺跡2区土坑(1)



(アミ…炭混じり)



- (SK01)
- ① 黄褐色粘質土
 - ② 黄褐色粘質土
(④少量混じり)
 - ③ 赤褐色粘質土
(②混じり)
 - ④ 赤褐色粘質土
(②少量混じり)
 - ⑤ 灰色砂質土
(④微量混じり)

- (SK03)
- ① 黄褐色粘質土
(黒色粘質土少量混じり)
 - ② 黄褐色粘質土
 - ③ 黄褐色粘質土
(炭少量含む)
 - ④ 黄褐色粘質土
(炭多量含む)
 - ⑤ 赤色粘質土
(小ブロック混じり)
(炭少量含む)
 - ⑥ 赤褐色粘質土
(黄褐色粘質土多量混)
 - ⑦ 黄褐色土
 - ⑧ 黄褐色粘質土

SK03 標高48mの尾根上、S I 01とS S 02の間に位置する。上半部不正円形、下半部方形を呈し、上縁部1.8×2.1m、底部1×0.9m—深さ1.6mを測る。縄文時代の落とし穴状土坑の可能性も考えられるが、底部にピットが見られず、断面中央に陥没した形の炭混り埋土が認められるなど、不確定要素を残す。山田遺跡3区第1テラスの貯蔵穴にも類似する。現状では時期性格は不明である。

SK04 標高34mの東向き斜面に位置する。入口部を階段状に二段に掘込んだ奥行2×幅1.8m—最大高1.7mの半地下式坑。底部標高32.8m。内部は炭混り土で埋まる。遺物もなく、時期・用途共に不明である。

SK05 S S 01・S B 01の南に隣接し、共に関連すると思われる。径0.7×0.65m—深さ0.2mの円形土坑。内部から弥生後期の甕が出土した。

挿図103 研石山遺跡2区土坑(2)

8. 研石山3区 (挿図104~106、図版52~57)

平野に向かって東側にのびる標高約68~73mの舌状尾根上に位置する。南北幅約20mの痩せ尾根である。地山は岩盤質であり岩の露頭も見られる。尾根は溝により切断されて東側・突端部が独立し、更に西側(上方部)も僅かなくびれが横断し、一辺7~8mの方形区画が認められた。下段(東側)を1号墳、上段を2号墳とし、合計7基の埋葬施設を確認した。

研石山1号墳

東西約13m×南北約12m—墳丘高さ0.4~1.5m。後背部の尾根を切断し幅2.2m、深さ0.4mのU字溝を設け周囲を削り出す。墳形は円墳と思われるが、周溝がやや直線的であり、南北墳丘両側面も直線的にも見え、方墳の可能性もある。表土は薄く約20cmで地山が現れた。削出しを基本とし若干の盛土を施す築造と思われる。墳頂部標高70.8m、周溝底部標高70.45m。墳頂部は径約8~10mの平坦面をなす。墳丘中央やや南寄りにSX01(第1埋・積石・割竹形木棺?)、南西側にSX02(第2埋・木棺直葬)、西側にSX03(第3埋・石蓋土壙)がある。主軸はほぼ東西方向であり、西側が広く頭位を西側にとると思われる。

SX01は地山を掘り込んで棺を納め、上部を拳大から人頭大の割石の積み石で覆う。積み石は東西4×南北2mの楕円形で中央部は陥没した状態で検出された。石材は露頭と同質であり、現地のものであると思われる。掘り方は2段掘り込みで、上段5.0×2.7m—深さ0.2m、下段3.6×0.9~1.0m—深さ0.55m。内部の両側に縦×横約50cm—厚さ約20cm大の小口石が立ち、床面より浮いた位置に断面U字状の粘土の堆積が認められた。割竹形木棺が置かれていたものと思われる。長さ3.2×幅0.5—高さ0.5m。底部標高69.7m。

西寄り鉄剣1、西端で刀子1、鉄鏃2、ヤリガンナ1が出土した。

SX02は二段掘り込みの掘方で、上段2.25×1.15m、下段2×1.15m。深さ0.5m。底中央に長さ1.35×幅0.35のU字状の凹みがあり、小型の割竹形木棺であったと思われる。

SX03は楕円形を呈す石蓋土壙で、長さ0.85×幅0.55—深さ0.3m。石蓋は2枚である。

割石積みの埋葬法は米子市陰田41号墳でも見られた手法であり、共通性が窺える。立地・副葬品・埋葬形態・墳形(墳頂部平坦・削り出し手法)等から古墳前期と思われる。

研石山2号墳

1号墳の後背の尾根上に立地する。僅かではあるが山側に区画溝が認められ、一辺約7~8m、高さ約20cmの方形区画が想定できる。周溝内及び縁辺部で石棺2・石蓋土壙2を検出した。尾根の東西に第4埋と第6埋が対峙するように平行し、また周溝南端と北側墳裾にそれぞれ第5埋と第7埋が位置する。主軸方位は前者が北北西(N-20°-W)、後者が東北東(N-70~74°30'-E)でほぼ直交する規則性のある配置である。石棺は路頭の山石を利用した内法長さ50×幅20cm—高さ約20cmの規模で、石蓋土壙も同様に小規模である。築造はほぼ同時期と思われるが、占地的に4・6埋が早く、次いで5埋、7埋の順に築かれたようである。

割石の用法は研石山3号墳に類似するが、遺物も無く、時期・性格等、詳細は不明である。

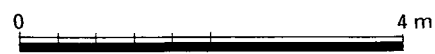
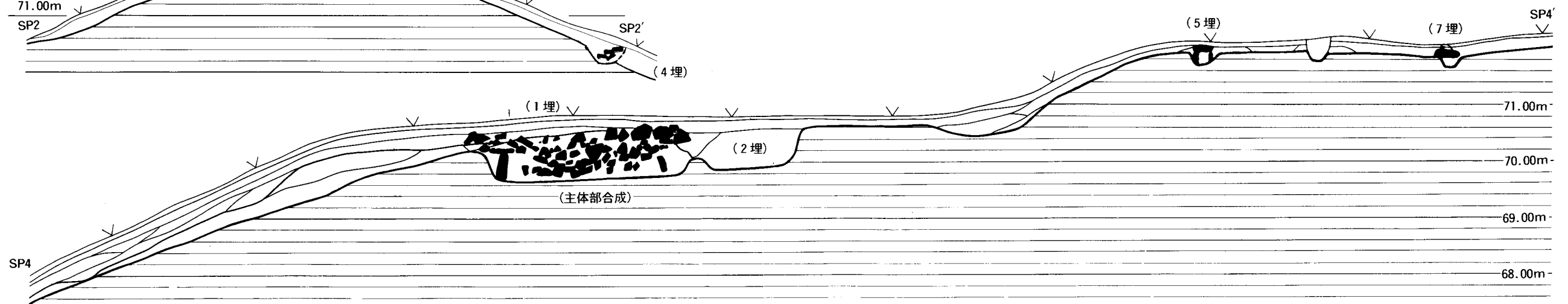
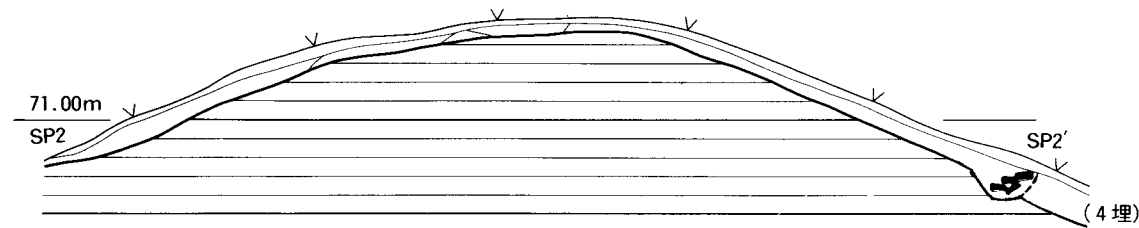
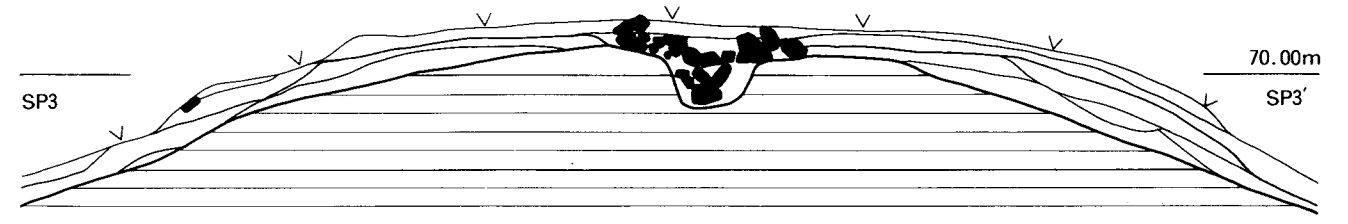
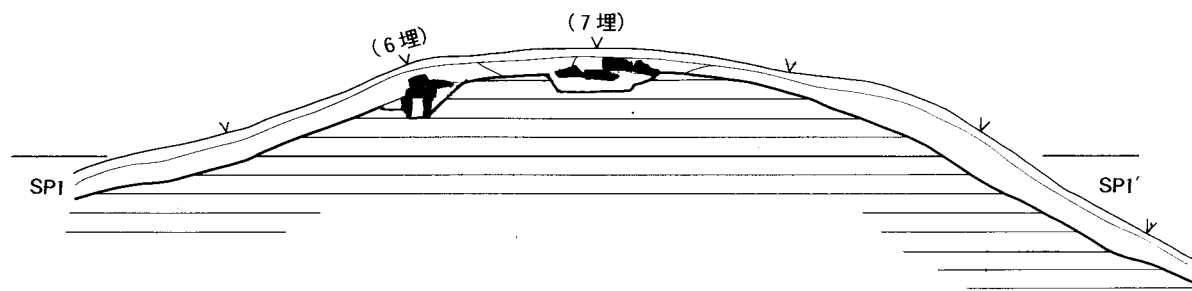
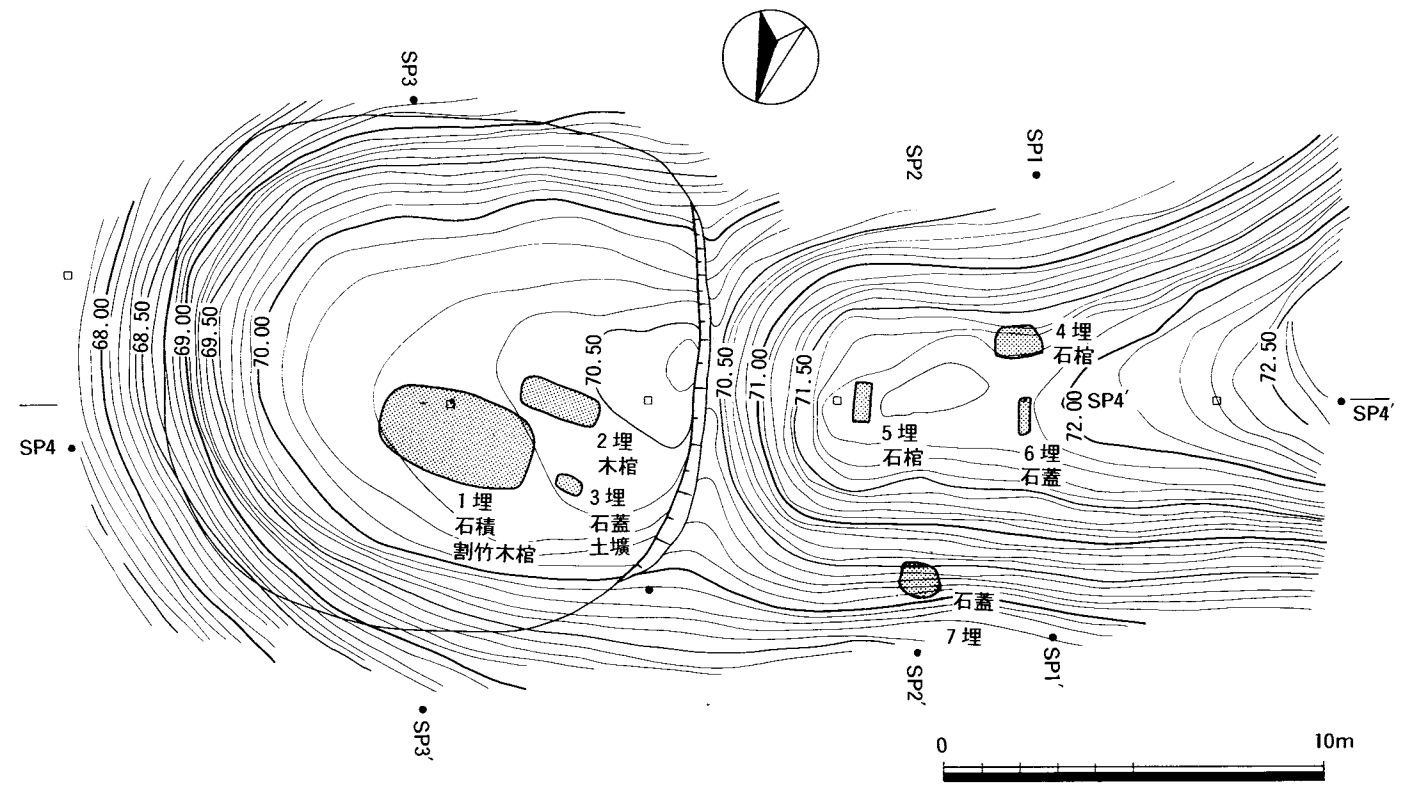
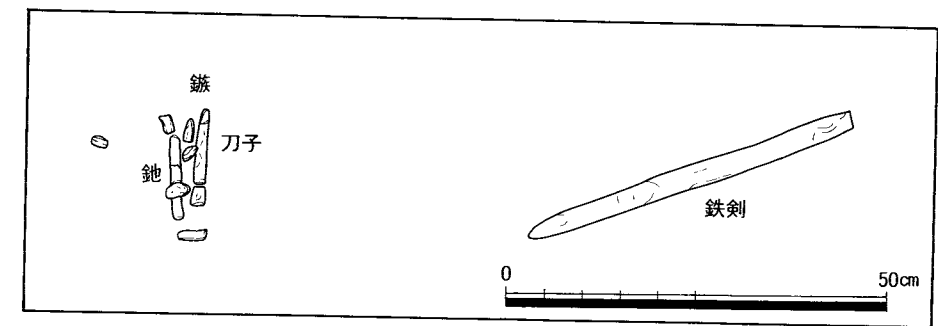
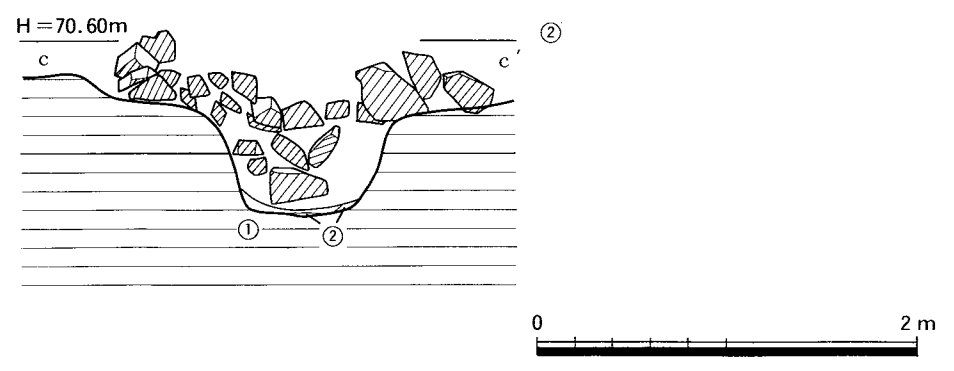
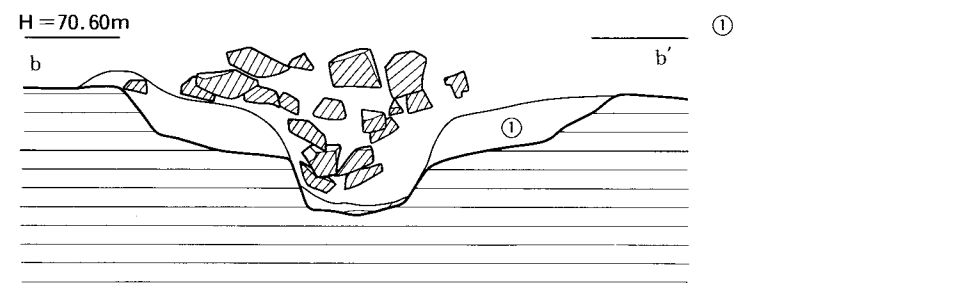
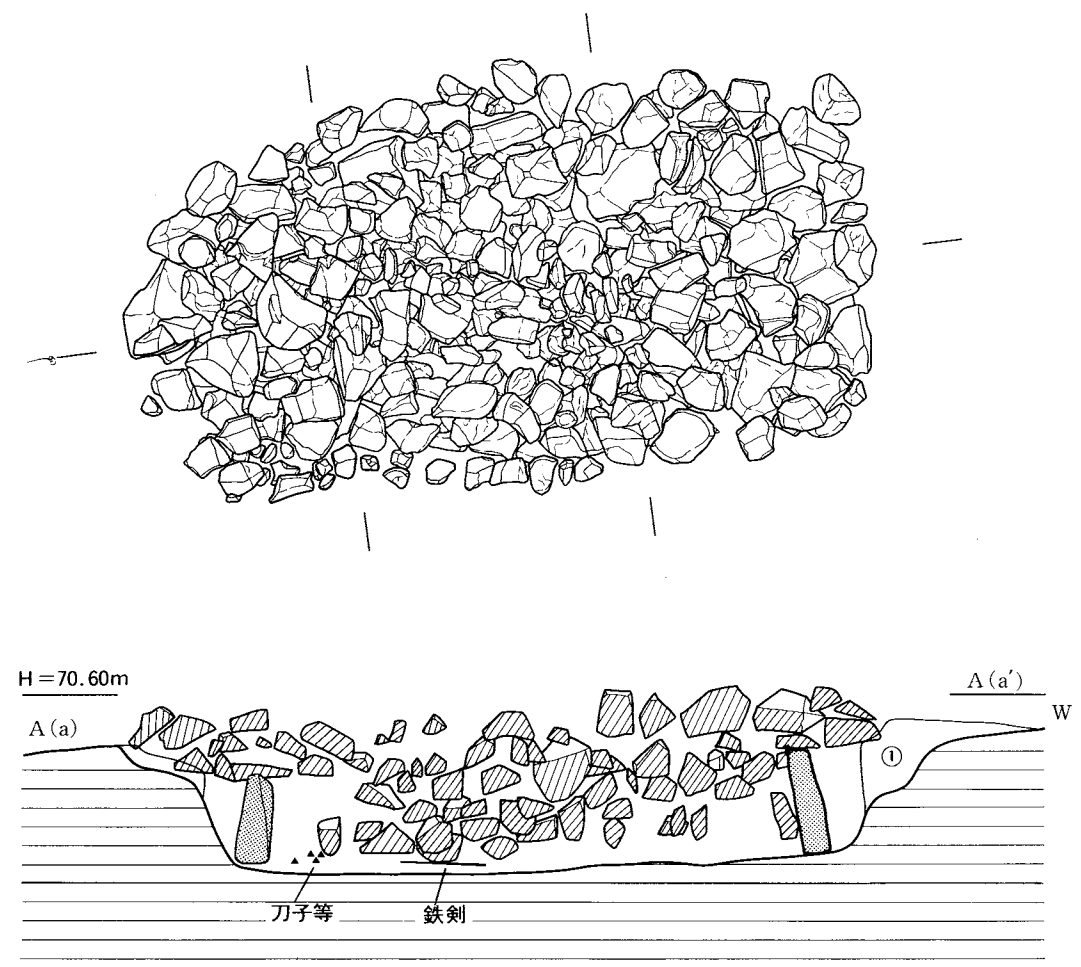
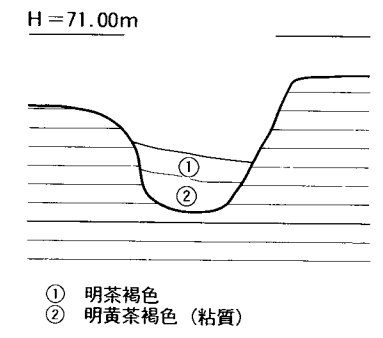
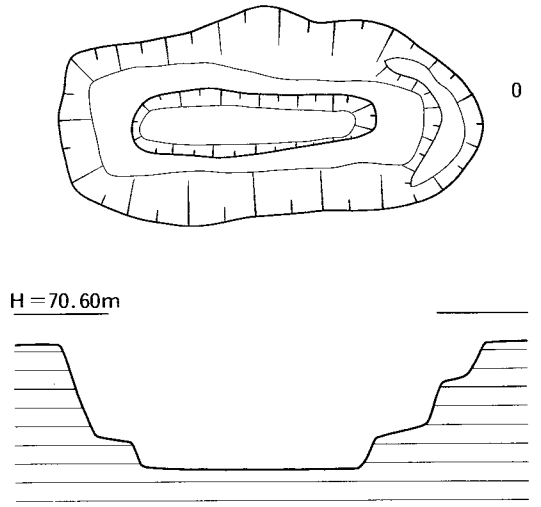


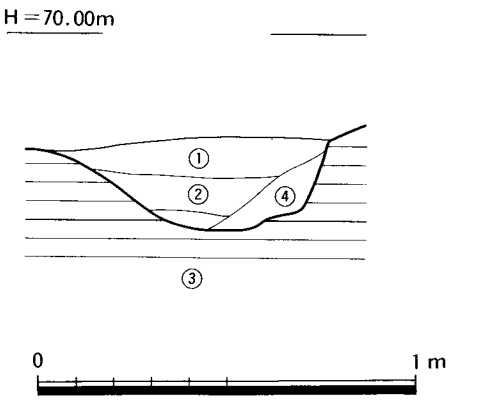
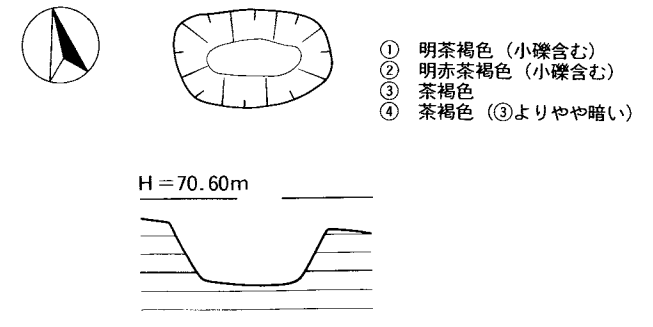
插图104 研石山遺跡3区遺溝分布・断面図



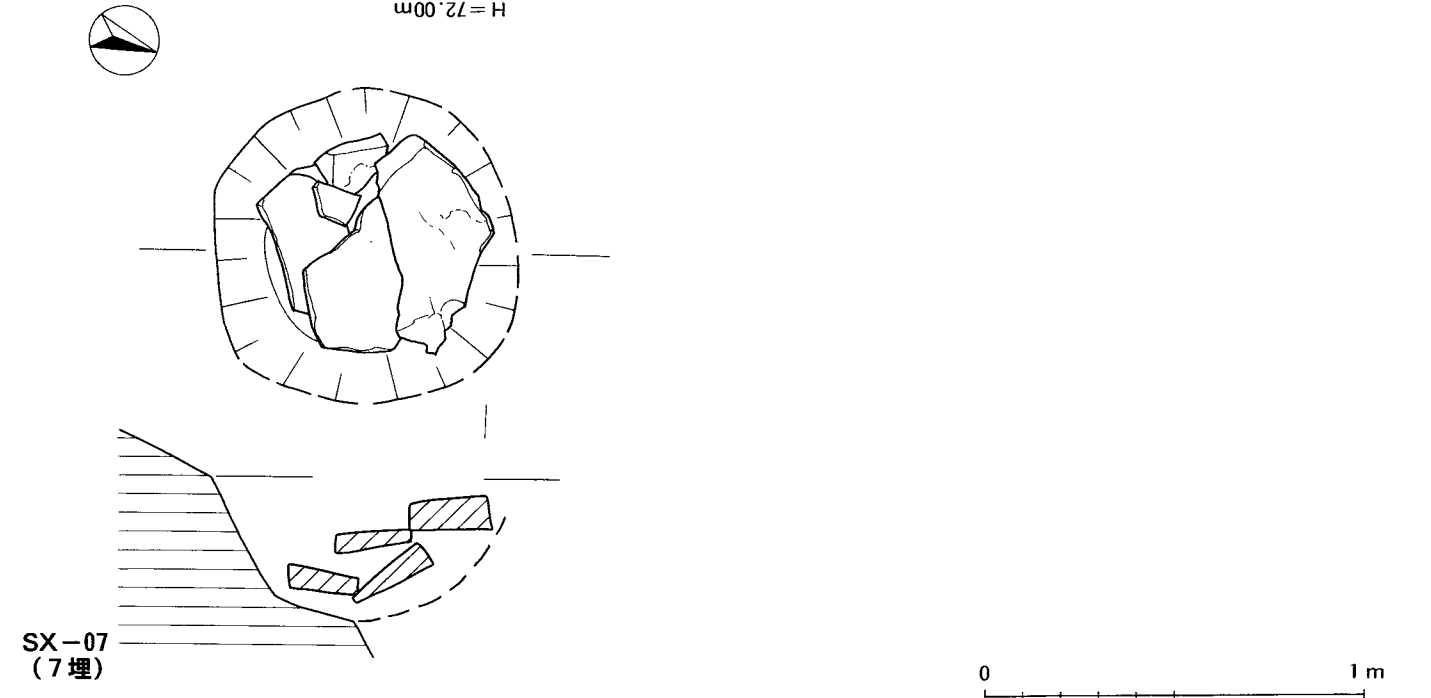
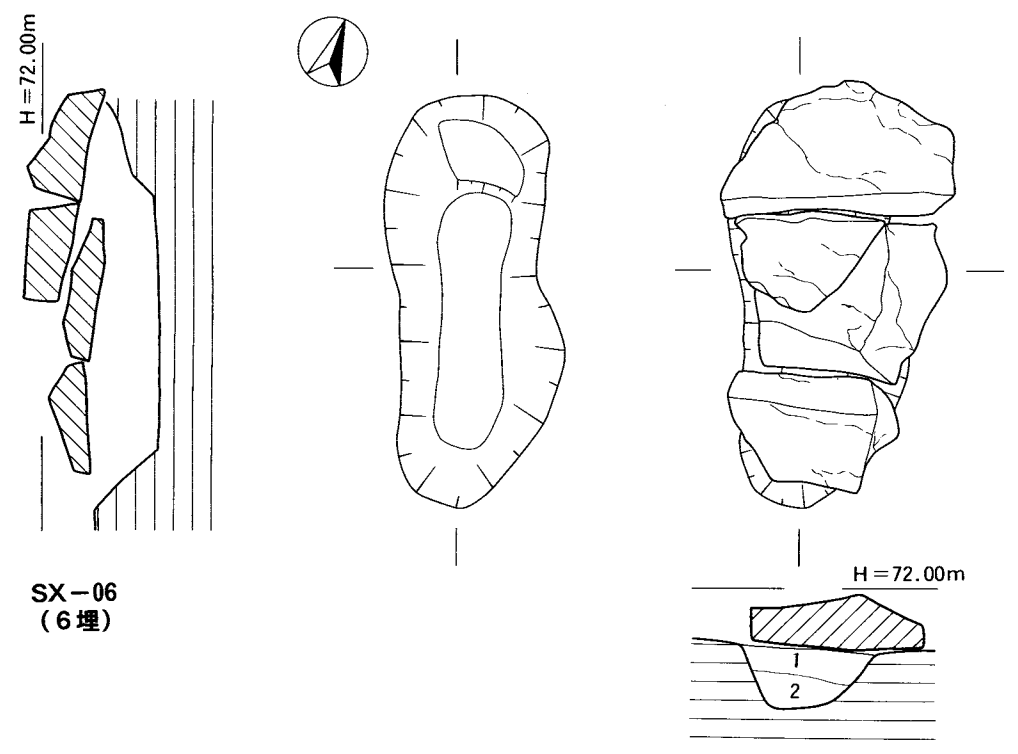
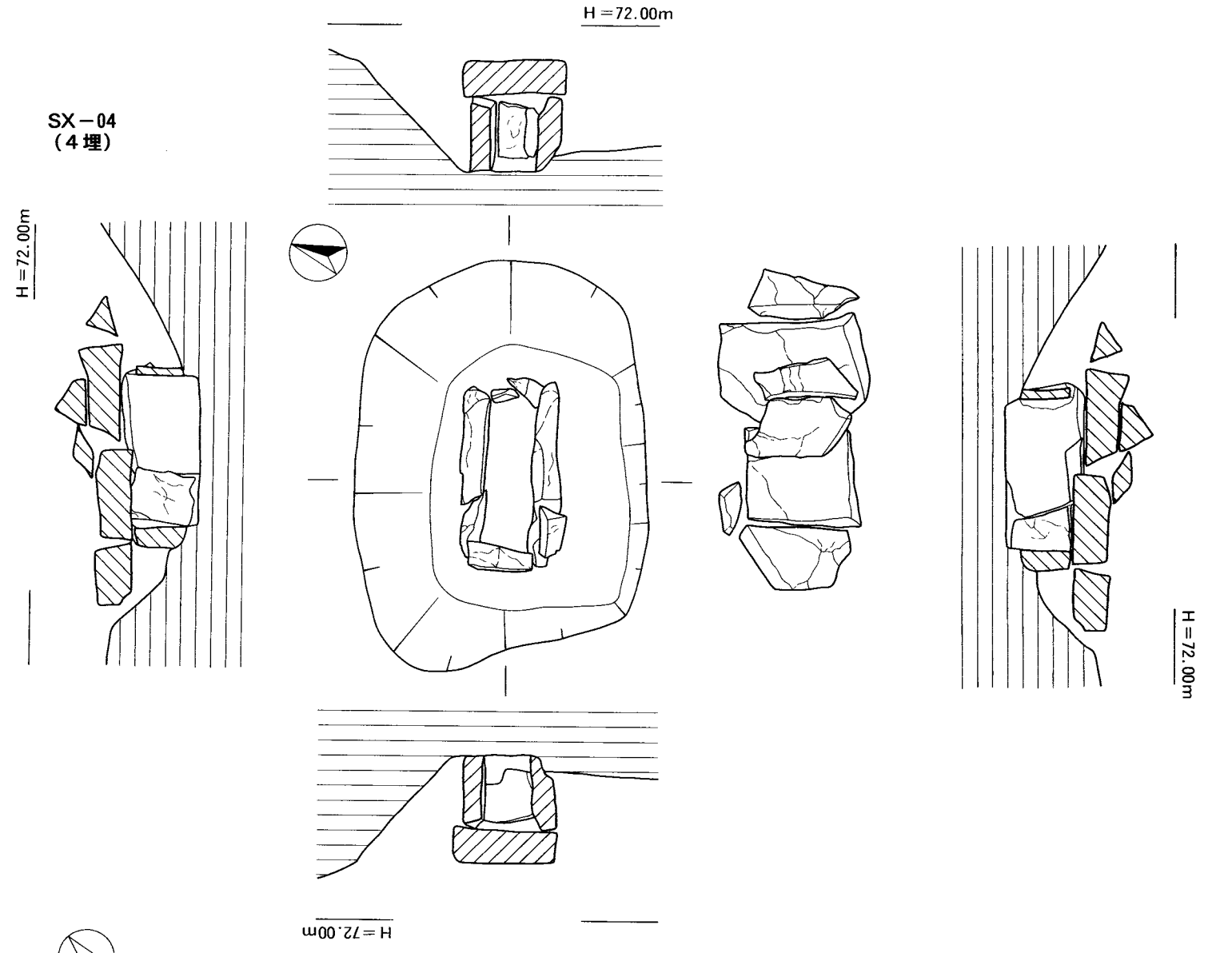
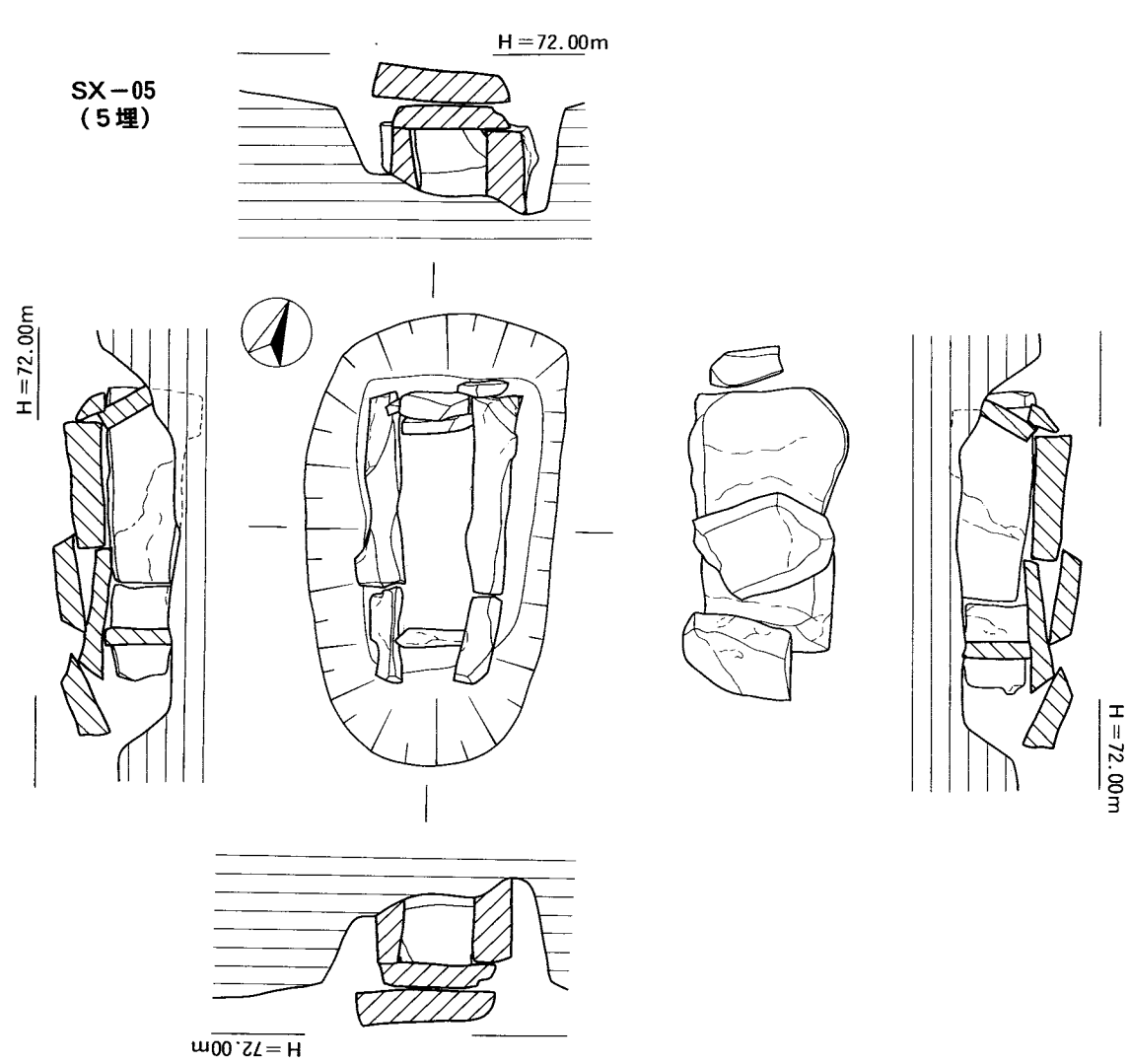
SX-02 (2埋)



SX-03 (3埋)



挿図105 研石山1号墳埋葬施設



挿図106 研石山2号墳埋葬施設

9. 研石山遺跡5区（挿図107～148、図版58～69）

概要 研石山丘陵の北東に延びる山裾の低位丘陵に立地する。立地標高は30～45mである。裾部突端は溜池造成による掘削改変を受ける。萱原集落の谷奥にあり、研石山3区を挟んで1区の反対側斜面にあたり、下山遺跡とは谷をおいて南側に対峙する位置にある。調査前は森中の湿地部に僅かな凹凸のあるなだらかな地形であったが、深さ2m以上の谷地形（古代の谷一流路）を確認し、丘陵に分布する集落遺構と谷部に集積した土器・木器等を検出した。

丘陵はⅠ区－西丘陵、Ⅱ区－中央丘陵、Ⅲ区－東丘陵・斜面の3地区に大別される。

谷－古代流路は、位置・出口方向によって西谷・北谷・東谷とした。西谷は僅かに調査区域にかかるだけである。谷底で古式土師器が出土した。北谷は屈曲部で杭列や木器溜りを検出した。古式土師器堆積を小礫が覆い、木器・木溜りを挟んで、更に、古式須恵器層が堆積する。埋土中には大量の炭が含まれる。東谷はⅡ区とⅢ区を分ける急流で、土石流により古墳時代前期とそれ以降に分かれる。下流部上層では、奈良時代土器・鉄製品が出土した。（図版67～69）

遺構は、竪穴住居跡22・掘立柱建物跡11・溝状遺構・段状遺構・土坑（落とし穴10）・石棺1・石組遺構等。遺物は、縄文土器（早期押型文土器）・弥生土器（前期・中期・後期）・土師器・須恵器・陶磁器・玉類・石器・木器・鉄器等がある。縄文・弥生・古代末～中世遺物は少ない。基本的に古墳時代前期～後期初頭、後期後半及び奈良時代～平安初期を中心とする集落遺跡である。古墳時代前期と中期～後期初頭の間には、洪水・山崩れによる断絶が認められる。

遺跡の変遷 概ね次の通りである。

1期：縄文時代～弥生時代。縄文時代は落とし穴状土坑があり、早期押型文土器も出土した。弥生時代は前・中・後の各期遺物があるが、いずれも単品に近く、少ない。

2期：古墳時代前期～中期前半期。中央丘陵を中心に東丘陵の一部を取り込んだ地域に分布し、竪穴住居跡が築かれる。火鑽臼・竪杵などの木製品を持つ。

3期：古墳時代中期後半～後期初頭期。最盛期で、西・中央・東の全丘陵に分布し遺構も多い。竪穴住居跡が築かれる。遺物分布より、中心は中央奥部（西側）にあったと思われる。古式須恵器・移動式竈等を持つ。子持勾玉・石製紡錘車もこの時期に属すると思われる。

4期：古墳時代後期後半期。西・中央・東の中位域に分布する。範囲は縮小するが、掘立柱建物群を形成し、まとまった集落を形成する。東斜面には小古墳（研石山3号墳）も造られる。

5期：奈良時代後半期～平安初期。中央・東両丘陵の、東谷を挟んだ地域に形成される。フイゴ羽口・鉄器・鉄滓等がある。鍛冶生産を主体とする工房・集落である。

竪穴住居跡（挿図112～126、図版61・62）

方形住居跡が中心である。規模は45㎡が1棟、20～30㎡台が6（重複含む）棟、10～20㎡台が2（4棟、10㎡以下2棟）。大・中型では時期が下るに従い縮小化の現象が見られる。古墳時代前期と中期中葉～後期初頭期であり、後半が中心である。

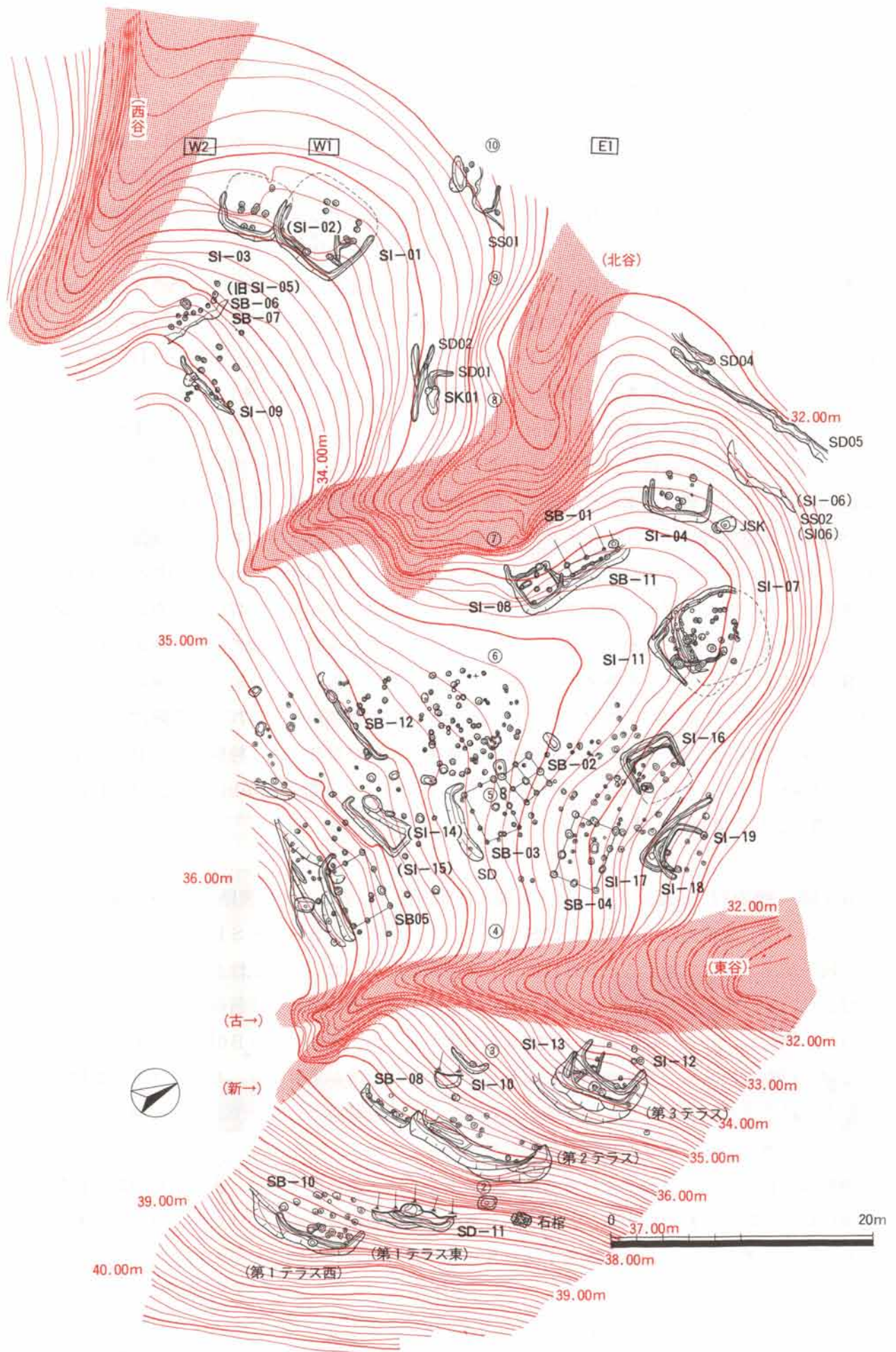
S I 01・02 (挿図112・113、図版61) I区丘陵の尾根上に位置し北々西に面す。傾斜面のため北々西側は流出している。西側にS I 03が接し、これを切る。南西部壁寄りに側溝が二重に巡っており、調査時2棟の重複と考え別個に扱ったが、部分的な改築(拡張)に伴うものと思われる。方形で壁肩長7.3m、床面長6.7m、壁面最大高0.45m、床面積約45m²。調査中最大の大きさである。床面標高33.55m。従前に対して南壁側が約40~50cmほど拡張される。ピットは14個を検出したが、支柱穴はP 8・P 2~P 4の4個と思われ、柱間隔はP 8から右回りに3.00・2.90・3.20・3.20mを測る。南壁寄り中央に特殊ピットP 10がある。北側がやや突出する不正円形で径40~50—深さ13cm。遺物は南東側を中心に出土した。古式須恵器。土師器(甕・壺・高坏・埴・鉢)等がある。遺物から古墳時代中期後半期と思われる。

S I 03 (挿図112、図版61) I区丘陵の尾根上に位置し、やはり傾斜面のため北々西側は流出している。S I 01の西側に一部重複して隣接し、切合いよりS I 01に先行する。方形を呈し、壁肩長5.40、床面長4.75m、壁面最大高0.65mを測る。床面標高は33.35mで、S I 01に対し20cmほど低い。ピットは7個を検出したが、支柱穴としてP 1・P 2・P 3が考えられ、柱間隔はそれぞれ2.05mを測る。南壁寄り中央にP 6やや東側にP 7、またP 1—P 2間に不正形坑P 4がある。P 6、P 7は径35~40—深さ10cm。遺物は南、及び南東側を中心に出土した。古式須恵器・土師器(甕・壺・高坏・埴・鉢)等がある。遺物から古墳時代中期後半期と思われる。

S I 04 a, b (挿図114) II区丘陵尾根突端の北西肩部に位置する。北東側にS I 06、南々西方向にS I 08がある。北々西側の壁部は傾斜面のため流出している。西側壁部の側溝が二重に巡り改築(縮小と思われる)が認められる。古式をS I 04 a、改築後を04 bとした。方形を呈し、S I 04 aが、壁肩長5.35、床面長4.95m、S I 04 bが、壁肩長5.0、床面長4.6mを測る。壁面最大高0.35m、床面標高33.65m。ピットは8個を検出したが、支柱穴としてP 1~P 4の4個が考えられ、柱間隔は、P 1から左回りに1.70・1.60・1.95・1.70mを測り、谷側(北々西側)が広い。奥側(南々東)壁寄り中央に中央に特殊ピットP 7とP 8が重複して存在する。P 7は円形で径60—深さ20cm、P 8はやや歪な円形で径40~50—深さ35cm。P 7が古くS I 04 a、P 8がS I 04 bに伴うものと思われる。遺物は南、及び南東側を中心に出土した。古式須恵器・土師器があり、いずれも細片であるが、古墳時代中期後半期と思われる。

S I 05 (= S B 06・07:挿図131、図版62) 調査時竪穴住居跡とした。重複消滅の可能性も残るが、掘立柱建物と思われる。(S B 06・07の項で詳述)。

S I 06 (= S S 02:挿図142) II区丘陵尾根突端の北側肩部に位置する。南西後背にS I 04がある。斜面の堀込みと遺物の出土があったため竪穴住居跡として扱ったが、地傾斜による流失が激しく、ピット等の検出も無く、特定には至らなかった。S K 05~07(縄文土坑)に



挿図107 研石山遺跡 5区遺構分布図

重複する。土師器（甕・高坏）が出土した。古墳時代中期中葉期と考えられる。

S I 07・S I 11（挿図115、116、図版61） II区丘陵尾根の中央やや東寄りに位置する。ややずれて二棟が重複し、S I 11が古くS I 07がこれを切る。南及び南々西の肩部傾斜面に位置するS I 16、S I 17～19等とII区丘陵東側の単位群を構成する。東側及び北東側は傾斜面のため流出している。ピットはS I 07・S I 11合わせて27個を検出した。

S I 07は、方形を呈し、壁肩長5.65、床面長5.20m、壁面最大高0.25m、床面標高34.15m。南壁部で側溝が三重に巡っており、改築（拡張）が認められる。支柱穴は4個と思われるが、**A）P 1－P 2－P 3－P 4、B）P 1－P 9－P 10－P 4、C）P 1－P 9－P 11－P 4**の三通りの組合せが考えられる。柱間隔は、それぞれP 1から左回りに、**A）1.60・2.40・1.65・2.40m、B）2.20・2.50・2.10・2.42m、C）2.20・2.10・2.20・2.40m**を測る。奥側（南）壁寄り中央に炭を多量に含む特殊ピットP 25とP 26が重複する。P 26は楕円形で80×60－深さ28cm。P 25はP 26に切り込まれるが幅60－深さ25cm、P 26と同規模であったと思われる。

壁面及び側溝内で径10～20cmの小ピットを検出した。壁面に沿う形で並び、擁壁施設に伴うものと考えられる。床面中央部には焼土面がある。楕円形で1.75×1.25mの広がりを持つ。

遺物は、住居跡内及び周辺部で見られ、完形の古式須恵器高坏（TK 47併行）を始め、土師器（甕・高坏・埴・竈）等が出土した。古墳時代中期後葉～後期初頭期の住居と考えられる。

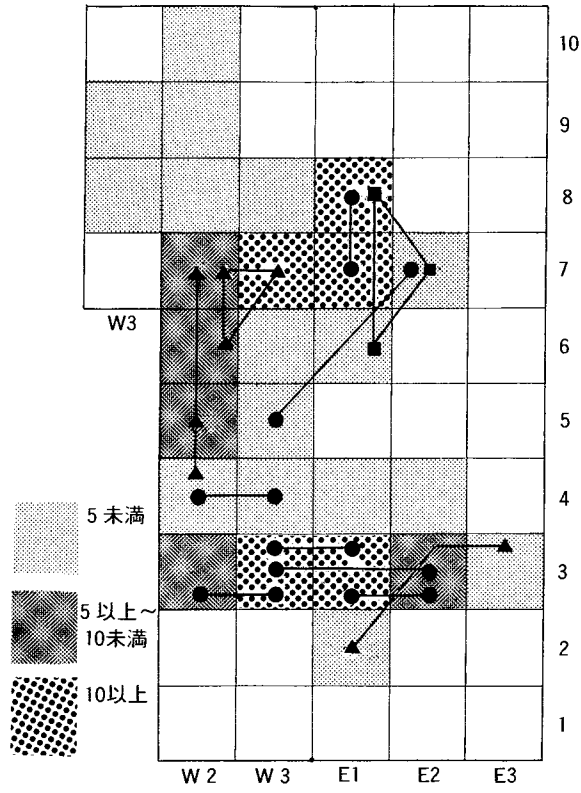
S I 11は、南西コーナーを残すのみであり、全容は不明であるが、一辺6m規模の方形住居跡と考えられる。支柱穴としてP 17－P 18－P 20－P 22の4個が考えられ、柱間隔は、P 17から左回りに3.25・2.25・2.95・2.25mを測る。奥側（南）壁寄り中央に特殊ピットP 21（径80－深さ50cm。円形）が両脇溝に仕切られて存在し、内部より土師器甕が出土した（挿図115－4）。遺物より古墳時代中期前半と考えられる。

S I 08（挿図117、図版61） II区丘陵の西側肩部に位置し、古代流路（北谷）に面する。北側にS I 04、北東方向の尾根側にはS I 07・S I 11がある。S B 01・S B 11と後背壁面を共有し同一テラス上に立地する。S B 11はS I 08空間を取込んでいた可能性が高い。

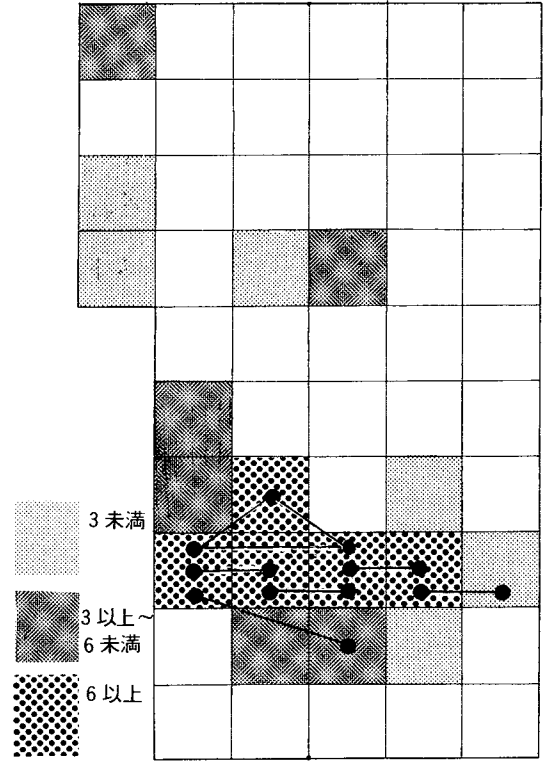
壁肩長3.50、床面長2.80m、壁面最大高0.55mの平面方形の小型の住居跡である。床面標高34.15m。壁面に沿って幅25～30－深さ8cmの側溝が巡るが、北東壁はS B 01の溝によって影響を受け、内側が抉れる。北西壁の谷に向かってコの字状の溝が重複する。ピットは5個を検出した。支柱穴としてP 1～P 4の4個が考えられ、柱間隔は各々1.50mである。床面中央に径35－深さ10cmのP 5があり、特殊ピットと思われる。

遺物はS B 01を含めたテラス全域で炭混りの土と共に大量に出土した。古墳時代前期～後期初頭の幅広い時期にわたっており、完形品も多い。遺構廃絶後、谷に向けた廃棄場として利用されたものと考えられる。築造はS I 08→S B 11→S B 01という順番と思われる。

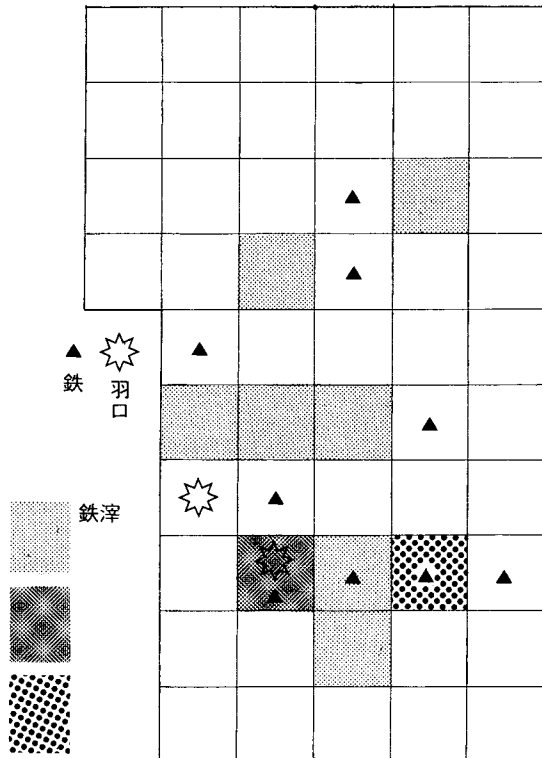
古式須恵器



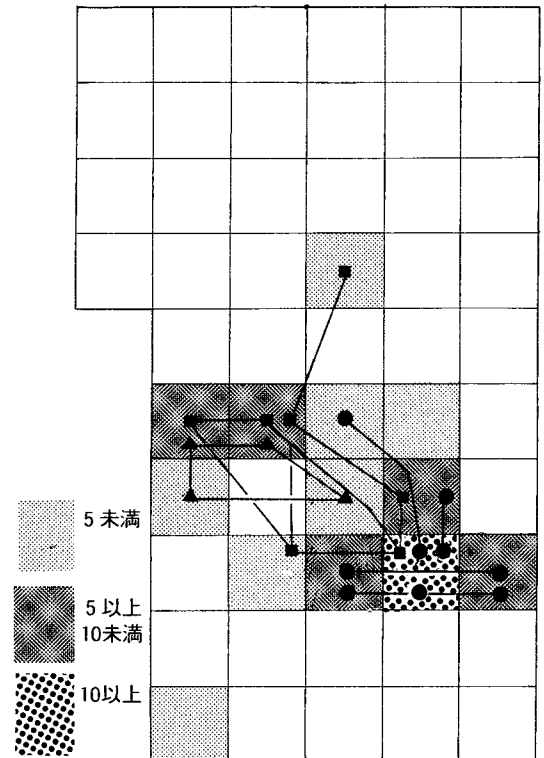
古墳時代後期須恵器



鉄滓・鉄製品・羽口



奈良・平安期須恵器

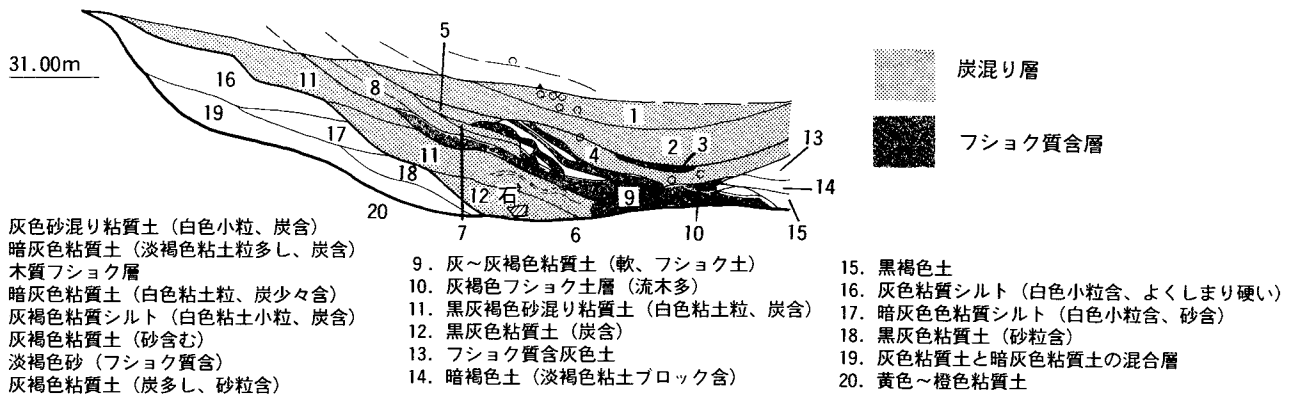


(ポイントは出土グリッドを示す)

挿図108 研石山遺跡5区遺物分布概要

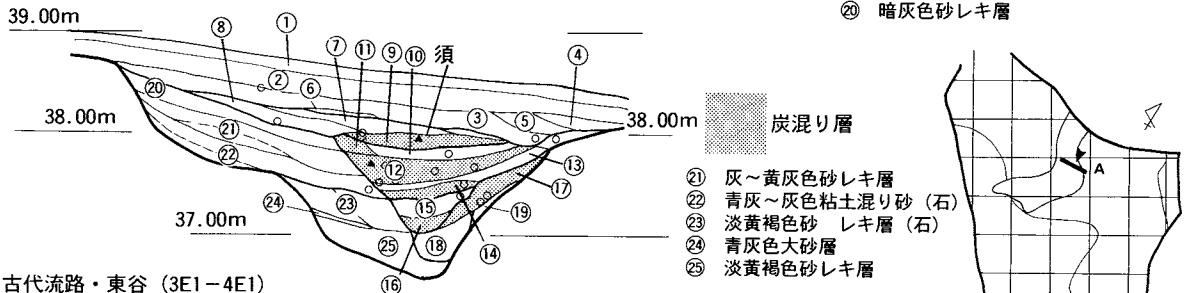
A. 古代流路・北谷 (8E1区)

32.00m



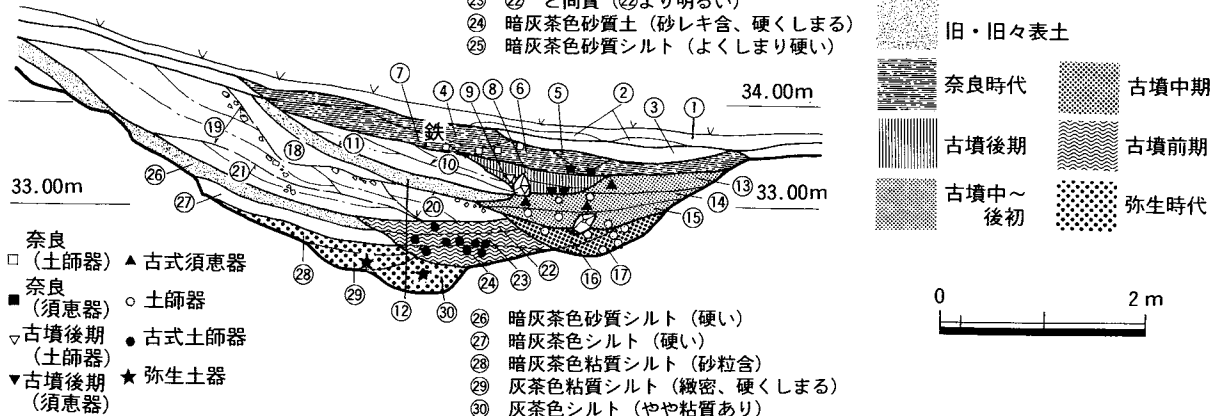
B. 古代流路・東谷 (3W1-4W1)

- | | | |
|----------------|------------------------|-----------------------|
| ① 表土 | ⑥ 灰色粗砂 | ⑪ 黄灰色微砂 (土器含) |
| ② 灰色シルト | ⑦ 暗灰色砂質土 (小レキ混) | ⑫ 黄灰色微砂 (炭・土器含、カナゲ沈着) |
| ③ 黒灰褐色土 (小レキ混) | ⑧ 黄灰色砂層 | ⑬ 灰~黄灰色シルト (炭少々) |
| ④ 灰褐色土 | ⑨ 暗灰色微砂 (小レキ混、炭・土器含) | ⑭ 暗灰色粘質シルト |
| ⑤ 砂混黄灰色土 | ⑩ 灰色粘質シルト (小レキ少々、炭土器含) | ⑮ 暗灰黄色砂質土 (レキ混) |
| | | ⑯ 黄灰色砂レキ層 |
| | | ⑰ 暗灰色砂レキ層 |

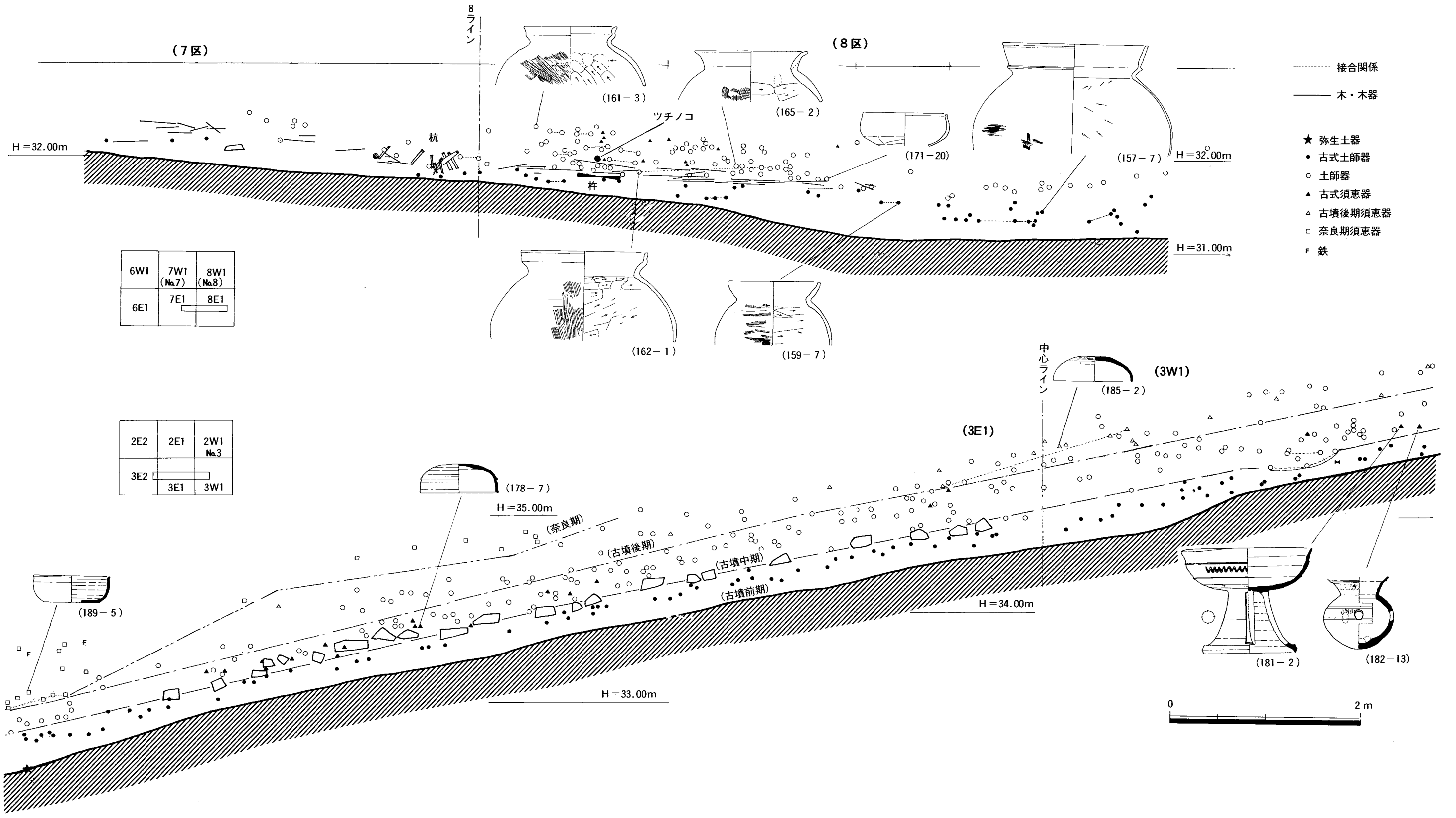


C. 古代流路・東谷 (3E1-4E1)

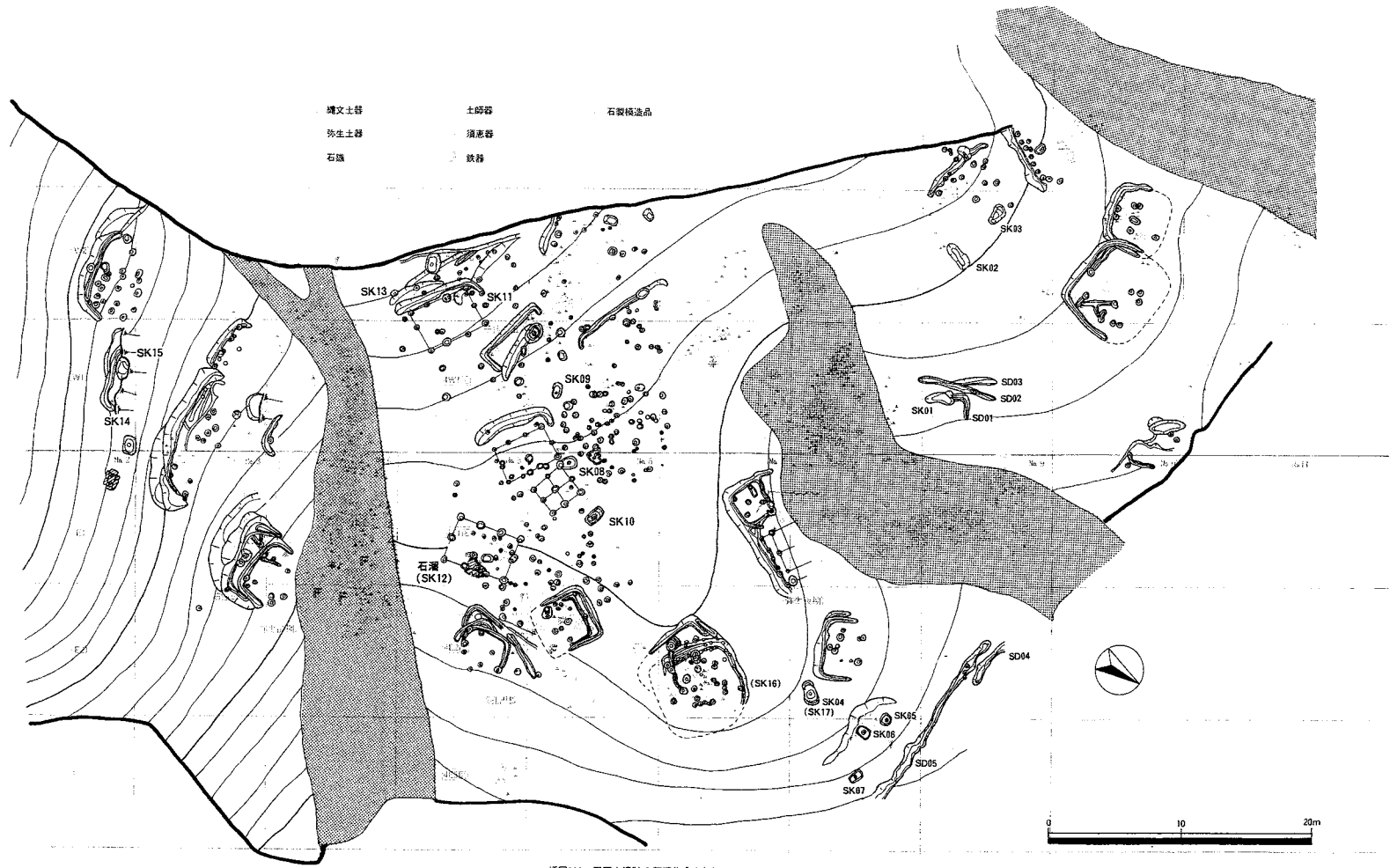
- | | |
|-----------------------------|------------------------------|
| ① 黒褐色土 (表土、軟) | ⑫ 暗茶色シルト (砂粒、炭混、土器含) |
| ② 灰色~灰褐色細砂 | ⑬ 暗灰褐色シルト (炭多し、土師器、須恵器) |
| ③ 黒褐色シルト (砂粒含、硬) | ⑭ 黒褐色砂レキ混りシルト (炭多し土師器、須恵器) |
| ④ 黒色~黒褐色シルト (砂粒、小レキ含) | ⑮ 黒灰褐色砂レキ混りシルト (炭多し、角レキ、土器含) |
| ⑤ 黄褐色と褐色混合粘質土 (砂粒、小レキ、土器片多) | ⑯ 黒灰褐色砂レキ混りシルト (土師、角レキ) |
| ⑥ 淡黄褐色粘質土 (砂粒少々、軟) | ⑰ 暗灰色砂質シルト |
| ⑦ 灰褐色砂質シルト | ⑱ 黄褐色粘質土 (炭混り、砂粒含、硬い) |
| ⑧ 暗灰褐色シルト (黄軟岩含、炭少々) | ⑲ 暗灰黄色粘質土 (炭少々レキ含やや軟) |
| ⑨ 暗灰褐色シルト (⑧より黒い) | ⑲ 暗灰黄色粘質土 (炭少々) |
| ⑩ 灰茶色粘質シルト (黄色粒含、硬) | ⑲ 灰~暗灰色粘質土 (炭少々、軟岩含) |
| ⑪ 黄灰色粘質土 (黄軟岩粒多含む) | ⑲ 暗灰茶色砂質シルト (炭少々、土器含、硬い) |
| | ⑲ ⑳ と同質 (⑲より明るい) |
| | ⑲ ㉑ 暗灰茶色砂質土 (砂レキ含、硬くしまる) |
| | ⑲ ㉒ 暗灰茶色砂質シルト (よくしまり硬い) |



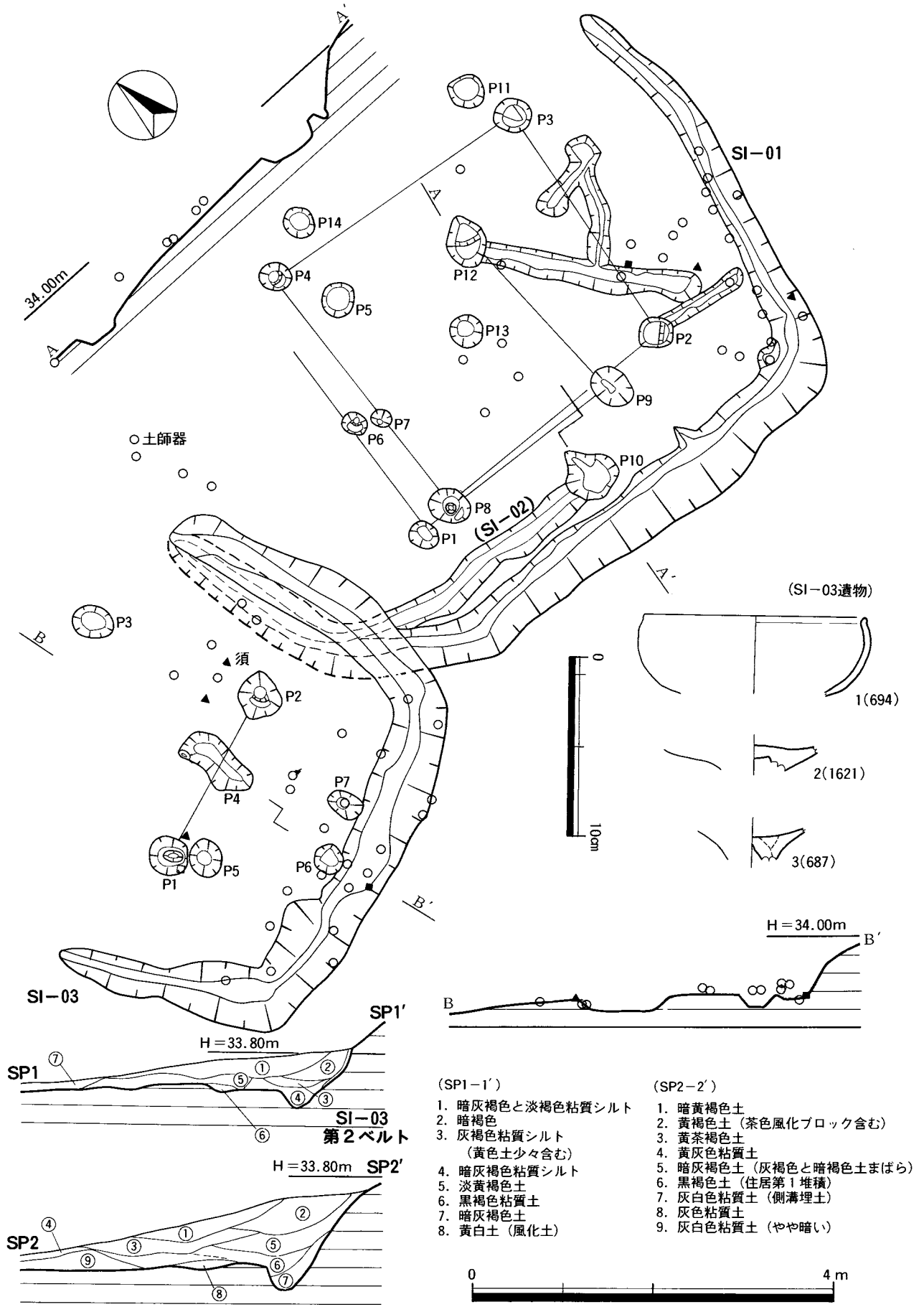
挿図109 研石山遺跡5区土層図



挿図110 研石山遺跡5区遺物分布(1)



挿図111 研石山遺跡5区遺物分布(2)



挿図112 研石山遺跡5区第1号、3号住居跡遺溝

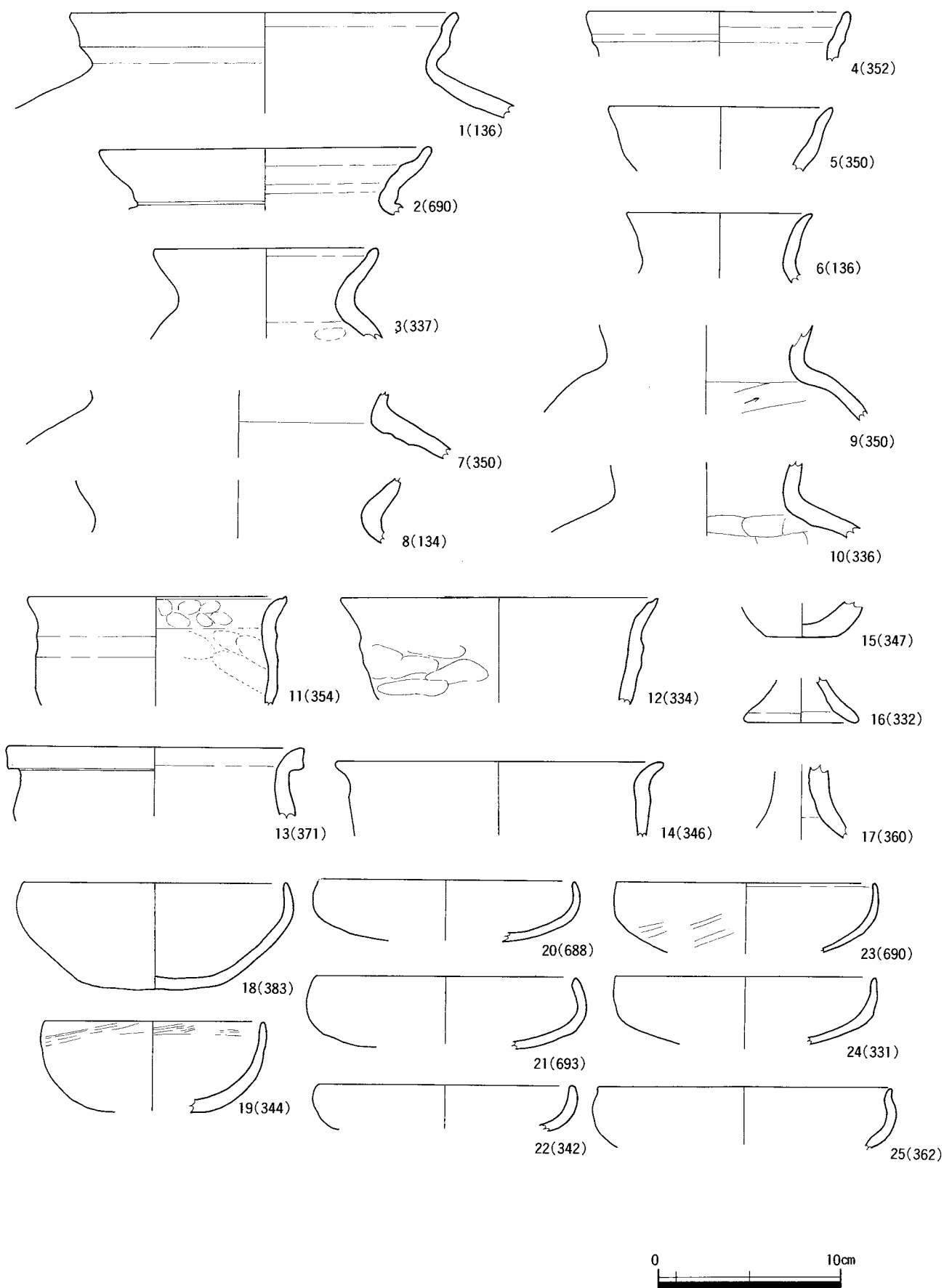


插图113 研石山遗迹5区第1号住居迹遗物

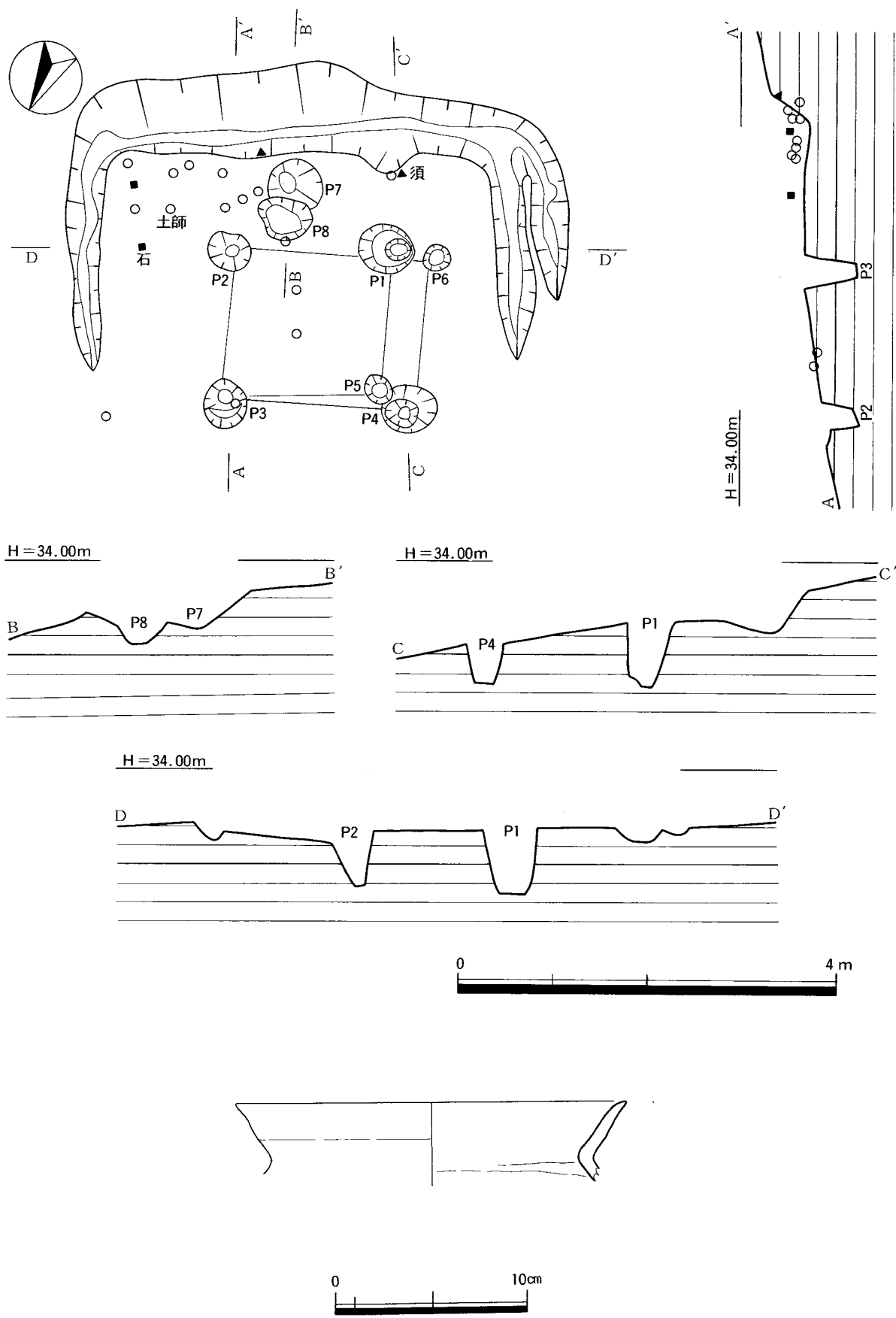
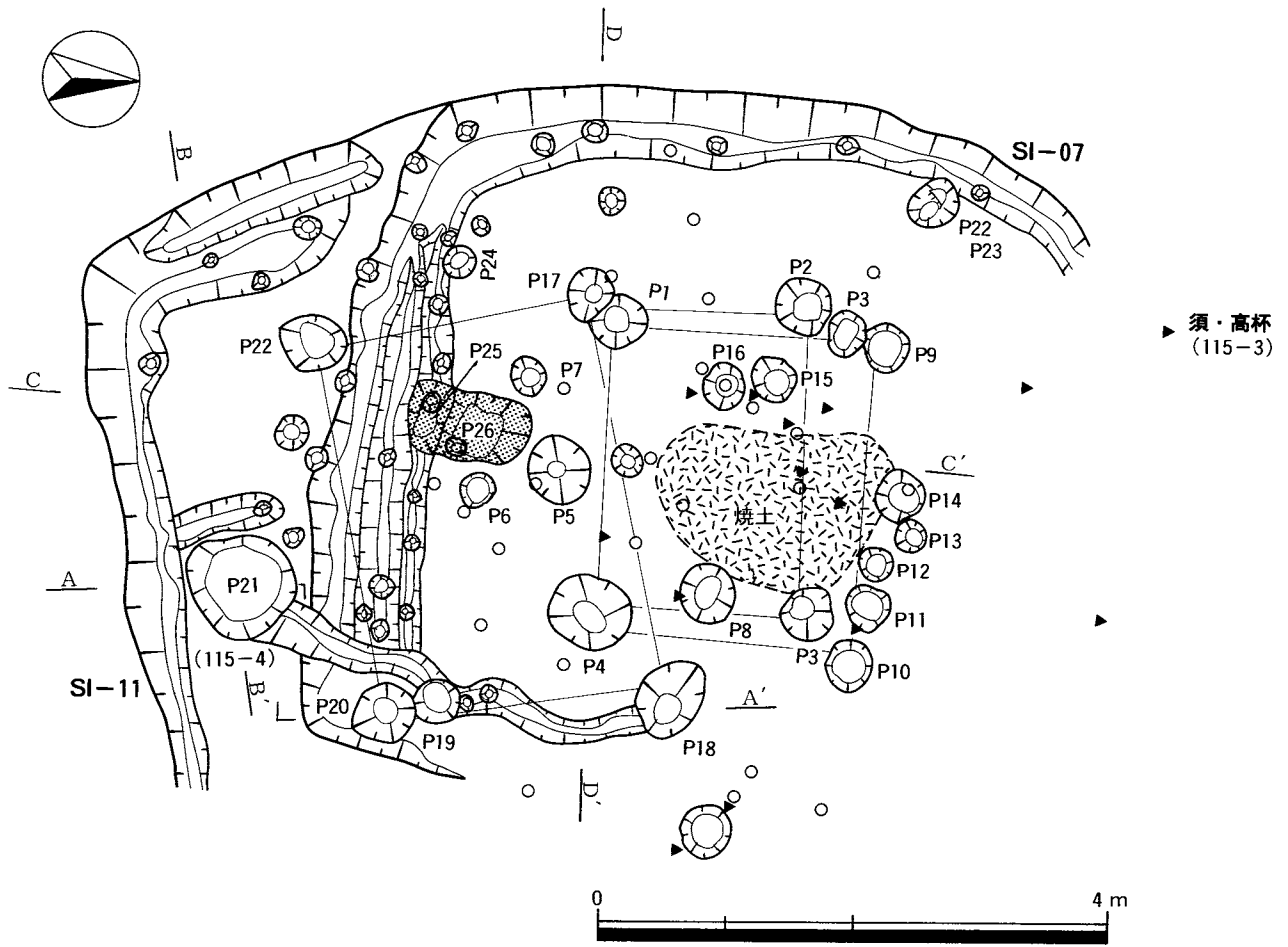
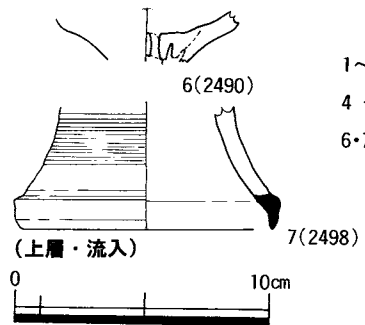
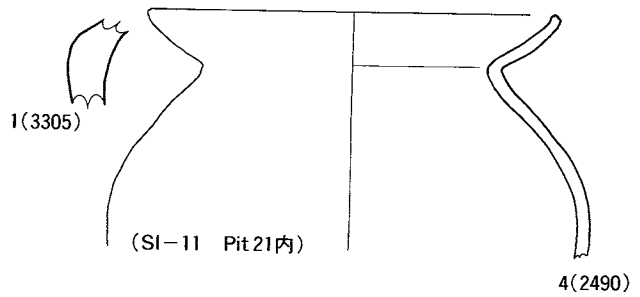
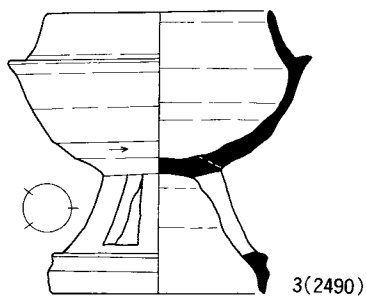
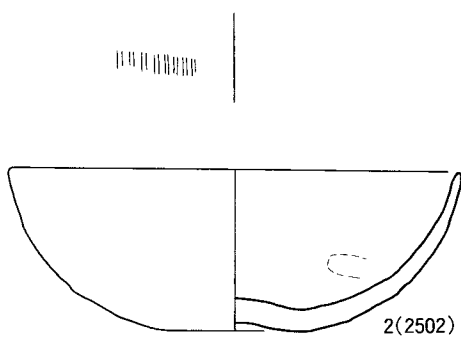


插图114 研石山遺跡5区第4号住居跡遺構遺物



▶ 須・高杯 (115-3)

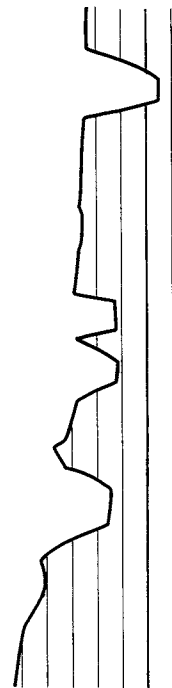


1~3.5...SI-07
4SI-11
6·7周辺

(上層・流入)
0 10cm

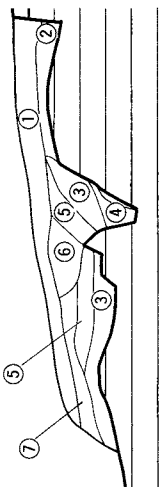
挿図115 研石山遺跡5区第7号、11号住居跡遺構

H = 35.00m
A



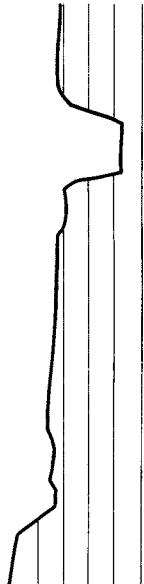
H = 35.00m
A

H = 35.00m



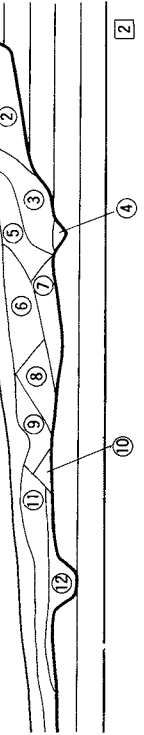
1. 赤茶褐色土
2. 黄褐色土 (地山)
3. 黄茶褐色土
4. 黄褐色土茶少量混じり (土器混じり)
5. 黄褐色土茶多量混じり
6. 暗茶褐色土 (炭微量混じり)
7. 黄褐色土灰少量混じり
- 硬度 2・3・5・7>4>6>1
粘質度 2>3・4・5・7>6>1

H = 35.00m
B

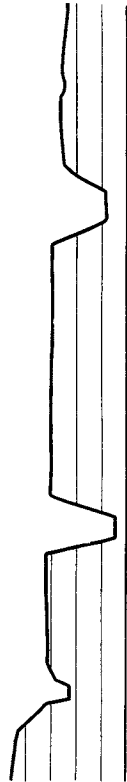


H = 35.00m
B7

H = 35.00m

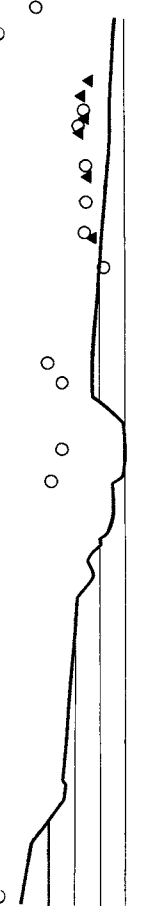


H = 35.00m
D



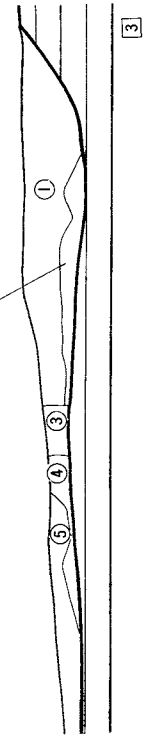
H = 35.00m
D

H = 35.00m
C



H = 35.00m
C

H = 35.00m

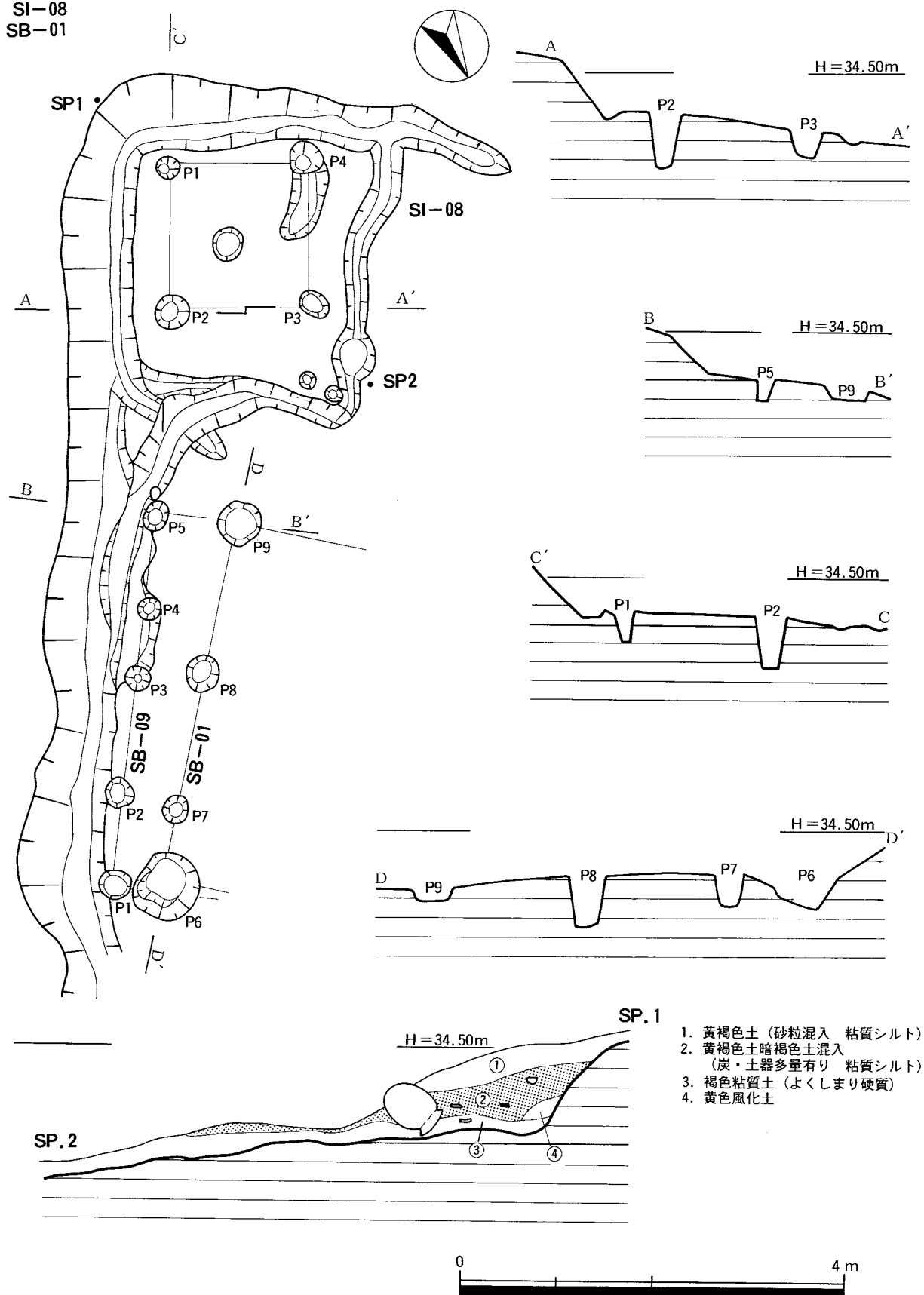


2. 1. 黒褐色土茶少量混じり (表土混じりか) 根が多い
2. 茶褐色土 (地山より軟らかい) 根がしまっている
3. 茶褐色土黒黄微量混じり
4. 黄茶褐色土黒微量混じり
5. 茶褐色土黒少々黄微量混じり
6. 茶褐色土黒多量混じり
7. 黄茶褐色土黒少量混じり
8. 茶褐色土黒多量混じり
9. 茶褐色土黒多量混じり少量混じり (地山か)
10. 黄褐色土茶微量混じり
11. 茶褐色土黒多量混じり
12. 黄茶褐色土黒少量混じり
- 硬度 2・3・5・7>4>6>1
粘質度 2>3・4・5・7>6>1
3. 1. 茶褐色土黒黄微量混じり (しまっている)
2. 黄褐色土黒少量混じり (地山硬くしまっている)
3. 黒褐色土茶少量混じり (崩れやすい) 木の根がクラン
4. 黄褐色土黒混じり (しまっている)
5. 茶褐色土黒混じり (しまっている)
- 硬度 2・4・5・1>3
粘質度 2>1・4・5>3

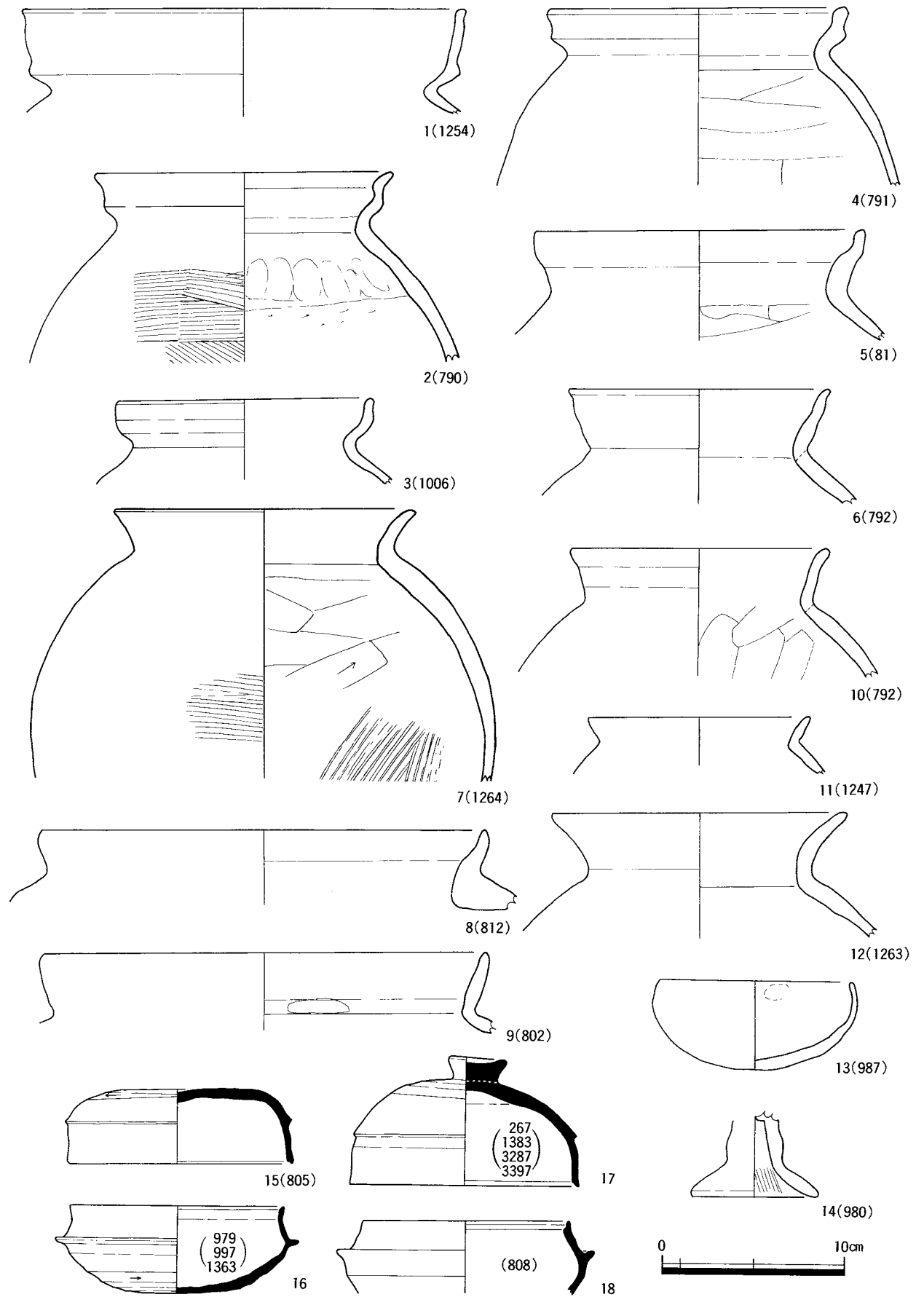


挿図116 研石山遺跡5区第7号、11号住居跡断面

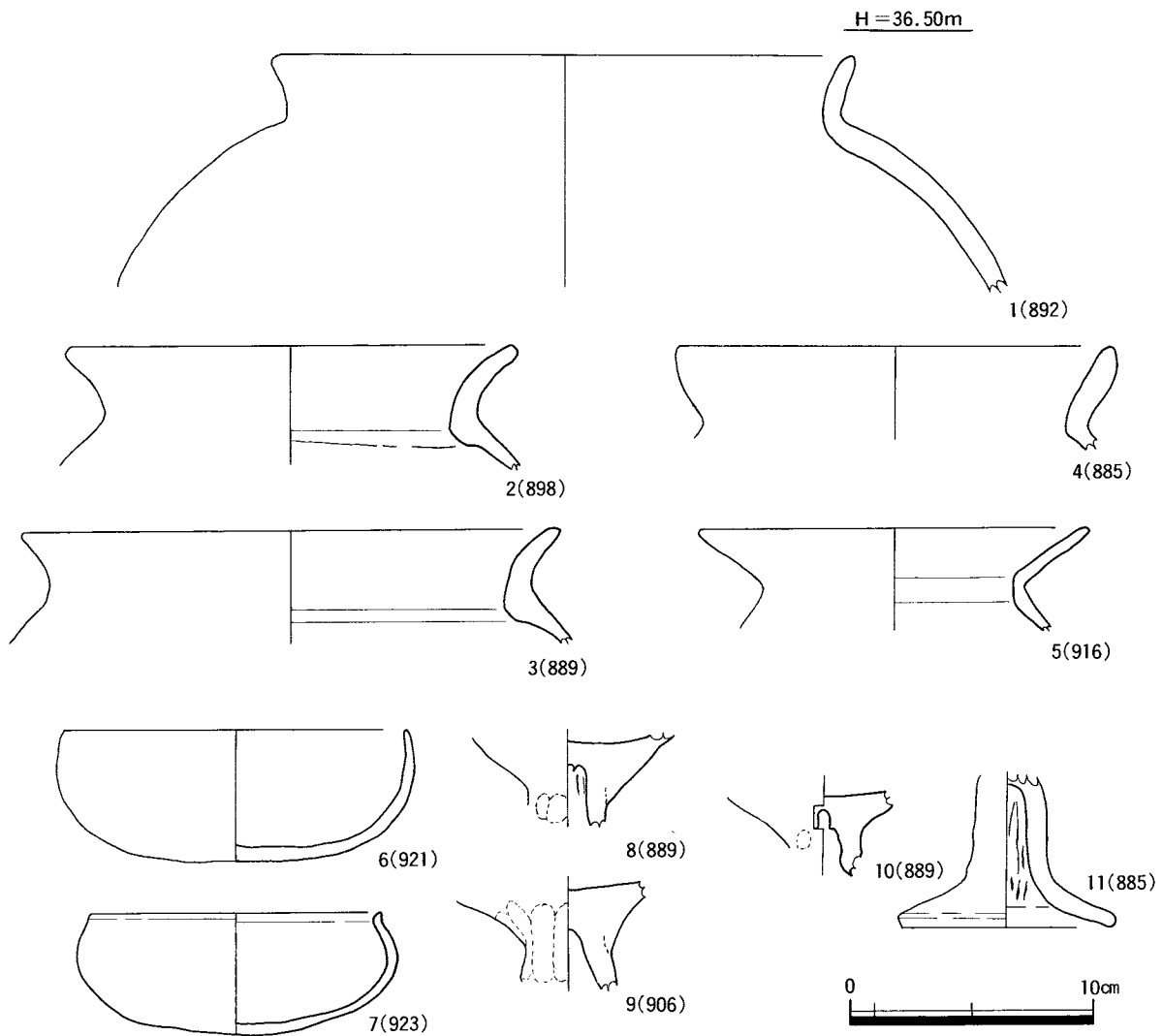
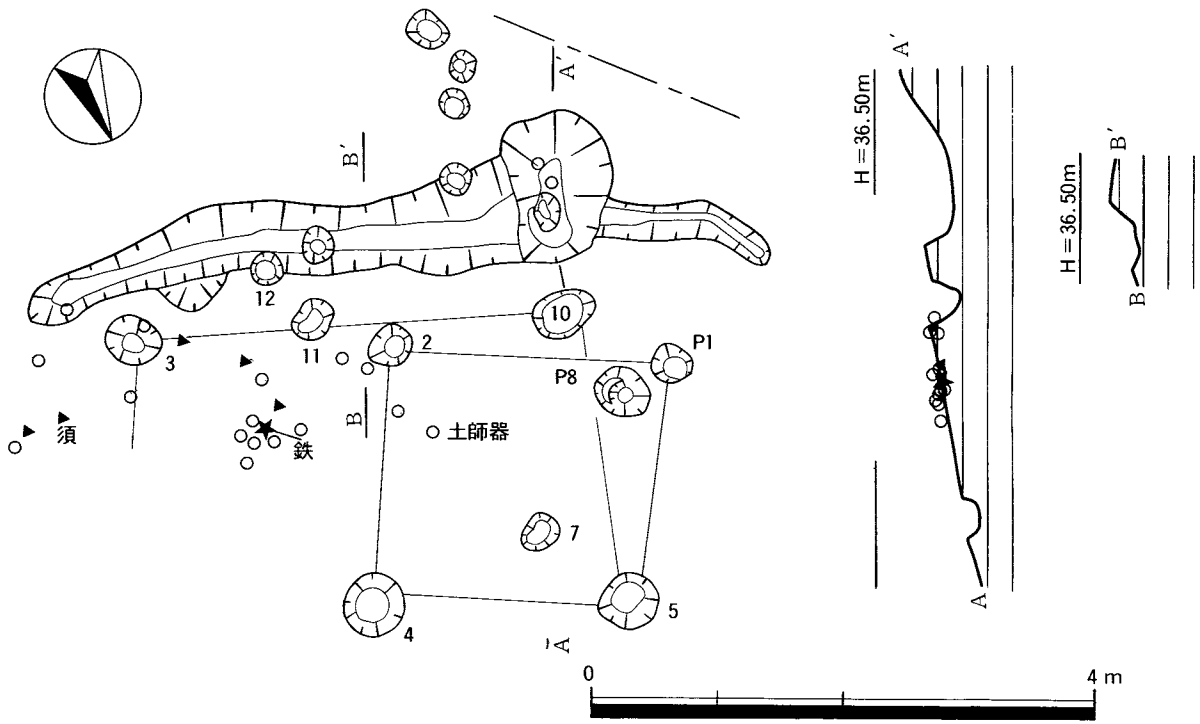
SI-08
SB-01



挿図117 研石山遺跡5区第8号住居跡、1号建物



挿図118 研石山遺跡5区第8号住居跡遺物



挿図119 研石山遺跡5区第9号住居跡遺溝遺物

S I 09 (挿図131) I区丘陵尾根上に位置し、S I 05 (SB06・07)の東上に隣接する。一応竪穴住居としたが、建物跡の可能性が高い。前後する二棟の重複と思われる、山側に溝を持つが土坑を挟んで西側が幅狭で東側が広い。西側をS I 09 a、東側をS I 09 bとした。09 aの主柱穴はP 1-P 2-P 4-P 5が考えられ、P 1から右回りに2.2・2.0・2.0・2.0mを測る。09 bはP 3-(P 11)-P 10-P 5? (重複)が考えられ、P 3-P 10間3.35mを測る。P 11は間柱と考えられる。建物方向は北側を向き、S I 05に対し向きを約90度北に振った形となる。床面標高36.10m。東側の床面近くより古式須恵器片・土師器(甕・高坏・壺)・鉄片等が出土した。S I 09 bに関係し、古墳時代中期後葉～後期初頭と思われる。

S I 12・S I 13 (挿図120・121、図版61) III区に立地し、古代流路(東谷)に面した北西斜面に位置する。S I 13が山側にあり、S I 12はやや北にずれる。西にS I 10が隣接する。後背斜面は数段にわたって加工が加えられ排水等への配慮がうかがえる。13が古く12が新しい。12は谷流路にせり出し、流路斜面を埋立造成して築かれる。谷側半分を流失する。

S I 12は方形を呈し、壁肩長5.12、床面長4.65m、壁面最大高0.3mを測る。床面標高35.65m。壁面に沿って幅20~30-深さ8cmの側溝が巡る。ピットは8個を検出した。主柱穴はP 1~P 4の4個が考えられ、柱間隔はP 1から左回りに2.35・1.65・2.35・1.65mであり東西に細長い。床面中央やや西寄りに焼土面がある。径40×60の楕円状を呈す。東壁近くで、須恵器・土師器(甕、高坏、甗)等を検出した。流入品も混るが、古墳時代中期後半期と考えられる。

S I 13はS I 12に切られて大半を失い南壁側を僅かに残すのみである。西側の側溝が二重に巡り改築(拡張)が認められる。古式をS I 13 a、改築後をS I 13 bとした。方形を呈し、S I 13 aが、壁肩長6.0、床面長5.1m、S I 13 bが、壁肩長6.80、床面長5.50mを測る。壁面最大高0.4m、床面標高36.00m。主柱穴はP 8~P 9が考えられ、柱間隔2.85mを測る。谷側の2穴は消失している。奥側(南)壁寄り中央に特殊ピットP 10とP 11が並んで存在する。P 10は円形で径60-深さ30cm、P 11はやや歪な円形で径95-深さ35cm。P 10が古くS I 13 a、P 11がS I 13 bに伴うものと思われる。南西壁面寄りで土師器が出土した。挿図121-5はほぼ完形に近く、床面上約10cmの位置で横転した状態で出土した。

遺物や切合いから、古墳時代中期前・中葉期と思われる。

S I 14・S I 15 (挿図122・123、図版59) II区丘陵の上位尾根上に位置する。S I 14・S I 15二棟がややずれて重複する。S I 14が古くS I 15がこれを切る。S I 15は北やや西寄り(N-12°30'-W)、S I 14は北々西(N-27°-W)に向く。調査では一応竪穴住居跡(S I)としたが形状や周辺の状況から掘立柱建物跡(S B)と考えられる。S I 15の溝西端で子持勾玉が出土した(挿図199-8)。出土地点は標高36.9mでほとんど床面に近い。

S I 14は、S I 15による掘削を受け山側壁面のコの字状に巡る溝を残すのみである。現存壁肩長6.00、床面長5.50m、壁面最大高0.5m、床面標高36.90m。主柱穴はP 1-P 5が該当し、柱間隔3.10mを測る。方形で6m規模の二本柱建物と思われる。溝幅が竪穴住居の側溝にして

は大きく、住居以外の性格が考えられる。東側側溝内で土師器甕破片を検出した。

S I 15は、傾斜面による流失で表土のほとんどを失い僅かに浅い溝を残すのみである。溝は二重に重なっており奥側に幅30―深さ8cm (S I 15 a)、手前に幅50―深さ30cm (S I 15 b)の溝が巡る。床面標高は共に36.75m、最大壁面高は約40cm。S I 15 bの溝内には焼土・炭が混り、床面にも薄く堆積が観察できた。該当する柱穴は検出できなかった。

両遺構の上面ではかなりの量の須恵器・土師器の遺物分布があったが、ほとんどが表層部(標高37.3~37.6m)に集中し直接の関連性は無いものと思われた。時期を決定する十分な遺物はないが、先行するS I 14は中期前葉~中葉、S I 15が古墳時代中期後葉から後期初頭と考えられる。この時期は、子持勾玉の形態的特徴による指定時期にもほぼ合致する。(詳細第V章)

S I 16 a, b (挿図123・124、図版62) II区丘陵尾根の東寄りの肩部に位置する。斜面東下にS I 17~19、北東上方尾根部にはS I 07・11が存在する。東向きに面し、東側は傾斜面のため流失する。形態は方形を呈し、床面内に側溝が二重に巡って相似形を成す。外側をS I 16 a、内側をS I 16 bとした。断面観察よりS I 16 bが古く、拡張してS I 16 aが造られる。

S I 16 aは、壁肩長4.65、床面長4.20m、壁面最大高0.70m、床面標高33.86m。S I 16 bは、壁肩長3.75、床面長3.50m、壁面最大高0.10m、床面標高33.70m。床面には合計13個のピットを検出した。主柱穴を特定しがたいが、S I 16 bは中央東西にあるP 12-P 13の二個と考えられ、柱間隔は1.35mである。南西角に径70―深さ40cmのP 3と径55―深さ50cmのP 4が重複して存在する。P 3がP 4を切る。P 3で塀(124-15)、P 4で甕(124-2・3)、P 3北側の床面で脚付小鉢(124-23)西壁寄りて布留系甕等が出土した。南東端では有孔円板(199-5)等も出土した。遺物より住居跡の存続期間は古墳時代前期末~中期前半と考えられる。

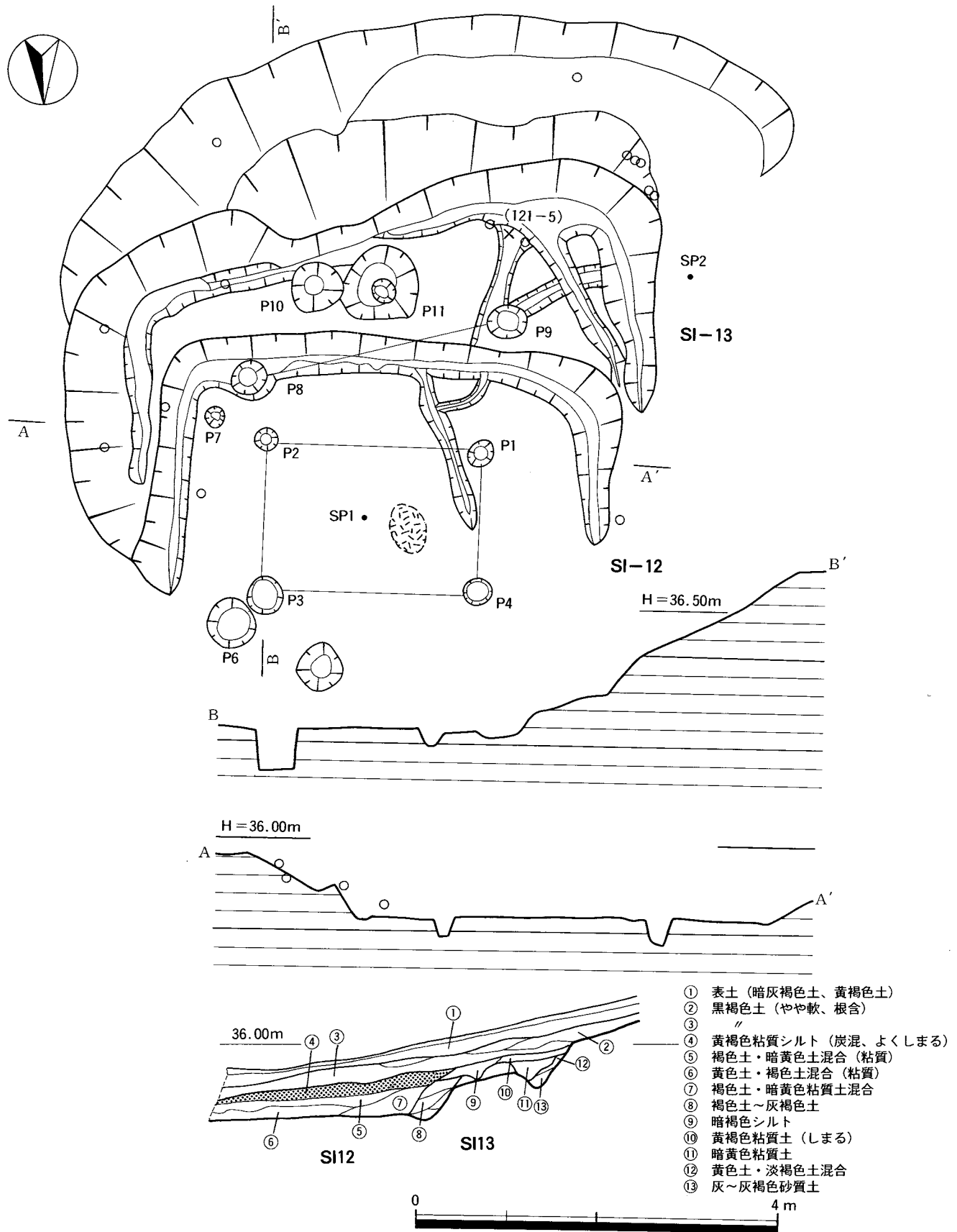
上記以外にも埋土中から多くの遺物が出土した。土師器(甕・台付鉢・高坏・塀)・須恵器(高坏・蓋坏)・鉄滓等がある。遺物相は古式土師器-中期土師器-古式須恵器・土師器-奈良期須恵器である。埋土は炭が混っていたが、中層の焼土混土を中心に上・中・下層の三層に分かれ、上層は更に上下に細分される。住居廃絶後の凹地が古墳時代中期後半~後期初頭、奈良時代後半の二時期にわたって廃棄場として利用されたようである。

S I 17~S I 19 (挿図125・126、図版61) II区丘陵尾根の東寄りの緩斜面に重複して存在する。S I 16の東下方に隣接し、古代流路(東谷)にも近い。切合いより、築造はS I 18→S I 19→S I 17の順と考えられる。重複と流失のためいずれも全容は不明である。遺構内で若干の土師器片が出土した。古墳時代前期から後期初頭期のものと思われる。周辺上部では須恵器・鉄滓の散布があったが流入である。

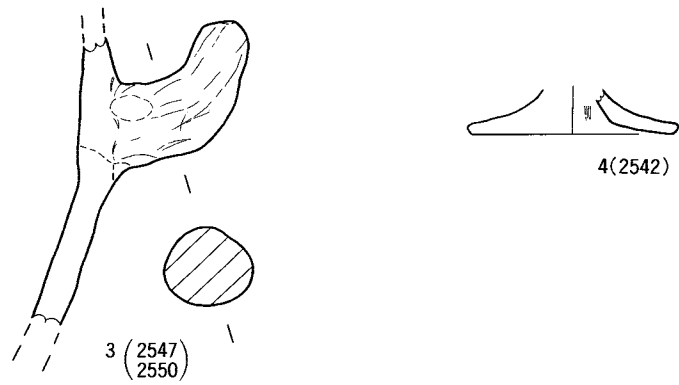
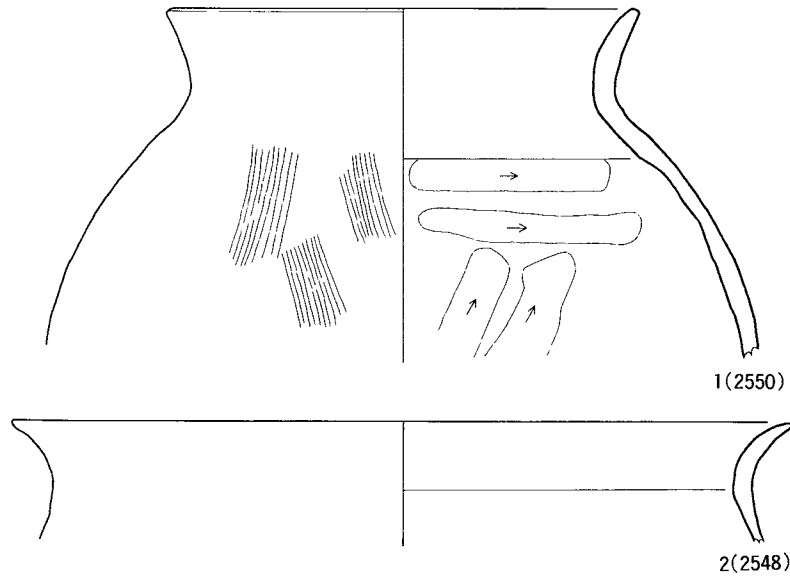
S I 17は床面標高33.3m。四本柱と思われるが南西コーナーにP 10を確認したのみである。

S I 18は床面標高33.2m、一辺約3.7mの方形住居と思われる。主柱穴としてP 4-P 6-P 9-P 8が考えられ、柱間隔はP 4から左方向に2.05m・1.45m・1.80m・1.30mである。

S I 19は方形を呈し、壁肩長3.70、床面長3.55mを測る。床面標高33.0m。

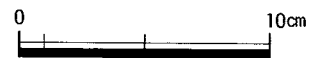
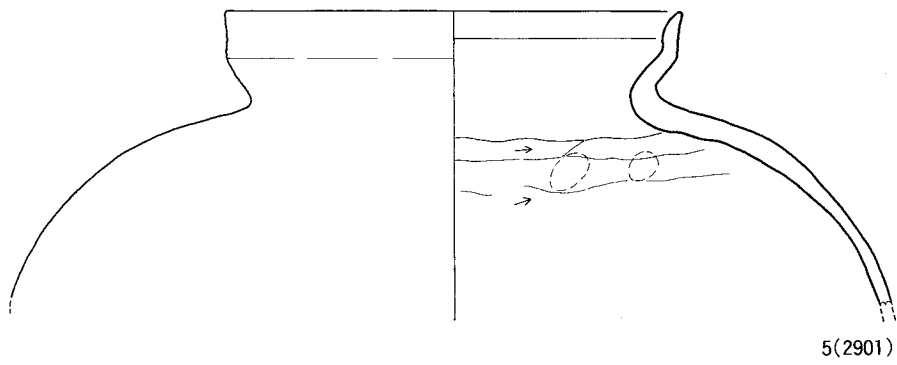


挿図120 研石山遺跡 5区第12号、13号住居跡

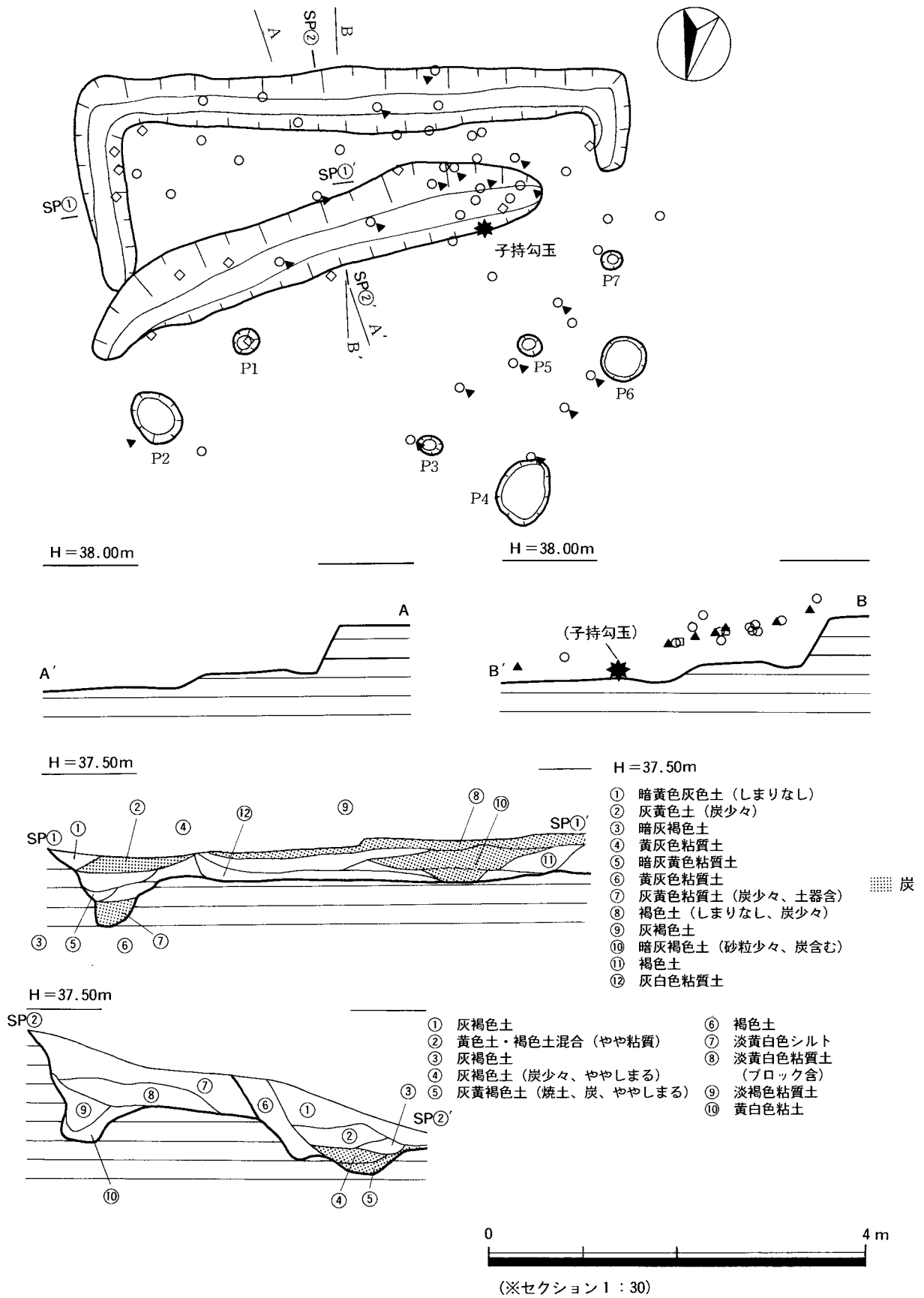


SI-12

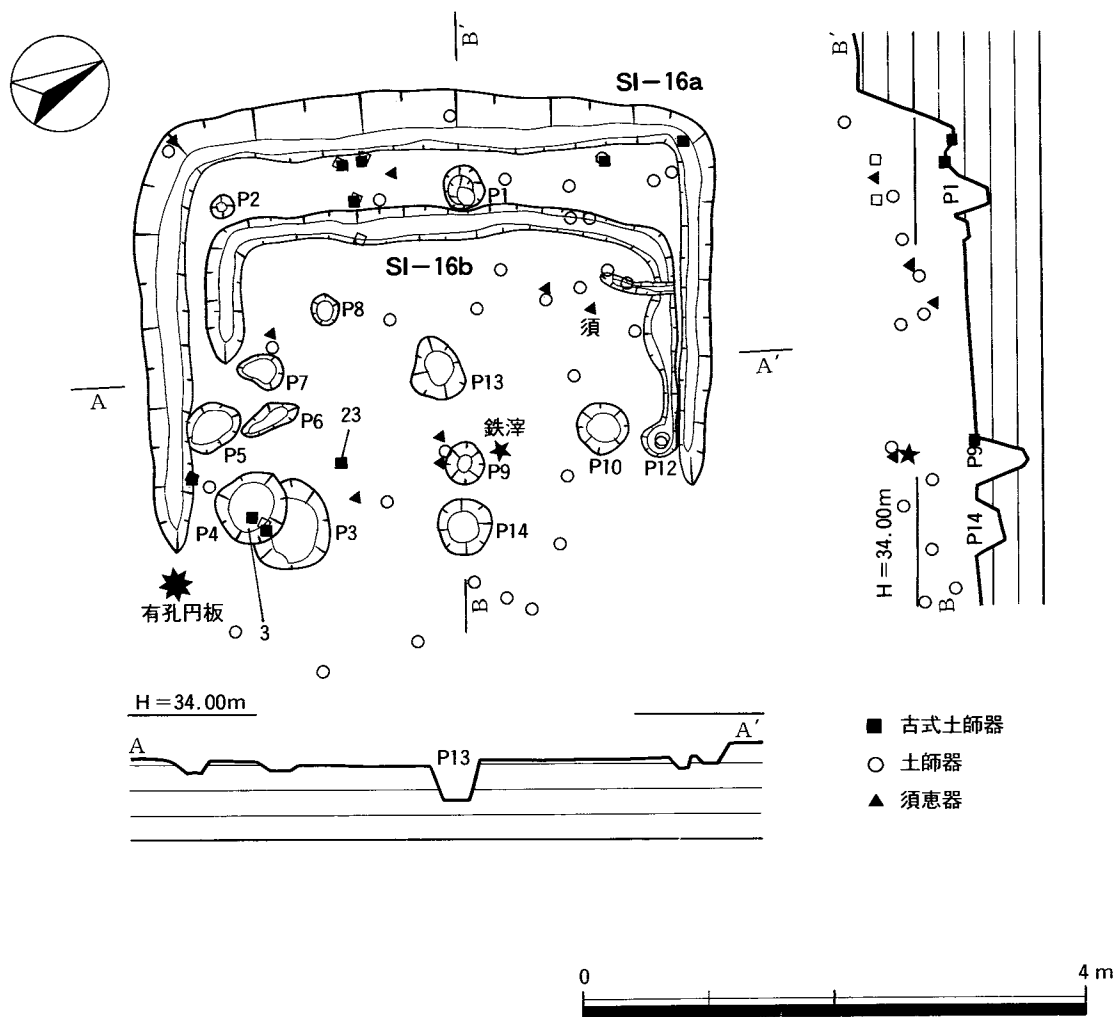
SI-13



挿図121 研石山遺跡 5区第12号、13号住居跡遺物



挿図122 研石山遺跡 5区第14号、15号住居跡



挿図123 研石山遺跡5区第16号住居跡

掘立柱建物跡

II区丘陵中上位の尾根部に集中し、III区斜面のテラスにも分布する。主に調査区の東側に片寄り古代流路（東谷）の周りに集中する。古墳時代後期後半から奈良・平安時代にかかるが、両者の間は断続的である。遺物は、須恵器（蓋坏・高坏・甕・壺等）・土師器・石製紡錘車等がある。後半は土器のほかにフイゴ羽口・鉄滓・鉄製品などを伴い、鍛冶生産に関係する。

SB01・SB09（挿図127、図版61）

II区丘陵の西側肩部に位置し、SI08と後背壁面を共有し同一テラス上に立地する。北側にSI04、北東方向の尾根側にはSI07・SI11がある。古代流路（北谷）に面し、北西の谷側の大半を消失する。後背にコの字状の区画排水溝を持つ。

SB01は、P6 - (P7) - P8 - P9が北東-南西方向（N-39°-E）に並び、1間×2間の小規模建物と思われる。柱間隔はP6から順に（0.75）・2.20・1.7m、全長3.9mを測る。

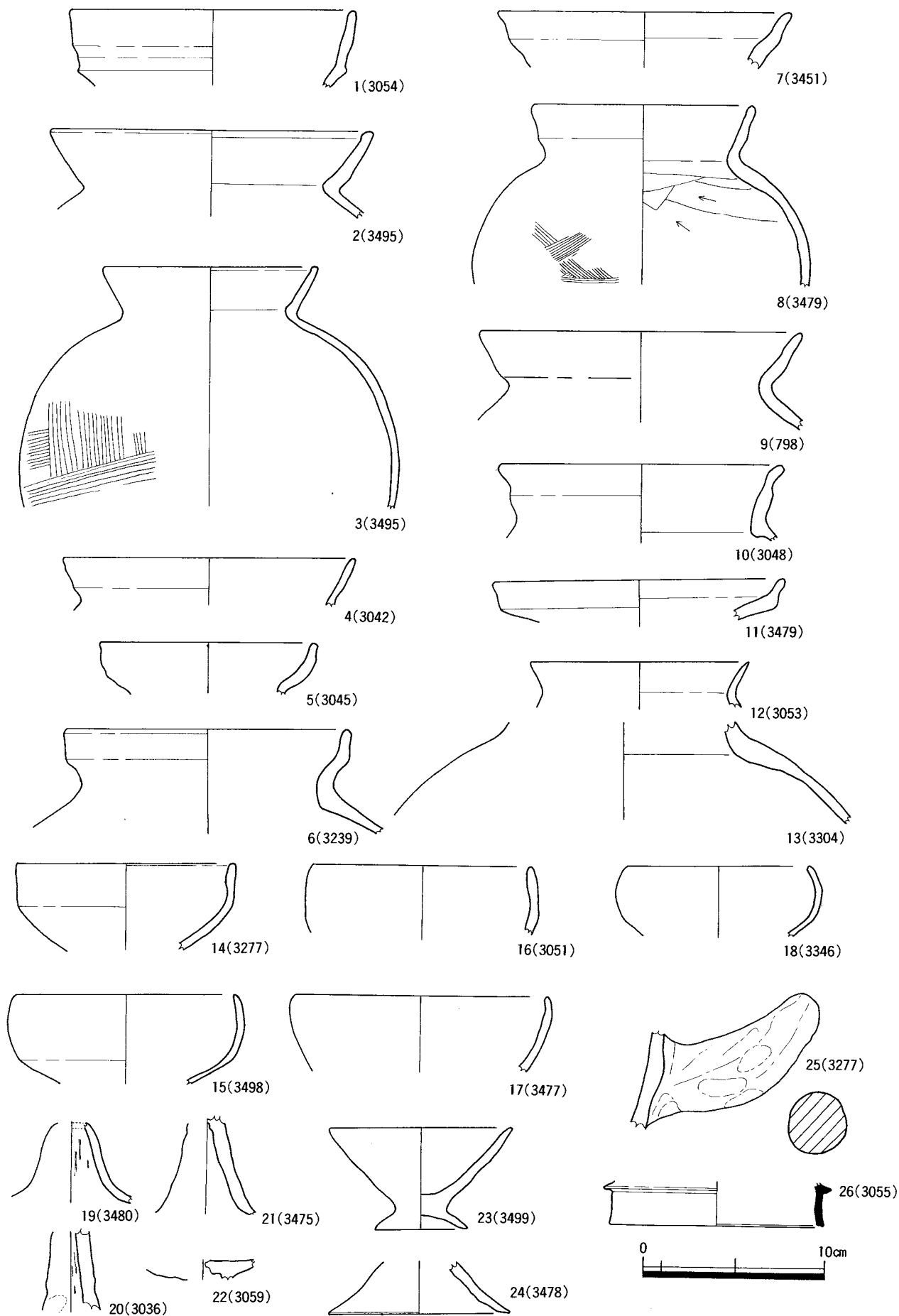
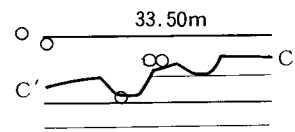
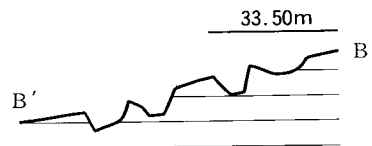
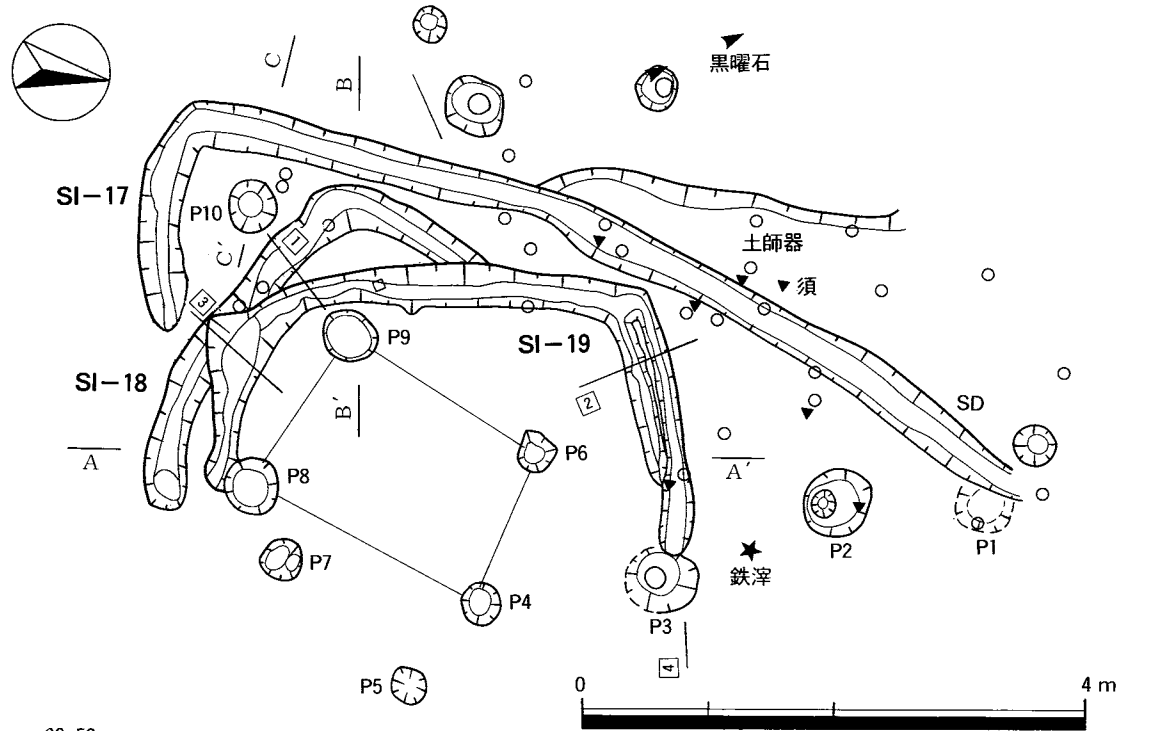
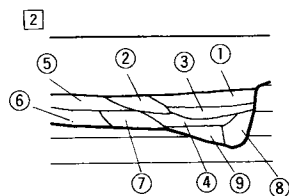
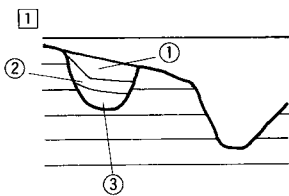


插图124 研石山遗迹 5区第16号住居迹遗物

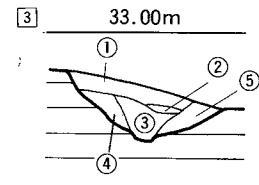


1. 暗灰色～灰褐色土 (やや砂質)
 2. 暗灰色粘質土 (土器片)
 3. 淡灰褐色土 (やや砂質)
 4. 褐色土 (小礫混じり硬い)
 5. 灰色粘質土 (礫混じり水気含む)

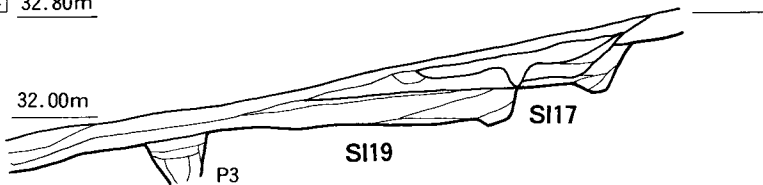
1. 暗灰～灰褐色粘質土 (砂混じり)
 2. 暗灰褐色土 (1より砂粒が少ない)
 3. 黒褐色土 (砂粒・淡黄色土)
 4. 暗灰～暗灰褐色粘質土 (粗砂混じり)
 5. 黒灰色細砂土
 6. 淡灰褐色粘質土 (砂質混じり)
 7. 暗褐色粘質土 (細砂少量混り)
 8. 黒褐色土 (粗砂混じり) SI-19の新側溝
 9. 灰褐色～灰茶色粘質土 (砂少々含む) 旧側溝



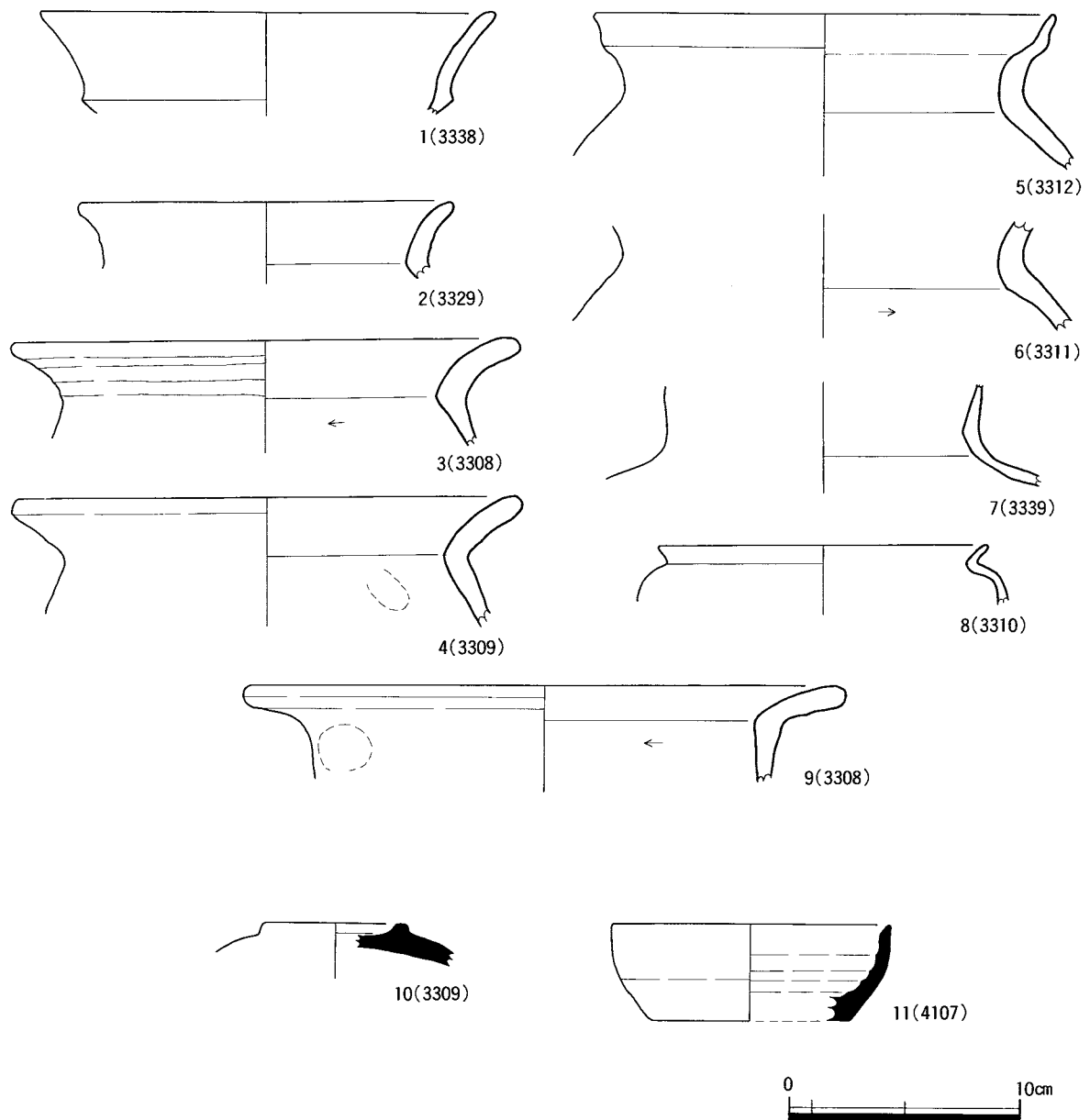
1. 淡灰褐色土 (やや砂質)
 2. 暗灰色砂質土 (水気含む)
 3. 少礫淡灰褐色土
 4. 暗灰色砂質土 (礫混じり)
 5. 暗灰色土 (黄小礫混じり硬くしまる 6より粘質性有り)
 6. 暗灰色土 (黄小礫混じり硬くしまる)



4 32.80m



挿図125 研石山遺跡 5区第17～19号住居跡



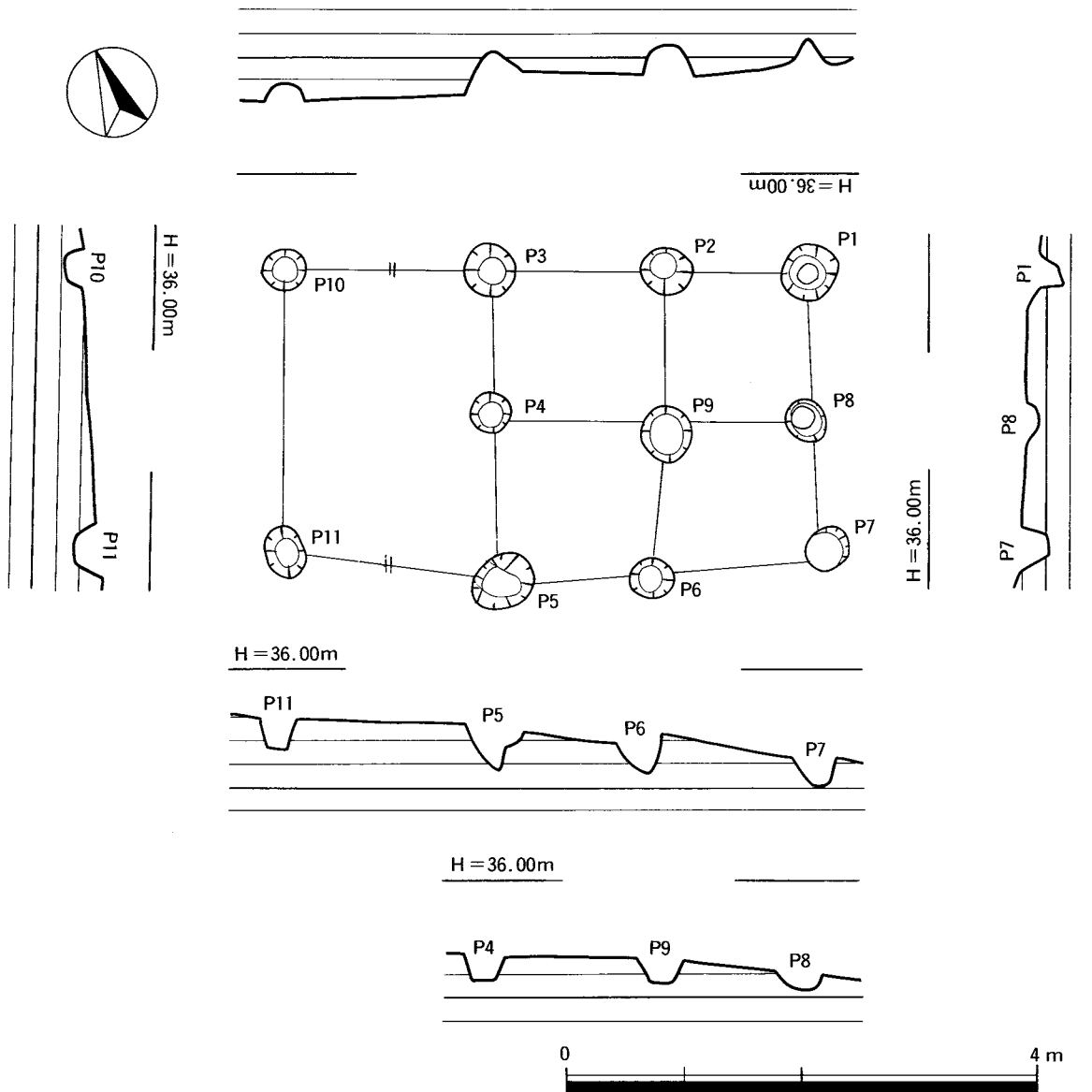
挿図126 研石山遺跡 5区第17～19号住居跡関係遺物

間のP 8 がしっかりと掘られ両端のP 6・P 9は径は大きいが浅い。P 7は間柱と考えられる。

S B 09はS B 01の奥にややずれて位置し (N-33°-E)、P 1～P 5の5個が並ぶ。S B 01に比べ柱穴規模が径25～30cmと小振りであるが、P 3を中心にしたP 1・P 5との間隔は2.2・1.7m、全長は3.9mを測る。全長、柱間隔共に同規模であり、同規模・同形態の建物の建替えを行なっている。S B 11が古くS B 01が新しい。

古墳時代中期後葉～後期初頭と思われる。(S I 08の項参照)

S B 02 (挿図127、図版59) II区丘陵上位の尾根部に位置する。2×2間の底付き総柱建物と思われる。主軸方向はN-52°-Wで、底が西北西に付く。主柱はP 1-P 2-P 3-P 4-P 5-P 6-P 7-P 8で中央にP 9がある。柱間隔は1.2～1.4m、建物規模は2.4～2.6



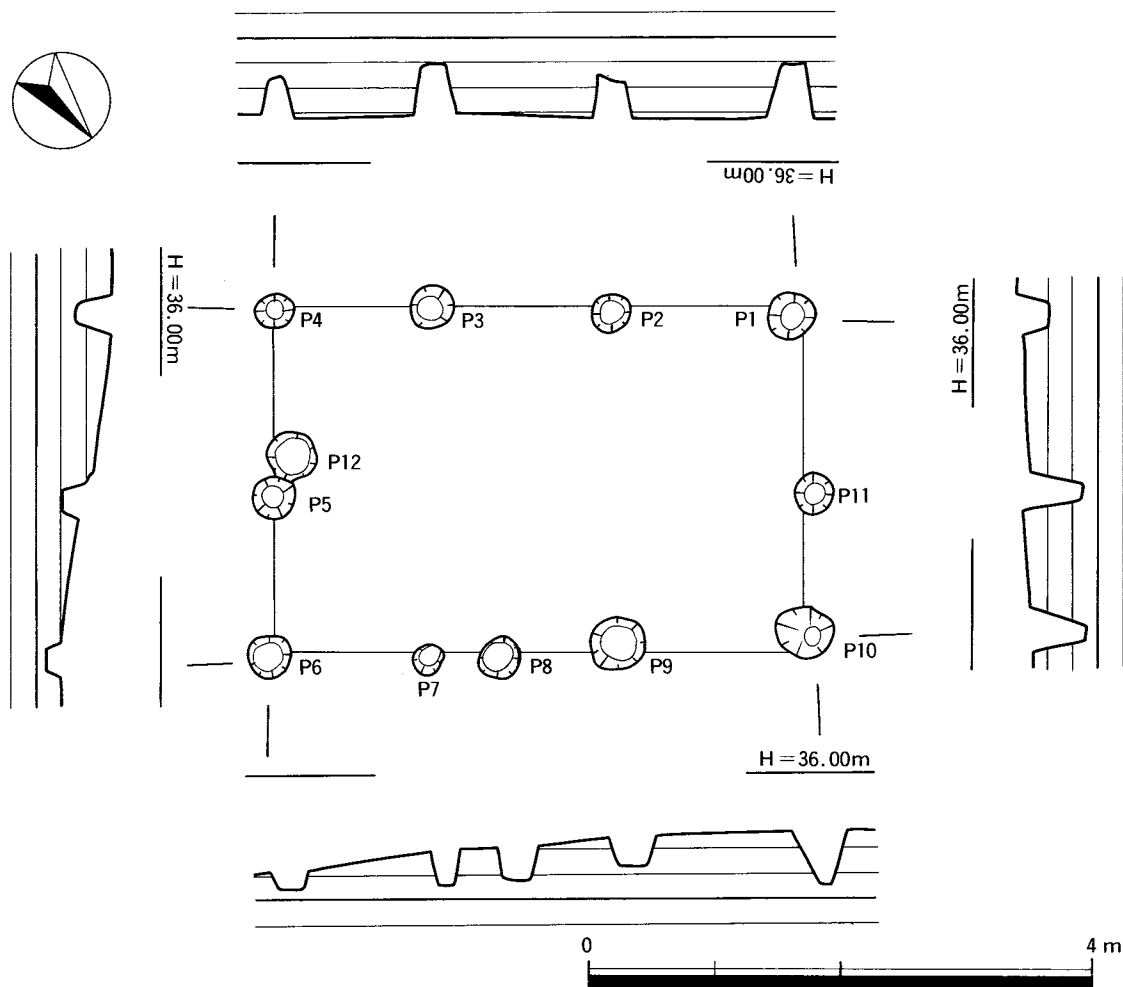
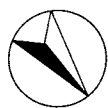
挿図127 研石山遺跡5区第2号建物跡

×2.70m、床面積7.2m²を測る。西北西側がやや広い。底はP3とP5からそれぞれP10・P11が出る。幅2.5×長さ約1.8mである。床面標高35.15m。

周辺の遺物散布状態から古墳後期後半期と思われる。

SB03 (挿図128、図版60) II区丘陵上位の尾根部に位置する。2×3間の建物で後背にコの字状の区画排水溝(SD09)を持つ。主柱はP1-P2-P3-P4-P5-P6-P7-P9-P10-P11で、P7-P9間にP8、P5横にP12がある。柱間隔は1.3~1.5m、建物規模は2.75×4.25m、床面積11.6m²を測る。主軸方向はN-50°-Wで北東に向く。入口は平側東隅のP6-P7にあったと推定される。埋土に炭が混る。床面標高35.65m。

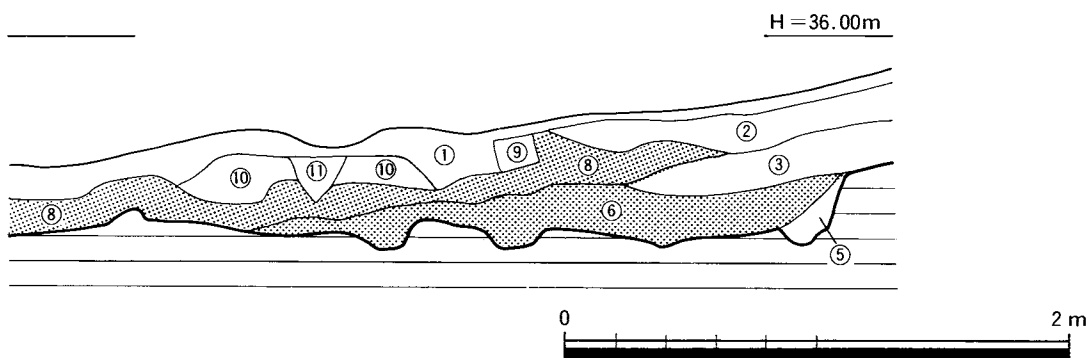
周辺の遺物散布状態から古墳後期後半期と思われる。



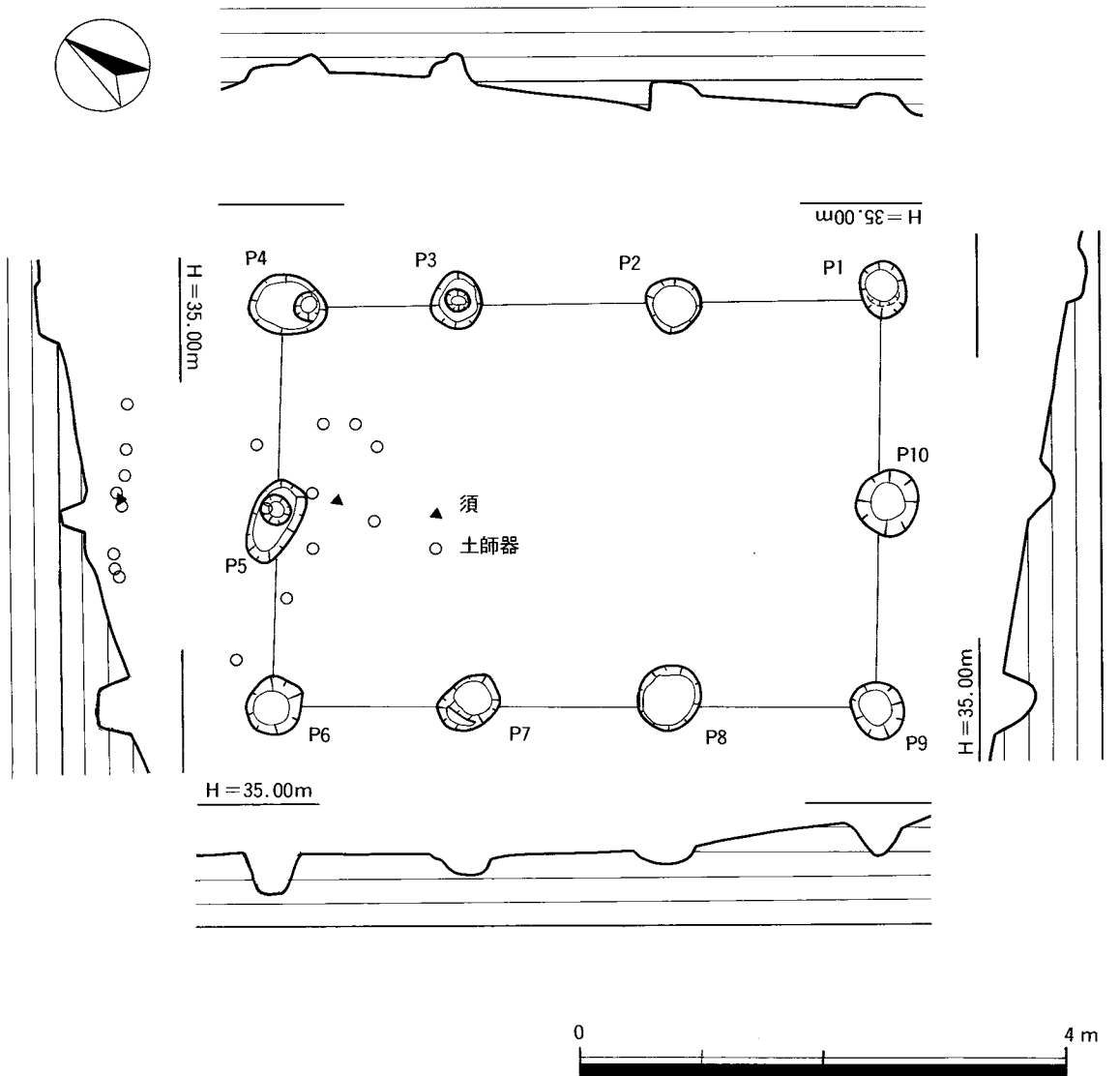
1. 黒褐色土
2. 灰多土
3. 暗灰色土
4. 灰色土黒多量混じり
5. 暗灰色土黄微量混じり
6. 黒灰色土 (炭微量混じり)
7. 黄茶褐色土
8. 灰色土黒混じり (炭微量混じり)
9. 明灰色土
10. 明灰色土黒混じり
11. 茶褐色土黒混じり 根のかくらん

硬度
7 > 2 · 9 · 10 > 3 · 5 > 8 > 4 > 6 > 1 · 11

粘質土
4 > 3 · 5 > 2 · 7 · 9 · 10 > 8 > 6 > 1 · 11



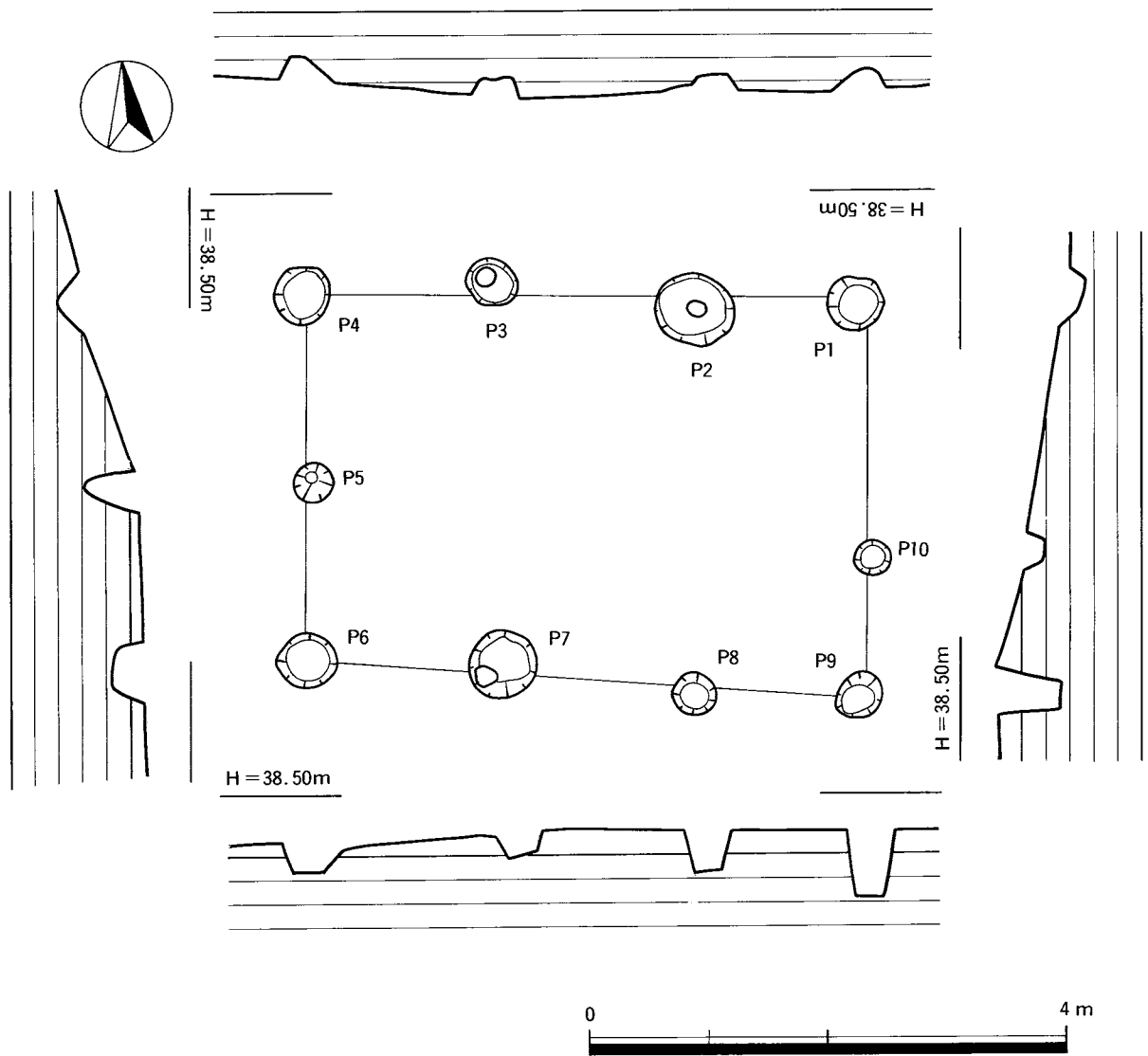
挿図128 研石山遺跡 5区第3号建物跡



挿図129 研石山遺跡5区第4号建物跡

SB04 (挿図129) II区丘陵中位のやや東寄り肩部に位置する。2×3間の建物で後背に僅かにコの字状区画排水溝の痕跡がある。支柱はP1-P2-P3-P4-P5-P6-P7-P8-P9-P10で、柱間隔は1.5~1.75m、建物規模は3.40×5.00m、床面積16.5㎡を測る。主軸方向はN-35°-Wで東北東に向く。礫混りの堆積土層を掘込む。床面標高34.90m。周辺の遺物散布状態から古墳後期後半期と思われる。

SB05 (挿図130、図版63) II区丘陵上位の尾根部に位置する。2×3間の建物で後背にコの字状の区画排水溝(SD10)を持つ。支柱はP1-P2-P3-P4-P5-P6-P7-P8-P9-P10で、柱間隔は東壁側のP1-P10-P9間がそれぞれ2.15、1.20mであるほかは、1.5~1.7m、建物規模は3.2~3.3×4.65m、床面積14.3㎡を測る。主軸方向は



挿図130 研石山遺跡5区第5号建物跡

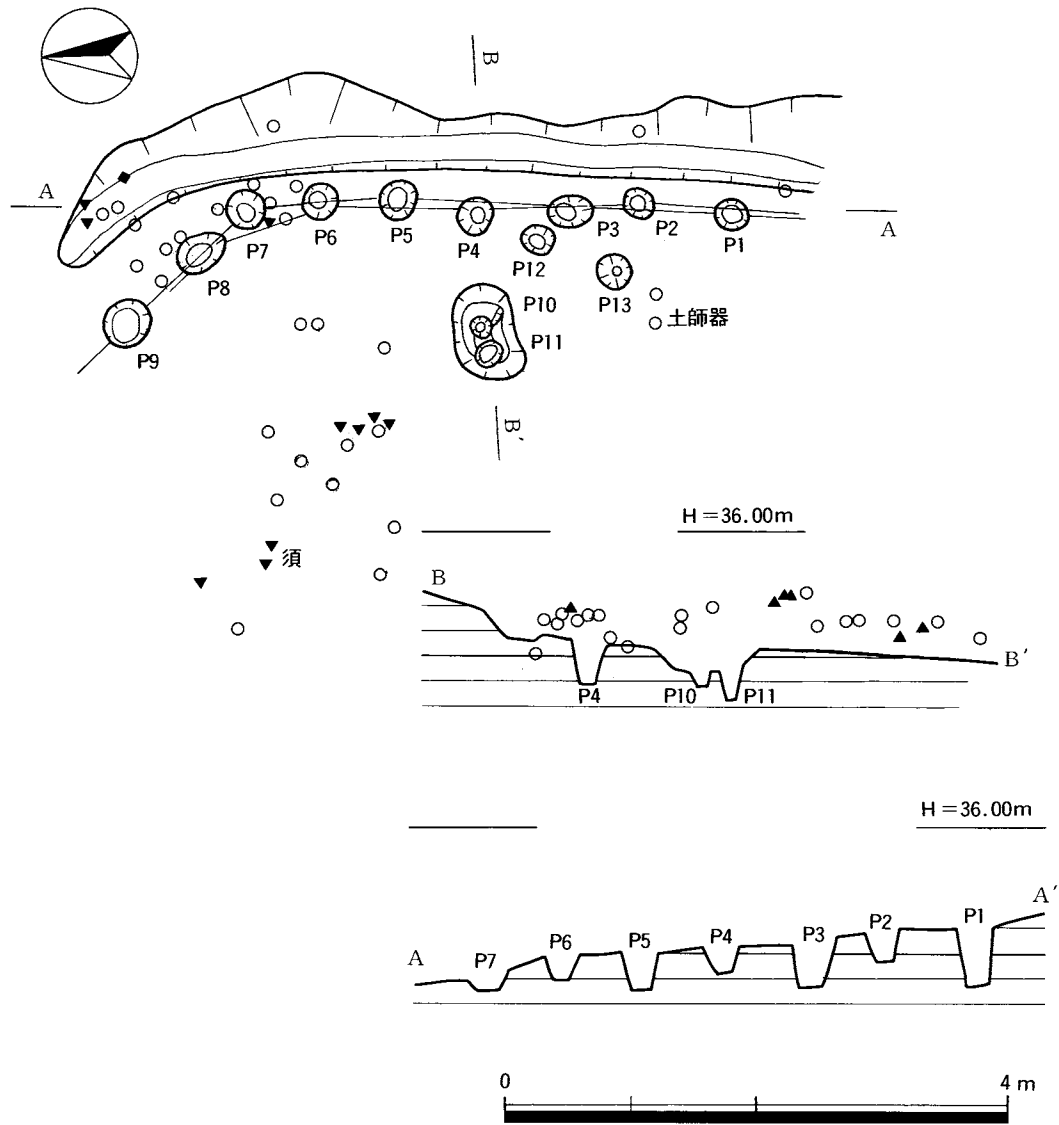
N-85°-Wで北に向く。入口は妻側北東隅にあったと推定される。流紋岩の地山を掘込む。床面標高38.2m。この建物周辺は溝、ピットが多く、重複して活用された箇所である。

区画溝より完形の須恵器蓋坏（186-20・21等）・高坏・土師器甕・土製紡錘車（199-4）等が出土した。遺物から古墳後期後半期と思われる。

S B06・07（挿図131・132、図版62） 調査時は竪穴住居跡S I 05としたものである。

I区丘陵の西側肩部に位置し、S I 01～03の南上、S I 09の西側に隣接する。南側は調査区域外となる。

山側に溝を持ち、これに沿う形で径25～30cm、深さ30～45cmの深めと浅めの小ピットが交互に並び、P1-P3-P5-P7-P9（SB06）と、P2-P4-P6-P8（SB07）の



挿図131 研石山遺跡5区第6号・7号建物跡

繋がりが見られる。南北に長い2×4間、梁桁5.5m程度の掘立柱建物の建替重複と思われる。柱間隔は概ね1.25~1.35mで、P1-P7間とP2-P6間がやや広く、それぞれ3.8m、2.5mを測る。柱穴の掘込みはSB07が浅く、SB06が約10cm深い。P8、P9はそれぞれの底の柱と思われる。P10・P11は重複するが、P10がSB07、P11がSB06に関係すると思われる。掘込み状況よりSB07が古く、SB06が新しい。床面標高35.20m。

位置的にSI09（これも建物跡か？）と関連するものと考えられ、また、ピットの大きさや、配置状況などから、簡便な構造の作事小屋的な建物であったと思われる。

北側の床面近くの埋土より古式須恵器（壺・大形罌）・土師器（甕・高坏・竈・甑）等が出土した。

遺物より古墳時代中期後葉と思われる。

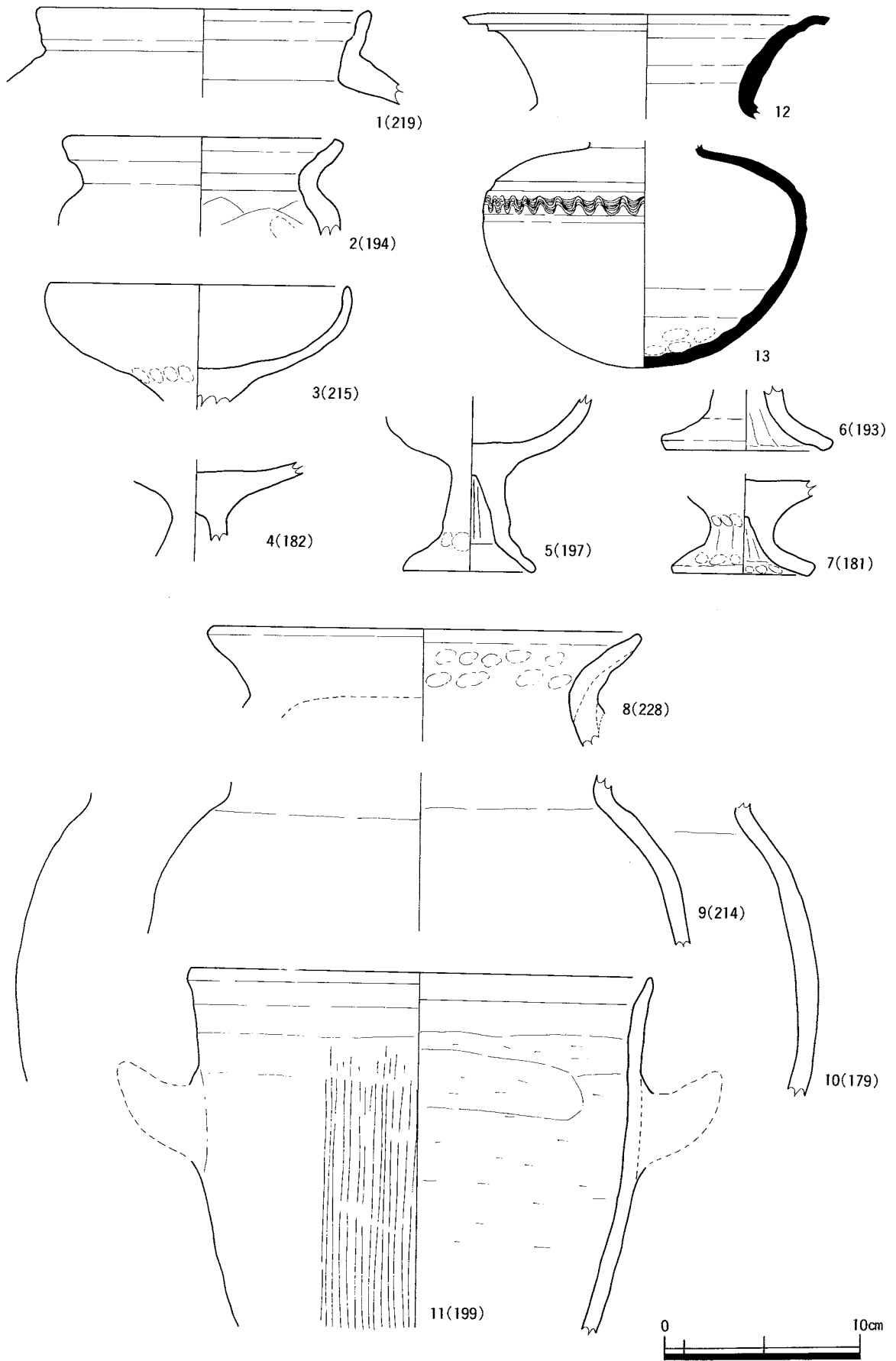
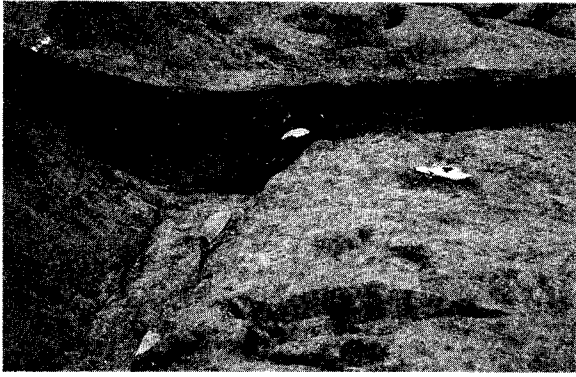
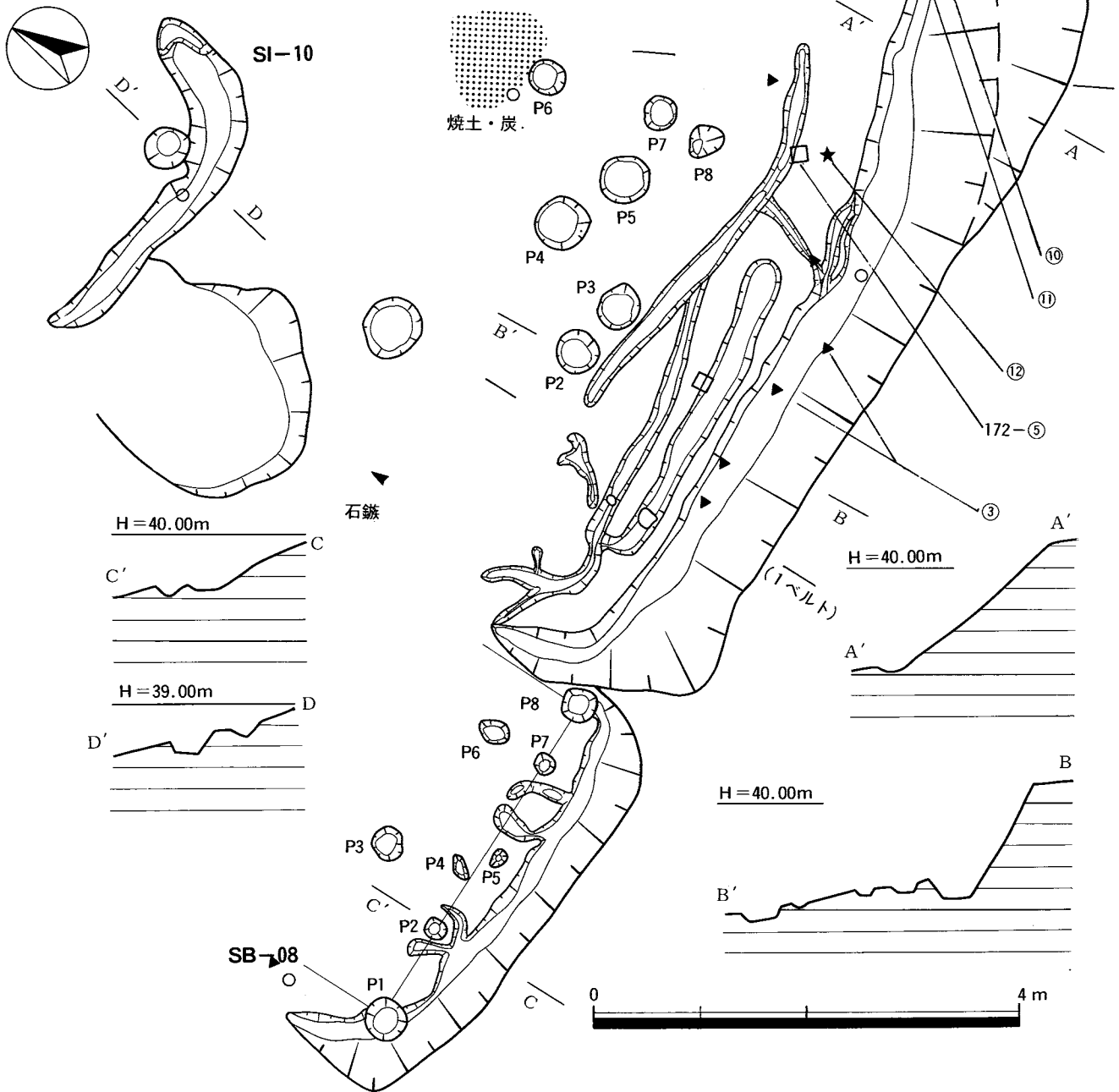


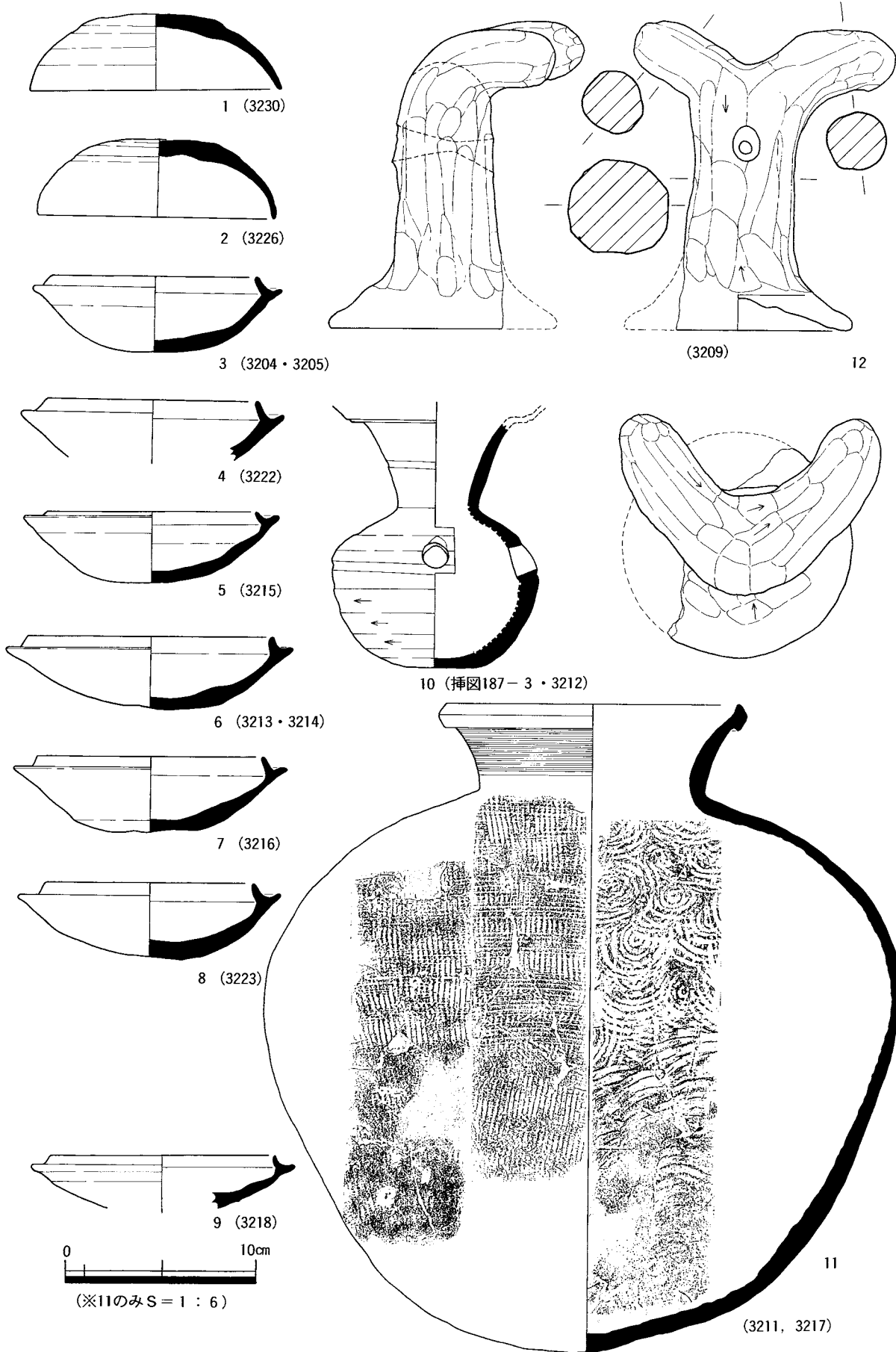
插图132 研石山遺跡5区第6号・7号建物跡遺物



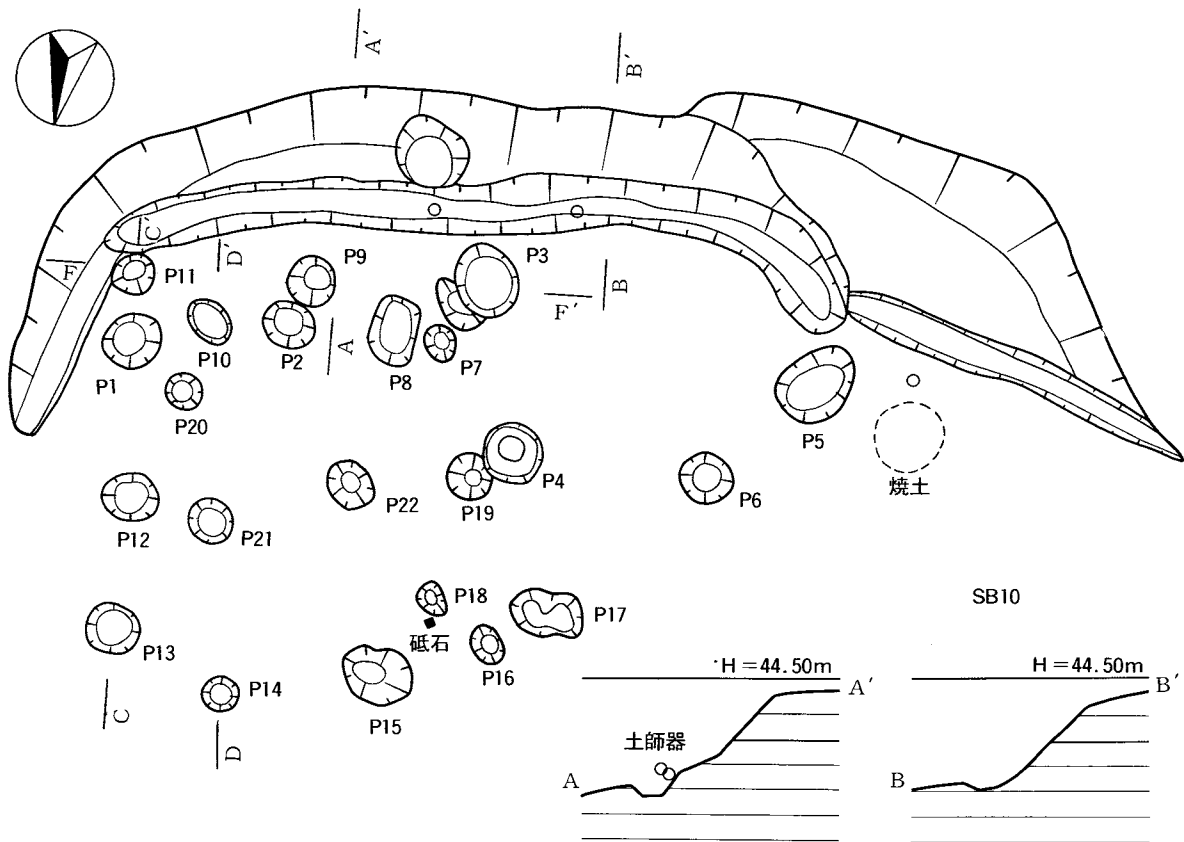
1ベルト付近状況（東より）



挿図133 研石山遺跡5区第2テラス遺溝

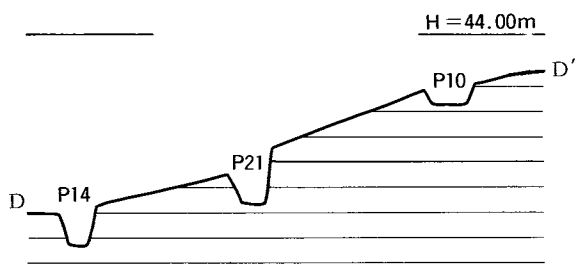
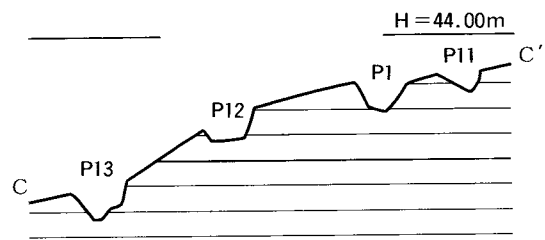


挿図134 研石川遺跡5区第2テラス遺物



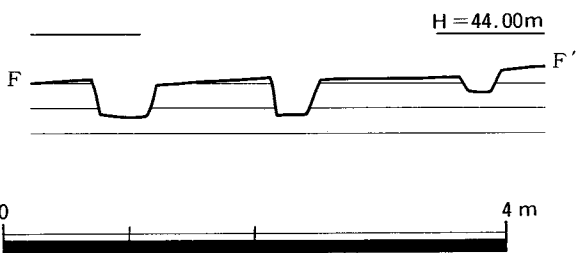
SB08 (挿図133)

Ⅲ区斜面の第2テラス西に位置する。岩盤質の地盤を加工整地するが急傾斜のため北半を流失する。山側に柱穴4個が並ぶ(桁行3間-3.50m)。両端のP1・P8が大きく(径30~40cm)、間のP2・P7が小さい(径18cm)。床面標高39.50m。西側床面より坏身・土師器片が出土した。古墳後期後半と思われる。

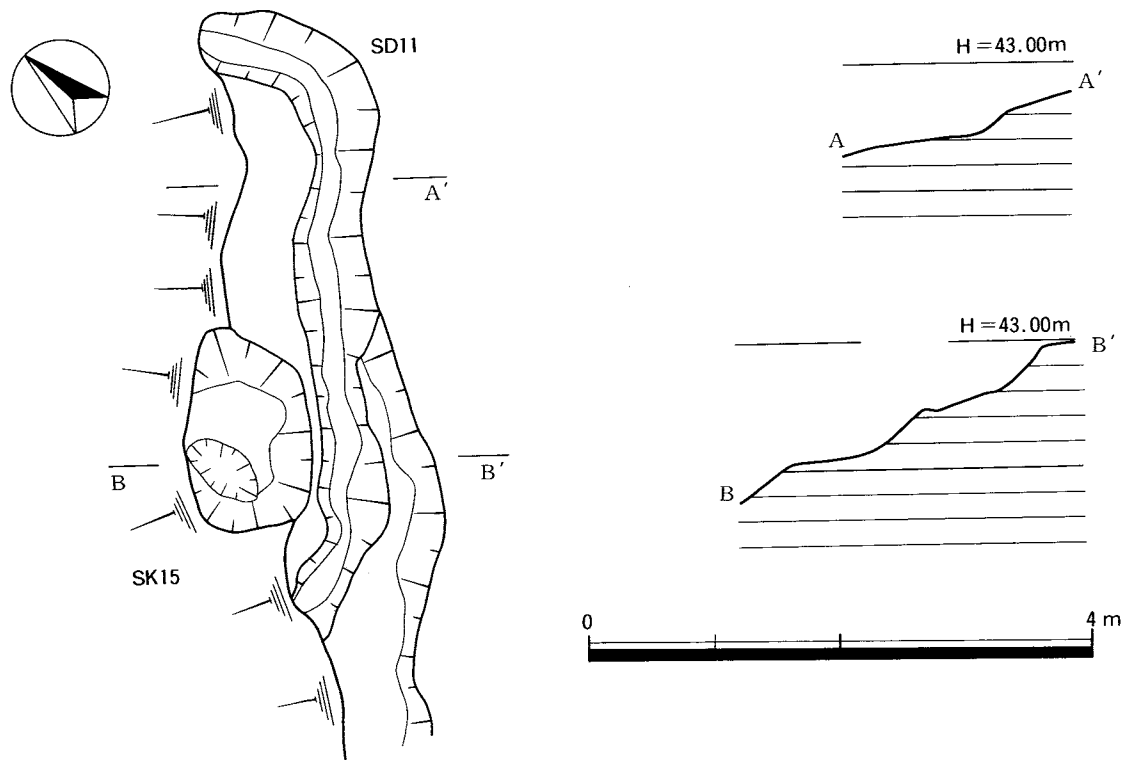


SB10 (挿図135、図版62)

第1テラス西に位置する。山側にコの字状の溝が巡り、ピット20個と焼土面を検出した。全体的に炭混り土の堆積が著しい。掘立柱建



挿図135 研石山遺跡5区第3テラス西遺構



挿図136 研石山遺跡 5区第3テラス東遺構

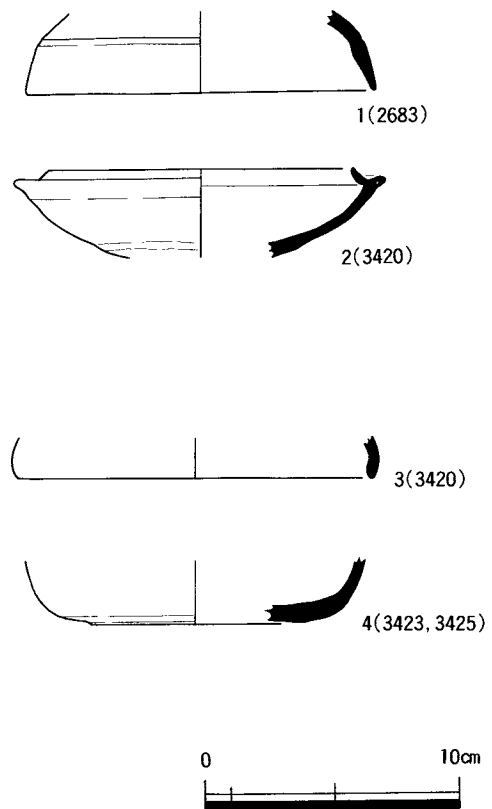
物があったと思われるが柱の繋がり
は特定し兼ねた。床面標高44.60m。
坏・土師器片が出土した。古墳後期
後半と奈良期にかかるものである。

SB11 (挿図138)

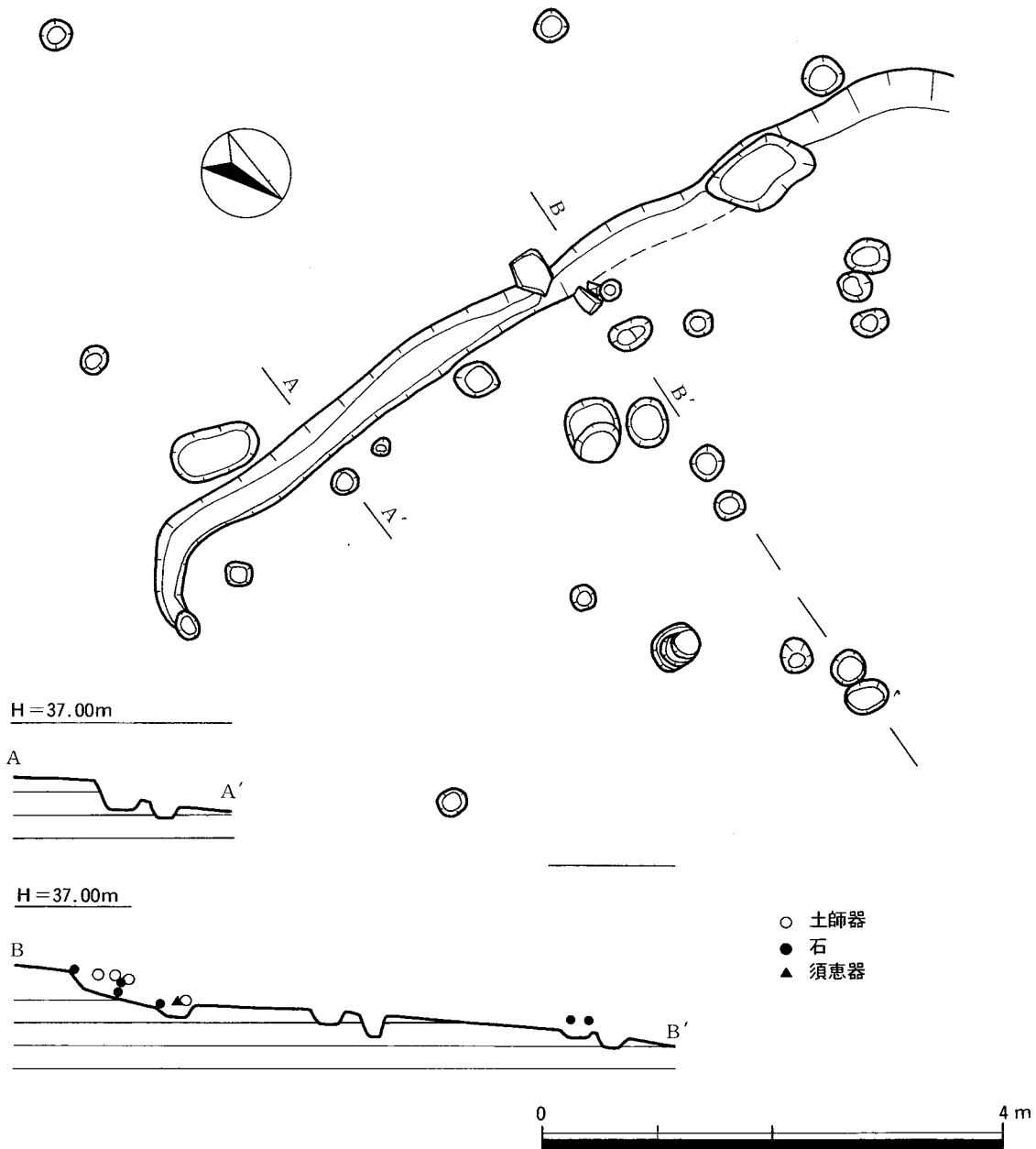
II区丘陵北寄に位置する。山側に
コの字状の溝を持ち、涯錐性堆積層
を掘込んだ径20cm大のピットを検出
した。作業小屋的な建物と思われる。

その他 III区斜面の第1テラス
東にSD11とSK15を検出した。床
面標高42.40m。SK15内より土師
器甕、周辺より蓋坏等が出土した。
掘立柱建物があったと思われる。

遺物から古墳後期後半と思われる。



挿図137 研石山遺跡 5区第3テラス関係遺物



挿図138 研石山遺跡5区9号建物跡

研石山3号墳 (挿図139、図版65)

Ⅲ区斜面の標高43m地点に立地する。研石山の北斜面中腹にあたる。第2テラス直上であり、東谷を見下ろし、研石山5区集落を眺望する位置にある。

等高線に沿って横向きに置かれた石棺を検出し、現状ではほとんど変化は認められなかったが、土層断面に山側の掘削と若干の盛土痕跡を観察できた。径6m程度の小円墳と思われる。

石棺は蓋石2枚、両側石各2、小口各1を使用し継目や周縁部は割石で目止めをする。側壁

は土圧のため谷側に倒れていたが小口と蓋石はほぼ原位置を保っていた。内法長さ0.80×幅0.30—高さ0.40mの小石棺である。床面標高42.70m。石材は現地の露頭にある割石と板石を使用する。棺内南西隅に坏蓋(2)、東隅に坏身(3)、棺外山側で平瓶(1)が出土した。坏身は枕に転用されたもので、真ん中で二つに割り、破砕面を外側に向けて伏せた状態で出土した。

なお、第2テラス出土遺物の中にはこの古墳から転落したのも混じっていると考えられる。遺物より、古墳時代後期後半に属す。

土坑 (挿図140)

土坑19基を確認した。10基が落とし穴状土坑であり、以外は建物・溝に伴うのもあるが形も不定形で性格不明のものが多く、落とし穴状土坑はⅡ区—中央丘陵に集中して分布する。円形2、楕円形1、長方形1、隅丸長方形5の各形態がある。規模は径1.0×1.0mから、長軸1.00～1.60×短軸0.70～1.10m、深さ0.5～0.85m。底面ピットは円形8、浅溝1である。尾根筋を上から裾部にかけて下るような配置を見せ、〈けものみち〉を想定した一連の計画性を思わせる。SK05から石鏃(サヌカイト)が出土した。

第2テラス (挿図133・134、図版64)

Ⅲ区斜面の標高約39m地点に立地する。北側に面して築かれた東西に長いテラスである。西側にはSB08が築かれる。東側は重複も考えられるがまとまりのある広場空間をなす。

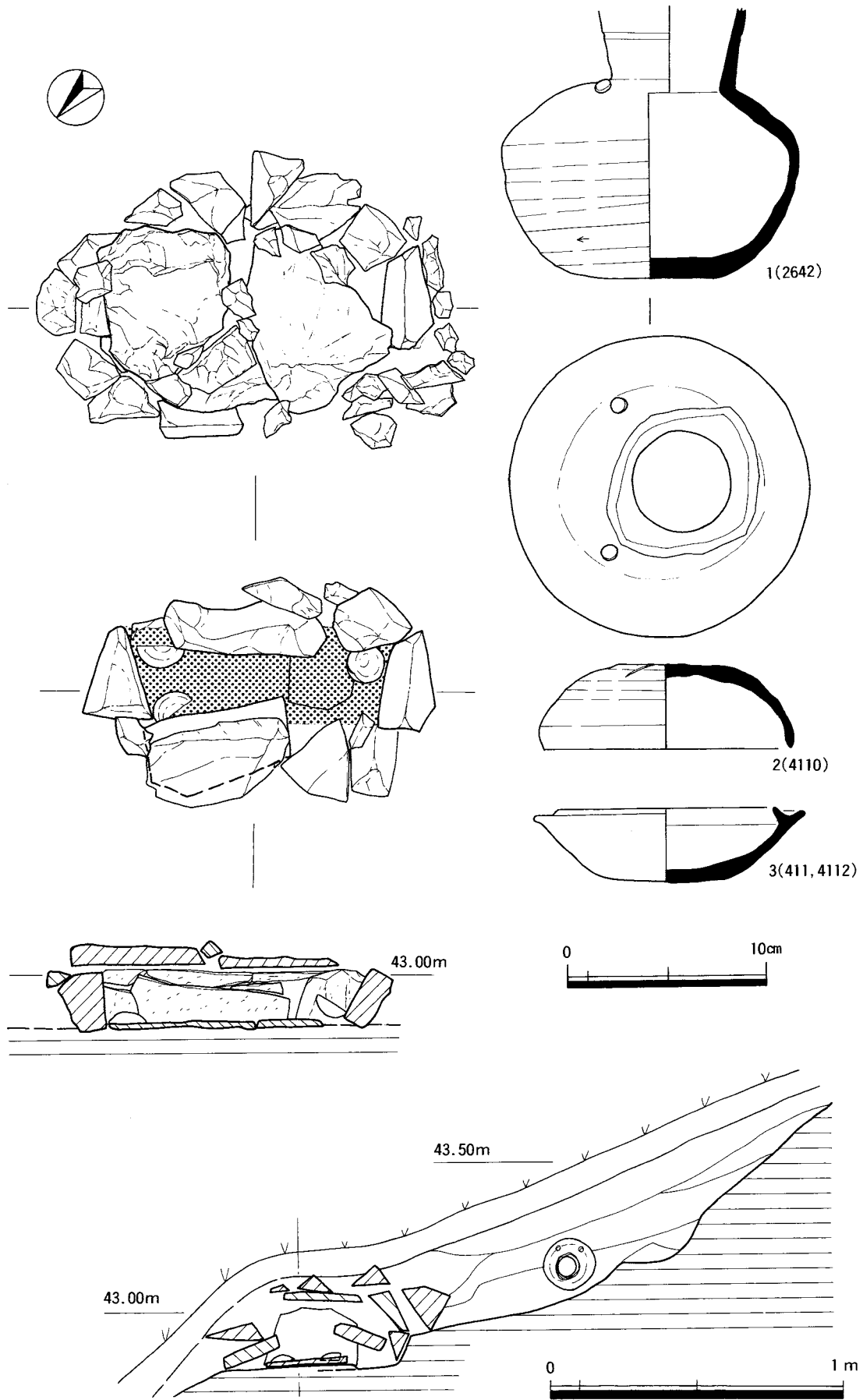
SB08を除くテラスの広さは東西約8.5×南北約4m。山側を大きく掘削して平坦面を造り壁際に幅約40—深さ約20cmのU字溝が巡る。壁面溝の前面にほぼ平行して二条、やや東に振れて一条の溝があり、数次の重複が認められる。急傾斜による流出が激しく明確ではないが、当初は手前を掘削し、漸次奥へ進み、奥壁面が埋まった後に前面を再掘削活用したと思われる。

ピットは12個を検出した。西寄りのものが規模が大きく数も多い。全体的に炭混じりの土が分布し、溝内にも入り込んでいた。また、前面部のP6の前には焼土の分布があった。建物が配置されていたものと思われるが、規模内容については明らかにできなかった。

ピットや焼土の分布状況から西寄りに建物を配し、東寄りを空地として利用していた可能性が高い。このような空間の棲分けは山田遺跡3区第2テラスと同様である。

遺物の分布は大まかに東寄りと西寄りに二分され、東寄りでは須恵器甕1(挿図134-11)・竊1(挿図134-10)・蓋坏等、西寄りでは須恵器蓋坏・甕1(挿図172-5)・土製支脚1(挿図134-12)等が出土した。東寄りの遺物には床面近くのほかに(1)のように出土レベルの高いものも見られ、上部からの流入品も含まれるようである。P9には須恵器甕(11)が坏身(5)(7)を伴い崩れた形で入り込んでいた。(11)の破片は周囲にも散在し、この内の1点は竊(10)と共伴して出土した。また、甕(172-5)と土製支脚(134-12)も甕が下で土製支脚が上という上下差はあったが、共伴状態で出土した。上部には研石山3号墳があるが、双方の遺物の時期はほぼ同じである。

古墳時代後期後葉期が主体であり、一旦断絶し、奈良時代後半に再利用されたと思われる。



挿図139 研石山第3号墳（小石棺）遺構遺物

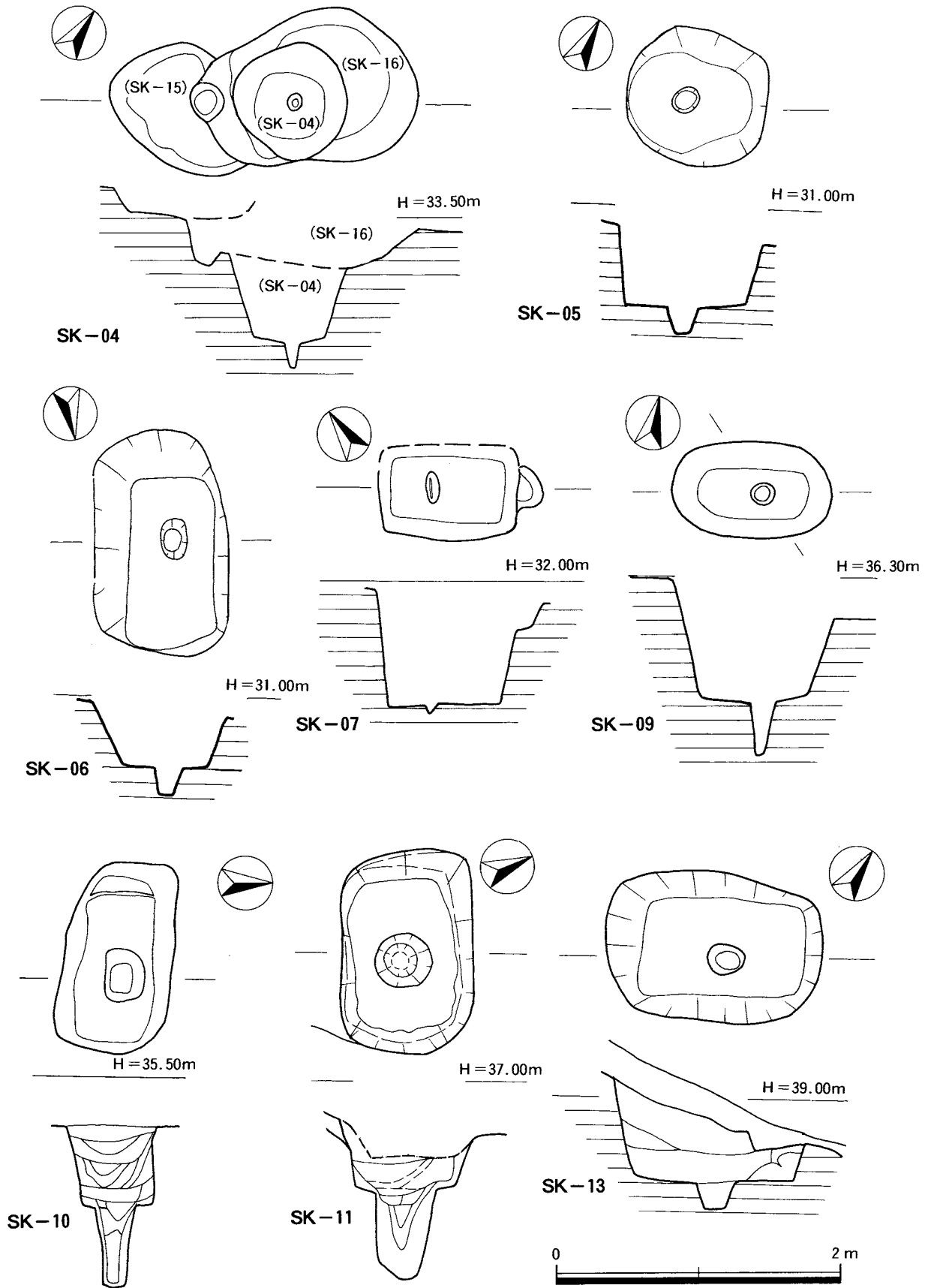
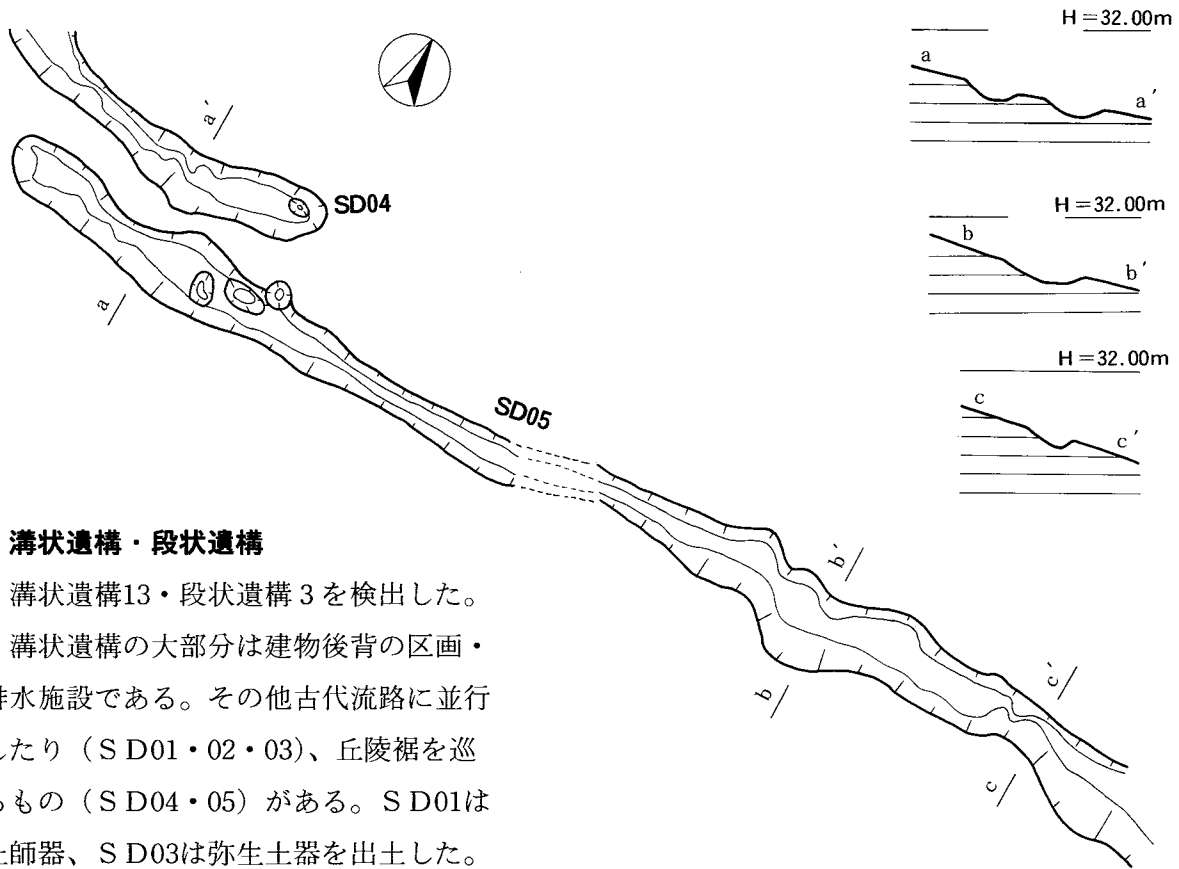


插图140 研石山遺跡5区土坑



溝状遺構・段状遺構

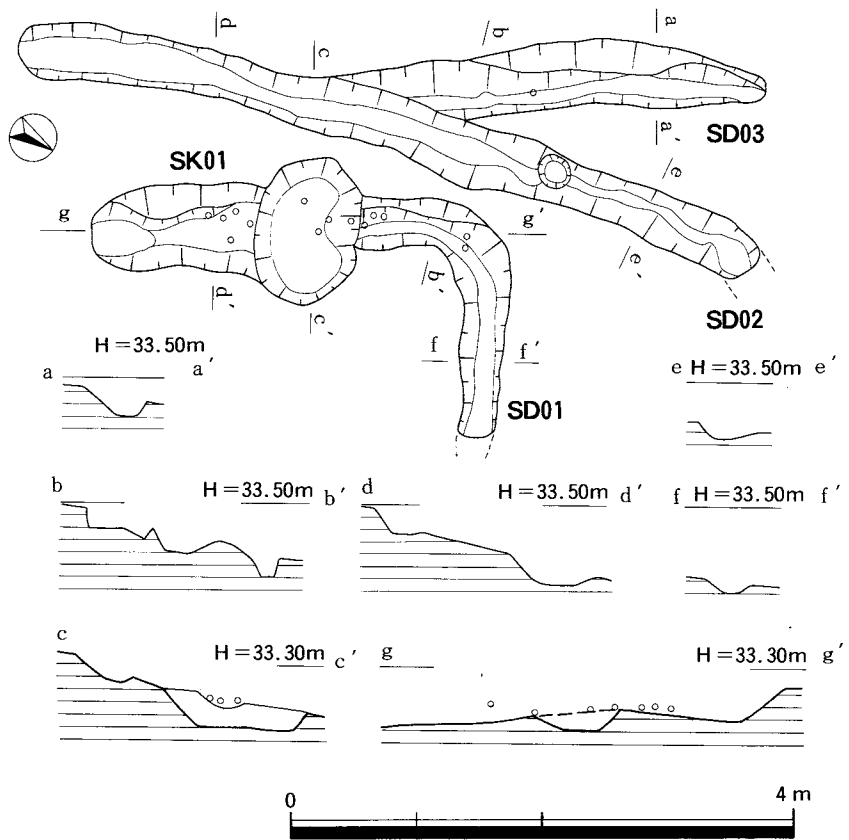
溝状遺構13・段状遺構3を検出した。

溝状遺構の大部分は建物後背の区画・排水施設である。その他古代流路に並行したり（SD01・02・03）、丘陵裾を巡るもの（SD04・05）がある。SD01は土師器、SD03は弥生土器を出土した。

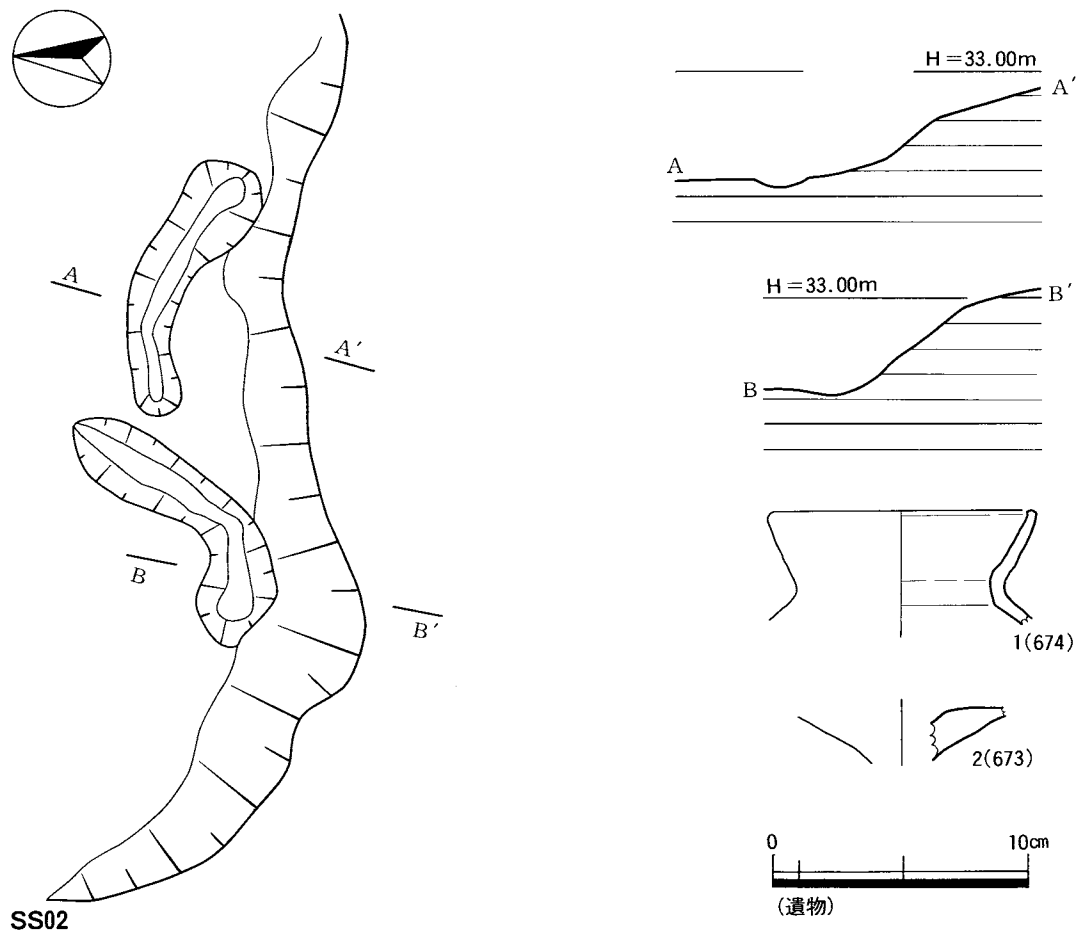
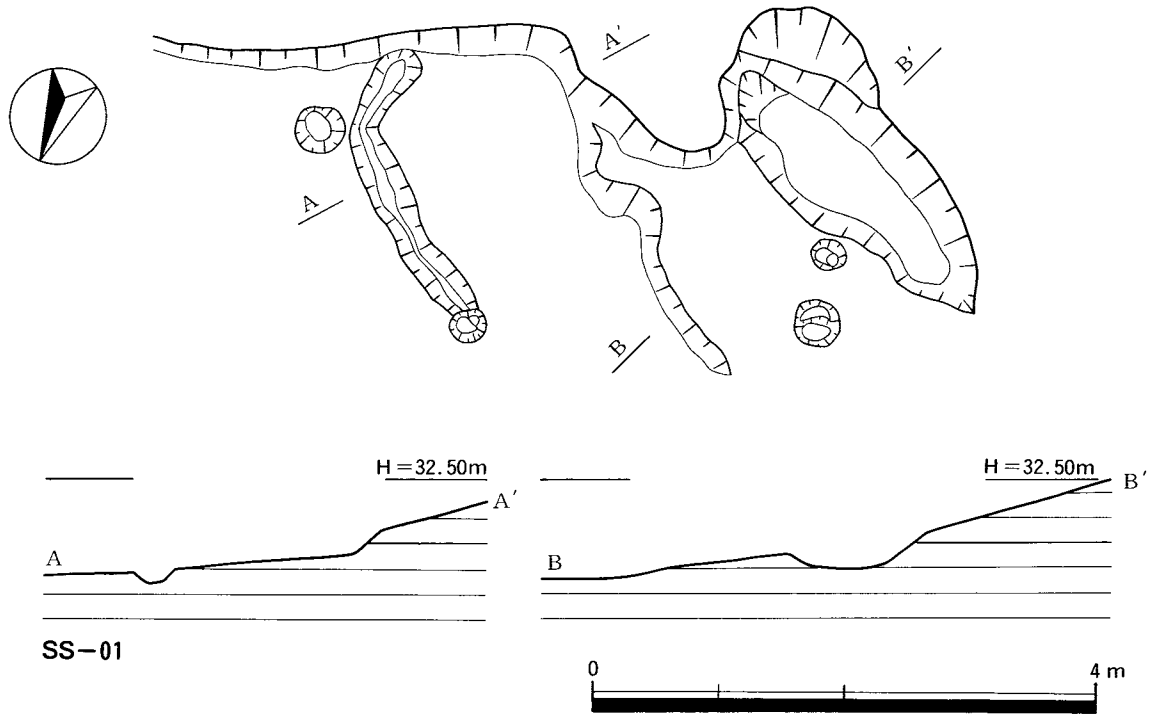
段状遺構はSS03はピット群・SB05などに隣接し、後背施設と思われるが、SS01・SS06などは自然地形の可能性もある。

ピット群

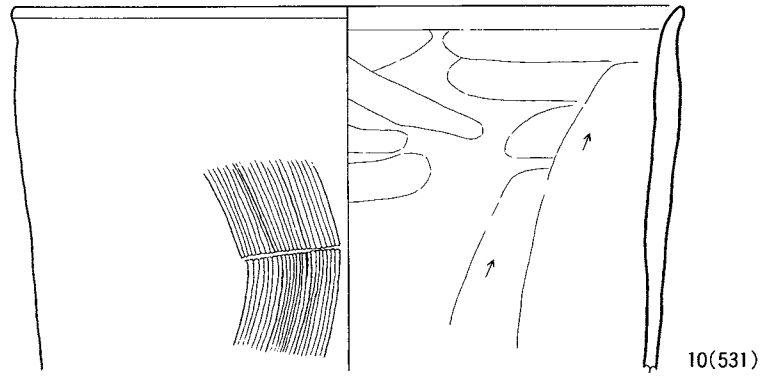
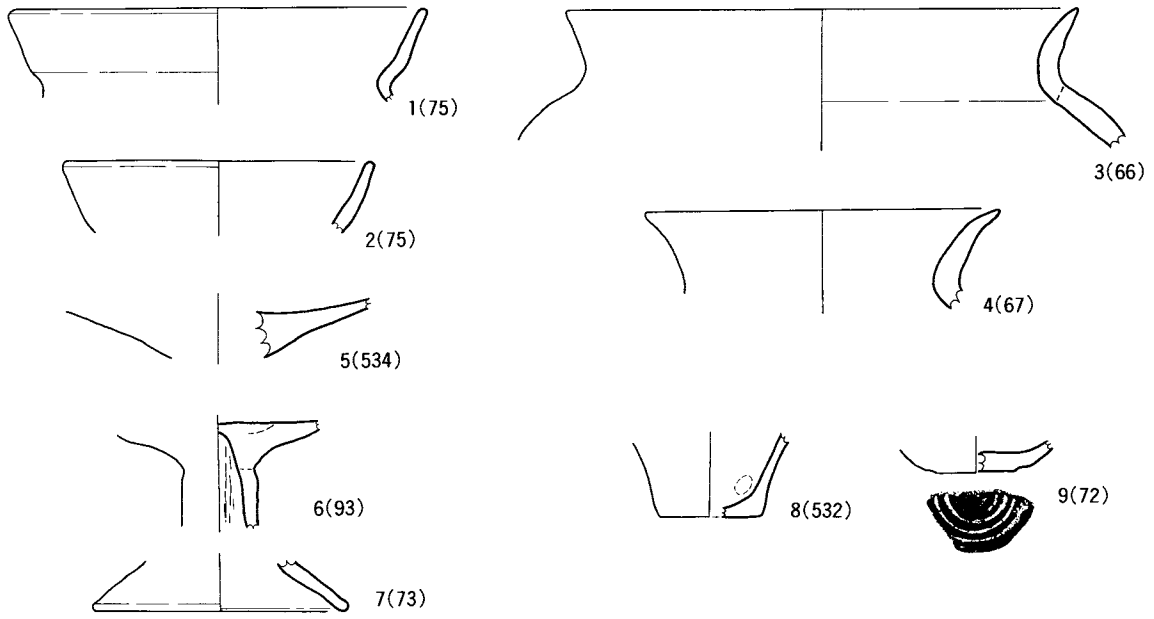
II区中央丘陵の中位尾根平坦面に集中分布する。反面、下位尾根部には無遺構空間地域も見られる。比較的広く平坦な空間であり位置的に集落の中心的な場所であったと思われる。幾つかのまとまりがあり、竪穴住居・建物・柵列等が推定される。多くは古墳後期及び奈良期の掘立柱建物跡群に関連するものと思われる。



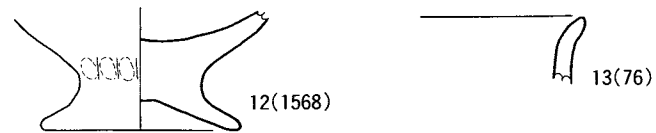
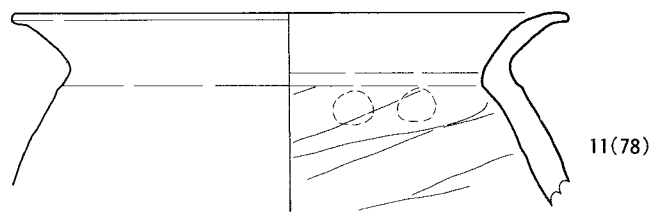
挿図141 研石山遺跡5区溝・段状遺構(1)



挿図142 研石山遺跡5区溝・段状遺構(2)



SD-01



SD-02



插图143 研石山遺跡 5区溝・段・土坑遺物(1)

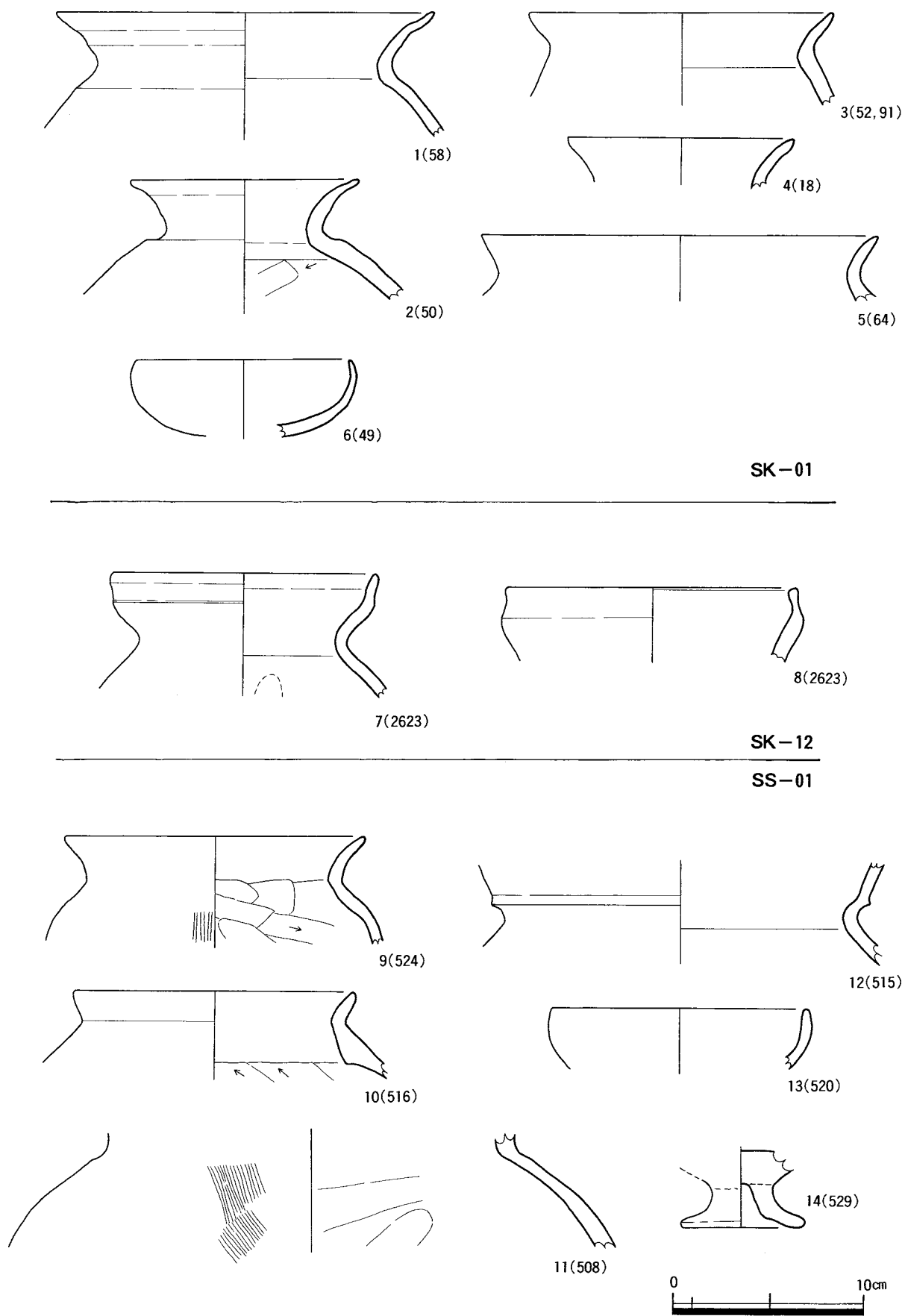


插图144 研石山遗迹5区沟·段·土坑遗物(2)

10. 下山遺跡 (挿図145~148、図版70)

概要 萱原集落の谷奥にあり、南~南々東に面した標高30~50mの山裾及び中腹斜面に立地する。後背の丘陵頂部は陰田との分水嶺となっており隣地の山道を200m程進み峠を越えると陰田夜坂谷遺跡に達する。中程を林道が横断し、下方が谷に張出した緩傾斜面、上方が谷状の凹面をなす斜面地形となっている。遺構は斜面に沿うような形でテラスが形成され、掘立柱建物10+・溝7・土坑10(縄文落し穴3・貯蔵穴1含む)・炭溜り等がある。主に上方に集中し、下方では土坑・溝・ピットがあったが明確な遺構として把握できるものは少ない。

須恵器・土師器・鉄滓・鉄製品などが大量に出土し、若干の縄文土器・弥生土器、石器もあった。特に林道周辺で多く見られ、地形の変換点に堆積した格好となっていた。時期的に奈良時代後半期に集中し、鉄滓・鉄製品や赤色塗彩土器が多いのが特徴である。鉄滓は精練鍛冶滓と鍛練鍛冶滓がほぼ半し、大鍛冶と小鍛冶を合わせ持つ鍛冶生産集落と考えられる。

遺構の集中性や多量の赤色塗彩土器の存在から、新山萱原地域における鍛冶生産の中心的位置を占める遺跡であったと考えられる。

遺構の配置は、テラスや遺物分布より大まかに東西に分かれ(西-A、東-B)、立地高により細分される。A-1-林道下、A-2-林道上西側・標高35~37m地点、A-3-林道上西側・標高37~40m地点、A-4-林道上中央・標高37~40m地点、A-5-林道上中央・標高40~45m地点、B-林道上東側・標高35~37m地点の6群であり、A-1~A-3は鉄滓・鉄製品が多く、A-4~A-5は炭溜り・散布が著しい。占地に機能・工程による棲み分けの痕跡が認められる。

掘立柱建物跡 (挿図140)

すべての規模内容は特定しきれないが、各テラス地形に溝・段状遺構を伴ってピットがあり10棟以上の建物が建っていたと思われる。2棟ないし3棟で一単位を成すようであり、建替えの形跡もある。A-3区のS B 01は1×4間(3.7推×5.40m)、A-2区のS B 02は1×2間(3.8×6.30m)、A-4区のS B 03は2×3(3.80×6.50m)を測る。いずれも柱穴径が20~50cm大と小振りである。

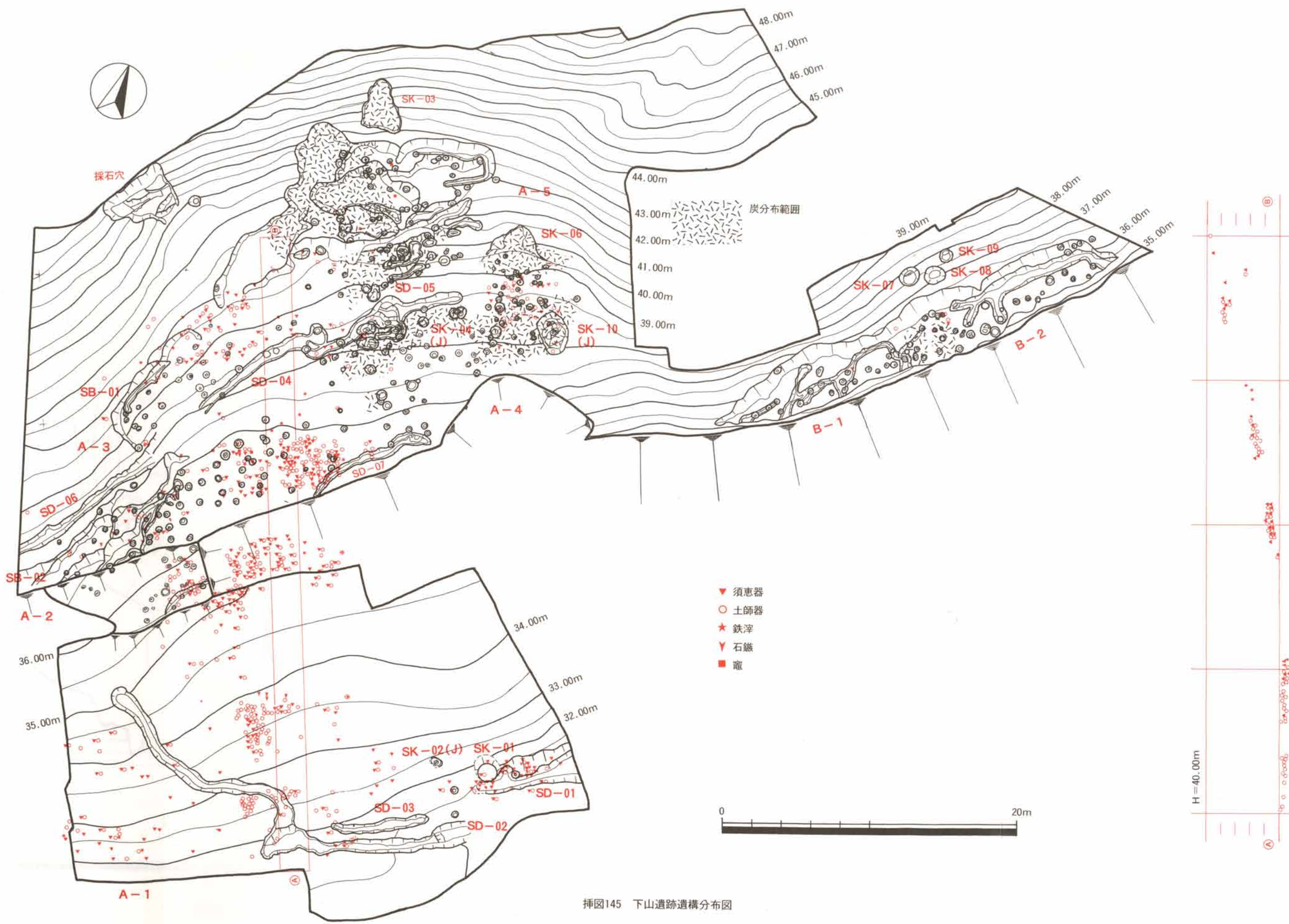
土坑 (挿図140)

落し穴状土坑 A区に所在しS K 02・04・05の3基を検出した。楕円形を呈し底面に小ピットを持つ。斜面の凹地形を谷に向かって降りるような分布である。北西斜面で縄文晩期凸帯文土器が出土しており、この時期に関係するものと思われる。

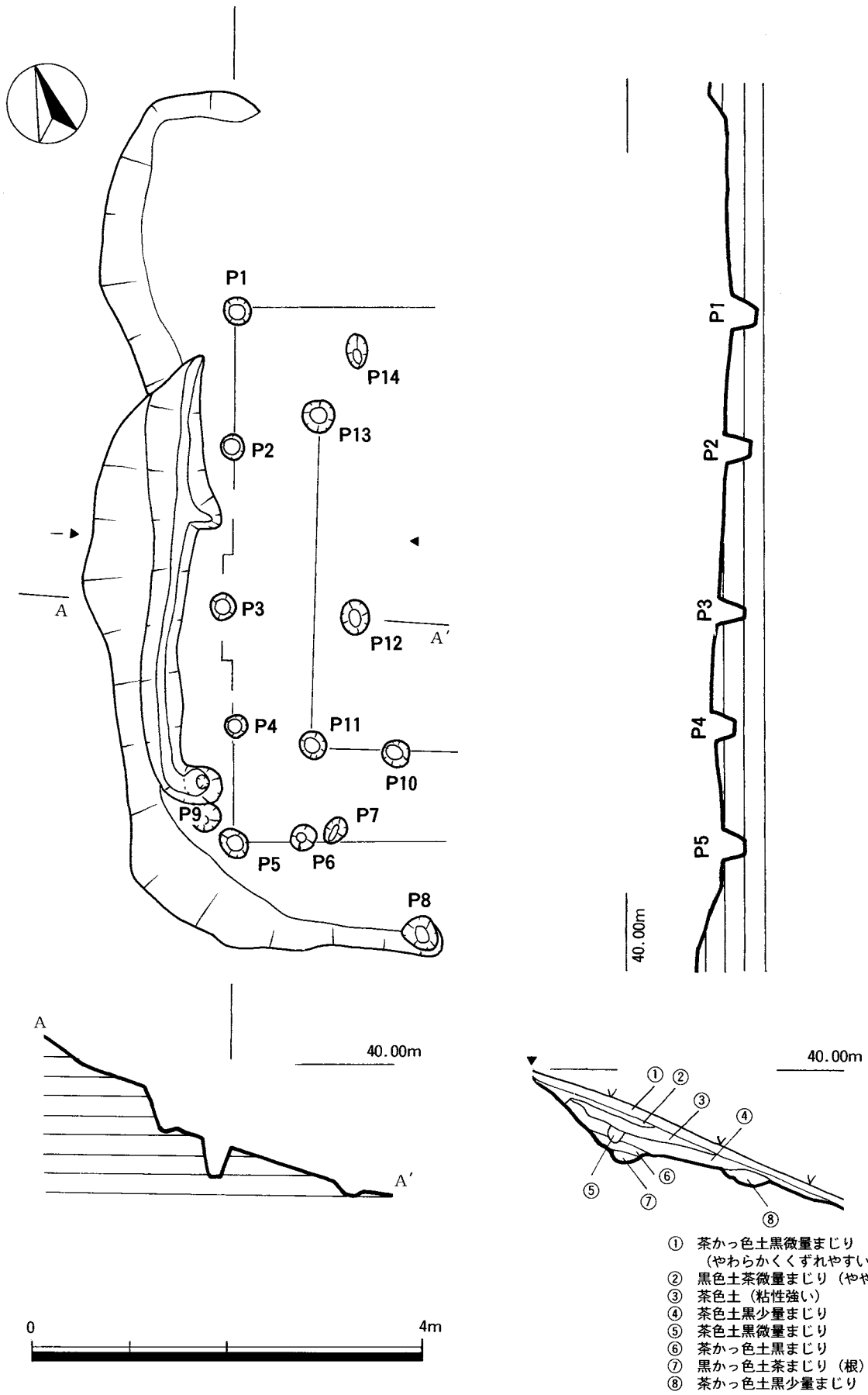
袋状貯蔵穴 S K 01はA-1区山裾に位置し、底面径0.95-深さ0.5m。弥生後期と思われる。

その他の土坑 A-5区のS K 03・06等は浅い不定形土坑。炭・焼土が混り炭焼跡と思われる。A-4区のS K 10は1.40×1.0-深さ0.35mの楕円形土坑で、土師器鉢1が出土した。

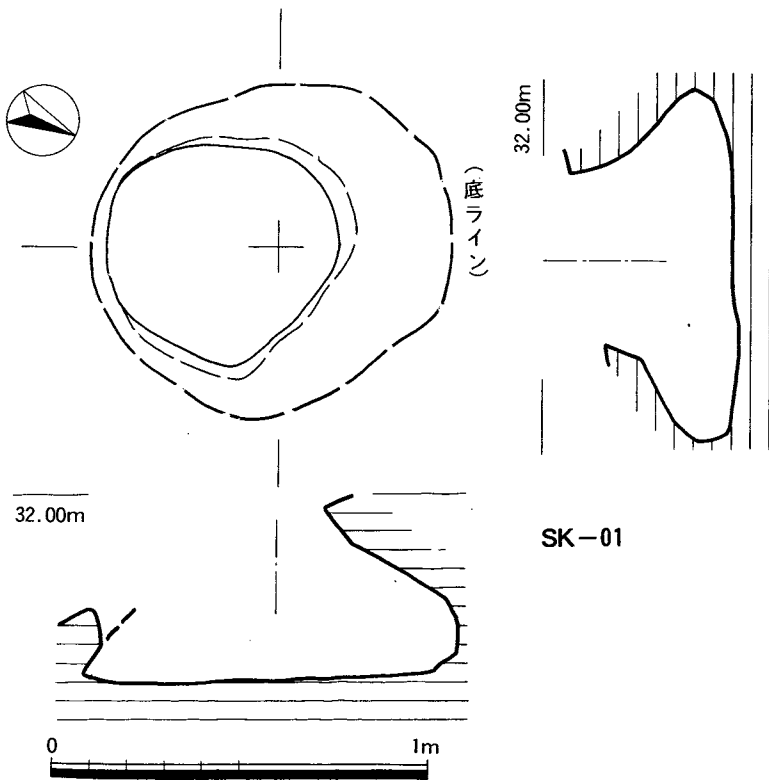
B区のS K 07~09は円形で径90~140-深さ0.7mの炭溜土坑。テラス後背に立地する状況は山田遺跡3区第2テラス(鍛冶関係遺構)での在り方に類似し一連のものと考えられる。



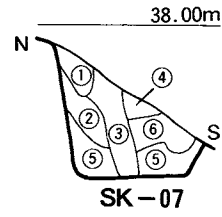
挿図145 下山遺跡遺構分布図



挿図146 下山遺跡1号建物跡

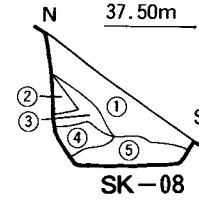


SK-01



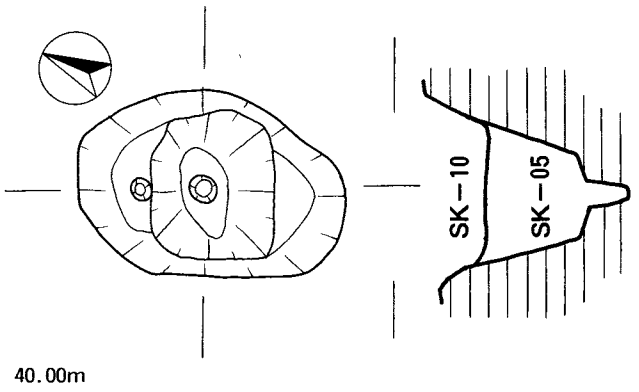
SK-07

- ① 茶かっ色土黒少量まじり・炭少量まじり
(かたくしまっている・やや粘質)
- ② 黒灰色土茶まじり・炭まじり
(①より少しかたい・①より少し粘質)
- ③ 黒色土灰まじり茶少量まじり・炭まじり
(①より少しやわらかい・①より少し粘性弱い)
- ④ 黒色土茶少量まじり炭多量まじり
(①と同じぐらかたい・①と同じぐらい粘質)
- ⑤ 茶かっ色土灰少量まじり炭微量まじり
(②よりかたい・②より粘質)

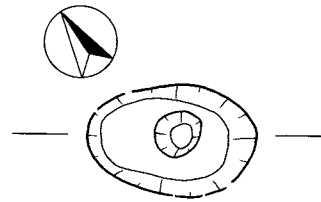
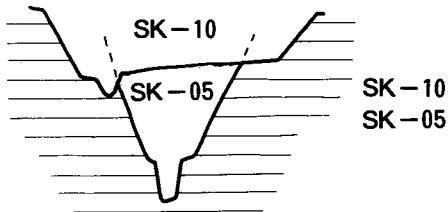


SK-08

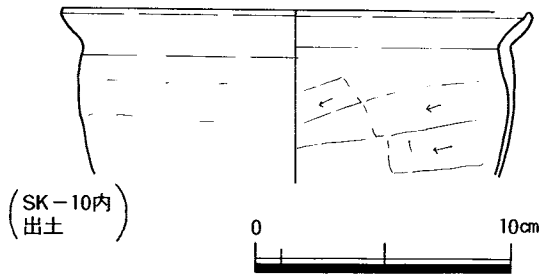
- ① 茶橙色土灰少量まじり
(ややかたくしまっている・やや粘質)
- ② 黄茶色土黒少量まじり
(①より少しかたい・①より少し粘質)
- ③ 灰色土黄少量まじり・根のかくらん
(①よりやわらかい・①より粘性弱い)
- ④ 黄橙色土
(②より少しかたい・②より少し粘質)
- ⑤ 黄色土黒まじり
(④より少しかたい・④より少し粘質)



40.00m

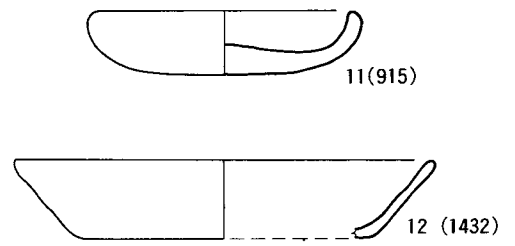
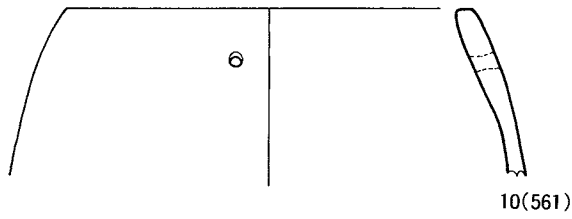
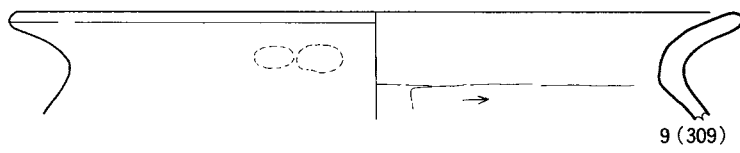
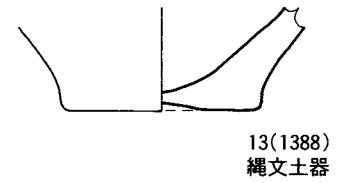
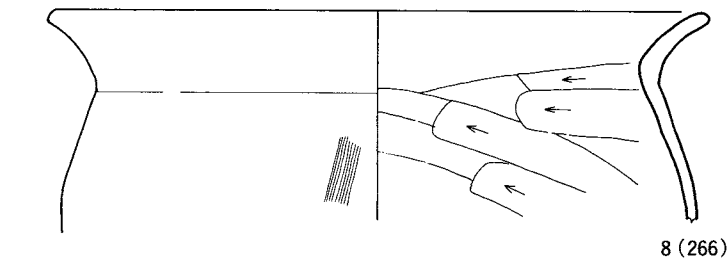
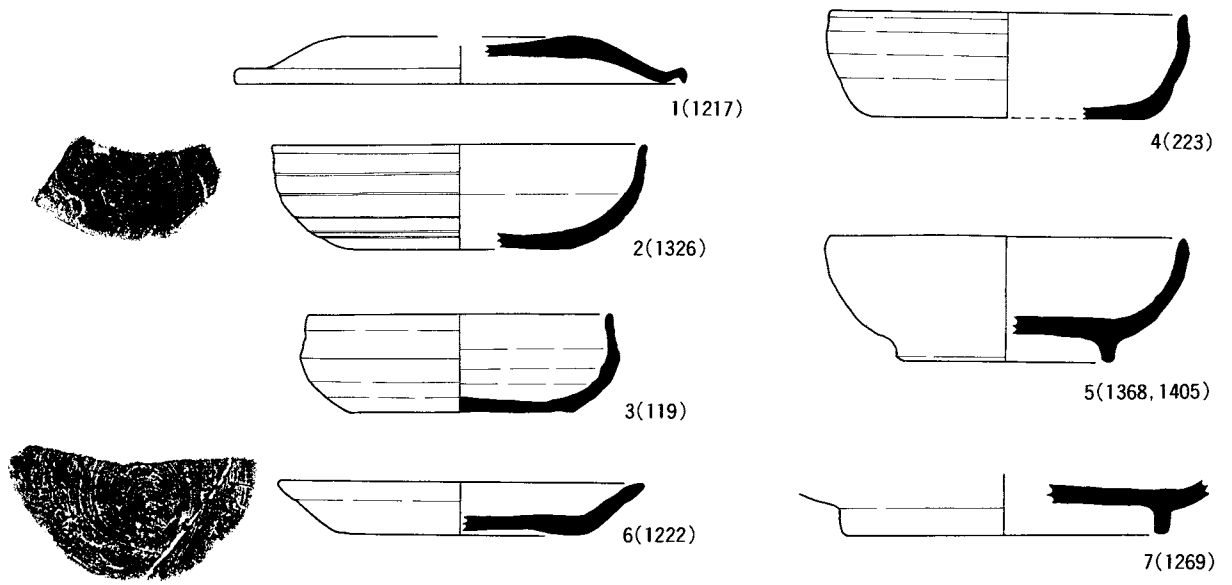


SK-02



(SK-10内出土)

挿図147 下山遺跡土坑図



挿図148 下山遺跡遺構関係遺物

第Ⅳ章 遺物について

コンテナ約700箱、取上番号で約9,000点の遺物を得た。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・土師質土器・古銭・鉄器類・石器類・木器類・土製品・その他である。古式須恵器の存在と鉄滓が多いのが特色である。ほとんどは谷部等への二次的堆積であり、遺構に関する遺物は少ない。以下の分類は形態的特徴を中心としたものである。

1. 縄文土器 (挿図149、図版71)

山田遺跡1区・3区・研石山遺跡5区・下山遺跡で検出した。押型文土器・条痕地浮文土器・突帯文土器・隆帯文土器・突帯文土器等がある。晩期突帯文土器が多い。突帯文土器は弥生前期土器の出土地に重なる場合が多い。

押型文土器 (1・2) 山田遺跡6W1・6W2地区の涯錐性の堆積層から出土。もろく摩耗が激しく調整等が良く見えないが菱形の変形したものである。厚手で繊維を含む。1の裏面に大雑把な斜行沈線が見られ、早期末のものである。^(註1)

縄文早期の土器は35,000点が出土した米子市上福万遺跡をはじめ、岸本町北田山、溝口町長山第1遺跡などで確認されているが、^(註2)いずれも大山山麓を中心とした日野川右岸の河岸段丘や山麓遺跡に限られており、今回例は平野部での初めての発見である。有舌尖頭器が出土した奈喜良遺跡にも近く、今後この平野部での発見があるものと思われる。

条痕地浮文土器 (3) 山田遺跡3区B地域出土。6～8と同一地区。腰部が屈曲する条痕地の深鉢土器。屈曲部に円形浮文を貼り付ける。晩期前半のものと思われる。

隆帯文系土器 (13) 山田遺跡3区山田7号墳上出土。隆帯に細かい刻み目を施す。

突帯文土器 (4～12) 4・5・9～12は山田1区の谷合い水田部、6～8は山田3区B地域。口縁端部ないしはやや下に断面三角の貼付突帯を持つ。稜はやや甘い。刻みの有無の二種がある。A類9～12は刻目突帯を持つ粗製の鉢形土器で、板状工具による横方向のケズリののち軽いナデを施す。胎土は長石粒を多く含み、石英・雲母も見られる。黒褐色～黒灰色を呈し、もろい。B類4～8は突帯に刻目を施さない。比較的緻密な胎土で、淡黄褐色を呈し、横方向のナデを施し丁寧な作りである。いわゆる瀬戸内地域の「黒土BⅡ」の範疇であり、晩期後半のものである。A類が古式、B類が新しい。

底部 (14～20) 14は山田遺跡1区、以外は山田3区B地域出土。端部が外側に突出し、14は凹底、15～20は平底である。淡黄褐色～淡赤褐色を呈し、器肉は比較的薄手である。胎土には米粒大の砂粒が混るが緻密で、焼成も良好である。晩期末に位置付けられ、突帯B類に伴うものと思われる。

土製耳栓 (21) 山田第7号墳覆土出土。山田3区B地域の遺物群の一連のものと思われる。径3.9×厚さ2.3cm、くびれ部径2.5cm。臼形で両端が凹み片側に紐穴二孔を穿つ。中央は貫通しない。紐穴は向い合う位置にあり「外→内」→「内→外」の紐通しとなる。外面及び凹み内面共に滑らかに仕上げる。淡黄褐色系を呈し、やや軟質。

2. 弥生土器 (挿図150～154)

前期、中期、後期の各期がある。山田遺跡を中心とするが、前期は山田1区・3区、中期は1区・2区、後期は1～3区と、時期により偏りが見られる。研石山遺跡、下山遺跡は散発的である。前期・中期はほとんどが流出遺物である。(※挿図150-12～14は縮尺1/2)

前期土器 (挿図150、図版71)

山田遺跡1区・3区、研石山遺跡5区で出土した。壺・甕・蓋・ミニチュア土器がある。数量は少ない。1・10が山田遺跡3区、11・14は研石山遺跡5区、以外は山田遺跡1区の出土。山田3区土器は同一地区出土の縄文晩期突帯文土器と胎土・色調などに類似性が認められる。

壺 (1・2) 1は口縁部が短く外反し端部は丸い。口縁下部に削り出しの段を有す。2は外反する口縁で端部は丸い。口頸部には何も施さない。乳白色を呈す。

甕 (3～6) いわゆる如意口縁を持つもので、3は口唇部に浅い刻目を施し、4～6は肩胴部に四条の沈線を施す。

底 (7～11) 7・8・10は平底。底径それぞれ8cm・7cm・6.2cm。9は凹底。底径10cm。11は研石山遺跡5区の古代の谷・東谷流路下部の出土。赤褐色を呈す。底径11.0cm。

ミニチュア土器(12・13) 12は先細りの厚手の壺形底部。外面ナデ、内面ヘラケズリ。13は甕形底部。底径3.7cm。

蓋(14) 甕の蓋のつまみ。径4.2cm。

中期土器 (挿図151・153・154)

山田遺跡1区・2区で検出した。広口壺・壺・無頸壺・高坏などがある。1点のみ中期中葉期(青木0期併行)の壺を確認したが、以外は中期後葉(青木I期併行)に属すものである。ほとんどが低地への流出・二次堆積であり摩耗が激しい。遺構に伴うものは山田2区SK26のみである。研石山遺跡5区では2点を確認した。

壺 (挿図151-1～10)

壺A (1～4) 大きく外反して開く口縁部で、端面を肥厚し3～4条の凹線文が施される。端面の刻目の有無、端部形態等の差異が見られる。端部形態では下垂するものから、横方向引出しへという変遷が指摘(註3)されている。

壺B (5・6) 頸部が直立ないしやや外反して立上がり、口縁部で屈曲し口唇部を上方につまみ上げる。なで肩の体部を持つものである。大型(I類-5)と小型(II類-6)がある。5は端部を肥厚し面をつくり刻目を入れる。6は3条の凹線を施す。

壺C (7～9) 無頸壺。内傾する口縁で口縁直下に3～4条の凹線を施す。

壺D (10) 算盤形の体部をもつ直口壺口縁と思われる。口縁端部を水平に内外に拡張し端面に3～4条の凹線を施し、外端部に刻目が巡る。口縁下の頸部にも凹線を施す。

甕 (挿図151-11～16)

端部を肥厚し2条～5条の凹線を施す。端部の肥厚が少ないA類(15)、端部の肥厚が少なく

端部上方につまみ上げるB類(13・14)、内傾屈曲する口縁で端部を上下に肥厚するC類がある。B類は頸部に粘土紐貼付刻目突帯を巡らす。刻目は指によりしっかりと刻まれる。C類は粘土紐貼付刻目突帯を持たないCa類(16)と、これを持つCb(11・12)類がある。刻目は刺突により簡略化されている。

形態的にB類が先行し、C類が後出的である。Cb類11・12は研石山遺跡5区の出土である。

高坏(挿図153-1~3・5~11)

坏部(1~3)は、端部が内湾気味に直立し口縁下に数条の凹線を施す。口径で30cm、20cm、16cmの大・中・小が見られる。脚柱・脚裾部(7~11)は、末広がりて筒部・裾部に凹線を施す。脚柱5・6は内側に円盤充填痕を残す。5は透孔状の刺突を施す。

〈山田遺跡2区SK26の土器〉(挿図65-6・7)

大型壺底部と高坏脚部がある。壺(7)は赤褐色を呈し、外面ヘラミガキ、内面ハケ目調整の後ヘラミガキを施す。壺BI類と思われる。高坏脚部(6)は末広がりて開き、端部が斜めに肥厚される。裾部に凹線を施す。形態的に青木Iに該当し、中期後葉期のものである。

後期土器(挿図152・153)

青木II期・III期併行のものを取り上げた。山田遺跡1区・2区が中心である。山田遺跡3区SI17(挿図48・49)・SK07(挿図64)で多く出土した。研石山遺跡1区・2区・5区・下山遺跡ではそれぞれ数点があるのみである。壺・甕・高坏などがある。後期前葉から後葉までがあるが、前葉期のものは中期土器同様摩耗が激しく二次堆積が多い。III期古段階までが主流であり、末葉期のものは少ない。

壺(挿図152-1・2・4・5)

端部肥厚・内傾の口縁で口頸部が外反して立上がるA類(1・2)と、上方で強く外反する筒状の口頸部を持ち、端部が拡張され複合口縁化するB類(4・6)がある。内面頸部下あるいは下半までヘラケズリ。A類は青木II、B類は青木IIIに該当する。

甕(挿図152-6~8・10~15・48-5~19・64-1~21等)

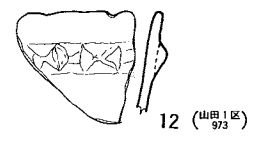
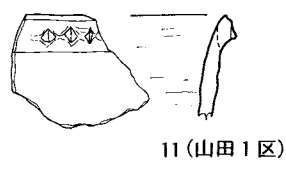
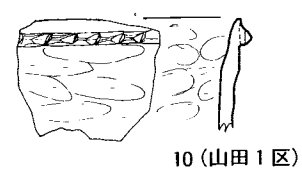
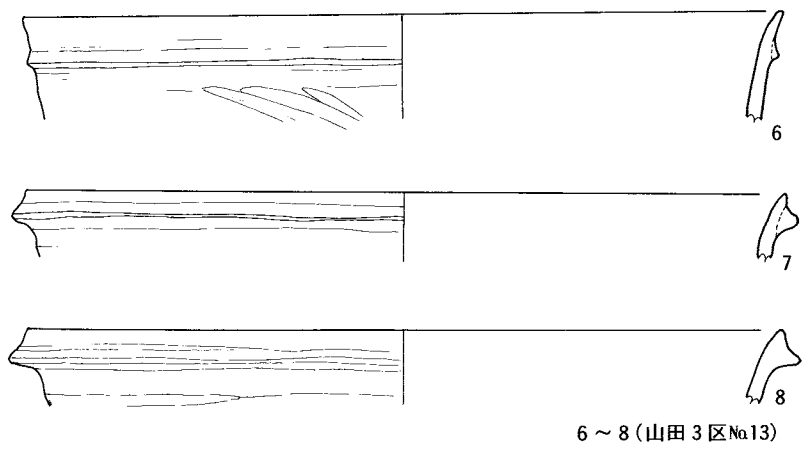
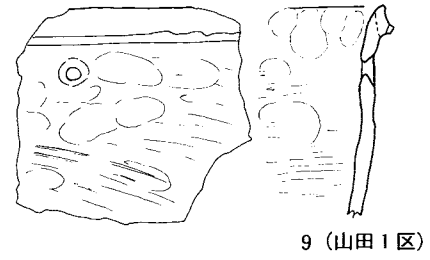
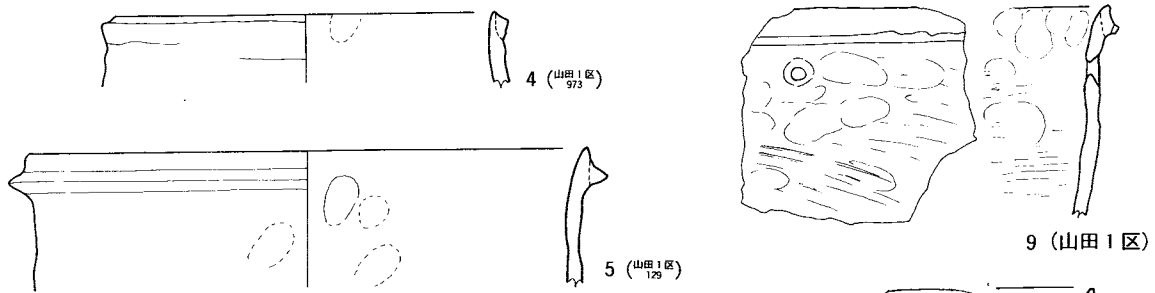
口縁端部を上あるいは上下に拡張するA類(64-1~21等)、複合口縁のB類(48-8~19・152-12~15等)がある。端面には平行沈線文を施し、口縁内面はヘラミガキないしはナデ、体部内面ヘラケズリ。頸部下に刺突列点文をもつもの(48-8・9、152-14等)、沈線を撫で消すもの(48-18・19、152-15等)も見られる。平行沈線は貝殻腹縁施文が主体で、櫛描きは少ない。

高坏(挿図153-4・12・13)

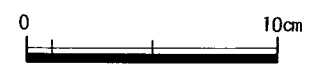
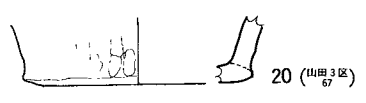
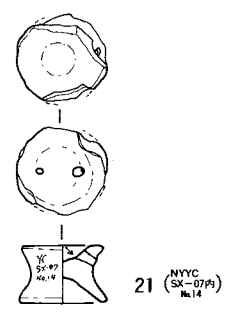
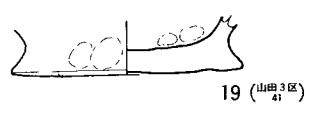
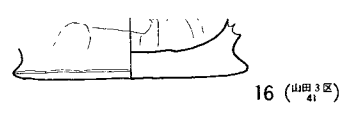
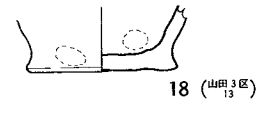
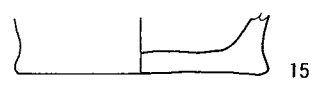
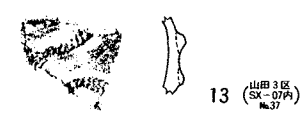
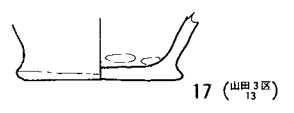
12は朱彩の脚柱部で櫛描き平行沈線を施す。13は末広がりて開く脚裾部。端部の上下に各一条の凹線が巡る。淡黄褐色を呈し軟質。

脚付鉢(挿図152-9)

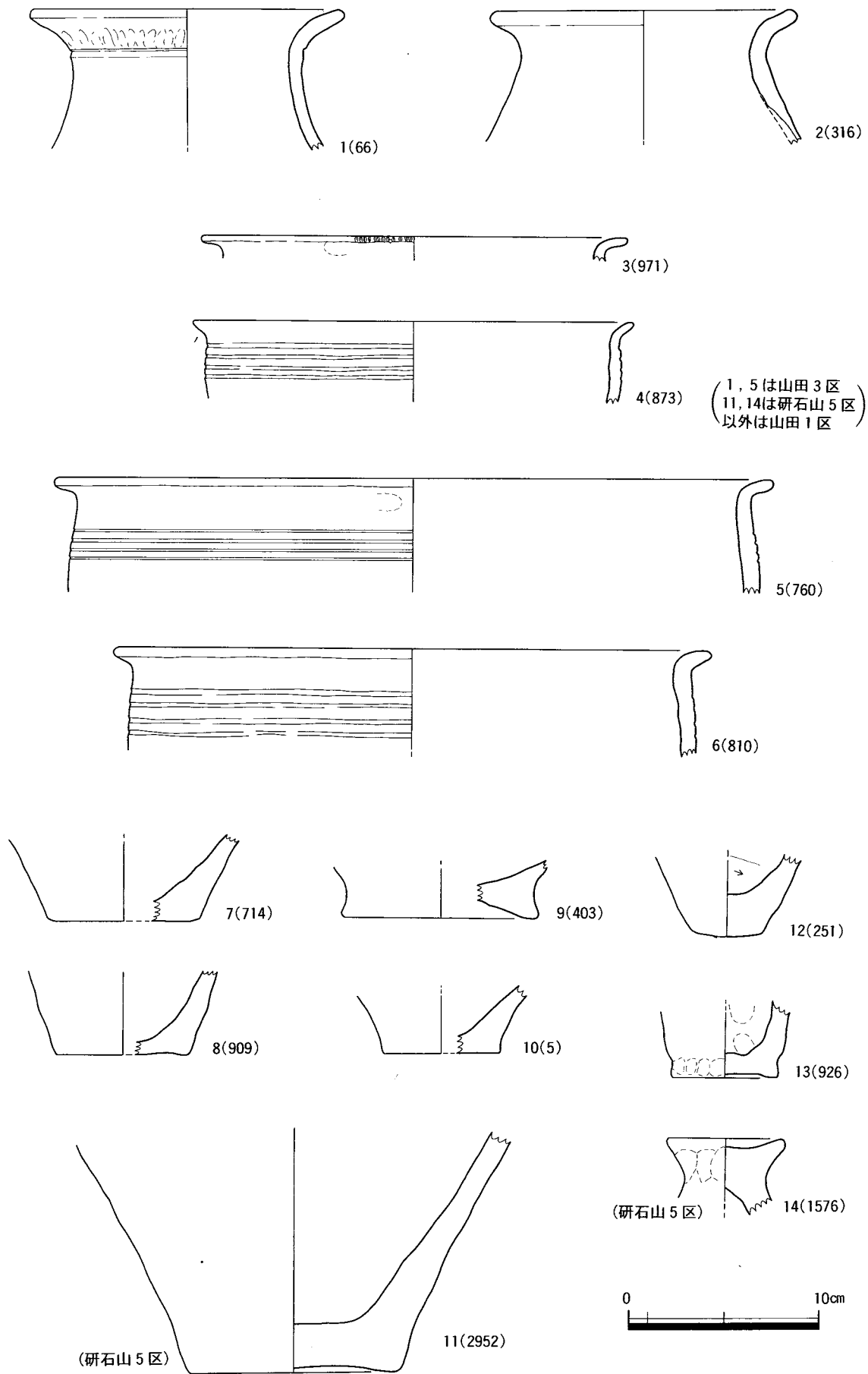
胴部が張り出し屈曲する高脚を持つ鉢形土器。口径18.8cm、最大胴径21.0cm、鉢部高推定9.5cm。口縁端部を拡張し3条の平行沈線、胴部にヘラ刺突文を施す。内面頸部下ヘラケズリ。



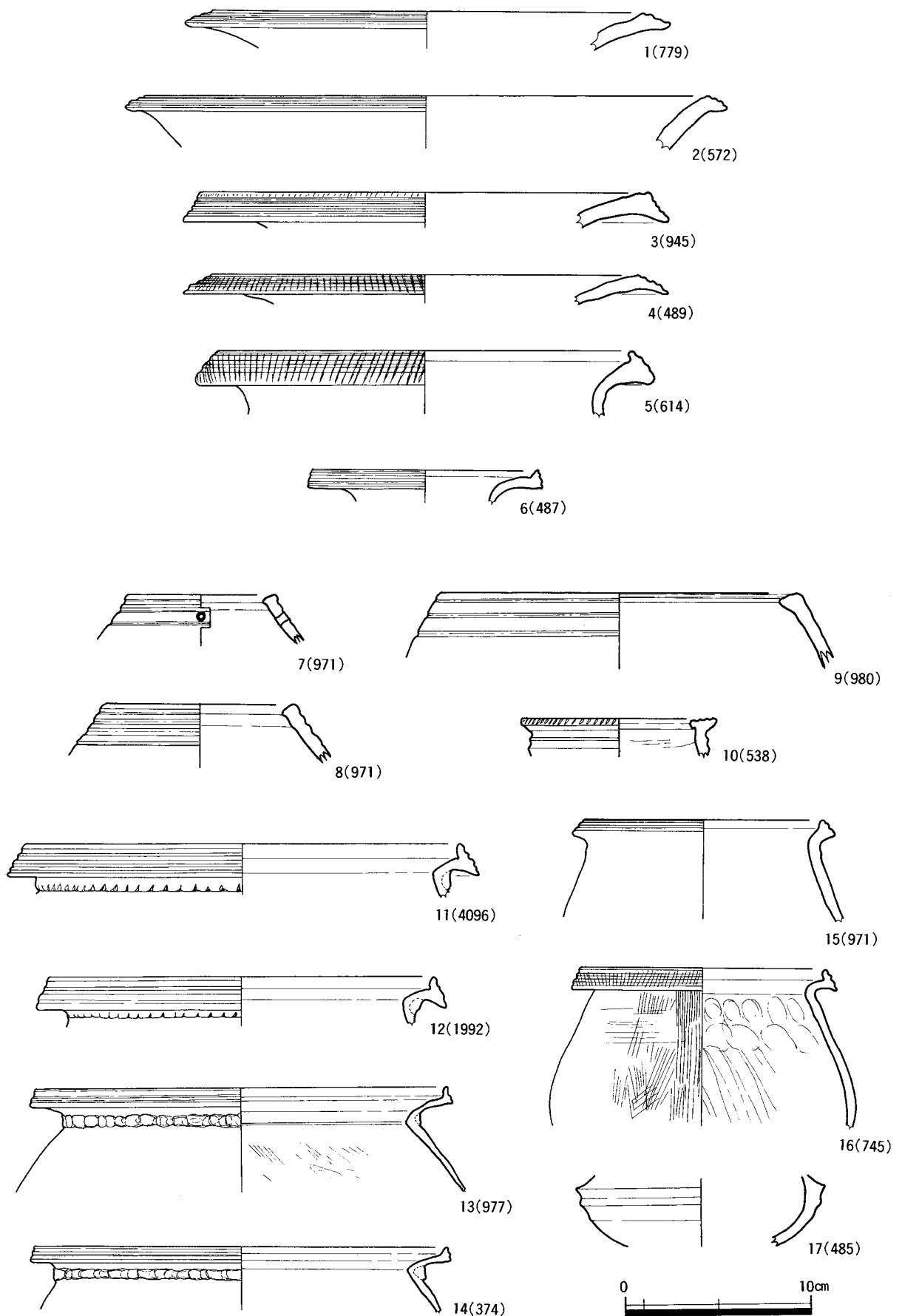
6 ~ 8 (山田3区No.13)



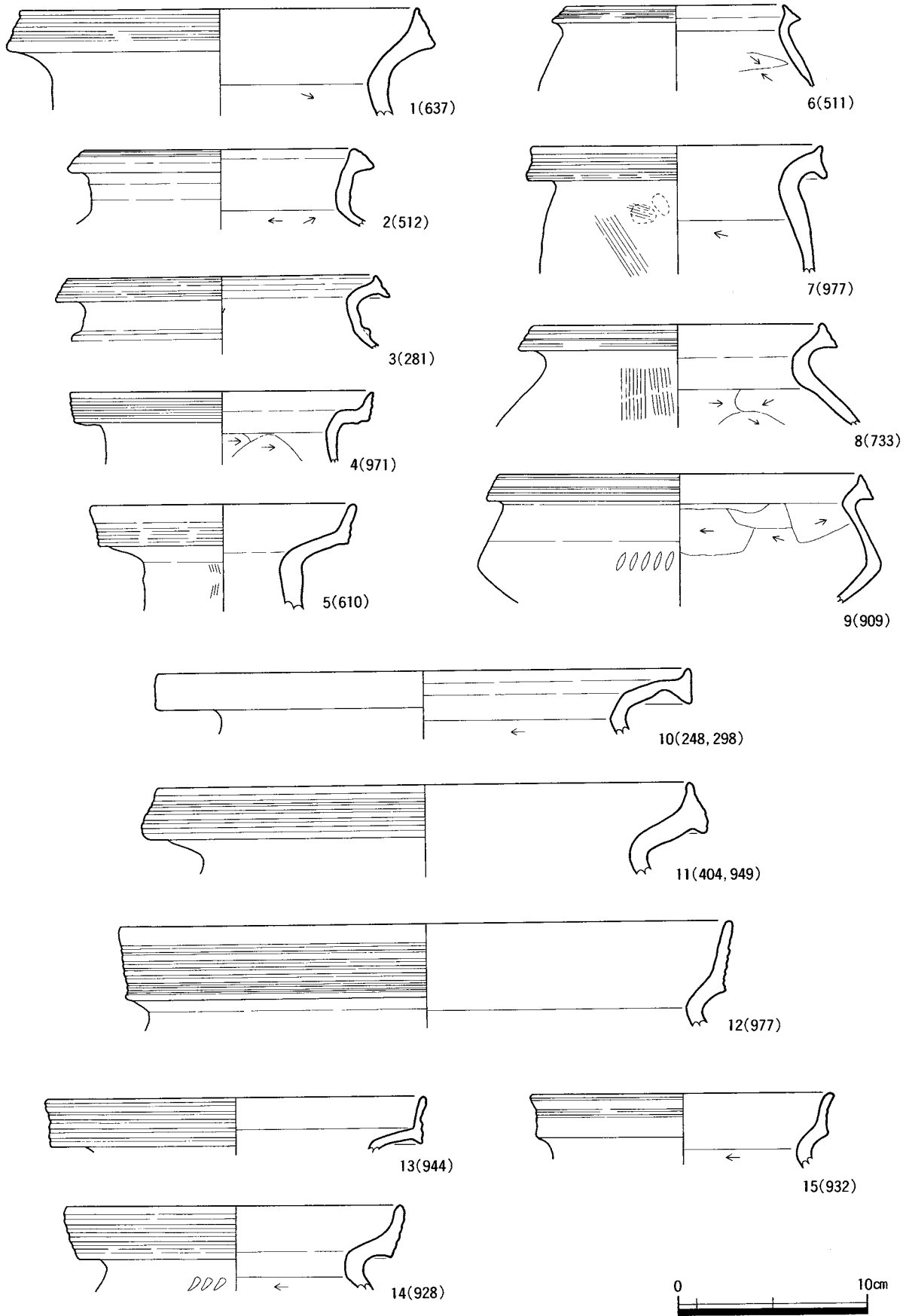
挿図149 縄文土器



挿図150 弥生土器（前期）



挿図151 弥生土器（中期一壺・甕類）



挿図152 弥生土器（中期・後期一壺・甕類）

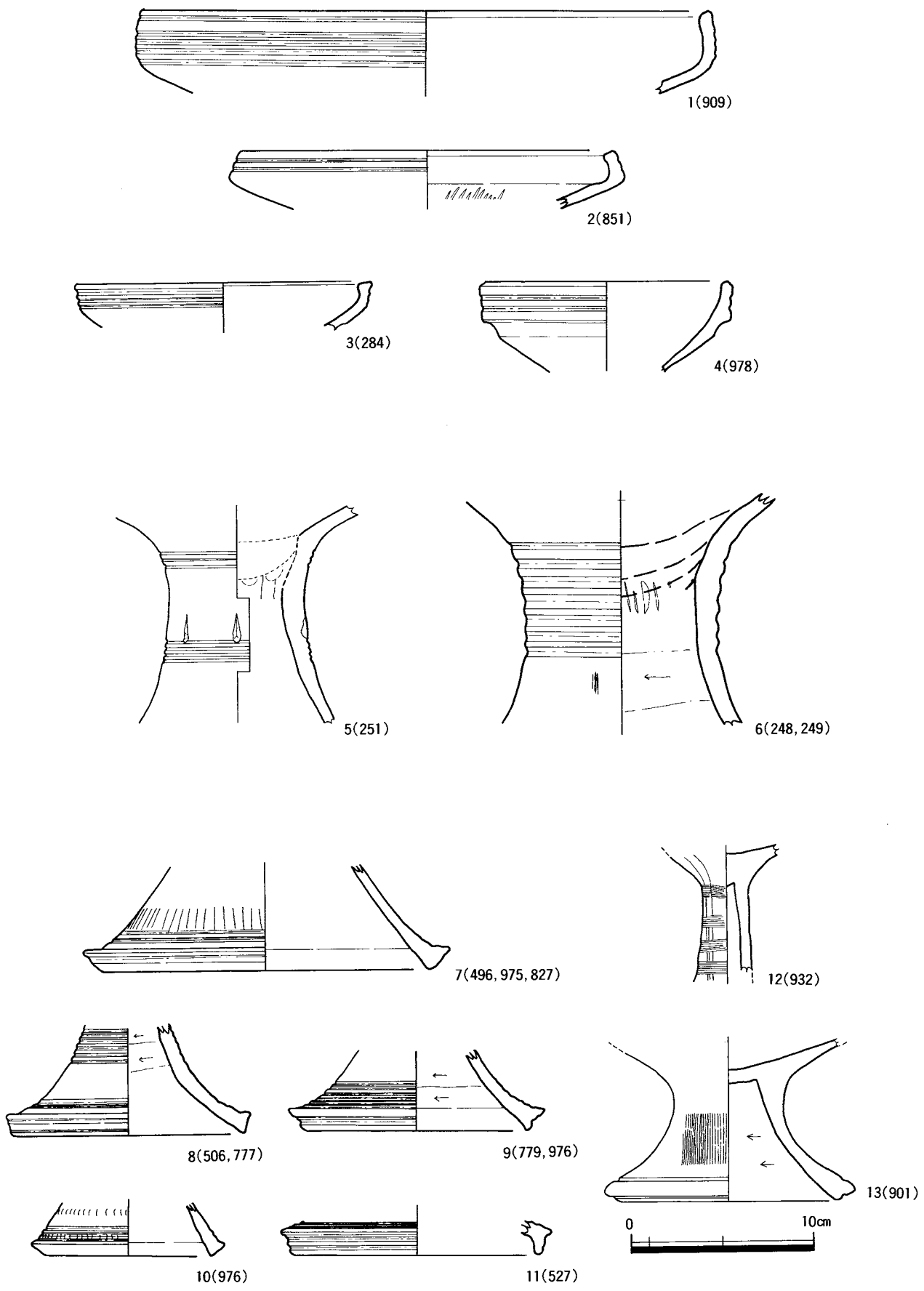
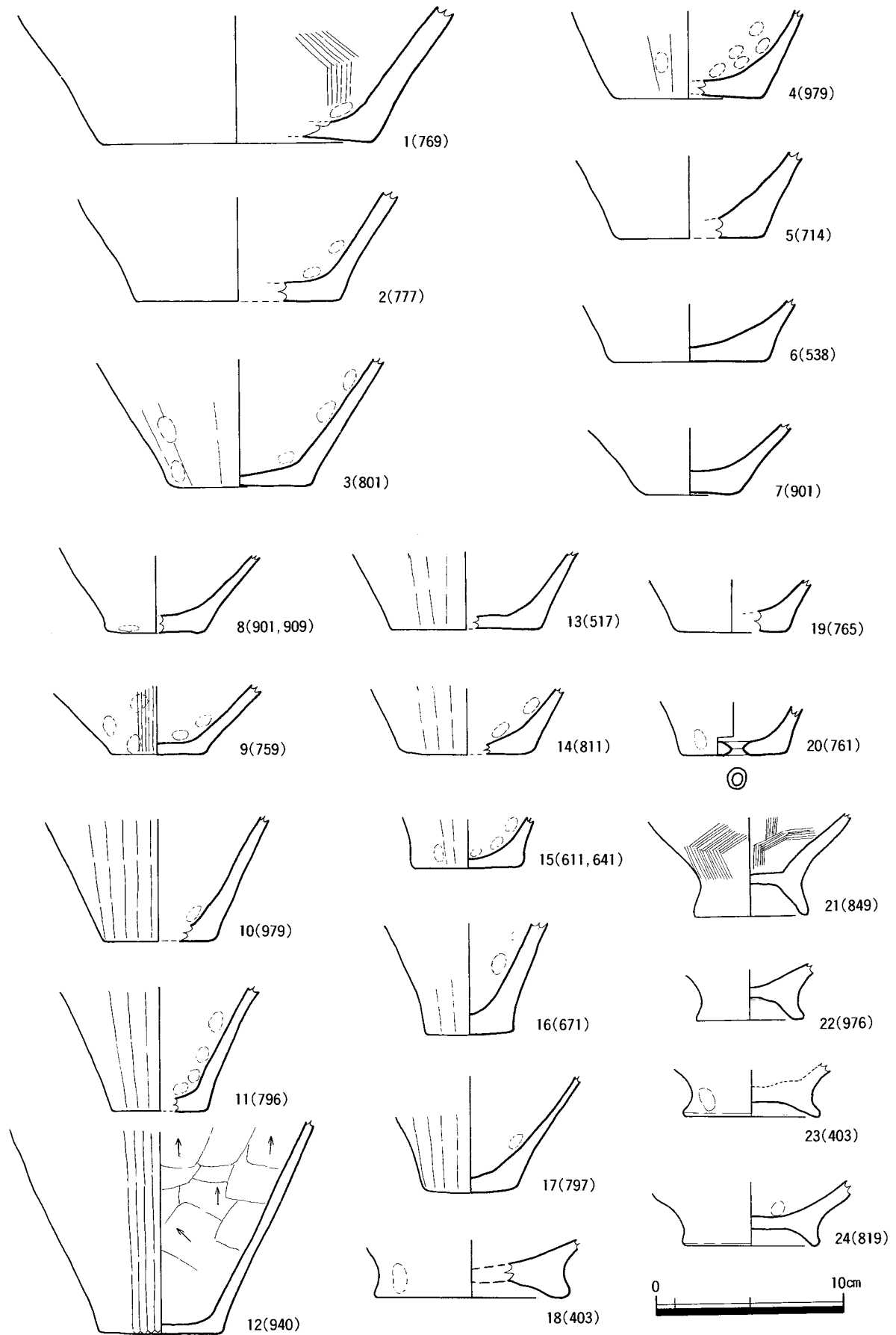


插图153 弥生土器（中期・後期—高坏）



挿図154 弥生土器（中期・後期-底部）

3. 土師器 (挿図155~175)

米子市青木遺跡土器編年の「IV期」以降の土器を取り上げた。いわゆる古式土師器に相当するものとそれ以降のものに大別できる。前者は壺・甕・高坏・小型丸底壺・低脚坏(蓋)・鼓形器台・小型器台等がある。山田遺跡1区~3区・研石山遺跡5区の出土である。後者は青木遺跡土器編年の「IX期」以降のものであり、山田遺跡1区・2区、研石山遺跡1区・5区の各遺構や谷などへの堆積として出土した。壺・甕・高坏・埴・皿・注口付鉢形土器・鉢・小型丸底壺・甌・移動式竈等がある。

特徴として、当地域の古墳時代前期の器種組成に通有の山陰系甌形土器がないことや、また、中期前半に比定される青木VIII期に該当するものが少なく前後間に空白期が認められることなどがあげられる。

なお、青木IV、V・VIは畿内庄内式、VII、VIIIは布留式併行とされている。近年、庄内式併行期の土器を『弥生土器』とする方向にあるが、^(註3)ここでは一応『土師器』の範疇としておく。形態的にはやはり青木IIIとIV間の差異が大きく、V・VIからVIIへの変化は少ない。

壺 (挿図155・156)

壺A 筒状頸部に外傾・外反して開く複合口縁が付く。**Aa類**(155-1)は口縁端部を丸く収める。**Ab類**(155-2~4)は大きく外傾・外反し端部を面取りする。155-3は頸部に凸帯をもつ。

壺B 球体の体部に直立あるいはやや外傾して延びる口縁をもつ小型の壺である。**Ba類**(155-6)は球体の体部にやや外傾して延びる口縁をもつ。薄手でシャープに作り、外面ハケ目、内面横ヘラケズリ。乳褐色~乳灰褐色を呈し、胎土は緻密、硬質である。**Bb類**(156-1・2)は体部がBa類より横に張り楕円体気味で、やや外反気味の口縁をもつ。淡赤褐色~淡黄赤褐色を呈し、洗練された緻密な胎土で、焼成はやや軟質である。口縁は比較的短く小さい。156-1は口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面横ヘラケズリ、底部中央指頭圧痕。**Bc類**(156-3~10)は体部下部半球形・上半部無肩状で鉄瓶形をなすものが主体である。上半と上半で調整に差異があり、内面下半ヘラケズリ・ヘラケズリ後ナデ、上半は粘土紐接合部指頭圧痕。乳白色~淡黄褐色を呈し、洗練された緻密な胎土、軟質である。

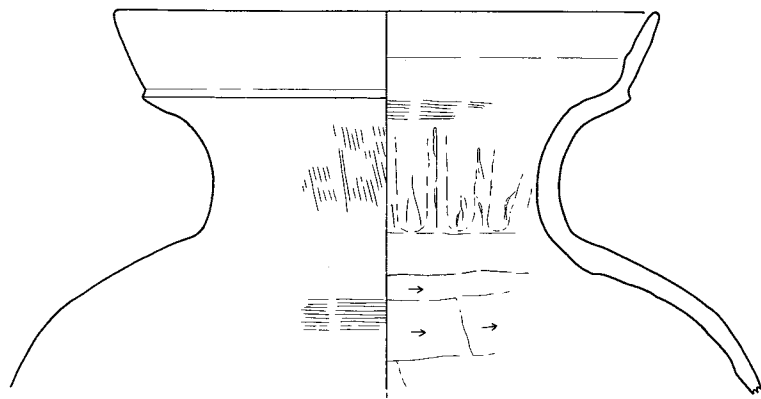
Aa類は青木V・VI、**Ab・Ba類**はVII(~VIII)、**Bb類・Bc類**はIX~Xに該当する。

甕 (挿図157~166等、図版76)

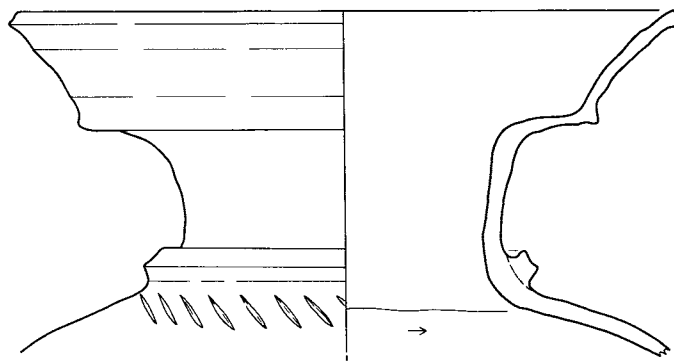
山陰系の複合口縁、畿内布留式系、畿内系の影響を受けた複合口縁等がある。主な土器について形態や調整によりA~Iの9類に分類した。挿図158はその系統概略である。

甕A(挿図157・159-9~11) 複合口縁をもつものを一括した。口縁端部つまみ上げ(a:157-1・2)、端部面取り(b:157-3~7)、端部を内側に屈曲させるもの(c:159-9~11)等がある。稜の突出が明瞭なもの・緩やかなもの、体部倒卵形・球形・胴張り等の差異もある。

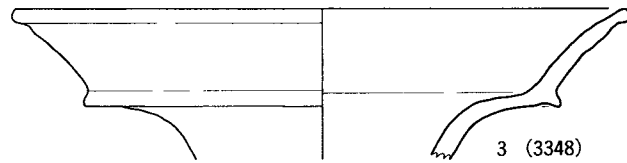
甕B(挿図159-1~8) 緩く内湾して延びる単純口縁。端部を内側に肥厚するもの(a:



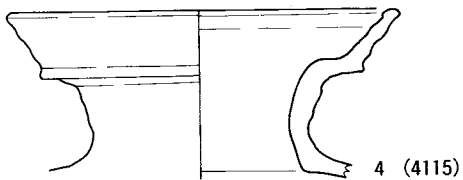
1 (3598)



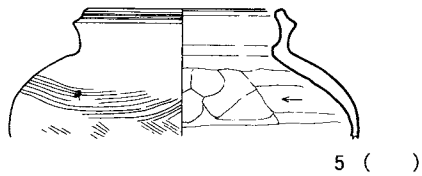
2 (1908)



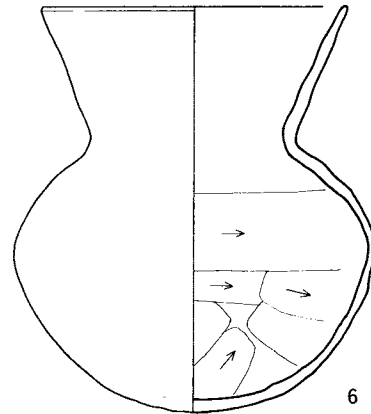
3 (3348)



4 (4115)



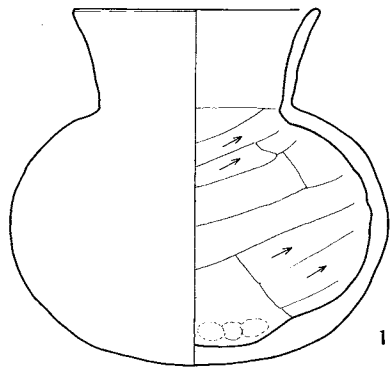
5 ()



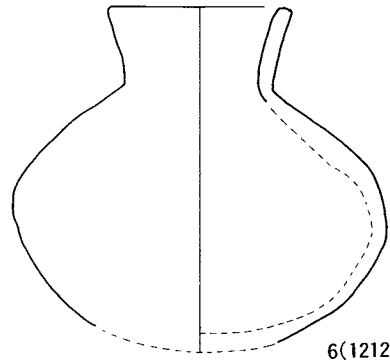
6 ()



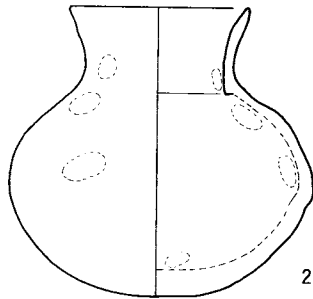
挿圖155 土師器 (壺)



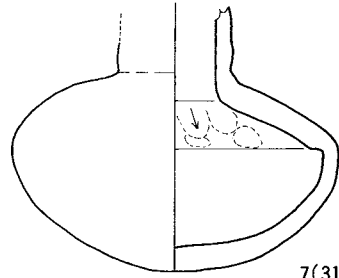
1(4113)



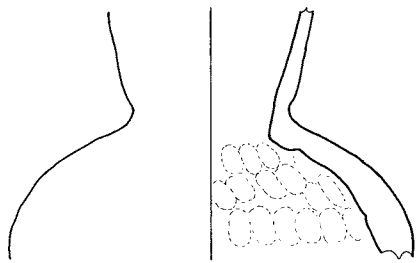
6(1212)



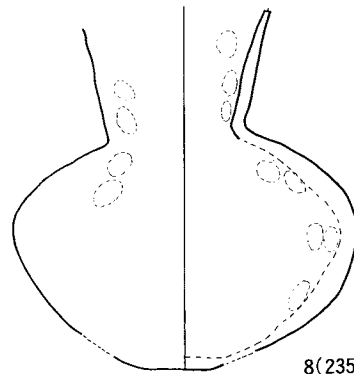
2(1857)



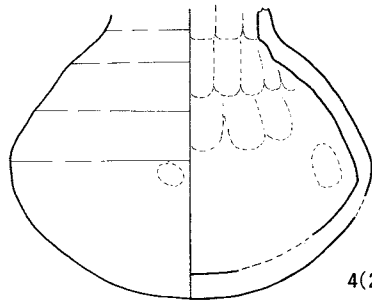
7(3137)



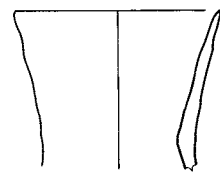
3(390)



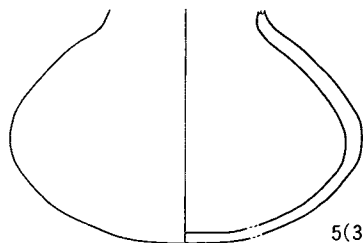
8(2350)



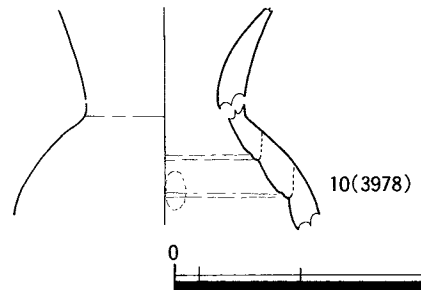
4(2797)



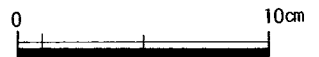
9(3737)



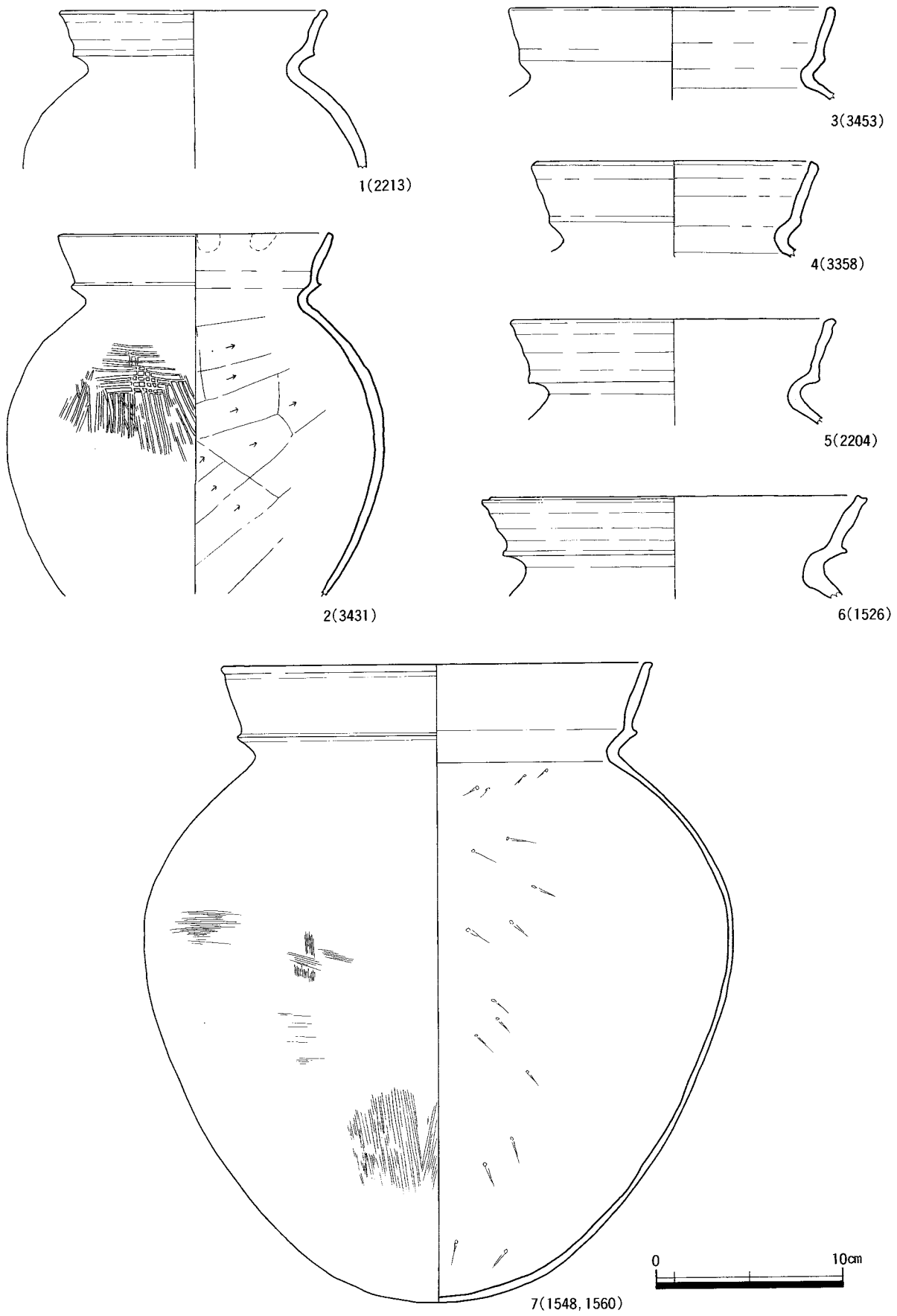
5(3704)



10(3978)

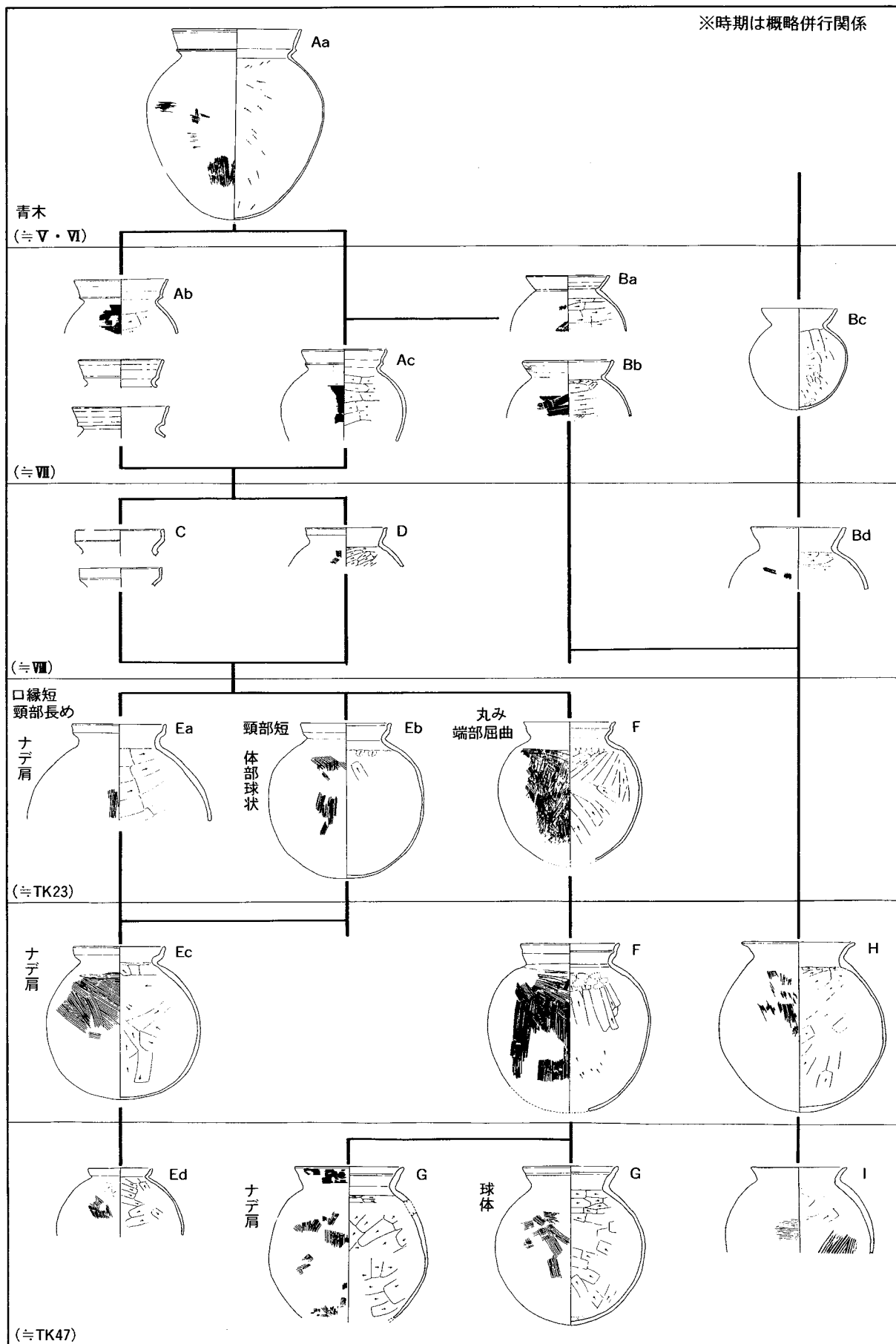


挿図156 土師器 (壺)

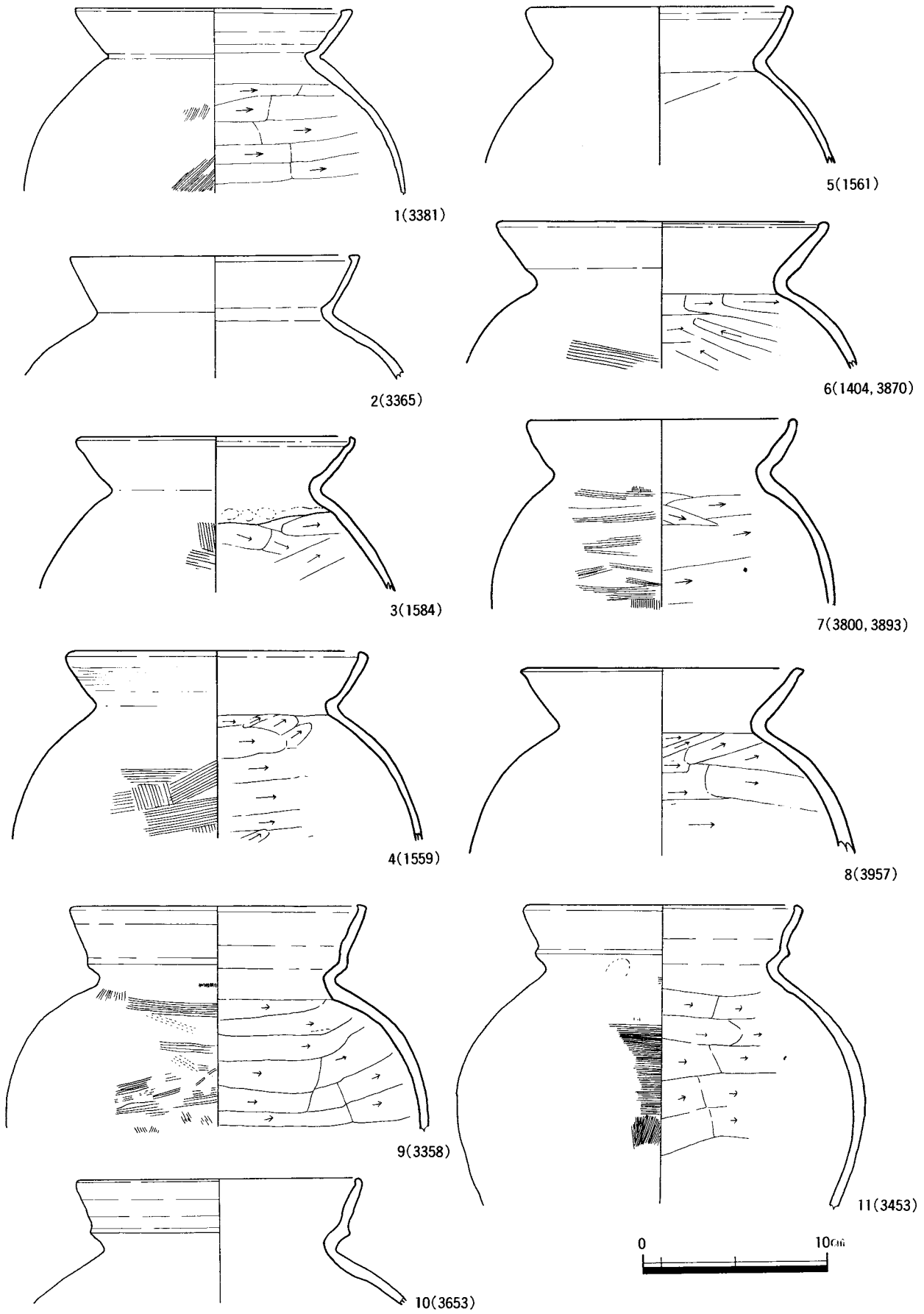


挿図157 土師器(甕)

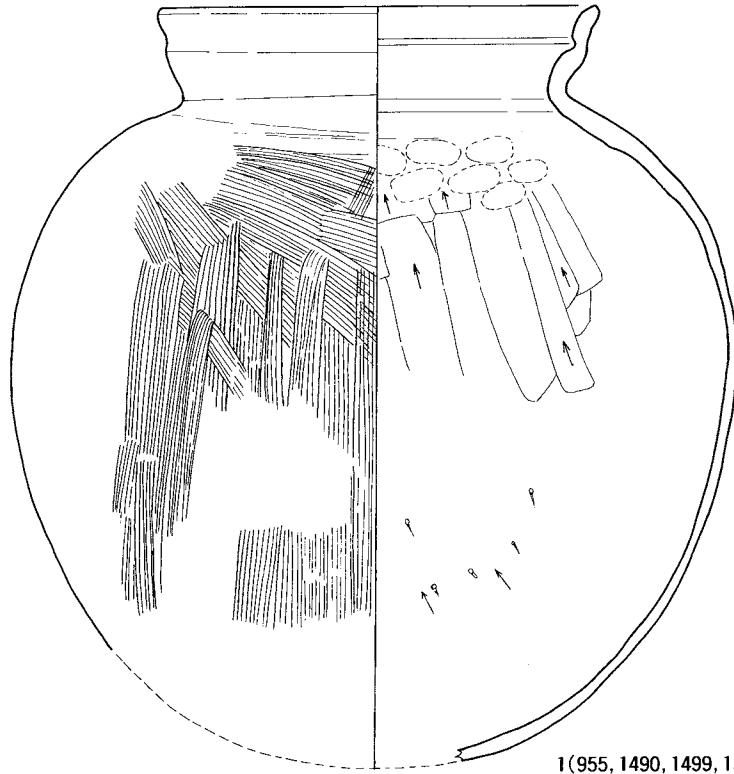
※時期は概略併行関係



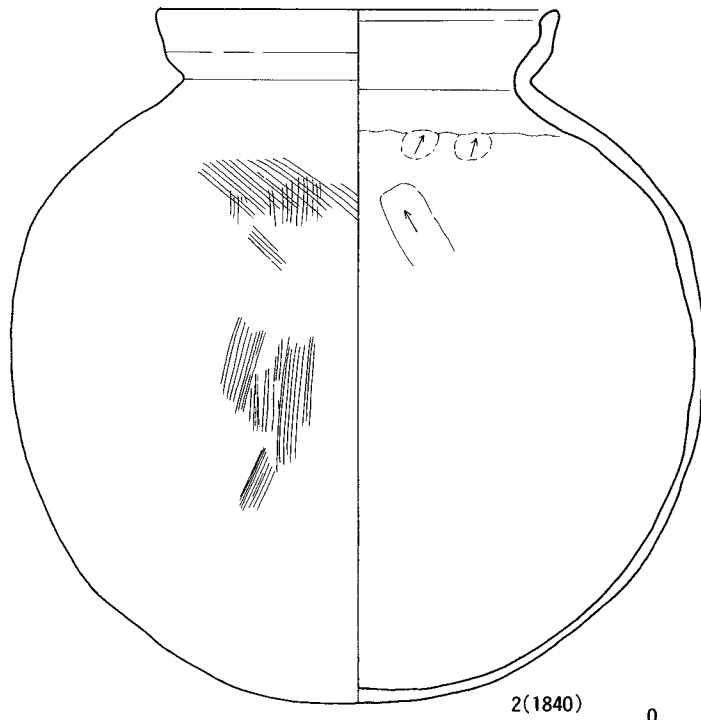
挿図158 甕形土器形態系統概念図



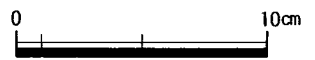
挿図159 土師器 (甕)



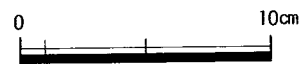
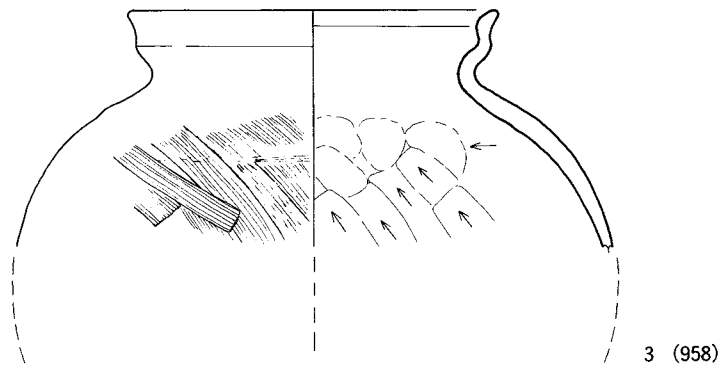
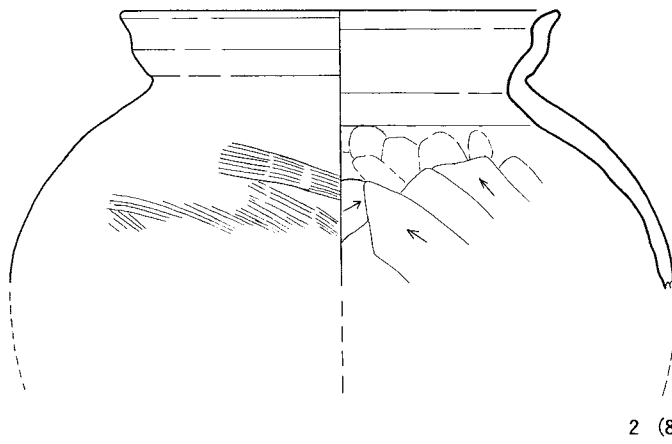
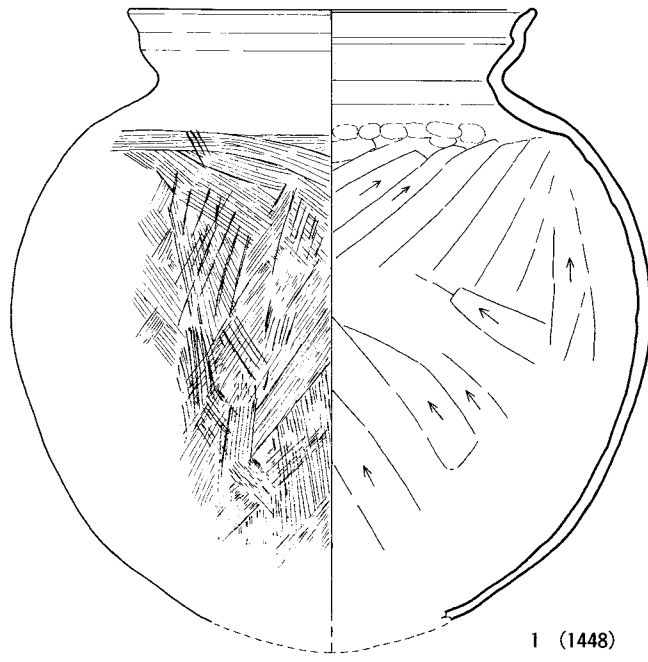
1(955, 1490, 1499, 1512, 1624)



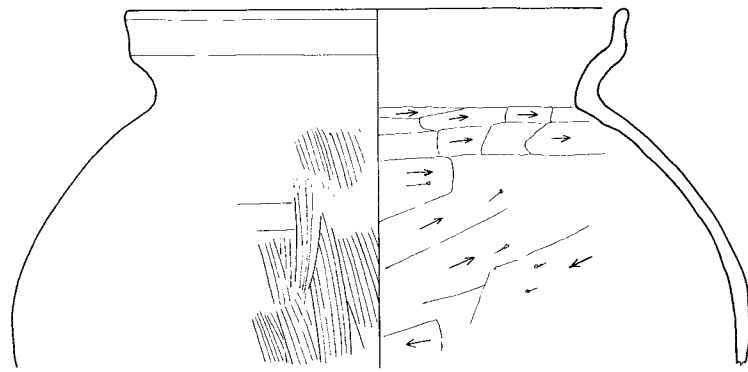
2(1840)



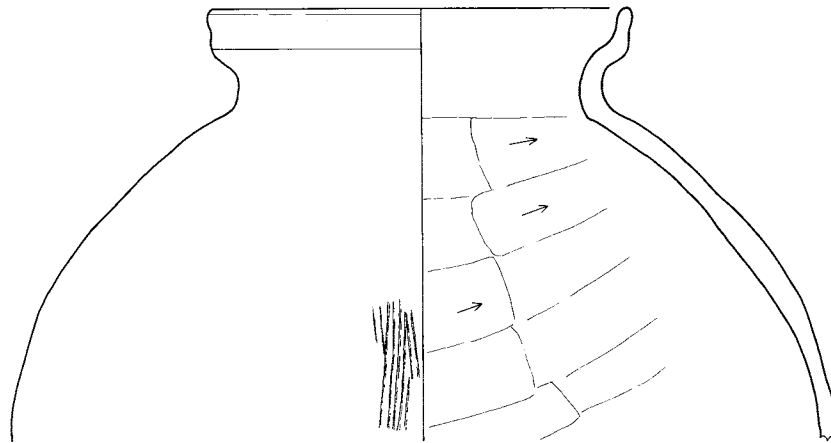
挿図160 土師器(甕)



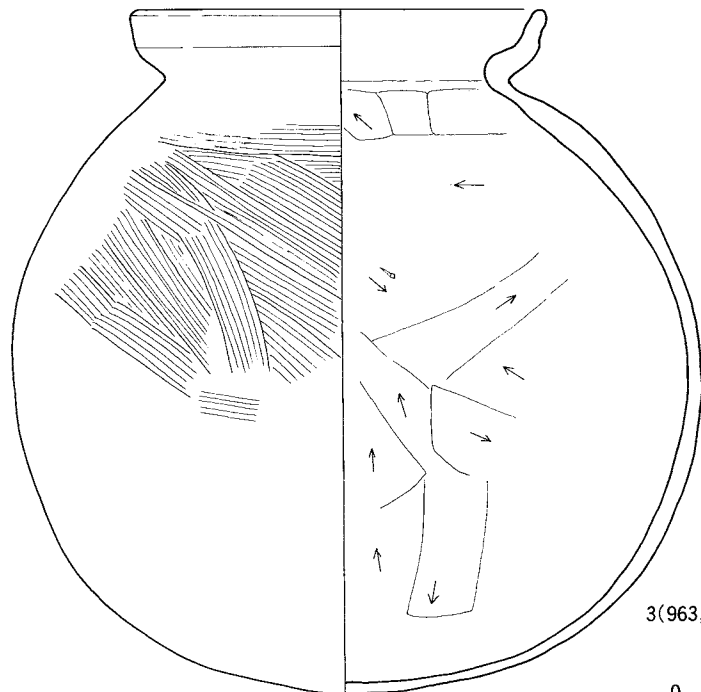
挿図161 土師器(甕)



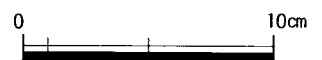
1(1518, 1532, 1625, 4090)



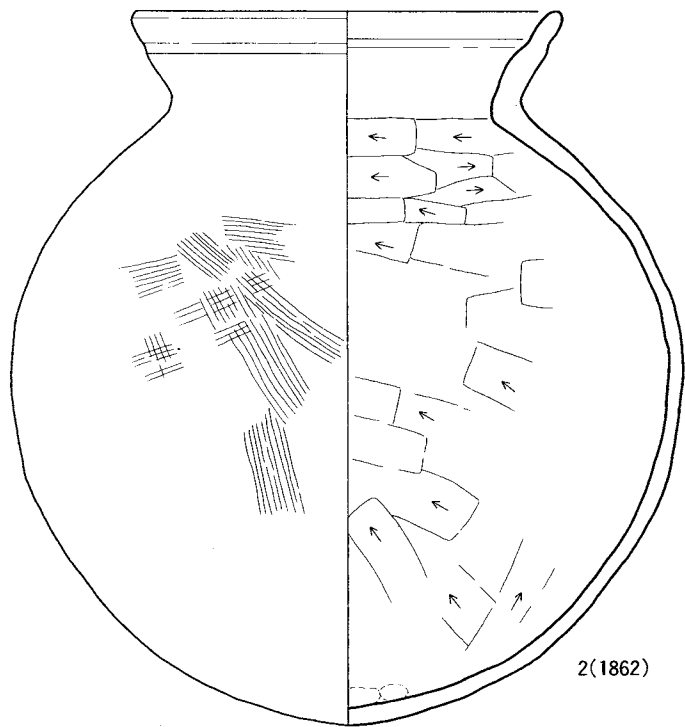
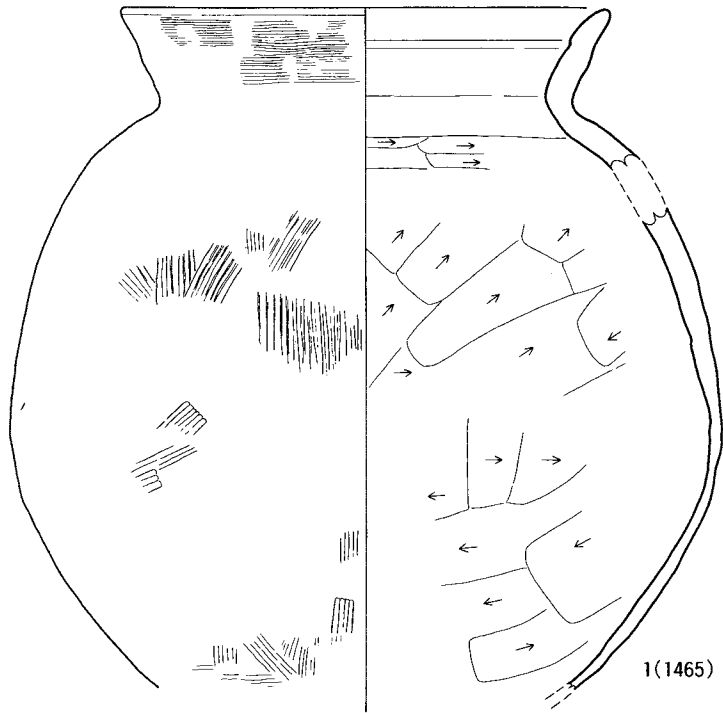
2(2867)



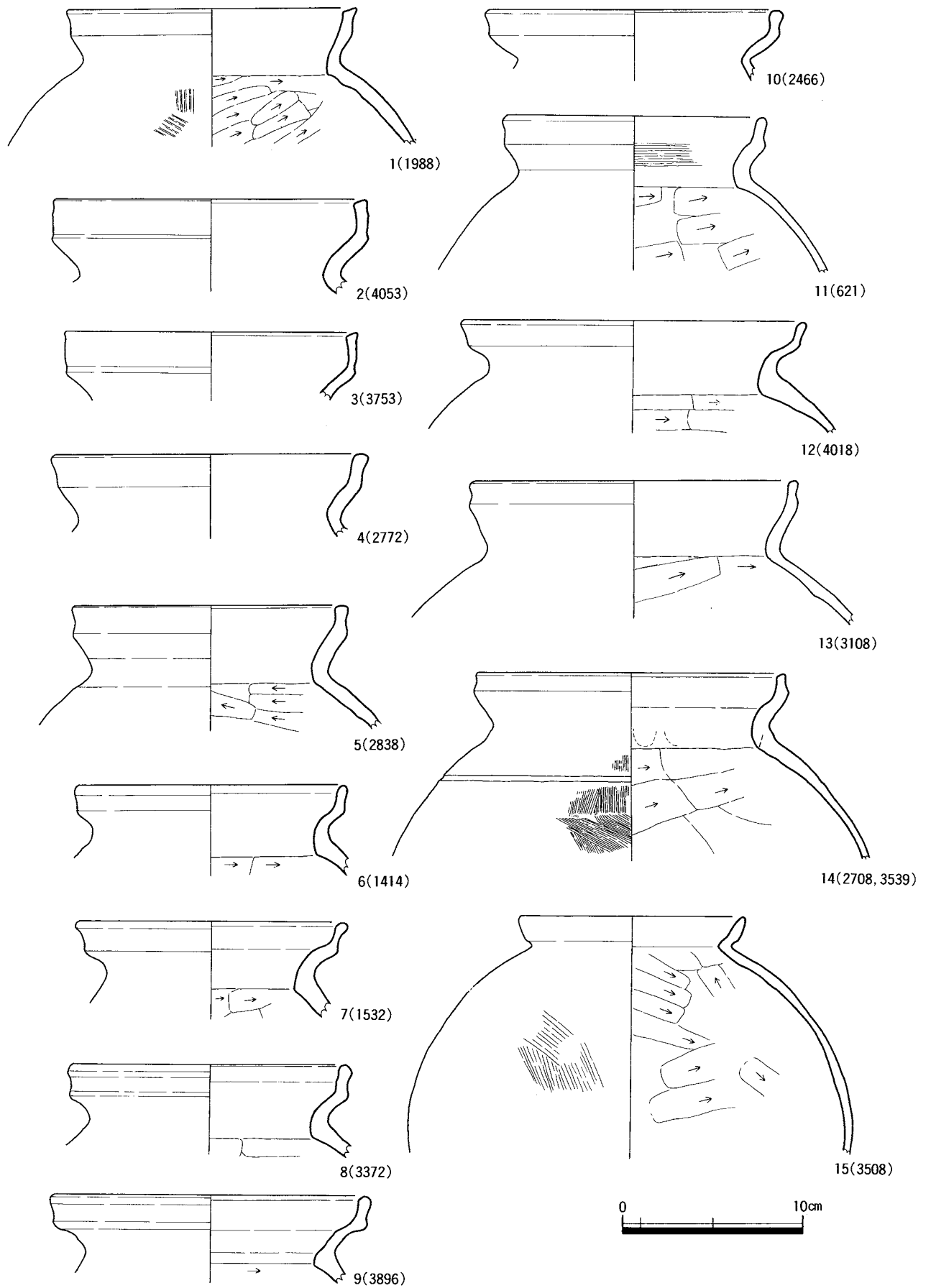
3(963, 968)



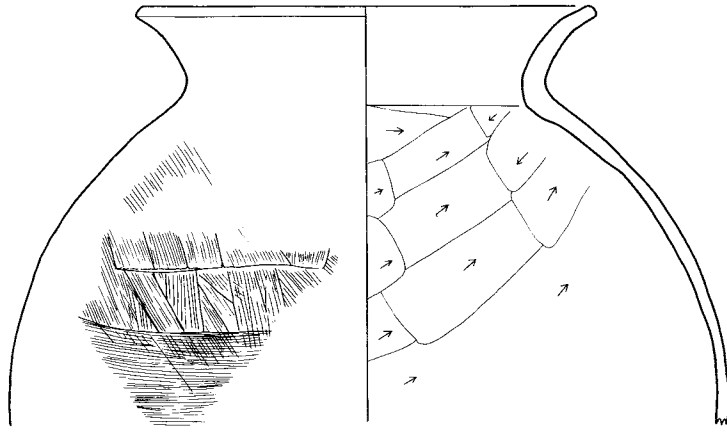
挿図162 土師器 (甕)



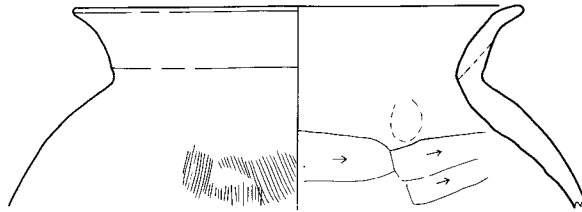
挿図163 土師器 (甕)



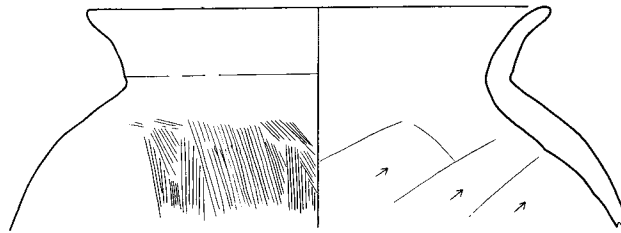
挿図164 土師器(甕)



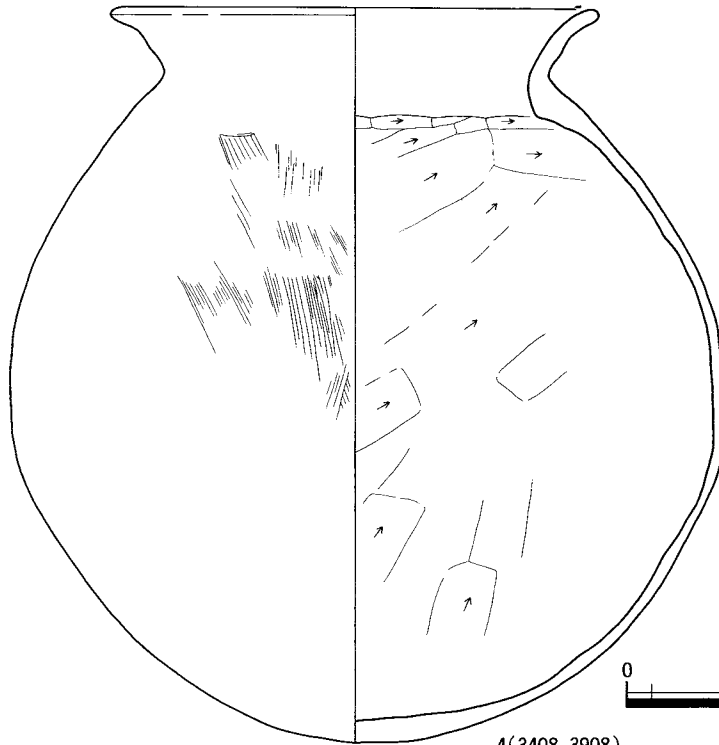
1(1462, 1483, 1518, 1671)



2(1538)

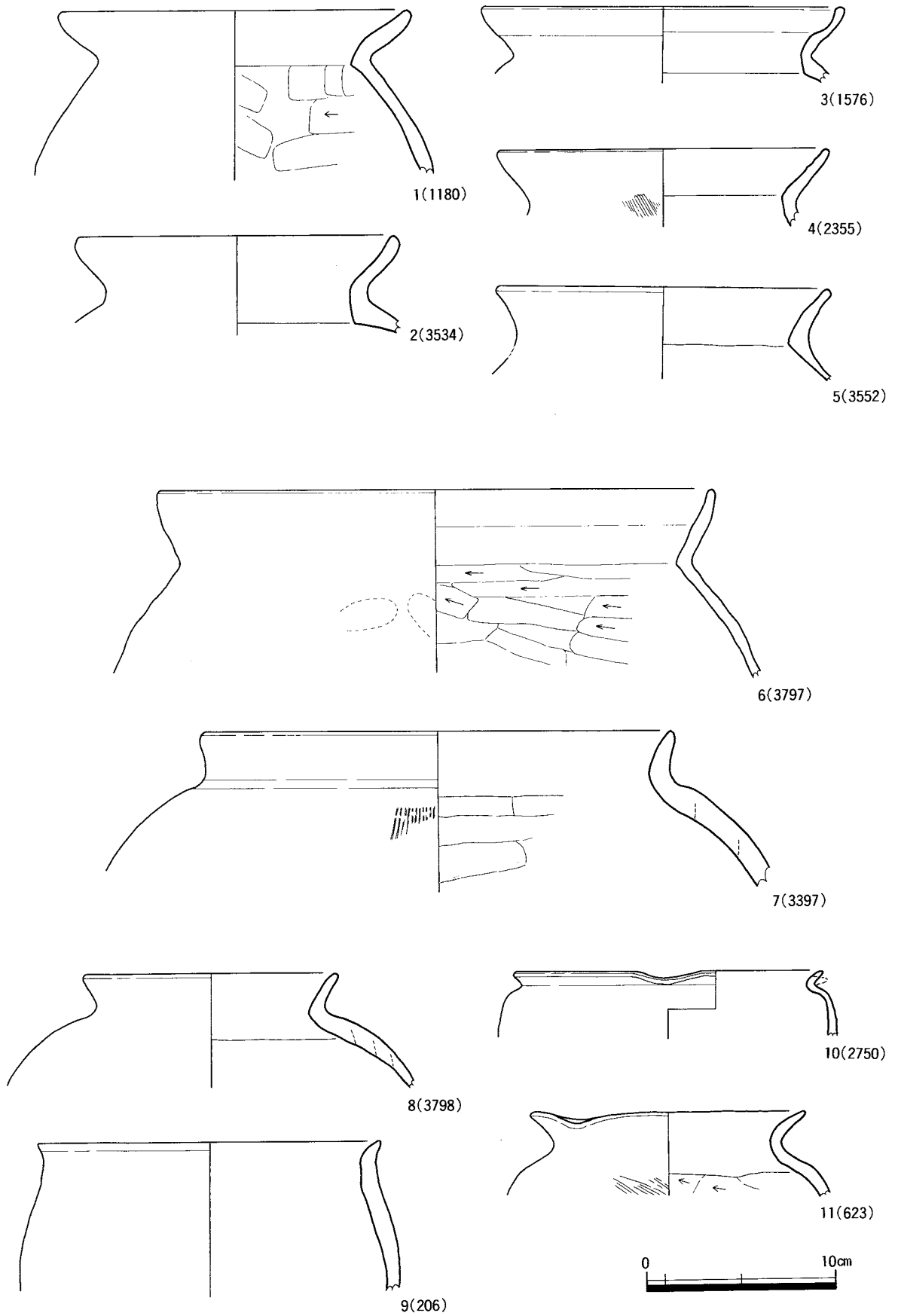


3(4096)



4(3408, 3908)

挿図165 土師器(甕)



挿図166 土師器(甕)

1・2)、肥厚せずわずかに内側に屈曲させるもの (b : 3~6)、丸く収めるもの (c : 7)、外側につまみ出すもの (d : 8) などがある。

B a~c は概ね青木VII、B d は青木VIIIの範疇と思われる。

甕C (挿図164-2・3等) 直立気味の複合口縁で、複合部は突出せず上向きに屈曲し段をなす。端部は平坦で水平気味である。肩の張る球状の体部を持ち、壺との区別が着かないものもある。青木VIIIに該当すると思われる。数は少ない。

甕D (挿図164-1) 稜が丸く退化した複合口縁。立上がりは短く直立気味で端部は面取りし平坦。甕Cと甕E・甕Fの中間形態。青木VIIIに該当すると思われる。やはり数が少ない。

甕E (挿図160-2, 162) 稜が丸く退化した複合口縁。立上がりは短く直立気味で端部は丸い。立上がり高1.5~2.0cm。口頸下部が長く撫肩・下膨れ気味の体部をもつE a (162-1・2)、口頸下部が短く胴張りの球状体部をもつE b (160-2)、口頸下部が短く撫肩・下膨れ気味の体部をもつE c (162-3)、口縁部が退化し縮小化したE d (164-15) などがある。外面はハケメ調整、内面は頸下までヘラケズリ。160-2は口径14.8×器高28.3cm-最大胴径27.4cm。162-3は16.0×27.8cm-27.6cm。

甕F (挿図160-1・161) わずかに外傾する退化した複合口縁で、口唇部を外方につまみだし緩かなS字状をなす。端部は先細る。胴部は肩の張る球体であるが粘土帯の単位が残りやや角張る。最大胴径は中位やや上部にくる。内面頸部下は指頭圧痕、以下は斜・横のヘラケズリ。160-1・161-1はほぼ完形。160-1は口径17.2×器高(推)20.3cm-最大胴径28.8cm。161-1は16.0×(推)26cm-25.5cm。^(註4)

甕G (挿図163) ハの字に開く口縁で、口唇部はつまみだしてやや細り、下部が膨らむ。端部は丸い。胴部は球体であるが粘土帯の単位が残りやや角張る。最大胴径はほぼ中央にくる。163-2は完形で、口径16.8×器高29.0cm-最大胴径26.8cm。内面頸部以下四段階のヘラケズリで、上位1/4ヨコ・下位3/4タテヘラケズリ。

甕H (挿図165) 外反・外傾する口縁で、口唇部を強く屈曲させ外側につまみ出す。端部は丸い。基部が緩かな膨らみをもつ。胴部は撫肩の球体で最大胴径は中央にくる。165-1は完形。口径19.6×器高29.6cm-最大胴径28.8cm。

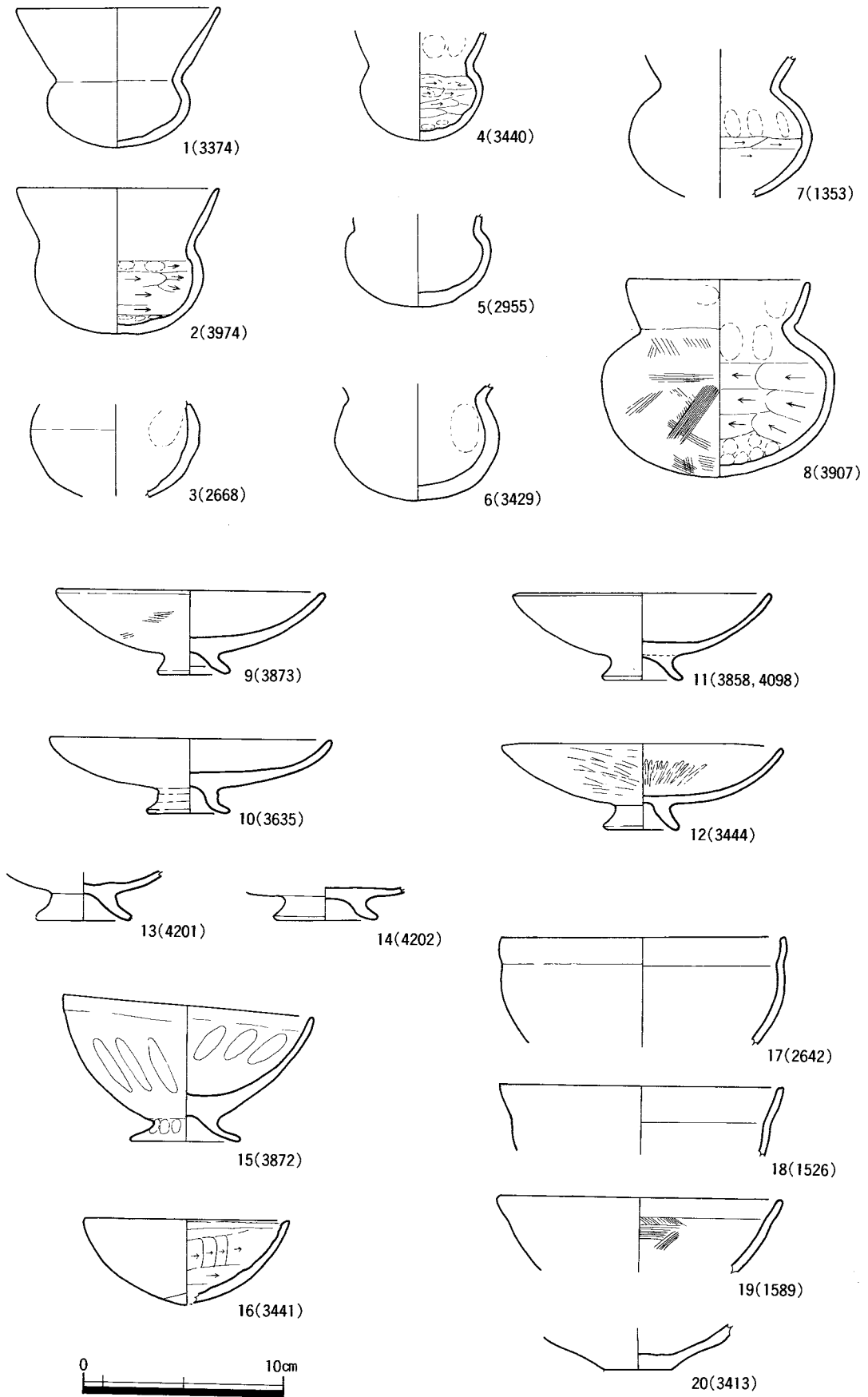
甕I (挿図166-5・7~9等) 外反・外傾して開く口縁で端部は先細る。頸部内側をつまんで稜をなすもの、頸胴部の境界不明瞭で丸いもの、口縁の長・短、体部の形状など多種があるが一応一括しておく。多くは後期後半以降に属するものである。

高坏 (挿図167・168)

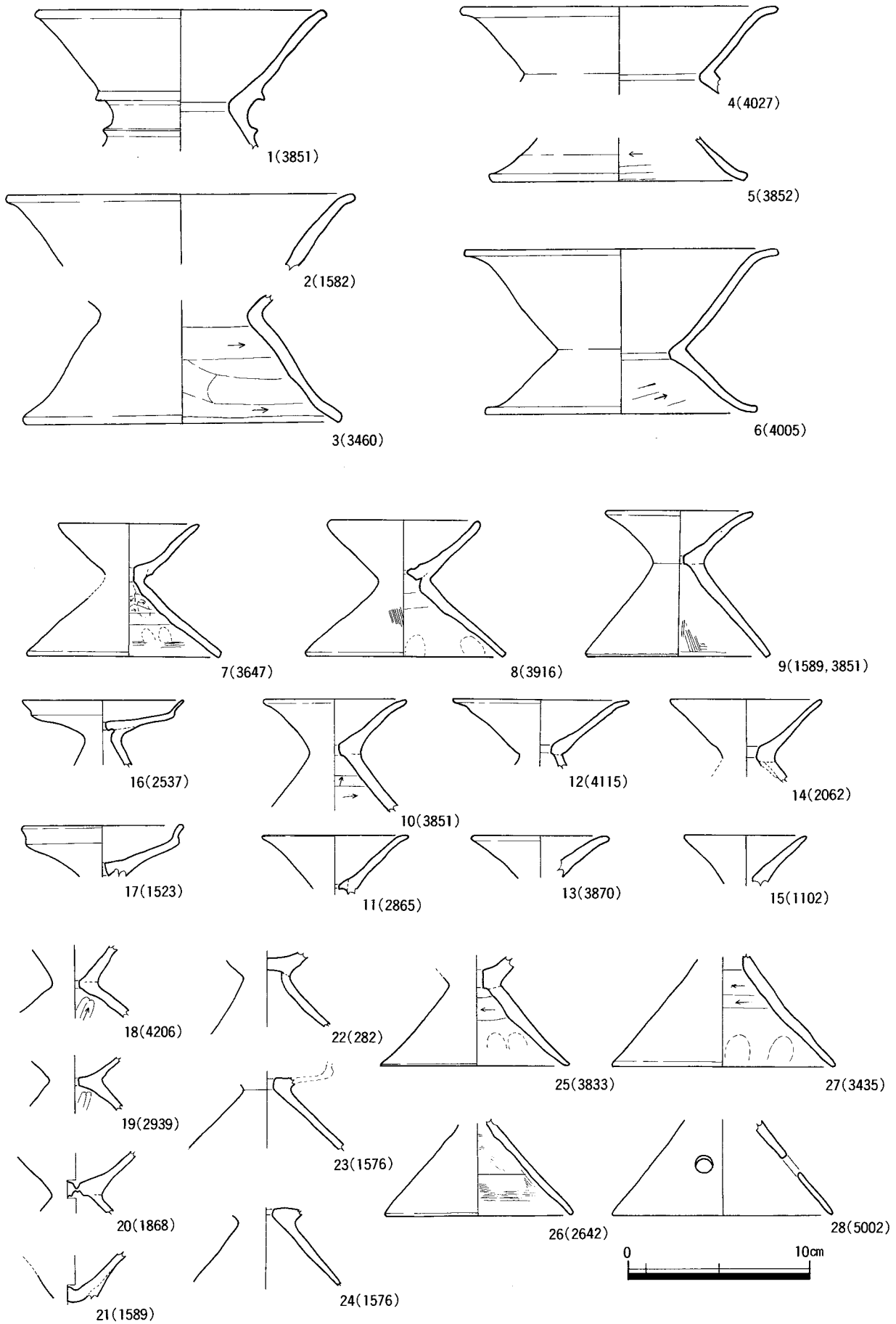
A~E類の5類に分類した。A類は青木VII、B類は8・9が青木VII、10~12が青木VIII、13・14が青木IX、C・D・E類は青木IX~Xに該当すると思われる。

A類 (挿図167-1~7) わずかに外反して開く浅鉢状の坏部で、脚は高く円筒状。ナデあるいはヘラミガキ調整。

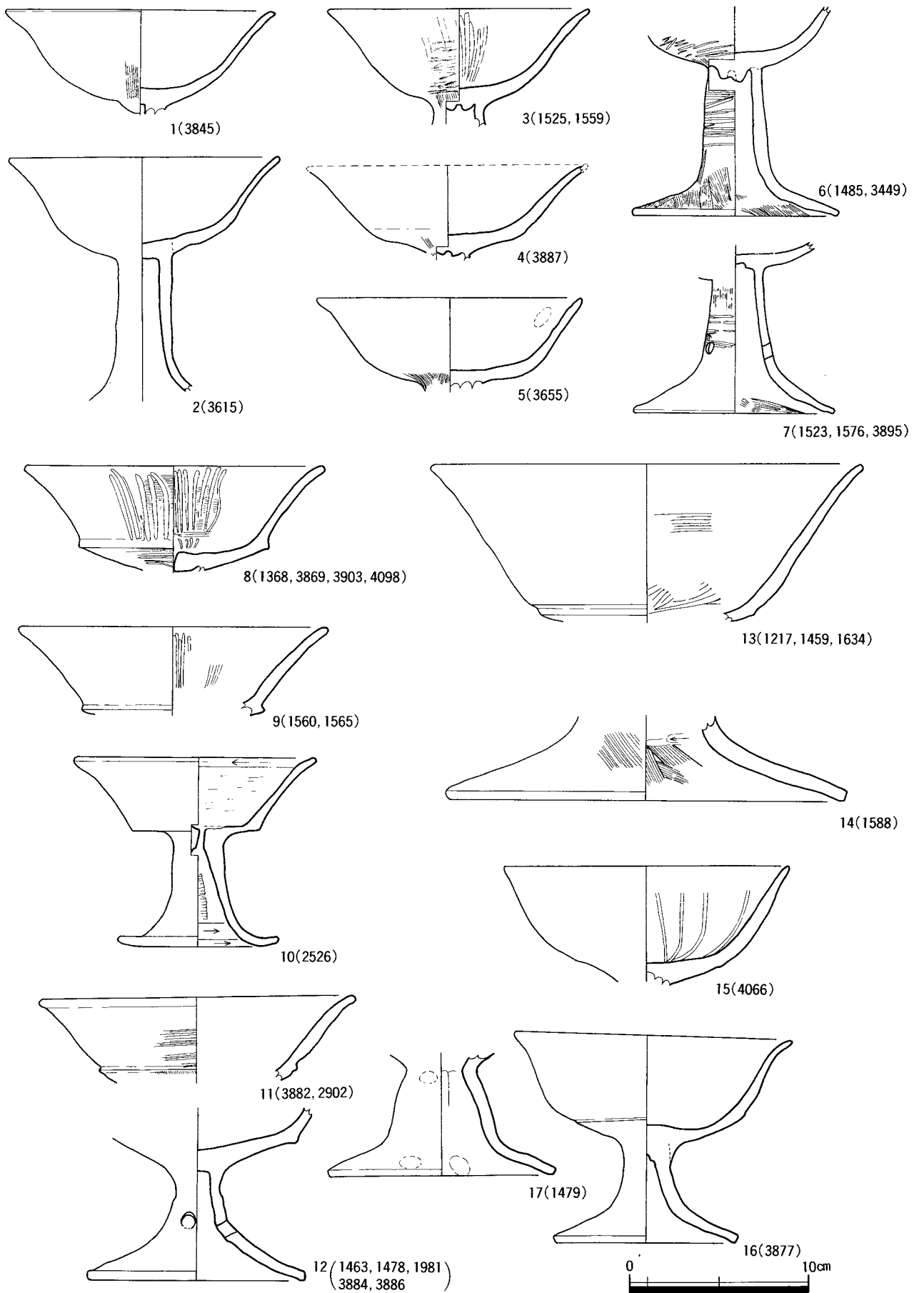
B類 (a : 小形167-8~12、b : 大形167-13・14) 底部が屈曲して段・稜をもつ。赤褐色~淡褐色を呈し、胎土は緻密、やや硬質。8・9・11は内外面ヘラミガキ調整。



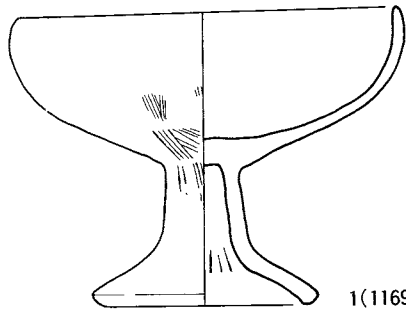
挿図167 土師器 (小型丸底壺・低脚坏・小鉢)



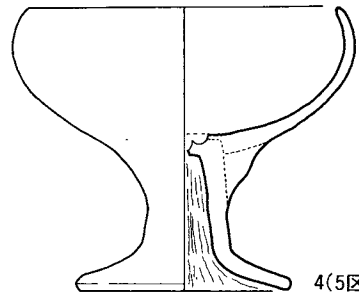
挿図168 土師器 (器台・小型器台)



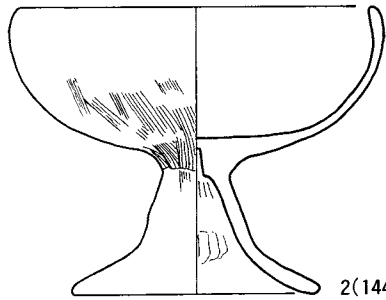
挿図169 土師器 (高坏)



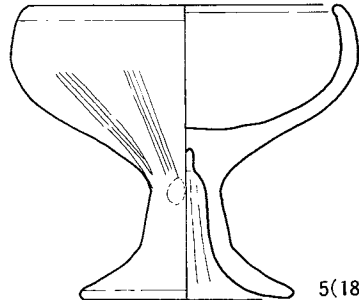
1(1169)



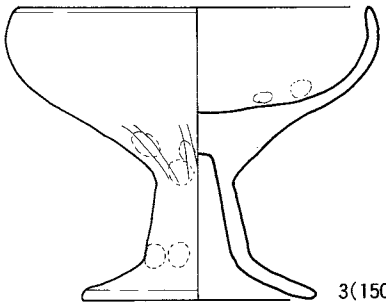
4(5区)



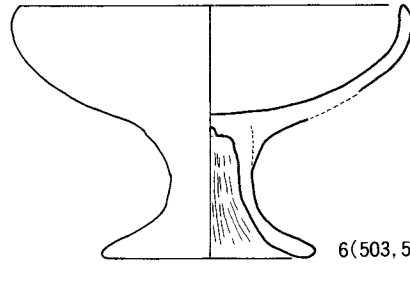
2(1444)



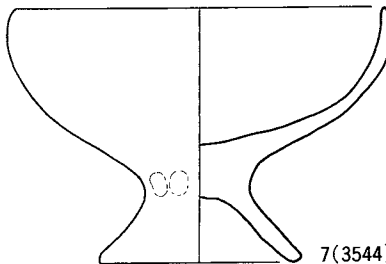
5(180)



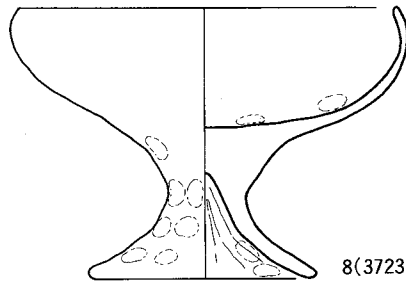
3(1505)



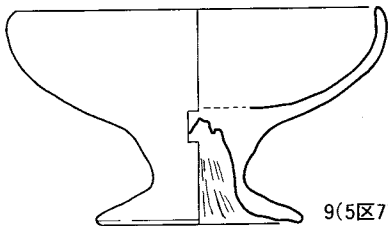
6(503, 563)



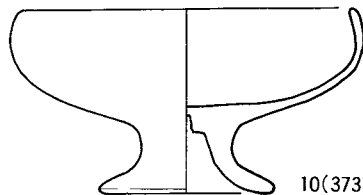
7(3544)



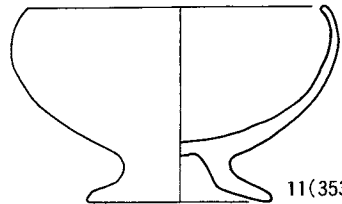
8(3723)



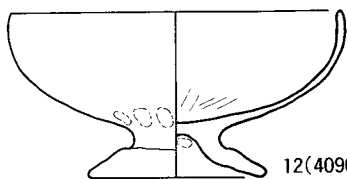
9(5区7W1)



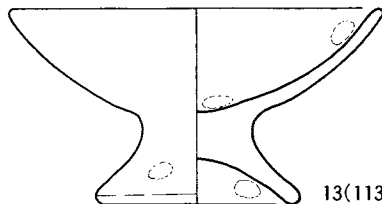
10(3737)



11(3538)



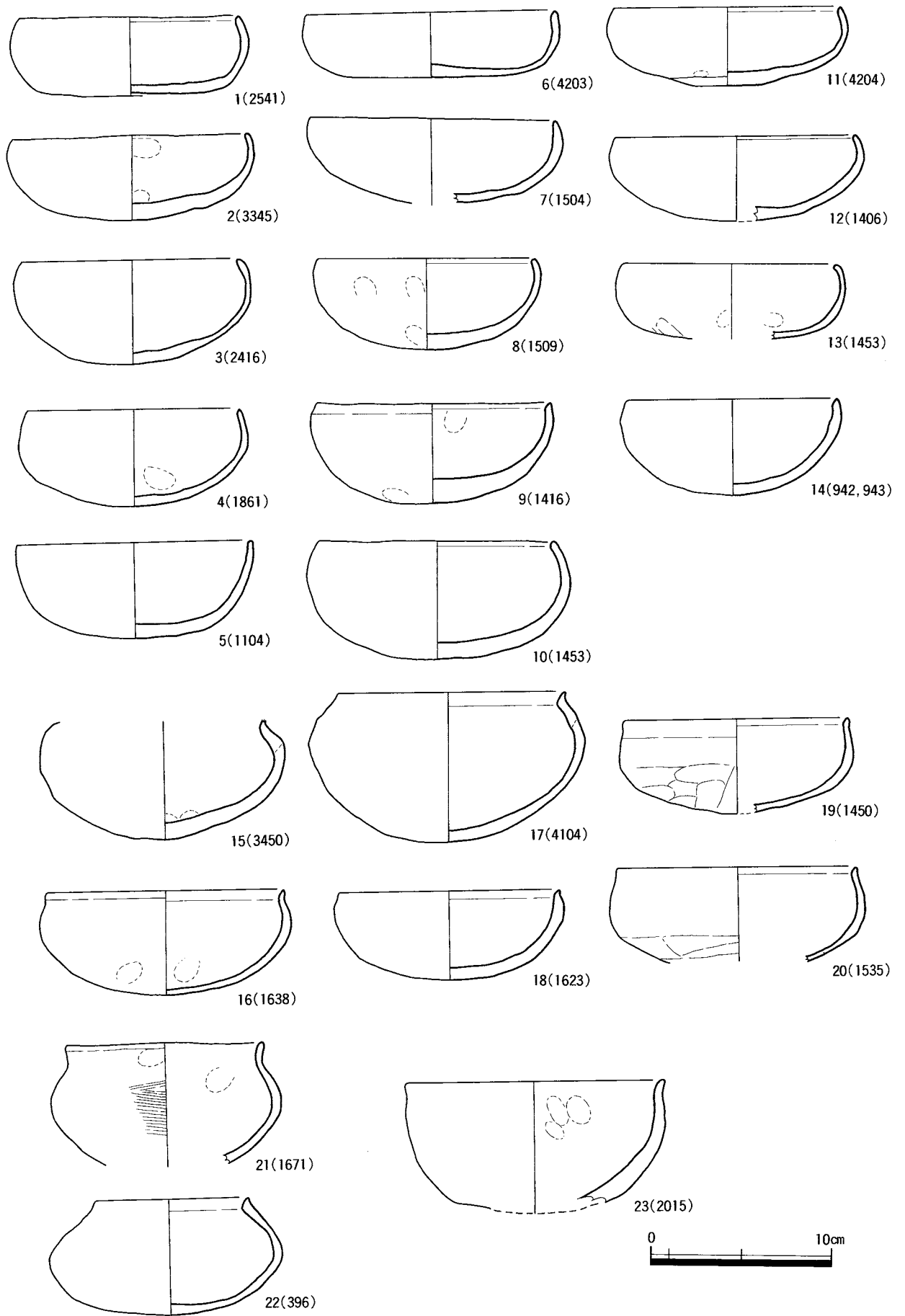
12(4090)



13(1133)



挿図170 土師器 (高坏)



挿図171 土師器 (埴)

C類(167-15・16) 深めの坏部で稜が退化して丸みをもつ。乳白色を呈し、胎土は緻密、やや軟質。15は内面に放射状暗文をもつ。

D類(168-1~8) 碗形の坏。乳白色~淡灰褐色を呈し、洗練された緻密な胎土、軟質。

E類(9~13) 低脚の坏。9~12は坏部碗形・13は浅皿状で、脚は直線的にハの字に開く。色調・胎土・焼成はD類と同様である。

小型丸底壺・低脚坏・小型鉢(挿図169)

小型丸底壺(1~8) 口縁が逆ハの字状に大きく開き、口縁径・口径高が体部径・体部高より大きい**A類**(1)、口縁が逆ハの字状に開き、口縁径は体部径より大きい、口縁高が体部高より小さい**B類**(2)、口縁が逆ハの字状に大きく開き、口縁径と体部径がほぼ等しい**C類**(推定・7)、口縁が直口気味に短く開き、口縁が体部より小さい**D類**(8)などに分類できる。4~6はB類と思われる。

1は口径10.0×器高7.2cm、口頸比(頸径÷口径)0.63。内外面共ナデで丁寧に仕上げる。2は口径10.0×器高7.4cm、口頸比0.74。外面ナデ仕上げ、内面は横ヘラケズリで底部と口頸部に僅かに指頭圧痕が残る。8は口径8.8×器高7.6cm、口頸比0.87。外面ハケメ、内面横ヘラケズリ、底部と口頸部に指頭圧痕が残る。

A類は青木VII、**B・C類**は青木VII~VIII、**D類**は青木IXに該当する。

低脚坏(169-9~14) 浅い皿状の坏部に小型の脚が付く。口径12.5~14.0cm×器高4.2~4.5cm、丁寧に作りでナデあるいはヘラミガキで仕上げる。一般に「低脚坏」とされているものであるが、坏部に対して脚部が小さく(径3.3~4.0cm)、「蓋」の可能性もある。

小型鉢(16~20) 口縁部が屈曲して段をなし小さな平底をもつ**A**(17~19)、碗形で底部尖底の**B**(16)、碗形で低脚を持つ**C**(15)の三種がある。**A**は口径約14cm、丁寧に作りで磨きないしナデで仕上げる。乳褐色を呈し焼成は良好。**B**は口径10cm×器高5.7cm、作りはやや雑で内面にヘラケズリの痕が残る。乳白色を呈し焼成は良好。**C**は口径12.5cm×器高8.0cm、口縁部ヨコナデ、内外面に指頭圧痕が残る。淡褐色~黒褐色を呈し、やや軟質。

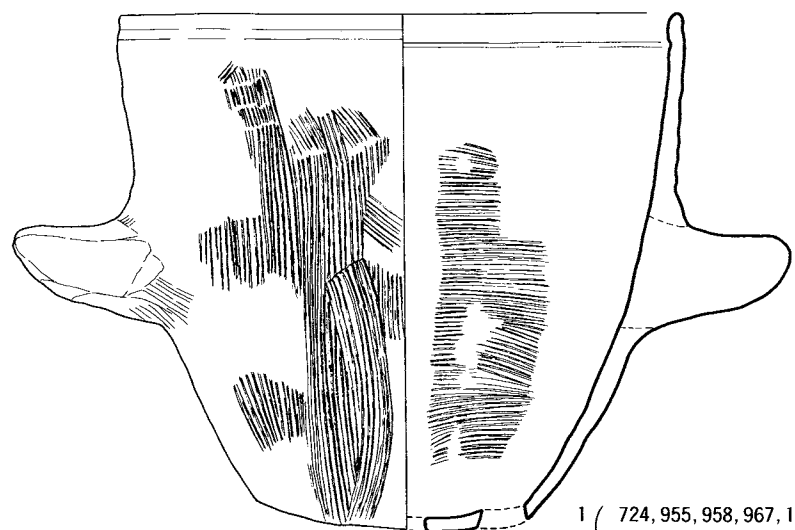
器台(挿図170)

鼓形器台(1~6) 稜を持つ**A類**(1)と、退化し稜がない**B類**(2~6)がある。**A類**は少なく**B類**が主体を占める。前者は稜の間隔が広く、脚部の立上がりも高く青木V・VI~VII古、後者はVII新に該当する。

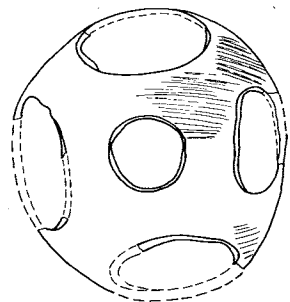
小型器台(7~28) 研石山遺跡5区出土のもの全てを図化した。器受部と脚部が漏斗状に開く**A類**と、口縁の屈曲する浅皿状の受部の**B類**がある。**A類**が大半を占め14個体+ α 、**B類**は少なく2個体+ α である。**A類**器受部はミガキないしナデ、脚部は内面上部ヘラケズリ、裾部指頭圧・ハケメ。**B類**内面底ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ。円孔脚部28は**B類**に伴う。いずれも青木VIIに該当するが、**B類**はやや新しく、青木VII新の段階に位置付けられる。

碗形土器(挿図171)

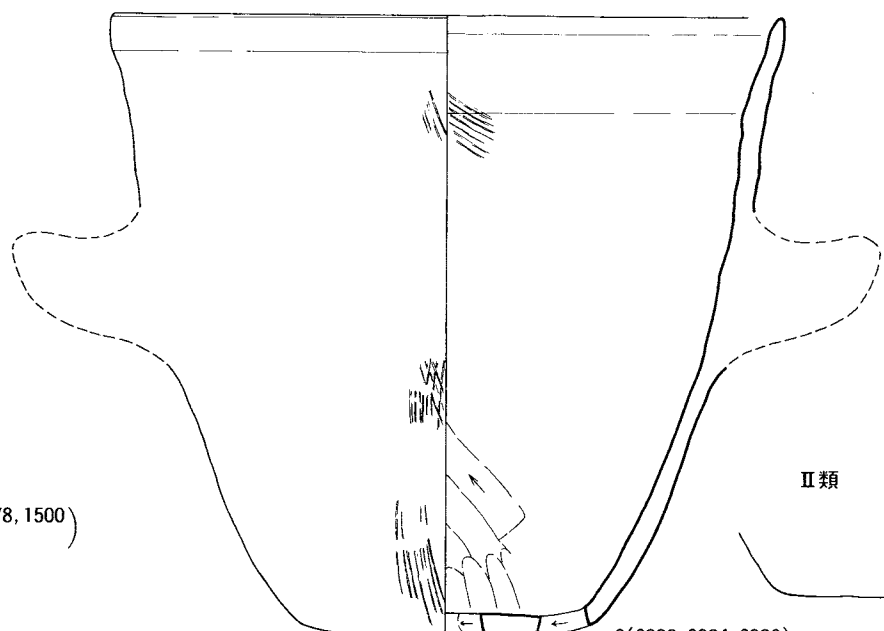
青木のIX・Xに該当。内湾し口縁端部を丸く収める**A類**(1~14)と、端部を屈曲させ外方につまみ出す**B類**(15~23)に分類した。



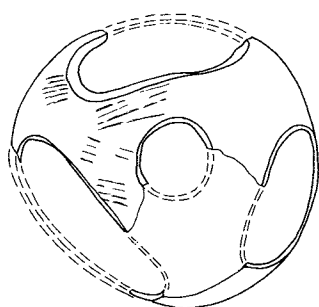
1 (724, 955, 958, 967, 1377, 1378, 1500, 1508, 1512, 1576)



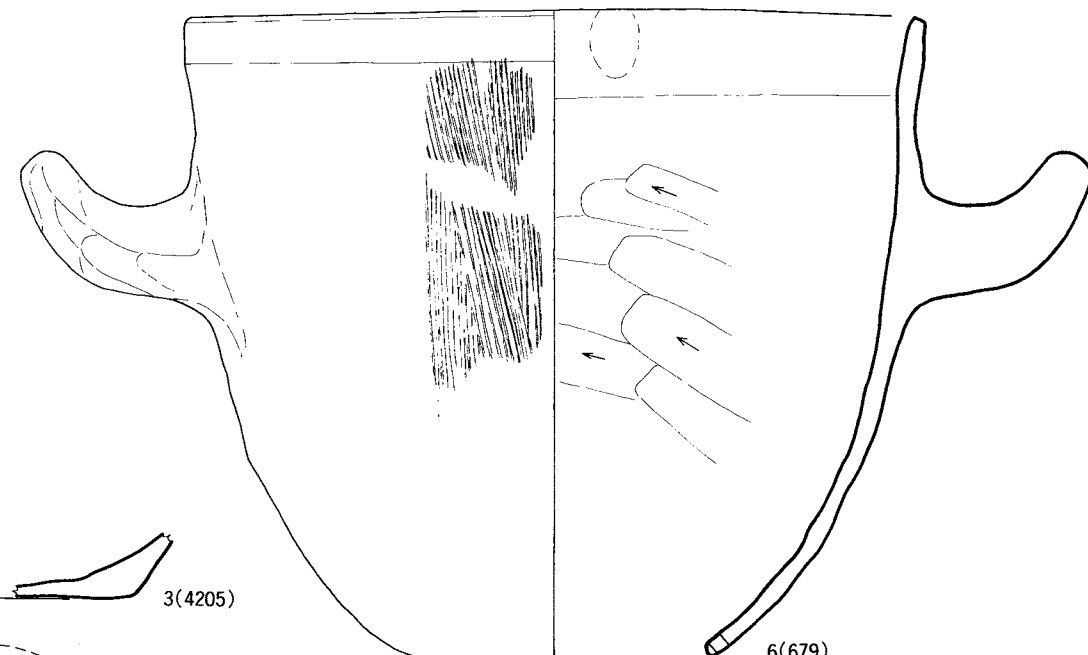
- I類…1・2 (多孔)
- II類…3 (紐帶二孔)
- III-a類…4・5 (一孔・小)
- III-b類…6・7 (一孔・大)



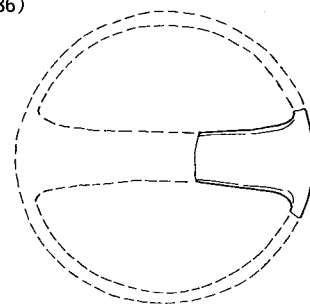
2(3982, 3984, 3986)



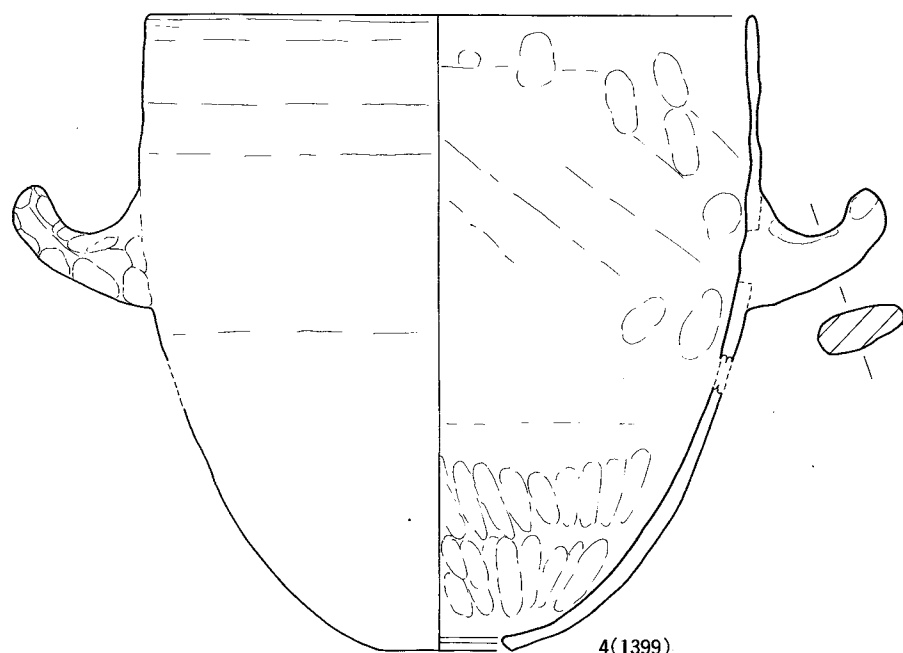
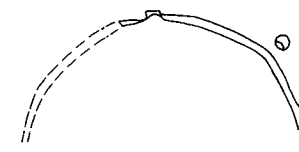
II類



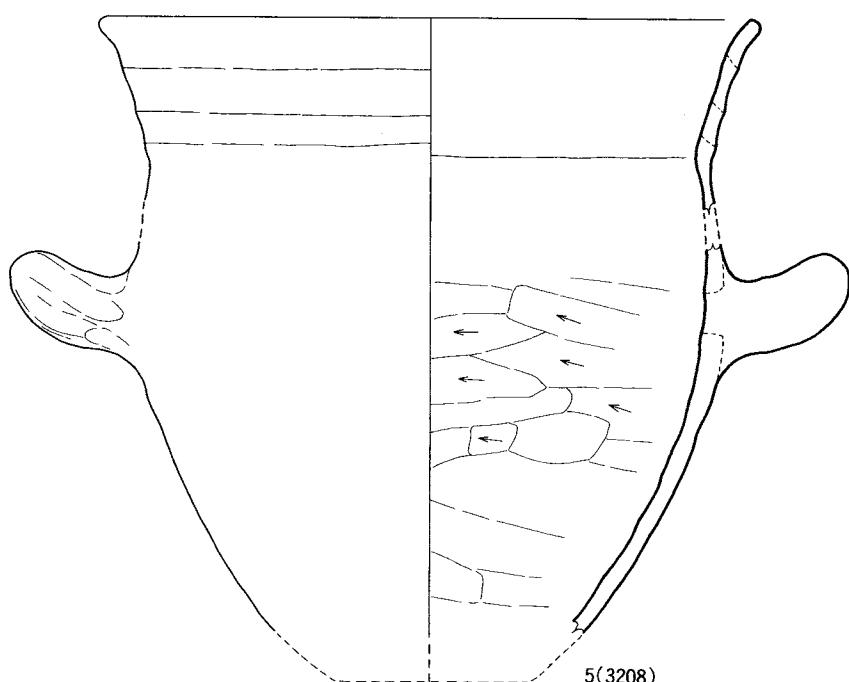
3(4205)



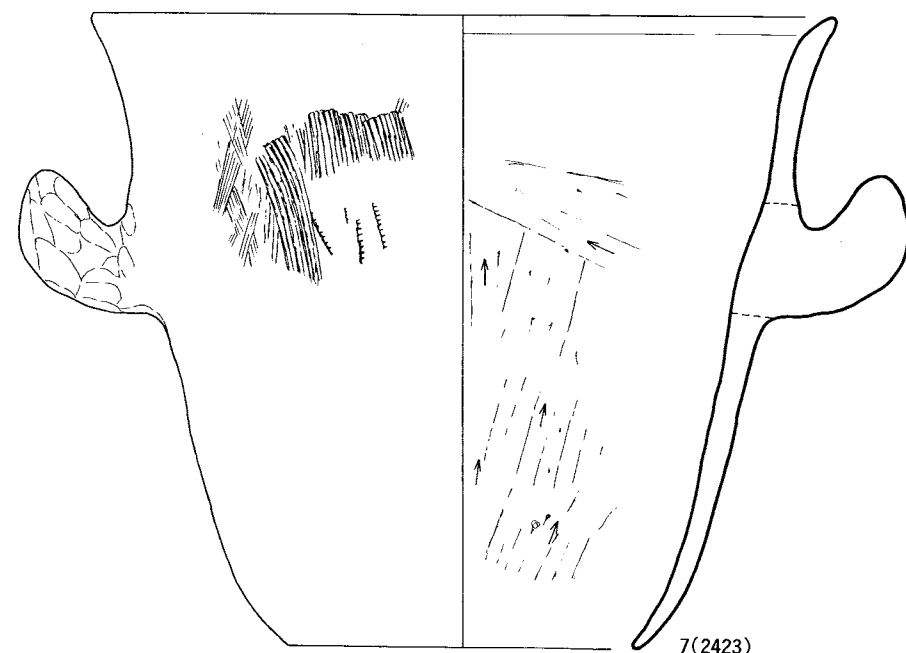
6(679)



4(1399)



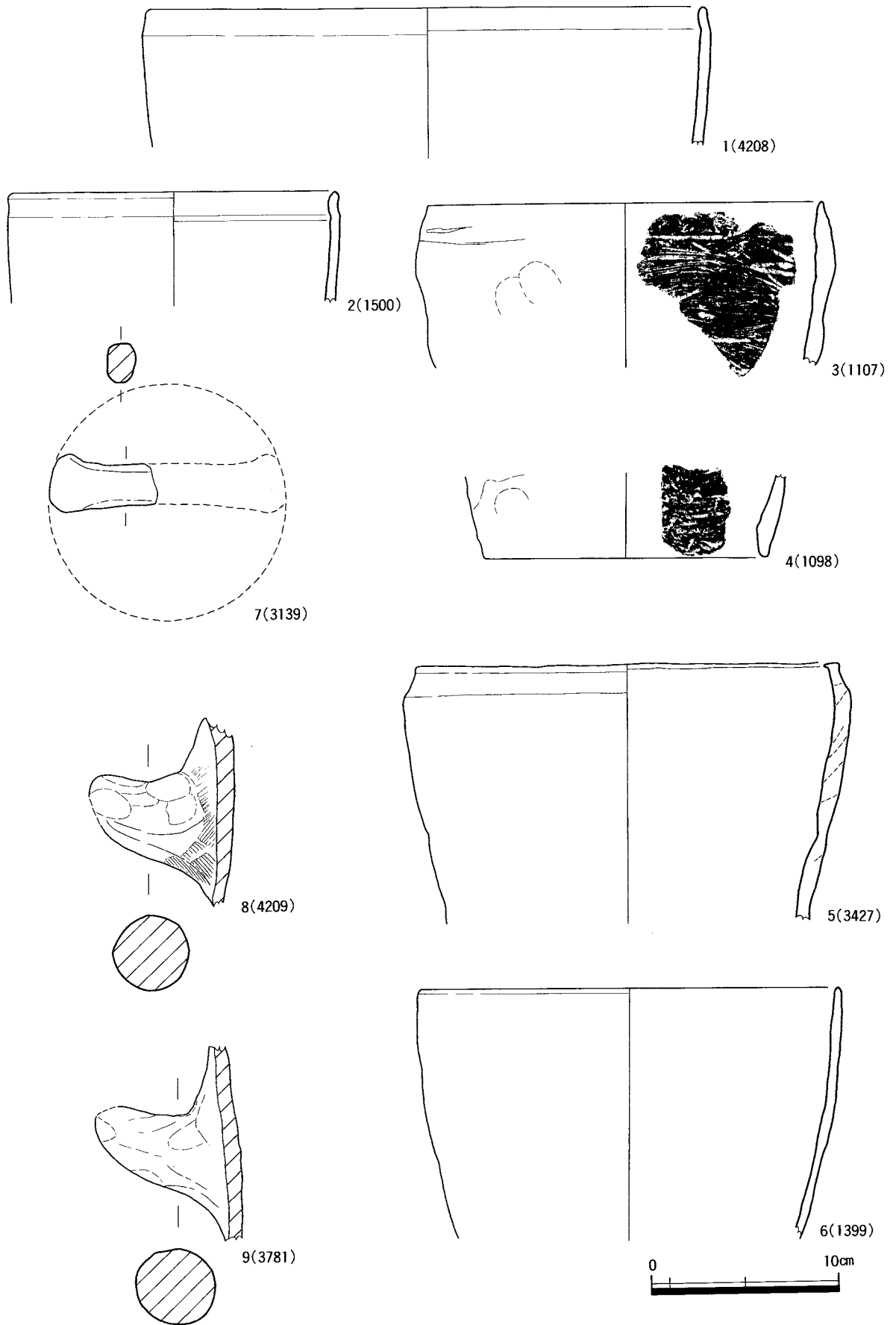
5(3208)



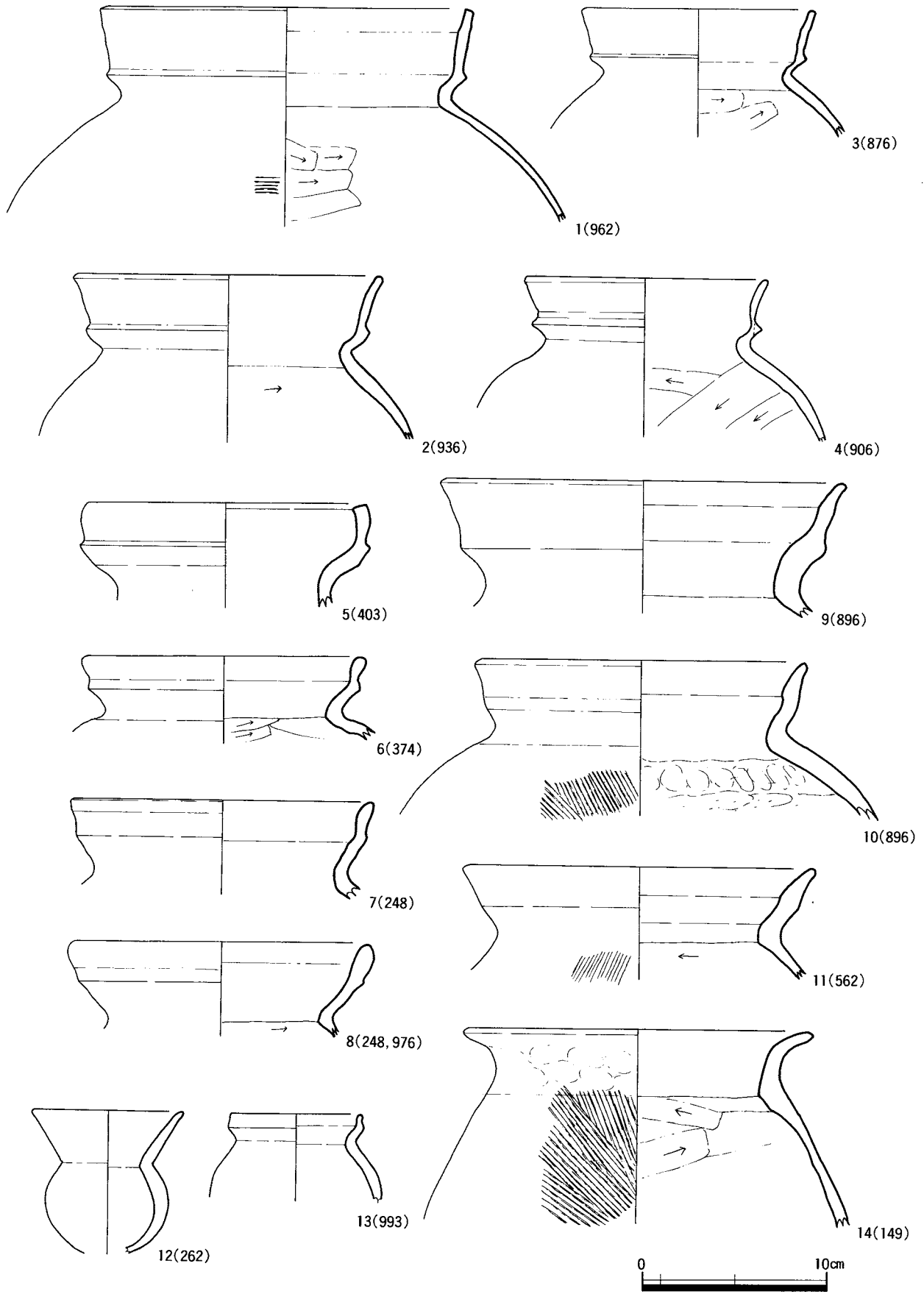
7(2423)



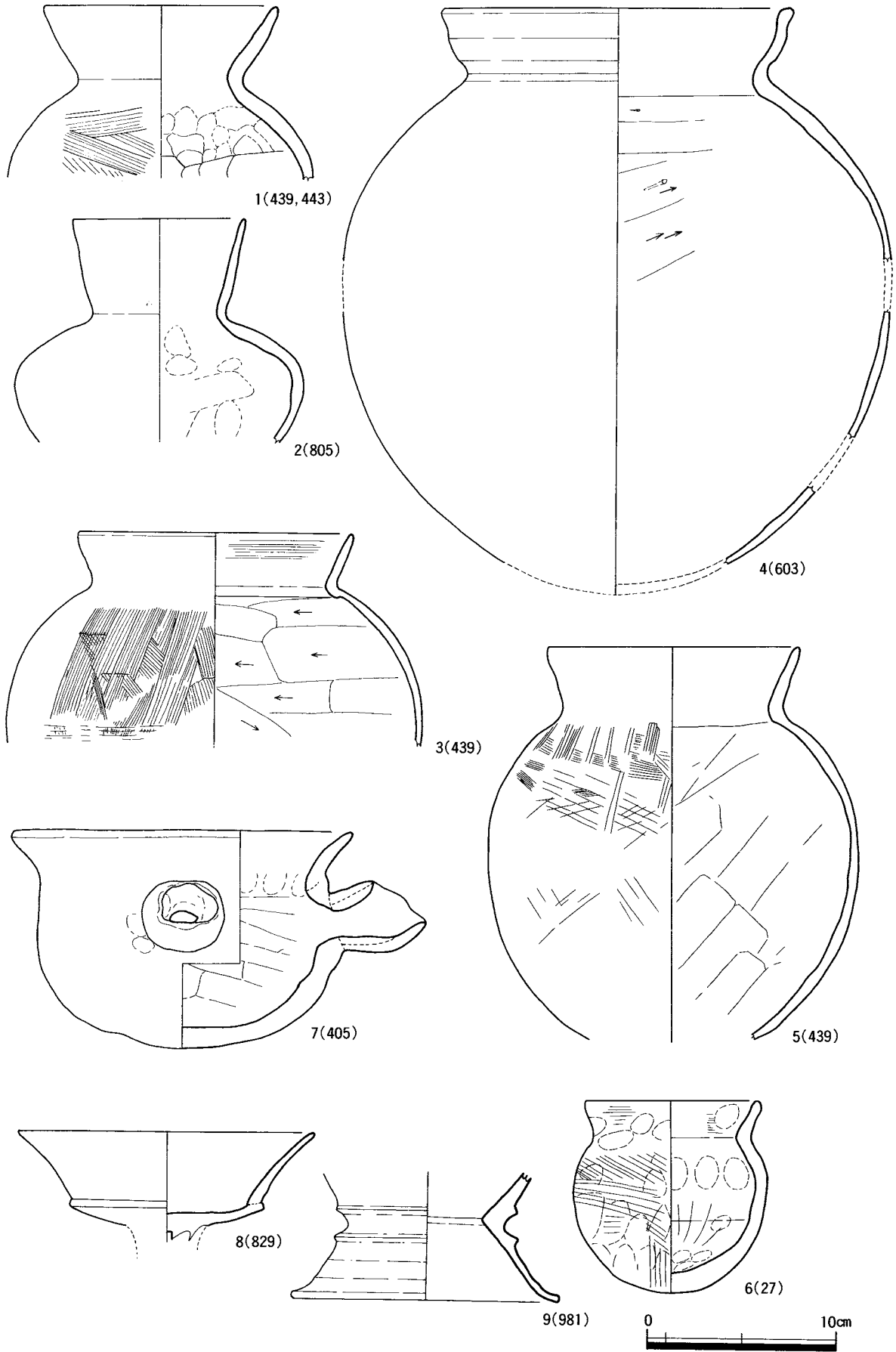
挿図172 土師器 (甗)



挿図173 土師器 (甑)



挿図174 山田遺跡出土土師器 (1)



挿図175 山田遺跡出土土師器 (2)

それぞれに細分され、A類は、底部が丸く手持ちヘラケズリを施すA a類(13)、底部が丸くナデないしは手タタキによって仕上げるA b類(2~10・12・14)、底部が平坦で比較的浅いA c類(1・2)、底部中央が円板状に厚く突出するA d類(11)、B類は、底部が丸く手持ちヘラケズリを施すB a類(19・20)、底部が丸くナデないしは手タタキによって仕上げるB b類(18)、深めのB c類(15~17・21~23)がある。B c類はハケ目を施すものもあり、底部はナデないしは手タタキで仕上げる。A d類は底部未調整か簡略形態と思われる。口径11.5~13cm、器高4.5~5.8cmに集中し、深めのものはB類に多い。研石山遺跡5区では上下二層が認められ、前者はやや硬めで灰白色、後者は軟質で赤茶色。上層では古式須恵器を伴った。

甗(挿図172・173)

口径22~30cm、器高21~26cm程度の大きさで、砲弾形の体部に角状把手が付く。底部の形態では、**I**：多孔(a：中央-1円孔・周囲-4楕円孔、b：中央-1円孔・周囲-3楕円孔)、**II**：2孔(中央紐帯仕切り・両側-2半円孔)、**III**：1孔(a：小孔・紐穴なし、b：底部端部に2個一対の紐穴)の各種がある。形態的にIからIIIへの変遷が考えられるが、時期的には比較的短い間に定型化していくものと思われる。胴部形態では、僅かに内湾して立上がり口縁部が直立気味のもの(172-1・4等)、口縁部を外側に僅かに屈曲させるもの(172-2・6等)、胴体部が口縁下で一旦くびれ、外反して長く延びるもの(172-5)、胴体部が直線的に開き、口縁端部を外側につまみ出すもの(172-7)などがある。

内面調整においてハケ目調整からヘラケズリ調整のみへという簡略化の傾向が認められる。

172-1(底部形態I a類)は全体的にハケ目による仕上げであり外面縦ハケ、内面横ハケ調整。底部にもハケ目が残る。口縁部はヨコナデし、口縁内部に浅い凹線が巡る。続く172-2(底部形態I b類)の内面は、口縁近くの上方のみ横ハケ調整し、以下はヘラケズリ、172-6・7(底部形態III b類)の内面仕上げはヘラケズリのみである。

172-4(底部形態III a類)はユビオサエによる成形を行っており、特に底部内面には顕著に痕が残り、上半はユビオサエ後軽いナデを施す。全体的に薄手で胎土も洗練され緻密である。乳褐色を呈し、やや軟質である。把手断面が扁平であり、他の甗とはやや様相が異なる。

172-5(底部形態III b類-推定)は口縁及び頸部下ヨコナデ、以下体部3/4は内面横ヘラケズリ。外面はハケ目調整と思われる。研石山遺跡5区第2テラス出土。7世紀前葉。

赤色塗彩土器(挿図195)

下山遺跡で集中して大量に出土したほか、山田遺跡でも若干見られた。高坏・坏(皿)・鉢等がある。胎土は緻密で乳白色~乳褐色を呈し、焼成は甘く軟質。高坏(1~4)は薄手で、脚柱部は八角に面取りする。坏・皿類は口径で12cm台、14~16cm台、18~20cm台の三種があり、また、高台を持つ5~7と高台の無い8~17がある。暗文は見られない。高々台の皿6と坏8はロクロ回転成形である。奈良時代後半期を主体とするものである。

移動式竈(挿図208)

移動式竈は付け底式である。口縁体部や、庇、焚口形態等により分類される。

I類(1・2) 甕形土器の上半分が大形化した形態で、口縁端部が大きく屈曲外反し肩が

張る体部を持つ。小振りの庇が焚口上部のみに付く。焚口は上が細く台形である。

Ⅱ類（3）は、肩の張る体部であるが口縁の反りが少なく、焚口の両側部を補強し庇が全周する。焚口は方形である。

Ⅲ類 口縁部が直立気味で張りの少い寸胴の体部を持つ。焚口両側部を補強し庇が全周する。

Ⅳ類（4） 口縁下に鏝状の粘土帯が巡る。焚口は方～長方形である。

遺物の共伴関係から、概ね、Ⅰ類はTK208～23、Ⅱ類・Ⅲ類はTK47段階、Ⅳ類は7世紀前葉期併行と思われる。肉厚化、庇の大型化と焚口補強、甕形体部から寸胴へ、内面はハケメ調整を施すものからヘラケズリのみへ、といった変化を追うことができる^(註5)。

土製支脚（挿図98、134等）

（『萱原・奥陰田 Ⅱ』で詳述予定）

山田遺跡1区・2区、研石山遺跡1区・5区、下山遺跡等で出土した。前（内）方に2、後方に1本の突出を持ついわゆる獣（犬）首状支脚であり、内側裾部には2次焼成の痕が見られる。甕と共伴する例もあった（山田遺跡1区、研石山遺跡5区第2テラス）。

注口付鉢形土器（挿図96、175）

2点を確認した。96-9は、研石山遺跡1区SS03（=SB01）出土。くの字に屈曲する口縁を持つ広口の鉢形土器で、頸部下に片口の注口を取付ける。内外面に指オサエ痕が残り、内面はヘラケズリ。淡白褐色を呈し、小粒混りの胎土、焼成は良好である。口径17.2×器高12.5cm。175-7は、山田遺跡1区古代流路出土。やはり、くの字に屈曲する口縁を持つ広口の鉢形土器で、頸部下の胴横に膨らみのある筒状の注口を取付ける。調整・色調等は96-9とほぼ同じである。口径17.5×器高11.5cm。共伴遺物より古墳時代後期のものと思われる。

4. 須恵器（挿図176～194、図版73～75）

形態や出土状況から、大まかに次のような分類ができる。

I期：陶邑（ON46～）TK208～TK47併行期。5世紀中・後葉から6世紀初頭の時期と思われる。大雑把ではあるが、TK208までと以降とで古（I-1）・新（I-2）の差異が見られる。TK47は陰田1に併行する。

Ⅱ期：陶邑MT15～TK209・TK217併行期。**Ⅱ-1**：MT15～TK10・陰田2～3併行（6世紀前葉～中葉）、**Ⅱ-2**：TK43～TK209・陰田4～5併行（6世紀後葉～7世紀前葉）、**Ⅱ-3**：（TK209）TK217・陰田6～7併行（7世紀中葉）に分かれる。

Ⅲ期：返りのあるものから消失するものまで。底部糸切りの坏が多い。回転糸切がほとんどを占め、静止糸切は少ない。**Ⅲ-1**（飛鳥・奈良時代初期）、**Ⅲ-2**（奈良時代後半期）、**Ⅲ-3**（平安時代前期）に分かれる。**Ⅲ-1**は陰田9、**Ⅲ-2**は陰田10に併行する。

I期の須恵器（挿図176～184、図版72・73）

山田2号墳、山田遺跡1区土器溜り（挿図23）・2区住居跡、研石山5区の住居跡・谷部土器溜り等で出土した。壺・甕・蓋坏・有蓋高坏・無蓋高坏・大型高坏・罎・大型罎などがある。

形態的に退化傾向の見られるものもあるが、概ね陶邑須恵器編年のⅠ期の範疇に収まるものである。研石山5区は中心的位置を占め、量も多くまとまって出土した。陶邑ON46型式併行も見られ、やや古い段階から全般的に存在する。山田2号墳はTK208併行、山田遺跡はTK23～47併行期が主流を占める。古段階（Ⅰ-1）では陶邑領域が多く、新段階（Ⅰ-2）では陶邑領域のほかに地元の門生・大井領域が増える傾向を見せる。（特論1・2参照）

蓋坏・高坏（挿図23・176～181）

蓋（挿図23・176・178・180） 口径・器高・立上りの比率（挿図209参照）や天井部・口唇部等の形態によりA～Eの5類に分類できる。口径は主に12.0cmと13.0cmに集中し、器高4.4～5.8cm、立上り高2.2～2.8cm。器高／口径比では、～36%、36～40%、40～45%、45～50%にまとまりがあり、概ねA類、A・B・C類、Da類、Db・E類が対応し、立上り比ではA類の大半が50%以上、D類が50%以下に分布する。形態的にA類が古く、D、E類が新しい。

蓋A（23-1、176-1～3、178-1～4・9等）

偏平ないしやや丸みを帯びた天井部で、口縁が外反して延び、口唇部は内傾し浅い凹面あるいは段を持つ。ヘラケズリは1/2～2/3に及ぶ。稜の突出は少なく僅かにつまみ出す。胎土分析では陶邑領域と未定A領域が多い。

蓋B 丸みを帯びた天井部で口唇部は内傾し凹面ないしは段を持つ。ヘラケズリは1/2～1/3に及ぶ。口縁が内湾、あるいは直立気味に延び、薄手でシャープなBa類（23-2、176-4～6・11・12、178-6・7・14・15等）、口縁が直立気味でやや厚手のBb類（23-3、178-5・10～13等）、口縁がやや外傾して開き厚手のBc類（178-27～30等）、直立ないし内湾気味の口縁で厚手で粗雑なBd類（176-14・15等）がある。178-15を除き、口径／器高比でほぼ36～40%にまとまる。Ba類・Bc類は陶邑、Bb類は大井・未定領域が多い。

蓋C（178-23～25） やや尖り気味の天井部で口縁は直立する。口唇部は内傾しわずかに凹面をなす。稜は屈曲して付くのみである。

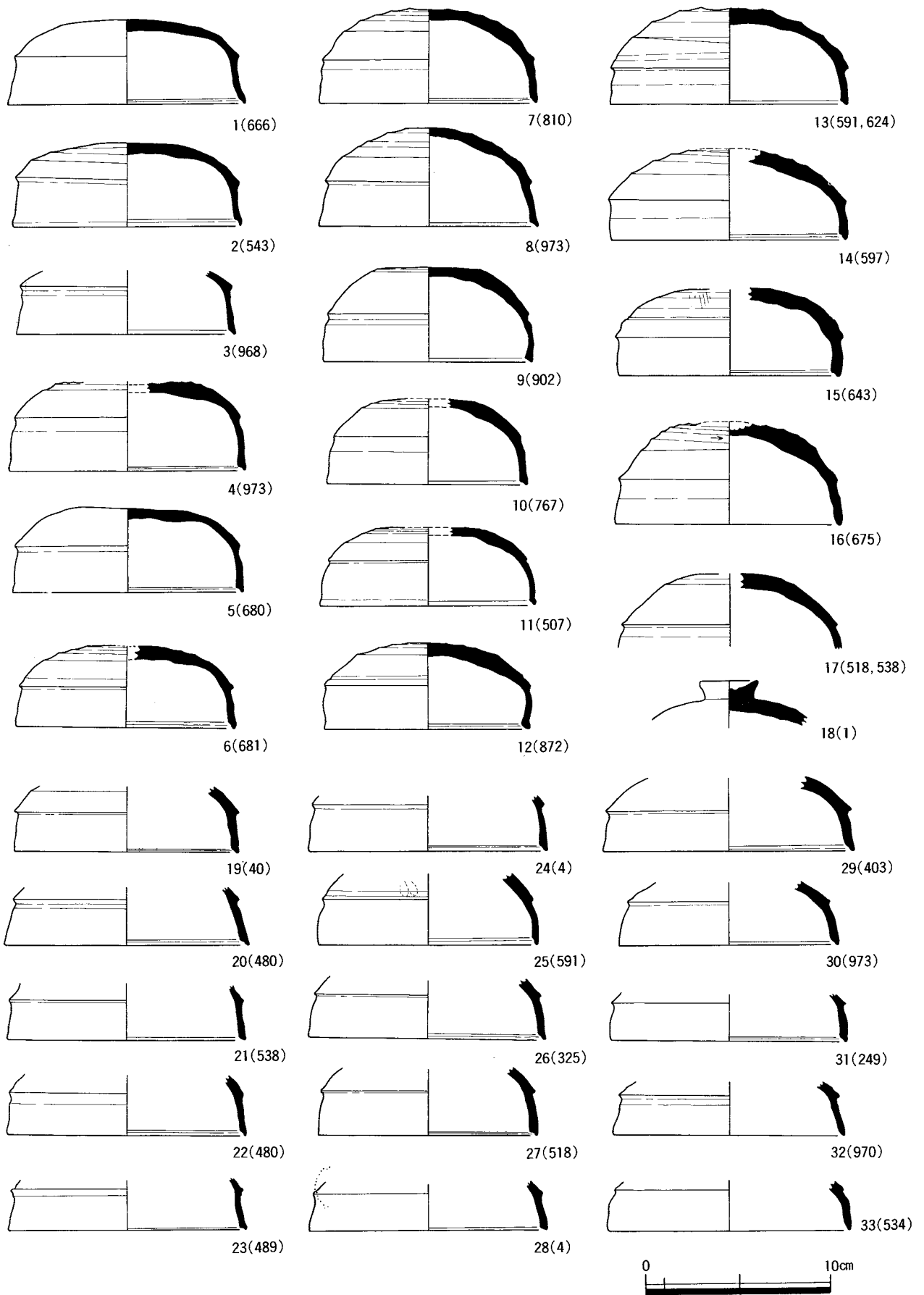
蓋D 球体で高い天井部を持ち、口縁は直立ないしは外側に広がる。口唇部は内傾し段を持つものと丸く収まるものがある。やや低めのDa（176-13、178-17・18：器高／口径比42～45）と高めのDb（23-4・176-7・8・17等：器高／口径比45～50%）がある。

蓋E Dbと同様高い天井部を持つが、頂部がやや平坦面をなす。口縁は直立ないしは内湾気味で、口唇部は内傾し凹面を持つ。稜の突出は少ない。176-9・10、178-26が該当する。176-9は胎土分析で門生領域である。

坏（挿図23・177・179）

蓋と同様、口径・器高・立上りの比率や形態等により、A～Dの4類に分類できる。

坏A 偏平気味の体部で口縁が内傾・やや外反して延びる。器受部は上方あるいは横につまみ出す。立上り高1.8～2.2cm。器高／口径比35～44%、立上り比40～45%のAa（177-3、179-9・10、23-6等）と、やや深めで器高／口径比45～52%、立上り比35～45%のAb（177-4、23-7～10等）に大別できる。Ab類は腰部が膨らみを持ち、胎土分析で未定B領域のものが多い。



挿図176 古式須恵器 (1) 蓋坏・高坏 (山田)

坏B 丸みを帯びた体部で口縁は内傾する。真直ぐ延びるものと屈曲しやや外反するものがある。口唇部は内傾し段を持つもの、平坦なもの、凹面を持つもの、丸く収まるもの等がある。器高／口径比45～48%、立上り比34～38%にまとまる**B a** (179-4～8・11～16・23等)と、立上りが1.4～1.6cmでやや低く、器高／口径比45～48%、立上り比27～33%にまとまる**B b** (177-5・6、179-21・22・24・25・30等)、大型でやや深めの**B c** (179-20)に大別できる。**B a**類は胎土分析で陶邑領域のものが多く、**B b**類は陶邑・池の奥・不明等産地が一定しない。陶邑領域のものは薄手でシャープな作りであり、特に口唇端部のつまみ出しが顕著である。

坏C 深身で丸みのある胴底部で口縁が内傾して立上る。器高／口径比50～60%、立上り比26～40%にまとまる。薄手で口縁が強く内傾する**C a** (177-1・2、179-1～3・23-11)、口縁端部が先細りやや小振りで薄手の**C b** (177-10～12・14・15)、小振りで肉厚の**C c** (177-7～9、179-26～29)に大別できる。**C a**類は177-2を除き器受部のつまみ出しが横方向に細長く顕著である。立上り比では**C c**類177-7・8が36%・40%、以外は34%以下に集中する。

坏D (179-17～19) 底部が丸みを帯び、口縁が底部から直立して長く立上る。器高／口径比45～48%、立上り比37～48%にまとまる。

有蓋高坏 (挿図23・177・180)

坏底部が偏平な**A** (177-22、180-14等)、やや小振りで丸みを帯びる**B** (177-19～21、180-11～13等)、深身で丸みのある**C** (23-13等)がある。それぞれ蓋坏のA～Cに対応する。

蓋は中央の凹む径2.6～3.2cm大のつまみを持ち、口縁はほぼ直立し口唇部は内傾し段を成す。立上りは長い。天井部が偏平気味のものと丸みを持つものがあり、前者は天井部と口縁境界の稜が明瞭であり、後者は退化がみられ緩やかである。3が口径13.6×器高6.6cm、以外は小型で口径12×器高5.8～6.3cm。

無蓋高坏 (挿図177・181)

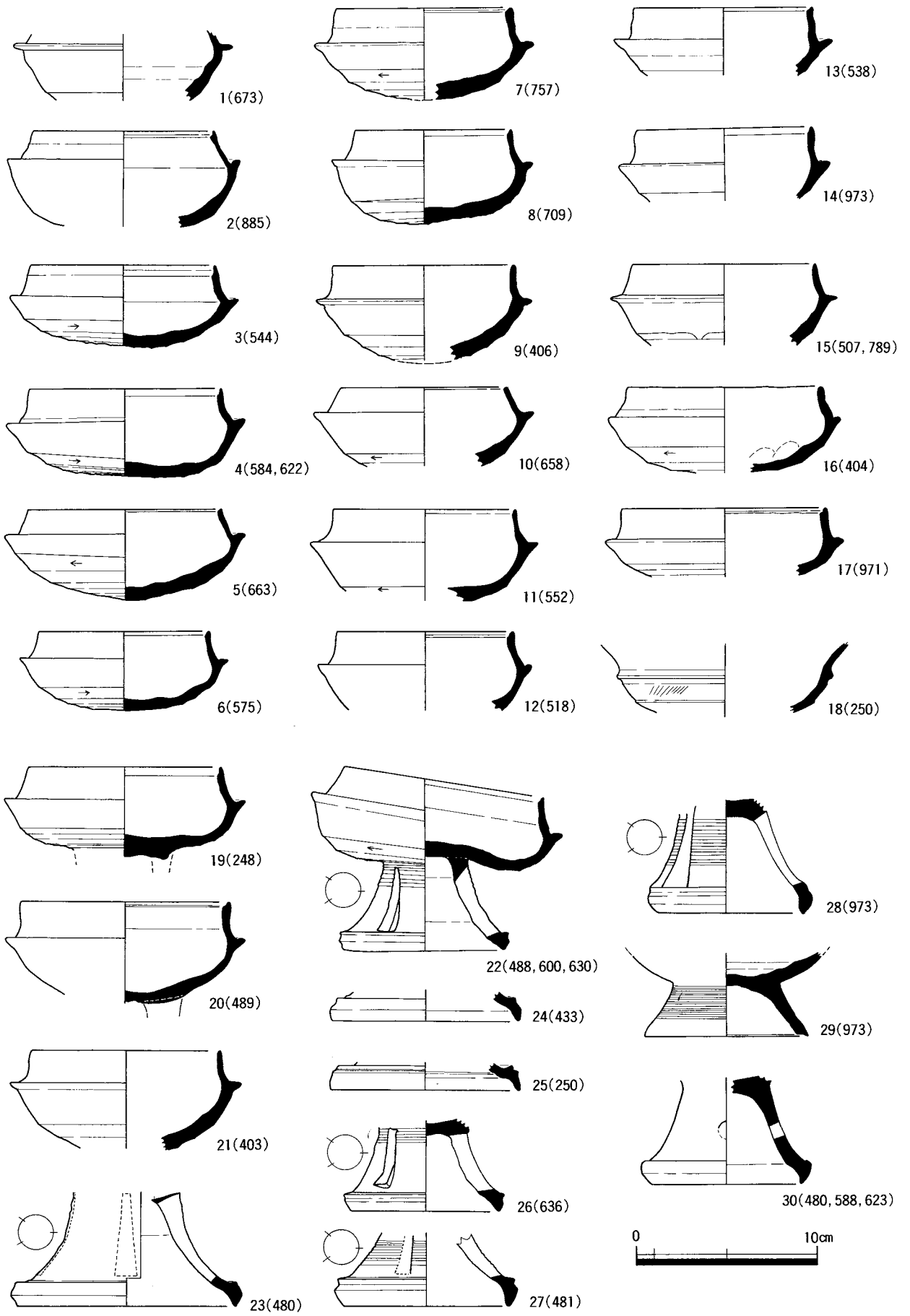
体部中位を突帯で区画し波状文を施す。大型と小型がある。透かしの四方・三方、坏部の浅・深、突帯の多寡、把手の有無などの差異が見られる。波状文はゆったりと大きく施文されるものから小刻みなものへの変化がある。1は鉢形の深めの坏部で屈曲した体部に二条の波状文を施し、胎土は緻密で断面セピア色を呈す。大型無蓋高坏2は口径21×器高16.6cm。1がON46、2～4がTK208、5～11がTK23～47と思われる。6・8～11はより小型化が進み後出的である。胎土分析では1・3・4・9・11が陶邑、6・8が不明である。

高坏脚部 (挿図177・180)

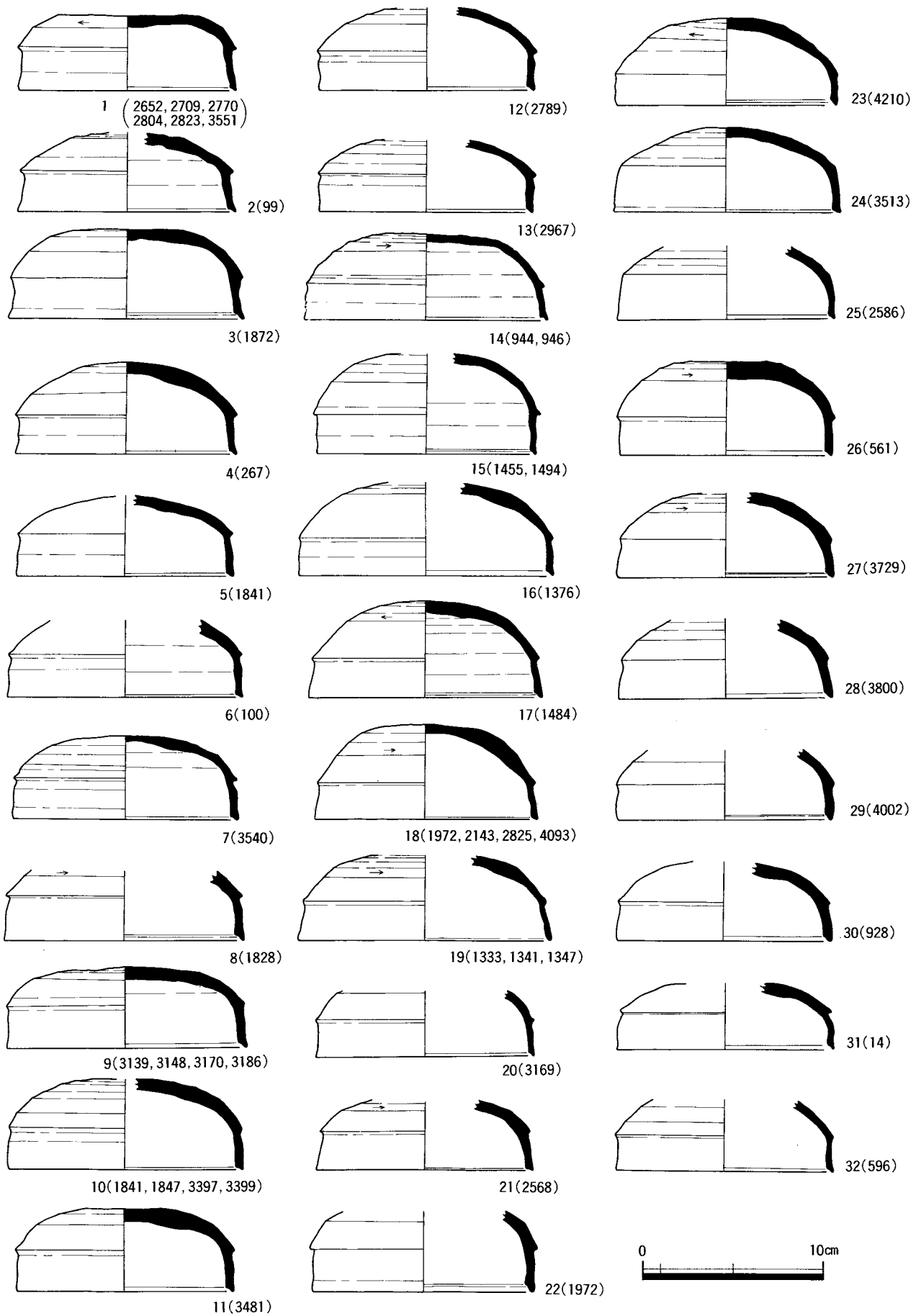
長方形透しを持ち、端部が屈曲し内湾する177-22～28・180-11・12・15・16・18、端部の屈曲が少ない177-22・180-14、透しを持たず小型で短くハの字に開き、端面が水平に接地する177-29・180-19・20等の各形態がある。小型で短く端部が先細る180-21、円形透かしを持ち脚裾が屈曲する177-30があるが、例外的で各1点のみである。

罍 (挿図182)

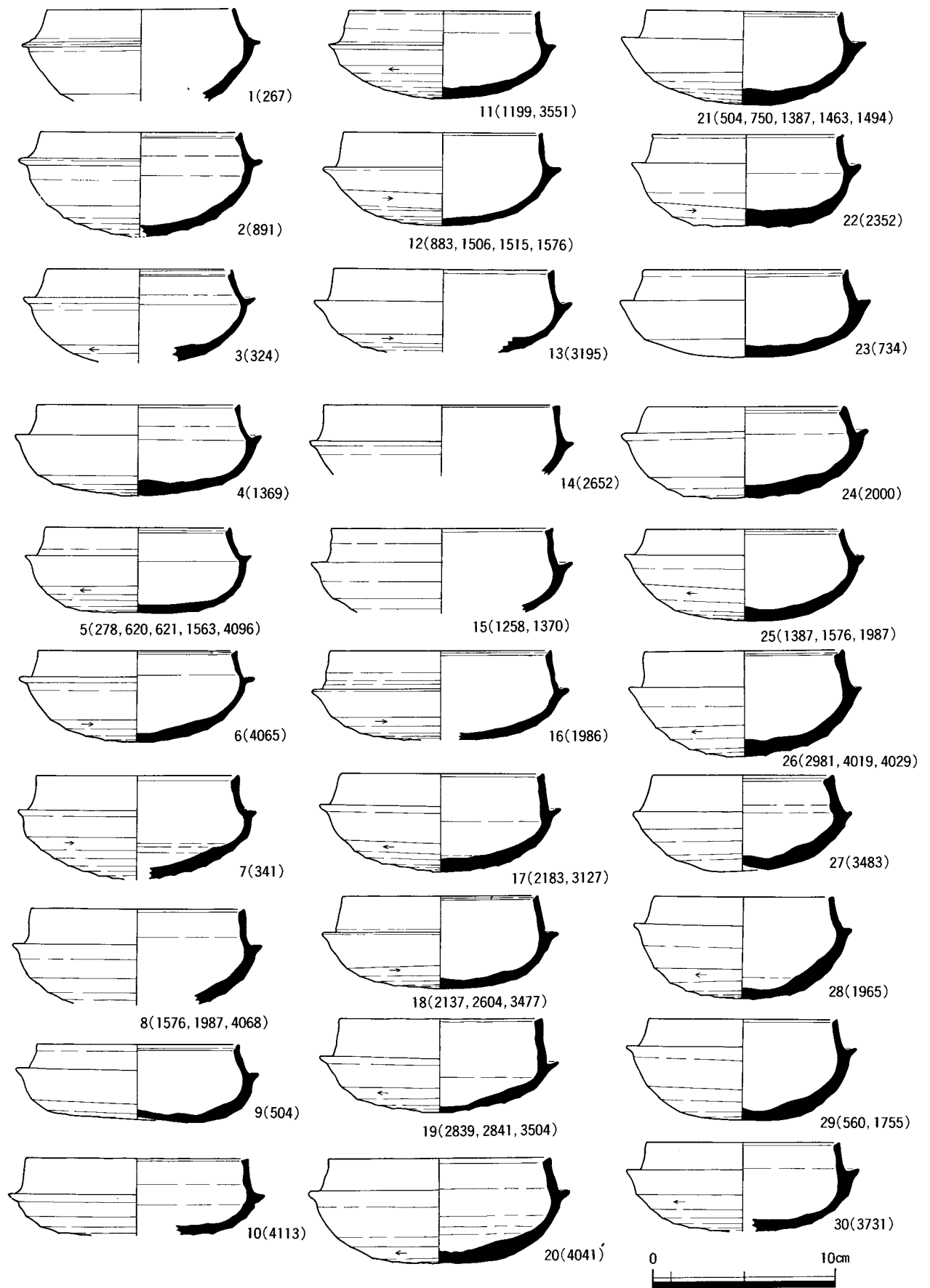
球体ないし楕円体の体部に、尖り気味の丸底を持つ。仕上げはナデによる。口頸部が僅かに外反して立上がり、口縁部で屈曲して開き段をなす。口縁端面は水平に拡張され凹みが巡る。



挿図177 古式須恵器(2) 蓋坏・高坏(山田)



挿圖178 古式須惠器(3) 蓋坏(研石山)



挿図179 古式須恵器 (4) 蓋坏 (研石山)

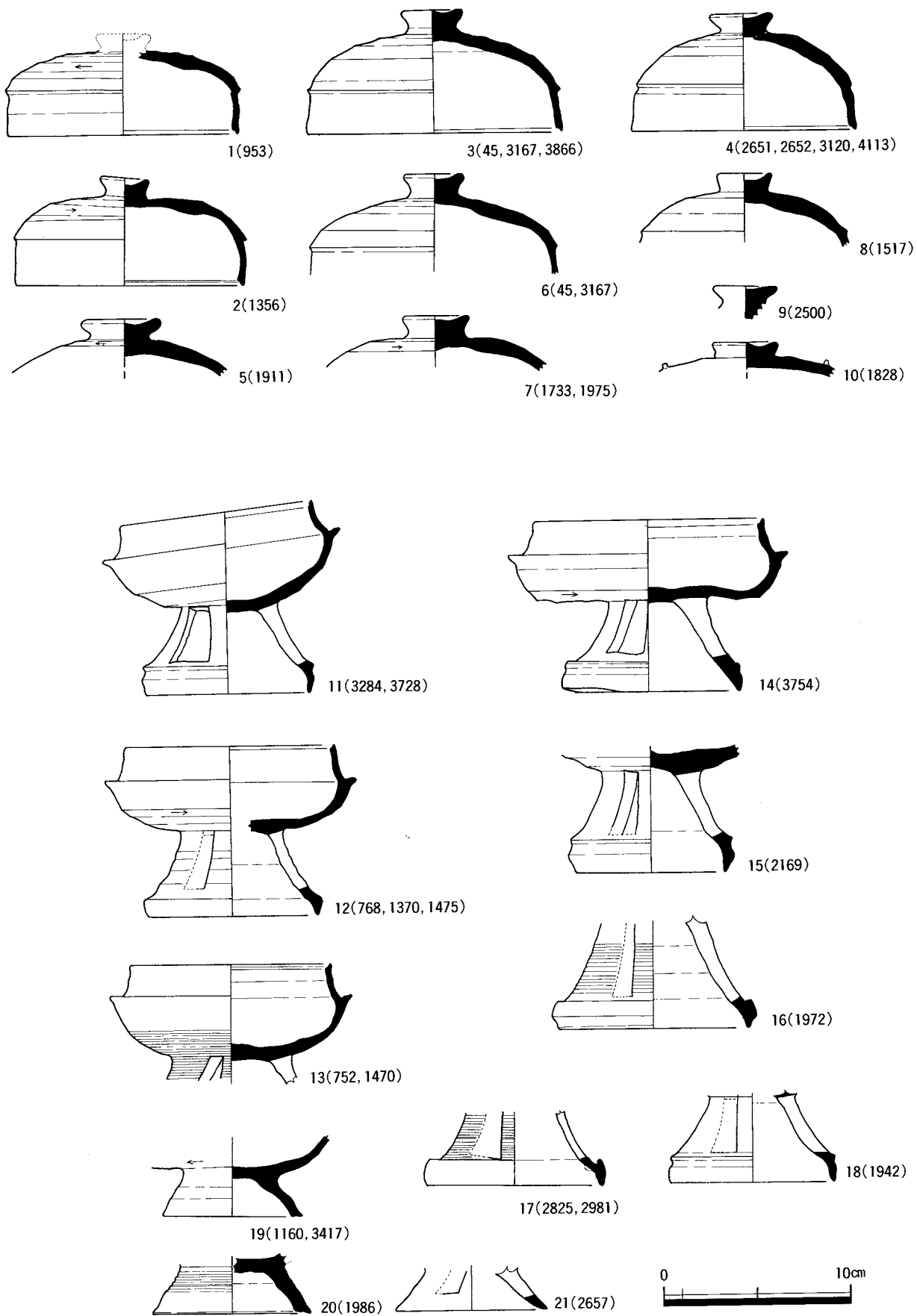
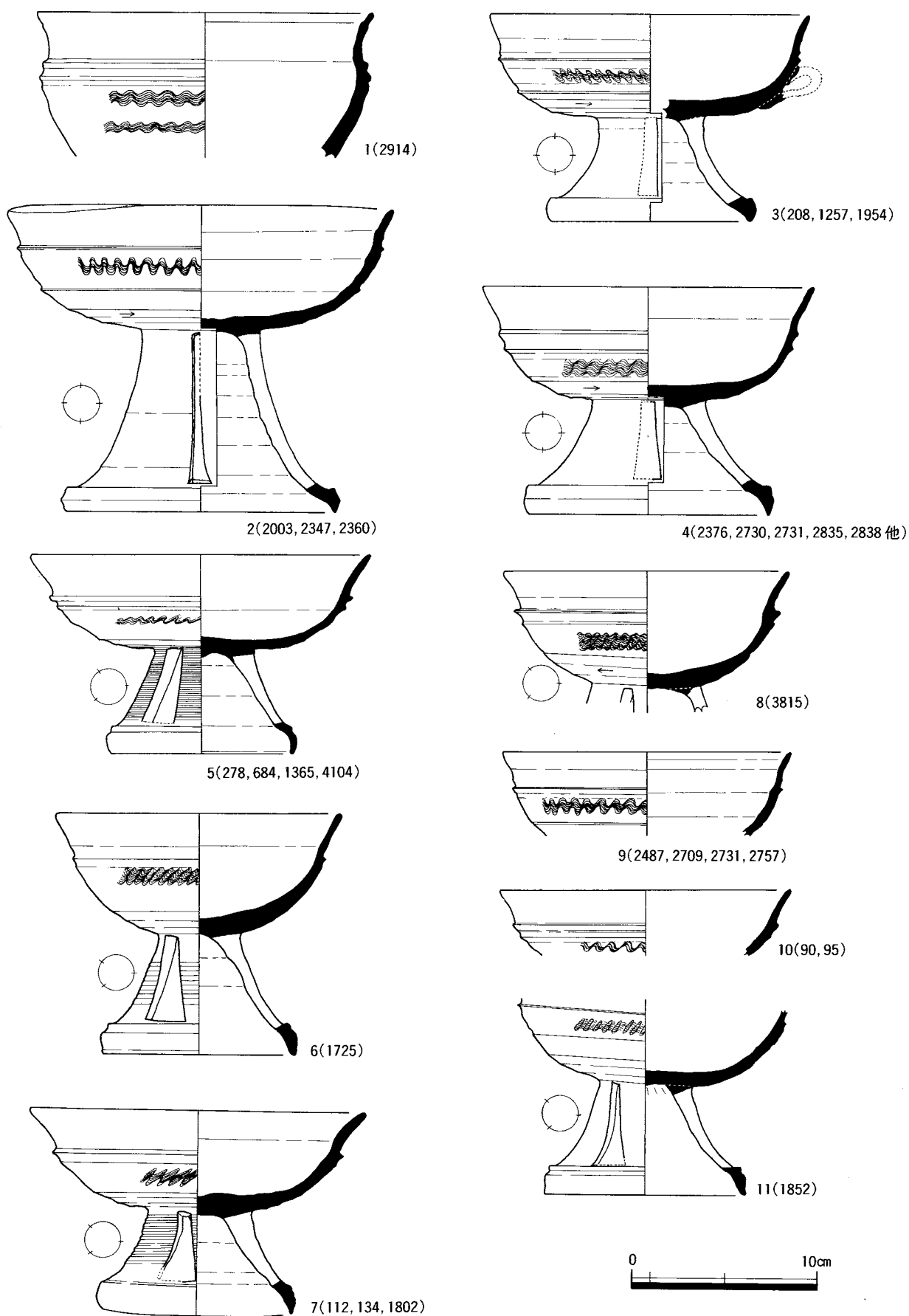


插图180 古式須惠器 (5) 有蓋高环 (研石山)



挿図181 古式須恵器 (6) 無蓋高坏 (研石山)

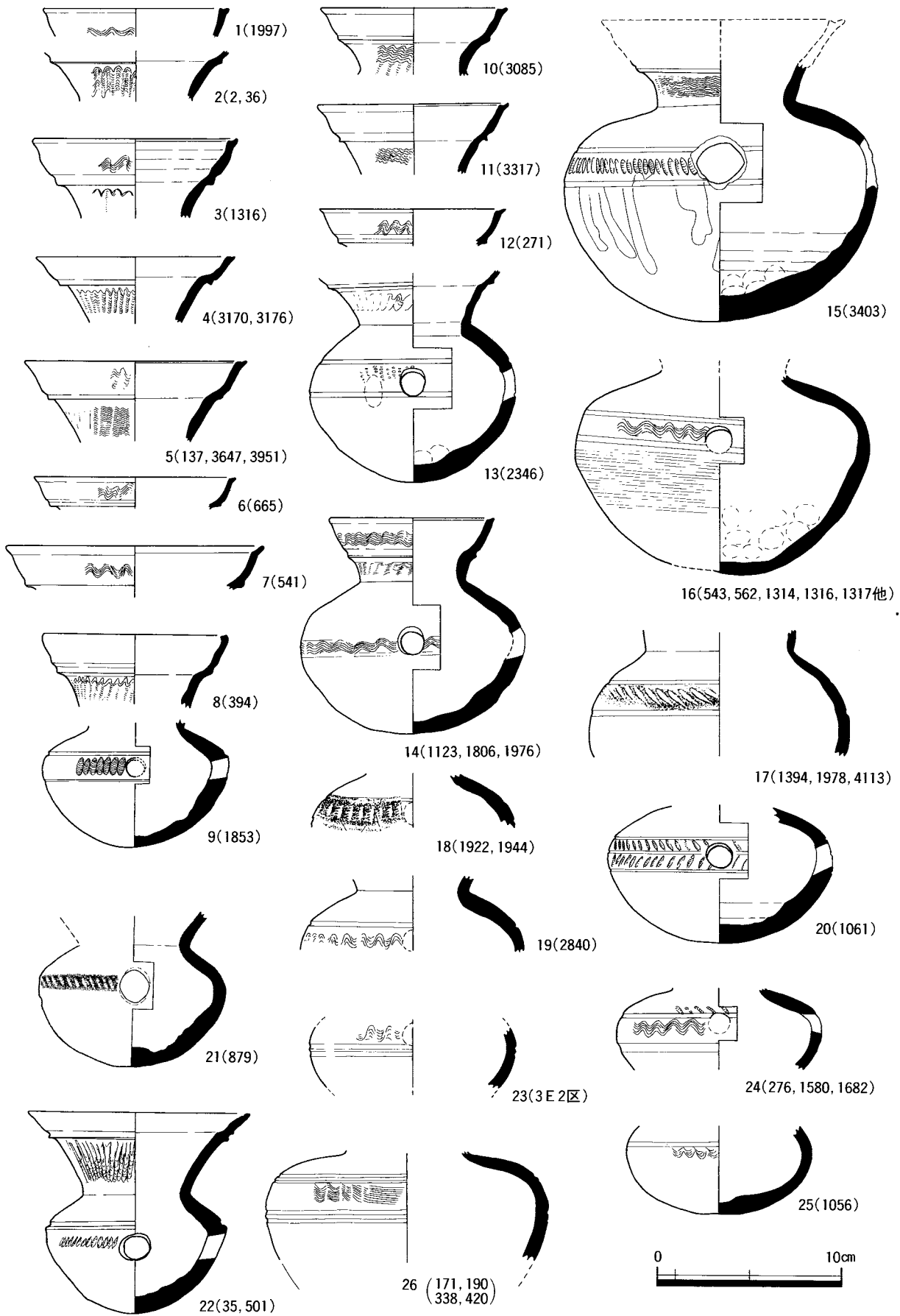
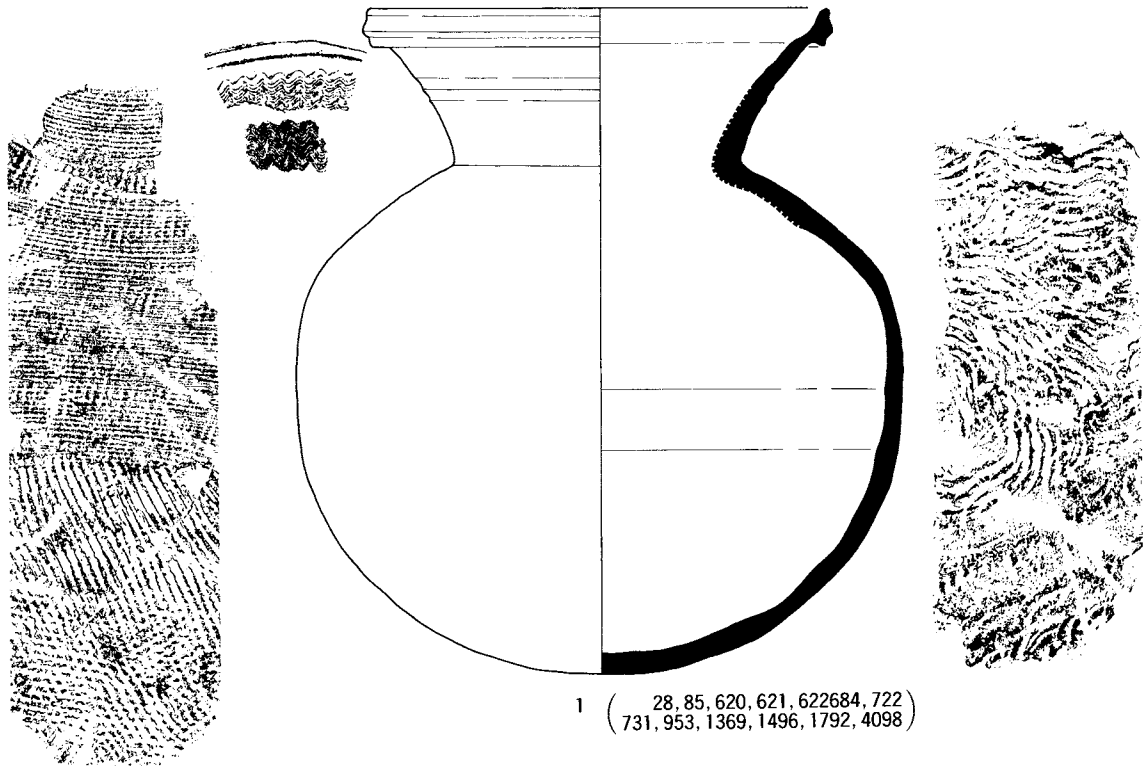
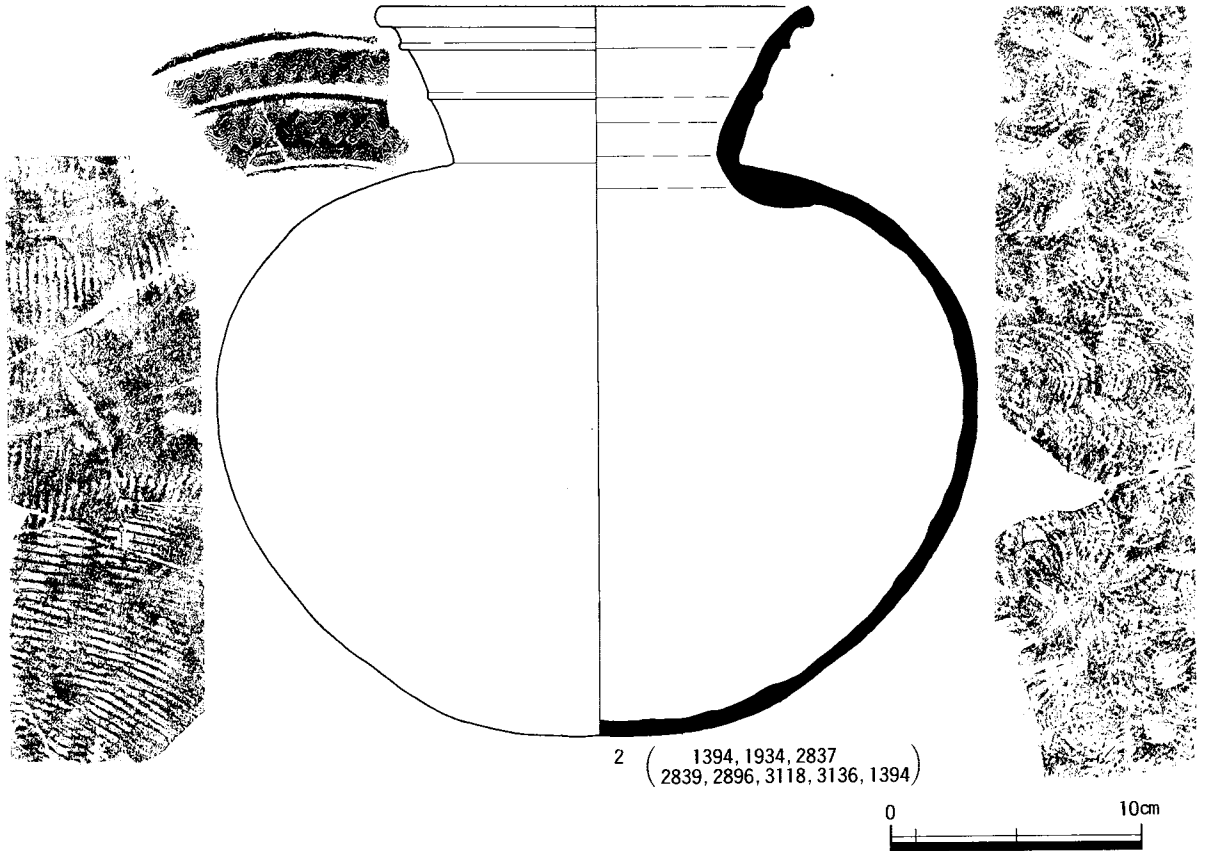


插图182 古式須恵器 (7) 碗 (山田・研石山)



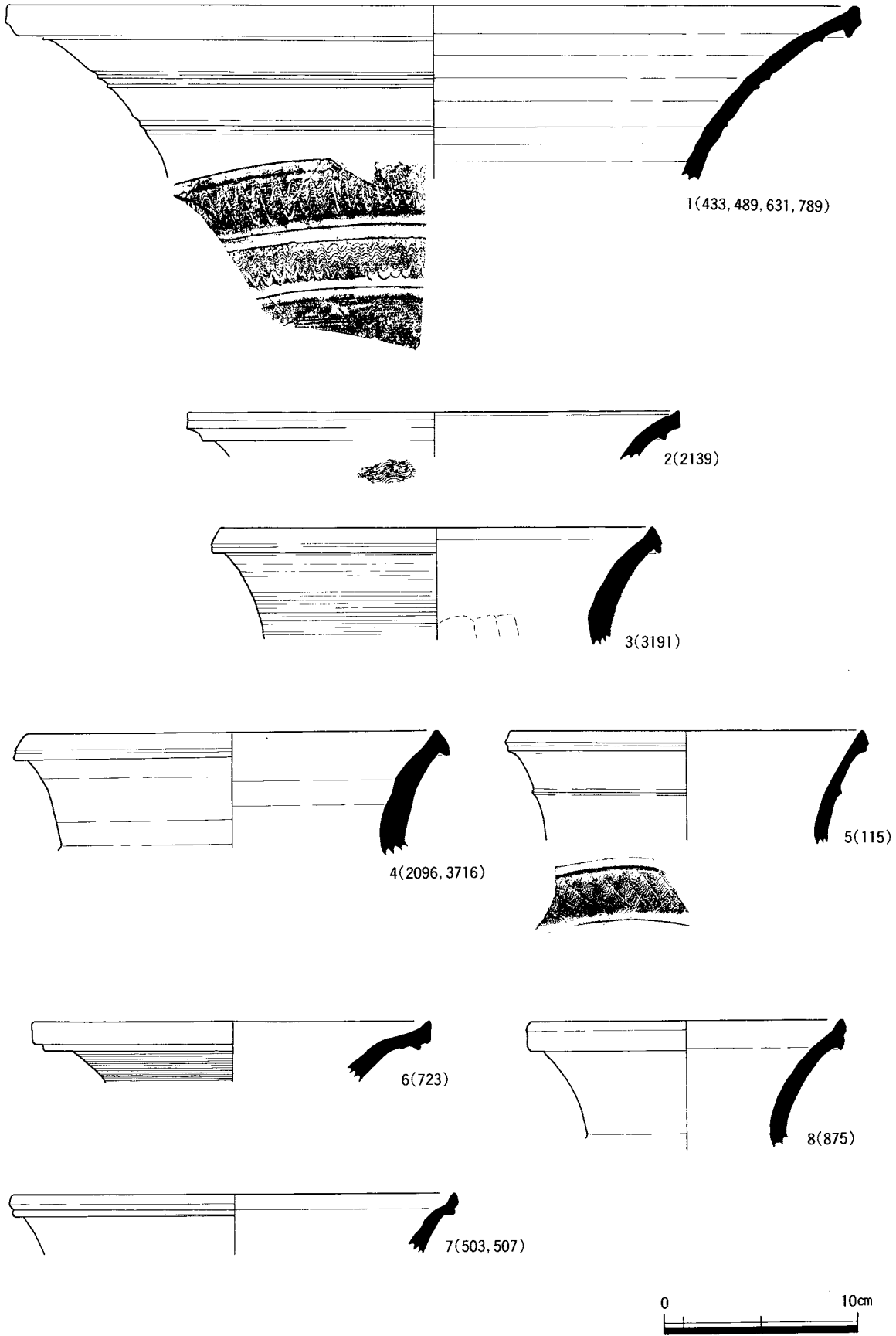
1 (28, 85, 620, 621, 622684, 722
731, 953, 1369, 1496, 1792, 4098)



2 (1394, 1934, 2837
2839, 2896, 3118, 3136, 1394)



挿図183 古式須恵器 (8) 壺



挿図184 古式須恵器 (9) 壺・甕

口頸部に波状文、胴部には波状文ないしは刺突文を施す。肩胴部に沈線を持つものとなないもの、あるいは1条・2条等の差異もある。22は胎土分析で松江市池の奥（大井古窯跡群）領域とされた。口縁端部が丸くおさまり、口頸部の開きが大きく肩も張り、後出的である。

大型竈13は大型高坏181-2（四方透し）と共伴した。TK208に該当する。

壺・甕（挿図183・184）

壺（183-1・2） 球体の胴部にハの字に開く口頸部を持ち、頸部は突帯により上下に二分し波状文を施す。183-1は口縁端部を上下につまみ出し、183-2は端部は丸く小さく、口縁直下に三角突帯を巡らす。体部のタタキは比較的細かく丁寧で、183-2は内面タタキ痕を軽くナデ消す。1・2とも研石山遺跡5区出土。

挿図184は壺・甕口縁。1は大形甕口縁で大きく外反し端部を上下につまみ出す。2・6は大きく外反し、口唇を上につまみ出し下方に三角突帯を巡らす。3・4は外反気味にハの字に開く口縁で口縁端部が内傾し下垂する。厚手で短く、施文はない。5は口縁端部の肥厚が少なく薄手。7は口唇部を屈曲させ上方へつまみ出す。8は外反して開き端部を上下につまみ出す。

1～4が研石山遺跡5区、5～8が山田遺跡の出土である。

〈山田2号墳の須恵器〉（挿図10）

竈 逆ハの字に開く口縁に尖底気味の胴体部を持つ。口縁部は拡張肥厚して段を持ち、頸部に細かな波状文を巡らす。底部はナデ調整で仕上げる。口径9.3cm×器高9.5cm—最大胴径9.2cm。表面鼠色、断面セピア色を呈し、胎土は緻密、焼成はやや甘い。

甕 逆ハの字に開く口縁に球体の胴体部を持つ。口径16.8cm×器高25.8cm—最大胴径26.0cm。口頸部は稜のある凸帯で区画し細かな波状文、胴体部には細かな平行タタキ目、内面はナデ消しを施す。器壁は薄く、タタキによる凹凸が良く残る。表面ネズミ色、断面セピア色を呈し、胎土は緻密である。胎土分析で陶邑領域と分析された。陶邑TK208併行と思われる。

〈山田遺跡1区土器溜の須恵器〉（挿図23）

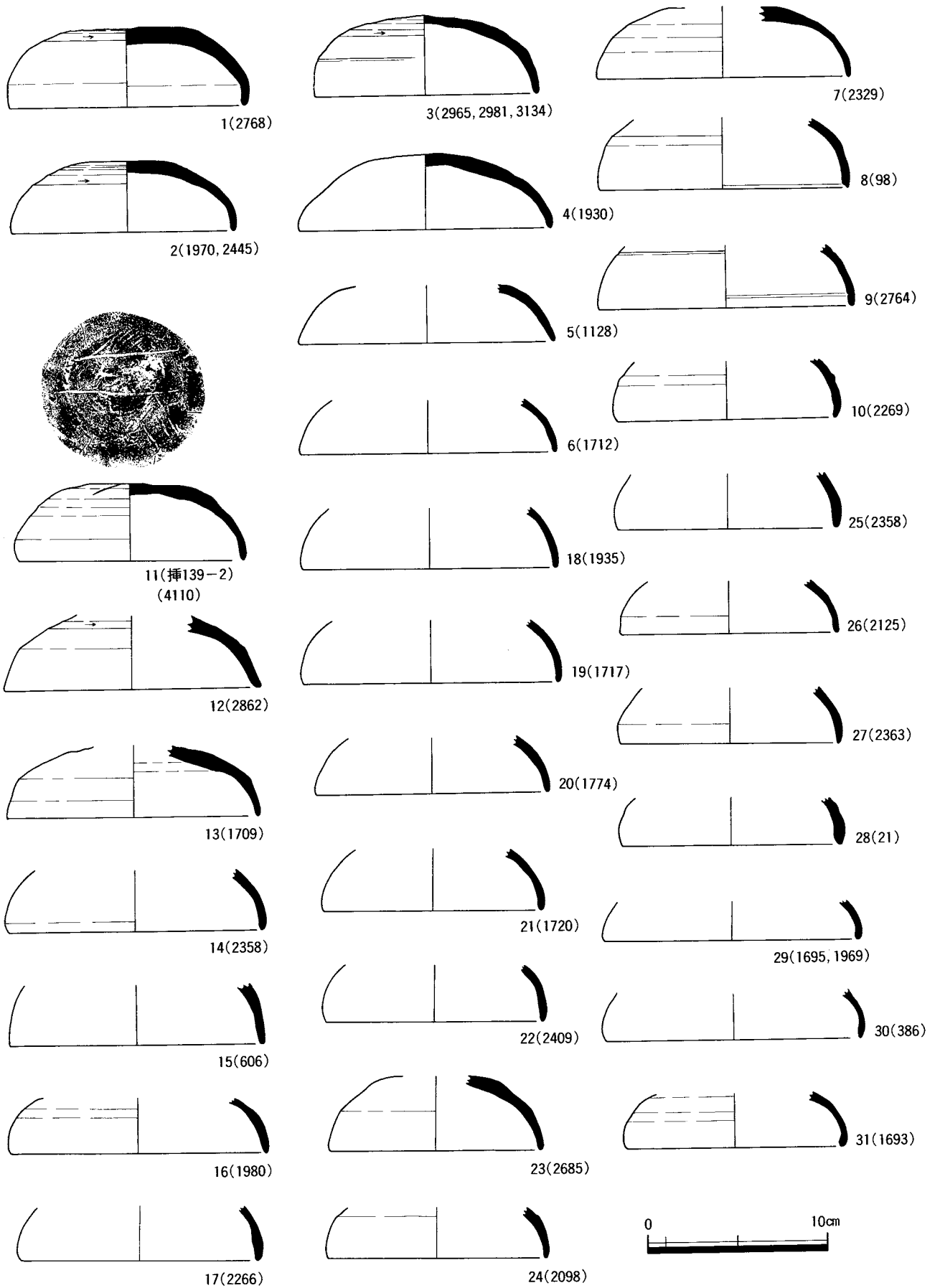
形態的に1～3・6に古い様相が見受けられるが、概ねI-2期（陶邑TK23～47）の範疇と思われる。

坏蓋 蓋A類（1～3）と、蓋D類（4・5）がある。いずれも2/3以上をヘラケズリする。4の口唇部は段を持ち、5は丸く収まる。5は高坏蓋。1～3が口径12.8×器高4.5～4.9cm、口縁立上り高2.4～2.7cm。4・5は口径11.8×器高5.4～5.8cm。口縁立上り高2.2cm。

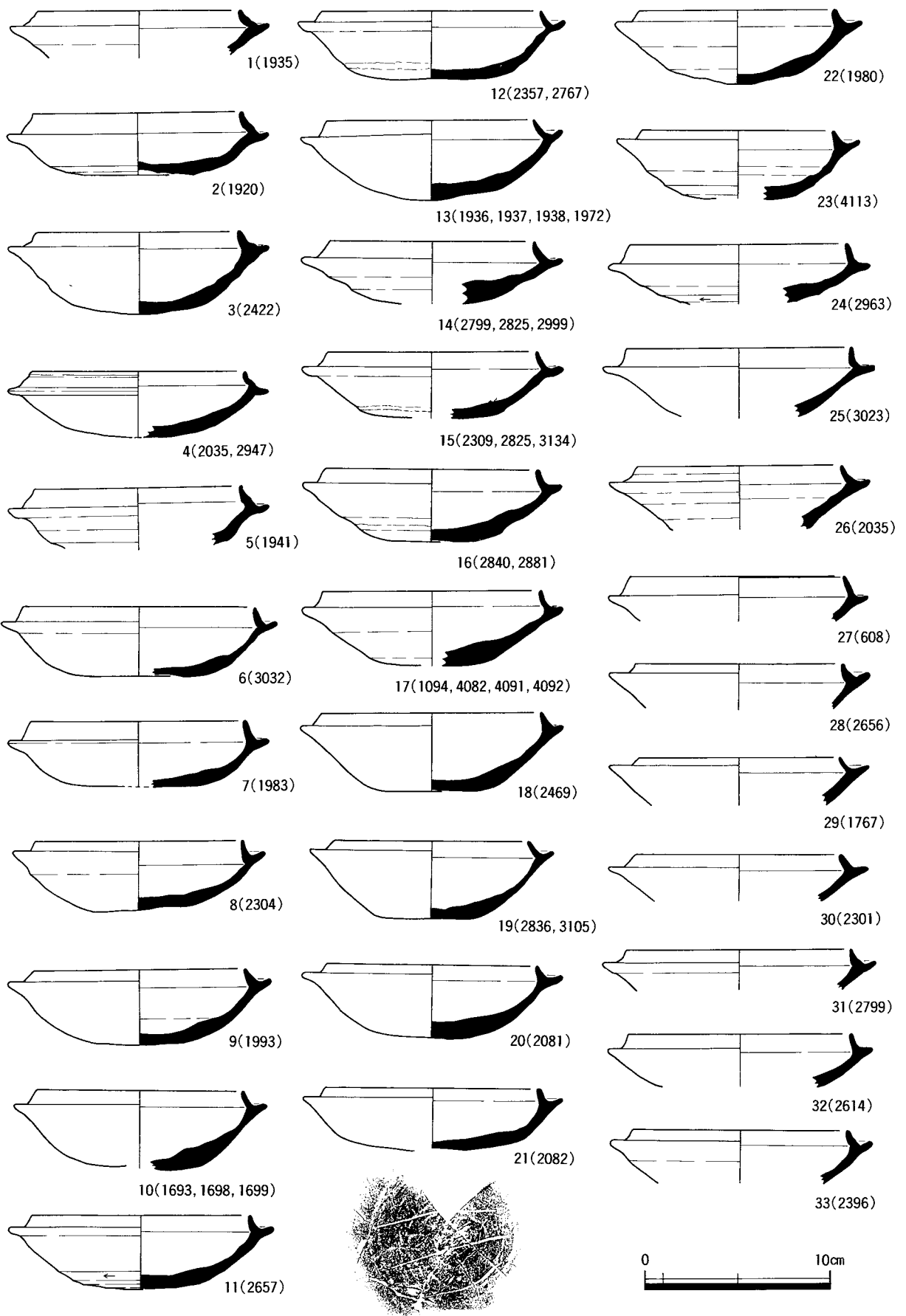
坏身 坏A類（6～10）と、坏D類（11）がある。前者は大・中・小があり6が口径11.2×器高4.8cm、口縁立上り高2cm。7・8が口径9.8～10.2×器高4.7cm、口縁立上り高1.8cm、2cm。9・10が口径10～10.2×器高5～5.2cm、口縁立上り高1.6cm。11は4・5に対応すると思われる。端部は丸い。

高坏は2個体。12は比較的浅い坏部で口縁端部は段を持つ。13は半球形の深い坏部で口縁端部は丸く収まる。いずれもハの字に開く低い脚部を持つ。透し孔はない。

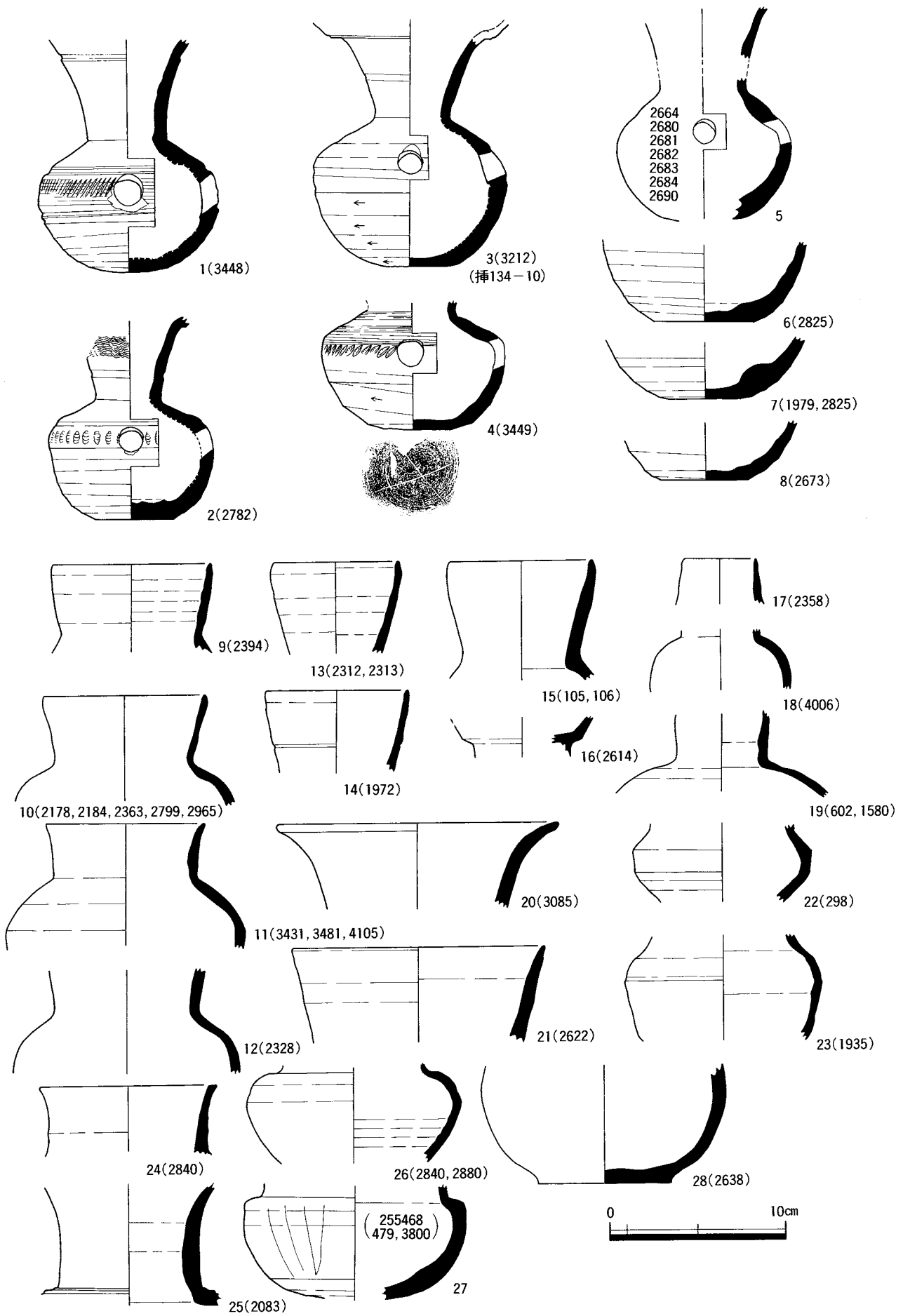
胎土分析では4・5・12・13が陶邑、1・2が領域不明A群、3・7・9・11が領域不明B群、6が領域不明C群であった（特論1参照）。出自の異なる遺物をそれぞれ持ち寄り集めた



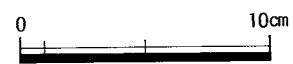
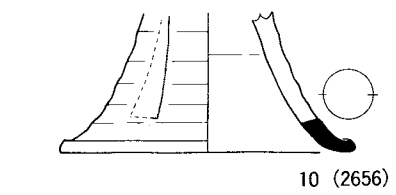
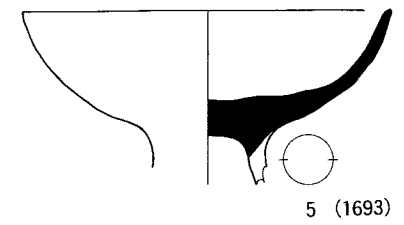
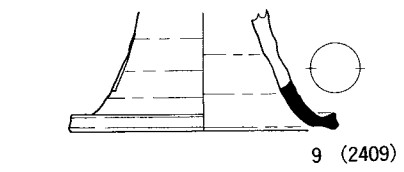
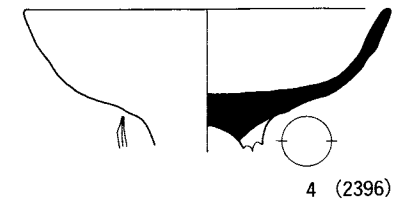
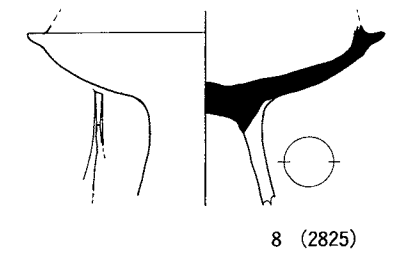
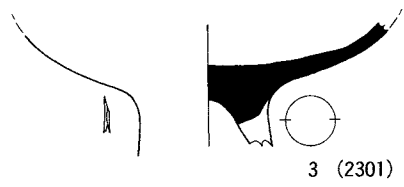
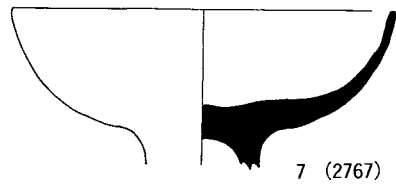
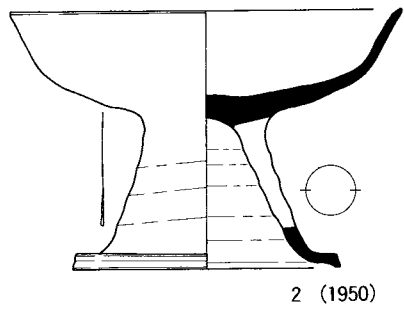
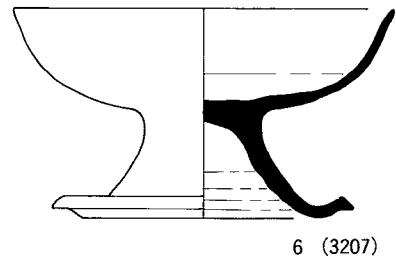
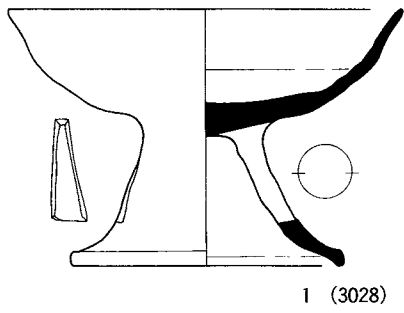
挿図185 古墳時代後期の須恵器 (1) 蓋坏 (研石山)



挿図186 古墳時代後期の須恵器 (2)蓋坏 (研石山)



挿図187 古墳時代後期の須恵器 (3) 線・壺類



挿図188 古墳時代後期の須恵器 (4) 高坏

ものと思われる。

Ⅱ期の須恵器（挿図185～188、図版74）

山田3区第2テラス下層・萱原1号横穴墓・谷の上1号墳・山田1区・研石山1区・同5区等で出土した。出土箇所、量共に限られる。蓋坏・高坏・提瓶・罍・その他小型壺等がある。

大形化の傾向が見られる谷の上1号墳例（Ⅱ-1期）→天井部・底部のヘラケズリが残る山田遺跡3区第2テラス下層・萱原1号横穴墓例（Ⅱ-2期）→口縁部の立上りの退化する山田1区・研石山1区・同5区例（Ⅱ-3期）という変遷があり、それぞれがほぼ陰田2・4～5・6～7期に相当する。後期後半期のⅡ-2・Ⅱ-3期が大半を占め、後期前半期のⅡ-1期は谷の上1号墳のみである。

蓋坏・高坏（挿図185・186・188）

坏蓋 丸みを帯び、口縁部はナデを施し僅かに内傾し端部は丸い。天井部はやや平坦である。ヘラ切り後天井部の周囲を軽くヘラケズリするものと手タタキで調整するものがある。口径は11.8～14×器高3.8～4.4cmで、口径12cm、器高4.2cm前後が中心である。

坏身 底部が丸みを持つものと、段を持ち平たくすぼまる形態のものがある。後者の底部径は7～8cm、型押しと思われやや厚手である。口径は11～12×器高3.4～4.2cmで、口径11.2cm、器高4cm前後が中心である。立上りは短く、2の1.2cm以外は7～8mmにおさまる。

高坏（挿図181） 有蓋・無蓋があり、大半が三角2方透しである。浅い皿状の坏部にハの字に開き裾部で強く外反屈曲する脚部を持つ。脚裾端部が下方につまみ出して立上がるもの、上方につまみ出すもの、上下双方につまみ出すものなどがある。

罍（挿図187）

口縁が大きく開き、球体ないし平底の小振りの体部を持つ。体部下半部を回転ヘラケズリ、上位に刺突列点文を施す。5は軟質で退化の進んだ後出形態である。

〈谷の上1号墳の須恵器〉（挿図70）

蓋坏の大型化など陰田2～3、陶邑MT15～TK10に該当する。

坏蓋 丸みを持ち天井の高い3・4と、大型でやや偏平の5がある。いずれも天井部と口縁部の境は僅かな段・稜で区画され、口縁内部は段を持つ。ヘラケズリは天井まで及ぶ。法量は3・4が口径13.6×器高5.2cm、13.0×5.6cm、5が口径15×器高4.8cm。

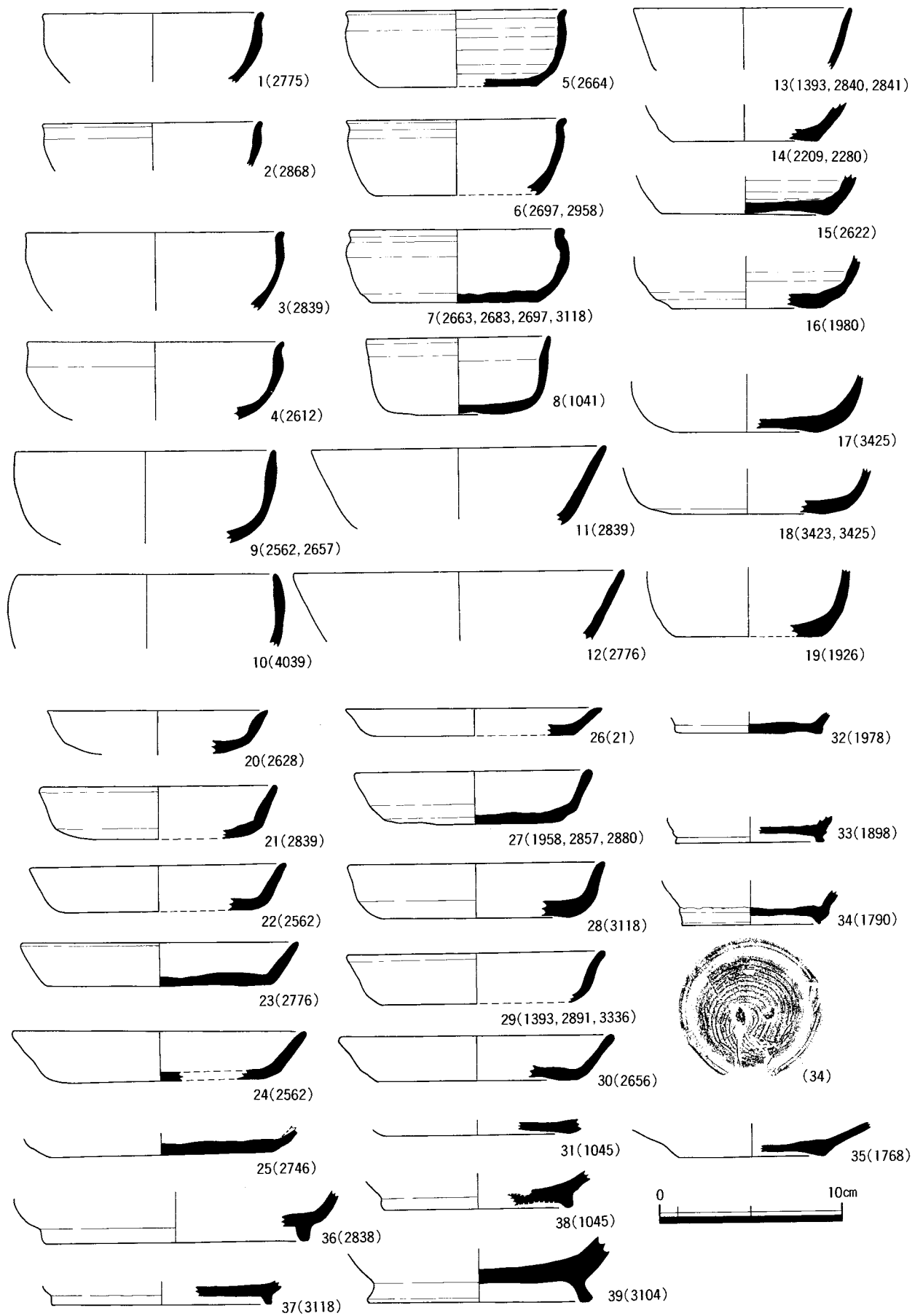
坏身 深みのある丸い底部をもつ。口縁端部は丸みないしは面取りし角張り、ヘラケズリは底部まで及ぶ。口径12～12.2×器高5.2cm、口縁部立上り高1.8～2cm。

〈萱原1号横穴墓の須恵器〉（挿図18・19、図版74）

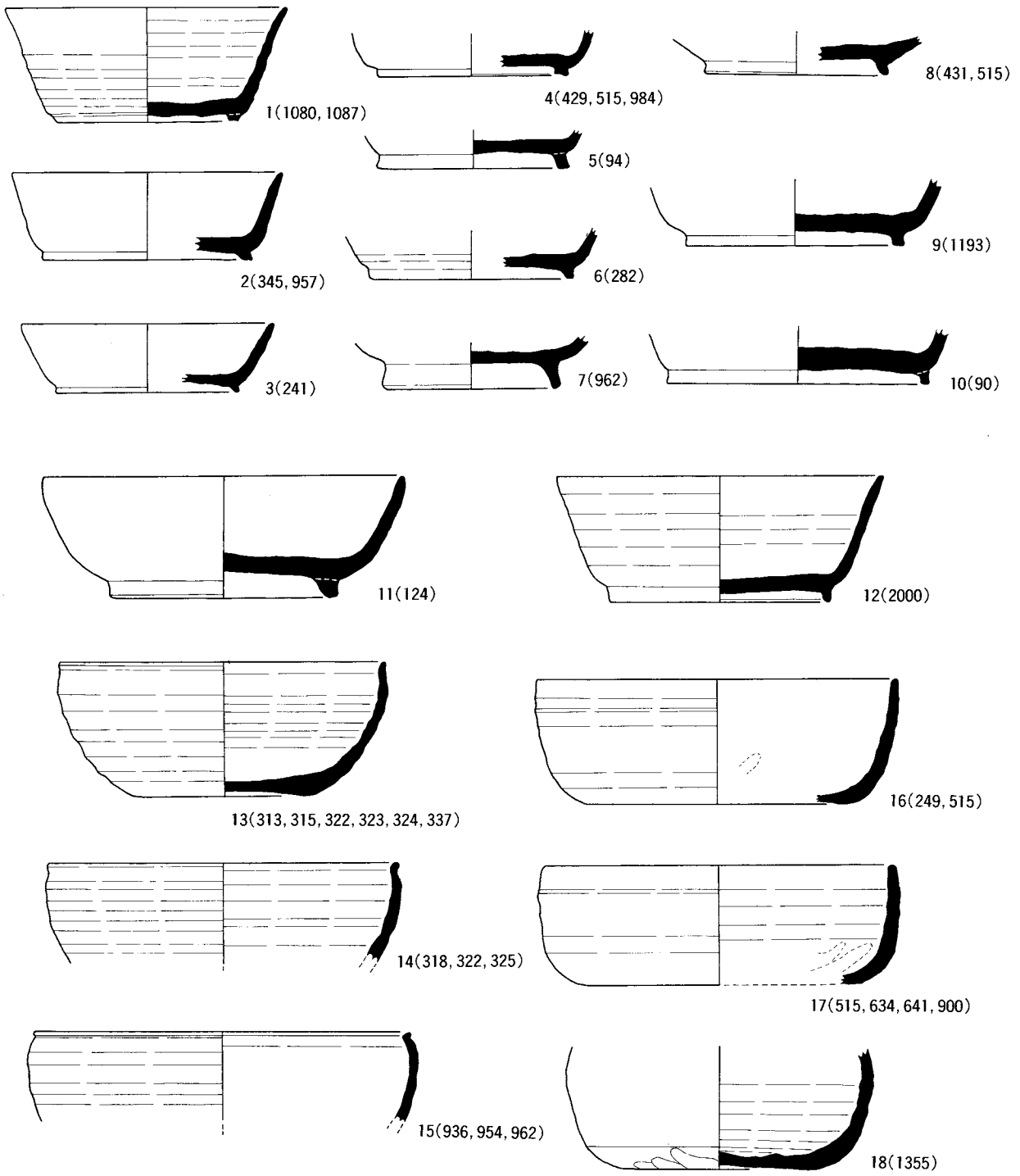
形式的に前後二時期にわたるものであり、陰田4～5（TK43～209相当）に該当する。

坏蓋 天井部と口縁部の境に凹線を巡らし、ヘラケズリが天井までおよぶものと、およばないものがある。法量は1・3が口径13.2×器高4.2cm、5・8が口径13.6～13.8×器高4.2～4.4cm、6が口径13.4×器高3.6cm。

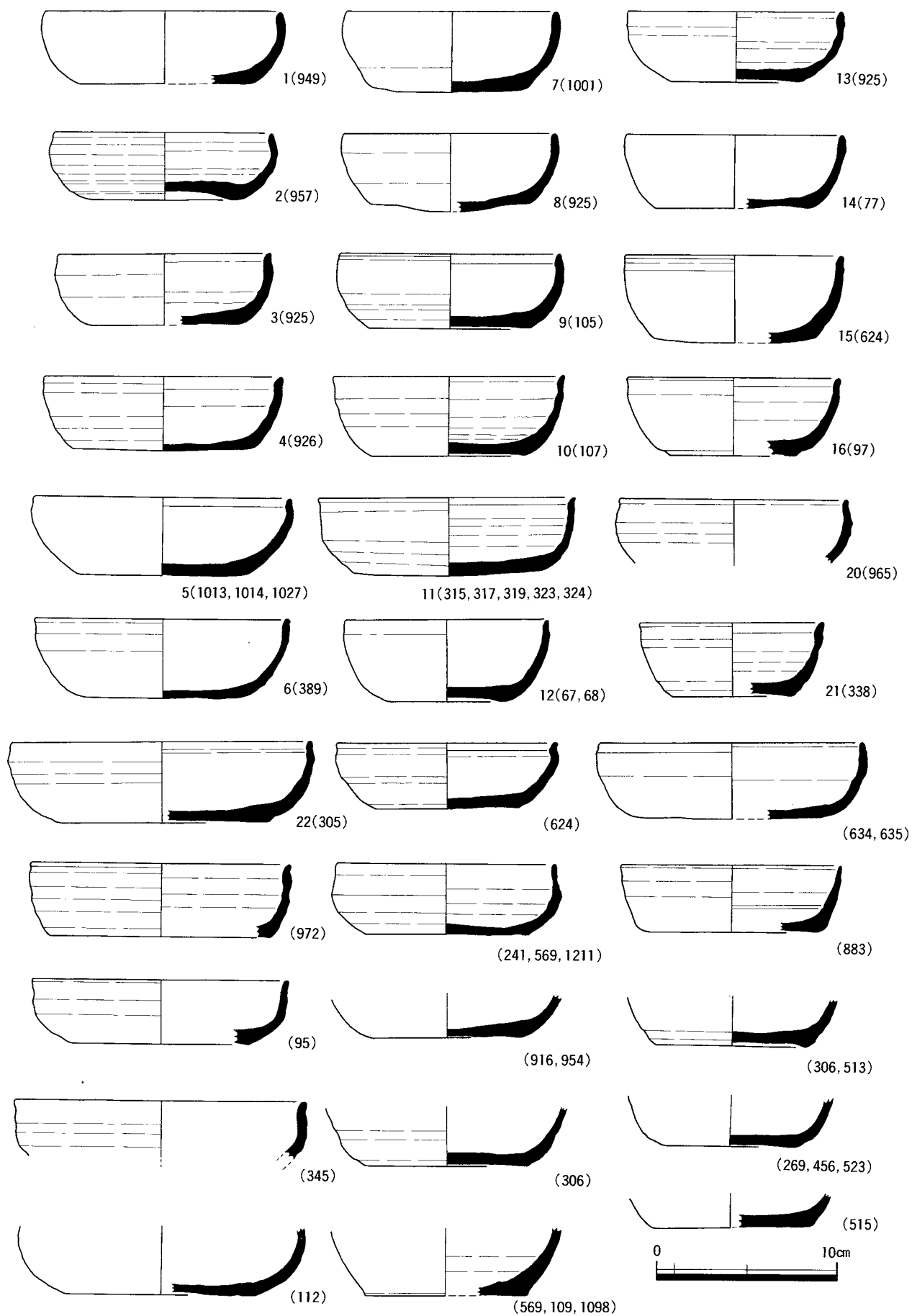
坏身 やや偏平気味で底部は丸みを帯びる。2は口縁がまっすぐ立上がり、4・9は屈曲し内傾する。2・4が口径11.5×器高4.4cm、9が口径11.4×器高3.6cm。



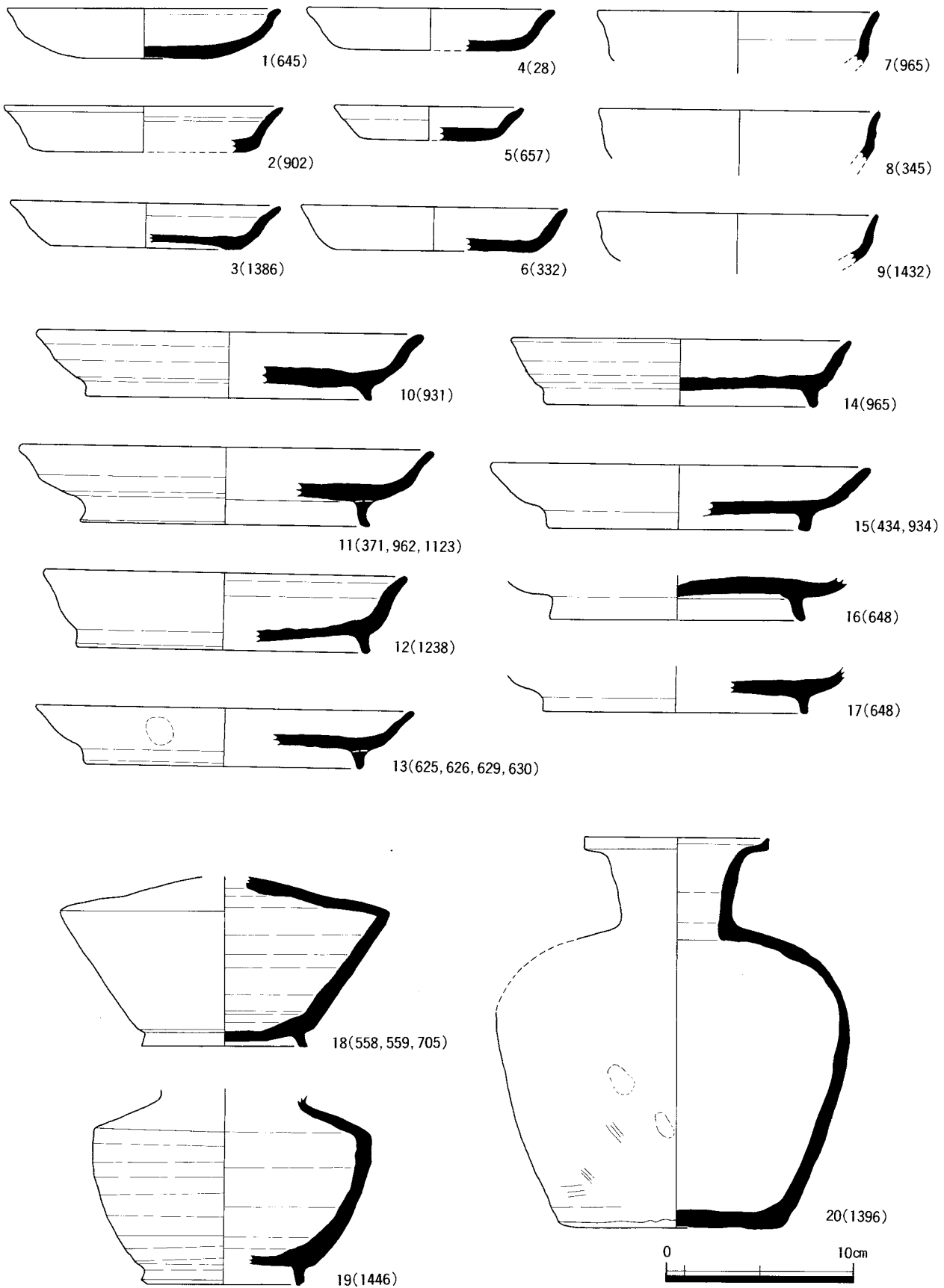
挿図189 奈良時代以降の須恵器 (1) 坏・皿



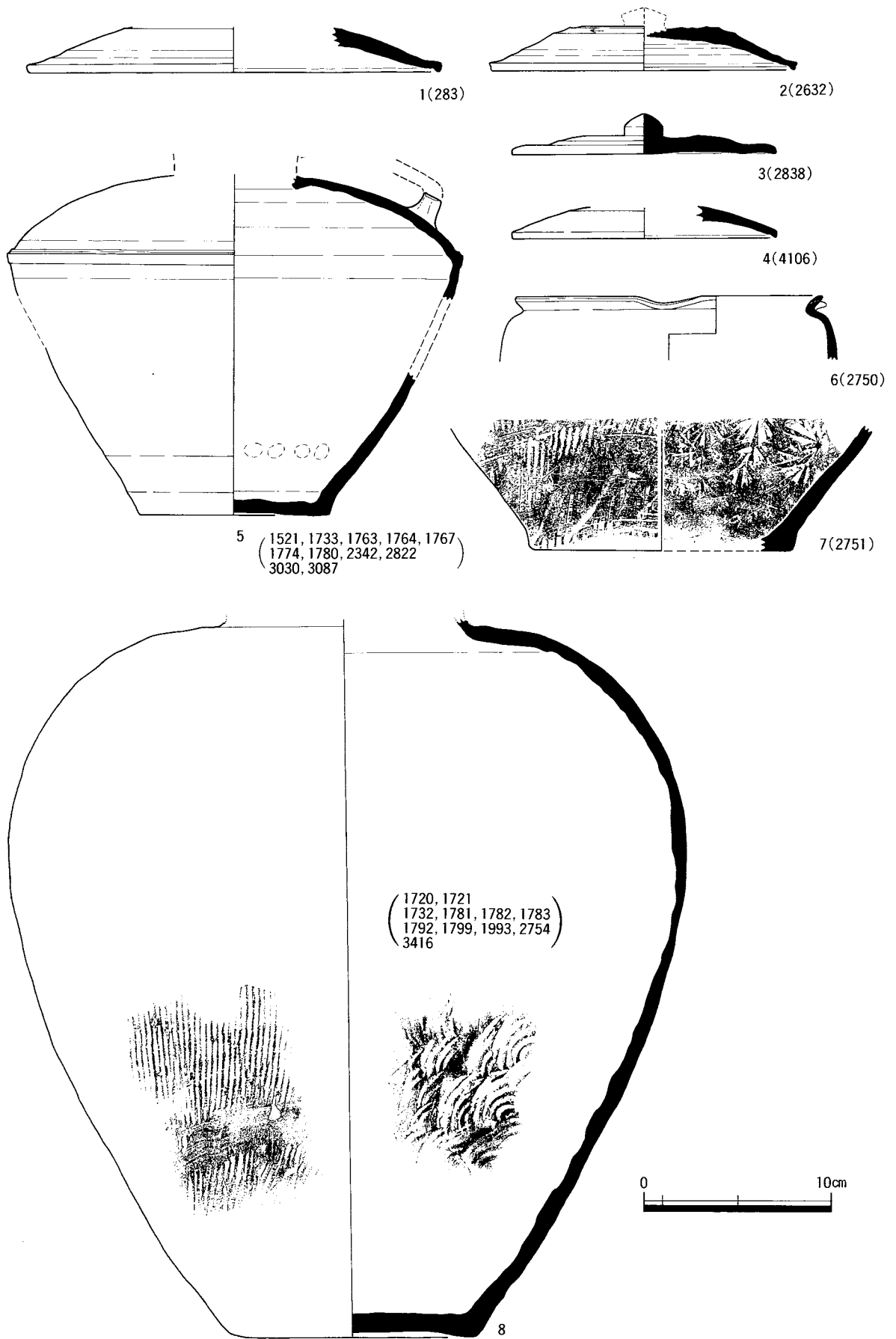
挿図190 奈良時代以降の須恵器 (2) 坏類



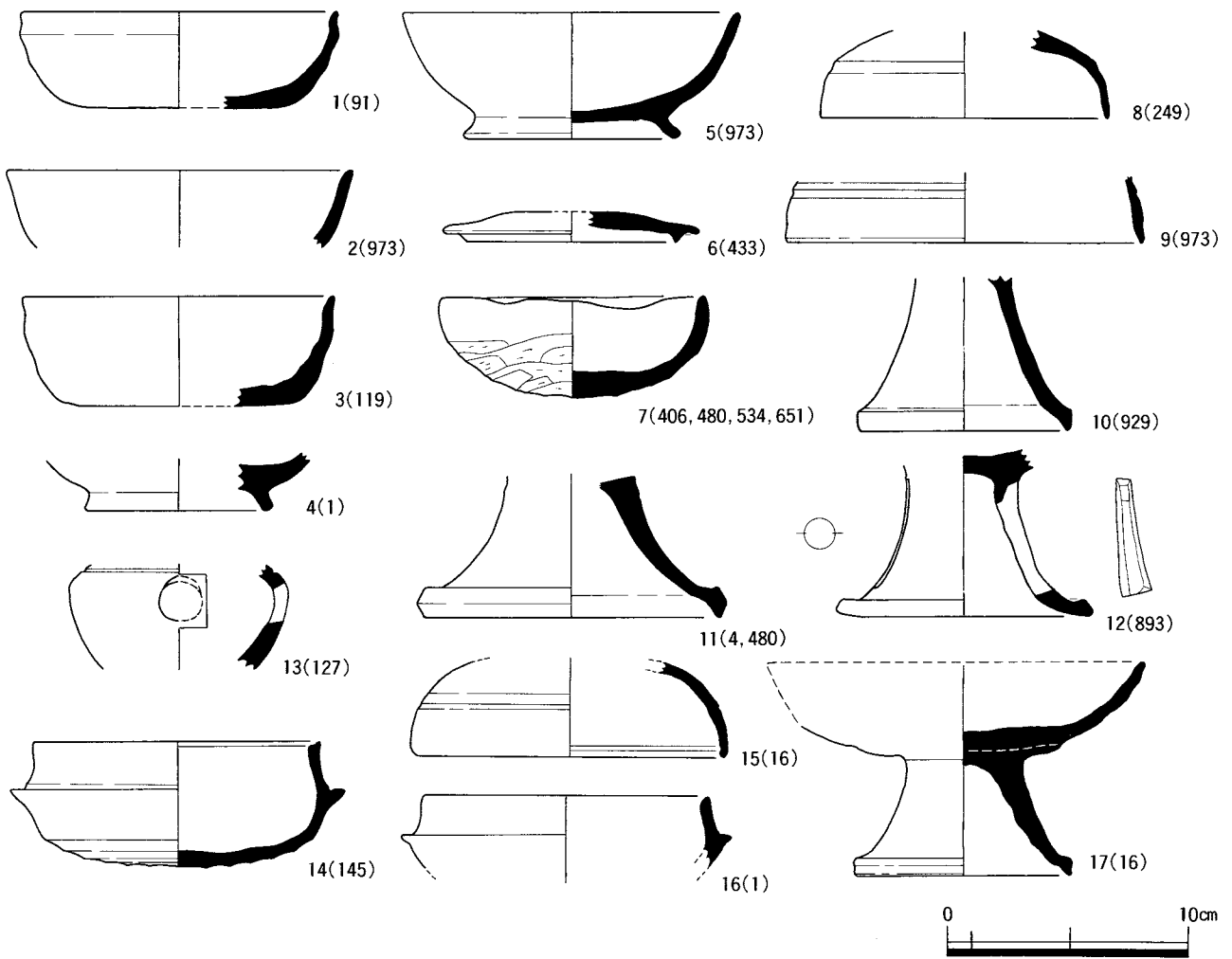
挿図191 奈良時代以降の須恵器 (3) 坏類



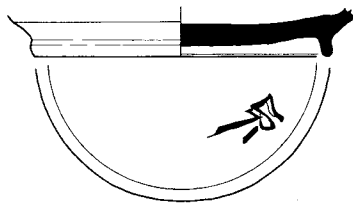
挿図192 奈良時代以降の須恵器 (4) 皿・壺



挿図193 奈良時代以降の須恵器 (5) 壺・蓋等



(山田遺跡 2 区表採・埋土中)



(山田遺跡 1 区)

挿図194 山田遺跡出土須恵器・墨書土器

有蓋高坏 いずれも羨門横の供献品。浅皿状を呈す坏部で、10・11は脚部無孔、12・13は三角透しを持つ。12が口径13.2～13.4×器高8.7cm、13は口径10.8cm、11.6×器高11.2cm。高坏蓋は丸みを帯びた器形で扁平なつまみを有し、軽いヘラケズリを施す。口径14×器高4.7cm。

提瓶 (挿図19) 1は鉤状把手を持ち、2は把手を持たず小型である。

甕 (挿図19) 羨道部埋土中出土の大型甕。4が口径41cm、5が口径20cmで、もともと大小のセットで扱われた2個体と考えられる。

〈山田遺跡3区第2テラス下層須恵器〉 (挿図82-1～6)

坏蓋4・坏身2がある。第2テラス整地下面層の旧地形斜面にころがり落ちた状態で出土した。古新があるが概ね陰田5 (TK209相当) に属する。

坏蓋 丸みを帯びるものとやや扁平気味のものがあり、天井部は浅いヘラケズリを施す。天井部と口縁部の境界は不明瞭で、1・3・4に僅かに凹線が認められるのみである。法量は1、3が口径12×器高4.2cm、12.2×4.4cm、2・4が口径13.6×器高3.6cm、13×3.2cm。

坏身 立上がりが短く内傾する口縁で、底部に浅いヘラケズリ痕を残す。5が口径12.7×器高4.3cm、6が口径12.1×器高4.2cm。

〈研石山遺跡5区第2テラスの須恵器〉 (挿図134)

陰田7古 (7世紀中葉) に該当する。

蓋坏 扁平で退化した形態である。坏蓋1・2は天井部と口縁の境界はなく、天井未調整。1が口径13.3×器高4.0cm、2が12.5×4.2cm。坏身3～8は立上がりが低く内傾し、底部ヘラオコシ後ナデ調整。口径は7が12cm、6が13cm、以外は11cm。器高はいずれも4.0cmである。

隙 (10) 口縁を欠損する。ナデ肩で底部は平底、胴下半ヘラケズリ。

甕 (11) ハの字に開く口頸部で端部を肥厚しつまみあげる。胴体部は横張り気味で丸みを帯びる。口径30.0×器高69.2cm、最大胴径67.5cm。頸部にはカキメをを施し、内面下半はタタキの後軽くナデ消す。

〈研石山遺跡5区小石棺の須恵器〉 (挿図139)

退化した形態であり陰田7 (7世紀中葉) に該当する。

坏蓋 (2) 天井部と口縁の境界はなく、天井部未調整。天井部に一条のヘラ沈線が走る。

坏身 (3) 立上がりが低く内傾し、底部ヘラオコシ後ナデ調整。

横瓶 (1) 形は壺に近く、僅かに円形浮文2個を持つ。口縁の一部を打ち搔く。

法量は(1) 口径7.8(推定)×器高14.6(推定) - 最大胴径15.0cm、(2) 口径12.5×器高4.4cm、(3) 口径10.8×器高3.8cm。

Ⅲ期の須恵器 (挿図189～194、図版75)

山田遺跡3区第2テラス (鍛冶跡)・研石山1区・同5区・下山遺跡に集中する。特に下山遺跡はこの時期のみの遺跡である。壺・細頸壺・短頸壺・甕・蓋坏・埴・高坏・皿などがある。前後の幅を持つものの时期的には奈良時代後半期を中心とするものである。

研石山遺跡5区は坏A b類・皿A類主体の構成であり、坏B類・皿B類が少ない。一方、下

山遺跡は坏・皿共にA類・B類を合わせ持つ。この地における中心が下山遺跡にあったことを示すものと思われる。189-32~35は平安期に下るものである。

坏・皿（挿図189~192）

無高台のA類と、高台をもつB類がある。口縁形態・大きさ・底部調整等により細分できる。

坏A類 内湾気味に立ち上がり端部を丸く収めるA a類（191-1など）、内湾気味に立ち上がり端部を外側に屈曲させるA b類（189-5など）、直線的に外傾して開く薄手のA c類（189-32）がある。法量的に口径11~12×器高3.5~5cm（I）、13~15×器高3.5~5.2cm（II）、口径16~17.5×器高6~6.6cm（III）のまとまりを持つ。

坏B類 やや外傾し直線的に開く口縁を持つB a類（190-2など）と、僅かに外反傾気味に開くB b類（190-1）がある。B b類はロクロ回転痕が著しくやや薄手である。大小があり、B a類は口径12~13.5×器高3.5~4.5cm（I）、口径17×器高6cm台（II）、B b類は口径14×器高6cm台（I）、口径16×器高6cm台（II）のまとまりを持つ。

皿 高台のないA類とこれを有するB類がある。A類は口径10×器高2cm以下（A I）、口径12~16×器高2~3cm（A II）、B類は口径18~22cm×器高3~4.2cmにまとまる。A類・B類がそのまま大小を示し、A類はA II類の口径14cm、B類は口径20cm大が中心である。確認できるものではほとんどが回転糸切底であり、静止糸切底は190-11（坏B a II類）、190-18（坏A a III類）、191-5（坏A b II類）の3点のみである。

蓋（挿図193-1~4）

研石山遺跡5区のもの掲載した。いずれもかえりの消失したものである。

天井部中央が平たく屈曲して延びるA類、丸みを持つB類、水平に延びるC類があり、端部の屈曲の有無も見られる。小振りの宝珠つまみを持つと思われる。

壺・甕（挿図192-18~20・193-5~8）

細頸壺・長頸壺・把手付壺などがある。192-18・19は張肩の高台付き壺。20は撫肩の平底壺。193-5は肩の張る把手付壺。平底で、逆ハの字に開く体部に丸みを帯びた肩部を持つ。接合部は屈曲し突帯が巡る。器壁は薄く繊細なつくりである。やや軟質で明るい灰色を呈し、胎土は緻密。6は広口の土器。小振りでのくの字に屈曲する口縁をもち、一部が凹み注ぎ口となる。7は平底の甕底部。内面に車輪タタキを施す。灰色を呈し、胎土は緻密。

〈山田遺跡3区第2テラス鍛冶遺構関係須恵器〉（挿図82-7~18、図版75）

数は少ないが、形態的に7世紀後葉から9世紀初頭までの幅を示す。7は短頸壺蓋、8は長頸壺蓋。つまみは環状・宝珠の双方がある。坏はA類・B類であり、底部回転糸切りとナデ調整の双方が見られる。16は薄手の皿でより新しい。10・17は逆転し身と蓋になるとと思われる。

〈研石山遺跡5区第1テラスの須恵器〉（挿図148）

蓋、坏A a I類・A b II類・B a II類、皿A II類がある。蓋はかえりが無く宝珠つまみを持つと思われる。5（B a II類）は底部ナデ調整、以外はすべて底部糸切りである。

墨書土器（挿図194）

山田遺跡1区出土。高台付須恵器皿。底面端に墨書きされる。文字は「卯」「郎」「昂」など

とも見えるが不明である。

5. 土師質土器（挿図196-12~17・20~25、197-3~13）

山田遺跡、研石山遺跡、下山遺跡の各遺跡から出土した。坏・鉢・皿・摺鉢等がある。山田遺跡1区では黒色粘質土層中の発見が多く土坑にも伴った。

197-3・4は山田遺跡1区SK06、197-5・6は山田遺跡3区焼土溜りの出土であり、遺構に伴う場合、坏と小皿がセットとなるようである。

挿図197-7~13は山田遺跡1区、196-12~17・20は研石山遺跡1区、196-21~24は研石山遺跡5区、196-25は下山遺跡の出土である。

9~13世紀のものであり、後述の陶磁器類や古銭の時期相にも対応するものである。

坏（挿図196-12・13・15・16・21~23・25、197-3・5・7~13）

高台の有無（A：高台なし・B：高台付）、底部調整、坏部形態、大小などで細分される。

坏A a類 196-15・25が該当し、逆ハの字に開く口縁部を持ち小型・薄手。底部ヘラ切り後ナデ仕上げ。胎土は緻密で赤茶色を呈し、やや軟質。口径11.6~12.8×器高3.2cm。

坏A b類 小型（I）・大型（II）がある。A b I類（197-13・16・21）は、逆ハの字に開く口縁部を持ち、薄手。底部回転糸切りで、胎土は緻密で赤茶色を呈し、やや軟質。A b II類（197-3・13・196-23）は、僅かに内湾しつつ逆ハの字に開く口縁部を持ち、底部厚手。底部回転糸切りで、胎土はやや粗目で灰白褐色~暗灰色を呈し堅い。口径14.8~17×器高4~5cm。

坏B類 a：切離後指押さえ、b：糸切り、c：碗形腰部張出しの三種がある。

坏B a類（196-12） 逆ハの字に開く口縁部に、ハの字に開く脚高台を持つ。小型・薄手。調整・胎土・色調共にA a類と同じである。大きさは不明であるがA a類に準ずると思われる。

坏B b類（197-5） 僅かに内湾しつつ逆ハの字に開く口縁部にハの字に開く脚高台を持つ。大型・底部厚手。胎土はやや粗目で灰白褐色~暗灰色を呈し堅い。口径18×器高6.8cm。

坏B c類（197-22） 腰部がわずかに張る碗形で先尖りの高台が付く。胎土は粗目で薄赤茶色を呈しやや堅い。口径15.0×器高6.2cm。

196-22（B c類）と196-21（A b I類）はほぼ同一地点（研石山遺跡5区4E2）の出土であり、共伴するものと思われる。

皿（挿図196-14・17・24、197-4・6）

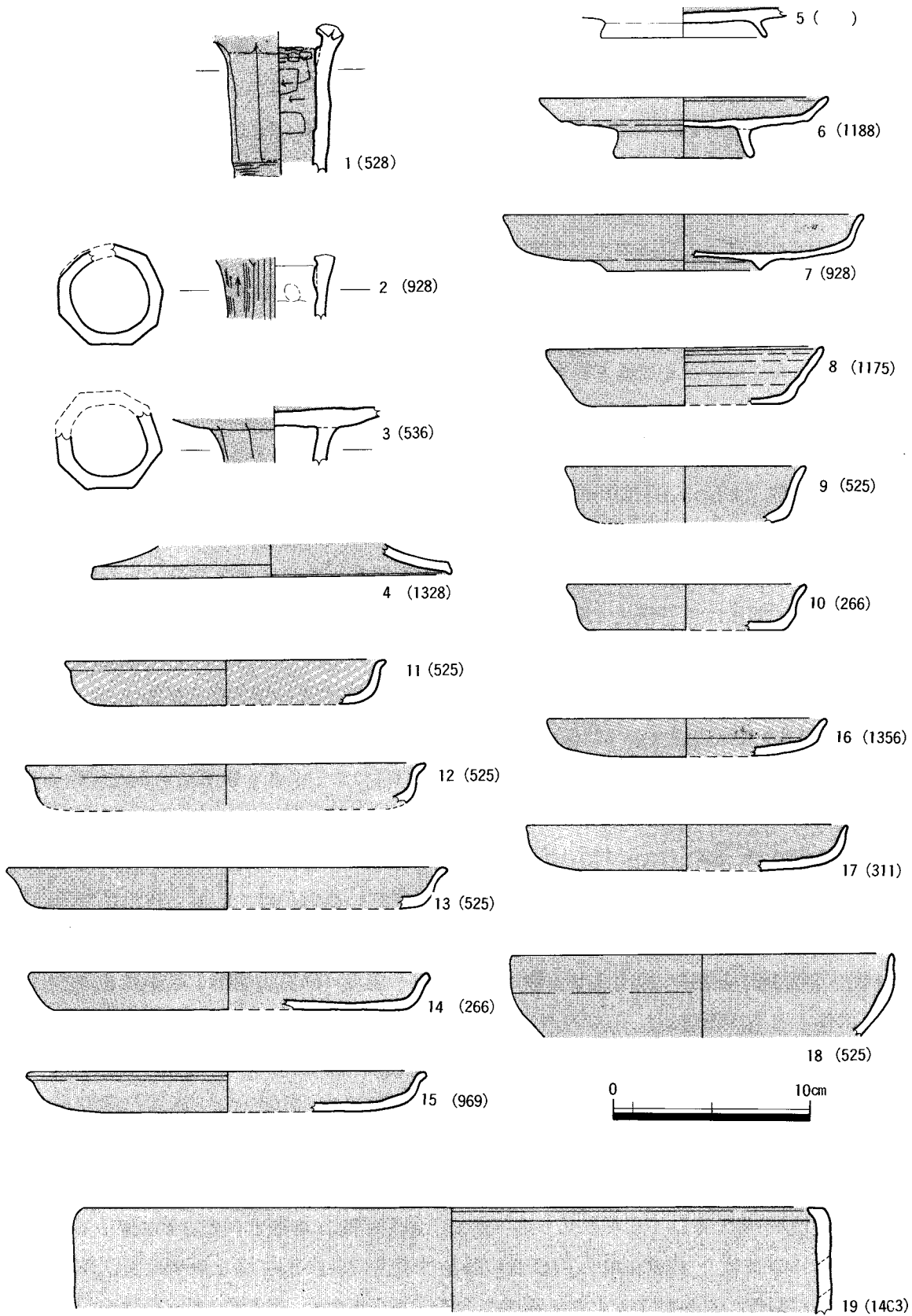
高台の有無（A：高台なし・B：高台付）、底部調整等（a：ナデ・b：糸切り薄手・c：糸切り厚手）で分類される。

皿A a類（196-14・17） 無高台皿。薄手で薄赤茶色を呈す。17は坏A aの可能性もある。

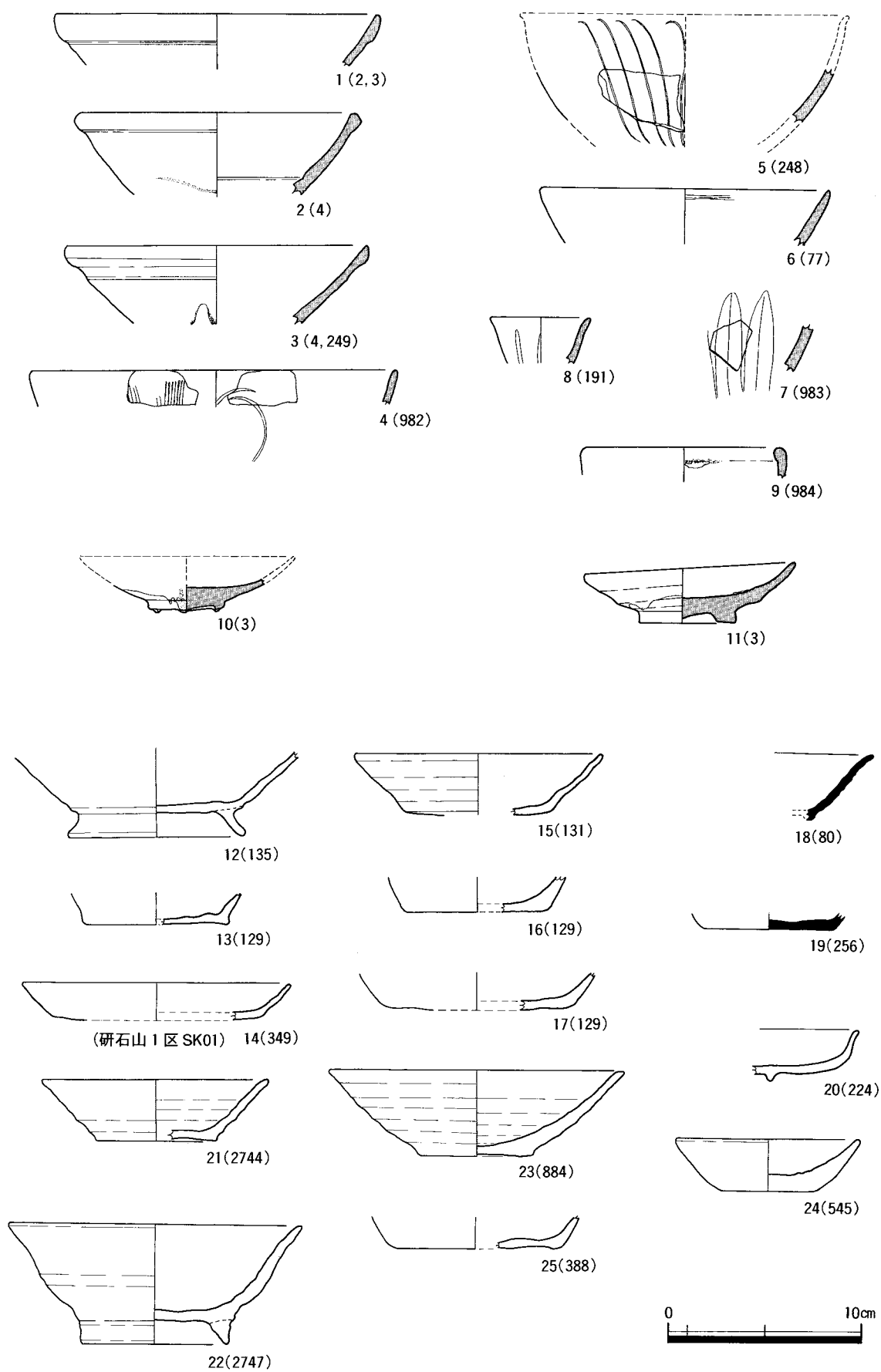
皿A b類（197-4・6） 底部糸切りの回転台土師器小皿。口径8cm台、高さ約1.5cm。

皿A c類（196-24） 底部糸切りの小皿。胎土は緻密で乳白色を呈しやや軟質、外面に赤色塗りの痕跡が残る。A b類より大きく厚手である。口径9.4cm、高さ約2.6cmを計る。

坏A a類は岡山市鹿田遺跡^(註6)・伯耆国庁SK05等^(註7)、坏B a I類は備後国府跡804T類例^(註8)がある。また、坏A b II類は郡家町山田10号窯跡坏I類^(註9)・倉吉市タタキ塚に類例^(註10)がある。坏A a類・



挿図195 奈良時代以降の土師器



挿図196 陶磁器・土師質土器

B a 類と皿 A a 類・B a 類、坏 A b I 類・B b 類と皿 A b 類が対応し、それぞれ 9 世紀前葉、10～12 世紀前葉と考えられる。確証はないが皿 A c 類はやや遅れ 12～13 世紀代と思われる。

摺鉢 (197-1)

山田遺跡 3 区の伏鉢 2 遺構出土。片口を持ち内面に 3 本単位の浅い条線を施す。指押えによる成形で内面に指頭圧痕が残る。砂混りの粗い胎土、乳白色を呈す。口径 29×器高 12.80cm。12～13 世紀代のものと思われる。

6. 陶磁器類 (挿図 196～197)

焼締陶器 (甕、こね鉢)・輸入陶磁器 (白磁碗・皿・小坏、青磁碗・香炉、染付等)・近世陶磁器 (唐津皿・摺鉢、伊万里碗・皿、その他灯明皿等) がある。

焼締陶器は山田遺跡 1 区・3 区、輸入陶磁器は山田遺跡 1 区、研石山遺跡 5 区で出土した。近世陶磁器は山田 2 区の南半分に集中した。神社遺構に伴うものと考えられる。

輸入陶磁器 (挿図 196-1～10)

山田遺跡 1 区と研石山遺跡 5 区で出土した。山田遺跡 1 区のを掲載した。

白磁 1～3 は玉縁口縁の白磁碗。胎土は淡灰白色系で精良、釉は乳灰白色を呈しやや薄く施釉される。1 はやや青灰色掛かり内面に貫入が入る。2 は硬く光沢を持つ。3 は白色が強くやや粗い。8 は白磁小坏で端反りの口縁を持つ。10 は抉り高台皿。3 か所を抉り込む。

青磁 4 は同安窯系と思われる青磁碗。外面に櫛書き、内面にも刻文を施す。胎土は淡灰色系でやや粗い。釉はややくすんだ淡灰緑色を呈し薄く施釉される。光沢は少ない。5～7 は龍泉窯系青磁碗。5、7 は陽刻鎬蓮弁文。5 は胎土は淡灰色で精良、釉は灰緑色を呈し内外にやや厚く施釉される。7 の胎土は灰白色で精良、釉は淡薄緑色を呈し内外にやや厚く施釉される。6 は素縁の青磁碗。釉は深緑色、口縁内面に薄く凹みが巡る。9 は青磁香炉。

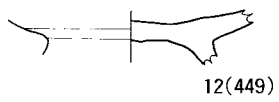
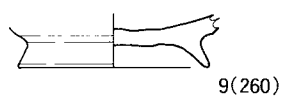
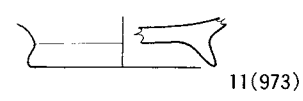
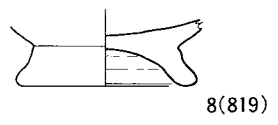
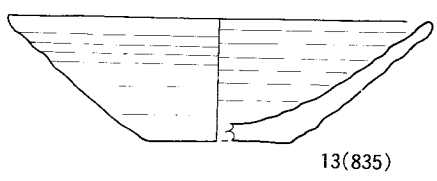
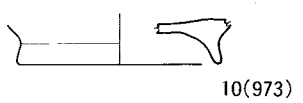
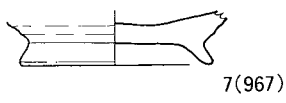
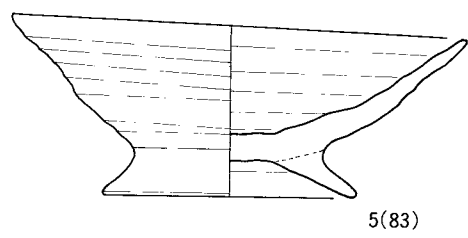
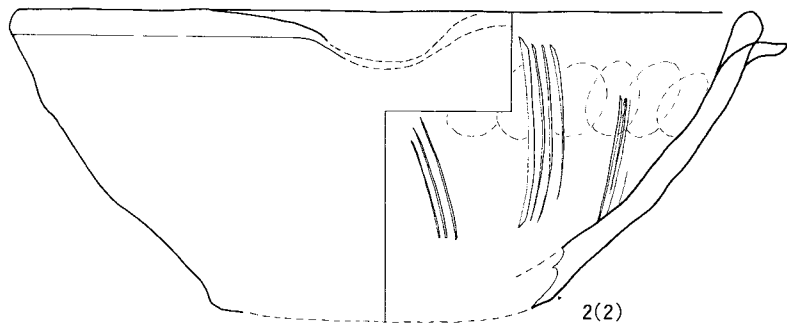
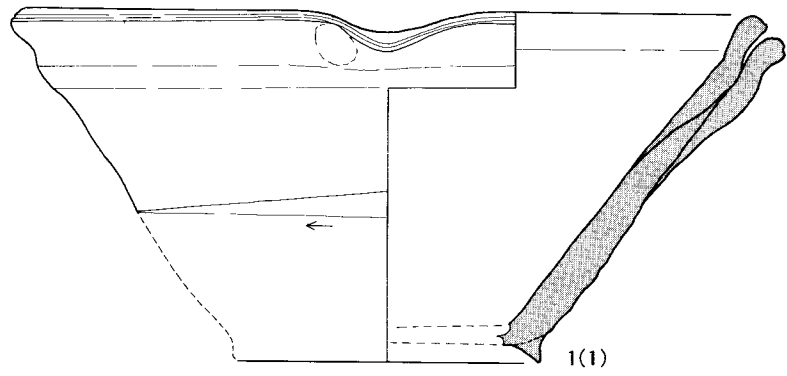
時期は、白磁の碗・小坏が 11 世紀後半～12 世紀代、白磁皿 (10) が 15 世紀初頭。青磁は、碗 (4) が古式で 12～13 世紀、以外は 13～14 世紀代と思われる。一方、研石山遺跡 5 区では、玉縁口縁白磁碗 2、素縁白磁碗 1、白磁碗高台 1、青白磁小坏 1 がある。形態的に 11 世紀後半～12 世紀代のものと思われ、山田遺跡に比べ古い時期のみにまとまっている。

焼締こね鉢 (挿図 197-1、図版 77)

山田遺跡 3 区の伏鉢 2 遺構出土。片口を有し僅かな高台を付ける。茶褐色を呈し、上半を横ナデ、下半を横方向のヘラケズリで仕上げる。胎土はやや粗く 2～4 mm 大の白色粒が目立つ。口径 29×器高 14.3cm。捏ね鉢で高台を付ける形態はあまり類例を見ない。僅かに 11 世紀後半～12 世紀前葉の備後東部の須恵器系捏ね鉢^(註11)や、13 世紀末～14 世紀前半期の常滑焼^(註12)の中に見受けられる。時期に開きがあるが検討の手掛かりとしたい。

挿表 3 陶磁器出土比較表

	青白磁小坏	白磁碗	白磁小坏	白磁皿	青磁碗	青磁香炉
山田遺跡 1 区		○	○	○	○	○
研石山遺跡 5 区	○	○				



挿図197 焼締陶器・土師質土器

近世陶磁器（挿図196-11）

砂目積みの唐津皿。胎土は淡黄土色、灰白透明釉。山田遺跡1区出土。17世紀前半期。

7. 土製品・ミニチュア土器（挿図198）

分銅形土製品2・ミニチュア土器がある。

分銅型土製品（1・2） いずれも上半部破片。山田遺跡2区の谷あいの二次堆積である。

1はS I 17覆土中出土。現存幅10（復元10.5）×縦長6.5—厚さ0.8cm。周縁部に細かな刺突文をめぐらし、頭頂部には裏面から抜ける貫孔を施す。褐色～黄褐色を呈し胎土は緻密、焼成も良好である。2はE-2グリッド出土。現存幅9（復元14）×縦長7.5—厚さ1.6cm。周縁部を櫛による刺突文・波状文で飾り、頭頂部には裏面から抜ける貫孔を施す。褐色～黄褐色を呈し、胎土は緻密、焼成も良好である。形態・胎土等から弥生時代中期後葉に属す。

ミニチュア土器（3～7） 山田遺跡1区出土。甕・埴類。3は埴形。口径9.2×器高6.3cm。4は甕形。口径6.2×器高6.9cm。5～7は埴形で指頭圧痕が著しい。それぞれ口径4.3×器高2.7cm、口径6.5×器高3.6cm、口径6.5×器高3.1cm。

掲載以外に研石山5区東谷流路内で甕形1点が出土している。

8. 石器・石製品類（挿図199）

紡錘車・玉類（子持勾玉・勾玉・有孔円盤）・未成品等がある。研石山遺跡5区では紡錘車・子持勾玉・有孔円盤がそれぞれ住居跡に付随するような形で出土した。

紡錘車（1～4） 山田遺跡1区1（1）、研石山遺跡5区3（2～4）の計4個が出土した。2・3はS I 12とその近くから、4はS B 05の出土である。1は偏平な算盤玉形で径4.4cm×厚さ0.9cm—重さ20g。2～4は断面梯形で、順に径4cm×厚さ1.4cm—重さ28g、径4.4cm×厚さ1.4cm—重さ28g、径4.3×4.8×厚さ2.1cm—重さ16g（半欠）。2は側面に鋸歯文状、裏面に鋸歯文の崩れたような放射状の線刻が施され、3の裏面部分にも僅かな線刻がある。1・3は黒灰色の堆積岩質、2は蛇紋岩系と思われる。4は土製の焼物。便宜上この項で扱う。全体に黒灰色、一部乳褐色。胎土は緻密、やや軟質。時期は明確ではないが、出土状況等から1が古墳時代中期、2・3が中期末～後期初頭、4は後期後半期のものと考えられる。文様をいれるのは古墳時代後期に多いとされており、2・3についてはやや検討が必要である。

有孔円盤（5） 研石山遺跡5区S I 16とその近くから2個出土した。完存の1点を図化した。5は2孔を持ち、径2.3×2.5cm×厚さ0.4cm—重さ3.1g。蛇紋岩系。残り1点は1/3を欠くが、3.5×2.9cm×厚さ0.3cmの楕円形で2孔を持つと思われる。蛇紋岩系。

子持勾玉（8） 研石山遺跡5区S I 15出土。1/4に破碎された頭部破片であり、現存長さ5cm、身幅2.8cm、厚さ1.7cmで子勾玉5個を残す。復元推定長は7～8cm、子勾玉側面各4、背面6～7を持つものと思われる。蛇紋岩系。（第V章に詳述）

ミニチュア勾玉（6） 山田遺跡1区南側の第1グリッド出土。長さ1.2×身幅0.5×厚さ0.38cm—重さ0.35g。深い緑色を呈す。蛇紋岩系。

石器類（挿図200～204）

石鏃・石斧・石皿・槌状石器・石庖丁・磨石・砥石・有溝土錘・楔形石器・その他がある。整理の都合上一部について報告する。

石鏃（挿図200・201） 22点。凹基16・平基2・未成品4。黒曜石製13・サヌカイト製7。重さは0.5～1.0g、1.25～1.65g、3.15～4.1gの3領域に分布する。形態的に縄文時代のものがほとんどであるが、研石山5区の200-13（サヌカイト製）と下山遺跡の201-7（サヌカイト製）などは弥生時代に属すると思われる。200-10は研石山5区SK05（落とし穴）の出土である。

石斧（挿図203-1～3） 山田遺跡に多い。打製、磨製の双方があるが完形のものはいくつか少ない。槌として転用したものも見られる。明確ではないが弥生時代中期を中心とするものと思われる。

石庖丁（挿図203-5） 山田1区出土。半壊廃棄されたものである。薄緑色の薄い摂理面を持つやや軟質の石材である。

砥石（挿図203-5） 山田・研石山・下山各遺跡から15点以上を確認した。石材は砂岩系・凝灰岩系である。弥生時代集落と共に、後の鍛冶生産集落にも関係するものと思われる。203-6～7は小型で吊紐孔を持つ。

9. 木器・木製品（挿図205・206）

研石山遺跡5区の北谷流路でまとまって出土した。古式須恵器に先行する堆積である。火鑽臼・ツチノコ・杵・鋤・有孔木製品・砧状木製品・柱・杭・加工材等がある。火を受けた痕跡を残すものがあり、破棄・焼却されたものと思われる。（『萱原・奥陰田II』に詳述）

10. 鉄器・鉄製品（挿図20・105・207）

鉄剣・鉄刀・ヤリガンナ・刀子・鉄鏃・鉄斧・鋤先・紡錘車・鉄鎌・鉄滓・その他不明鉄器等がある。鉄斧・鋤先・紡錘車・鉄滓などは鍛冶に伴うものと思われる。

挿図207中、1・2・4・6～9が研石山遺跡5区、3・10が下山遺跡、5が山田遺跡3区伏鉢遺構1、11・12が同第2テラスの出土である。

鉄剣 研石山1号墳SX01棺内出土。錆化が著しく進んでおり僅かな痕跡を写し取った。鎧などの詳細は確認できなかった。全長45.0cm、幅3.1cm。

鉄刀（挿図20-1・2） 萱原1号横穴石棺内出土。片関。全長95.8cm、幅3.5cm、刃部長80.0cm、厚さ0.4cm。鏝は8.0×6.4cm。

鉄鏃（挿図20-5・6、207-4） 萱原1号横穴のほか、研石山遺跡1区（7点）、5区（1点）で出土した。20-5、207-4は有茎三角形で腸袂をもつ。20-6は平基有茎。鏃長×幅は20-5が6.6×3.2cm、20-6が5.2×3.1cm、207-4が2.2×1.6cm。

刀子（挿図20-3・4、207-1・3・6・7） 鉄鏃同様、萱原1号横穴のほか、山田遺跡2区、研石山遺跡1区、5区、下山遺跡などで出土した。

ヤリガンナ 研石山1号墳SX01棺内出土。

鉄斧（挿図20-8、207-8） 萱原1号横穴のほか、山田遺跡1～3区、研石山遺跡1区、

5区、下山遺跡などで出土した。20-8は折込式で長さ8.4×幅4.4cm、厚さ3.1cm。207-8は挿入式で刃部のみ残存、刃部幅6.0cm。

鋤先 (挿図207-10~12) 山田遺跡3区第2テラス(10~12)、下山遺跡で出土した。出土地が鍛冶関係遺跡であり、この地での鍛冶製品と考えたいが、成分分析等を詰めた上で別途検討したい。207-12は試掘時の出土でほぼ完存。長さ23.9×幅22.2cm、刃部最大幅7.5cm、厚み0.8cm。出土遺跡から奈良時代後半期のものと思われる。

鉄鎌 (挿図207-5) 山田遺跡3区「伏鉢1」内出土。北宋銭を伴った。全長22.2cm、刃部長さ17.8×最大幅3.0cm、厚み0.3cm。

紡錘車 (挿図207-9) 研石山遺跡5区出土。径4.9cm、厚さ0.4cm、軸厚0.6cm。

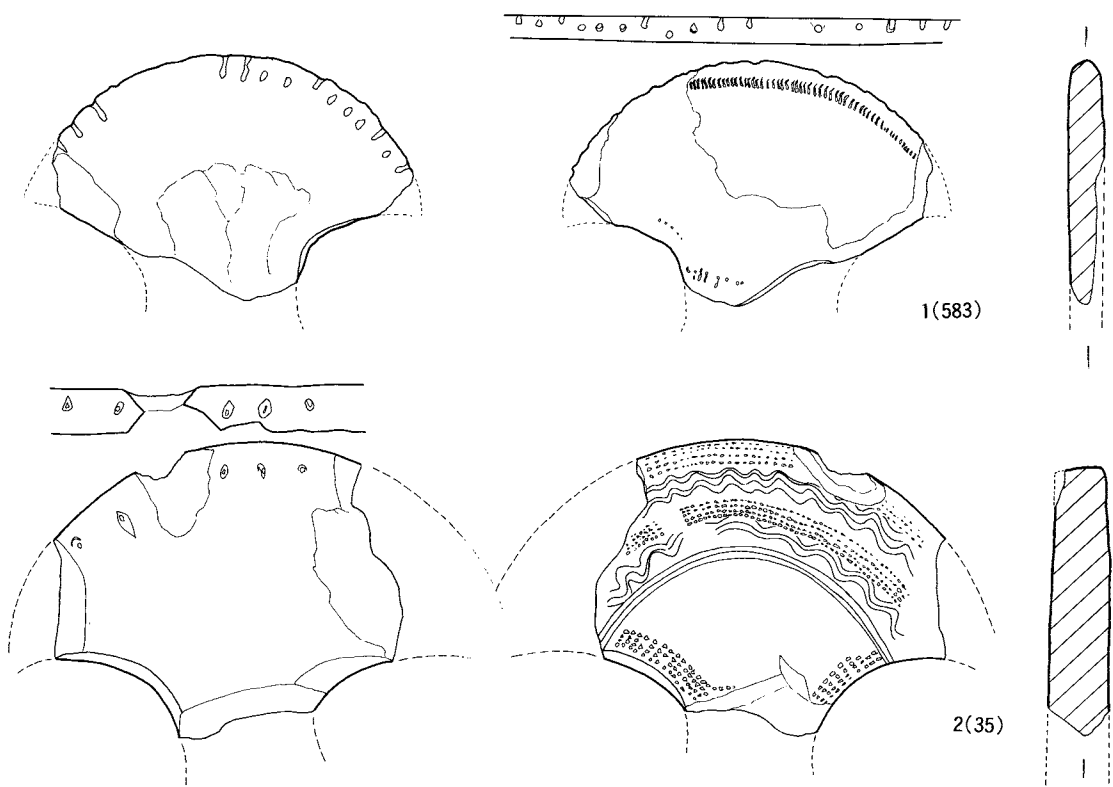
鉄滓 山田遺跡1~3区、研石山遺跡1区・5区、下山遺跡で出土した。鉄滓は製錬滓・精錬鍛冶滓・鍛造鍛冶滓があるが、製錬滓は少なく鍛冶滓がほとんどを占める。

不明鉄器 (挿図20-7) 四角な針金を二つに折り曲げたY字状製品。基部は丸く膨らみを持つ。長さ11.6×幅2.7cm、厚さ0.4cm。萱原1号横穴出土。

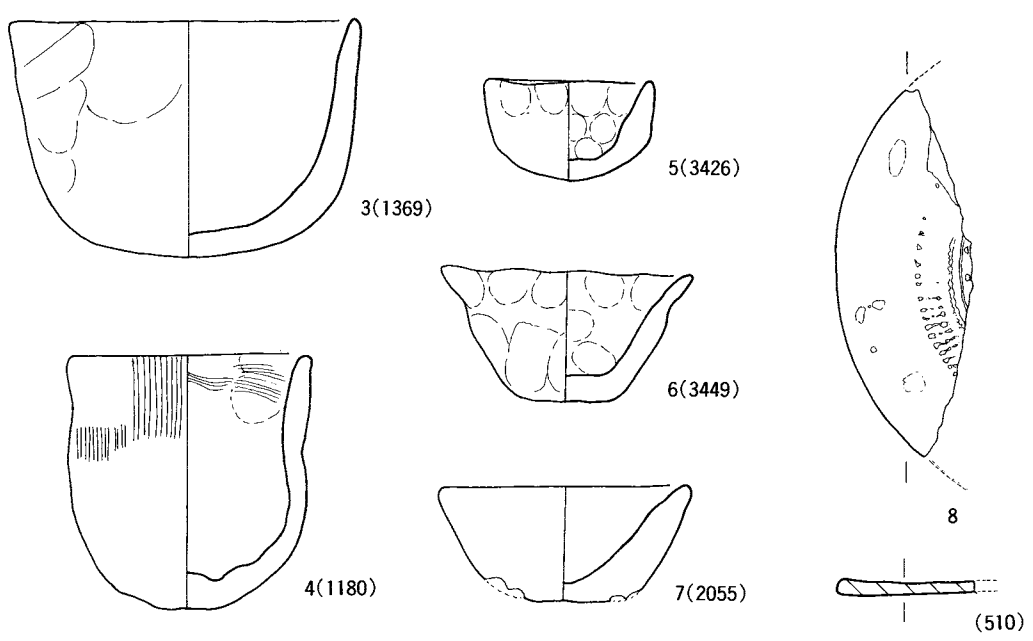
11. 古銭等 (挿図207)

17枚出土した。内訳は、至道通宝(初铸造年995)1・嘉裕元宝(1056)1・熙寧元宝(1068)1・元豊通宝(1078)1、寛永通宝(1634年)11、常平通宝1(17C後・朝鮮)・不明1である。舶載銭は、至道通宝が研石山5区7E1黒色土中、嘉裕元宝・熙寧元宝・不明1が山田遺跡3区の伏鉢1遺構内(摺鉢-挿図197-2)、元豊通宝が山田遺跡3区の伏鉢2遺構内(捏ね鉢-挿図197-1)の出土である。いずれも北宋銭であり初铸年でいけば10~11世紀代に集中している。寛永通宝は山田遺跡2区(旧2・3区、SK12)・下山遺跡の出土である。

- 註1 施文は今一つはっきりしない。菱形であるとする、上福万遺跡I-2-c類に該当する。北浦弘人「研究ノート 大山山麓の縄文時代早期の土器について」『水曜考古談叢』水曜考古倶楽部 1987.3
- 註2 『上福万遺跡・日下遺跡・石州府第1遺跡・石州府古墳群』鳥取県教育文化財団 1985
『上福万遺跡 II』鳥取県教育文化財団 1986
『長山第1遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会 1985
- 註3 正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992、谷口恭子ほか『岩吉遺跡Ⅲ』鳥取市教育委員会 1991、牧本哲雄ほか『南谷大山遺跡』鳥取県教育文化財団 1992 など。
なお、本報告での編年・年代観は青木遺跡編年に準じた。『青木遺跡 III』青木遺跡発掘調査団 1978
- 註4 甕F類としたものは、概ね、TK208からTK10併行期までの存続が認められる。
『仁王堂遺跡』大山町教育委員会 1991、『百塚53・105・106・107号墳、百塚第1遺跡、原田遺跡発掘調査報告書』淀江町教育委員会 1981、『東宗像遺跡』鳥取県教育文化財団 1985 など。
- 註5 甕形口縁の竈はTK47併行期に北陸でも見られる。出現期の様相を伝えるものと思われる。
四柳嘉章「古墳時代の沙庭と祭具-富来高田遺跡祭祀遺構の考察-」『北陸の考古学 26号』石川県考古学研究会 1983
- 註6 橋本久和「瀬戸内の中世土器」『中世土器研究序論』真陽社 1992
- 註7 『伯耆国庁跡発掘調査概報(第4次)』倉吉市教育委員会 1977
- 註8 前掲註6による。
- 註9 『山田古窯跡群(久谷地区の調査)』郡家町教育委員会 1987
- 註10 『打塚遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1984
- 註11 「鎌山遺跡」『福山市文化財年報19』福山市教育委員会 1983 断面三角形の高台を貼付ける。
- 註12 服部実喜「中世鎌倉における陶磁器構成の時代的変遷」『貿易陶磁研究No.5』日本貿易陶磁研究会 1985
なお、須恵器に関しては、萩本勝・佐古和枝「須恵器について」『陰田』米子市教育委員会1984を参考にした。



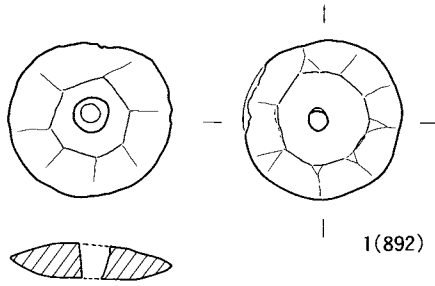
1. 山田遺跡 2区 Si-17埋土
2. " " E-2グリッド



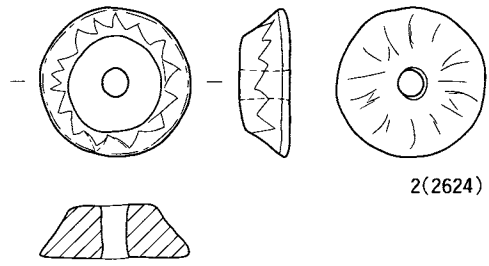
(山田遺跡 1区出土)



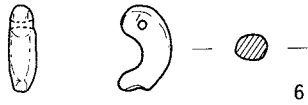
挿図198 鏡・土製品



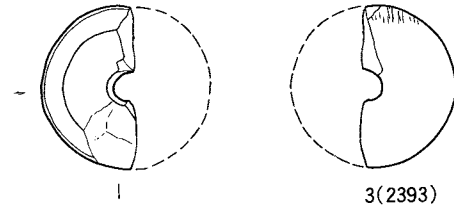
1(892)



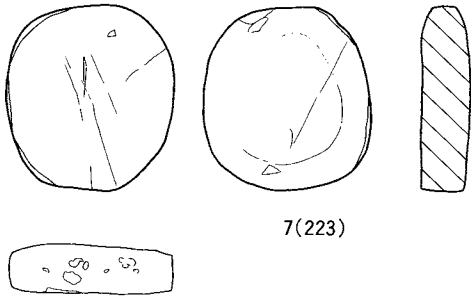
2(2624)



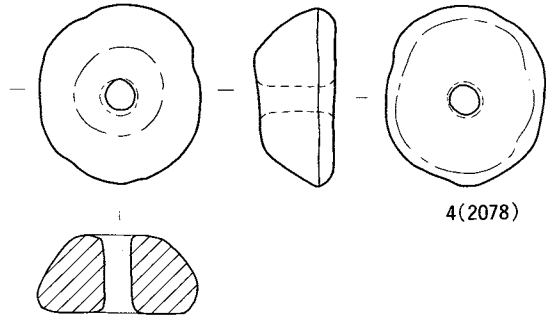
6



3(2393)

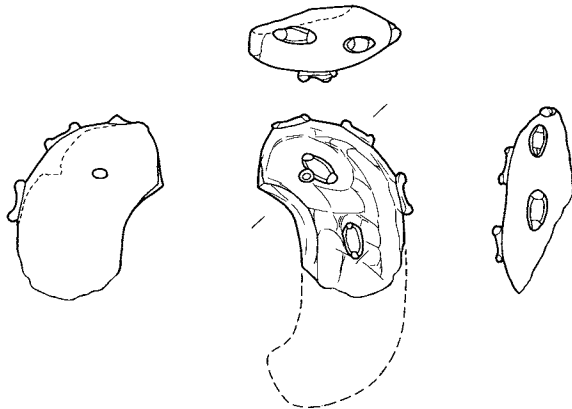


7(223)

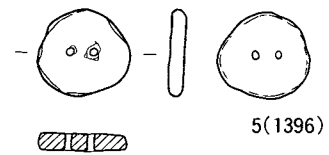


4(2078)

(山田遺跡 1区)
1・6・7

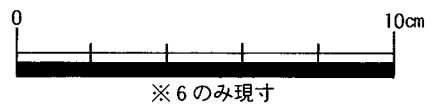


8(2324)

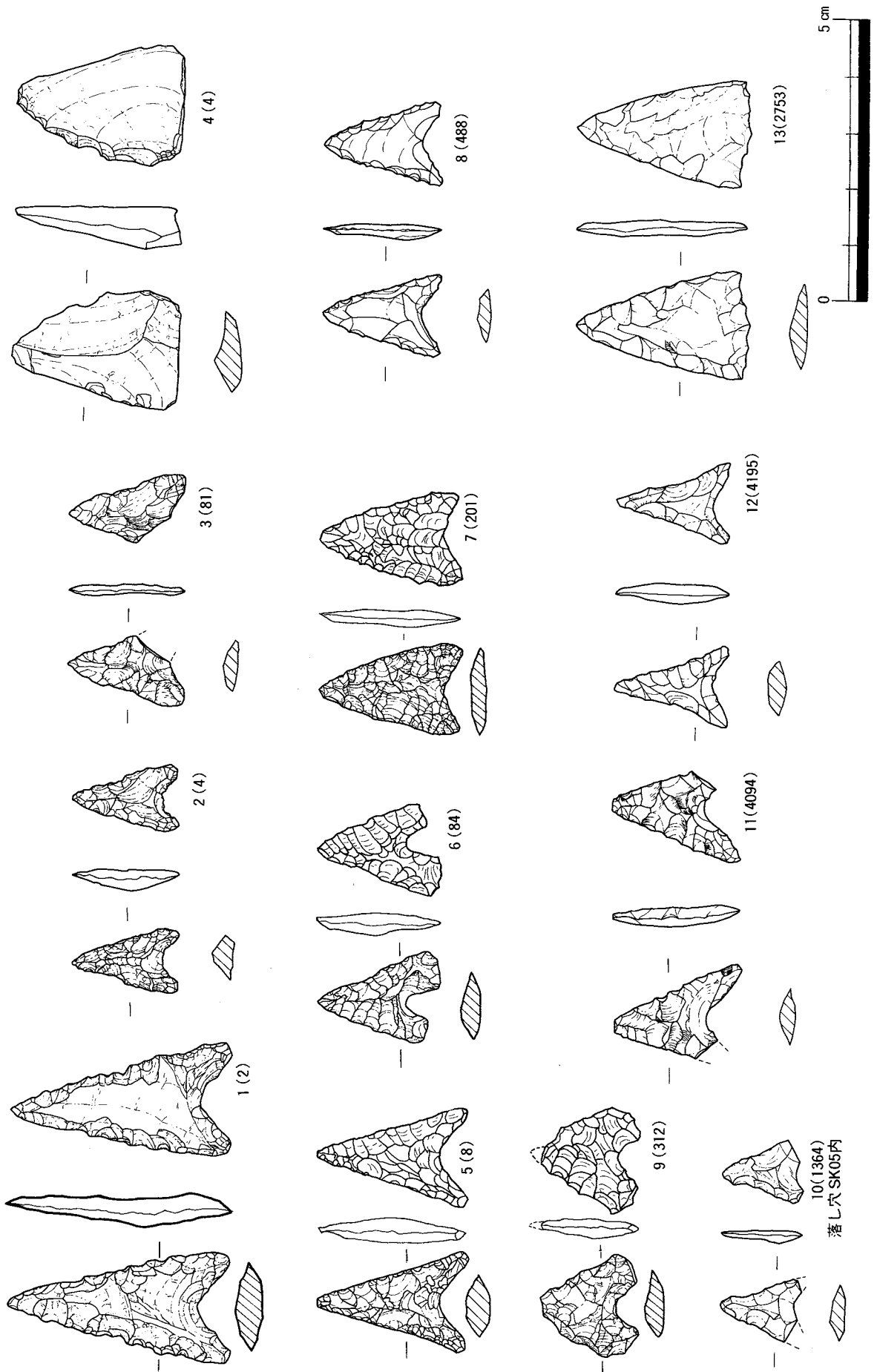


5(1396)

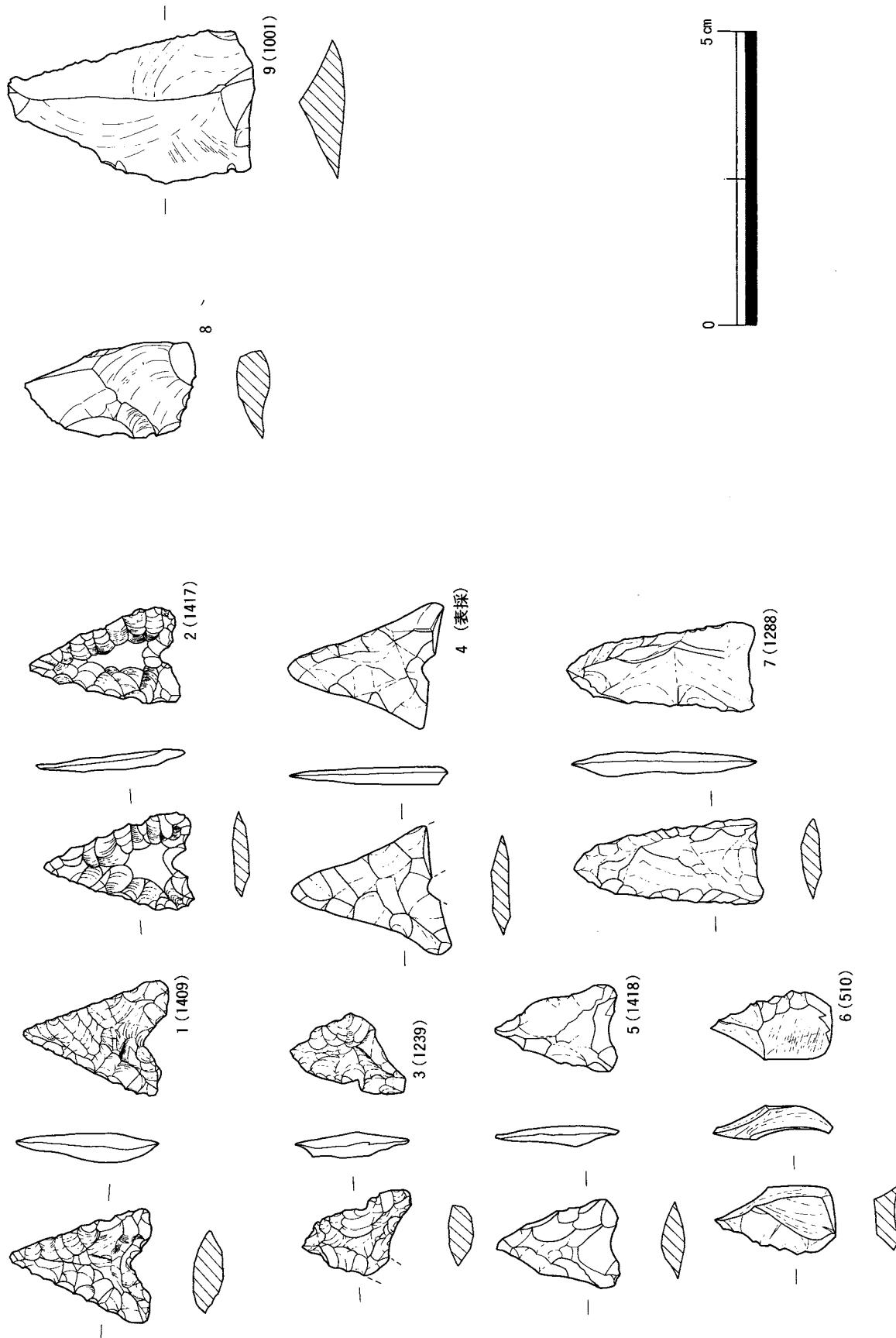
(研石山遺跡 5区)
2~5・8



挿図199 土製・石製模造品類



挿図200 石器類 (石鏃)



挿図201 石器類 (石鏃)

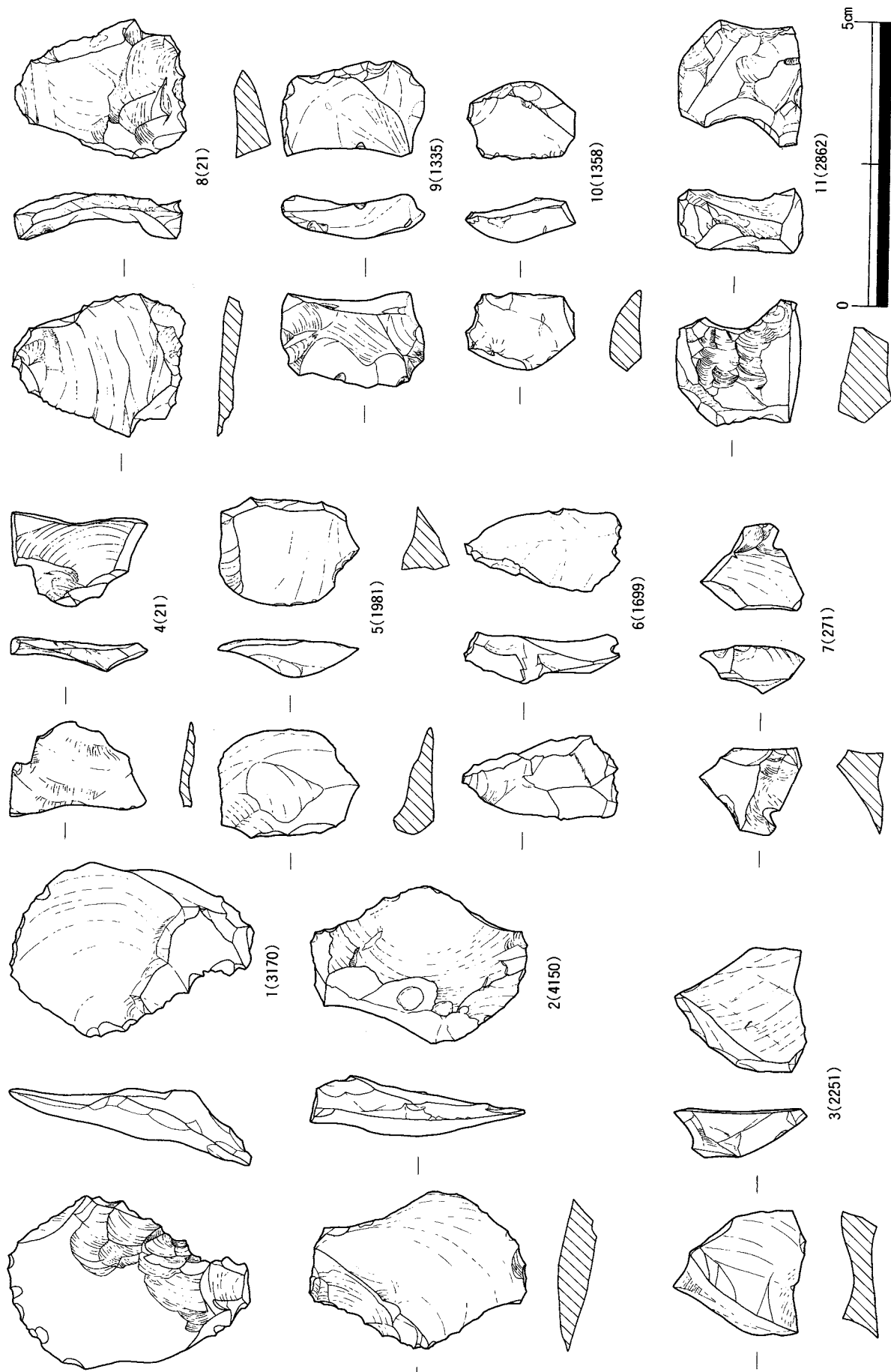
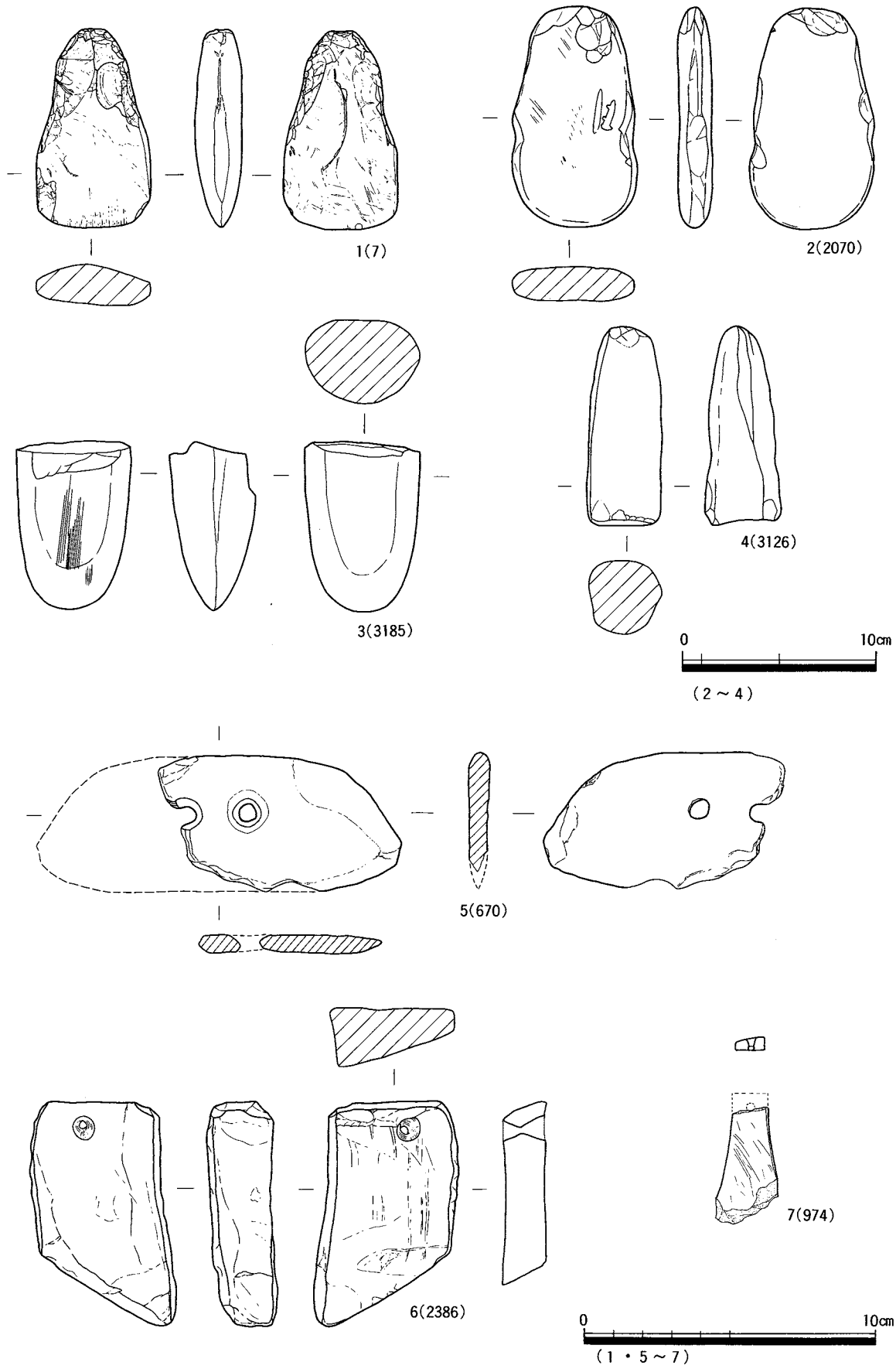
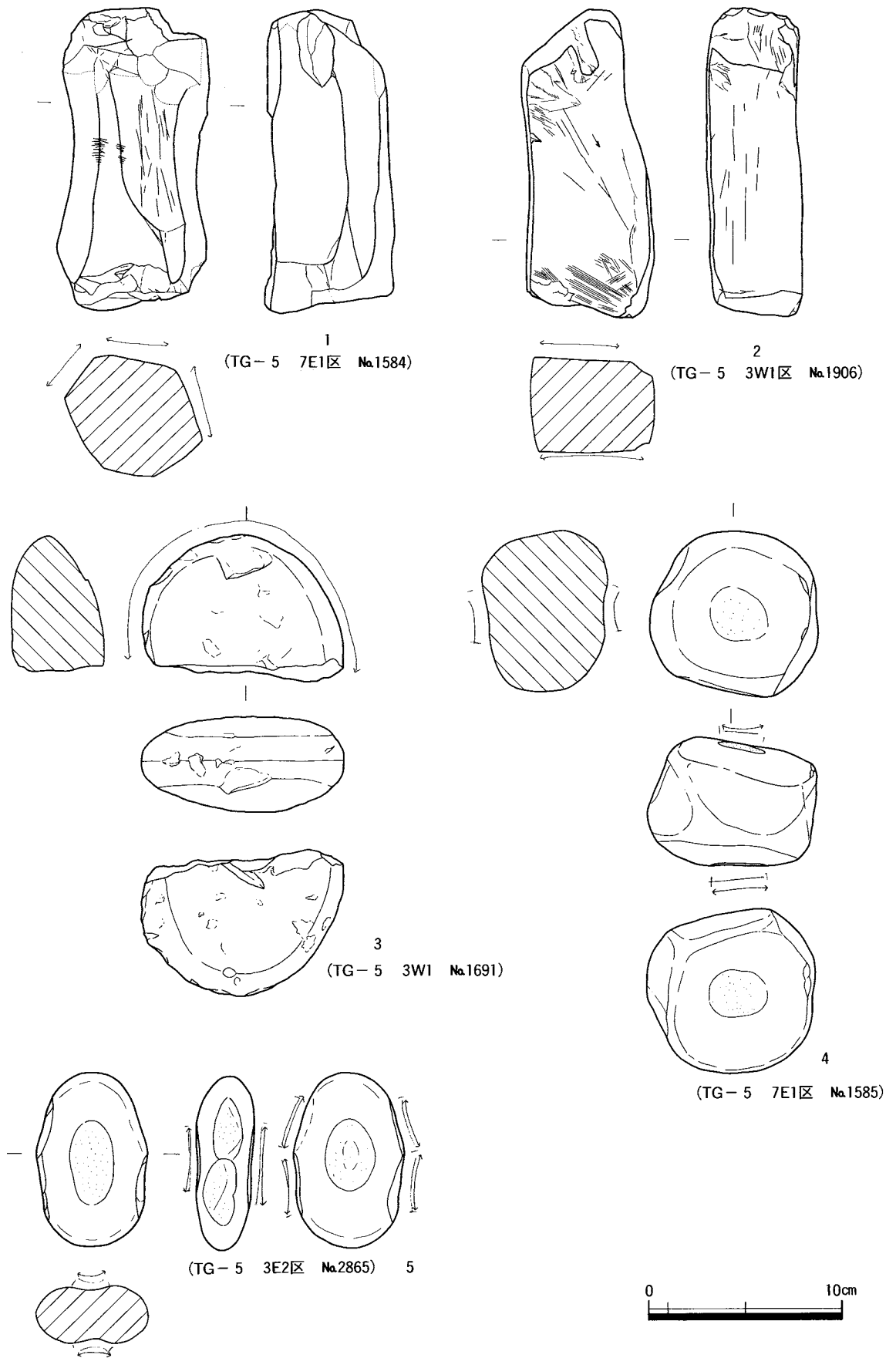


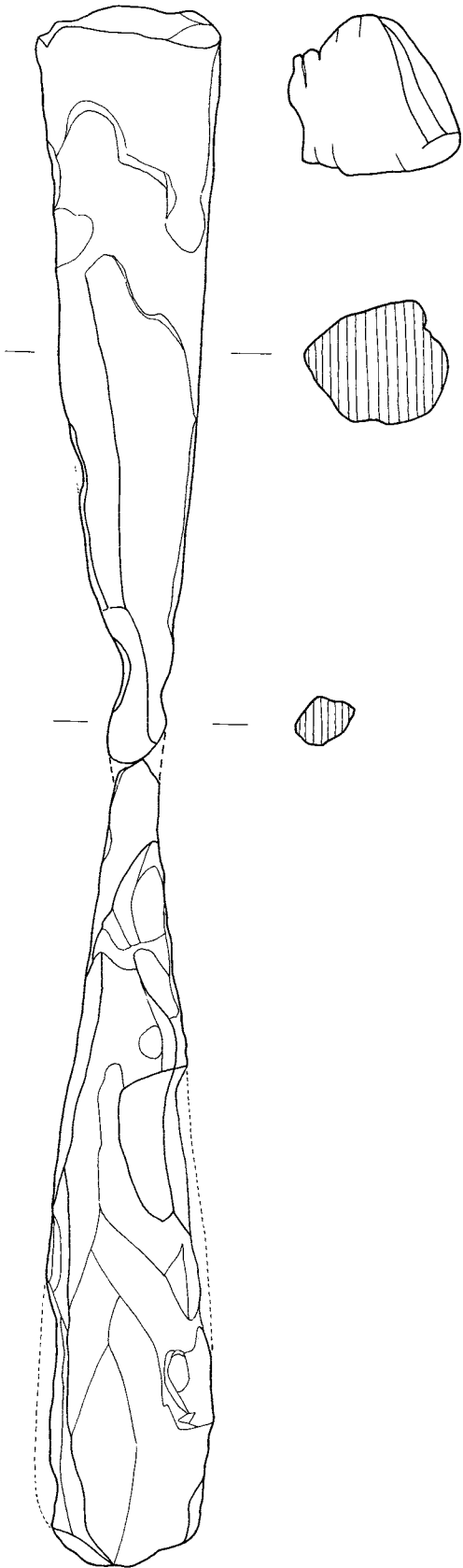
插图202 石器額 (剥片)



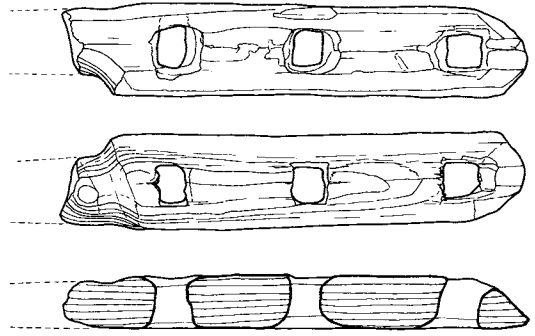
挿図203 石器類 (石斧・石包丁・砥石)



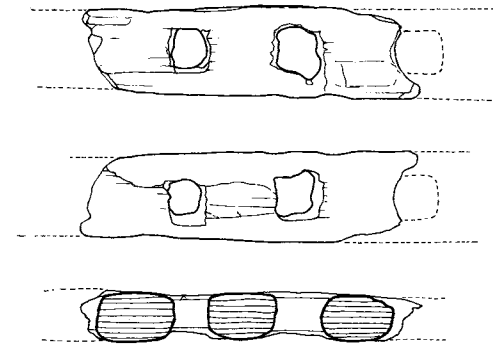
挿図204 石器類 (砥石・叩き石)



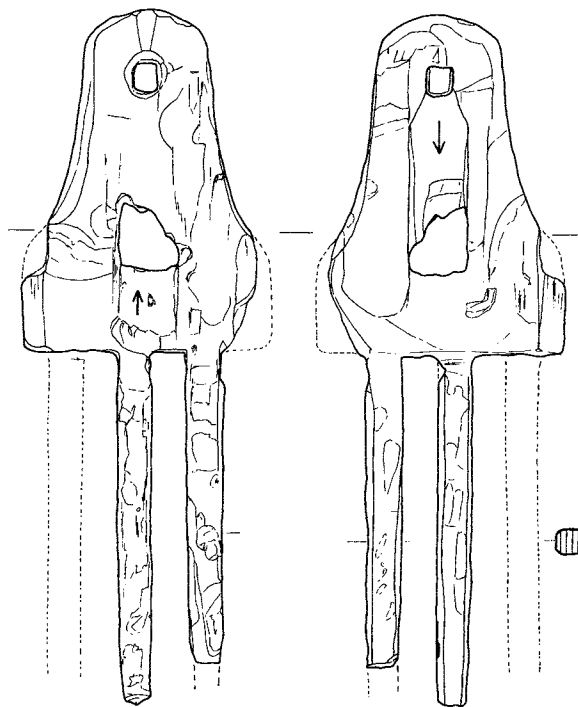
1(1660)



2



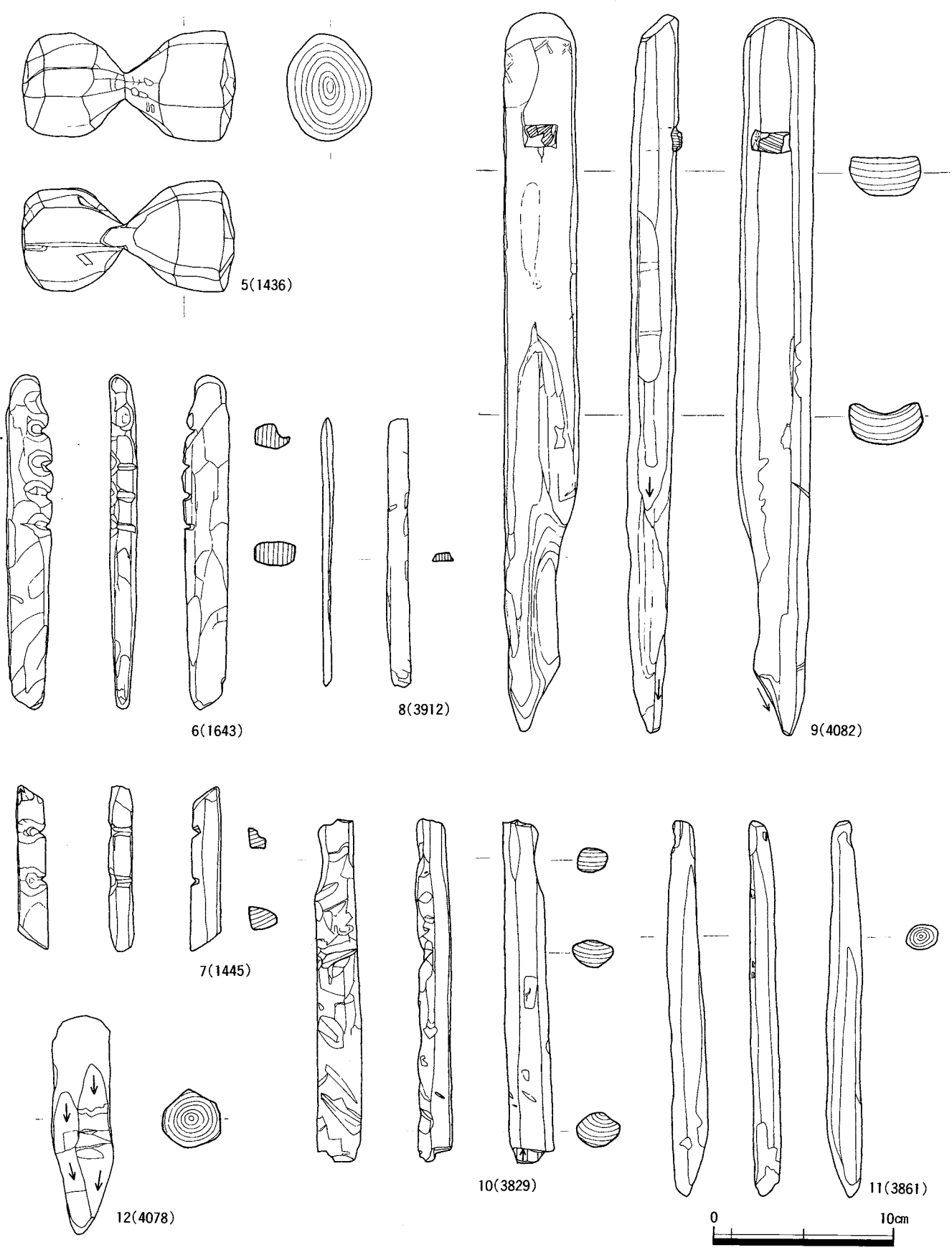
3(1656)



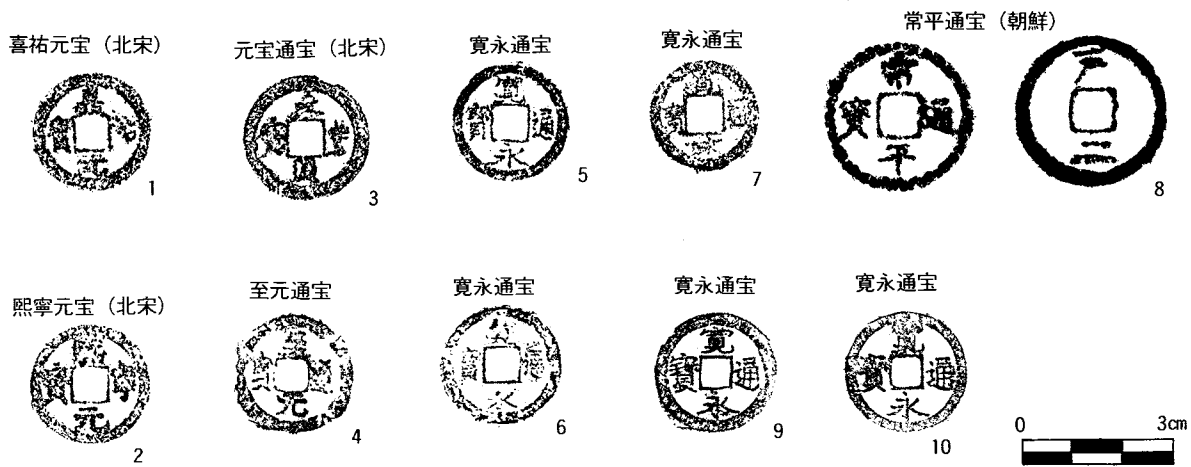
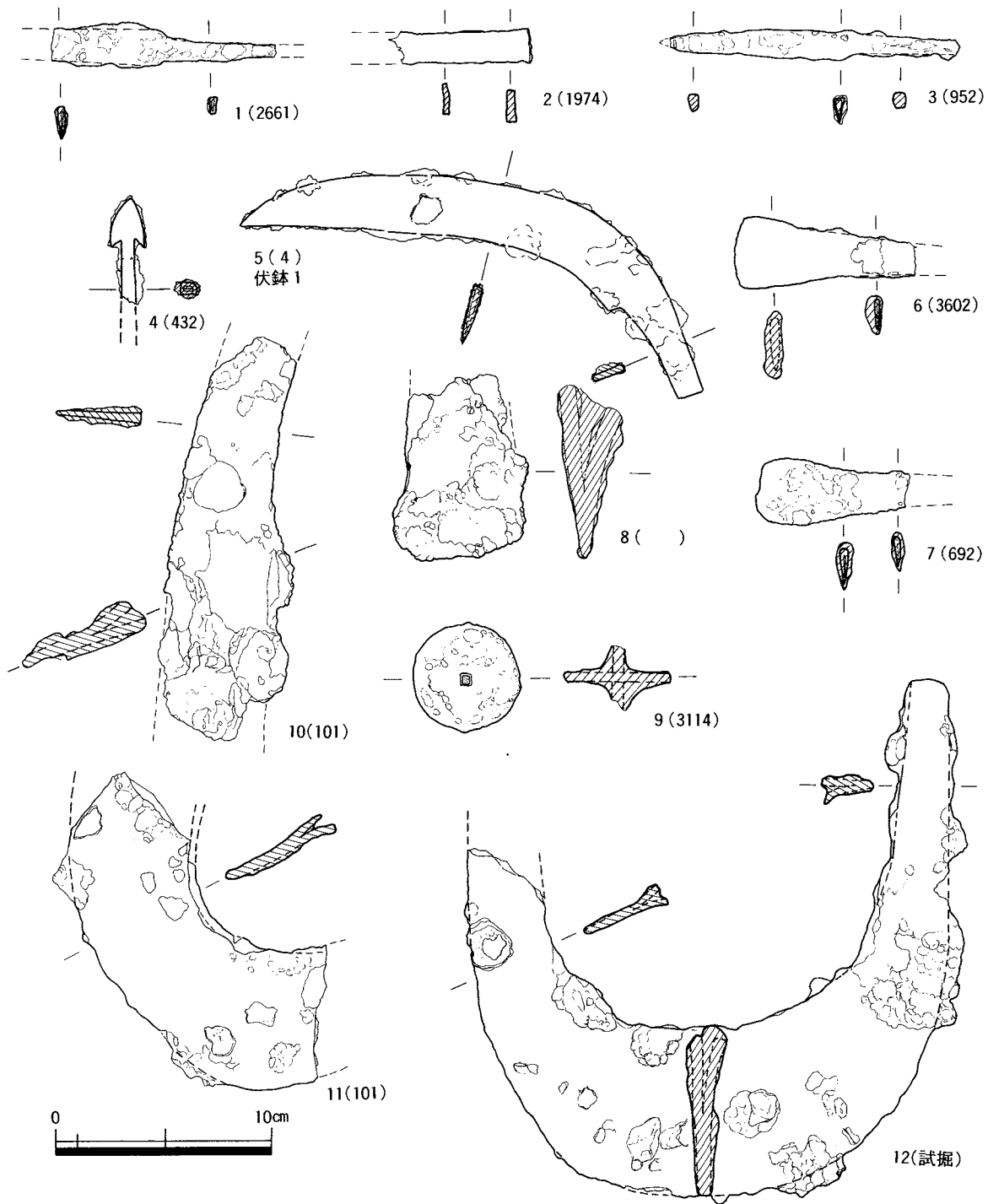
4(1147)



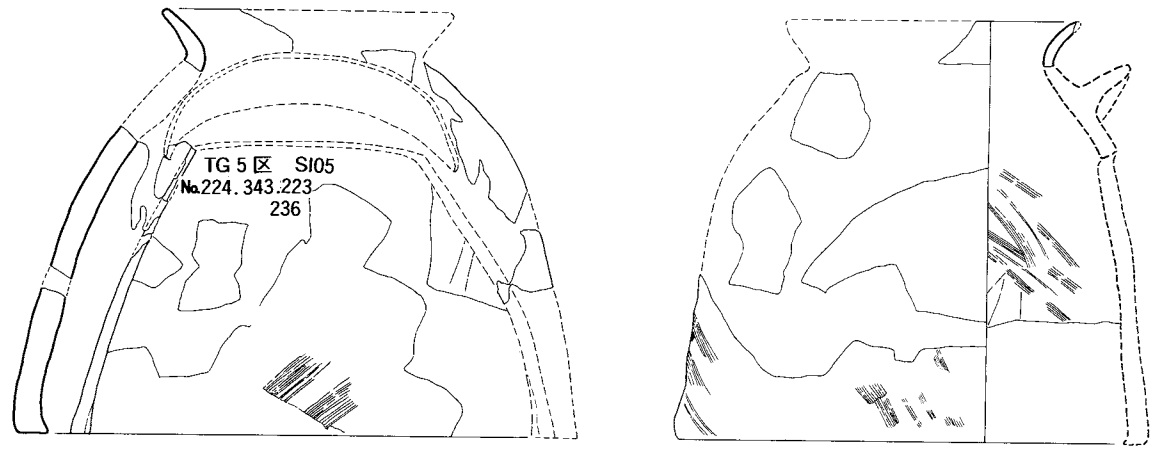
挿図205 木器・木製品



挿図206 木器・木製品

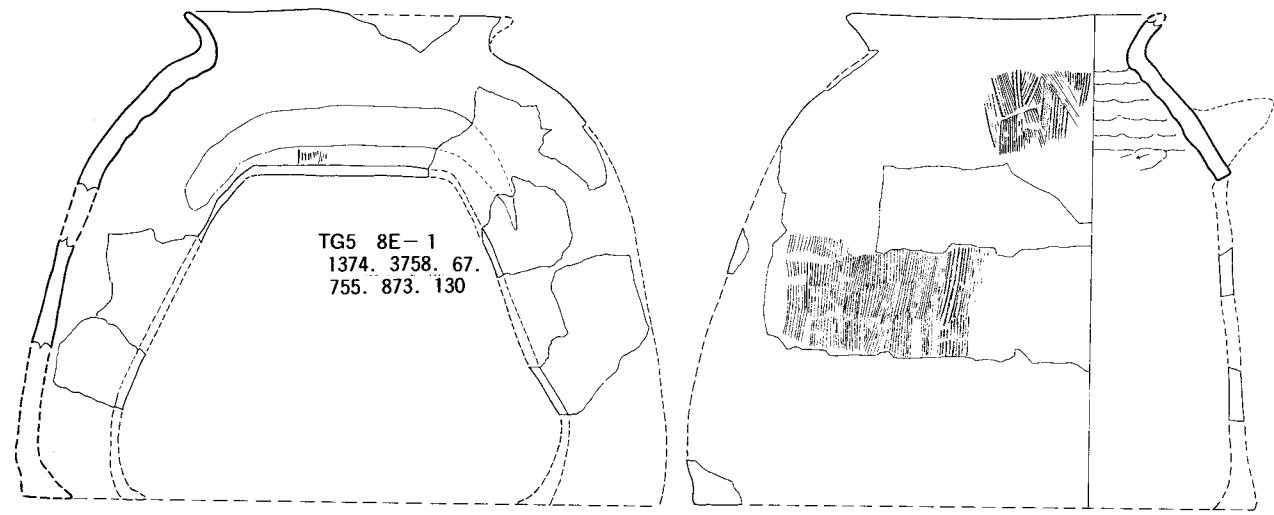


挿図207 鉄器類・古銭



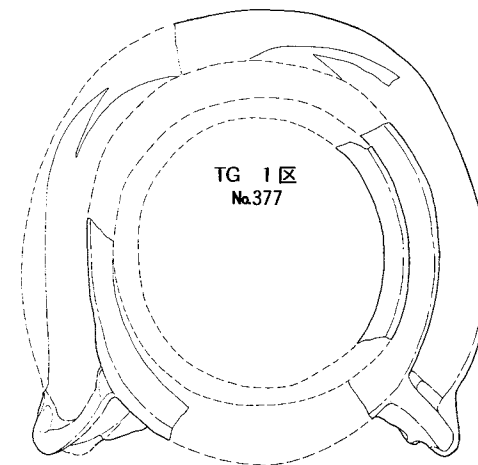
TG 5区 SI05
No.224. 343.223
236

1



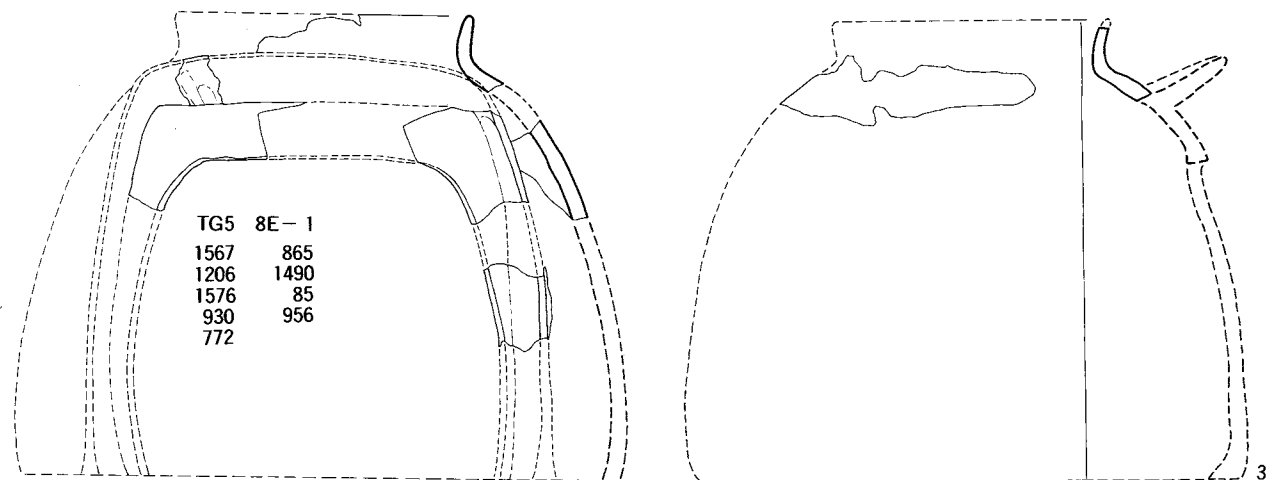
TG5 8E-1
1374. 3758. 67.
755. 873. 130

2



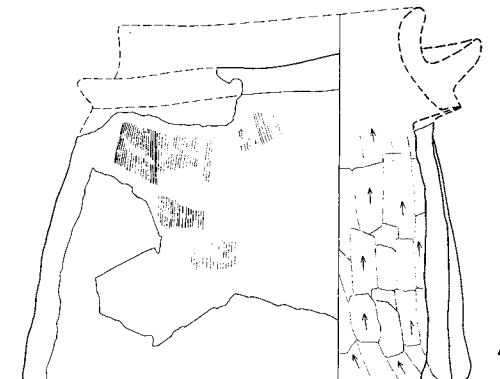
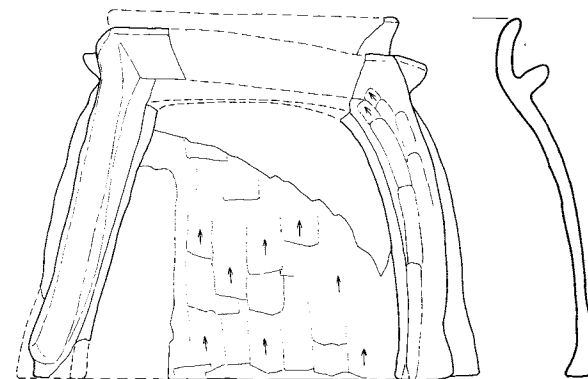
TG 1区
No.377

- 1. 研石山遺跡 5区 SI05
- 2. " " 8E 1
- 3. " " 8E 1
- 4. " " 1区



TG5 8E-1
1567 865
1206 1490
1576 85
930 956
772

3



4

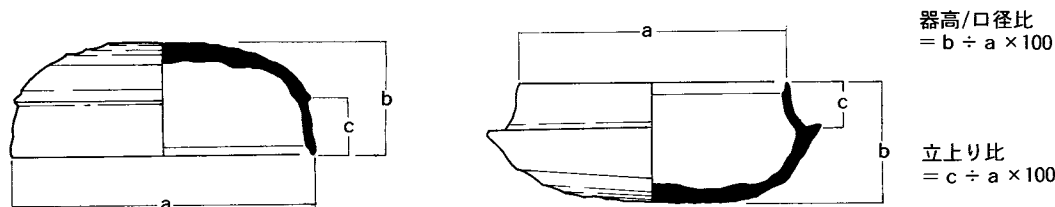
0 20cm

挿図208 移動式竈

挿表4 掲載石器一覧表

挿図番号 遺物番号	出土遺跡・地区	取上 番号	種 類	計 測 値 cm			重さ g	材 質	残 存	備 考
				長さ	幅	厚さ				
200-1	YS-1	2	凹基石鏃	4.05	2.0	0.5	3.15	サヌカイト		
2	YS-3 (10号墳丘)	4	"	1.9	1.2	0.4	0.5	黒曜石		
3	"	8	"	2.25	1.0	0.2	4.0	"	脚部欠損	
4	" (横穴前庭)	4	石鏃未製品	3.1	2.3	0.6	4.1	サヌカイト		未製品又はRF
5	YS-2 F-2	8	凹基石鏃	2.8	1.75	0.45	1.0	黒曜石		
6	" E+2	84	"	2.25	1.7	0.4	0.8	"		薄手
7	" 2+G	205	"	2.55	1.65	0.3	1.1	"		
8	" E-1	488	"	2.1	1.5	0.3	0.6	サヌカイト		
9	TG-1	312	"	1.77	1.9		1.0	黒曜石		
10	TG-5 SK05	1364	"	1.5	1.2	0.25	0.3	サヌカイト	基部欠損	
11	" 3W1	4094	"	2.3	1.5	0.3	0.7	黒曜石	一部欠損	
12	" 4E2	4175	"	2.0	1.5	0.3	0.55	"		
13	" 4E2	2753	平基石鏃	3.1	1.95	0.3	1.65	サヌカイト		
201-1	SM	1409	凹基石鏃	2.4	1.9	0.5	1.55	黒曜石		
2	"	1417	"	2.6	1.7	0.3	0.9	"		
3	"	1239	"	1.9	1.2	0.4	0.7	"	一部欠損	
4	"	表採	"	2.7	2.2	0.3	1.25	サヌカイト	"	
5	"	1418	"	2.1	1.4	0.3	0.85	"		
6	"	517	石鏃未製品	2.1	1.2	0.3	0.9	黒曜石		
7	" SD06	1288	平基石鏃	3.2	1.5	0.4	1.9	サヌカイト		
8	"	517	石鏃未製品	2.1	1.2	0.3	0.9	黒曜石		
9	"	1001	"	4.2	2.4	1.0	0.5	"		
202-1	TG-5 7W1	3170	剥片	4.3	3.0	1.0	9.7	"		スクレイパーか
2	" 7W1	4150	"	3.9	2.7	0.6	7.4	"		
3	" 3E	2251	"	2.2	2.2	0.9	3.0	"		
4	" 8W2	21	"	2.5	1.5	0.2	1.0	"		
5	" 2W1	1981	"	2.25	1.9	0.65		"		
6	" 3W1	1699	"	2.7	1.4	0.8	2.6	内緑岩		
7	" 8W2	271	"	1.75	1.55	0.8	1.5	黒曜石		
8	" 8W2	21	"	3.0	2.5	0.3	3.7	"		
9	" 6W2	1335	楔形石器	2.55	1.7	0.65	2.8	"		
10	" 6W2	1358	剥片	2.0	1.4	0.6	1.8	緑色凝灰岩		
11	" 3E2	2862	二次加工剥片	2.2	2.1	0.9	5.3	黒曜石		
203-1	YS-3 第2テラス	7	磨製石斧	6.85	3.9	1.65		凝灰質安山岩		
2	TG-5 3W1	2070	石斧未製品	11.4	6.4	1.8	215			
3	" 7E1	3185	磨製石斧	8.7	5.9	4.3	310		半欠	未製品か
4	" 3E2	3126	石斧	10.2	3.8	3.7	235			鏃?
5	YS-1	670	石庖丁	復12.5	4.7	0.6			半欠	
6	TG-5 3E1	2386	砥石	7.3	4.4	2.0	83.1			有孔
7	" 3E1	974	"	3.9	2.0	0.4			上下欠損	有孔
204-1	" 7E1	1584	"	15.7	7.5	6.6	875			
2	" 3W1	1906	"	15.9	6.5	4.7	785			
3	" 3W1	1691	磨石	—	4.7	—	4.20		半欠	
4	" 7E1	1585	凹石	8.8	7.9	6.5				
5	" 3E2	2865	"	9.0	5.7	3.0	220			

YS……山田遺跡 TG……研石山遺跡 SM……下山遺跡



挿図209 須恵器比率計測図

第V章 出土遺物の検討

1. 子持勾玉について

はじめに

鳥取県の子持勾玉の出土数は、現在18個を数える。全国では327個にのぼり、その後の発見もあり現状ではさらに増加をしているが、鳥根県では5例、岡山県、広島県、山口県で数例しか確認されておらず、西日本でも有数の出土地域といえる。^(註1)

内容的にも、線刻例の東部偏在、大阪カトンボ山例に類似する二連結の高辻例、出雲地方的な福市例、同心円紋装飾例など、興味深い特徴を示しているように思える。

しかし、単独・偶然に発見される場合が多く、出土状況の分かるものはごくわずかで、古墳時代中期に始まる祭祀遺物としか分かっていない。

今回の研石山遺跡の子持勾玉は、調査中に遺構に伴って発見された例としては、鳥取県では米子市福市遺跡(23号住居跡)に続き2番目である。^(註2)しかも、同じ米子市内の近接地であり、住居跡出土という共通性ももっている。

最近の研究成果をもとに、鳥取県出土の他の子持勾玉も含めて検討をしてみたい。

研究史

子持勾玉は江戸時代から注目され、刀剣の柄頭と考えられ、石頭剣と呼ばれていた。子持勾玉と呼ぶようになったのは、明治30年代の初めである。起源・用途については、魚型起源説、銅鐸起源説、祭祀遺物説、靈力増殖説などがあげられ、型式分類・年代についても多くの諸氏によりさまざまな諸説があげられている。^(註3)

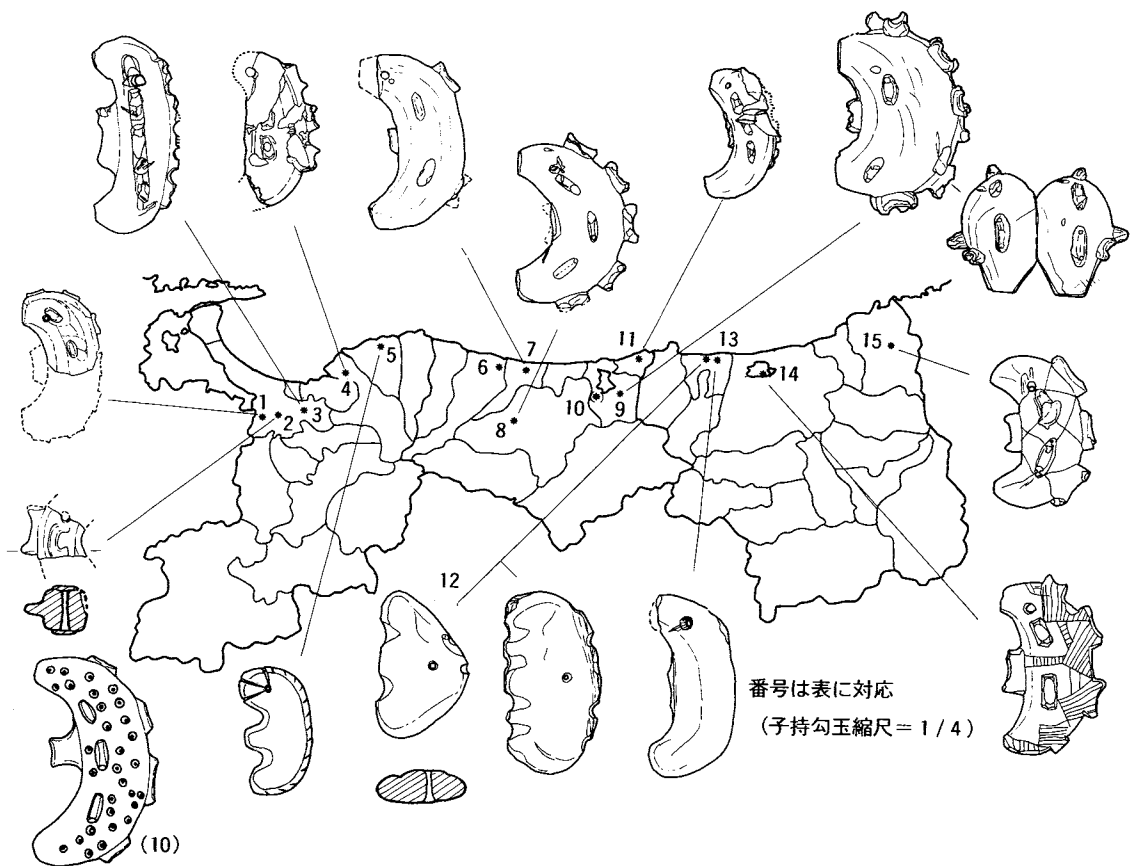
全国的にみても子持勾玉は、古墳や祭祀遺跡からの出土がかなり多く見られる。山陰地方の出土をみると、鳥取市青島の祭祀遺跡や松江市二名留古墳石棺・金崎1号墳石室などから出土しており、祭祀的遺物であることは間違いのないところだろう。^(註4)

山陰地方では近藤正氏の研究があり、山陰地方出土の子持勾玉を本体の断面と突起の形態および数を基準として4型式に分類され、この型式の違いが地域の違い(製作地の違い)につながるであろうことを考察されている。^(註5)

鳥取県では、亀井熙人氏が青島遺跡出土のものについて資料紹介をされたをはじめ、清水真一氏が福市遺跡出土子持勾玉の紹介や県内出土の子持勾玉の集成をされている。^(註6)

最近の研究

1989年神戸市教育委員会の大平茂氏が、伴出遺物から年代決定の可能な子持勾玉について検討し、後背部の突起(子勾玉)のあり方や製作技法の違いに重点をおいて形式分類をされた。本体(親勾玉)断面の比率をY軸、本体反りの比率をX軸としてグラフ化し、年代と比率との規則性を見いだされた。その結果、断面が円形に近くなるほど古く、楕円形、そして断面長方形に変遷し、また、本体断面の比率が同じであっても本体反りの比率が大きくなれば古く考えられるとされている。分類は、背部の突起が独立しているもの(A型)と、背部の突起が連続



挿図210 鳥取県内子持勾玉出土分布図

挿表5 子持勾玉出土一覧表

番号	遺跡 遺構名	所在地	出土数	時代推定	分類	備考 (近藤氏分類)
鳥取県						
1	新山研石山	米子市新山字研石山	1	6C前	A-1	住居跡出土 (2型式)
2	福市吉塚23号住居跡	米子市福市字吉塚	1	5C中～後	B-1	(3型式)
3	日下	米子市日下	1	5C後	B-2	(2型式)
4	平	西伯郡大山町平字大谷尻	1		(A)	「長田出土」と同一品 (2型式)
5	御来屋	西伯郡名和町御来屋	1		B-2	(2型式)
6	宮前田	東伯郡東伯町榎下字宮前田	1			(2型式)
7	大栄町	東伯郡大栄町	1	5C後	A-1	(型式)
8	福積	倉吉市福積	1		A-1	(1型式)
9	高辻	東伯郡東郷町高辻字清水屋敷	1	5C中	A-1	2個連結式 (1型式)
10	東郷町	東伯郡東郷町	1		A-2	倉吉～松崎間路上 (2型式)
11	石脇	東伯郡泊村石脇字堀	1	5C中～後	A-2	(2型式)
12	浜村	気高郡気高町浜村	2		B-1	(4型式)
13	日光坂	気高郡気高町矢口字日光坂	1		(B)	(4型式)
14	青島	鳥取市高住字青島	3	6C前	A-1	他に有孔石製板 (2型式)
15	真名	岩美郡岩美町真名	1	5C後	A-2	川床出土 (2型式)
島根県						
1	二名留2号墳	松江市乃木福富町	1	5C後	A-1	主体部墓壇検出面出土 (2型式)
2	金崎1号墳	松江市西川津町	2	5C中～後	A-1	堅穴式石室内出土 (3型式)
3	出雲玉作跡	八束郡玉湯町	1	5C中～後	A-1	住居跡出土 (3型式)
4	岩屋口遺跡	安来市佐久保町	1			住居跡出土 (型式)

しているもの（B型）の2種類に分類されている。

この論稿で、子持勾玉の研究に一応の結論が出ているように思われる。^(註7)

鳥取県内の子持勾玉の分類と編年

大平氏の研究を鳥取県内の子持勾玉にあてはめ、分類と年代推定を試みてみた（表5）。

形態的にみるとA類の分布が多数を占め、県内の広い範囲に分布が見られるのがわかる。B類は少数ではあるが西部に3例と比較的多く分布が見られ、中・東部では浜村出土のものだけである。

年代推定では、比較的古いものが多く見られるのが特徴的である。最も古いものでは高辻遺跡出土のものが5世紀中葉に推定でき、そして多くのものがほぼ5世紀後～6世紀中葉にかたまっている。

新山出土の子持勾玉

研石山遺跡の子持勾玉は、古式須恵器の時期と思われるS I 15の壁際より出土した。縦に割れ、さらに真中で二つに折れ、頭部側半分が残る。断面の様子から故意に破碎されたと思われる。

大きさは残存長さ5cm、断面2.8cm×1.7cmを計り、胴部断面は楕円形を呈する。頭端はカットして平坦面を持ち、穿孔は1箇所を径3mmを計る。

小勾玉はそれぞれが独立して削り出され、長さ1.1mm×高さ2～3mm×幅5mm程度の大きさである。現存では胴体の背部に3個、側面に2個の小勾玉を有し、復元すると背部に6～7個、側面に片側4個の小勾玉を有すると思われる。小勾玉が小振りであること、頭端近くまで存在すること、また、（あくまで復元推定ではあるが）数の多いのが特徴といえる。腹部の鱗状突起の有無・形状は現状では判断しかねる。

石材は火山灰の混じった堆積岩で蛇紋岩系ではないかと思われる。色調は深緑色である。大平氏の分類によると、A-1類にあたり、本体断面の比率0.61、本体反りの比率（推定）0.51で、Ⅲ型式に属すと思われ、6世紀前葉のものと同推定できる。これは、調査での住居跡の年代観にも近い。（但し、計測値は微妙であり、一つの目安として考えたい）。

研石山遺跡では、子持勾玉以外に石製の有孔円板や紡錘車が、それぞれS I 12・S I 16に関連して出土している。祭祀的な石製模造品を意図的に分けて持っている事もうかがえ、この時期における祭祀の一端を示しているようである。

遺跡での古式須恵器の多さや、移動式竈の存在も含めて、集落やその中で行われていた祭祀の性格や内容を考える上で、一つの方向を示すものと思われる。

本稿をまとめるにあたり、下記の方々の御協力・御教示を頂いた。記して謝意を表す。

中山勝博（島根大学理学部一石材）、蒲原宏行（佐賀県立博物館）、久保穰二郎（鳥取県立博物館）、清水真一（桜井市教育委員会）、佐藤雄史（小郡市教育委員会）

なお、掲載した子持勾玉の実測図の原図は亀井熙人、中野知照、森田純一各氏によるものである。

註1 形態分類各説抄(大平 茂「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集 1989による)

森 浩一 「子持勾玉の研究」『古代学研究』(1949) 大阪府堺市カトンボ山古墳出土の子持勾玉をもとに5型式の分類を試みた。断面の形態と厚み及び各部位における突起の有無とその数によって区分する方法をとる。

大場磐雄 『神道考古学論攷』(1943) 「本品の特異な点は勾玉形の本体と腹と背と胴とに突起物(子)が附着しているところにある。これが何を意味するかは別として、その形状や数が問題となろう。」と検討を加え4型式5形態に分類した。

佐田 茂 「九州の祭祀遺跡」『九州考古学の諸問題』(1975) 突起物の作り方を基本にして4型式に分類した。製作技法から分類を試みたこと、そして、出現初期の頃からまるみをもった型式と作りの雑な型式が併存することを指摘した。

佐野大和 「子持勾玉」『神道考古学講座』3(1981) 勾玉本体の断面形態と形状から3つに分類を行っている。しかし、各級の具体的な年代についてはあまり多くは記述されていない。

佐々木幹雄 「三輪山及びその周辺出土の子持勾玉」『古代』第71号 1982 等 製作技法を重視し、特に突起(子勾玉)の作り方を基準に大別し、3型式に分類している。また後年になって、親勾玉(本体)を基本に添え、3型式に分類し、さらに子勾玉(突起)も作り方によって6型式分類、この組み合わせによって型式を設定した。そして、伴出遺物から子持勾玉の年代の推定を試みられたことは、今後の研究にいかされることになる。

註2 近藤 正氏の研究

山陰地方出土の子持勾玉を本体の断面と突起の形態および数を基準として分類され、その分類結果からこの型式の違いが地域の違い(製作地の違い)につながるであろうことを考察として付け加えられ、以下の4型式に分類された。

- 1 型式 全体が太く断面に丸みをもち、背部および側面の突起数が多くしかもその形態が同一である。倉吉市福積、東伯町清水屋敷の2例がある。この型式は倉吉とその周辺にのみ分布している。
- 2 型式 全体にやや偏平、両端がとがりあるいは丸みをもち、背部と側面の突起も勾玉としての形が失われる一方では腹部の突起が大形化する。またこの型式には、4例ほど側面に線刻ないし円形文を入れたものがある。岩美町真名、東郷町松崎付近、東伯町宮前、大山町平などがこの例で、ほかに、鳥取市青島、米子市日下、名和町御来屋があてはまる。そしてこの型式の分布は、最も広く鳥取県の東西に及んでいる。
- 3 型式 全体がやや細く偏平、胴部断面は長方形に近い。背部と側面の小型の勾玉もより具象的でその表現も他の型式とは異なっている。米子市福市遺跡の吉塚23号住居跡出土、玉湯町出雲玉造跡出土、松江市金崎1号墳出土がある。その分布は鳥取県の西端から島根県東部に集中している。
- 4 型式 いずれも背部などに突起が1個あるいはまったくない簡略化された型式で、あるいは未成品とも考えられるものである。気高町浜村、同日光坂出土がある。きわめて限られた分布範囲をもつ。

註3 大平氏の分類

- A型 背部の突起が独立しているもの。勾玉本体の断面形は、基本的に円形・楕円形・偏平と変化し、また背部の突起は、鱗を思わせる発達したものから徐々に退化していく。
- B型 背部の突起が連続しているもの。勾玉本体の断面形は、A型同様に円形・楕円形・偏平と変化していくが、楕円形の次に、6世紀代から板状の断面長方形になり偏平な形へと移行していく。背部の突起は、基本的に波長の長い波形から短い山形になり、配置も背部の限られた範囲となってくる。
 - 1 類 本体の頭尾両端を平面的に削り落としたもの。
 - 2 類 逆に両端が鋭角化したもの

参考文献

- 大平 茂 「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集 1989
『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985
亀井照人 「資料紹介・青島出土子持勾玉」『郷土と科学』
近藤 正 「山陰」『神道考古学講座』第2巻 1972
原田雅弘 「泊村出土の子持勾玉」『鳥取埋文ニュース』NO.23
清水真一 「子持勾玉」『えとのす』 1982
『二名留古墳群発掘調査報告書』 松江市教育委員会 1992
『福市遺跡』 福市遺跡調査団・米子市教育委員会 1968

2. 珠文鏡について

珠文鏡

珠文鏡は小形倣製鏡のひとつで、内区に珠文が施されるものと呼ばれ、珠文の配置状況や形態などによって分類されている。^(註1) 出土する古墳は円墳が圧倒的に多く、前方後円墳であっても大型は少ない。埋葬施設では前半期は箱式石棺、後期は横穴式石室が多い。^(註2) 出土年代は4世紀～5世紀、6世紀にもおよび、従来の考え方である舶載鏡や大型倣製鏡に続く物ではなく、併行して存在している。^(註3) 出土状況や年代などから、珠文鏡を含む小形倣製鏡が単なる模倣・簡略化された鏡のなれの果てではなく、舶載鏡や大型倣製鏡に対して相対的劣位の権威的象徴であり、中心的な部族の首長のものというより、そこから下賜された小・中規模の首長のものと考えられている。^(註4)

鳥取県の珠文鏡

出土例は11例がある。^(註5)

内訳は古墳時代前期（4世紀代）6・古墳時代中期（5世紀代）2・不明3例。墳形は方墳、円墳それぞれ5例・方形周溝墓1例。埋葬施設は木棺直葬5・箱式石棺3・土器棺1・不明2例である。

形態的には、樋口氏の分類に従えばⅠ類4例・Ⅱ類4例・Ⅲ類2例・Ⅴ類1例で、Ⅰ類・Ⅱ類が多く、Ⅲ類・Ⅴ類は少ない。

Ⅰ類の出土例は、向山宮ノ峰14号・18号墳・国信1号墳で、大きさは6.2・5.9・7.65cm、珠文の数は29・27・19cm。Ⅱ類の出土例は、美和34号墳・向山宮ノ峰13号墳・猫山遺跡第1号墳墓・名土古墳の4例である。大きさは順番に7.5・7.2・4.8cm（残存径）・8.8cm、珠文の数は内側25＋外側31・内側21＋外側22（鏽等で不明の箇所があり増減の可能性あり）・内側18＋外側23・内側18＋外側23・内側17＋外側23（鏽等で増減の可能性あり）である。

大きさでは美和34号墳と向山宮ノ峰13号墳に近いが、珠文の数では幾らかの差があり、前者は珠文帯の外側に一重の櫛歯文帯、後者は二重の櫛歯文帯がめぐり、同範・同型鏡の可能性はない。また、猫山遺跡出土例と名土古墳出土例は、大きさは欠損のため比較できないが、珠文帯数や内側の櫛歯文帯と複数波文帯の配置に共通性が見られる。

特徴としては、

A：前方後円墳からの出土例がなく、方墳・木棺直葬と、円墳・箱式石棺が多いこと

B：舶載鏡や大型倣製鏡と共伴する例がほとんどなく、他の鏡に対しての従的埋葬ではなく副葬品の中でその鏡自体が中心的位置を占めること

C：前期・中期にまとまり、特に前期が多く、比較的古い時期に集中していること

などがあげられる。他地域に比べて方墳の割合が高く、古い時期に集中するということは、方墳が多い地域であり、方墳が古墳群の中で早い時期に築造されるという地域的特性もあると思われる。また、形態の地域的偏在は、配布・下賜の経路の違いを示すものと考えられる。

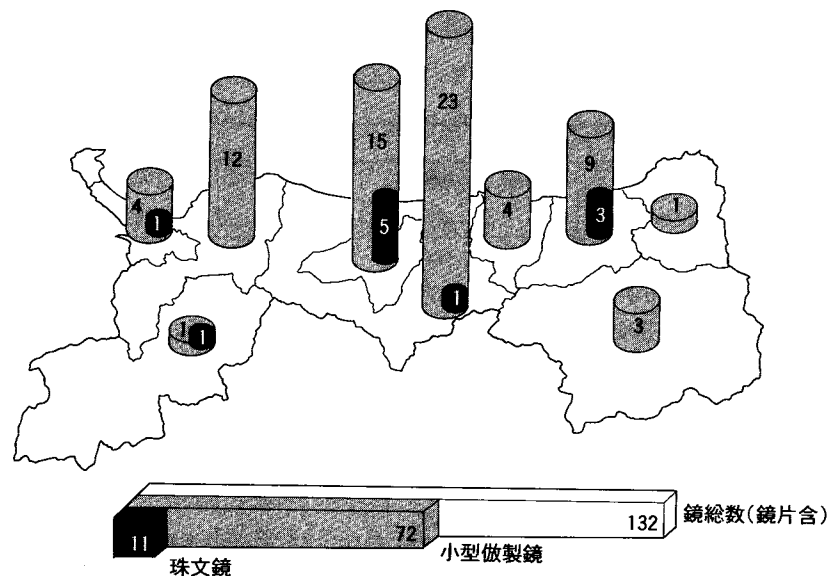
山田7号墳の珠文鏡

直径約7.8cm、厚さ約1mmでかなり薄く、珠文の数は12である。形態的に樋口氏の分類のⅠ類に属し、外区は鋸歯文・櫛目文、内区は圈文・一列の珠文・二本の重圈文である。

県内Ⅰ類例と比較すると、大きさでは国信1号墳に近いが、珠文数では一番少なく、相関性はうかがえない。時期は、相伴遺物から5世紀後半期と考えられ、県内の例の中では少し新しいが、鏡の伝世性からみて時期差はあまり問題にならない。墳形は円墳で、埋葬施設は木棺直葬であるから、鳥取県内の珠文鏡出土古墳のなかでも、ごく一般的な墳形と内部主体をもった例であるといえる。

山田7号墳の珠文鏡は地方の部族（連合）の中心的権力者などから下賜されたものとすることができ、被葬者の性格も「小・中規模の首長墓」と位置付けられる。

今後、他の小形倣製鏡出土古墳を含めた検討を進めることにより、地域的特質や階層性がより明らかになるものと思われる。



挿図211 鳥取県内鏡出土状況比較図

註1-1 『古鏡』 樋口隆康 新潮社 1983

-2 『明治大学人文科学研究所紀要』21号 「古墳時代倣製鏡の鏡式について」 小林三郎 1983
 樋口氏はⅠ類（珠文帯1列）、Ⅱ類（珠文帯2列）、Ⅲ類（珠文帯3列以上）、Ⅳ類（珠文帯を乳で分割）、Ⅴ類（珠文帯を放射線で分割）、Ⅵ類（勾玉状珠文）とし、一方、小林氏はA型（珠文帯1列）、B型（珠文帯2列整然・不規則珠文）と分けている。

註2 『古代吉備』第9集 「真吉備町妙見1号墳出土の珠文鏡」 平井勝 1987

註3-1 註1-1に同じ。

-2 註2に同じ。

-3 『古代吉備』13集 「中・四国地方古墳出土素文・重圈文・珠文鏡—小形倣鏡の再検討1」 今井 堯 1991

註4 註3-3に同じ。

註5 「日本出土鏡調査カード（鳥取県）・鏡データベース」 鳥取県埋蔵文化財センター

挿表6 鳥取県内鏡出土一覧表

地区	市町村	(a)	(b)	(c)	地区	市町村	(a)	(b)	(c)	地区	市町村	(a)	(b)	(c)						
東部	鳥取市	14	9	3	中部	倉吉市	30	15	5	西部	米子市	8	4	1						
	岩美郡	岩美町					東伯郡	赤碕町	1				境港市							
		国府町	3	1				東郷町	8		5	1		西伯郡	会見町	3				
		福部村						東伯町	3		3				岸本町	1				
	八頭郡	河原町	2					泊村	1					西伯町						
		郡家町	3	3				大栄町						大山町	6	4				
		佐治村						羽合町	23		15			中山町						
		智頭町						北条町	2					名和町						
		八東町	1					三朝町						淀江町	13	8				
		船岡町	2				小計	68	38		6	日野郡		江府町						
		川瀬町					(a) 鏡の総数 (b) 小形倣製鏡(13cm以上) (c) 珠文鏡							日南町	1	1	1			
	若桜町					日野町										溝口町				
	気高郡	青谷町	5	3									小計				32	17	2	
気高町		2	1		合計								132	72	11					
鹿野町																				
小計		32	17	3																

挿表7 鳥取県内出土珠文鏡一覧表

遺跡名	所在地	遺構	鏡の直径	年代	伴出土器	珠文の形態	備考
広岡88号墳	鳥取市船木	方墳 (木棺直葬)	7.5cm	古墳時代 前期	土師器 (鼓形器台)	Ⅲ類(中は途中とぎれる) (内18,中12,外19)	1989年発掘 鳥取市教育委員会
美和34号墳	鳥取市美和字湯谷 263-1他	方墳 (土器棺)	7.5cm	古墳時代 前期	土器棺	Ⅱ類 (内25,外31)	1993年発掘 鳥取市教育委員会
六部山21号墳	鳥取市久末字長谷 527の3	円墳 (箱式石棺)	6.7cm	古墳時代 前期	土師器 (鼓形器台)	Ⅲ類 (内,中,外)	1969年 鳥取県立博物館
倉吉市上神 字猫山	倉吉市上神	円墳 (箱式石棺)	不明	不明		Ⅴ類	倉吉市史 (P175,179)
向山宮ノ峰 13号墳	倉吉市大字小田 字宮ノ峰	方墳 (木棺直葬)	7.2cm	古墳時代 前期		Ⅱ類 (内21+,外22+)	1989年発掘 倉吉市教育委員会
向山宮ノ峰 14号墳	倉吉市大字小田 字宮ノ峰	方墳 (木棺直葬)	6.2cm	古墳時代 前期		Ⅰ類 (29)	1989年発掘 倉吉市教育委員会
向山宮ノ峰 18号墳	倉吉市大字小田 字宮ノ峰	方墳 (木棺直葬)	5.9cm	古墳時代 前期		Ⅰ類 (27)	1989年発掘 倉吉市教育委員会
猫山遺跡 第1号墳墓	倉吉市上神字猫山	方形周溝墓 (不明)	4.8cm	古墳時代 中期	小型台付壺 周溝底部直上より	Ⅱ類 (内18,外23)	1984年発掘 周溝内より出土
国信神社境内 (伝)	東伯郡東郷町	不明	7.65cm	古墳時代		Ⅰ類 (19)	東京国立博物館所蔵
新山 山田7号墳	米子市大字新山 宇山田	円墳 (木棺直葬)	7.8cm	古墳時代 中期	土師器(壺) 周溝内より出土	Ⅰ類 (12)	1989年発掘
名土古墳	日野郡日南町 大字矢戸字名土	円墳 (箱式石棺)	8.85cm	古墳時代	脚付埴 高坏	Ⅱ類 (内17,外22又は23)	1907年 東京国立博物館所蔵

- *年代については、出土した遺跡の報告書や鳥取県埋蔵文化財センター作成の「鏡データベース」等を参考にした。
- *珠文の形態分類については、樋口隆康氏の『古鏡』においてのものを参考にした。
- *上記の「鏡データベース」の中で大山町・国信1号墳出土の鏡が珠文鏡となっているが、実際は別の種類であり、東京国立博物館保管の国信神社の珠文鏡は東郷町出土であったため、表から前者を削除し、後者を加えた。

3. 円筒埴輪について

埴輪は山田4号墳、同8号墳、谷の上1号墳から出土した。いずれも円筒埴輪であり、山田4号墳・谷の上1号墳は埴質、8号墳は須恵質と埴質という内容である。山田4号墳は青木IX期で5世紀後半代、山田8号墳は状況・位置関係から概ねTK47型式併行期で6世紀初頭、谷の上1号墳は出土須恵器からMT15～TK10型式併行で6世紀前葉～中葉のものであり、それぞれの埴輪もほぼ同時期のものと思われる。この時期差と個々の埴輪の比較は十分に検討に値すると思われるが、今回は、比較的良好な形で出土した山田8号墳の埴輪を中心に述べる。

〈須恵器〉 (挿図212-1・2) 2条凸帯3段の小型埴輪。復元口径22.4～23cm×器高37.0cm—底径12～12.4cm。色調は淡黄灰色、胎土は1mm以下の砂粒がところどころに点在、焼成は一部膨れるが良好。器形は焼成段階でかなり歪んではいるが、外傾して逆ハの字形に開くものと思われる。凸帯は断面がM字形で、あまり突出しない。透孔は丸く、第2段の相対する位置に穿つ。第1段外面の透孔の上に弧状のヘラ記号「ㄥ」が描かれる。各段の高さを比較すると、第1段と第3段がほぼ等しく、第2段はやや狭い。

外面はユビオサエによる成形の後、全体に右上がりのナナメハケを施し(1次調整)、第1段と第3段をナデ消す。口縁端部は平らでナデ調整を施す。内面は成形の後、第1段・2段までは下から上への右上がりのナナメハケ、第2段には同方向のユビナデ調整を施す。第1段は1次調整のみで終わっているが、口縁部にヨコナデ調整を施す。また第1段凸帯の裏には、凸帯貼り付けの際のヨコナデが見られる。第3段はタテ方向のナデ調整が施されている。底部外面は板状工具による押圧が加えられ、底面はカットされ水平に仕上げられる。

〈埴質〉 (挿図212-3) 第1段、2段の1部が残るのみであるが、須恵質同様外傾して逆ハの字形に開く2条凸帯3段の小型埴輪と思われる。口縁径25.3cm、残存高22.5cm。色調は赤褐色、胎土は0.5mm前後の砂粒と1～0.5mmの赤色酸化粒を含む。焼成はややあまい。凸帯は断面がM字形で、あまり突出しない。やはり第1段にヘラ書きで「ㄥ」文様が描かれる。

調整は、外面はユビオサエによる成形の後に右上がりのナナメハケを全体に施した後(1次調整)、全体に粗いB種ヨコハケ(2次調整)^(註1)を施し軽くナデ消す。口縁端部は平らでナデ調整を施す。内面は成形の後にナナメハケを施し、ユビナデ調整をする。なお、図化しなかったが、谷の上1号墳の埴輪は2次調整を施さず、1次調整のナナメハケのみである。形態・色調等は類似する。山田4号墳の埴輪は小片で摩耗もあり調整は不明瞭である。

特徴として、①2条凸帯3段の小型埴輪であること、②須恵質、埴質双方が存在し、共に同じヘラ記号を持つこと、③板状工具による底部再調整があること、④底部をヘラでカットする手法が見られること、などがあげられる。

底部調整がなされるのは、川西宏幸氏の編年の第V期にあたり、畿内の円筒埴輪の編年では田辺編年案のTK23型式～TK209型式まで、実年代では5世紀末～6世紀末までとされる。^(註2)

山陰の第Ⅴ期については三種類の類例があげられ、TK10型式（6世紀中葉）からTK217型式（7世紀前葉）の時期が示されているが、^(註3)その後の事例の増加により、上限を少なくともTK23型式までは考えられるようになってきている。^(註4)

板状工具による底部調整は、畿内の第Ⅴ期の底部調整と同じで、山陰のⅤ期のものと比較すると、服部第47号墳など旧国名でいう伯耆、さらに限定するなら倉吉方面の地域的特徴とされる技法である。^(註5)ただ、これらは埴質で黒斑をもち、内面調整においてもケズリが主体であるなどの差異がある。倉吉方面との関連よりも、この時期の技法の残存と考えられる。倉吉方面は伝統的に古いものを残し、その後の変転が少なかったと思われる。須恵質・埴質の2種類が存在し、2次調整の有無の差異が見られるが、土師質に黒斑は無く窯窯焼成と考えられることや、共に同じヘラ記号を持つこと等から、ここではその差異はあまり問題とはならないものと思われる。2次調整の有無は本質的なものではなく、省略形として理解される。

周辺で類似の円筒埴輪がみられるものに陰田古墳群、東宗像古墳群等がある。^(註6)須恵質・埴質双方にヨコハケが施され、底部調整を指または工具を用いてはさみこむように押圧し、ユビオサエ後無調整で終わるなどの差異があるが、須恵質・埴質ともに存在し、器形・大きさ等も類似する。時期はTK47型式（陰田31号墳—「陰田—1」）からTK10型式（陰田37号墳—「陰田—3」）併行である。また、底部カットの技法は金崎1号墳、古曾志大谷1号墳にあり、多くはないが陰田古墳群、東宗像古墳群にも散見される。

今回出土の円筒埴輪は、形態的にはこの時期に当地方で一般的にみられるものであるが、内面技法では島根県岡田山1号墳など米子、松江、安来方面の例に類似するが、底部調整は倉吉方面の例に類似するなど、細部の調整技法で若干の差異もみられた。この差異はこれまで漠然と地域的特色とされていたものであるが、技法の受容と変転を示す可能性もある。資料も少なく十分な検討は出来なかったが、今後、類例の増加や資料の見直しによって、更に細かな様相が明らかになるものと思われる。

註1 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻、第2号。（「連続的なヨコハケで、工具を器壁上で止めながら施したように見えるもの。止めたさいの工具痕が縦の条線となって残っている（略）」）。

註2 同上。頁20（114）～頁21（115）、頁23（117）、頁24（118）。

註3 同上。頁33（127）～頁35（129）。

註4 『陰田』 米子市教育委員会・米子バイパス関係埋蔵文化財発掘調査団 1984（陰田31号墳—「陰田1」）

『東宗像遺跡』 財団法人鳥取県教育文化財団 1985（東宗像5号墳）

『古曾志大谷遺跡群発掘調査報告書』 島根県教育委員会 1989

註5 前掲註3に同じ。山陰Ⅴ期の特色として、外面は一次調整にタテハケ、二次調整にB種ヨコハケを用いるが、底部の再調整は、それぞれ、倉吉市服部47号墳—板状工具による底部外面からの押圧、松江市岡田山1号墳—底部外面にオサエ・ナデ、米子市宗形1号墳—底部内外面にタテハケ（ナナメハケ）、の差異が指摘されている。

註6 前掲註4に同じ。

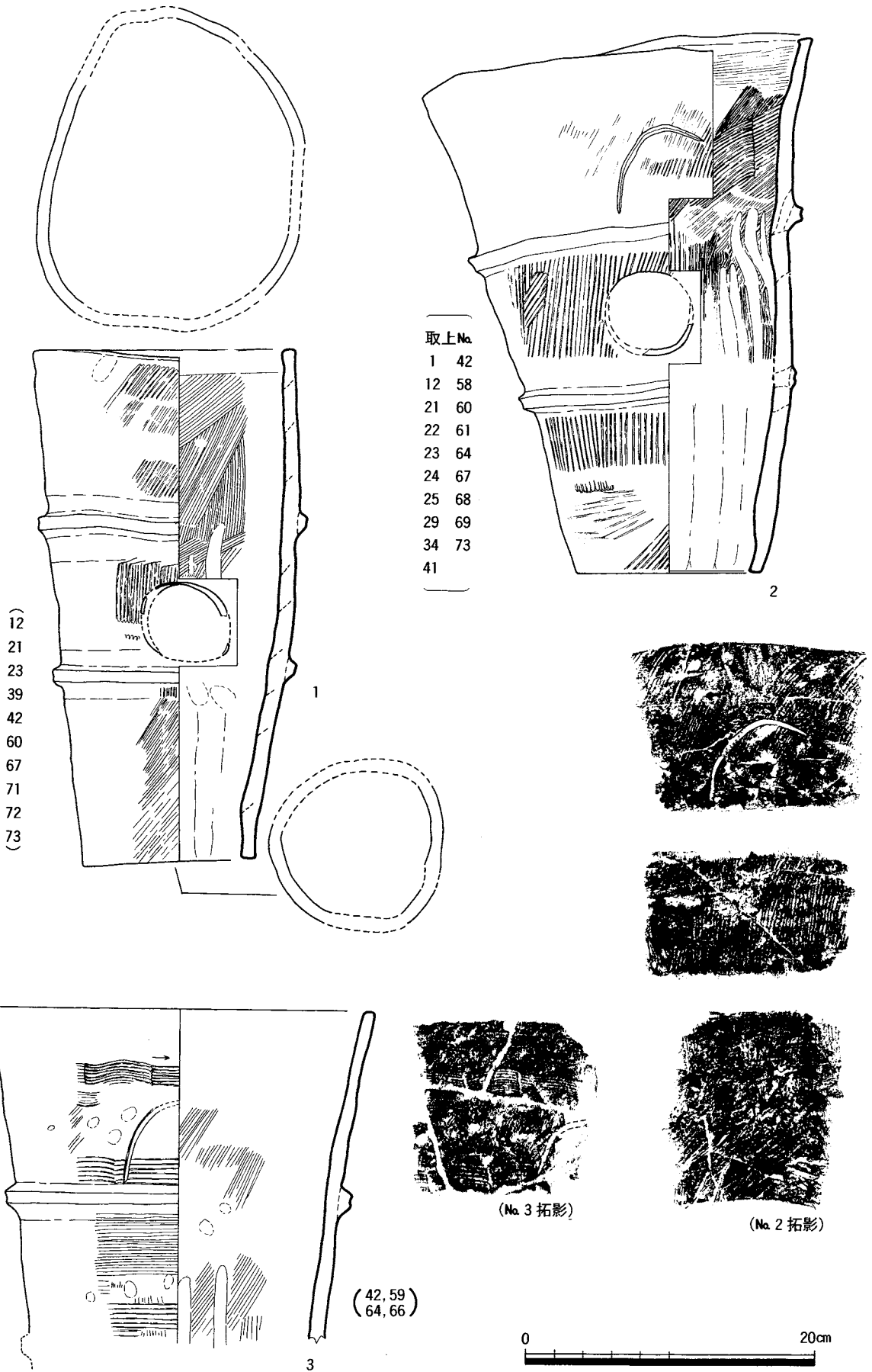


插图212 山田8号墳出土埴輪実測図

第VI章 ま と め

国道180号バイパス工事に伴う発掘調査の内、1993年（平成5）3月までに終了した新山地内の調査成果を中心に記した。調査では250以上の遺構と約9,000の遺物を確認した。縄文時代・弥生時代・古墳時代・白鳳時代～平安時代・中世の各期にわたり、狩場・集落跡・古墳群・鍛冶関係遺跡・祭祀跡、或いは、分銅形土製品・古式須恵器・子持勾玉・移動式竈等がある。当初の予想をはるかに越えて多種多彩な内容である。特に、鍛冶関係の遺構遺物の存在は、今後の当地方における古代史の調査研究に新たな視点を促すものと思われる。

遺跡の概要と、調査で気付いた若干を記して、まとめとしたい。

〈遺跡の形成と問題点〉

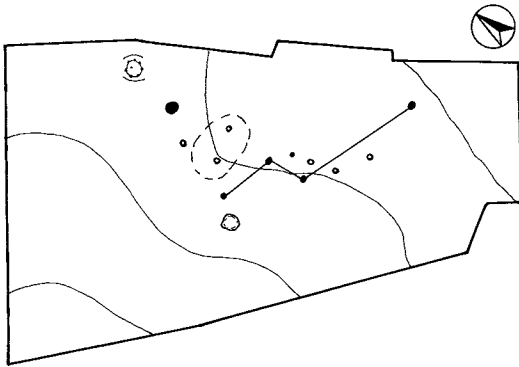
I. 縄文時代 各遺跡において落とし穴状土坑が見られ、狩り場としての利用があったようである。落とし穴状土坑は谷斜面を下るように分布し、計画的な配置状況をうかがわせた。土坑内に石鏃が入り込んだ例もあった（研石山5区SK05）。また、遺物の散布に一定のまとまりが見られ、小規模な居住もあったようである。遺構の時期は特定できなかつたが、研石山遺跡5区で早期押形文土器、山田遺跡1区・3区、下山遺跡で晩期土器の散布があり、山田遺跡2区では明らかに層位の異なる上下の遺構分布を確認した（SK22・23）。遺跡の展開は大まかにこの二時期を中心にしたものと考えられる。

II. 弥生時代 主に山田遺跡を中心として形成される。竪穴住居跡、袋状貯蔵穴、段状遺構などがあり、谷を巡る丘陵傾斜地や尾根部に形成された集落跡である。一応、前期から後期までの遺物が見られるが、遺構として確認できるのは後期が多い。遺物の量からは少なくとも中期後葉からは本格的な集落形成があったようであり、分銅形土製品2個をはじめ、石庖丁・砥石・石斧・石錘なども出土している。遺物があるにもかかわらず遺構が少ない状況は、この時期の周辺遺跡に共通の現象であり、後世の流失、削平を受けたと思われるが、また、そのような立地・構築状況にあった（掘込みの浅さなど）ことを示していると思われる。このような観点からの調査・追跡が今後の課題の一つである。

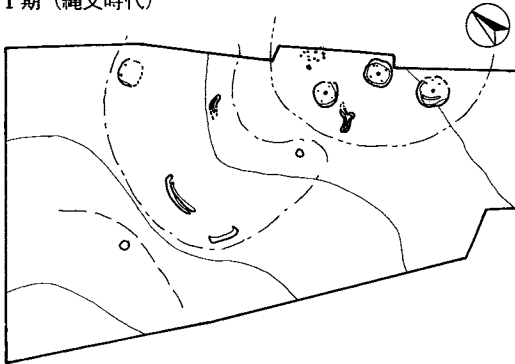
後期後半には遺構の数も増え、集落を見下ろすような高所にも住居が築かれる（研石山2区・SI01）。後背のSS01（掘立建物？）、SK02（袋状貯蔵穴）等と一体となり一応のイエを構成しているようであるが、規模は3mと小型であり、短期間の見張りのなものと思われる。このような高所・台地上への集落の進出は、周辺においても弥生時代後期後半から古墳時代前期前半にかけて著しく、この時期の社会的な緊張関係や環境変化等との関連が指摘されるものである。

III. 古墳時代 山田遺跡において前代から引き続く集落形成がある一方、谷奥の研石山遺跡での集落形成が本格化する。山田遺跡の集落は後期初頭で一応の終焉を見る。研石山は前期からの存在が認められるものの、中期から後期初頭に盛期を迎え、一旦途絶えたのち、後期後半に至り再び形成が見られる。時期により遺構分布に偏りが見られ、各遺跡内における消長移

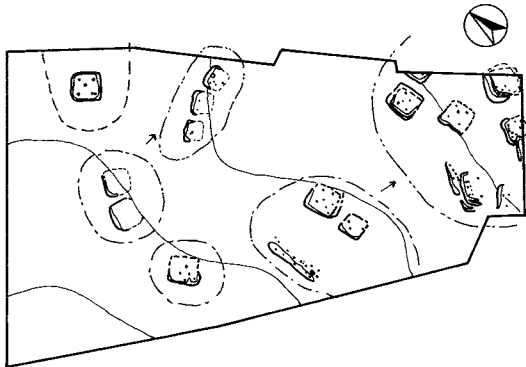
山田遺跡 2区



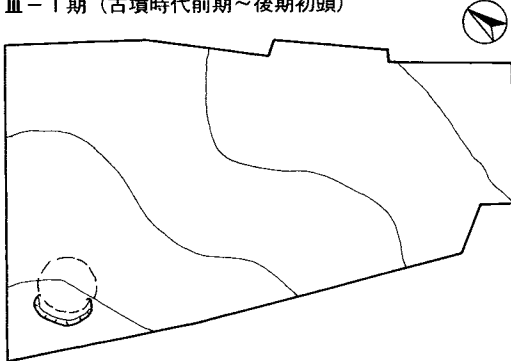
I期 (縄文時代)



II期 (弥生時代)

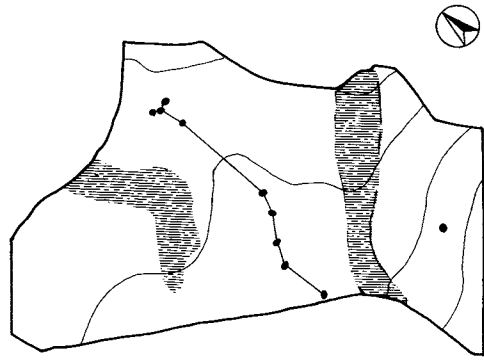


III-1期 (古墳時代前期~後期初頭)

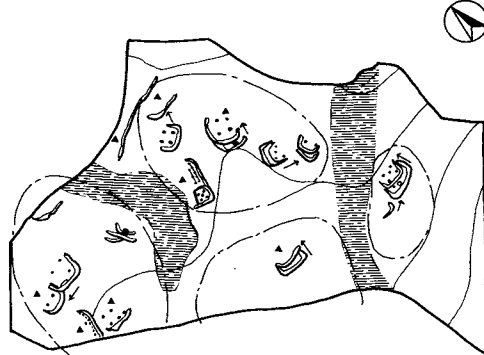


III-2期 (古墳時代後期前半)

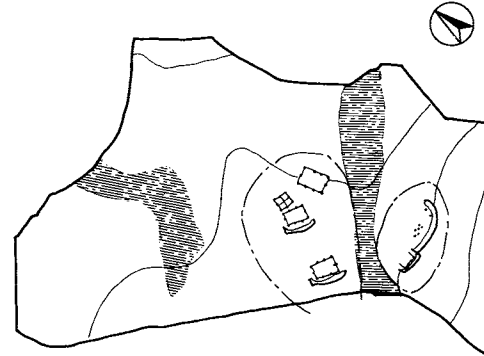
研石山遺跡 5区



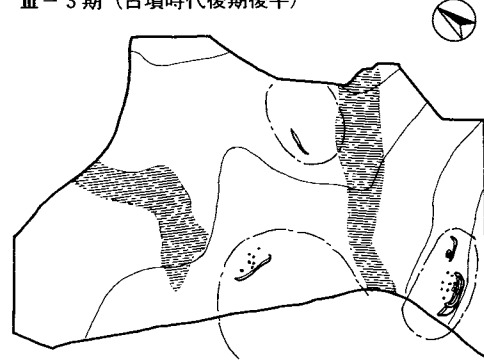
I期 (縄文時代)



III-1期 (古墳時代前期~後期初頭)



III-3期 (古墳時代後期後半)



IV期 (奈良時代~平安時代初)

0 20m

挿図213 遺跡形成過程概略図

動を認めることができる。古式須恵器・移動式竈^{かまど}・火鑽^{ひき}り臼^{うす}・堅杵^{たてきね}などが特徴的である。

古式須恵器は陶邑ON46形式併行期から見られる。胎土分析によると陶邑領域が多く、地方の安来市門生^{かどお}や松江市池^{いけ}の奥領域も認められ、伝播・流通のひとつの形を示した。移動式竈は古式須恵器の段階から見受けられ、順次、形態的な変遷を辿ることができる。比較的古い時期からあり、出土例が多い山陰の位置付けや使用集団の性格を語る上で貴重である。

(集落立地) 集落は、基本的に山裾の低位丘陵に立地し、丘陵内の小谷地形によって小単位を成している。元来、古式須恵器を含むこの時期の集落は余り調査例がなかったが、近年、大山町仁王堂遺跡、淀江町百塚第1遺跡・第2遺跡、米子市吉谷トコ遺跡などで確認されており、かなり普遍的になってきている。今回大量の須恵器資料を確認できたのは、斜面部はもとより谷部まで調査を進めた結果であり、今後このような位置での調査の進展によって、類例の増加があるものと思われる。

(古墳群) 古墳は、集落の消長に対応するように築かれる。研石山1号墳は立地や形態から古墳時代前期を下らないものと思われ、山田古墳群は中期後半から後期初頭を主体とする。山田遺跡の北端に立地する谷の上1号墳は後期前～中葉期であり、集落の廃絶した跡地に築かれている。いずれも6～11mの古墳で構成される小古墳群である。遺物には、古式須恵器（山田2号墳・TK208併行）、珠文鏡（山田7号墳）、円筒埴輪（山田4号墳、同8号墳、谷の上1号墳）、鉄剣・ヤリガンナ（研石山1号墳）、鉄刀・鉄鏃・人骨（山田1号横穴墓）などがある。

研石山1号墳の木棺を割石で覆う形態は、隣接の陰田41号墳や松江市古曾志大谷1号墳など前期から中期に見られる。また、石の配置状況は片側がすぼまる舟形の形状がうかがえるものであったが、これも陰田41号墳の第4埋葬施設（石蓋土坑）に見られるものである。地域における特徴の一つとして注目したい。

山田1号横穴墓は後期後半の築造であるが、新山地内の岡横穴とほぼ同時期であり、狭長な前庭部など形態的にも比較的早く、後背墳丘や石棺を有する点など注目される。群、或いは対になるものと考え周辺の追跡を行ったが、確認は出来なかった。導入と存在形態について再考の余地がある。

(祭祀) 山田古墳群と山田集落跡の間の谷間では、古代流路と古式須恵器・破碎鏡・ミニチュア土器・石製模造品などの遺物溜りを検出した。集落と古墳群（墓域）を結ぶ中間的位置に当たり、生と死の両空間を意識した祭祀跡と考えられる。このような空間認識は、祭祀遺構もなく時期関係も明確ではないが、谷を挟んだ研石山遺跡1区と谷の上古墳群、古代流路（東谷）を挟んだ研石山遺跡5区と研石山古墳群の位置関係にも見る事が可能である。また、研石山遺跡5区では、石製の紡錘車・子持勾玉・双孔円盤が各住居跡に付属するような形で出土した。出土状況より住居跡の最終段階か廃棄時のものと思われた。祭祀の一つのあり様を示唆していると思われる。子持勾玉は県内18例目、米子市では福市遺跡、日下地内に次ぎ3例目である。

Ⅳ. 飛鳥時代～平安時代 7世紀後半から9世紀にかかる遺構遺物が見られる。鉄滓（鍛

治滓)や鉄製品(鋤先・紡錘車等)、焼土跡・炭溜りを伴い、鍛冶関係遺跡と思われる。

山田遺跡3区(山田古墳群丘陵)のSB01は1間×2間(3.6m×4.8m)の掘立柱建物跡で、中央に長方形の炉跡状土坑を持ち鍛冶工房跡と考えられる。丘陵北側の山裾斜面を段状に削り込み、溝によって区画された広場も伴っている。遺物や焼土の分布状況から谷側は吹抜け状態の構造であったようである。炉跡付近から鉄滓・鋤先等が出土した。8世紀後半を中心とするものと思われる。下山遺跡もやはり、8世紀後半代に営まれた遺跡である。標高30~50mの山裾斜面に立地し、掘立柱建物が数棟ずつ、地形に即して弧状に配置される。建物は柱穴が小振りであり、いかにも作業小屋的な印象を受ける。焼土跡、炭溜りがあり、鉄滓や鉄製品が集中的に出土した。赤塗土師器の多いのも特徴である。

各遺跡から鉄滓を検出し、研石山遺跡5区ではふいご羽口^{はぐち}も出土した。鉄滓には精錬鍛冶滓も多く、近隣には製鉄遺構も存在するものと思われる。大鍛冶、小鍛冶を合せ持つ同様の遺跡は近年、隣接する安来市でも増加している。地域全体が一大製鉄関連地帯であったようである。当時の交易や、調・庸の物納(鋤、鋤等)の事象等との関係を体系的に考える必要がある。

V. 中世 この時期の活用はやや消極的である。北宋銭を伴う伏鉢を、山田遺跡5区(山田古墳群丘陵)の尾根上で2箇所検出した。鉢は土師質の摺鉢^{すりばち}と焼締の捏鉢^{こねばち}、北宋銭は熙寧元宝、嘉祐元宝、元豊通宝の各種があった。また、山田遺跡、研石山遺跡においても、焼締陶器、輸入陶磁等が見られた。山田遺跡1区では同時期と思われる土坑も検出した。

〈胎土分析について〉

出土須恵器について、奈良教育大学三辻利一先生に蛍光X線による胎土分析をお願いした(特論1、2)。

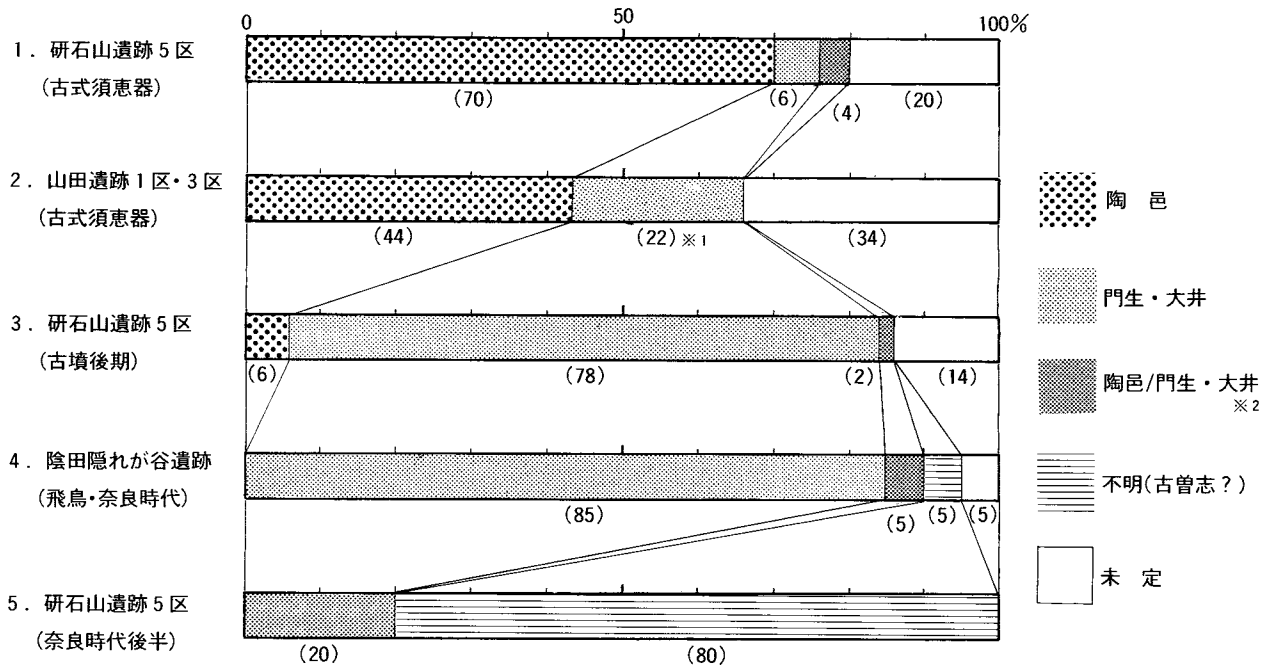
特論1では、山田遺跡出土の古式須恵器に陶邑産と思われる遺物がみられたことと、近くに門生高畑・山根等の同時期の古窯跡があるため、状況把握のために試みた。試料はTK23~47併行と思われる山田1区遺物を中心に、TK208併行と思われる山田2号墳と、後出のMT15~TK10併行の谷の上1号墳遺物を加えて分析試料とした。

特論2では、研石山5区で山田遺跡同様に古式須恵器が出土したことを受け、特論1の成果をもとに、これの追跡と展開調査を試みた。①古式須恵器段階での出自比率の検討、②同一遺跡における時期による構成比率の変化、③近在遺跡との構成状況比較、が主な留意点である。試料として、研石山遺跡5区の古式須恵器(51点)・古墳時代後期須恵器(49点)・奈良時代須恵器(20点)、陰田隠れが谷遺跡奈良時代須恵器(20点)を分析に出した。研石山5区古式須恵器は山田遺跡よりやや古い段階からあり、量も多い。

結果については特論に詳しいが、興味深い成果を得る事ができた。

新山では古段階では陶邑産が多く、時期が下るに従って地方窯の比率が増え、古墳後期後半(TK209段階)では大井領域、奈良時代では松江市の西の古曾志領域へと推移している。

また、陰田隠れが谷は近接遺跡における流入経路の違いの有無等をみるために分析したものである。大井と古曾志という違いが際立ち、一見、異なる流入経路を持つ結果となったが、改



挿図214 胎土分析結果比較図



※1 門生と大井（池の奥）は現状では同一領域として扱ってある。
 分析では門生6%、池の奥16%の結果が示されている（特論1）
 ※2 該当するものは地方窯の中に求められると思われる。

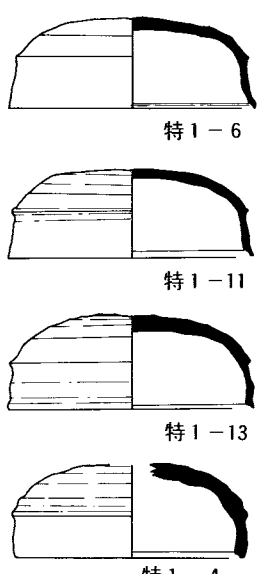
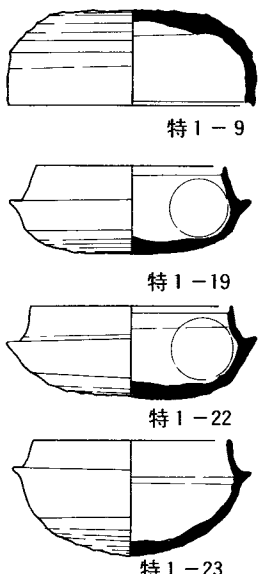
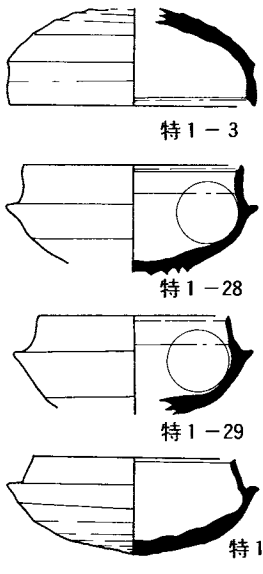
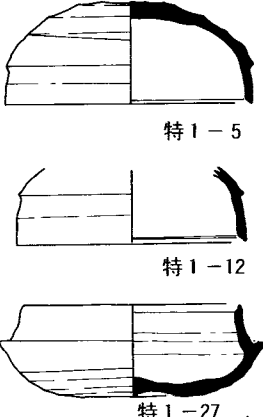
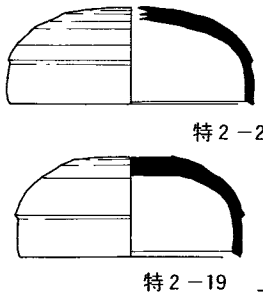
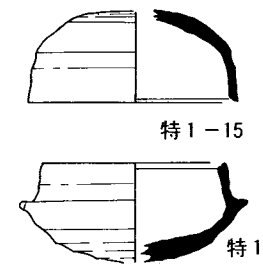
めて試料を見直すと、隠れが谷資料は7世紀代から8世紀代までのものが混在し、研石山5区試料は8世紀後半代に限られており、地域的な差異というより時期的な変化である可能性が高い。現状ではどちらも確定はしがたいが、8世紀後半代に鍛冶関係の遺跡が増える傾向と連動したものとも考えられ、更に分析検討を進める必要があると考える。

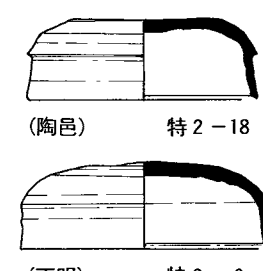
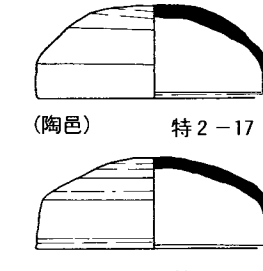
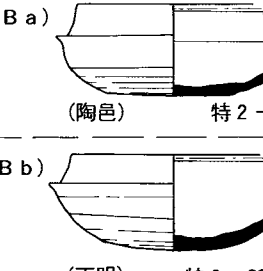
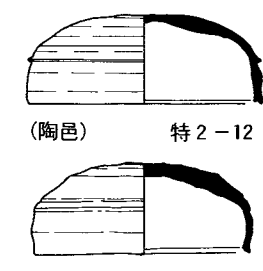
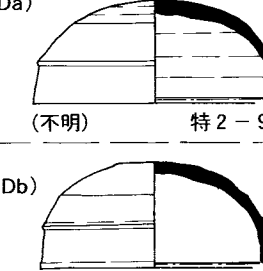
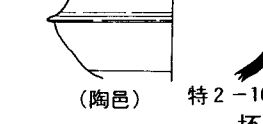
胎土分析については、各地域における土質分布状況や原材料の土の移動などがあり、必ずしも直接の産地（窯）特定とはいえない面があるが、分析データの示す情報は多様である。今回、偶然ではあったが、領域未定とされた試料の中に他者と容易に区別できる一定の傾向を読み取れるものがあり、分類に活用する事ができた。今後、分析の特性をより認識し、課題を設定した上で、繰返し状況を読み取っていくことが必要と思われる。

〈おわりに〉

調査は、隣接する米子市新山と陰田の両地域において、交互、或いは並行して実施してきたものである。内容的には陰田と一体となつてとらえるべきものも多い。また、整理の都合上、今回は割愛、あるいは概要報告に留めたものもある。鉄・鉄器生産にかかる問題や須恵器の流通移動、木器・石器等々、これらについては、次報告書において述べていきたい。

最後になったが、調査の実施、整理作業において、指導助言協力をいただいた方々に深く感謝の意を表すと共に、引き続きのご叱責をお願いし、ひとまずの締めくくりとしたい。

 <p>特1-6 特1-11 特1-13 特1-4</p> <p>未定A領域</p>	 <p>特1-9 特1-19 特1-22 特1-23</p> <p>未定B領域</p>	 <p>特1-3 特1-28 特1-29 特1-25</p> <p>池の奥(大井)領域</p>
 <p>特1-5 特1-12 特1-27</p> <p>未定C領域</p>	 <p>特2-20 特2-19</p> <p>大井領域</p>	 <p>特1-15 特1-18</p> <p>門生領域</p>
<p>挿図215 胎土分析領域未定群比較 ※数字は分析資料番号</p> <ul style="list-style-type: none"> 未定A群は池の奥領域に近く、大井窯群の可能性が高い。(特1…特論1, 特2…特論2) 未定B群は大井群に対応しないが、池の奥灰原出土品(糸切-8C代)に類似する。形態的にA群の4は、池の奥3に類似し、B群19、22等は体部が深くふくらみを持ち、池の奥28、29に類似し、関係性がうかがえる。 		

 <p>(陶色) 特2-18 (不明) 特2-3</p> <p>蓋A類</p>	 <p>(陶色) 特2-17 (陶色) 特2-5</p> <p>蓋C類</p>	 <p>(Ba) (陶色) 特2-23 (Bb) (不明) 特2-29</p> <p>坏身B類</p>
 <p>(陶色) 特2-12 (陶色) 特1-7</p> <p>蓋B a類</p>	 <p>(Da) (不明) 特2-9 (Db) (陶色) 特1-10</p> <p>蓋D類</p>	 <p>(陶色) 特2-16</p> <p>坏身C a類</p> <p>挿図216 胎土分析土器形態と領域比較 陶色領域のものは薄手で、作りがシャープである。 特に、稜、口縁端部の処理が細かい。 又、胎土は緻密で粘り気がある。</p>

挿表 8 胎土分析試料一覧表

<特論 1>

試料No	器種	掲載No 挿図-No	備考	試料No	器種	掲載No 挿図-No	備考	試料No	器種	掲載No 挿図-No	備考
山田遺跡 1 区				18	坏身	177-7		36	カメ	-----	
1	高坏蓋	176-16		19	"	23-8		37	"	184-1	古
2	"	23-5		20	"	23-9		38	"	-----	
3	"	176-14		21	"	177-15		39	"	-----	
4	坏蓋	176-15		22	"	177-4		40	"	-----	新
5	"	176-13		23	"	23-11		山田 2 号墳 (TK208)			
6	"	176-1		24	"	177-10		41	ツボ	10-1	
7	"	176-12		25	"	177-5		42	瞭	10-2	
8	"	176-4		26	"	177-6		谷の上 1 号墳 (MT15~TK10)			
9	"	23-3		27	"	23-6		43	ツボ	70-1	
10	"	176-7		28	有蓋高坏	177-20		44	坏身	-----	
11	"	23-1		29	"	177-11		45	"	-----	
12	"	176-27		30	"	177-19		46	"	70-7	
13	"	23-2		31	"	177-22		47	坏蓋	70-3	
14	"	176-17		32	"	177-1		48	"	-----	
15	"	176-10		33	"	23-12		49	無蓋高坏	70-2	
16	坏身	177-16		34	"	177-29		50	坏身	70-6	
17	"	-----		35	瞭	182-22					

<特論 2>

試料No	器種	掲載No 挿図-No	備考	試料No	器種	掲載No 挿図-No	備考	試料No	器種	掲載No 挿図-No	備考
研石山遺跡 5 区 I 期 (古墳中期後~後期初)				48	瞭	182-20		95	高坏	188-8	
1	蓋	178-4		49	"	182-14		96	"	188-1	
2	"	178-30		50	高坏蓋	180-1		97	"	-----	
3	"	178-9		51	高坏身	-----		98	"	-----	
4	"	178-5		研石山遺跡 5 区 II-(2)・3 期 (古墳後後~末)				99	"	-----	
5	"	178-24		52	坏身	186-9		100	"	-----	
6	"	178-27		53	"	186-15		研石山遺跡 5 区 III-2・(3) 期 (奈良後半~)			
7	高坏蓋	180-4		54	"	186-19		101	坏	189-7	糸切
8	蓋	178-15		55	"	186-23		102	"	189-8	"
9	"	178-17		56	"	186-12		103	高台坏	189-38	"
10	"	178-18		57	"	186-2		104	坏	-----	"
11	"	178-12		58	"	186-13		105	皿	189-26	"
12	"	178-7		59	"	134-6		106	坏	189-15	"
13	高坏蓋	-----		60	"	134-5		107	皿	189-24	"
14	蓋	178-2		61	"	186-8		108	坏	-----	"
15	無蓋高坏	181-11		62	"	186-11		109	"	-----	"
16	坏	179-1		63	"	186-14		110	"	-----	"
17	蓋	178-23	蓋?	64	"	186-17		111	"	-----	"
18	"	178-1	蓋?	65	"	186-16		112	"	-----	"
19	"	178-26		66	"	186-24		113	"	-----	"
20	"	178-10		67	"	186-18		114	高台坏	189-34	" (平安)
21	坏身	179-6		68	"	-----		115	"	-----	
22	"	179-8		69	"	186-21		116	"	189-36	
23	"	179-5		70	"	186-4		117	"	189-37	糸切
24	"	179-11		71	"	186-7		118	皿	189-25	"
25	"	179-13		72	"	-----		119	坏	189-17	"
26	"	179-16		73	"	186-3		120	高台皿	-----	
27	"	-----		74	蓋	134-2		陰田隠れが谷遺跡 III-1・2 (飛鳥~奈良)			
28	高坏蓋	-----		75	蓋坏	185-3		121	蓋	-----	返有
29	坏	179-25		76	蓋	185-16		122	"	-----	"
30	"	179-23		77	"	134-1		123	"	-----	"
31	"	179-4		78	"	185-11		124	"	-----	"
32	"	179-16		79	"	185-2		125	"	-----	"
33	"	-----		80	身	186-25		126	"	-----	"
34	"	-----		81	高坏	188-6		127	"	-----	"
35	"	179-21		82	"	188-7		128	"	-----	返無
36	無蓋高坏	181-6		83	"	188-5		129	"	-----	"
37	"	181-8		84	"	-----		130	"	-----	"
38	"	181-9		85	"	-----		131	"	-----	"
39	有蓋高坏	180-14		86	"	-----		132	"	-----	"
40	高坏脚	180-17		87	"	-----		133	高台坏	-----	
41	有蓋高坏	180-12		88	"	-----		134	"	-----	
42	高坏脚	180-20		89	"	-----		135	"	-----	
43	坏身	-----		90	"	-----		136	"	-----	
44	瞭	182-16		91	"	-----		137	"	-----	糸切
45	無蓋高坏	181-1		92	"	-----		138	"	-----	
46	"	181-3		93	"	-----		139	"	-----	糸切
47	"	181-4		94	"	-----		140	"	-----	"

新山山田遺跡出土須恵器の 蛍光X線分析

奈良教育大学

三 辻 利 一

1) 須恵器の産地推定のあらまし

胎土分析による須恵器の産地推定には前以って、窯跡出土須恵器の分析データを整理しておく必要がある。窯跡出土須恵器の化学特性に、古墳・遺跡出土須恵器の化学特性を対応させることによって産地の推定が可能となる。しかし、実際には窯跡の数が多いため、何らかの形で窯跡を整理しておかなければ、対応は難しい。一般に、同じ地質の上に在る窯、あるいは、窯群を構成するそれぞれの窯の須恵器の化学特性は相互識別ができない位に類似している。そのため、これらを一括して窯群として把握する。考古学で通称、「…窯群」と称するものはこの例である。窯群にまとめることによって、窯の数はかなりの程度に整理される。これ以上の整理は実際に産地を推定する作業を行うときにする。すなわち、古墳・遺跡と同じ年代の窯又は窯群が産地の候補として選び出される。次の段階では、こうして選び出された窯又は窯群の中から、近距離にあるものから順に対応させていく。対応するかどうかの尺度となるのがマハラノビスの汎距離である。

母集団となる窯又は窯群は多数のサンプルによって構成されている。通常、20点以上のサンプルが分析される。各母集団はある程度の広がりをもつ星雲状の存在であることが実験的に確かめられている。この母集団の重心から、その標準偏差の何倍分、離れているかを示す統計学上の距離がマハラノビスの汎距離である。通常、Dという記号で表す。Dの値は正、負両方とり得るので、計算処理上の煩雑さを避けるため、二乗して負符号を消去して使用するのが普通である。勿論、この距離が近いほど、その母集団に対応する可能性が増す訳であるが、どの程度の距離まで近づいたとき、その母集団に対応すると判断できるのかは実験的に求められる。全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから、 $D^2 \leq 10$ が母集団への帰属条件として提示されている。この条件を使って、地元産かそれとも外部地域からの搬入品かを判断する2群間判別分析法によって産地が推定されている。

本報告では新山山田遺跡出土須恵器の産地を推定した結果について報告する。

2) 分析法

須恵器片はすべて表面を研磨してのち、100～200メッシュ程度に粉碎された。粉末試料は塩

化ビニール製リングを枠にして、約15トンの圧力を加えてプレスし、内径2 cm、厚さ3～5 mmの錠剤試料を調製した。このような錠剤試料を16個マウントできる自動試料交換器にのせて、蛍光X線スペクトルを測定した。通常、16試料のうち2試料は標準試料として使っている岩石標準試料JG-1である。

スペクトル線の観測には、2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置が使用された。Tiを2次ターゲットにして真空中でK、Caを、また、Moを2次ターゲットにして空气中でFe Rb Srを測定した。分析値はJG-1による標準化値で表示された。

3) 分析結果

分析値と産地推定の結果は表1に示されている。データ解析は次のようにして行われた。比較的古い時期と推定される須恵器が含まれているので、地元の母集団として安来市の門生群がとり上げられた。また、松江市周辺の比較的古い時期の古墳・遺跡から池の奥群産と推定される須恵器がしばしば出土しているので、地元の第2母集団として池の奥群を選び出した。さらに、古い時期の外部地域からの供給源としては大阪陶邑群が有力であることはこれまでの分析データが示しているので、外部母集団として、大阪陶邑群を選び出した。これら3母集団の重心からのマハラノビスの汎距離はK、Ca、Rb、Srの4因子を使って計算された。

はじめに、2群間判別分析によって門生群と大阪陶邑群の相互識別を試みた結果を図1に示す。 $D_{(1)}$ 、 $D_{(2)}$ はそれぞれ、大阪陶邑群、門生群からのマハラノビスの汎距離である。この図をみると、大阪陶邑群のサンプルは2点を除いてすべて、 $D_{(1)}^2 \leq 10$ の領域に、また、門生群のサンプルも3点を除いてすべて、 $D_{(2)}^2 \leq 10$ の領域に分布していることがわかる。 $D^2=10$ という距離は母集団の領界を示す。全国各地の窯についても、各母集団のサンプルの95%以上がこの領域内に分布していることがわかった。そうすると、 $D_{(母集団)}^2 \leq 10$ が、各母集団のサンプルの所属条件とみることができる。そこで、もし、古墳・遺跡出土の須恵器が母集団(A)に帰属できるとすれば、 $D_{(A)}^2 \leq 10$ を満足しなければならないことになる。2群間判別分析では、この条件を満足したからといって十分ではない。互いに、相手群から十分離れていなければならない。この十分条件が $D_{(相手群)}^2 > 10$ である。図1をみると、大阪陶邑群、門生群の多くのサンプルはこれらの条件を満足し、前者は大阪陶邑領域 [$D_{(1)}^2 \leq 10$ 、 $D_{(2)}^2 > 10$] に、また、後者の多くは門生領域 [$D_{(2)}^2 \leq 10$ 、 $D_{(1)}^2 > 10$] に分布していることがわかる。もし、両方の化学特性が類似してくると、両群のサンプルは次第に接近し、遂に、重複領域 [$D_{(1)}^2 \leq 10$ 、 $D_{(2)}^2 \leq 10$] に混在することになる。大部分のサンプルがこの領域に分布すれば、両者の相互識別は困難となる。つまり、K、Ca、Rb、Srの4因子からみて、両群の素材粘土は同質ということになる。一般に、「…窯群」の中の窯を任意に選び出して2群間判別分析を行うと、このような結果を与える。

さて、図1より、両群の一部のサンプルは重複領域に分布するものの、両群の相互識別は十分可能であることがわかる。大阪陶邑群と池の奥群の相互識別も同様な結果を与えた。⁽¹⁾

次に、この分布図を使って、新山山田遺跡出土須恵器の産地を推定したのが図2である。大阪陶邑領域に分布したとみられるのはNa 1、2、7、8、10、14、24、26、31、32、33、34、

36、37、38、41、42の17点である。表1をみても、これらのサンプルの門生群、池の奥群からのマハラノビスの汎距離は遠く、 $D^2 \leq 10$ を満足する産地は大阪陶邑群のみである。この結果、これら17点のサンプルは大阪陶邑産と推定された。この他に、前記の帰属条件を十分に満足していないが、大阪陶邑産の可能性をもつのはNo17、21、40、48、49の5点である。これらのサンプルのRb-Sr分布図を図3に示す。ほとんどのサンプルは大阪陶邑領域に分布している。この領域は大阪陶邑群の多数のサンプルを包含するようにしてとられた領域であり、定性的な意味しかもたないが、2群間判別分析の結果を再確認する上には役に立つ。ここで、No26は2群間判別分析では大阪陶邑産と推定されたが、Rb-Sr分布図では大阪陶邑領域を少しずれたので、(?)を付して大阪陶邑産と推定した。No40、48、49も同様である。また、図2ではNo18、28、39は門生領域に分布し、門生群産の可能性をもつが、産地を推定する前に、化学特性が類似している池の奥群との2群間判別分析が必要である。

図4には、門生群と池の奥群の相互識別の結果を示してある。予想どおり、両群の大半のサンプルは重複領域に分布しており、相互識別は難しいことを示している。現在は、門生群、池の奥群は大井群として一括されている。なお、中央に引かれた傾線は両母集団が統計学的にみて等

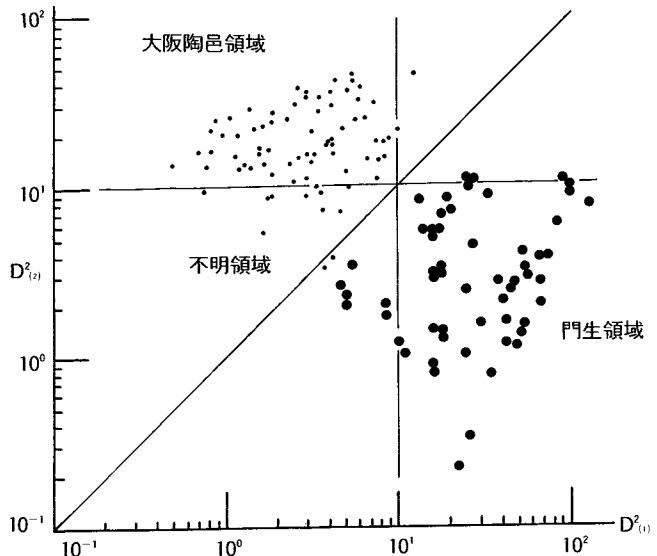


図1 K、Ca、Rb、Sr因子による大阪陶邑群と門生群の相互識別

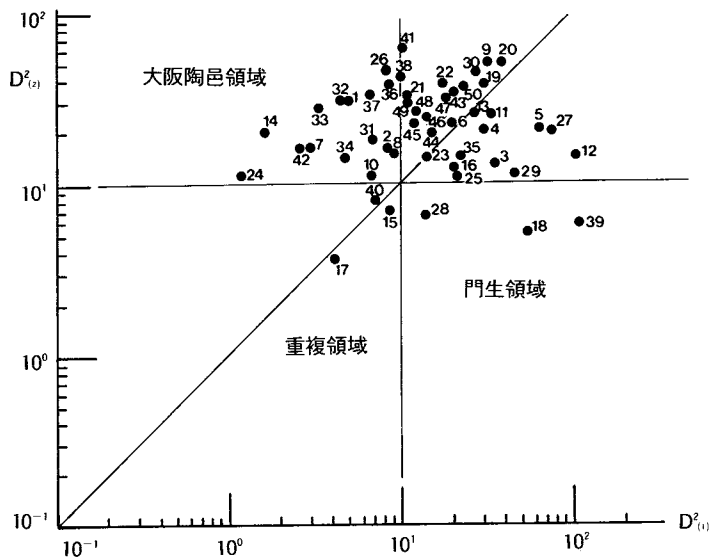


図2 産地推定の結果(1)

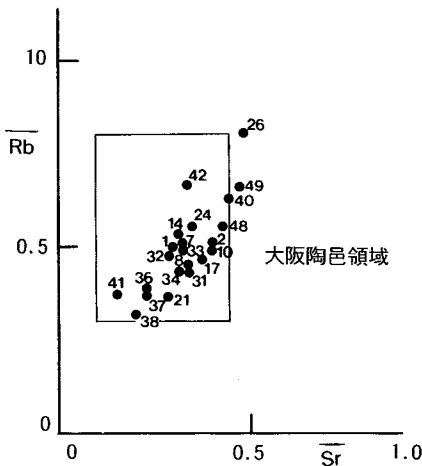


図3 大阪陶邑産と推定されたもののRb-Sr分布図

価な集団であるとみなされたときの理想的境界線である。両群の化学特性が類似してはいるものの、この境界線を挟んで両群のサンプルは偏在していることがわかる。つまり、池の奥群の須恵器の素材粘土と門生群の粘土とは必ずしも、その化学特性が一致している訳ではないのである。したがって、この図を使えば、ある程度、池の奥群産か門生群産かの推定はできる訳である。図5には、図4の判別分析図を使って新山山田遺跡出土須恵器の産地を推定した結果を示す。D₍₃₎は池の奥群からのマハラノビスの汎距離である。図5より、Na 3、16、25、28、29、35、44、45の8点が池の奥群産である可能性をもつことがわかる。これらについて、表1でマハラノビスの汎距離を点検すると、いずれも池の奥群が最短距離にあることがわかる。したがって、これらは池の奥群産と推定された。これらのRb-Sr分布図は図6に示されている。いずれのサンプルも池の奥領域によく対応していることがわかる。

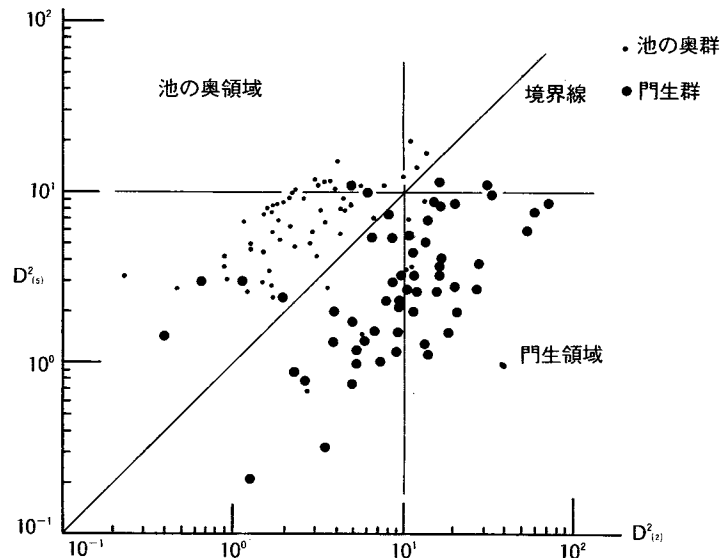


図4 池の奥群と門生群の推定識別 (K、Ca、Rb、Sr 因子使用)

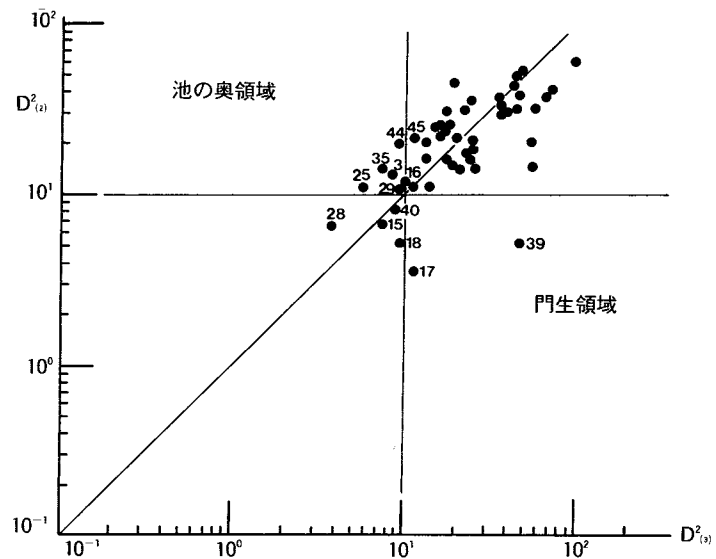


図5 産地推定の結果(2)

図5で門生領域に対応するとみられるNa15、17、18、39、40のうち、Na40は表1より大阪陶邑群が最短距離にあることがわかる。Na17は門生群にも大阪陶邑群にも距離は十分近い。しかし、図3のRb-Sr分布図では大阪陶邑領域に入れた方がよいと思われたので、(?)を付して大阪陶邑産と推定した。残る3点(Na15、18、39)のRb-Sr分布図も図6に示されている。門生領域は池の奥領域とよく似ているが、その点からみると、Na39は少し離れて分布しており、門生群と推定するには少々疑問がある。表1では門生(?)と推定しておいた。

この結果、前記の3母集団に帰属しなかったものはNa4、5、6、9、11、12、13、19、20、22、23、27、30、43、46、47、50の17点である。これらのRb-Sr分布図を図7に示す。図7からも予想されるように、これら17点のサンプルは決して同質の胎土ではない。そこで、これら17点のサンプルをクラスター分析によって分類してみることにした。図8にデンドログラムを示す。この図では横軸に類似したものから順に試料を並べてある。クラスター番号を使って

いるので、試料番号とは少し異なる。表1の試料番号の欄の()内にクラスター番号を示しておいた。縦軸には最短距離法で計算した類似度を示してある。類似しているものが逐次、一本の枝にまとめられていき、類似度の異なるところでギャップが出来る。どこのギャップで区切って分類するかについては任意性があるので、区切ったあと、Rb-Sr分布図などで再認識するのも一法である。一応、クラスター番1から16までをA群、4から11までをB群とした。表1をみると、A群に分類されたものはいずれも池の奥群が最短距離に在り、池の奥群を含めた大井窯群の製品である可能性が考えられる。Na5、50についても同様である。B群は勿論、大井窯群には対応しない。しかし、池の奥窯群の灰原から出土した、8世紀代と推定される回転糸切り痕跡をもつ坏の胎土と類似している。この類の坏は目下のところ、灰原からは出土するものの、窯体内

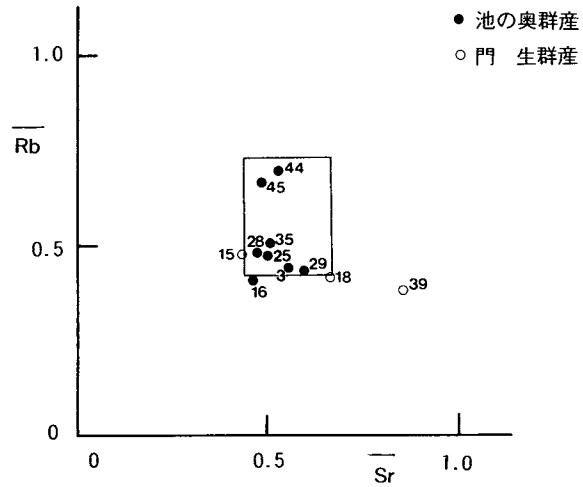


図6 池の奥群、および門生群産と推定されたもののRb-Sr分布図

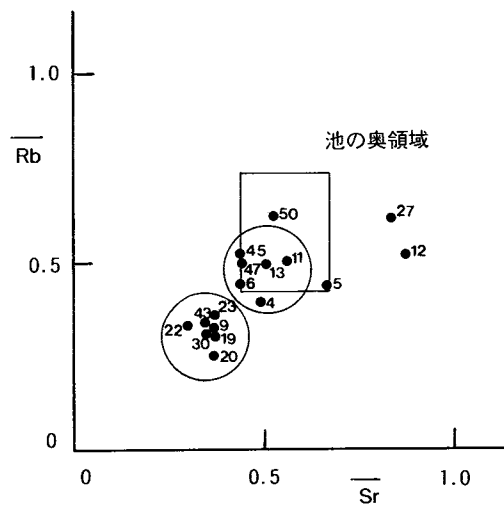


図7 産地不明のものものRb-Sr分布図

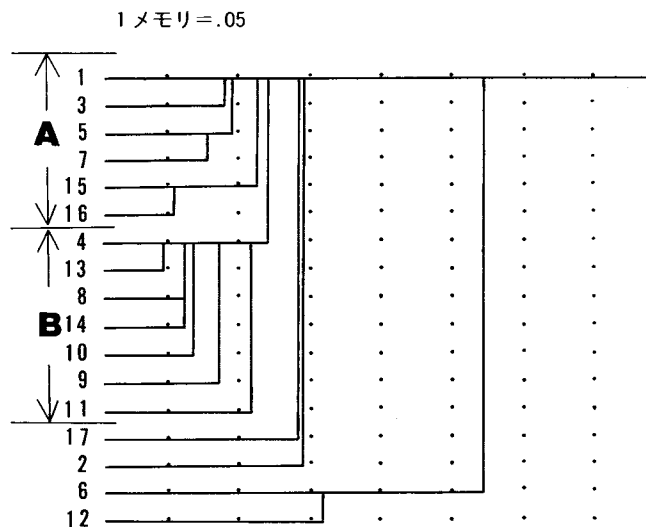


図8 産地不明となったものものクラスター分析 (K、Ca、Rb、Sr 因子使用)

からは出土せず、そのため、池の奥群産とは言い切れないものである。遠くから搬入されたものとは考えていない。Na12とNa27については全く産地不明である。今後に待ちたい。

文献

1) 三辻利一「池の奥窯跡群及びその周辺の遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」

「島根県松江市 松江東工業団地内発掘調査報告書」P391~418 (1990)

表1 分析値と2・3の母集団からのマハラノビスの汎距離の二乗値

試料番号	器形	K	Ca	Fe	Rb	Sr	門生群	池の奥群	大阪陶邑群	推定産地	
Na	1	0.359	0.109	1.68	0.486	0.305	30	36	5.0	大阪陶邑	
	2	0.397	0.155	2.03	0.499	0.406	16	13	8.3	大阪陶邑	
	3	0.357	0.208	1.75	0.441	0.563	13	8.2	35	池の奥	
	4(1)	0.317	0.180	1.66	0.392	0.492	20	13	30	未定	
(陶質?)	5(2)	0.318	0.223	2.01	0.427	0.660	21	20	63	未定	
	6(3)	0.334	0.194	1.72	0.441	0.439	22	16	20	未定	
	7	0.407	0.142	1.75	0.487	0.329	16	23	3.0	大阪陶邑	
	8	0.375	0.141	2.35	0.439	0.377	15	18	8.7	大阪陶邑	
	9(4)	0.211	0.134	1.59	0.321	0.367	51	47	32	未定	
	10	0.416	0.160	1.63	0.488	0.401	11	11	6.7	大阪陶邑	
	11(5)	0.344	0.231	1.80	0.503	0.559	25	16	34	未定	
(陶質?)	12(6)	0.387	0.310	1.92	0.515	0.872	14	55	105	未定	
	13(7)	0.341	0.208	1.83	0.487	0.503	25	15	26	未定	
	14	0.423	0.127	2.18	0.531	0.319	20	24	1.6	大阪陶邑	
	15	0.431	0.168	2.08	0.479	0.427	6.7	7.4	8.5	門生	
	16	0.359	0.170	2.17	0.401	0.460	12	10	20	池の奥	
	17	0.474	0.188	1.86	0.473	0.387	3.6	11	4.1	大阪陶邑(?)	
(陶質?)	18	0.386	0.265	1.71	0.424	0.666	5.1	9.5	54	門生	
	19(8)	0.237	0.170	1.55	0.312	0.373	37	35	30	未定	
	20(9)	0.192	0.141	1.85	0.253	0.368	50	46	38	未定	
	21	0.295	0.119	2.33	0.358	0.290	31	43	11	大阪陶邑(?)	
	22(10)	0.258	0.130	2.05	0.327	0.300	38	46	17	未定	
	23(11)	0.340	0.186	2.71	0.360	0.372	14	20	14	未定	
	24	(坏・身)	0.476	0.160	1.74	0.552	0.353	11	14	1.2	大阪陶邑
	25	坏・身	0.386	0.211	1.58	0.474	0.505	11	5.7	21	池の奥
	26	坏・身	0.550	0.191	2.12	0.804	0.485	45	19	8.1	大阪陶邑(?)
(陶質?)	27(12)	坏・身	0.439	0.394	2.51	0.606	0.828	20	53	77	未定
	28	有蓋高坏	0.420	0.199	2.10	0.477	6.5	3.7	14	池の奥	
(陶質?)	29	有蓋高坏	0.344	0.266	2.32	0.426	0.601	11	9.5	45	池の奥
	30(13)	有蓋高坏	0.233	0.126	1.78	0.307	0.351	43	43	26	未定
	31	有蓋高坏	0.366	0.144	1.54	0.438	0.342	18	24	6.8	大阪陶邑
	32	有蓋高坏	0.353	0.104	1.43	0.467	0.291	30	38	4.8	大阪陶邑
	33	有蓋高坏	0.401	0.139	1.66	0.488	0.331	17	23	3.3	大阪陶邑
	34	有蓋高坏	0.384	0.144	2.17	0.425	0.324	14	25	4.7	大阪陶邑
	35	罎	0.382	0.202	1.70	0.491	0.512	14	7.5	22	池の奥
	36	甕	0.309	0.085	3.05	0.383	0.235	37	65	8.5	大阪陶邑
	37	甕	0.311	0.078	3.03	0.367	0.235	32	57	6.5	大阪陶邑
	38	甕	0.267	0.079	3.05	0.312	0.208	41	70	10	大阪陶邑
(陶質?)	39	甕	0.406	0.434	2.60	0.376	0.851	5.9	48	109	門生(?)
(陶質?)	40	甕	0.611	0.214	1.93	0.619	0.454	8.2	8.6	6.9	大阪陶邑(?)
	41	壺	0.255	0.039	3.68	0.370	0.155	60	95	10	大阪陶邑
	42	罎	0.555	0.125	2.38	0.665	0.335	16	17	2.6	大阪陶邑
	43(14)	壺	0.269	0.136	3.07	0.335	0.350	33	36	20	未定
	44	坏・身	0.505	0.152	1.27	0.689	0.538	20	9.3	15	池の奥(?)
	45	坏・身	0.475	0.138	1.26	0.659	0.494	22	11	12	池の奥(?)
	46(15)	坏・身	0.384	0.121	1.17	0.524	0.443	24	17	14	未定
	47(16)	坏・蓋	0.351	0.122	1.17	0.504	0.445	31	22	18	未定
	48	坏・身	0.392	0.123	1.16	0.550	0.437	26	18	12	大阪陶邑(?)
	49	無蓋高坏	0.442	0.135	1.20	0.648	0.475	30	17	11	大阪陶邑(?)
	50(17)	坏・身	0.401	0.124	1.19	0.620	0.524	36	24	23	未定

新山研石山遺跡および陰田隠れが谷 遺跡出土須恵器の蛍光X線分析

奈良教育大学

三 辻 利 一

1) はじめに

粘土は岩石の風化によって生成する。粘土の生成過程は複雑であり解明されていない。また、すべての粘土が須恵器の素材になる訳ではない。1000℃を越えて焼成した場合、焼結して須恵器を製作できる粘土は工人達の眼を通して選別されたものである。これらの粘土の化学特性に地域差があることは窯跡出土須恵器の蛍光X線分析や放射化分析によって明らかにされた。そして、母岩の長石類に由来するとみられるK、Ca Rb Srの4因子を使い、多変両解析法の中の判別分析法を適用すると、須恵器の産地を推定することができる。

他方、遺跡にも様々な遺跡がある。複合遺跡からは古式須恵器も、古墳時代後期の須恵器も、奈良時代の須恵器も、さらには、律令体制下の須恵器も出土する。これらの時代判定は長年にわたる土器の考古学研究の成果である土器形成による編年に基づいて行われる。そして、土器の伝播・流通の様相は胎土分析によって追跡される。時代によって須恵器の伝播・流通の様相がどの様に変動するかは土器を古代史研究に活用していく上にきわめて重要な問題である。

本報告では前報の新山山田遺跡出土須恵器につづいて、新山研石山遺跡および、陰田隠れが谷遺跡から出土した古式須恵器、古墳時代後期の須恵器、飛鳥・奈良時代の須恵器を蛍光X線分析法で分析し、産地推定した結果について報告する。

2) 分析結果

須恵器片試料はすべて、表面を研磨してのち、100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠にして約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmの錠剤試料を作成して蛍光X線分析を行った。蛍光X線分析には波長分散型の完全自動分析装置、理学電機製3270機が使用された。分析値は同時に測定された岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使い標準化した値で表示された。

全分析値は表1にまとめられている。古式須恵器の産地推定には地元産か、それとも、陶邑窯群からの搬入品かを判断する2群間判別分析法がデータ解析法としてとられる。この手法は古墳時代や奈良時代の須恵器の産地推定にも使われる。しかし、律令体制に入ると、須恵器の伝播の仕方は大きく変動するので、この手法は採用されない。本報告書では地元母集団として

大井群（安来市の門生窯の須恵器も含む）をとり上げ、陶邑群との間で2群間判別分析が行われた。両群の重心からのマハラノビスの汎距離の二乗値は表1にまとめられている。この値の計算にはK、Ca、Rb、Srの4因子が使用された。既に、この手法で大井群と大阪陶邑群がほぼ完全に相互識別できることが示されている。両母集団の領界は5%の危険率をかけたHotellingの T^2 検定によって決められる。多くの場合、この条件は $D^2(X) \leq 10$ である。D(X)は母集団(X)からのマハラノビスの汎距離である。したがって、古墳出土須恵器の産地推定では各母集団への帰属条件として、 $D^2(X) \leq 10$ が採用される。この条件を入れて産地推定した結果は表1の最右欄に示されている。両母集団がともに帰属条件を満足した場合には両方を産地として上げてある。また、 D^2 値が11~12程度のもも産地の可能性を捨て切れず、(?)符号を付して産地推定を行った。この結果はRb-Sr分布図上にプロットすると、一目瞭然となりわかり易い。とくに、陶邑群の須恵器と大井群の須恵器はこの分布図上では明確に分離する。図1には陶邑群産と推定され須恵器、図2には大井群産と推定された須恵器、さらに、図3には両群に帰属せず、産地不明となった須恵器のRb-Sr分布図を示す。各図には陶邑領域、大井領域を示してあり、それぞれ、よく対応していることがわか

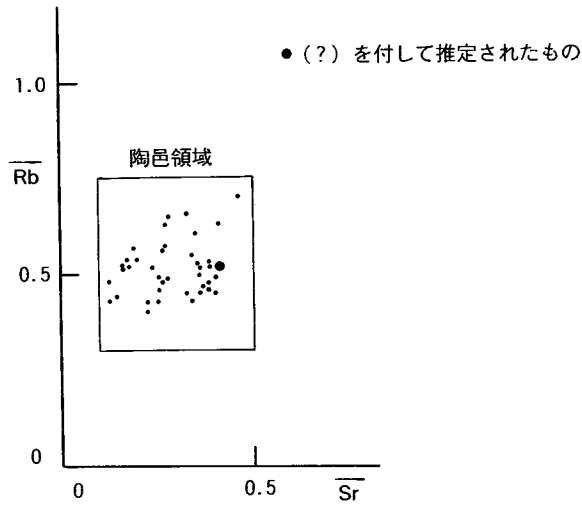


図1 陶邑産と推定される

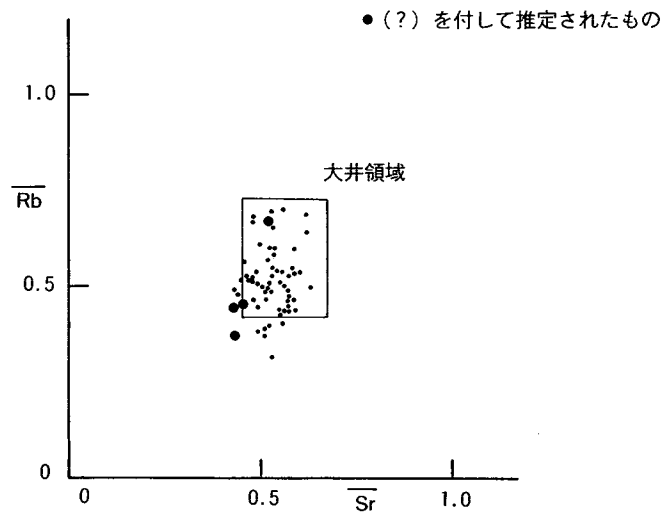


図2 大井群産と推定された須恵器のRb-Sr分布図

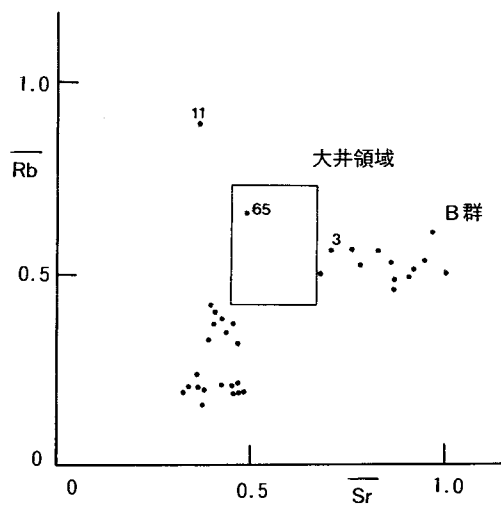


図3 産地不明

る。こうして、新山研石山遺跡には陶邑産の須恵器も、地元大井群産の須恵器も、さらに、これら両母集団以外の産地の須恵器もあることが明らかになった。

さて、ここで問題は同一遺跡では年代によって、また、異なる遺跡間で須恵器の供給の様相はどの様に変動するかである。そこで、新山研石山遺跡の古式須恵器の Rb-Sr 分布図を図 4 に描いてみた。大部分の須恵器は陶邑領域に分布しており、大井領域に分布するものはほとんどない点が注目される。そして、Sr 量の多い領域に両母集に帰属しない第 3 群が分布している。この内容をもう少し詳しくしてみよう。

表 1 より研石山遺跡出土古式須恵器、51 点中に陶邑産と推定されたものが 35 点もある。大井群産の可能性があるのは Na10、19、20、27、35 の 5 点あるが、このうち Na10、20、35 の 3 点は同時に陶邑産の可能性もある須恵器である。そうすると、単

独で大井群産と推定できるのは Na19、27 の 2 点にすぎない。他方、産地不明となったのは Na3、6、7、9、11、29、33、34、36、37 の 10 点もある。このうち、Na7 は陶邑産の可能性をもつことは図 4 からわかる。また、Na11 も他の 8 点の須恵器とは全く異なる胎土をもつ。残る 8 点の須恵器は図 4 でもまとまって分布しており、同一産地の製品とみられるが、陶邑産でも、大井群産でもないことは明白である。他地域の窯跡出土の古式須恵器でも Rb-Sr 分布図上でこの領域に分布するものはない。したがって、産地不明となった。こうして、新山研石山遺跡出土の古式須恵器には陶邑産と推定されたものが圧倒的に多く、地元、大井群産と推定される須恵器はわずか 2 点にすぎないことがわかった。

これに対して、古墳時代後期の須恵器の Rb-Sr 分布図を図 5 に示す。図 4 とは対称的に、大井領域に大部分の須恵器を分布することがわかる。そこで表 1 をみると、地元大井群産と推定されたものは 49 点の試料中の 38 点もの多くに達するのに対し、陶邑産の可能性のあるものは Na54、55、70、98 の 4 点にすぎない。しかも、そのうち Na54、70 の 2 点は

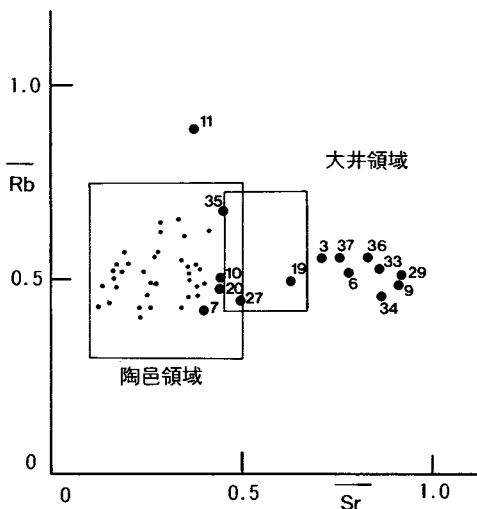


図 4 研石山遺跡出土古式須恵器の Rb-Sr 分布図

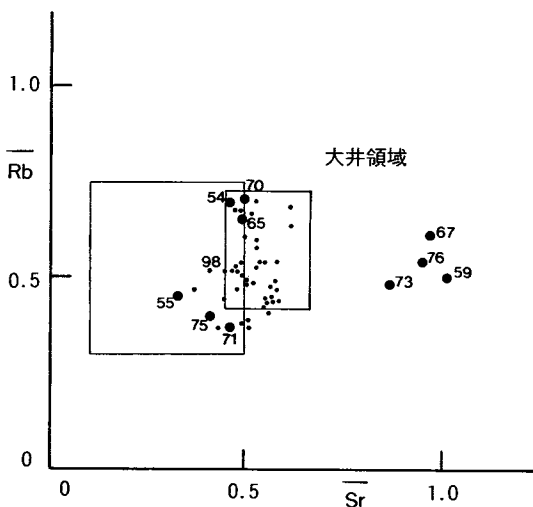


図 5 研石山遺跡出土古墳時代後期須恵器の Rb-Sr 分布図

ももつ試料である。そうすると、単独で陶邑産と推定されるのはNa55、98の2点にすぎなくなる。他方、産地不明となったのは、Na59、65、67、71、73、75、76の7点である。そのうち、陶邑領域にも大井領域にも含まれないのはNa59、67、73、76の4点であることは図5からわかる。そして、これらを図4の産地不明となった8点の須恵器と比較すると、同じ領域に分布しており、これら4点も同一産地の須恵器である可能性があることがわかる。このように、古墳時代後期には陶邑産がそっくり地元大井群産に入れ替わり須恵器供給ルートに大きな変動があった点が注目される。

次に飛鳥・奈良時代の須恵器のRb-Sr分布図を図6に示す。図4、5に比較して全く異なった分布をしている点が注目される。表1の産地推定の結果を見ると、陶邑産と推定されたものは皆無であり、大井群産と推定されたNa115、117、119、120の4点を除いて他はすべて産地不明である。そこで、鳥根県東部地域で、これら産地不明の須恵器が分布する領域に対応する窯を探し求めたところ、古曾志窯群が

あることがわかった。それで図6に古曾志領域を描いた。大井群産と推定されたNa119、120を含めて、産地不明となった多くの須恵器が古曾志領域に対応することがわかる。したがって、飛鳥・奈良時代の須恵器の産地は地元、古曾志窯群である可能性が出てきた。以上の結果、新山研石山遺跡では古式須恵器の時代、古墳時代後期、飛鳥・奈良時代と時代が変わるにつれて、須恵器の供給元は大阪陶邑から地元大井窯群へ、さらに、地元古曾志窯群へと変遷していた可能性が強いことがわかった。図4、5、6の3枚のRb-Sr分布図にその変遷の跡が描き出された訳である。貴重な例である。

新山研石山遺跡に対して、陰田隠れが谷遺跡の須恵器の産地はどうか。この結果は図7に示されている。大部分の須恵器は大井領域に分布していることがわかる。表1の産地推定の結果をみると、大部分

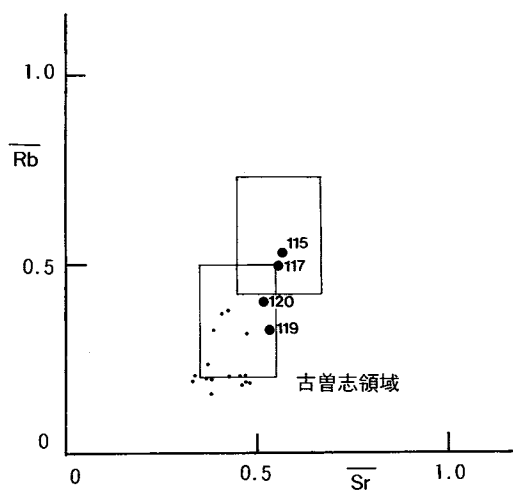


図6 研石山遺跡 Rb-Sr 分布図

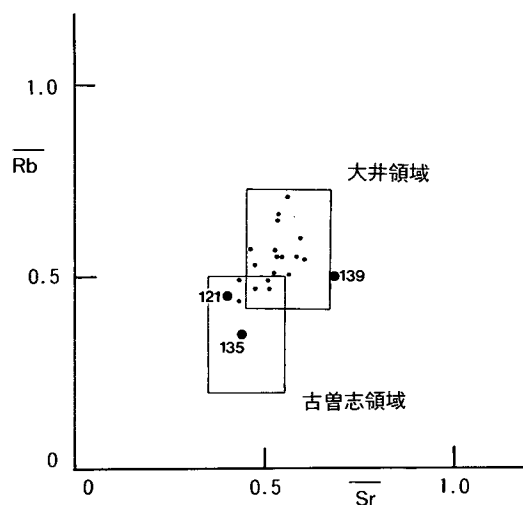


図7 隠れが谷遺跡出土須恵器の Rb-Sr 分布図

の須恵器は大井群産と推定されていることがわかる。No.121は陶邑産の可能性をもつが、大井群産の可能性もある。これ1点のみが陶邑産というのも妙である。大井群産なのかもしれない。産地不明となったのはNo.135と139の2点であるが、このうち、No.135は古曾志窯群の製品であることは図7から推察される。新山研石山遺跡とは須恵器の供給の様相は異なるようである。この点も大変興味深い結果である。このようなデータの集積の上に、土器は古代史研究に大きく役だってくることであろう。

表1 分析値と大阪陶邑群・大井群からのマハラノビスの汎距離の二乗値

試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	大阪陶邑群	大井群	推定産地
No.1	0.314	0.016	2.35	0.433	0.123	0.072	6.6	97	陶邑
2	0.405	0.025	2.41	0.523	0.165	0.096	3.7	70	陶邑
3	0.460	0.305	2.08	0.555	0.709	0.236	46	16	不明
4	0.448	0.152	2.49	0.455	0.360	0.218	3.5	16	陶邑
5	0.427	0.040	2.55	0.569	0.187	0.125	3.5	61	陶邑
6	0.412	0.312	1.57	0.524	0.783	0.227	72	31	不明
7	0.351	0.181	2.98	0.416	0.404	0.158	14	15	不明
8	0.416	0.094	2.57	0.562	0.270	0.104	1.6	39	陶邑
9	0.389	0.340	1.68	0.489	0.911	0.262	120	64	不明
10	0.441	0.193	2.51	0.501	0.442	0.206	8.6	5.0	大井群
11	0.535	0.092	1.63	0.893	0.370	0.162	12	52	陶邑
12	0.543	0.134	2.88	0.608	0.349	0.287	1.9	15	陶邑
13	0.406	0.134	2.19	0.464	0.384	0.193	7.0	15	陶邑
14	0.373	0.083	3.09	0.401	0.233	0.099	2.2	49	陶邑
15	0.457	0.155	2.04	0.539	0.382	0.195	2.9	11	陶邑
16	0.432	0.142	2.02	0.522	0.363	0.180	3.0	16	陶邑
17	0.394	0.091	2.77	0.551	0.341	0.204	4.9	30	陶邑
18	0.366	0.066	3.08	0.432	0.232	0.126	2.6	52	陶邑
19	0.393	0.265	2.34	0.503	0.634	0.194	41	10	大井群
20	0.428	0.169	1.61	0.476	0.437	0.227	9.8	6.7	大井群
21	0.431	0.013	2.71	0.535	0.166	0.100	4.6	68	陶邑
22	0.464	0.086	2.16	0.634	0.278	0.278	2.0	36	陶邑
23	0.406	0.096	3.52	0.430	0.262	0.141	1.4	39	陶邑
24	0.361	0.010	2.77	0.476	0.127	0.039	5.3	89	陶邑
25	0.364	0.057	2.61	0.464	0.257	0.150	3.8	48	陶邑
26	0.406	0.071	2.63	0.486	0.280	0.149	2.4	37	陶邑
27	0.386	0.211	2.27	0.451	0.486	0.202	19	5.4	大井群
28	0.437	0.061	2.31	0.483	0.269	0.202	2.5	38	陶邑
29	0.370	0.431	2.03	0.506	0.923	0.303	127	79	不明
30	0.445	0.171	2.14	0.488	0.404	0.244	5.6	8.8	陶邑
31	0.474	0.089	1.60	0.630	0.409	0.180	7.7	16	陶邑
32	0.493	0.118	2.51	0.525	0.385	0.308	5.3	12	陶邑
33	0.381	0.408	1.96	0.534	0.860	0.304	102	61	不明
34	0.352	0.332	1.74	0.461	0.873	0.206	116	56	不明
35	0.512	0.097	1.53	0.676	0.448	0.194	10	11	陶邑
36	0.446	0.321	2.12	0.559	0.833	0.264	80	41	不明
37	0.420	0.292	1.85	0.562	0.761	0.250	63	29	不明
38	0.337	0.039	2.19	0.542	0.200	0.093	6.6	77	陶邑
39	0.443	0.137	1.97	0.528	0.355	0.201	2.2	16	陶邑
40	0.362	0.020	2.80	0.439	0.148	0.124	3.8	80	陶邑
41	0.541	0.142	2.44	0.656	0.333	0.239	1.8	17	陶邑
42	0.394	0.115	1.53	0.497	0.360	0.181	5.6	22	陶邑
43	0.434	0.139	2.66	0.433	0.341	0.203	3.5	21	陶邑
44	0.446	0.015	3.41	0.512	0.165	0.119	4.7	67	陶邑
45	0.348	0.078	2.51	0.488	0.264	0.213	4.5	49	陶邑
46	0.477	0.084	2.39	0.654	0.285	0.205	2.4	34	陶邑
47	0.465	0.093	2.41	0.566	0.275	0.247	0.54	32	陶邑
48	0.405	0.073	1.75	0.520	0.242	0.186	1.4	46	陶邑
49	0.351	0.048	2.71	0.519	0.182	0.092	5.1	74	陶邑
50	0.467	0.157	2.44	0.484	0.380	0.242	3.6	12	陶邑
51	0.461	0.152	2.49	0.467	0.372	0.229	3.8	14	陶邑
52	0.447	0.214	2.48	0.542	0.541	0.227	18	2.2	大井群
53	0.388	0.286	2.76	0.445	0.552	0.296	32	4.2	大井群
54	0.525	0.146	1.70	0.704	0.465	0.271	6.9	9.0	陶邑
55	0.358	0.162	3.38	0.451	0.330	0.145	7.9	26	陶邑
56	0.399	0.301	2.68	0.468	0.580	0.321	35	5.2	大井群
57	0.471	0.204	2.16	0.582	0.533	0.251	15	2.3	大井群
58	0.570	0.209	1.74	0.691	0.623	0.282	23	6.5	大井群
59	0.425	0.264	2.01	0.496	1.01	0.297	173	95	不明
60	0.426	0.137	2.01	0.531	0.476	0.200	15	7.8	大井群
61	0.366	0.176	2.52	0.466	0.482	0.152	20	10	大井群
62	0.407	0.168	2.45	0.522	0.453	0.172	12	9.3	大井群
63	0.570	0.149	1.54	0.682	0.481	0.309	9.3	3.2	大井群

試料番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	大阪陶邑群	大井群	推定産地
Na64	0.413	0.263	2.78	0.449	0.573	0.286	30	2.4	大井群
65	0.453	0.140	1.49	0.659	0.490	0.230	12	16	不明
66	0.437	0.200	2.44	0.487	0.580	0.297	30	2.5	大井群
67	0.485	0.324	1.29	0.607	0.966	0.420	117	82	不明
68	0.425	0.172	2.17	0.539	0.490	0.191	14	6.1	大井群
69	0.424	0.188	3.07	0.522	0.472	0.185	12	5.4	大井群
70	0.514	0.153	1.44	0.709	0.504	0.280	10	10	陶邑 大井群
71	0.312	0.222	3.15	0.365	0.462	0.240	29	13	不明
72	0.480	0.169	2.01	0.609	0.501	0.243	11	4.1	大井群
73	0.415	0.231	1.67	0.476	0.869	0.243	120	49	不明
74	0.394	0.208	2.12	0.443	0.589	0.170	37	4.8	大井群
75	0.338	0.181	3.37	0.395	0.413	0.142	17	16	不明
76	0.439	0.279	1.39	0.535	0.949	0.332	130	74	不明
77	0.364	0.172	2.42	0.412	0.555	0.189	37	8.0	大井群
78	0.480	0.153	1.35	0.669	0.524	0.279	14	11	大井群(?)
79	0.463	0.197	2.33	0.597	0.525	0.209	14	4.4	大井群
80	0.325	0.225	2.98	0.381	0.486	0.280	30	10	大井群
81	0.376	0.268	2.73	0.442	0.558	0.311	33	4.9	大井群
82	0.412	0.164	2.58	0.520	0.478	0.189	14	7.4	大井群
83	0.428	0.165	2.51	0.513	0.491	0.194	16	4.7	大井群
84	0.359	0.165	3.01	0.393	0.511	0.105	30	8.6	大井群
85	0.316	0.243	3.19	0.372	0.506	0.238	35	10	大井群
86	0.337	0.254	2.88	0.425	0.550	0.258	37	9.2	大井群
87	0.372	0.271	2.71	0.438	0.567	0.314	35	5.3	大井群
88	0.396	0.196	2.36	0.477	0.569	0.196	31	5.4	大井群
89	0.371	0.154	2.50	0.451	0.450	0.168	17	11	大井群(?)
90	0.417	0.151	2.41	0.492	0.517	0.132	23	5.5	大井群
91	0.491	0.218	2.04	0.641	0.624	0.223	26	8.8	大井群
92	0.426	0.206	2.23	0.535	0.583	0.218	28	5.4	大井群
93	0.426	0.182	2.40	0.500	0.496	0.157	16	3.6	大井群
94	0.375	0.297	3.55	0.369	0.430	0.270	27	12	大井群(?)
95	0.448	0.258	2.68	0.543	0.550	0.222	20	2.7	大井群
96	0.379	0.183	2.37	0.485	0.510	0.182	22	8.3	大井群
97	0.438	0.191	2.28	0.529	0.530	0.189	19	2.8	大井群
98	0.397	0.089	1.65	0.518	0.409	0.136	12	20	陶邑(?)
99	0.614	0.204	1.90	0.703	0.529	0.334	11	3.4	大井群
100	0.551	0.146	1.61	0.682	0.477	0.275	8.6	4.1	大井群
101	0.361	0.264	2.84	0.369	0.412	0.235	22	13	不明
102	0.367	0.305	3.59	0.333	0.389	0.249	29	19	不明
103	0.257	0.241	5.07	0.192	0.332	0.161	35	38	不明
104	0.271	0.364	3.66	0.193	0.470	0.296	67	22	不明
105	0.270	0.375	3.64	0.192	0.480	0.293	71	22	不明
106	0.288	0.291	4.54	0.211	0.344	0.242	39	34	不明
107	0.265	0.295	4.62	0.196	0.366	0.265	46	32	不明
108	0.280	0.321	3.51	0.206	0.468	0.223	55	19	不明
109	0.275	0.332	3.58	0.191	0.474	0.225	59	20	不明
110	0.273	0.298	4.62	0.196	0.381	0.263	45	30	不明
111	0.222	0.216	4.64	0.160	0.383	0.188	43	35	不明
112	0.320	0.159	3.18	0.322	0.471	0.110	32	15	不明
113	0.260	0.357	3.65	0.205	0.459	0.285	67	22	不明
114	0.338	0.200	2.20	0.379	0.432	0.119	20	13	不明
115	0.402	0.261	2.07	0.529	0.571	0.261	28	7.8	大井群
116	0.278	0.267	3.91	0.206	0.427	0.223	42	22	不明
117	0.371	0.262	2.16	0.496	0.557	0.226	32	9.6	大井群
118	0.285	0.225	3.80	0.240	0.366	0.212	28	28	不明
119	0.327	0.300	2.29	0.322	0.529	0.309	44	8.2	大井群
120	0.427	0.255	2.09	0.401	0.524	0.319	24	3.6	大井群
121	0.436	0.148	3.21	0.450	0.401	0.219	7.5	11	陶邑 大井群(?)
122	0.476	0.186	1.40	0.543	0.599	0.285	30	2.9	大井群
123	0.442	0.120	2.50	0.474	0.466	0.196	18	7.5	大井群
124	0.464	0.175	1.91	0.548	0.533	0.217	18	2.0	大井群
125	0.481	0.183	1.61	0.553	0.584	0.255	36	2.2	大井群
126	0.498	0.208	1.43	0.595	0.589	0.282	22	2.4	大井群
127	0.486	0.163	1.35	0.654	0.530	0.272	14	7.6	大井群
128	0.431	0.133	1.77	0.568	0.461	0.213	12	10	大井群
129	0.522	0.170	1.14	0.708	0.555	0.294	15	9.0	大井群
130	0.420	0.150	1.88	0.491	0.507	0.221	21	5.3	大井群
131	0.471	0.170	1.86	0.569	0.522	0.251	16	2.4	大井群
132	0.494	0.133	1.70	0.531	0.467	0.216	13	4.5	大井群
133	0.406	0.154	1.82	0.506	0.524	0.216	24	7.2	大井群
134	0.479	0.131	2.74	0.489	0.426	0.247	9.8	8.7	大井群
135	0.258	0.109	2.29	0.353	0.443	0.104	35	33	不明
136	0.500	0.162	1.32	0.664	0.529	0.281	14	6.7	大井群
137	0.444	0.108	2.13	0.439	0.429	0.151	16	12	大井群(?)
138	0.414	0.129	1.77	0.469	0.508	0.195	25	7.1	大井群
139	0.413	0.169	1.60	0.495	0.684	0.205	62	16	不明
140	0.447	0.191	2.11	0.505	0.555	0.240	24	1.7	大井群

新山遺跡出土鉄滓の調査

日立金属株式会社安来工場

和鋼記念館

経緯

新山遺跡は複合遺跡といわれる遺跡で、その中で鉄滓が出土したのは米子市新山字山田に位置する標高約25mの丘陵北斜面中腹部をL字状に削って平坦部を造成し、その中央部に炉跡状のものが認められた。鉄滓は平坦部の山側と斜面側下部から出土した。新山遺跡は、国道180号線バイパス道路改良工事にともなう埋蔵文化財試掘調査によって発見された。工事に先立ち遺跡の事前発掘調査を米子市教育委員会が行なった。調査の結果7世紀後半～8世紀中葉の遺跡と推定され、出土した鉄滓について米子市教育委員会より調査の依頼があったので、その結果とともに若干の考察を加えたので併せて報告する。

1. 資料

試料の明細および外観を表1および写真1に示す。

表1 試料の明細

番号	名称	明細	重量 g
No.1	NYYC (4区890926) 第2テラスNo.16	鉄滓は約80mm幅の湾曲した底面で、固ったその上に次の鉄滓が乗りかかった状態のもので、いずれも表面は凹凸状でやや赤味があり重たい感じ。(上部)(下部)として分析した。	900
No.2	NYYC 32T No.28-1	約80mm幅で表面は凹凸状で赤味があり重たい感じ。	350
No.3	NYYC 32T No.28-2 880730	底面側は約80mm幅で湾曲しており、また大きな割れが生じている。表面はやや赤味があって重たい感じ。	500
No.4	NYYC 第2テラス 6区下掘下中No.34 890927	約100mm幅の湾曲した底面で、表面は凹凸状で赤味があり重たい感じ。	600
No.5	NYYC 第2テラス No.62 891013	約80mm幅の湾曲した底面で、表面は凹凸状で赤味があり重たい感じ。	300

2. 化学組成

各鉄滓から無作為に試料を採取し、化学分析を行なった。各試料の化学組成を表2に示す。このうち炭素及び硫黄は堀場製作所 EMIA-1200型 CS 同時定量装置による赤外線吸収法による。また、T・Fe、FeO、Fe₂O₃、M・Feは湿式化学分析法によった。その他の元素は島津製作所製高周波誘導プラズマ発光分光分析装置 (ICPV-1012型) により定量した。

表2 各試料の化学組成 (重量%)

番号	C	SiO ₂	MnO	P	S	Ni	Cr ₂ O ₃	V ₂ O ₅	Cu	Al ₂ O ₃	Na	K	TiO ₂	CaO	MgO	T・Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	M・Fe
Na 1 (上部)	0.33	28.06	0.14	0.096	0.071	0.01	0.02	0.071	0.01	7.78	0.48	0.56	0.96	1.54	1.00	43.21	41.93	13.58	0.69
〃 (下部)	0.12	11.06	0.10	0.065	0.046	0.01	0.04	0.11	0.01	4.88	0.25	0.38	0.99	1.13	0.68	55.80	53.17	20.39	0.45
Na 2	0.55	11.09	0.24	0.078	0.058	0.01	0.03	0.22	0.01	5.65	0.12	0.15	3.94	0.31	0.79	54.31	35.35	37.58	0.18
Na 3	0.23	9.06	0.06	0.052	0.091	0.01	0.03	0.071	0.01	3.05	0.16	0.20	0.58	0.32	0.49	60.18	46.53	32.06	1.12
Na 4	0.18	10.00	0.11	0.057	0.14	0.02	0.03	0.13	0.01	3.58	0.25	0.35	1.68	0.65	0.73	57.40	41.44	33.29	1.49
Na 5	0.43	17.91	0.12	0.075	0.062	0.01	0.02	0.052	0.01	6.72	0.28	0.38	0.94	1.07	1.07	50.40	38.31	28.93	0.49

試料Na 1の上部は鉄分低目で下部は高い。その他の試料の鉄分 (T・Fe) 50%以上と高目である。

3. 顕微鏡組織

試料断面の顕微鏡組織を写真2~6に示す。

試料Na 1 (上部) は主としてファイヤライト+ガラス質組織であり、僅かにヴスタイトが晶出している。また (下部) 試料はヴスタイト+ファイヤライト+ガラス質組織である。Na 2~5 試料はヴスタイト+ファイヤライト+ガラス質組織である。

4. 構成相の解析

前項で観察した資料を用い、走査型電子顕微鏡 (SEM) による微細組織の観察並びに EDX 分析 (エネルギー分散型X分析) による局所的な定性分析を行なった。また粉碎試料を用いてX線回折を実施し、構成結晶の同定を行なった。結果を写真7~10に示す。試料Na 1 上部はX線回折ではほとんどファイヤライトである。試料Na 5 はファイヤライト+ヴスタイト、それに若干のマグネタイトを含む。また、僅かながらシリカが検出されているがこれは土壤の混入と思われる。以上結晶組織の検討を行なった結果をまとめると表3の通りである。

表3 各試料の構成組織

	ファイヤライト Fe ₂ SiO ₄	マグネタイト Fe ₃ O ₄	ヴスタイト FeO	シリカ SiO ₂	カルシウム アイアンシリケート CaFeSiO ₄	ガラス質 基地
Na 1 上部第2テラスNa16	◎		△		○	Si-K-Al-Fe-Ti
Na 5 第2テラスNa62	◎	○	◎	△		Si-Ca-Fe-Al-K-Ti

◎多い ○あり △僅かにあり

注: Na 1 のヴスタイトは顕微鏡組織による。

5. 考 察

大沢正巳氏^(注1)が調査された古墳出土鉄滓の化学組織、構成相に本鉄滓のそれとの比較を表4に示す。

表4 各試料の化学組成および構成相の比較

名 称		造滓剤量	TiO ₂	V	T・Fe	構 成 相
製錬滓 (砂鉄)	福岡地方	16.8~39.8	1.1~8.2	0.006~0.576	37.5~57.6	W+F, W+M+F, M+F
〃	岡山地方	17.1~25.9	5.03~19.8	0.02~0.18	32.1~41.8	M+F, U+I+F
鉱石系製錬滓		44.5~54.9	0.35~0.57	0.007~0.010	27.5~38.0	F+W, M微量
精錬鍛冶滓	福岡地方	21.0~33.5	0.22~0.9	0.009~0.167	49.1~55.6	W+F
〃	岡山地方	21.4	5.6	0.12	51.7	W+M+F
鍛錬鍛冶滓	福岡地方	10.1~12.6	0.1~0.7	0.013~0.288	62.2~64.0	W+F
〃	岡山地方	7.52	0.06~0.19	0.06	50.1~64.0	W+F
No.1 第2テラスNa.16 上部試料	新山遺跡	38.38	0.96	0.040	43.21	※W+F+C
〃 下部試料	〃	17.75	0.99	0.062	55.80	※W+※F
No.2 32T Na.28-1	〃	17.84	3.94	0.123	54.31	※W+※F
No.3 32T Na.28-2	〃	12.92	0.58	0.04	60.18	※W+※F
No.4 第2テラスNa.34	〃	14.96	1.68	0.073	57.40	※W+※F
No.5 第2テラスNa.62	〃	26.77	0.94	0.029	50.40	W+F+M+S

注1：※印は顕微鏡組織より 注2：造滓成分 SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO

W：Wustite, F：Fayalite, M：Magnetite, U：Ulvospinel, I：Ilmenite, S：SiO₂, C：Calcium Iron Silicate

表4により試料が製錬滓か鍛冶滓か、あるいは使用原料が砂鉄か鉱石（岩鉄）かについて考察してみる。

(1) 製錬滓か鍛冶滓か

鍛冶滓に対する製錬滓の特徴を列挙すると次の通りである。

- ① 全鉄分が低目である。(通常50%以下)
- ② 造滓成分が多い。(通常20%以上)
- ③ 同一原料を使用する場合、TiO₂が高目となる。
- ④ ヴスタイト (FeO) の生成が少ない。
- ⑤ 形状については、製錬滓が流動性のよい滑らかな面をもつのに対し、鍛冶滓は凹凸状である。

本資料についてみると、No.2、No.3、No.4については鉄分高く造滓成分低く、またヴスタイトの生成状態からして明らかに鍛冶滓の特徴を示していることから鍛冶滓と判断される。試料No.5については造滓成分はやや多いが鉄分は高く、TiO₂低くまたヴスタイトの生成状態からみて鍛冶滓と判断される。試料No.1（上部）についてはT・Fe低く、造滓成分が多い。また顕微鏡組織も他試料に比しヴスタイトの生成が少ないことから製錬滓と類似するが、砂鉄を原料とした製錬滓にしてはTiO₂が低い。普通砂鉄を用いた製鉄法で生成される鉄滓のTiO₂は、原料砂鉄のTiO₂含有量より鉄分回収による濃縮効果によって高くなる。ちなみに近郊産出砂鉄のTiO₂を挙げると表5のごとくなる。

表5 近郊砂鉄のTiO₂含有量（重量％）

産 地	TiO ₂
島根県仁多郡三沢村	2.89
〃 横田斐伊川筋	1.13
〃 阿井村真砂	1.47
伯耆国砥波砂鉄真砂	2.69
伯耆国日野郡真砂	4.34
伯耆国福威山赤目砂鉄	5.02
伯耆国日野郡日野川筋	4.92

これらの砂鉄を用いたところの製錬滓のTiO₂ならば0.96％（Na 1のTiO₂量）以上になることは確かである。また、溶着したNa 1下部鉄滓は明らかに鍛冶滓の特徴を示していることから製錬滓が溶着することは考えられず鍛冶滓と判断される。また、造滓成分の多いことから精錬鍛冶滓の可能性が大きい。試料Na 1（下部）は鉄分高く、造滓成分低くまた顕微鏡組織におけるヴスタイトの生成状態から鍛冶滓と判断される。

(2) 精錬鍛冶滓か鍛錬鍛冶滓か

鍛錬鍛冶滓に対する精錬鍛冶滓の特徴は次の通りである。

- ① 全鉄分が低目である。
- ② 造滓成分が多い。
- ③ 同一原料を使用する場合TiO₂がやや高目となる。
- ④ 金属鉄の混入が少ない。

試料Na 1（下部）は鉄分低目で、やや造滓成分が多くそれにTiO₂量が若干高目であることから精錬鍛冶滓と判断される。つぎに全鉄分の高い試料Na 3は造滓成分、TiO₂とも少なく鍛錬鍛冶滓の範囲に近いと思われるが、試料Na 2と同じ所から出土しておりNa 2が精錬鍛冶滓と推定されることから、本資料も大鍛冶に類した作業で仕上げに近い時期に発生した精錬鍛冶滓ではなかろうか。試料Na 2、Na 4は鉄分やや低く造滓成分が若干多いこと、それにTiO₂が1.68～3.94％と高いことから、鍛錬鍛冶滓とは考えられず精錬鍛冶滓と推定される。試料Na 5は鉄分低く造滓成分は多い。それに、TiO₂が高目であることから精錬鍛冶滓と推定される。

(3) 使用原料は砂鉄か鉱石か

使用原料を区別する指標となるのはTiとV量である。

製錬滓の場合は表4のごとく、TiO₂量に大差があるので区別は簡単であるが、精錬鍛冶滓では残存が壁土の熔融によって薄まるために区別が困難となる。本試料Na 1、2、3、4、5のTiO₂=0.58～3.94％、V量=0.029～0.123％は砂鉄系鍛冶滓の範囲にあって、鉱石系より明らかに多い。したがって砂鉄系精錬鍛冶滓と判断される。

(4) 炉周辺の土壌分析

炉跡と思われる形状のものが出土したが、それらには熱のため固くなった焼土的土壌の痕跡は見当らなかつた。しかし周辺には鉄滓の出土もあり、炭を燃やす時に生ずる灰分の残存も考えられるので周辺の土壌分析をおこなつた。結果を表6に示す。

Na 1～Na 3を一般的土壌成分とするとNa 4は各成分ともやや高く、Na 5はさらに高値を示している。木炭灰分中のCaOは約50～70%と高いが、Na 5のCaO量は0.11%と特に高く、したがって木炭灰分がNa 5堆積土の中に残存していると考えられる。

表6 炉周辺土壌分析(重量%)

番号	場 所	C	Na	K	CaO
Na 1	炉周辺焼土	0.20	0.10	0.43	0.01
Na 2	炭穴埋土(5区)	0.24	0.11	0.46	0.01
Na 3	炭穴埋土(5区)	0.23	0.12	0.48	0.02
Na 4	炭穴下焼土(5区)	0.27	0.18	0.59	0.03
Na 5	炉周辺堆積土	0.67	0.45	0.78	0.11

6. 結 言

米子市新山遺跡出土鉄滓について化学組成ならびに組織の調査を行なつた。結果を要約すると次の通りである。

- (1) Na 1、2、3、4、5試料は砂鉄系原料を用いた精錬鍛冶滓と推定される。

以上の調査は日立金属株式会社安来工場冶金研究所で実施し、和鋼記念館 佐藤 豊が取り纏めた。

《参考文献》

- (1) 大沢正巳；古代出土鉄滓からみた古代製鉄 日本製鉄史論集(たたら研究会1984)
- (2) 長谷川熊彦；砂鉄 技術書院 昭和38年5月15日

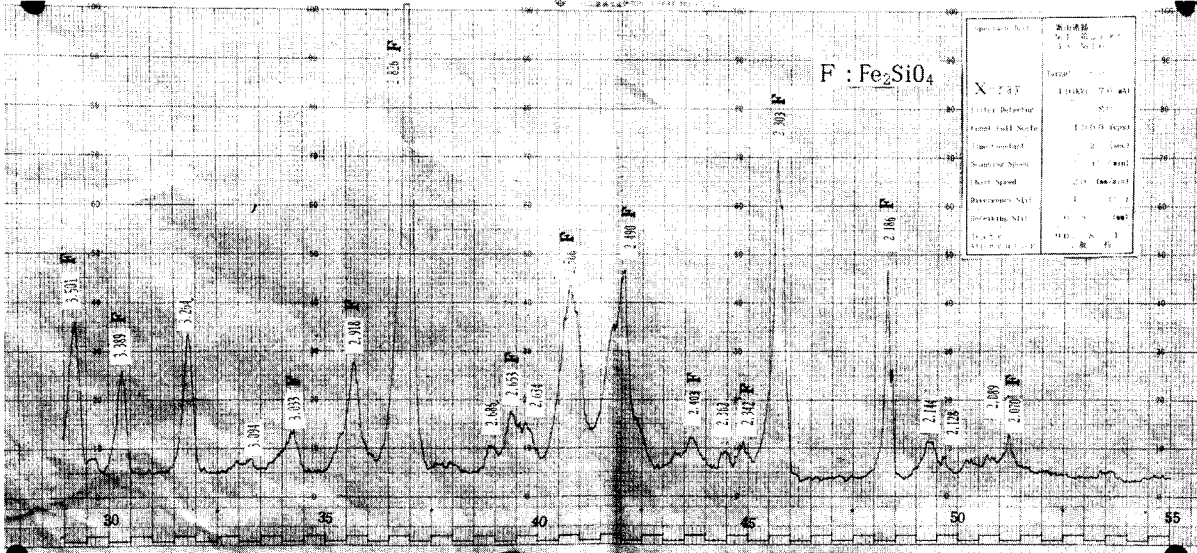


写真1 試料No.1 上部のX線回折像

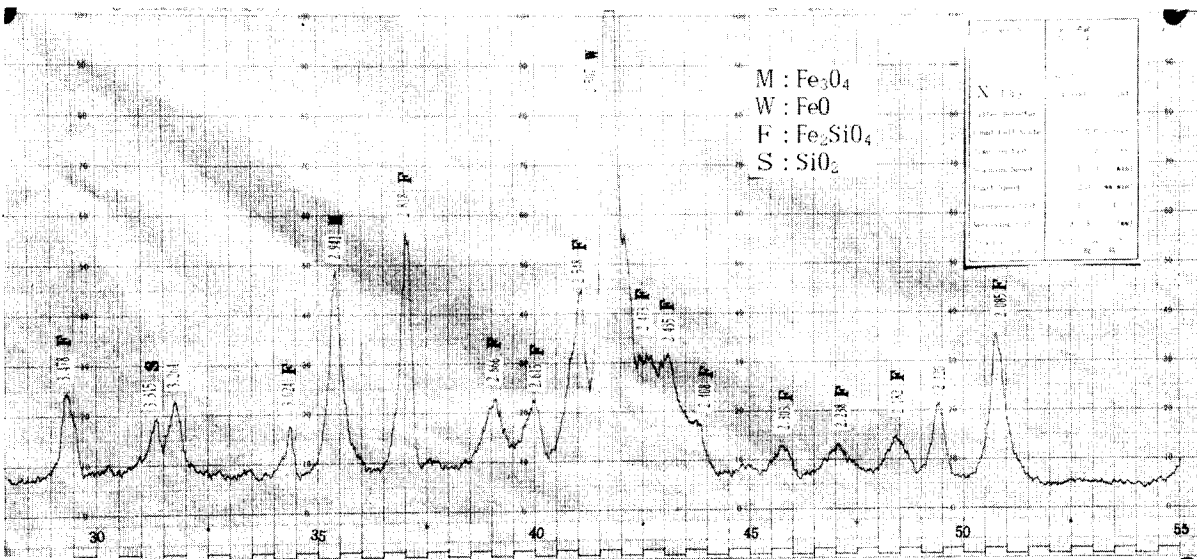


写真2 試料No.2のX線回折像



写真3-1



写真3-2



写真3-3



写真3-4

写真3-1 新山No.1試料の外観（上に乗っている方を上部、下方を下部）

写真3-2 新山No.2試料の外観

写真3-3 新山No.3試料の外観

写真3-4 新山No.4試料の外観

写真3-5 新山No.5試料の外観



写真3-5

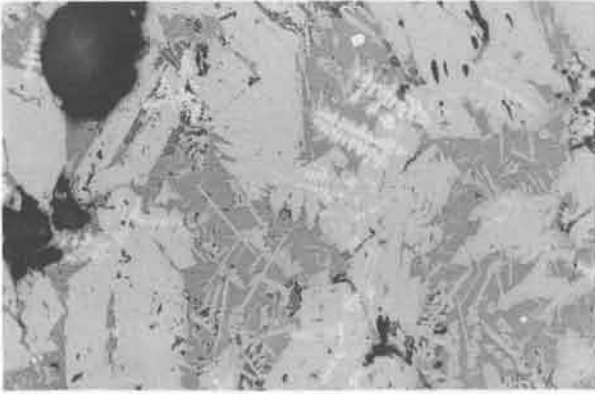


写真4-1 新山No.1 上部資料 ×100

淡灰色の板状結晶はファイヤライト
白色の樹枝状結晶はヴスタイト

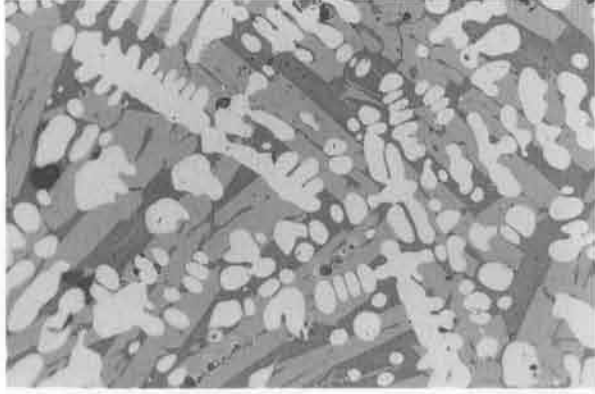


写真4-2 新山No.1 下部資料 ×100

白色の樹枝状結晶はヴスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト

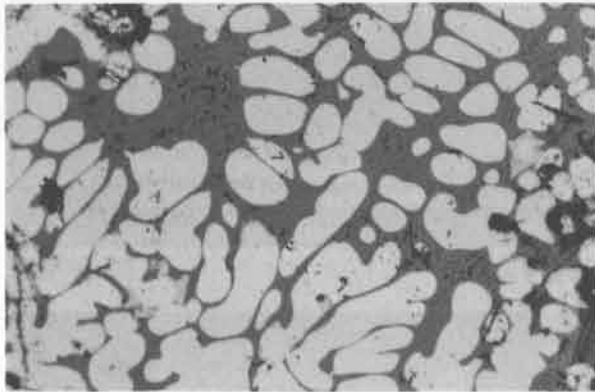


写真5 新山No.2 資料 ×100

大きな白色結晶はヴスタイト
淡灰色の小さな棒状結晶はファイヤライト

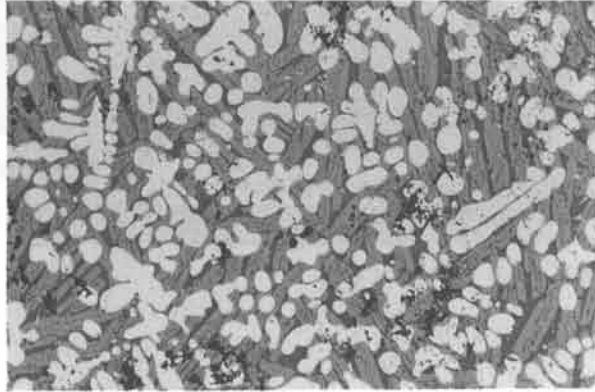


写真6 新山No.3 資料 ×100

白色の樹枝状結晶はヴスタイト
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト

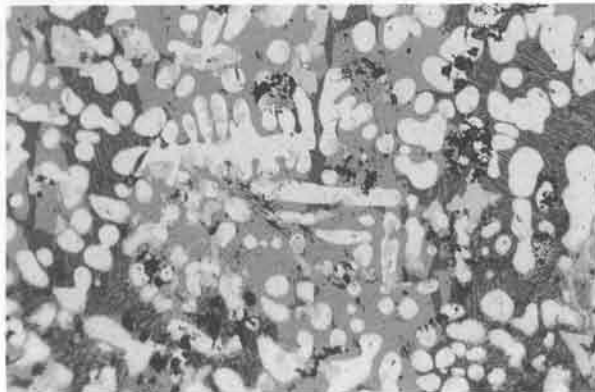


写真7 新山No.4 資料 ×100

白色の樹枝状結晶はヴスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト

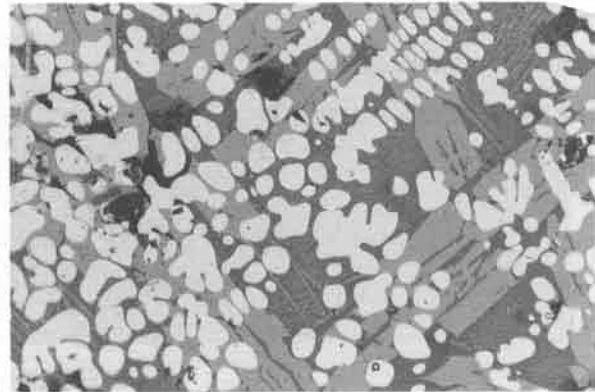
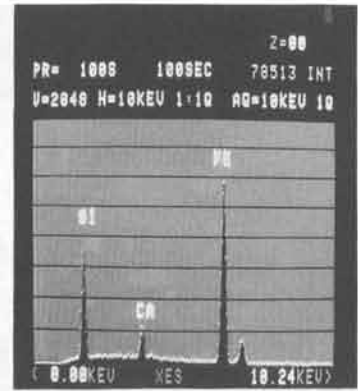


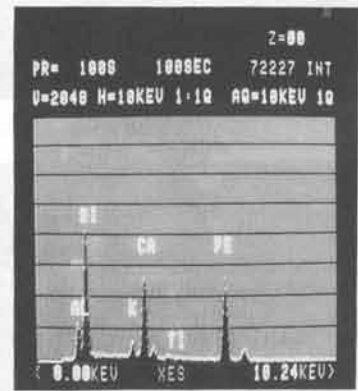
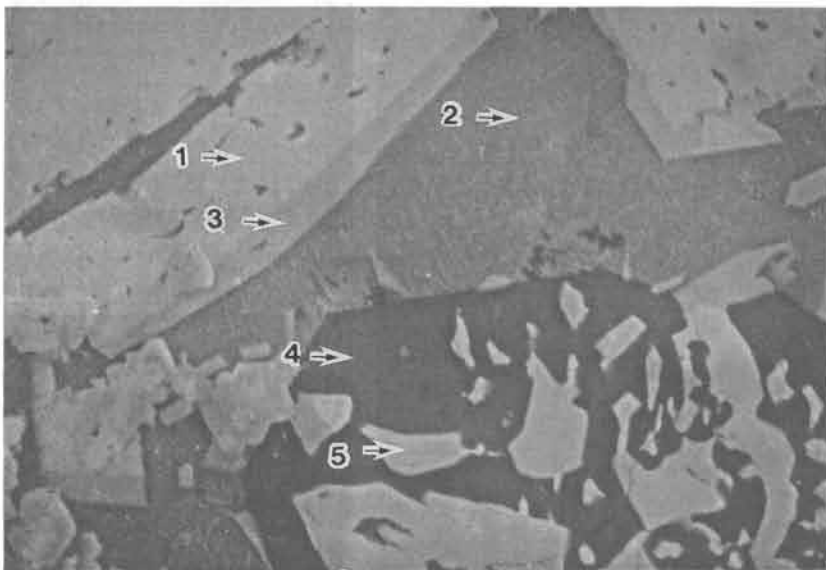
写真8 新山No.5 資料 ×100

白色の小豆状結晶はヴスタイト
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト

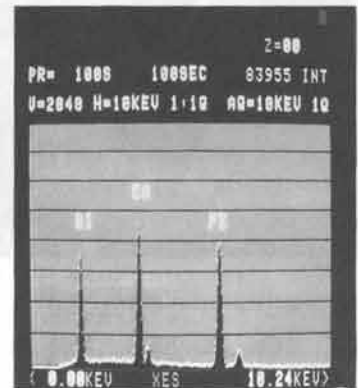


(1) ファイヤライト

×400



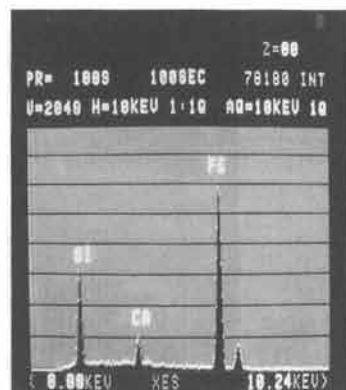
(2)



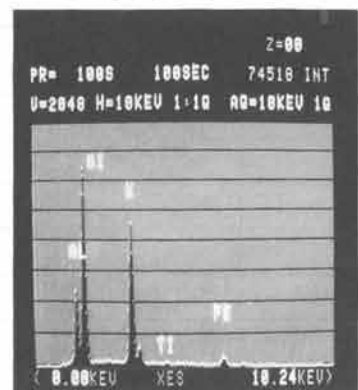
(3) カルシウムイアン
シリケート

写真9 試料№1 上部のSEM像とEDX分析

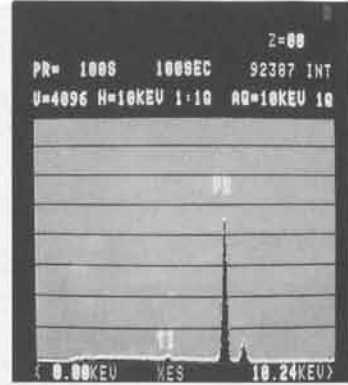
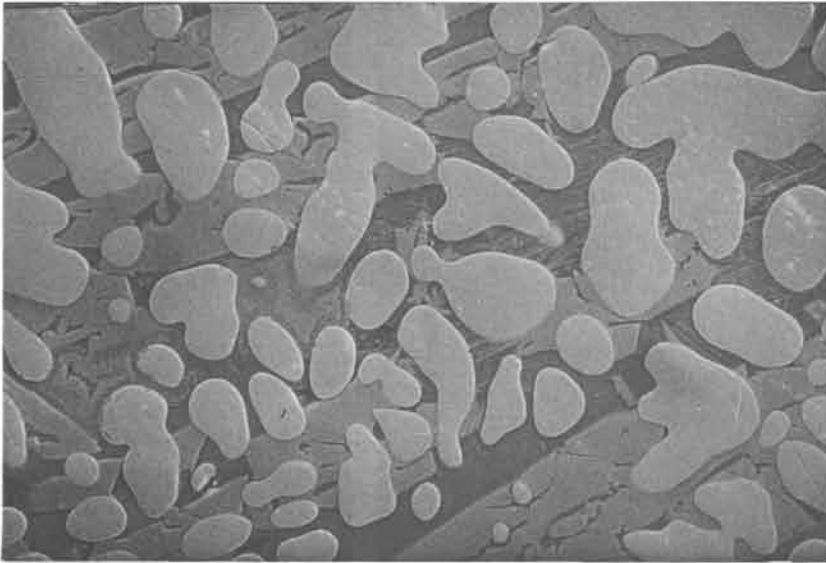
×1000



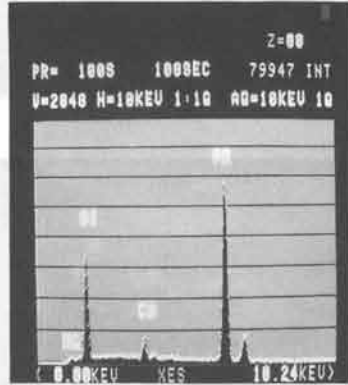
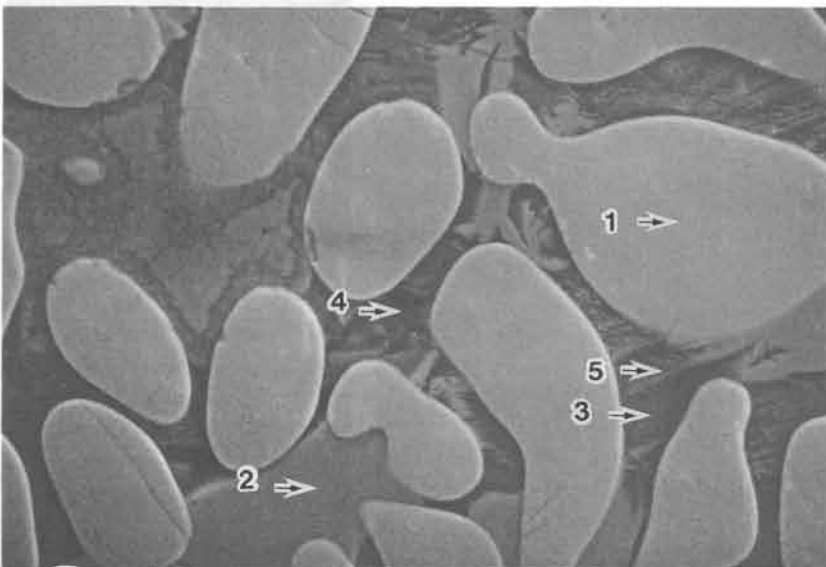
(5) ファイヤライト



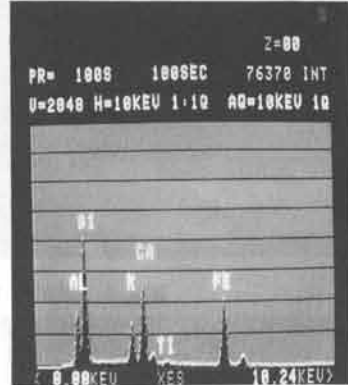
(4) 基地 (ガラス質)



(1) ヴスタイト



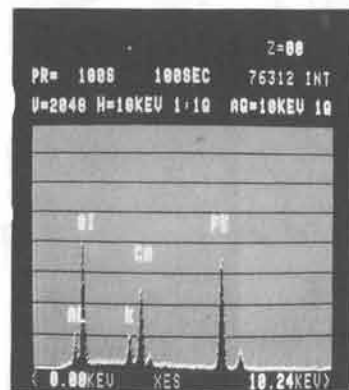
(2) ファイヤライト



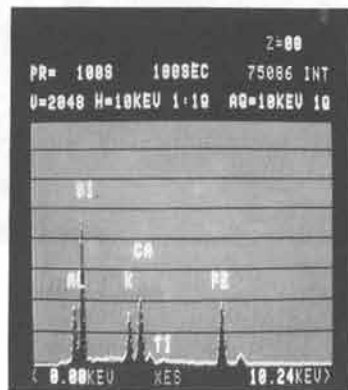
(3) 基地 (ガラス質)

写真10 試料No. 5のSEM像とEDX分析

×1000



(5)



(4)

付表1 遺物観察表

〈山田遺跡2区遺構関係遺物〉

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
27-1 (251)	SI-01	甕・底	①4.2	平底。	内面ヘラケズリ。	①1~2mmの砂粒含む ②黄褐色 ③良好	
27-2 (256)	SI-01	高 坏 (弥 生)	①10.8	内湾気味に大きく開く裾部。 端部近くに1条の沈線と段を有す。	内面ケズリ。外面ナデ調整	①1~2mmの白色砂粒含む ②外面黄褐色 内面橙褐色 ③良好	
29-1 (47.77)	SI-02	甕 (土師器)	①15.6	複合口縁。やや外反気味に外傾する口縁で、端部平坦。稜は若干つまみ出す。	内面頸部より下ケズリ。外面肩部緻密なハケ目。他内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②外面濃灰色 内面黄灰色 ③良好	
29-2 (75)	SI-02	甕 (土師器)		複合口縁。外反する口縁で、端部欠損。稜はつまみ出す。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②黄灰色 ③良好	
29-3 (114)	SI-02	甕 (土師器)	①12.2	複合口縁。外傾する口縁で端部は若干外側につまみ出し平坦。稜はつまみ出す。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①緻密 ③良好 ②外面淡黄色一部黒灰色 内面淡明黄色	
29-4 (68)	SI-02	甕 (土師器)	①13.6	複合口縁。外傾する口縁で稜はつまみ出す。	内面頸部ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②黄褐色 ③良好	
29-5 (56)	SI-02	甕 (土師器)	①15	複合口縁。外反する口縁。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①0.5mm大の砂粒含む ②外面明黄色 内面明橙色 ③良好	
29-6 (33)	SI-02	甕 (土師器)	①17	複合口縁。外反する口縁で、端部平坦。	内面頸部より下ケズリ。外面肩部ハケ目。他内外面共ナデ調整。	①1.5mmの白色砂粒少量含む ②黄褐色 ③良好	
29-7 (60)	SI-02	甕 (土師器)	①14.5	若干内湾気味に外傾する口縁で、端部平坦。	内外面共ナデ調整。	①0.5mm以下の砂粒 密 ②淡黄色 ③良好	
29-8 (121)	SI-02	鉢 (弥 生)	④13.9	平底。	外面ハケ目残る。内面ケズリで、指頭圧痕残る。	①微細砂粒含む 密 ②明黄色 ③良好	
29-9 (52)	SI-02	小型壺 (土師器)	①10 ③11.9	若干内湾気味に外傾する口縁。体部は丸型。	口縁内外面共ナデ調整。内面体部ケズリ。外面体部ハケ目残る。	①2mm以下の砂粒少量含む ②淡橙色 ③良好	
29-10 (26)	SI-02	小型壺 (土師器)	①8	外傾する口縁で、端部で内側にわずかに屈曲する。	内面頸部より下ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む ②淡黄色 ③良好	
29-11 (73)	SI-02	直口壺 (土師器)		直立する口縁	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む 密 ③良好 ②外面淡黄色 内面黄褐色	
29-12 (21)	SI-02	低脚坏 (土師器)	①13.6	浅い碗型の坏部。口縁端部平坦。	外面ハケ目。内面ナデ調整で、指頭圧痕残る。	①微細砂粒含む 密 ②外面淡黄色 内面濃黄色 ③良好	
29-13 (123)	SI-02	高 坏 (土師器)	①18	大きく外傾して開く口縁。	外面にハケ目残る。他内外面共ナデ調整。	①2mm以下の砂粒含む ②茶褐色 ③良好	
29-14 (61)	SI-02	高 坏 (土師器)	①18	内湾気味に外傾する口縁で、端部で更に外側に屈曲。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む ②淡黄色 ③良好	
29-15 (118)	SI-02	高 坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。 接続法β	①1mm以下の砂粒多量含む ②橙色 ③良好	
29-16 (58)	SI-02	高 坏 (土師器)	④12	大きく外傾して開く底部。	風化の為内外面共調整不明。	①1mm大の砂粒含む ②淡黄色 ③良好	
29-17 (73)	SI-02	高 坏 (土師器)	①12.8	外傾する口縁。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②淡黄色 ③良好	
29-18 (26)	SI-02	高 坏 (土師器)	①14	外傾する口縁で、端部で更に外反。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②黄褐色 ③良好	
29-19 (27)	SI-02	高 坏 (土師器)	①15	外傾する口縁で、途中で更に外反。	内外面共ナデ調整。	①0.5mm大の砂粒含む ②淡黄色 ③良好	
29-13 (46)	SI-02	器 台 (土師器)	④16.5	「ハ」の字に開く底部。端部は丸くおさまる。	内面ケズリ。外面ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②淡黄色 ③良好	
33-1 (667)	SI-05	甕 (土師器)	①20	口縁は外反し、端部近くでやや内湾する。	内面頸部以下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~4mmの白色砂粒含む ②黄灰色 ③良好	
33-2 (641)	SI-05	甕 (土師器)	①10.6	やや外反し「ハ」の字に開く口縁。端部すぼまり段を持つ。	内外面共ナデ調整	①1mmの砂粒含む ②明茶色 ③やや悪い	
33-3 (634)	SI-05	高 坏 (土師器)	①11.8	外反する口縁で、端部は丸い。	ナデ調整。	①1mmの砂粒少量含む ②黄褐色 ③良好	
33-4 (639)	SI-05	蓋 坏 (須恵器)		つまみ。		①緻密。 ②わずみ色 ③良好	
33-5 (633)	SI-05	無蓋高坏 (須恵器)		段2段あり。下半部に楕円波状文。	底部回転ヘラケズリ。	①緻密。 ②灰色 ③良好	
32-1 (135)	SI-04	甕 (土師器)	①11	退化複合口縁。外傾する口縁。若干稜と段が残る。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②黄褐色 ③良好	
32-2 (135)	SI-04	坏 (土師器)	①12	内湾気味に外傾し、端部で直立。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②黄褐色 ③良好	
32-3 (130)	SI-04	高 坏 (土師器)		細く「ハ」の字に開く脚柱部。	外面ナデ調整。内面しぼり痕残る。接続法α	①1mm以下の砂粒含む 密 ②黄茶色 ③普通	
32-4 (135)	SI-04	つまみ (土師器)		土師器坏蓋つまみ。	内外面共ナデ調整。	①密 ②黄茶色 ③普通	

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
32-5 (135)	SI-04	高 坏 (土師器)	④12.2	外傾して開く底部で、端部で更に外傾する。	内面ケズリ。外面ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む 密 ②黄橙色 ③良好	
32-6 (138)	SI-06	甕 (土師器)	①20	複合口縁。大きく開いて外傾する口縁。やや肉厚。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②黄茶色 ③良好	
32-7 (137)	SI-06	甕 (土師器)	①16	複合口縁。外傾する口縁で、端部はやや肥厚。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②黄茶色 ③良好	
32-8 (740)	SI-06	甕 (土師器)	①17.6	複合口縁。内湾気味に立上る口縁	内外面共ナデ調整。	①1mmの砂粒含む ②茶色 ③やや悪い	
32-9 (205)	SI-06	小型甕 (土師器)	①10	「く」の字に屈曲し、外傾する口縁。肩はあまり張らない。	風化により内外面共調整不明。	①1~2mmの砂粒含む 粗 ②黄茶色 ③良好	
32-10 (137)	SI-06	手づくね土器 (土師器)	⑤ 4.8	壺形の手づくね土器。	内外面共ナデ調整。内面に指頭圧痕残る。	①密 ②黄茶色 ③良好	
35-1 (89)	SI-07	甕 (土師器)	①12	複合口縁。外傾する口縁。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②黄茶色 ③良好	
35-2 (892)	SI-07	甕 (弥生)	①12	外傾する口縁で、端部は内側に肥厚。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む 密 ②黄茶色 ③良好	
35-3 (392)	SI-07	甕 (土師器)	① 9.2	内湾気味に外傾する口縁で、端部は、内側やや上方に肥厚し平坦。	内外面共ナデ調整。	①密 ②黄茶色 ③良好	
35-4 (740)	SI-07	甕 (土師器)	①14	外傾する口縁で、端部平坦。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②黄茶色 ③良好	
35-5 (765)	SI-07	甕 (土師器)	①18	若干内湾気味に外傾する口縁。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む 密 ②外面灰黄褐色 内面黄橙色 ③良好	
35-6 (895)	SI-07	甕 (土師器)	①18	頸部より外傾し更に外側に屈曲。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②黄茶色 ③良好	
35-7 (766)	SI-07	甕 (土師器)		「く」の字に屈曲する頸部。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒多量含む ②外面茶色 内面黄褐色 ③良好	
35-8 (956)	SI-07	甕 (土師器)	①13	内湾気味に外傾する口縁。端部で直立にちかくなる。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下白色砂粒 密 ②黄茶褐色 ③普通	
35-9 (32)	SI-07	つまみ (土師器)	① 3.4	土師器環蓋つまみ。	内面天井部調整不明。他内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②橙黄色 ③普通	
35-10 (763)	SI-07	高 坏 (土師器)		外傾する口縁。稜がわずかに残る。	内外面共ナデ調整。外面にハケ目残る。	①1~2mmの砂粒含む ②茶黄色 ③良好	
35-11 (766)	SI-07	高 坏 (弥生)	④11	内湾気味に大きく外反して開く底部。やや肉厚。	外面ナデ調整。内面風化の為調整不明。	①1~2mm白色砂粒多量 ②黄橙色 ③良好	
35-12 (763)	SI-07	高 坏 (弥生)	④11.2	外傾して開く底部。肉厚。	内外面共ナデ調整。	①1mmの砂粒含む 密 ②外面茶黄色 内面黄茶褐色 ③普通	
35-13 (740)	SI-07	高 坏 (土師器)	④11	大きく外反して開く底部。	内面裾部ケズリ。他内外面共ナデ調整。内面指頭圧痕残る。	①1mm以下の砂粒含む 密 ②黄橙色 ③良好	
35-14 (760)	SI-07	器 台 (弥生)	① 9	大きく外傾して開く小型器台の口縁。	内外面共ナデ調整で、ハケ目がわずかに残る。	①1mm台の砂粒含む 密 ②茶黄色 ③良好	
36-1 (781)	SI-07	甕 (土師器)	①12.0	複合口縁。まっすぐ外傾し、鋭い稜もつ。	内外面共ヨコナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②白橙灰色 ③良好	
36-2 (892)	SI-07	甕 (土師器)	①12.0	内湾気味に立上る口縁。口縁端部僅かにつまみ出され肥厚	内外面共ヨコナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②黄茶色 ③良好	
36-3 (906)	SI-07	甕 (土師器)	①15.0	大きく内湾し立上る口縁。	内外面共ヨコナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②外暗黄灰色 ③良好 内白黄灰色	
36-4 (774)	SI-07	甕 (土師器)	①13.0	内湾気味に立上る口縁で鈍い稜をもつ。口縁端部内傾し平坦。	内外面共ヨコナデ調整。	①1~2mmの白色砂含む ②外濃赤褐色、内黄茶色 ③良好	
36-5 (771)	SI-07	甕 (土師器)	①12.0	複合口縁。まっすぐ外傾し、鋭い稜もつ。	内外面共ヨコナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②濃黄橙灰色 ③良好	
36-6 (903)	SI-07	甕 (土師器)	①15.0	やや内湾して立上る口縁。	内外面共ヨコナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②外白橙灰色 ③良好 内白橙褐色	
36-7 (894)	SI-07	甕 (土師器)	①11.4	やや内湾して立上る口縁。口縁端部は肥厚。	内外面共ヨコナデ調整。	①1~2mmの白色砂粒含む ②黄橙色 ③良好	
36-8 (958)	SI-07	小形壺 (土師器)	① 7.0	ほぼまっすぐに外傾する口縁。体部は丸形。	外面体部下半分ハケ目。その他内外面共ヨコナデ。内外共指頭圧痕あり。	①1mm以下の砂粒含む ②明橙茶褐色 ③良好	
36-9 (893)	SI-07	甕 (土師器)	①15.8	ほぼまっすぐに外傾する口縁。口縁端部は平坦。	内面頸部以下ケズリ。他内外共ナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒 ②淡黄褐色 ③良好	
36-10 (781)	SI-07	甕 (土師器)	①20.0	外傾する口縁で、端部は肥厚。	口縁内外共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒 ②黄茶褐色 ③良好	
36-11 (960)	SI-07	甕 (土師器)	①16.5	まっすぐ外傾する口縁。口縁端部は平坦。	内外面共ヨコナデ調整。内面は頸部以下ケズリ調整。頸部付近に指頭圧痕あり。	①1~3mmの砂粒含む ②外黄茶褐色、茶褐色 ③良好	
36-12 (771)	SI-07	甕 (土師器)	①19.0	複合口縁。稜は鈍く口縁端部は平坦で外側につまみ出す。	内外面共ヨコナデ調整。	①1mmの白色砂粒 ②濃赤茶褐色 ③良好	
36-13 (771)	SI-07	甕 (土師器)	①16.0	複合口縁。稜は鈍く、口縁端部は平坦で肥厚。	内外面共ヨコナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②外黄褐色、内茶褐色 ③良好	
36-14 (959)	SI-07	高 坏 (土師器)	①14.8	外傾する口縁で途中で更に外反。	内外面共ヨコナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒含む ②黄橙色 ③良好	

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
36-15 (956)	SI-07	高 坏 (土師器)	①14.4	外傾する口縁で途中で更に外反。	内外面共ヨコナデ調整。	①密 ③良好 ②内赤褐色、外褐色	
36-16 (960)	SI-07	高 坏 (土師器)		外傾する口縁で段を持つ。	内外面共ヨコナデ調整。	①1~2mmの白色砂粒含む ②外黄茶褐色、内黄茶色 ③良好	
36-17 (960)	SI-07	高 坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ヨコナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒含む ②橙黄色 ③良好	
36-18 (892)	SI-07	高 坏 (土師器)	①11.8	裾部で大きく屈曲する脚部	坏部、裾部外面タテハケ。 脚部絞り目、裾部指頭圧痕	①1mmの砂粒 ②淡橙灰色 ③良好	
36-19 (906)	SI-07	高 坏 (土師器)	④ 9.0	大きく外反する脚部。	外面裾部タテハケ。 内面脚中央ケズリ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②赤茶褐色 ③良好	
36-20 (959)	SI-07	高 坏 (土師器)		「ハ」の字に開く脚部。	内面絞り目。	①1~2mmの砂粒含む ②橙茶褐色 ③良好	
36-21 (771)	SI-07	高 坏 (土師器)	①15.0	内湾する坏部。	内外面共ナデ調整。	①1mmの白色砂粒含む ②外赤茶色、内濃茶褐色 ③良好	
37- 1 (815)	SI-09	甕 (土師器)	①15.2	ほぼまっすぐに外傾する口縁。 複合口縁。端部は丸くおさまる。	内外面共ナデ調整。	①密 ②淡褐色 ③普通	
37- 2 (812)	SI-09	甕 (土師器)		口縁端部欠損。 複合口縁。鋭い稜をもつ。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②外茶褐色、内黄褐色 ③良好	
37- 3 (816)	SI-09	甕 (土師器)	①16.0	ほぼまっすぐに外傾する口縁。 口縁端部は平坦。	内面頸部以下ヘラケズリ。 他内外面ヨコナデ調整。	①1~4mmの砂粒含む ②暗灰褐色 ③良好	
37- 4 (85)	SI-09	甕 (土師器)	① 8.4	やや内湾して立上る口縁。 口縁端部は内側につまみ出す。	内外面共ヨコナデ調整。	①密 ②淡褐色 ③良好	
37- 5 (818)	SI-09	甕 (土師器)	①15.0	やや内湾して立上る口縁。 口縁端部は鋭く丸くおさまる。	内面頸部以下ヘラケズリ。 他内外面共ナデ調整。	①0.5~1mmの白色砂粒 ②淡褐色 ③不良	
37- 6 (815)	SI-09	甕 (土師器)	①15.0	複合口縁。外傾する口縁。	内外面共ナデ調整。	①1mmの砂粒含む ②淡褐色 ③普通	
37- 7 (817)	SI-09	甕 (土師器)	①12.6 ②17.4 ③16.7	やや内湾して立上る口縁。端部は 丸くおさまる。体部は丸い。 底部はややとがり気味の丸底。	内面頸部以下ヘラケズリ。 他内外面共ヨコナデ調整。 底部指頭圧痕。	①密 ②黄茶色 ③良好	
37- 8 (813)	SI-09	高 坏 (土師器)	①14.9	まっすぐ外傾し端部で外反する。 坏部。	坏底部タテハケ、他内外面 ナデ調整。	①1mmの砂粒含む ②淡褐色 ③良好	
37- 9 (778)	SI-09	低脚坏 (土師器)			内外面共ナデ。	①微細砂粒含む ②淡茶褐色 ③良好	
37-10 (778)	SI-09	高 坏 (土師器)	①13.0	外湾し、端部で内湾する脚部。 端部やや平坦。	外面ハケ目調整。 内面裾部ケズリ。	①2mm以下の砂粒含む ②灰黄色 ③良好	
39- 1 (985)	SI-12	甕 (土師器)	①14.6	「く」の字に屈曲する頸部。口縁 は若干内湾気味に外傾。	内面頸部より下ケズリ、他 内外面共ナデ調整。外面に ハケ目残る。	①1~4mmの砂粒含む 密 ②外面橙黄色 内面黄褐色 ③良好	
39- 2 (982)	SI-12	甕 (土師器)	①16.6	若干内湾気味に外傾する口縁で、 端部は丸くおさまる。	内外面共ナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒含む ②茶黄色 ③良好	
39- 3 (989)	SI-12	甕 (土師器)	①12.5	内湾気味に外傾する口縁。やや肉 厚。	内外面共ナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒含む ②黄茶色 ③良好	
41- 1 (74)	SI-13	甕 (弥生)	①13.5	口縁部は下方にややつまみ、内傾 して上方に僅かにつまみ出す。口 縁外面に3条の凹線を施す。	内外面共ナデ調整。	①1mmの砂粒を含む ②淡黄褐色 ③普通	
41- 2 (48)	SI-13	壺 (弥生)	①12.6	口縁部は直立して上方 に拡張気味につまみ出す。外面に 3条の沈線施す。	一部風化により調整不明な 部分があるが、内外面共ナ デ調整。	①1mmの砂粒を含む ②外面赤茶色 内面黄茶色 ③良好	
41- 3 (74)	SI-13	甕 (弥生)	①12.6	口縁部は下方にややつまみ、内傾 して上方につまみ出す。外面に4 条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の白色砂粒含む ②黄褐色 ③良好	
41- 4 (104)	SI-13	甕 (弥生)	①15.3	口縁部は下方にややつまみ、内傾 して上方につまみ出す。端部は肥 厚。外面に4条の凹線施す。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。	①0.5mmの砂粒を含む ②黄褐色 ③良好	
41- 5 (74)	SI-13	甕 (弥生)	①16.8	口縁部は下方にややつまみ、内傾 して上方につまみ出す。口縁端部 は丸く収まる。外面に4条の凹線。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。	①0.5mmの砂粒を含む ②淡黄色 ③良好	
41- 6 (72)	SI-13	甕 (弥生)	①25	頸部は「く」の字に屈曲。立上り が長くやや外反気味に直立。口縁 外面に不明瞭な凹線5条みられる。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒含む ②濃橙黄色 ③普通	
41- 7 (74)	SI-13	甕 (弥生)	①16	立上がり長く僅かに外反気味に直 立口縁外面に4条の凹線を施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の白色砂粒含む ②外面橙褐色 内面黄褐色 ③良好	
41- 8 (73)	SI-13	甕 (弥生)	①16.2	口縁部は下方に僅かにつまみだし、 立上がりは長くやや外反気味に直 立。口縁外面に沈線5条みられる。	内外面共ナデ調整。	① 0.5mmの砂粒を含む ②橙色 ③良好	
41- 9 (72)	SI-13	甕 (弥生)	①19	頸部は「く」の字に屈曲。口縁部 は下方に僅かにつまみ出し、立ち 上がり長く直立。口縁外面に不明 瞭な沈線5条みられる。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。頸部外面に刺 突文みられる。	①1~3mmの白色砂粒含む ②内面黄茶色 外面濃黄褐色 ③良好	
41-10 (71)	SI-13	蓋 (弥生)	① 3 ④13.2	大きく外傾して開く天井部で端部 平坦。天井中央部は貫通し、つま み部は外反する。	内面天井部は調整不明。他 内外面共ナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒を 多量に含む ②黄茶褐色 ③普通	
41-11 (48)	SI-13	器 台 (弥生)	④14.4	裾部はハの字に開き、端部は更に 外側につまみだし、肥厚する。外 面に6条の凹線を施す。	内面ケズリ、外面ナデ調整	①微細砂粒を含む ②茶褐色 ③良好	

挿図- 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
41-12 (69)	SI-13	高 坏 (弥 生)	①22.8	底部から大きく開き、口縁端部を外側につまみ出し上部面を成す。	一部風化のため調整不明のところがあるが、内外面共ナデ調整。	①1mmの白色砂粒含 密 ②濃赤茶色 ③良好	朱塗り
41-13 (125)	SI-13	壺 (弥 生)	①23	大きく「逆ハ」の字に開く口縁部。端部はさらに外側につまみ出し上部に面を成す。	内外面共風化のため調整不明。	①1~3mmの白色砂粒 多量に含む ②黄茶褐色 ③普通	
41-14 (125)	SI-13	壺底部 (弥 生)	④10.6	平底	外面ナデ調整。内面調整不明。	①1~2mm白色砂粒含 密 ②暗黄茶褐色 ③良好	
41-15 (66)	SI-13	壺底部 (弥 生)	④ 9.7	平底	内外面共にナデ調整。	①0.5mm以下の白色砂粒 多量に含む ③良好 ②外面茶褐色 内面明茶色	
41-16 (124)	SI-13	甕底部 (弥 生)	④ 7.6	平底	内外面共にナデ調整。	①0.5mm以下の砂粒を含む ②淡黄色 ③良好	
41-17 (67)	SI-13	甕底部 (弥 生)	④ 7.8	平底	内外面共調整不明。	①1~2mmの白色砂粒含む 密 ②内面濃茶褐色 ③普通 外面黄茶褐色	
41-18 (125)	SI-13	甕底部 (弥 生)	④ 4.7	平底	外面ナデ調整、内面ハケ目調整。	①1.5mm以下の砂粒含む ②暗黒色 ③良好	
41-19 (48)	SI-13	壺底部 (弥 生)	④ 6	平底	内外面共ナデ調整。	①密 ②淡黄褐色 ③良好	
41-20 (4)	SI-13	甕底部 (弥 生)	④ 6.9	平底	外面ナデ調整、内面ケズリ調整。	①0.5mmの砂粒を含む ②淡黄褐色 ③良好	
42-1 (148)	SI-14	甕 (土師器)	①13.8	「逆ハ」の字に開く口縁。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②淡茶褐色 ③良好	
42-2 (148)	SI-14	甕 (土師器)	①16	若干内湾気味に外傾する口縁部。端部は内側にわずかに肥厚し、平坦。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②淡黄褐色 ③やや良好	
42-3 (134)	SI-14	甕 (土師器)	①16.4	若干内湾気味に外傾する口縁部。端部は内側にわずかに肥厚し、平坦。	内外面共ナデ調整。	①5mm大の砂粒少量含む ②淡黄灰褐色 ③良好	
42-4 (134)	SI-14	甕 (土師器)	①18.8	外反する「S」字口縁。肩部はなで肩でほとんど張らない。	内面頸部より下ケズリ、他内外面共ナデ調整。外面頸部より下僅かにハケ目残る。	①1mm以下の砂粒含む 密 ②淡黄褐色 ③良好	
42-5 (133)	SI-14	坏 (土師器)	①11 ② 5.6	内湾しながら立上り、口縁部もやや内傾。口縁端部は内側にわずかに面をもつ。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒含む ②橙黄色 ③良好	
42-6 (140)	SI-14	坏 (土師器)	①13 ② 5.6	内湾しながら立上り、口縁部もわずかに内湾。口縁端部は丸い。	内外面共ナデ調整。内面に指頭圧痕残る。	①1~2mmの白色砂粒 密 ②橙黄色 ③良好	
42-7 (133)	SI-14	坏 (土師器)	①12 ② 3.1	内湾しながら立上り、口縁部はほぼ直立に近い。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②黄茶色 ③良好	
42-8 (146)	SI-14	小 鉢 (土師器)	①10 ② 4.9	「逆ハ」の字に開く。口縁端部はつまみ出しで先細り。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②淡黄褐色 ③良好	
42-9 (129)	SI-14	甗 (土師器)	①28	直立に近いがわずかに外傾。口縁端部は多少つまみ出し。	内面ナデ調整、外面風化により調整不明。	①1mm以下白・黒色砂粒 ②淡黄色 ③良好	
42-10 (145)	SI-14	坏 身 (須恵器)	①14.0 ② 5.2	立上りは内湾しながら内傾し、口縁端部は段をなす。器受部は水平にのび沈線あり。	底部 2/3強回転ヘラケズリ 他内外面共ナデ調整	①0.5~1mmの砂粒 ②茶色 ③良好	
44-1 (166)	SI-15	甕 (土師器)	①14	微かに稜の残る退化した複合口縁。口縁上部はわずかに外傾し、端部は平坦に近い。	内外面共ナデ調整。	①0.5mmの砂粒含む 密 ②淡黄褐色 ③良好	
44-2 (152)	SI-15	甕 (土師器)	①15	緩やかな段がわずかに残る口縁部。	内外面共ナデ調整。	①1~5mmの砂粒含む 密 ②淡黄色 ③良好	
44-3 (158)	SI-15	甕 (土師器)	①12.4	頸部より外反して伸びる口縁。	内外面共調整不明。	①密 ②黄褐色 ③良	
44-4 (197)	SI-15	底 部 (土師器)		丸底。	内面ケズリ、底に指頭圧痕残る。外面ナデ調整。	①0.5mm~2mmの砂粒含む 密②黄褐色 ③良好	
44-5 (153)	SI-15	高 坏 (土師器)	①18	坏底部から大きく開き屈曲してさらに外反。口縁端部は先細り気味。	内外面共ナデ調整。剥落多い。	①緻密 ②淡赤褐色 ③良好	
44-6 (154)	SI-15	高 坏 (土師器)		塊状に伸びる坏底部。	外面粗いハケ目。内面ナデ調整。	①緻密 ②淡赤褐色 ③良好	
44-7 (160)	SI-15	高 坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。	①砂粒少量含む 緻密 ②淡茶色 ③良好	
44-8 (198)	SI-15	高坏脚 (土師器)	④ 8.2	脚柱部は中央部が若干膨み、底部は外反して開く。端部は平坦。	内面脚柱部ケズリ。裾部ハケ目。外面ナデ調整。	①緻密 ②淡赤褐色 ③良好	
44-9 (226)	SI-15	高坏脚 (土師器)		垂直にちかい脚柱部。裾部に近いところに円孔穿つ。	外面上方ミガキで他調整不明。外面に指頭圧痕残る。	①0.5mm白色砂粒多 密 ②暗茶褐色 ③良好	
44-10 (152)	SI-15	高坏脚 (土師器)	④ 9.4	外反気味に「ハ」の字に開く。端部平坦。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②内面淡黄色 外面黄褐色 ③良好	
44-11 (163)	SI-15	高坏? (土師器)	① 2	裾部から大きく外反する脚底部。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒少量含む ②内面黒褐色 外面赤茶褐色 ③良	
44-12 (22)	SI-15	塊 (土師器)	①10.2 ② 2.5	内湾して立上り、口縁部は内湾。端部は先細り。	内外面共ナデ調整。	①緻密 ②淡黄褐色 ③良好	
44-13 (151)	SI-15	坏 蓋 (須恵器)	①12 ② 4	天井部と口縁部の境に残る。口縁端部は内側に面を成す。	外面天井部ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②淡灰色 ③良好	
44-14 (196)	SI-15	坏 身 (須恵器)	①10.6 ② 5.5	上部で屈折し直立する口縁。端面は段をなす。器受部横つまみ出し	底部2/3回転ヘラケズリ、 他内外共ナデ調整。	①0.5~1mmの砂粒含む ②灰色 ③良好	

挿図- 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
46-1 (118)	SI-16	甕 (土師器)	①20.6	頸部より外反して伸びる口縁を持ち、肩部はあまり張らない。	内面頸部より下ケズリ、頸部にハケ目残る。外面胴部は全体にハケ目調整。口縁部内外面共ナデ調整。	①0.5~1mmの砂粒含む 密 ②暗茶褐色 ③良好	外面一部煤付着
46-2 (29)	SI-16	甕 (土師器)	①17	外反する口縁。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①1~4mmの白色砂粒含む 密 ②淡黄茶褐色 ③良好	
46-3 (22)	SI-16	甕 (土師器)	①15.2	外反する口縁で端部は丸い。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①1mm以下の白色砂粒含む 密 ②濃黄茶褐色 ③良好	
46-4 (232)	SI-16	甕 (土師器)	①11	「く」の字に丸く屈曲する口縁で端部は丸い。	内面頸部より下風化して調整不明。他内外面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒含む 密 ②黄茶褐色 ③普通	
46-5 (21)	SI-16	高 坏 (土師器)	①13.2	内湾して立上り、口縁部は直立気味。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒少量含む ②淡黄土色 ③普通	塚か？
46-6 (29)	SI-16	碗 (土師器)	①10.2 ② 4.2	内湾して立上り、口縁部は直立よりやや内傾する。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒少量含む ②淡黄土色 ③普通	
46-7 (22)	SI-16	碗 (土師器)	①11 ② 3.4	内湾して立上り、口縁部は直立する。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒少量含む ③朱色 ③普通	
46-8 (116)	SI-16	碗 (土師器)	①12 ② 4.1	中央部のやや盛り上った底から内湾して立上り、口縁部は直立する。	内外面共ナデ調整。内面底部に指頭圧痕残る。	①1mm大の砂粒少量含む 密 ②内面淡橙茶色 外面黄茶色 ③良	
46-9 (26)	SI-16	碗 (土師器)	①12 ② 3.6	内湾して立上り、口縁部は内傾し端部をさらに外側につまみ出す。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒含む 密 ②黄橙色 ③良好	
46-10 (23)	SI-16	高 坏 (土師器)		「ハ」の字に開く脚柱部。	外面ナデ調整。内面に指頭圧痕残る。	①1mm大の白色砂粒含む 密 ②濃黄橙色 ③良好	
46-11 (18)	SI-16	高 坏 (土師器)	④ 6.6	外湾気味に大きく開く。	内外面共風化の為調整不明。	①1~3mmの砂粒含む 密 ②黄橙色 ③普通	
46-12 (114)	SI-16	高 坏 (土師器)	①13 ② 7.4 ③ 7.4	坏部は浅い碗形で、口縁端部は直立する。脚部は短く裾部より外反して開く。	内外面共ナデ調整。坏部と脚部の接合部分に指頭圧痕残る。	①緻密 ②橙色 ③良好	
46-13 (24)	SI-16	坏 蓋 (須恵器)	①12	天井部と口縁部の境に稜が残る。天井は丸い。	外面天井はヘラ切り後未調整部分とケズリ部分あり。内面天井部不正方向のナデ、他内外面共ナデ調整。	①1mm以下の白色砂粒を含む 密 ②内面濃灰色 外面濃灰黄色 ③良好	
46-14 (21)	SI-16	坏 蓋 (須恵器)	①11	天井部と口縁部の境に稜が残る。	内外面共ナデ調整。	①密 ②淡黄灰色 ③良好	外面濃緑黄色自然粘付着
46-15 (115)	SI-16	高坏脚裾 (須恵器)	④10.2	「ハ」の字に開く脚部で、端部はつまみ出し直立。	内外面共ナデ調整。	①密 ②淡白灰色 ③良	
46-16 (232)	SI-16	甕 (土師器)	①26.8	やや「逆ハ」の字気味に開く口縁部で、端部は外側に肥厚し、上部は平坦である。	内外面共風化のため調整不明。	①1~3mmの白色砂粒含む 密 ②濃黄褐色 ③良好	
46-17 (24)	SI-16	軽 石	4.7×3.5				
48-1 (35)	SI-17	壺 (弥生)	①30	頸部から大きく外反し、口縁端部は直立して上方に拡張。口縁外面に沈線を施す。口縁端部欠損。	内面ヘラケズリ、外面ナデ調整。	①1~3mm大の粗砂やや多く含む ②明淡黄土色 ③良	
48-2 (38)	SI-17	壺 (弥生)	①25.5	頸部から大きく外反し、口縁端部は内傾して上下方向に拡張。口縁外面に不明瞭な凹線を施す。口縁端部欠損。	内外面共横ナデ。	①1~1.5mmの粗砂多く含む ②淡黄土色 (一部黒色) ③良	
48-3 (35)	SI-17	甕 (弥生)	①14	口縁部は頸部より「逆ハ」の字に伸び口縁端部は上下にやや肥厚。外面には不明瞭な線が5条残る。内面段無。	内面口縁部および外面横ナデ、内面他ケズリ。	①密 ②内面茶褐色 外面明茶色 ③良好	
48-4 (28)	SI-17	壺 (弥生)	①18	頸部から大きく外反し、口縁端部は内傾して上下方向に拡張。口縁外面に3条の凹線施す。	内外面共横ナデ。	①1~3mmの砂粒多く含む ②外面淡肌褐色 内面淡橙 ③良好	頸部外面煤付着
48-5 (35)	SI-17	甕 (弥生)	①12.4	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は肥厚し、内傾して上方に拡張。口縁外面に3条の沈線を施す。	内面頸部ケズリ、他内外面共横ナデ。	①0.5~1mmの砂粒やや多く含む ②茶色 ③良好	
48-6 (38)	SI-17	甕 (弥生)	①17	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は内傾して上方に拡張気味につまみ出す。口縁外面に凹線施す。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①0.5~1mm砂粒少量含む ②淡黄土色 ③普通	外面口縁部煤付着
48-7 (26)	SI-17	甕 (弥生)	①13.2	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部は内傾して上方につまみ出す。	内面頸部ケズリ、他内外面共横ナデ。	①1mmの砂粒を多く含む ②肌色 ③良好	
48-8 (103)	SI-17	甕 (弥生)	①24	立ち上がり長く直立。やや肉厚。口縁外面には不明瞭な沈線4条残る。頸部は「く」の字に丸く屈曲。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。頸部外面に連続刺突文を施す。	①1mm大の砂粒多く含む ②朱色 ③やや悪い	
48-9 (35)	SI-17	甕 (弥生)	①18	立ち上がり長く口縁内傾。口縁外面に6条の凹線施す。頸部は「く」の字に屈曲する。	内面頸部ケズリ、他内外面共横ナデ。頸部外面には連続刺突文施す。	①0.5~1mmの砂粒やや多く含む ②明茶色 ③良	
48-10 (35)	SI-17	壺・甕 (弥生)	①11.4	立ち上がりやや長く直立。外面に凹線みられるが一部不明瞭。	内外面共ナデ調整。	①密 ②明赤茶色 ③良	
48-11 (38)	SI-17	甕 (弥生)	①18.6	頸部は「く」の字に屈曲。立ち上がり長く直立し、肥厚。口縁外面に不明瞭な凹線見られる。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。頸部外面棒状工具による連続刺突文施す。	①1mmの砂粒やや多く含む ②明茶色 ③やや悪い	

挿図— 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種 (弥生)	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
48-12 (26)	SI-17	甕 (弥生)	①18	立ち上がり長く、口縁やや内湾。 外面に6条の平行沈線施す。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒多く含む ②内面白黄褐色 外面赤白黄褐色 ③良	
48-13 (28)	SI-17	甕 (弥生)	①24.8	立ち上がり長く、口縁外傾。外面 に5条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②外面淡橙褐色 内面淡橙 ③良好	
48-14 (35)	SI-17	甕 (弥生)	①18	口縁部は内面に段無く、頸部より 「逆ハ」の字に伸び、下方にやや 肥厚。外面に6条の凹線施す。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。	①やや粗砂多い ②外面煤黒い 内面黄土色 ③良	
48-15 (35)	SI-17	甕 (弥生)	①17	立ち上がり長く、口縁上部は外反。 外面に7条の凹線施す。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。頸部外面棒状 工具による連続刺突文施す。	①0.5~1mm砂粒少量含む ②淡黄土色 ③普通	口縁外面煤付着
48-16 (26)	SI-17	甕 (弥生)	①26.4	立ち上がり長く、口縁外反気味に 直立。外面に7条の平行沈線施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒を含む ②淡黄朱色 ③普通	
48-17 (35)	SI-17	甕 (弥生)	①15	立ち上がり長く、口縁部は内傾。 口縁外面に5条の凹線施す。頸部 は「く」の字に屈曲。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。頸部外面に連 続刺突文施す。	①密 ②茶色 口縁茶褐色 ③良好	
48-18 (38)	SI-17	壺 (弥生)	①13	立ち上がり長く口縁上部は外反。 口縁外面に不明瞭な凹線の跡みら れる。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。外面頸部に連続 刺突文施す。	①やや粗 ②茶色 ③やや悪い	外面頸部煤付着
48-19 (103)	SI-17	壺 甕 (弥生)	①13	口縁部は外反する。6条の沈線は みられるが風化のため不明瞭。	内面頸部ケズリ、他内外面 共ナデ調整。	①1mm大の砂粒を含む ②内面明茶褐色 外面黒褐 ③良	
49- 1 (38)	SI-17	壺底部? (弥生)	④ 6	平底。	内面ナデ調整、外面ハケ目。	①密 ②外面黄土色 内面黒色 ③良	
49- 2 (105)	SI-17	甕底部 (弥生)	④ 7.4	平底。	内面ナデ調整。底に指頭圧 痕残る。外面丁寧な磨き。	①密 ②黄土色 ③良	
49- 3 (38)	SI-17	壺底部? (弥生)	④ 6	平底。	内面ナデ調整、底に指頭圧 痕残る。外面磨いた跡みら れるが凸凹である。	①密 ②内面黄土色 外面赤茶色 底部黒色 ③良	
49- 4 (35)	SI-17	甕底部 (弥生)	④ 6	平底。	内面ナデ調整、外面ヘラ磨 きの跡みられる。	①密 ②黄土色 ③良	
49- 5 (27)	SI-17	甕底部 (弥生)	④ 7.5	中央部の盛上った上げ底。	内面ナデ調整、外面ヘラ磨 き。外面底部に指頭圧痕残 る。	①1mmの砂粒やや多く含む ②明赤茶色 ③良	
49- 6 (35)	SI-17	壺底部? (弥生)	④ 6.4	平底。	内面ナデ調整、外面7~8 条単位のハケ目。	①1mm大の砂粒を含む ②外面明赤茶色 内面黄土 ③良	
49- 7 (38)	SI-17	甕底部 (弥生)	④17	平底で大型。	内面調整無く雑で、外面ナ デ調整。	①1~2mmの砂粒やや多 く含む ②黄土色 ③良	
49- 8 (38)	SI-17	高 坏 (弥生)	①25	複合口縁で、口縁部は外傾し、口 縁外面には5条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。坏底部 に近いところにハケ目残る。	①密 ②くすんだ朱色 ③良好	
49- 9 (27,38)	SI-17	高 坏 (弥生)		大形の坏底部と脚柱部。 7条と5条の凹線施す。	外面ナデ調整。内面ハケ目。 内外面共磨耗著しい。	①密 ②赤茶色~淡褐色 ③普通	外面煤付着
49-10 (26)	SI-17	高 坏 (弥生)	④18	「ハ」の字に開き、裾部から肉厚。 端部は横方向につまみ出す。裾部 に2条の凹線施す。	外面ナデ調整。内面ケズリ で、指頭圧痕残る。	①1mm大の砂粒含む ②外面淡黄褐色 内面淡黄褐色 ③良好	
49-11 (28)	SI-17	高 坏 (弥生)	④16.6	若干内湾気味に開く。端部は上下 方向につまみ出す。	外面ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②外面淡黄褐色 内面淡黄褐色 ③良好	
49-12 (26)	SI-17	高 坏 (弥生)	④13.6	大きく「く」の字に開き、裾部から 肉厚。端部上下方向に肥厚。脚 柱部・裾部・端部に凹線施す。	内面ケズリ。	①1mm大の砂粒少量含む ②朱色を帯びた肌色 ③良好	
49-13 (35)	SI-17	高 坏 (弥生)	④13	「ハ」の字に開き、裾部から肉厚。 端部は横方向につまみ出す。脚柱 部に3条単位の沈線4回、2段の 円孔施す。裾部縦方向の沈線残る。	内面ケズリ。	①1mm大の砂粒少量含む ②レンガ色 ③良好	
49-14 (27)	SI-17	高 坏 (弥生)	④17	大きく外反して開き、裾部から肉 厚になる。端部は上下につまみ出 し、面を成し3条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。内面に 指頭圧痕残る。	①1~2mmの砂粒含む ②淡白褐色 ③良	
50- 1 (187)	SI-18	壺 (弥生)	①14.8 ② 8.2	複合口縁の名残でわずかに段が残 るが「く」の字に近い口縁部。	内面頸部下より下方ケズリ 他内外面共ナデ調整。	①極細小の砂粒少量含む ②赤褐色 ③良好	外面に黒斑付着
50- 2 (190)	SI-18	甕 (土師器)	①19.6 ② 3.1	わずかに段の残る退化複合口縁。 肉厚。	内外面共ナデ調整。	①0.5mmの白色砂粒 密 ②暗黄褐色 ③良好	
50- 3 (96)	SI-18	甕 (土師器)	①16.6 ② 3.9	内湾気味に外傾する口縁部。端部 は平坦。	内面は頸部より下方ケズリ、 他内外面共ナデ調整。外面 風化のため調整不明。	①微細砂粒含む ②橙褐色 ③良好	
50- 4 (149)	SI-18	甕 (土師器)	①12.2 ② 3.8	退化した複合口縁。口縁は外傾す るが、極わずかに稜の跡が残る。	内面頸部より下方ケズリ、 他内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②明黄褐色 ③良好	
50- 5 (186)	SI-18	壺 (土師器)	①10.5 ② 3.2	外傾する口縁部。端部はつまみ出 し。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒 密 ②内面橙黄色 外面黄茶褐色 ③良好	
50- 6 (195)	SI-18	壺 (土師器)	①13 ② 4.9	内湾して立上り、口縁部はさらに 内湾。口縁端部は丸くおさまる。	外面底部調整不明。他内外 面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒 密 ②淡黄褐色 ③良好	
50- 7 (181)	SI-18	壺 (土師器)	①10.5 ② 4.5	内湾して立上り、口縁部は直立よ りやや内湾気味。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒 密 ②黄褐色 ③良好	

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
50-8 (184)	SI-18	高 坏 (土師器)	①17 ② 5.8	比較的大きな丸みの少ない碗形の ものである。口縁端部で直立。	内外面共ナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒 密 ②黄茶褐色 ③良好	
50-9 (149)	SI-18	高 坏 (土師器)	② 2.1	坏底部。	内外面共ナデ調整。外面に 指頭圧痕残る。	①1~2mmの白色砂粒含む 密 ②赤茶色 ③良好	
50-10 (188)	SI-18	高 坏 (土師器)	② 2.1	碗状に伸びる坏底部。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②橙色 ③良好	
50-11 (191)	SI-18	高 坏 (土師器)	② 6 ④ 7.9	脚柱部肉厚で短い。底部は丸く外 反。	外面および内面底部ナデ調 整。外面ハケ目残る。内面 絞目。接続法γ	①1mm大の白色砂粒含む 密 ②橙黄色 ③良好	
50-12 (55)	SI-18	高 坏 (土師器)	② 4.8	狭く「ハ」の字に開く脚柱部。	内面ケズリ。外面風化の為 調整不明。接続法γ	①1mm大の白色砂粒含む 密 ②橙色 ③良好	
50-13 (194)	SI-18	高 坏 (土師器)	② 5.4	狭く「ハ」の字に開くややよめの 脚柱部。	内外面共調整不明。 接続法γ	①1mm大の白色砂粒含む 密 ②黄橙色 ③良好	
50-14 (96)	SI-18	碗 (須恵器)	①10 ② 1.6	やや内湾気味に外傾する口縁部。 端部でさらに外反し開く。	内外面共ナデ調整。	①密 ②暗灰色 ③やや不良	
50-15 (149)	SI-18	甕 (土師器)	①16 ② 3.7	「逆ハ」の字に開く口縁。端部は 平坦。外面に凸帯を巡らす。	内外面共ナデ調整。外面凸 帯より下方ハケ目残る。	①微細砂粒多量に含む 密 ②赤茶色 ③良好	
51-1 (204)	SI-19	甕 (土師器)	①15.5	複合口縁。鋭い稜をもち、口縁端 部は肥厚。	内外面共ナデ調整。	①0.5mmの白色砂粒含む ②黄褐色 ③やや良好	
51-2 (210)	SI-19	高 坏 (土師器)	①10.8	内湾し、口縁端部で外反する。 口縁端部は比較的鋭い。	内外面共ナデ調整。 指頭圧痕あり。	①微細砂粒含む ②黄褐色 ③良好	
51-3 (210)	SI-19	高 坏 (土師器)	④ 9.1	裾部で大きく開く脚部。	内外面共ナデ調整。 指頭圧痕あり。	①0.5mmの砂粒含む ②黄褐色 ③良好	
51-4 (204)	SI-19	高 坏 (土師器)		内湾気味に直立する脚部。	風化のため調整不明。	①微細砂粒含む ②黄褐色 ③良好	
51-5 (200)	SI-19	高 坏 (土師器)	①18.0	底部から屈曲して外傾し、口縁端 部で外反。	外面坏底部ハケ目調整。 他内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む ②赤茶色 ③良好	
51-6 (204)	SI-19	高 坏 (土師器)	①13.0	直線的に外傾し、口縁端部で外反	内外面共ナデ調整。	①0.5mmの白色砂粒含む ②明黄茶色 ③良好	外面自然釉
51-7 (208)	SI-19	蓋 坏 (須恵器)	①12.0	上立りはやや内傾し、稜は鈍い。 口縁端面は内湾気味に内傾。	内外面共ナデ調整。	①密 ②灰色 ③ふつう	
53-1 (172)	SI-20	高 坏 (土師器)	①	底部から大きく開いた後屈曲して さらに外反して開く。口縁端部つ まみ出し。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②淡黄褐色 ③良好	
53-2 (240)	SI-20	甕 (土師器)	①19	複合口縁の名残の口縁。	内外面共風化のため調整不 明。	①0.5mmの白色砂粒含む ②淡黄褐色 ③良好	
53-3 (169)	SI-20	甕 (土師器)	①15.4	複合の受皿を有するもので、口縁 部は外傾し、端部は平坦にちかい が、若干くぼんでいる。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む ②外面淡黄色 内面黄褐色 ③良好	
53-4 (170)	SI-20	甕 (土師器)	①13.2	外傾する口縁部だが、退化した複 合口縁の名残のような屈曲がみら れる。端部は平坦。	内外面共ナデ調整。	①1~5mmの砂粒多量含む ②黄褐色 ③良好	
53-5 (93)	SI-20	甕 (土師器)	①11	退化した複合口縁で、わずかに稜 が残る。口縁上部は直立に近いが わずかに外傾する。	内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②黄褐色 ③良好	
53-6 (168)	SI-20	高 坏 (土師器)	①24	大きく外反して開く。	内面口縁部ナデ調整、内面 他ハケ目。外面ハケ目後、 ナデ調整。	①緻密 ②明褐色 ③良好	
53-7 (170)	SI-20	高 坏 (土師器)		碗状に伸びる坏底部。	内外面共ナデ調整で、指頭 圧痕残る。接続法γ	①微細砂粒含む 密 ②外面橙色 内面黄褐色 ③良好	
53-8 (180)	SI-20	高 坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。外面に 指頭圧痕残る。接続法γ	①微細砂粒含む 密 ②外面黄褐色 内面黄褐色 ③良好	
53-9 (169)	SI-20	高 坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。外面に 指頭圧痕残る。接続法γ	①緻密 ②赤茶色 ③良好	
53-10 (236)	SI-20	高 坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。外面に 指頭圧痕残る。接続法γ	①微細砂粒含む 密 ②内面橙色 外面黄褐色 ③良好	
53-11 (176)	SI-20	高 坏 (土師器)	④11.3	脚柱部は短く太い。底部は大きく 外反して開き、端部平坦。	外面ナデ調整。内面に指頭 圧痕残る。	①微細砂粒含む 密 ②茶褐色 ③良好	
53-12 (93)	SI-20	高 坏 (土師器)	④ 9.6	大きく外反して開く。端部平坦。	外面ナデ調整。外面裾部、 内面底部に指頭圧痕残る。	①微細砂粒含む 密 ②茶褐色 ③良好	
53-13 (93)	SI-20	高 坏 (土師器)	④ 9.4	「ハ」の字に開く。端部平坦。	外面ナデ調整。内面ハケ目 の後ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②橙色 ③良好	内面一部黒斑付着
53-14 (240)	SI-20	高 坏 (土師器)	④ 8	外反気味に「ハ」の字に開く。	内面底部ハケ目。外面に未 貫通の円孔痕あり。	①微細砂粒含む ②淡茶褐色 ③良好	
64-1 (850)	S K-07	壺 (弥生)	①20	頸部は肩部より外湾気味に伸びる 口縁部は内傾して上下に拡張。外 面に浅い沈線残る。	内面頸部より下方ケズリ、 他内外面共にナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②淡黄褐色 ③良好	
64-2 (859)	S K-07	壺 (弥生)	①18	頸部は緩かに外湾し、口縁部は下 方につまみ出し、内傾して上方に つまみ出す。口縁外面に2条の凹 線がみられるが1条は不明瞭。	内面頸部ケズリ、他内外面 共にナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②外面淡黄褐色 内面淡暗茶褐色 ③良好	
64-3 (851)	S K-07	壺 (弥生)	①17	頸部は緩かに外湾し、口縁部は下 方につまみ出し、内傾して上方に つまみ出す。口縁外面に2条の凹 線みられる。	内面頸部ケズリ、他内外面 共にナデ調整。内面頸上部に 指頭圧痕がみられる。	①微細砂粒含む ②暗茶褐色 ③良好	外面に煤付着

挿図- 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
64-4 (844)	SK-07	壺 (弥生)	①17.8	口縁部は下方につまみ出し、内傾して上方に拡張。外面に4条の沈線施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②淡黄灰色 ③良好	
64-5 (848)	SK-07	壺 (弥生)	①15	頸部は緩かに外湾し、口縁部はやや肥厚し、内傾して上方につまみ出す。外面に2条の凹線施す。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②内面黄褐色 外面赤茶~黒褐色 ③良好	
64-6 (848)	SK-07	甕 (弥生)	①17.6	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は肥厚し、外湾気味に内傾して上方に拡張。外面に浅い沈線数本みられる。	内面頸部から肩部にかけてケズリ、他内外面共ナデ調整。	①2mm以下の砂粒含む ②淡黄褐色 ③良好	
64-7 (846) (859)	SK-07	甕 (弥生)	①20	口縁部は肥厚し、外湾気味に直立して上方に拡張。外面沈線がわずかにみられる。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒均質的に含む ②淡黄色 ③良好	
64-8 (850)	SK-07	甕 (弥生)	①16	頸部は外湾し、口縁部は下方に若干つまみ出し、内傾して上方に拡張。外面に3条の浅い沈線施す。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②外面橙色 内面淡暗茶褐色 ③良好	
64-9 (860)	SK-07	甕 (弥生)	①13.8	口縁部は内傾して上方につまみ出す。外面に4条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。	①密 ②淡赤褐色 ③良好	外面に黒斑あり
64-10 (850)	SK-07	甕 (弥生)	①14	口縁部は内傾して上方に拡張気味につまみ出す。外面に4条の沈線施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②淡黄色 ③良好	
64-11 (850) (860)	SK-07	壺 (弥生)	①17	口縁部は下方に若干つまみ出し、内傾して上方に拡張。外面に3条のやや不明瞭な凹線残る。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒均質的に含む ②淡黄色 ③良好	
64-12 (843)	SK-07	壺 (弥生)	①16	頸部は「逆し」字に屈曲し、口縁部は下方に若干つまみ出し、内傾して上方に拡張。外面にわずかに凹線残る。	内面頸部より下方ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②淡黄灰色 ③良好	
64-13 (857)	SK-07	壺 (弥生)	①16	口縁部は下方につまみ出し、内傾して上方に拡張。外面に3条の凹線みられる。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒多量に含む ②茶黄色 ③良好	
64-14 (857)	SK-07	壺 (弥生)	①17	口縁部は内傾して上方に拡張。外面に3条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒含む ②外面淡黄褐色 内面橙色 ③良好	
64-15 (860)	SK-07	壺 (弥生)	①17	口縁部は下方につまみ出し、内傾して上方につまみ出す。外面に3条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒均質的に含む ②外面淡黄褐色 内面淡黄灰色 ③良好	
64-16 (848)	SK-07	壺 (弥生)	①14.2	頸部は外湾し、口縁部は肥厚し、内傾して上方に伸びる。	内面頸部ケズリ、他内外面共にナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②外面橙茶色 内面黄褐色 ③良好	
64-17 (857)	SK-07	壺 (弥生)	①16	頸部は「逆し」字に丸く屈曲し、口縁部は若干肥厚し、直立して上方に拡張気味につまみ出す。外面に3条の沈線施す。	肩部ケズリ、他内外面共ナデ調整を施す。	①0.5mm~2mmの砂粒少量含む ②内面黄褐色 外面淡暗茶褐色 ③良好	
64-18 (849)	SK-07	甕 (弥生)	①18.4	頸部は「く」の字に丸く屈曲し、口縁部は肥厚し、外湾気味にやや内傾して上方に拡張。外面に2条の凹線施す。	頸部内面ケズリ、他内外面共ナデ調整。外面頸部ハケ目が若干残る。	①1mmの砂粒含む ②赤色顔料塗布 ③良好	
64-19 (863)	SK-07	甕 (弥生)	①16	頸部は「く」の字に丸く屈曲。口縁部は直立して上方に拡張。外面に3条の凹線施す。	内面頸部ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒少量含む ②淡黄褐色 ③良好	外面に煤付着
64-20 (85)	SK-07	甕 (弥生)	①16	口縁部はわずかに外傾して上方に拡張。端部は平坦気味。外面に3条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②内外面 淡黄茶色 断面濃黄茶色 ③良好	
64-21 (850)	SK-07	甕 (弥生)	①15	口縁部は若干外湾し、直立して上方に拡張。外面に2条の不明瞭な凹線見られる。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒多量に含む ②茶黄色 ③良好	
64-22 (857)	SK-07	壺底部? (弥生)	④5	平底。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む 密 ②内面茶褐色 外面赤茶褐色 ③良好	
64-23 (857)	SK-07	甕底部 (弥生)	④5.2	平底。	内外面共ナデ調整。内面底指頭圧痕、外面ハケ目残る。	①1~2mmの白色砂粒多量に含む 密 ②内面黄茶褐色 外面赤茶色 ③良好	
64-24 (859)	SK-07	甕底 (弥生)	④5.6	外底中央部のくぼんだ底。	内面ケズリ、外面ナデ調整。	①1~2mmの白色砂粒含む 密 ②黄茶褐色 ③良好	
64-25 (850)	SK-07	壺底		平底。底部より「逆ハ」の字に開く。	内面ケズリ、外面ナデ調整。	①1mm以下の砂粒 密 ②外面黄橙~茶褐色 内面黄茶褐色 ③普通	
64-26 (857)	SK-07	壺底 (弥生)	④7	平底。	内面ケズリ、外面ナデ調整。	①1~2mmの砂粒 密 ②黄茶褐色 ③良好	
64-27 (861)	SK-07	甕底 (弥生)	④5.2	外底中央部のややくぼんだ底。	内面ケズリ、外面へラ磨き。	①1.5mmの白色砂粒含む ②黄褐色 ③良好	
64-28 (857)	SK-07	甕底 (弥生)	④5.4	平底。	内外面共ナデ調整。外面底ハケ目残る。	①1mm大の白色砂粒 密 ②内面黄茶色 外面黄茶褐色 ③良好	
64-29 (850)	SK-07	甕底 (弥生)	④6	平底。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の白色砂粒 密 ②黄茶色 ③良好	

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
64-30 (846)	SK-07	高坏 (弥生)	④10	大きく「ハ」の字に開き、裾部から肉厚になり、底部で更に外反。端部平坦で1条の凹線施す。	内面ケズリ。外面ナデ調整。	①0.5mmの砂粒含む 密 ②橙色 ③良好	
64-31 (859)	SK-07	高坏 (弥生)	④14	大きく「ハ」の字に開き、裾部から肉厚になる。端部は上方につまみ出し面を成し、4条の凹線施す。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの白色砂粒 密 ②黄橙色 ③普通	
64-32 (846) (884)	SK-07	高坏 (弥生)	④14.8	大きく「ハ」の字に開き、裾部から肉厚になる。端部平坦。脚柱部・裾部・端部に凹線施す。	内面ケズリ。外面ナデ調整。	①2mm以下の砂粒多 ②外面赤橙色 内面黄橙色 ③良好	
64-33 (854)	SK-07	高坏 (弥生)	④12	大きく「ハ」の字に開く脚で、裾部から肉厚になり、底部をつまんで段を成す。端部平坦。	内面ケズリ。外面調整不明。	①2mm以下の砂粒含む ②淡黄褐色 ③良好	
64-34 (849)	SK-07	高坏 (弥生)	④14.5	大きく開いた後さらに外反。端部上方に拡張し外面に2条の凹線	外面ナデ調整、内面ケズリ。	①1~2mmの白色砂粒多 ②橙黄色 ③良好	
64-	SK-07	高坏 (弥生)	④16	内湾気味に開く。端部は上方に拡張し丸くおさめる。裾部に凹線。	外面ナデ調整、内面ケズリ。	①1~2mmの白色砂粒 密 ②黄茶色 ③普通	
65-1 (889)	SK-06	甕 (土師器)	④14.0	外傾し、口縁端部は肥厚し、内側につまみあげる。	内外面共ナデ調整。	①1mmの砂粒含む ②淡茶黄色 ③普通	
65-2 (889)	SK-06	甕 (土師器)	④11.0	外傾する口縁。	内外面共ナデ調整。	①1mmの砂粒含む ②肌色 ③普通	
65-3 (889)	SK-06	低脚环 (土師器)	④7.6	脚部。脚柱部が「ハ」の字に開き、脚裾は更に大きく開く。	内外面共ナデ調整。	①密 ②橙色 ③良好	
65-4 (69)	SK-29	坏 (土師質)	④7.6	平底。	外面ナデ調整。	①微細砂粒 ②淡黄色 ③普通	
65-5 (217)	SK-31	甕 (土師器)	④17.8	外湾気味に開く口縁。端部は丸くおさめる。	内外面共ナデ調整。	①1~4mmの砂粒含む ②淡茶褐色 ③良好	
65-6 (69)	SK-26	高坏 (弥生)	④15.2 ④13.8	「ハ」の字に広がる脚部。底部端部は外側につまみ出し端部は内傾。底部端部に4条端面に3条の凹線。	内外上部絞り、中央部ケズリ、下部ハケ目。外面ナデ調整。	①密 ②淡黄褐色 ③普通	
65-7 (996) (998)	SK-26	甕 (弥生)	④11.0	胴底部。	外面体部下下部ヘラミガキ内面底部ヘラミガキ。体部縦ハケの後ヘラミガキ調整	①1~2mmの砂粒含む ②淡茶色 ③やや粗	(996~999) (1003~1005)
67-1 (941)	SD-03	壺 (弥生)	④20	丸味のある胴部。頸部は「逆L」字に丸く屈曲する。口縁部は上下につまみ出し、端部は丸くおさめる。外面には3条の凹線を施す。	内面頸部から肩部にかけてと、胴部はケズリ、外面肩部から胴部は粗い磨きによる仕上げ。内面頸部及び肩部に指頭圧痕残る。外面胴上部に刺突文施す。	①1~2mmの砂粒含む ②淡黄土色 ③普通	
67-2 (945)	SD-03	壺 (弥生)	④16	口縁部はわずかに肥厚し、直立して上方に拡張気味につまみ出す。外面に6条の凹線を施す。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②淡茶色 ③やや粗	
67-3 (942)	SD-03	壺 (弥生)	④16	内湾する口縁。	内面ナデ調整、外面の調整不明。	①1~2mmの砂粒含む ②赤褐色 ③やや粗	
67-4 (225)	SD-03	高坏 (弥生)	④17	内湾気味に開く。端部は上方に拡張し、外面に沈線の痕跡残る。	風化の為調整不明。	①1~2mmの砂粒含む ②淡橙色 ③やや粗	
67-5 (944)	SD-03	甕底 (弥生)	④11	外面底部中央が若干くぼんだ底で肉厚。	内外面共ナデ調整。内面底部および外面底部にちかいところに指頭圧痕残る。	①1~2mmの砂粒含む ②淡茶色 ③良	
67-6 (941)	SD-03	甕底部 (弥生)	④8	平底。	内面ナデ調整。底部に指頭圧痕残る。外面調整不明。	①1~2mmの砂粒 密 ②淡茶色 ③粗	
67-7 (74)							
67-8 (945)	SD-03	甕底部 (弥生)	④6	平底。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒 密 ②淡茶色 一部淡桃色	
67-9 (940)	SD-03	甕底部 (弥生)	④4.0	平底。	外面ヘラミガキ	①密 ②褐色 ③良好	
67-10 (948)	SD-03	甕底部 (弥生)	④6.2	平底。底部端面を外上方につまみ出す。外面に6条の凹線を施す。	内外面共ナデ調整。外面指頭圧痕。	①密 ②赤褐色 ③良好	
67-11 (952)	SD-03 (上層)	甕 (土師器)	④20.5	外湾気味に開く口縁。口縁端部は肥厚。	口縁内外面共ナデ調整。体部外面ハケ目、内面ケズリ	①密 ②淡茶褐色 ③良好	
67-12 (951)	SD-03 (上層)	甕 (土師器)	④18.8	外反する口縁で、若干肉厚である	外面調整不明。内面ナデ調整施す。	①2~4mm白濁色石粒含む ②淡黄土色 ③やや粗	
67-13 (945)	SD-03 (上層)	甕 (土師器)		肩部(断面)。	波状文を施す。	①1mm大の砂粒 密 ②赤茶色 ③良	
67-14 (935)	SD-04	壺 (土師器)	④26.4	大きく「逆ハ」の字に開く口縁。端部は若干下方に拡張し面を成す	内外面共風化のため調整不明。	①密 ②橙黄色 ③やや粗	
67-15 (928)	SD-04	壺 (弥生)	④21	頸部は「逆L」字に丸く屈曲。口縁部は外湾気味にわずかに内傾して上方に拡張。外面に3条の凹線を施す。	外面風化のため調整不明。内面頸部より上ナデ調整、下削り。指頭圧痕残る。	①1~2mmの砂粒含む ②淡黄褐色 ③良好	
67-16 (927)	SD-04	壺 (弥生)	④17	頸部は「く」の字に丸く屈曲。口縁部は若干つまみ出し、わずかに内傾して上方に拡張。外面に3条の沈線がわずかにうかがえる。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒 密 ②赤彩 ③良好	

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
67-17 (936)	SD-04	甕 (弥生)	①14	頸部は「く」の字に丸く屈曲。口縁部はわずかに内傾して上方つまみ出す。外面に凹線がかすかにみられる。	内面頸部より下ケズリ、他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②外面淡黄土色 内面淡褐色 ③普通	外面に丹彩あり
67-18 (932)	SD-04	壺底部 (弥生)	④7	高台付の底部。	内外面共ナデ調整を施す。内外面共底に指頭圧痕残る。	①1~2mmの砂粒 密 ②淡黄土色 底部桃褐色 ③良好	
69-1 (225)	SD-08	甕 (土師器)	①23	「逆ハ」の字に開く口縁。	内外面共ナデ調整。	①1~3mmの白色砂粒多量に含む ②黄褐色 ③良好	
69-2 (225)	SD-08	壺 (土師器)	①10	内湾気味に外傾する口縁。	内外面共ナデ調整。	①密 ②茶黄色 ③良好	
69-3 (225)	SD-08	壺 (土師器)	①12	内湾しながら立上がり、口縁部は直立。	内外面共ナデ調整。	①密 ②内面黄褐色 外面橙黄色 ③良好	
69-4 (225)	SD-08	高坏? (土師器)	①14	内湾しながら外側に開いて立上がり、口縁部で外傾しさらに開く。	内外面共ナデ調整。内面指頭圧痕残る。	①密 ③良好 ②内面黄褐色 外面黄茶~黒灰色	
69-5 (225)	SD-08	坏蓋 (須恵器)	①13	口縁端部は面を成す。	内外面共ナデ調整。	①密 ②外面濃灰色 内面灰色 ③良好	
69-6 (924)	SS-01	高台付皿 (土師器)	①17.2 4.6 11.4	屈曲気味に内湾する口縁。高台は長く内傾。	底部回転ヘラケズリ 底部中心未調整。 他内外面共ナデ調整。	①密 ②赤褐色 ③良好	
69-7 (970)	SS-03	甕 (土師器)	①11.4 17.9 17.2	口縁は内湾気味に立上り、口縁端部は丸く肥厚。体部球形。	口縁内外面共ナデ調整。内面体部上半部ケズリ、下半部指頭圧痕。	①密 ②淡橙褐色 ③やや良	
69-8 (969)	SS-03	小形丸底壺 (土師器)	①10.0 8.8 8.4	口縁端部やや内湾。立上りは長い。体部は偏球形。	体部内面ケズリ。 他内外面共ナデ調整。	①密 ②淡褐色 ③普通	

〈研石山5区遺構関係遺物〉

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
112-1 (694)	SI-03	壺 (土師器)	①12.0	内湾して立上り、口縁端部は外側に屈曲する。	内外面ナデ。	①緻密 ②赤褐色 ③良好	
112-2 (1621)	SI-03	高坏 (土師器)		坏底部片		①緻密 ②淡褐色 ③良好	
112-3 (687)	SI-03	高坏 (土師器)		坏底部片		①緻密 ②淡赤褐色 ③良好	
113-1 (136)	SI-01	甕 (土師器)	①20.8	口縁部の屈曲が明瞭に残る。口縁で屈曲後、端部で更に屈曲。	内面頸部より下調整不明。他内外面共ナデ調整。	①1~4mm白色砂粒含む ②淡黄土色 ③良好	外面煤付着
113-2 (690)	SI-01	甕 (土師器)	①18	「逆ハ」の字に開く口縁で、口縁部の屈曲が僅かに残る。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①白色微砂粒含む ②黄灰色 ③不良	
113-3 (337)	SI-01	甕 (土師器)	①12	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁は内湾気味に外傾し、端部で僅かに上方に屈曲。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①粗 ②淡黄褐色 ③不良	
113-4 (352)	SI-01	甕 (土師器)	①12	外傾して伸び更に端部で僅かに外反する口縁。	内外面共調整不明。	①白色微砂粒含む ②淡黄色 ③やや不良	
113-5 (350)	SI-01	甕 (土師器)		外傾する口縁に続く頸部。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①粗 ③やや不良 ②外面黄褐色 内面赤黄茶	
113-6 (136)	SI-01	甕 (土師器)	①10	外反して長く伸びる口縁。	内面頸部より下調整不明。他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②淡黄土色 ③良好	
113-7 (350)	SI-01	甕 (土師器)		大きく張る胴部の様相を示す肩部。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①粗 ②淡黄褐色 ③やや不良	
113-8 (134)	SI-01	甕 (土師器)		外傾する口縁に続く頸部。	外面ナデ調整。内面調整不明。	①白色微砂粒含む ②黄白色 ③不良	
113-9 (350)	SI-01	甕 (土師器)		外傾して伸びる口縁で、立上がり短く、屈曲が僅かに残る頸部。	内外面ともナデ調整。	①粗 ②茶色 ③やや不良	外面炭化物付着
113-10 (336)	SI-01	壺 (土師器)		やや外傾する口縁に続く頸部。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。外面にハケ目残る。	①白色砂粒含む ②茶黄色 ③不良	
113-11 (354)	SI-01	鉢 (土師器)	①14	外反する口縁で、端部は上方につまみ出す。胴部僅かに丸みを持つ。	内面頸部より上指圧調整。下ケズリの後指圧調整。外面ナデ調整。	①白色砂粒を含む ②赤茶色 ③やや不良	
113-12 (334)	SI-01	鉢 (土師器)	①17.2	頸部が僅かに括れる。外反する口縁で端部はつまみ出す。胴部はすり鉢状。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①砂粒少量含む ②外面明茶色 内面淡黄色 ③良	
113-13 (371)	SI-01	鉢 (土師器)	①16	外側に「L」字に屈曲する口縁で端部は面を成す。	内外面共ナデ調整。	①白色砂粒含む ②赤茶色 ③やや良	
113-14 (346)	SI-01	甕 (土師器)	①18	口縁部の屈曲が僅かに残る。	内外面共ナデ調整。	①粗 ②茶色 ③不良	
113-15 (347)	SI-01	底部 (土師器)	①1.75	肉厚の底部でやや丸みを持ちながら立上がる。	内外面共ナデ調整。	①白色砂粒含む ②茶黄色 ③不良	

挿図一 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
113-16 (332)	SI-01	高 坏 (土師器)	④ 5.8	「ハ」の字に開く脚柱部から更にやや外傾する脚底部。	内外面共調整不明。外面に指頭圧痕残る。	①粗 ②橙茶色 ③やや不良	
113-17 (360)	SI-01	高 坏 (土師器)		「ハ」の字に開く脚部。	内外面共ナデ調整。	①砂粒少量含む ②橙茶色 ③普通	
113-18 (383)	SI-01	坏 (土師器)	①14	直線的に開いて伸びた後、口縁部僅かに内傾する。	内外面共調整不明。	①砂粒少量含む ②明茶色 ③やや不良	
113-19 (344)	SI-01	坏 (土師器)	①12	内湾気味に立上がり直立。	内外面共ナデ調整。内面にハケ目残る。	①白色砂粒含む ②赤茶色 ③普通	
113-20 (688)	SI-01	坏 (土師器)	①14.6	内湾して立上がる。底部は浅い。	内外面共調整不明。	①砂粒少量含む ②橙茶色 ③やや不良	
113-21 (693)	SI-01	坏 (土師器)	①14	内湾して立上がる。底部は浅い。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒少量含む ②外面茶黄土色 内面黄土色 ③良好	
113-22 (342)	SI-01	坏 (土師器)	①13.8 ② 2.5	やや内湾気味に直立して立上がる。底浅い。	内外面共ナデ調整。	①粗 ②赤黄茶色 ③やや不良	
113-23 (690)	SI-01	坏 (土師器)	①14.2 ② 3.9	直立に立上がる。	内外面共ナデ調整。	①粗 ②赤茶色 ③やや良	
113-24 (331)	SI-01	坏 (土師器)	①14.2 ① 3.7	直立に立上がる。	内外面共調整不明。	①粗 ②黄茶色 ③やや良	
113-25 (362)	SI-01	坏 (土師器)	①16 ② 3.4	内湾気味に立上がり、口縁端部で僅かに外側に屈曲。	内外面共ナデ調整。	①粗 ②黄茶色 ③良好	
114-1 (219)	SI-04	甕 (土師器)	①20	「ハ」字に開く口縁。複合口縁状の膨らみを僅かに残す。口縁端面はつまみあげ先細る。	内外面共ヨコナデ	①緻密 ②黄褐色 ③不良	
132-1 (219)	SB-06	甕 (土師器)	①17 ② 3.9	頸部は「L」字に屈曲し、口縁部の立上がり短く、端部でやや屈曲。	外面剝離のため調整不明。	①1~3mmの砂粒含む ②淡黄褐色 ③不良	
132-2 (194)	SB-06	甕 (土師器)	①13.8 ② 5	「逆ハ」の字に開く口縁で、立上がり短く、僅かに屈曲が残る。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。内面に指頭圧痕残る。	①密 ②茶色 ③やや不良	外面煤付着
132-3 (215)	SB-06	高 坏 (土師器)	①14.6	碗形の坏部。	内面ミガキ。外面ナデ調整。	①密 ②赤橙色 ③良好	
132-4 (182)	SB-06	高 坏		坏底部。	内外面共ナデ調整。	①粗 ②橙色 ③不良	
132-5 (197)	SB-06	高 坏 (土師器)	④ 6.6	碗形の坏部。やや「ハ」の字に開き脚柱部から外傾する脚底部。	内外面共調整不明。内面シボリ痕、外面指頭圧痕残る。	①2mm大の砂粒含む ②茶色 ③不良	
132-6 (193)	SB-06	高 坏 (土師器)	④ 8.2	外反して開く脚底部。	外面ナデ調整。内面シボリ痕あり。	①1~2mm砂粒少量含む密 ②外面橙色 内面淡黄土色 ③普通	
132-7 (181)	SB-06	低脚坏 (土師器)	④ 7	脚柱部は「ハ」の字に開き、更に外傾して開く脚底部。	坏部及び外面ナデ調整。内外面に指頭圧痕残る。	①1mm大の砂粒含む ②茶色 ③良	
132-8 (228)	SB-06	カマド (土師器)	①21	「く」の字に丸く屈曲する頸部。口縁端部は面を成す。	内外面共にナデ調整。	①密 ②淡橙色 ③普通	
132-9 (214)	SB-06	カマド (土師器)		あまり張りのない肩部。大型。	内外面共調整不明。	①1~2mm砂粒多量含む ②淡黄茶色 ③やや不良	
132-10 (179)	SB-06	カマド (土師器)		大きく張った胴部。	内外面共調整不明。	①1~4mm砂粒多量含む ②淡黄褐色 ③不良	外面煤付着
132-11 (199)	SB-06	甌 (土師器)	①23.8	僅かに内湾気味に外側に伸びた後、口縁端部で僅かに外側に屈曲。把手の形状不明。	口縁内外面共ナデ調整。他内面ケズリ、外面粗い縦方向のハケ目。	①2~3mm砂粒多量含む ②淡橙色 ③普通	
132-12 (212)	SB-06	甕 (須恵器)	①19	頸部から外反して伸びる口縁部。口縁部で段を成し、端部平坦。	内外面共ナデ調整。	①密 ②淡黒灰色 ③良好	
132-13 (218)	SB-06	壺	③16.6	最大胴径は中央よりやや上方に位置し、9条の波状文を巡らす。	内外面共ナデ調整。内面底部に指頭圧痕残る。	①密 ②茶色 ③良	肩部灰被
115-1 (3305)	SI-07	カマド (土師器)					頸部破片
115-2 (2502)	SI-07	鉢 (土師器)	①17.8	緩やかに内湾し口縁端部は丸くおさまる。底は凹む。	内外面共ナデ調整。内面底周辺に指頭圧痕残る。	①やや粗。砂粒含む ③良 ②外茶褐色、内橙茶色	
115-3 (2490)	SI-07	高 坏 (須恵器)	① 8.8 ②11.3 ④ 8.4	半球体状の深めの体部。口縁は僅かに外反し、内傾してのびる。端面は丸い。「ハ」字に開く脚部で裾部は直立する。三方台形透し。	坏底部ヘラケズリ。底部内面不整方向ナデ。以外はナデ調整。	②暗灰色 ③良好	
115-4 (2490)	SI-11	甕 (土師器)	①16	頸部は「く」の字に屈曲。口縁部は内湾気味に外傾し、端部上方に肥厚。肩部ナデ肩。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~3mm砂粒多量含む ②淡黄土色 ③良好	Pit2内
115-5 (2502)	SI-07	坏 (土師器)	①12	内湾して立上がり、口縁端部は肥厚しわずかに外側に屈曲。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒少量含む ②黄土色 ③良好	
115-6 (2490)	SI-11 周 辺	高 坏 (土師器)		坏底部。	外面ナデ調整。内面調整不明。外側に穿穴有り。	①1~2mmの砂粒含む ②内面黒茶色 外面赤褐色 ③やや不良	
115-7 (2498)	SI-11 周 辺	高 坏 (須恵器)	④ 9.9	外反して開き、脚端部で屈曲し直立する脚部。三方に三角透し施す。	外面裾部及び内面ナデ調整。外面他カキ目。	①密 ②灰色 ③良	内面緑色自然釉
118-1 (1254)	SI-08	甕 (土師器)	①23.6	稜の残る退化複合口縁。口縁はやや外傾して伸びる。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む ②淡黄褐色 ③良好	炭化物付着
118-2 (790)	SI-08	甕 (土師器)	①16.4	口縁部の屈曲が明瞭に残る。端部で屈曲後、端部で更に屈曲。	外面調整不明。内面ケズリ。	①3~4mm砂粒多量含む ②白黄土色 ③不良	
118-3 (1006)	SI-08	甕 (土師器)	①13.6	口縁部の屈曲が明瞭に残る。端部は若干短く、直立。	内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む密 ②赤茶褐色 ③普通	外面炭化物付着

挿入遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種 (土師器)	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
118-4 (791)	SI-08	甕 (土師器)	①16	口縁部の屈曲が明瞭に残る。端部は短く、外反し直立。撫で肩。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1mm大砂粒多量含む密 ②黄茶褐色 ③やや不良	外面黒斑付着
118-5 (81)	SI-08	甕 (土師器)	①17.7	口縁部の屈曲が明瞭に残る。端部は短く、直立。肉厚。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~3mm砂粒多量含む密 ②赤茶褐色 ③良好	外面炭化物付着
118-6 (792)	SI-08	甕 (土師器)	①14	「逆ハ」の字に開く口縁で、口縁部の屈曲が僅かに残る。	内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む粗 ②赤茶褐色 ③やや不良	
118-7 (1264)	SI-08	甕 (土師器)	①16.4	外反してのびる口縁。最大胴径は中央。	口縁内外ナデ。胴中以下ハケ目。胴内上半ヘラケズリ。	①1~2mm砂粒多量含む密 ②淡黄褐色 ③普通	
118-8 (812)	SI-08	甕 (土師器)	①12	頸部は「L」字に屈曲し、口縁部の立ち上がり短く、端部で内側に屈曲。かなり肉厚。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①3~4mm砂粒多量含む ②白黄土色 ③不良	
118-9 (802)	SI-08	甕 (土師器)	①24 ②4.8	外傾して伸びる口縁で、口縁部に微かに屈曲が残る。	内面ケズリ、外面ナデ調整。	①2~3mm砂粒多量含む ②淡黄土色 ③不良	
118-10 (792)	SI-08	甕 (土師器)	①13.9 ②7	外傾して伸びる口縁で、端部で更に外側に屈曲。肩はあまり張らない。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む粗 ②茶褐色 ③やや不良	
118-11 (1247)	SI-08	甕 (土師器)	①6 ②3.1	頸部は「L」字に屈曲し、口縁の立ち上がり短い。	内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒少量含む ②赤褐色 ③良好	
118-12 (1263)	SI-08	甕 (土師器)	①16	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁は外反して伸びる。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~3mm砂粒多量含む密 ②淡茶褐色 ③普通	外面炭化物付着
118-13 (987)	SI-08	坏身 (土師器)	①11	内湾して立ち上がり、口縁やや内傾。	内外面共調整不明。	①密 ②黄茶褐色 ③やや不良	
118-14 (980)	SI-08	高坏 (土師器)	④6.8	膨みのある脚柱部から外傾する脚底部。	外面ナデ調整。内面絞り痕有り。	①密 ②赤褐色 ③良好	
118-15 (805)	SI-08	坏蓋 (須恵器)	①12.4 ②4	口縁部はやや外傾。天井部は中央部が僅かに窪む。僅かに稜が残る。	外面天井部ヘラケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm白色砂粒含む ②淡茶灰色 ③良好	
118-16 (894,997) (979,1363)	SI-08	坏身 (須恵器)	①11.6 ②4.8 ③13.3 ④1.8	立ち上がりは長く外反気味に内傾。口縁端部僅かに段を有す。受部は横方向に伸びる。底部は浅く平坦。	外面底部ヘラケズリ。他内外面共ナデ調整。	①微細砂粒含む 密 ②灰色 ③良好	
118-17 (267,1383) (3287,3397)	SI-08	坏蓋 (須恵器)	①12.5 ②7.1	天井部高く、外面に輪状のつまみを施す。天井部と口縁の境明瞭。	外面天井部ヘラケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②灰色 ③良好	
118-18 (808)	SI-08	坏身 (須恵器)	①11.1 ②4 ③14 ④1.7	たちあがりは長く内傾。受部はやや上方に伸びる。	外面に僅かにケズリがみられる他は、内外面共ナデ調整。	①密 ②淡灰色 ③普通	底部欠損
119-1 (892)	SI-09	甕 (土師器)	①12	頸部は「L」に屈曲し、口縁部の立ち上がりは短い。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む ②淡褐色 ③良好	
119-2 (898)	SI-09	甕 (土師器)	①18	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外反して伸びる。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む ②外面淡褐色 内面黒色 ③良好	
119-3 (889)	SI-09	甕 (土師器)	①21.8	頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は外反して伸びる。やや肉厚。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む ②外面濃褐色 内面淡褐色 ③良好	
119-4 (885)	SI-09	甕 (土師器)	①17.8	頸部は「く」の字に屈曲。口縁部内湾気味に外傾。やや肉厚。	内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む ②淡褐色 ③良好	
119-5 (916)	SI-09	甕 (土師器)	①15.8	「く」の字に屈曲する頸部。口縁「ハ」の字に開く。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む ②赤褐色 ③不良	
119-6 (921)	SI-09	坏 (土師器)	①14	やや内湾気味に立ち上がる。	外面ケズリ。内面調整不明。	①密 ②赤茶色 ③不良	
119-8 (889)	SI-09	高坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。外面に指頭圧痕残る。接続部内面にシボリ痕残る。	①1~2mm砂粒少量含む ②明茶色 ③やや不良	
119-9 (906)	SI-09	高坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。外面に指頭圧痕残る。	①2mm大の砂粒少量含む ②内面淡黄土色 ③外面黄明茶色 ④普通	
119-10 (889)	SI-09	高坏 (土師器)		坏底部。接続部内側に穿孔有り	内外面共ナデ調整。外側に指頭圧痕有り。	①1mm大の砂粒少量含む ②明茶色 ③やや不良	
119-11 (885)	SI-09	高坏 (土師器)	④8.5	ほぼ垂直な脚柱部から外傾する脚底部。	外面ナデ調整。内面シボリ痕有り。	①1mm大の砂粒少量含む ②黄淡茶色 ③やや不良	
121-1 (2550)	SI-12	甕 (土師器)	①18	頸部は緩やかにカーブし、口縁部外反して伸びる。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。外面ハケ目残る。	①1~4mmの砂粒含む ②外面淡茶褐色 ③内面淡茶黄土色 ④良好	外面炭化物付着
121-2 (2548)	SI-12	甕 (土師器)	①30.6	頸部は緩やかにカーブし、口縁部外反して伸びる。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒多量含む ②淡黄土色 ③不良	外面黒斑付着
121-3 (2550)	SI-12	甕 (土師器)		角状の把手で、屈曲して上方に伸びる。	内外面共ナデ調整。取手接合部分に指頭圧痕残る。	①1~3mmの砂粒含む ②淡朱茶色 ③良好	外面黒斑付着
121-4 (2542)	SI-12	高坏 (土師器)	④8	外反して開く脚底部。	内外面共ナデ調整。	①密 ②赤茶色 ③良好	
121-5 (2901)	SI-13	甕 (土師器)	①18.2	口縁部の屈曲が明瞭に残る。口縁で屈曲後、更に端部で屈曲。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。内面に指頭圧痕残る。	①1mm以下の砂粒含む 粗 ②黄茶褐色 ③やや不良	外面煤付着
124-1 (3054)	SI-16	甕 (土師器)	①15.6	稜の残る退化複合口縁。口縁はやや外傾して伸びる。	内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含む 密 ②淡褐色 ③普通	
124-2 (3495)	SI-16	甕 (土師器)	①17.8	頸部は「く」の字に屈曲。口縁部は内湾気味に外傾し、端部内側に肥厚。	内外面共ナデ調整。	①緻密 ②淡茶色 ③良好	外面炭化物付着

挿図- 遺物番号 (取上番号)	出土遺構	種類・器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
124-3 (3495)	SI-16	甕 (土師器)	①11.8	頸部は「く」の字に屈曲。口縁部は内湾気味に外傾。端部肥厚。	内外面共ナデ調整。外面にハケ目。	①2~3mm砂粒多含む 密 ②淡茶色 ③普通	外面黒斑付着
124-4 (3042)	SI-16	甕 (土師器)	①16.2	やや内湾気味に外傾する口縁。外面に複合口縁の名残が微かに残る。	内外面共ナデ調整。	①1~2.5mmの砂粒含む ②淡黄土色 ③不良	
124-5 (3045)	SI-16	甕 (土師器)	①11.7	内湾気味に立上がり、口縁端部で屈曲し直立。端部やや肥厚。	内外面共ナデ調整。	①1mm大の砂粒含む ②暗茶色 ③不良	
124-6 (3239)	SI-16	甕 (土師器)	①15.6	口縁部の屈曲が明瞭に残る。端部は若干短くやや外反気味に直立。	内面頸部より上ナデ調整、下ケズリ。外面調整不明。	①1~2.5mmの砂粒多含む ②淡黄色 ③良好	
124-7 (3451)	SI-16	甕 (土師器)	①16	「逆ハ」の字に開く口縁で、口縁部の屈曲が僅かに残る。	内外面共ナデ調整。	①1~4mmの砂粒多量含む ②茶褐色 ③不良	
124-8 (3479)	SI-16	甕 (土師器)	①12	外傾して伸びる口縁で、口縁部に僅かに屈曲残る。肩はあまり張らない。	口縁部内外面共ナデ調整。外面ハケ目、内面ケズリ。	①1~4mmの砂粒含む ②淡灰白色 ③良好	
124-9 (798)	SI-16	甕 (土師器)	①17.8	「逆ハ」の字に開く口縁で、口縁部の屈曲が僅かに残る。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①2~3mm砂粒多量含む ②淡褐色 ③不良	
124-10 (3048)	SI-16	甕 (土師器)	①15.6	外傾して伸びる口縁で、端部で更に外側に屈曲。口縁部に僅かに屈曲残る。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mm砂粒多量含緻密 ②淡灰色 ③良好	
124-11 (3479)	SI-16	壺 (土師器)	①16	大きく開いた後、口縁端部で上方に屈曲し外傾。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②淡黄灰色 ③やや不良	
124-12 (3053)	SI-16	甕 (土師器)	①12	頸部から外反して伸びる口縁で、端部はつまみ出す。	内外面共ナデ調整。	①0.5~2mmの砂粒多量含 ②淡黄土色 ③やや不良	外面黒斑付着
124-13 (3304)	SI-16	壺 甕 (土師器)		大きく張る胴部の様相を示す肩部。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~6mm白色砂粒多量含 ②淡黄土色 ③普通	
124-14 (3277)	SI-16	坏 (土師器)	①12	直立して立ち上がる口縁。	内外面共調整不明。	①1~2mmの砂粒少量含む ②黄褐色 ③不良	内面および口縁端部に黒斑付着
124-15 (3498)	SI-16	坏 (土師器)		内湾して立ち上がる。	内外面共ナデ調整。	①1mmの砂粒少量含む ②淡黄褐色 ③不良	
124-16 (3051)	SI-16	坏 (土師器)	①12	わずかに内湾して立ち上がる。	内面ナデ調整。外面調整不明。	①1~2mmの砂粒含む ②赤茶色 ③不良	外面黒斑付着
124-17 (3477)	SI-16	坏 (土師器)	①14	やや内湾気味に立上がり、口縁端部はわずかに内側に入る。	内外面共調整不明。	①1mm大の砂粒少量含む ②淡茶色 ③やや不良	
124-18 (3346)	SI-16	坏 (土師器)	①10	内湾して立ち上がる。	内外面共調整不明。	①密 ②乳白色 ③不良	
124-19 (3480)	SI-16	高坏 (土師器)		外傾した後、裾部で大きく外反して開く脚部。	外面ナデ調整。内面シボリ痕有り。	①密 ②黄明茶色 ③普通	
124-20 (3036)	SI-16	高坏 (土師器)		直線的にやや外傾して開く脚部。	外面調整不明、指頭圧痕残る。内面シボリ痕有り。	①粗 ②明茶色 ③普通	
124-21 (3475)	SI-16	高坏 (土師器)		やや外反気味に開く脚部。	表面剥離のため調整不明。	①密 ②黄茶色 ③やや良	
124-22 (3059)	SI-16	高坏 (土師器)		坏底部。	内外面共ナデ調整。	①2mm以下の砂粒含む ②淡褐色 ③やや不良	
124-23 (3499)	SI-16	低脚坏 (土師器)	①10.2 ② 5.7 ④ 5.2	坏部はすり鉢型で、脚柱部は無く、脚底部は内湾気味に開く。	内外面共ナデ調整。	①1~3mmの砂粒少量含む ②淡黄灰色 ③やや良 ③普通	内外面黒斑付着
124-24 (3478)	SI-16	高坏 (土師器)		「ハ」の字に開き更に外傾する脚底部。	内外面共調整不明。	①砂粒少量含む ②黄茶色 ③不良	
124-25 (3277)	SI-16	甌 (土師器)		角状の把手で、緩やかに湾曲して上方に伸びる。	内外面ナデ調整。	①1~3mmの砂粒含む ②淡灰白色 ③良好	
124-26 (3055)	SI-16	坏蓋 (土師器)	①12	口縁部はほぼ直立に伸びる。明瞭な後が残る。	内外面共ナデ調整。	①密 ②灰白色 ③良好	天井欠損
126-1 (3338)	SI-17	甕 (土師器)	①19.4	稜の残る退化複合口縁で、口縁は外反して伸びる。	外面ナデ調整。内面剥離の為調整不明。	①1~2ミリの砂粒含む ②淡黄茶色 ③やや粗	
126-2 (3329)	SI-17	甕 (土師器)	①16	外反して伸びる口縁。	内外面共ナデ調整。	①0.5~1mmの砂粒多量含 ②茶褐色 ③やや悪い	
126-3 (3308)	SI-17	甕 (土師器)	①21.6	頸部は「く」の字に屈曲。口縁部は外反して伸びる。肉厚。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①0.5~2mmの砂粒含む ②淡茶黒色 ③やや粗	
126-4 (3309)	SI-17	甕 (土師器)	①21.6	頸部は「く」の字に屈曲。口縁部は外反して伸びる。肉厚。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。内面に指頭圧痕残る。	①1~3mmの砂粒多量含む ②内面淡茶色 外面淡茶褐 ③やや粗	
126-5 (3312)	SI-17	甕 (土師器)	①19.8	口縁部の屈曲が明瞭に残る。口縁で屈曲後、更に端部で外方に屈曲。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①2mm以下の砂粒多量含む ②淡黄茶色 ③不良	外面煤付着
126-6 (3311)	SI-17	甕 (土師器)		外反する口縁に続く頸部。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒少量含む ②淡黄茶色 ③やや不良	
126-7 (3339)	SI-17	壺 (土師器)		ほぼ垂直に伸びる口縁に続く頸部。	内外面共調整不明。	①1~3mmの砂粒含む ②淡黄茶色 ③不良	
126-8 (3310)	SI-17	短頸壺 (須恵器)	①14	外傾する口縁。丸味のある胴部の様相を成す。	内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒含む ②外面暗灰色 内面灰色 ③良好	
126-9 (3308)	SI-17	甕 (土師器)	①29	頸部から大きく外傾して開く。	内面頸部より下ケズリ。他内外面共ナデ調整。	①1~2mmの砂粒多量含む ②淡茶色 ③やや不良	外面煤付着
126-10 (3309)	SI-17	蓋 (須恵器)	① 6.2	輪状つまみ有す。	内外面共ナデ調整。	①1mm以下の砂粒少量含む ②淡黄茶色 ③やや不良	
126-11 (4107)	SI-17	坏身 (須恵器)	①12	やや内湾気味に立上がり、口縁部は直立。底部は平坦。	内外面共ナデ調整。	①2mm大の茶色砂粒含む ②茶色 ③良好	底部欠損

付表2 土坑一覧表 (山田遺跡、研石山遺跡)

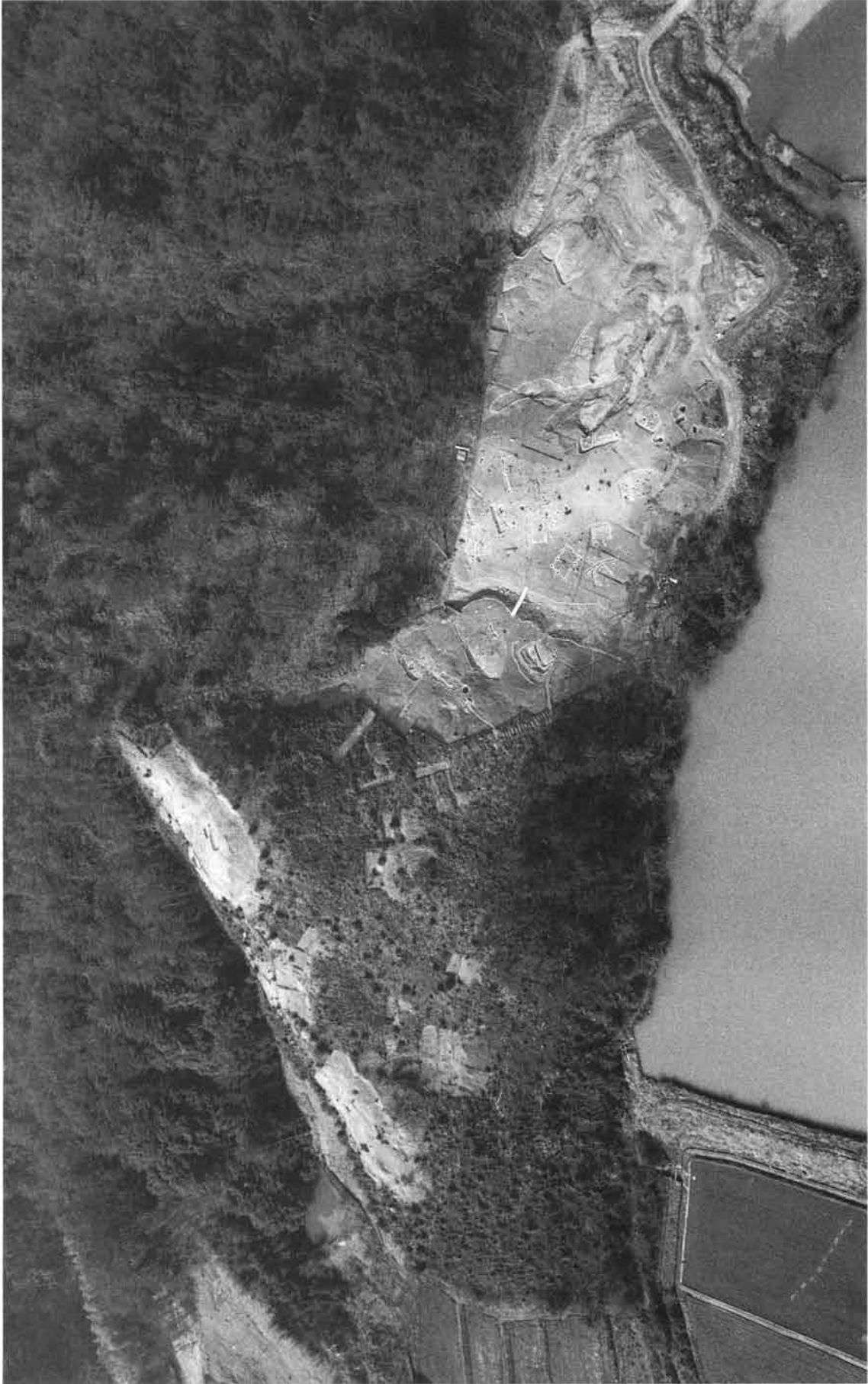
土坑番号	平面形	規模 (cm)		主軸方位	上縁標高(m)	備考	(時代)(形態)
		長軸×短軸-深さ	底面長×短				
山田1区							
S K01	円形	125×120-25	78×70	---	24.45		平安 E
S K02	円形	145×126-26	90×64	---	24.45		平安 E
S K03	円形	148×143-35	130×106	---	24.4		平安 E
S K04	円形	75×65-15	35×35	---	24.75		平安 E
S K05	楕円形	115×90-25	98×73	---	24.95	砥石、石	平安 E
S K06	円形	145×125-28	115×88	---	24.75	土師皿・坏、石	平安 E
山田2区							
S K01	楕円形	166×112-45	128×67	N-12°-E	33.05		G
S K02	不整長方形	210×150-56	160×90	N-12°-W	33		G
S K03	不整長方形	260×100-45	210×40	N-81°-W	31.4		G
S K04	楕円形	130×75-25	110×55	---	33		E
S K05	円形	150×120-36	54×45	N-68°-E	30.95	SI01に切られる	E
S K06	円形	×	×	---	---	SB01に付随 焼土・炭	E
S K07	円形	150×130-62	170×150	N-22°-E	33.30	袋状貯蔵穴	弥生後期 D
S K08	隅丸長方形	136×100-110	85×63	N-1°-E	33.5	落し穴	縄文 B
		136×100-30	16×18				
S K09	円形	75×(75)-24	55×55	---	33.25		E
S K10	円形	105×94-35	80×56	N-33°-W	33.95		E
S K11	楕円形	104×74-47	65×40	N-88°-W	34.75	落し穴	縄文 D
		104×74-33	×				
S K12		×	×			炭混じり	E
S K13	楕円形	91×70-50	97×66	N-72°-E	31.45		A
S K14	隅丸方形	286×284-135	235×188	N-19°-W	36	埋土絞まり無し 近世神社関係?	F
S K15	楕円形	126×115-100	80×63	---	34.95	落し穴	縄文 B
		126×115-110	70×54			2回堀込み使用	
S K16	不整円形	340×273-60	×	N-60°-E	34.45	風倒木土坑? 上方に炭	縄文? F
S K17	円形	250×230-250	75×65	---	35.85	落し穴	縄文 C
S K18	円形	115×110-100	65×58	---	33.85		B
		115×110-30	×				
S K19	不整形	235×165-30	×	---	36	重複	G
S K20	円形	345×320-80	257×190	N-11°-E	37.35	風倒木土坑?	縄文? F
S K21	楕円形	148×112-25	110×45	N-42°-W	38.45		縄文下層 E
S K22	円形	82×78-50	70×65	N-55°-W	31.28		縄文下層 A
S K23	丸形	108×100-125	55×55	N-36°-W	32.45		A
S K24	長方形	135×100-15	115×75	N-32°-W	30.40		E
S K25	丸形	85×73-17	70×69	---	34.90		A
S K26	円形	×	170×150	N-54°-E	41.30	袋状貯蔵穴	弥生中期末 D
S K27		×	×				
S K28	楕円形	108×83-32	100×60	N-11°-E	31		E
S K29	円形	100×	67×	---	29.6	土師皿	平安~中世 E
S K30	長方形	140×90-46	100×70	N-85°-E	30.35		B
		140×90-50	×				
S K31	楕円形	75×48-52	57×25	N-12°-E	30.20		古墳中期 E
S K32	円形	148×138-50	90×82	N-32°-W	32.78		A
S K33	円形	68×64-65	38×38	N-55°-E	33		A
S K34	楕円形	73×60-95	50×42	N-42°-E	30.75		A
S K35	隅丸方形	87×60-40	65×32	N-49°-E	31.05		E
S K36	楕円形	192×90-40	150×76	N-11°-W	42.90		E
S K37	楕円形	130×90-28	110×65	N-18°-W	42.75		E
S K38	円形	115×95-72	60×60	N-45°-E	43		A
S K39	楕円形	213×155-60	110×96	N-53°-W	38.30		E
S K40	円形	93×85-115	50×37	---	34.28		A
山田3区							
S K01	円形	175×165-105	245×245	---	50.45	袋状貯蔵穴? 土師器壺・てづくね	
					49.40 (底)	上方に炭堆積	古墳前期 D
S K02	円形	160×135-150	230×180	N-32°-E	50.85	袋状貯蔵穴? 土師器壺	
					49.25 (底)	S K10に切られる	古墳前期 D
S K03		×	×	N-68°-E			D
S K04	長方形	384×195-50	314×120	N-74°-W	37.55	9号墳周溝内主体? 石、土師器	F
S K05	(楕円形)	115×76-50	80×48	N-20°-E	37.35	黄褐色埋土 良く締まる	E
S K06	円形	165×145-30	143×120	N-86°-E	40.70		E
		165×145-45	80×43				
S K07	円形	84×80-25	55×50	---	40.40		E
S K08	楕円形	175×145-135	85×50	N-62°-W	37.10	落し穴か? 底面長方形	A
S K09	楕円形	130×100-130	70×50	N-20°-W	30.40		B
S K10	円形	180×180-	270×230	N-20°-E		袋状貯蔵穴? S K03を切る	古墳前期 D
S K11	円形	112×110-30	94×90	---			E
研石山1・4区							
S K01	楕円形	185×120-65	150×90	N-18°-W	36.85	須恵器大甕	E
S K02	円形	105×(105)-35	×	---	34.30	焼土坑	E
S K03	隅丸長方形	135×70-70	110×50	N-54°-W	38.05	陥穴	B
S K04	隅丸長方形	125×97-50	120×85	N-54°-E	37.95	陥穴	B
S K05	不整円形	600×340-40	×	---	41.5~42	炭溜り(炭焼穴か)	F
研石山2区							
S K01		170×150-130	110×60	N-10°-E	50.95		B
S K02		105×80-135	195×190	N-74°-W	50.80	袋状貯蔵穴 底方形	弥生 D
S K03		210×175-175	100×95	N-66°-E	48.60		A
S K04	入口楕円・底不正円形	195×132-175	170×160	N-64°-W	44.5	炭混土埋 階段・横穴状	G
S K05	円形	70×70-18	55×45	---	51.5		E
研石山5区							
S K04	円形	82×80-100	50×45	---	(33.5)	落し穴 底面ビット	縄文 B
S K05	円形	100×100-60	85×70	N-69°-E	30.9	落し穴 底面ビット	縄文 B
S K06	隅丸長方形	160×96-50	×	N-10°-E		落し穴 底面ビット	縄文 B
S K07	長方形	100×70-85	80×45	N-52°-W	32.0	落し穴 底面ビット	縄文 B
S K08		×	×				
S K09	楕円形	115×75-85	80×32	N-78°-E	36.9	落し穴 底面ビット	縄文 B
S K10	隅丸長方形	140×78-55	104×50	N-85°-W	35.2	落し穴 底面ビット	2回掘込 縄文 B
S K11	隅丸長方形	150×95-50	108×75	N-67°-W	36.75	落し穴 底面ビット	縄文 B
S K12		230×50-40			34.5	石積み・炭	平安~中世? G
S K13	隅丸長方形	115×110-70	110×70	N-59°-E	39.1	落し穴 底面ビット	縄文 B
S K14		×	×				
S K15	楕円形	115×80-20	90×60	N-87°-E	33.7	落し穴 底面ビット	縄文 B
S K16	円形	110×110-40	×	N-85°-E	33.5	S K04・S K15を切る	E
S K17		×	×				

A: 平面-円・楕円、断面-U字平底 B: 平面-円・方・楕円、底面ビットを持つ C: 平面-円、断面-V字尖底
 D: 袋状土坑(貯蔵穴) E: 平面-円・方・楕円、断面-浅皿状 F: 大型。平面-円・楕円、断面-U字平・丸底
 G: 平断面不定形、その他土坑



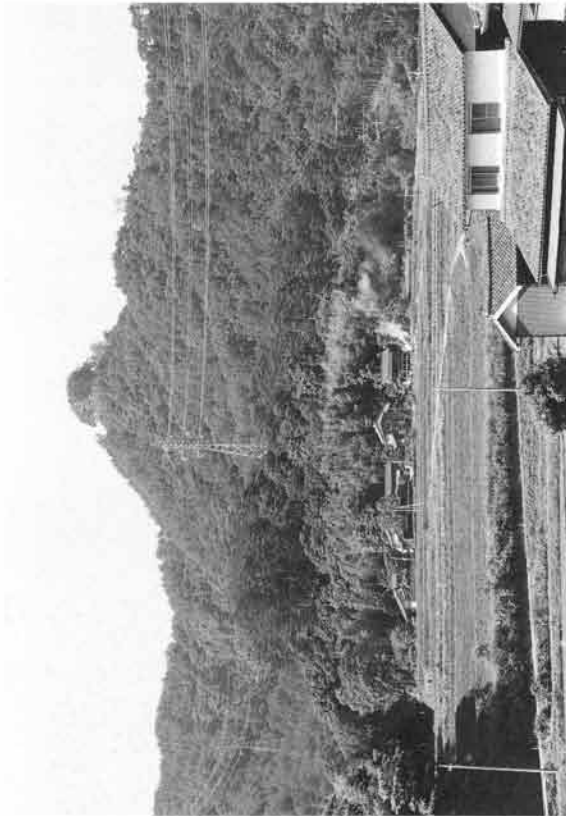
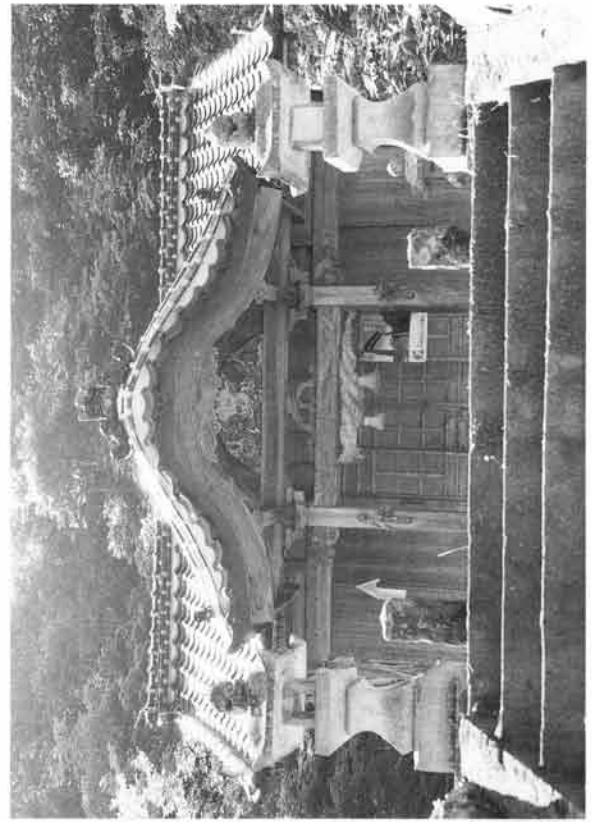
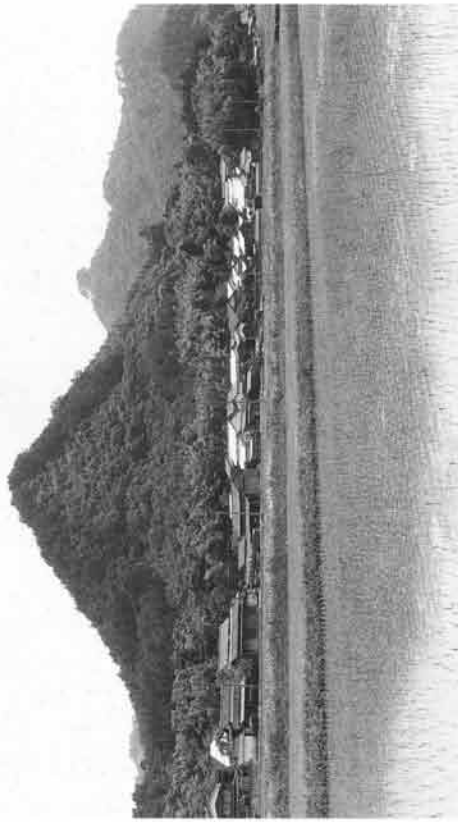
〈北〉 (研石山遺跡1区)

〈南〉 (山田遺跡2区)



(5区)

(2~4区)



要害山遠望（手前は岡集落）
新山要害山（北東より）

白山神社
岡集落と要害山



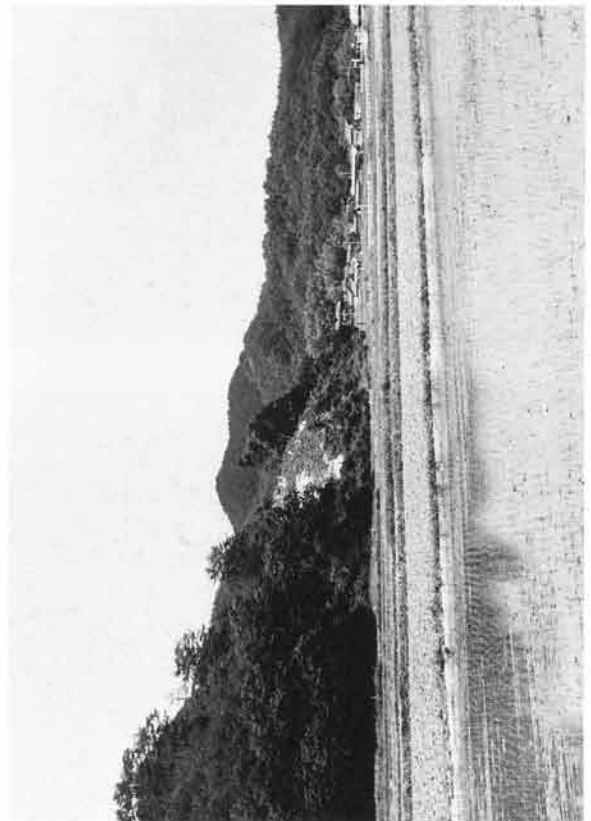
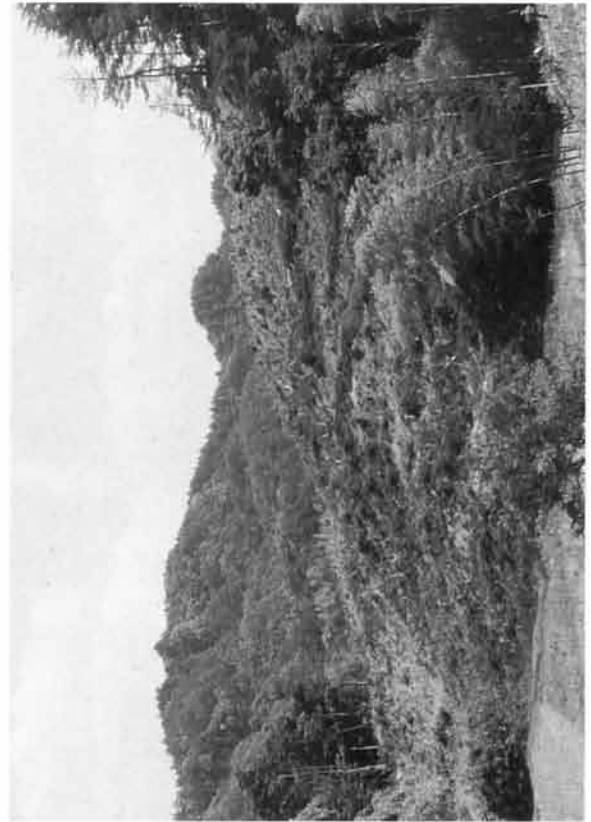
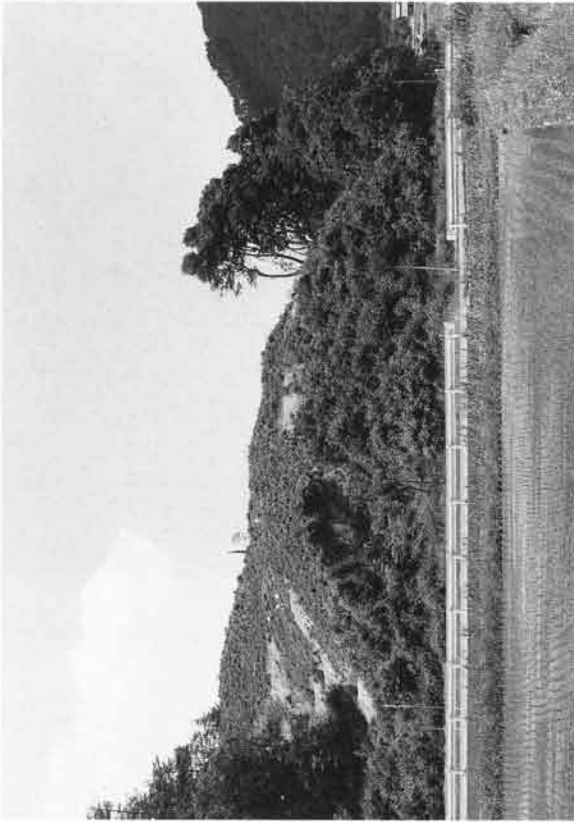
（大山遠望）



（正面 青木丘陵
右側 古市・吉谷集落）



（萱原集落）
山田古墳群上より
東方を望む

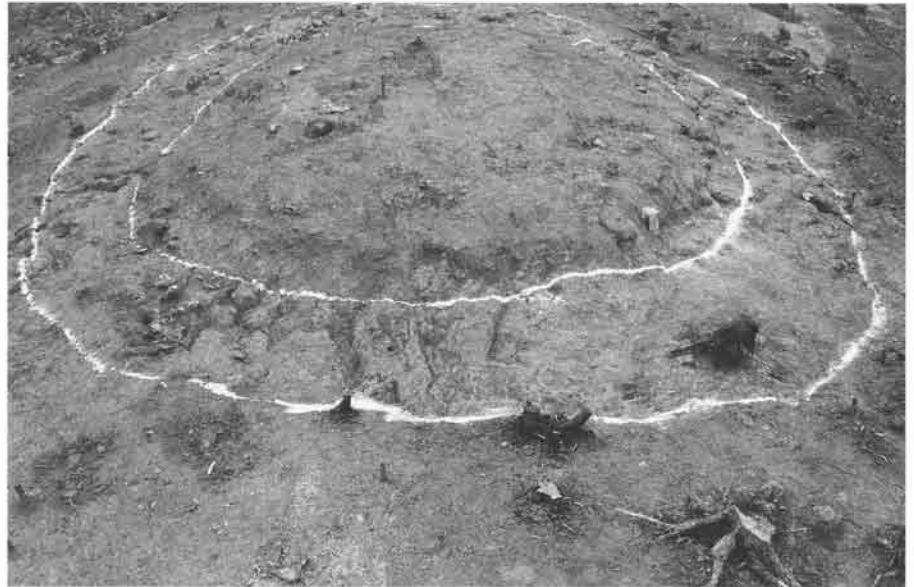


山田遺跡 (南より)
(南より)

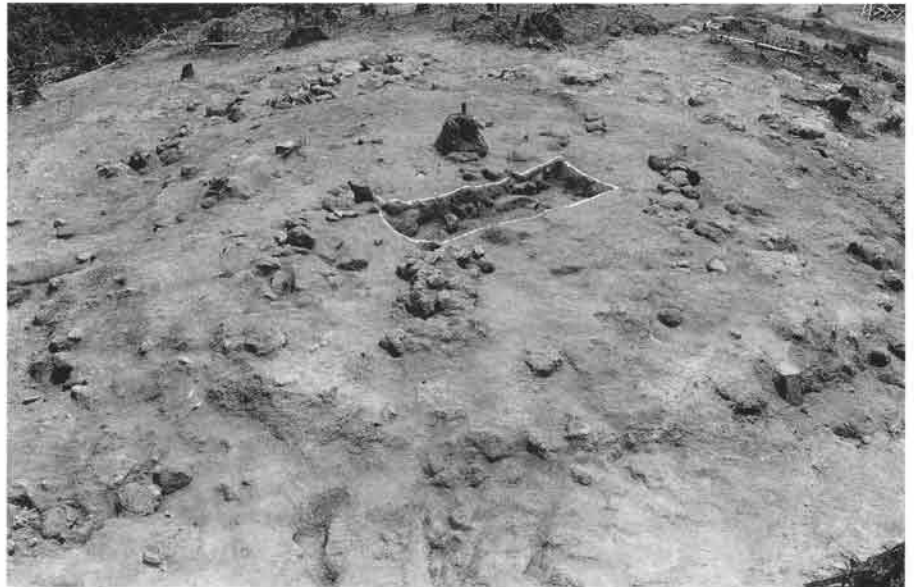
山田一区〈水田〉・3区〈古墳群〉(北より)
(南より)



古墳立地状況
(西より)



(南西より)



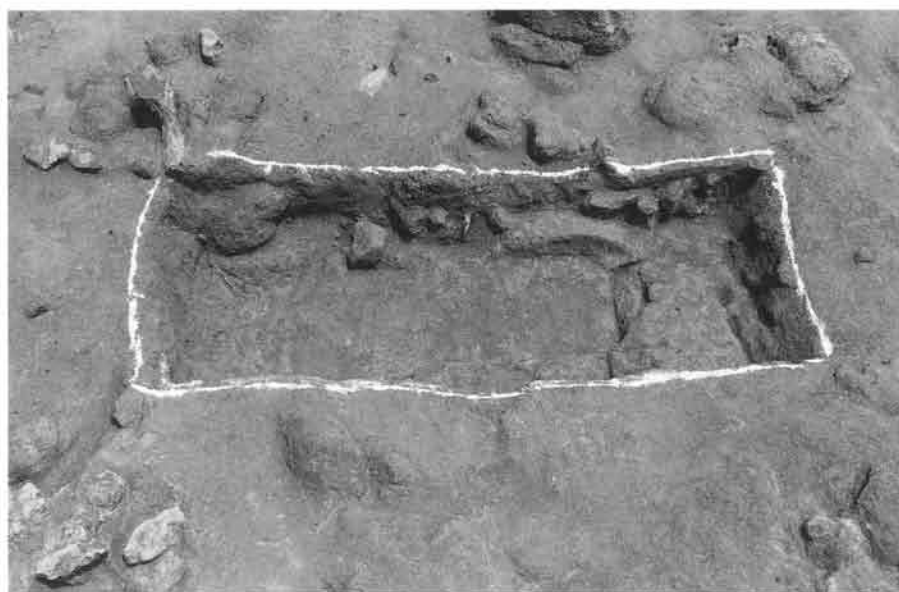
主体部→

↓周溝内遺物





(西南西より)



(南西より)



(北西より)

4号墳
3号墳
(西より)

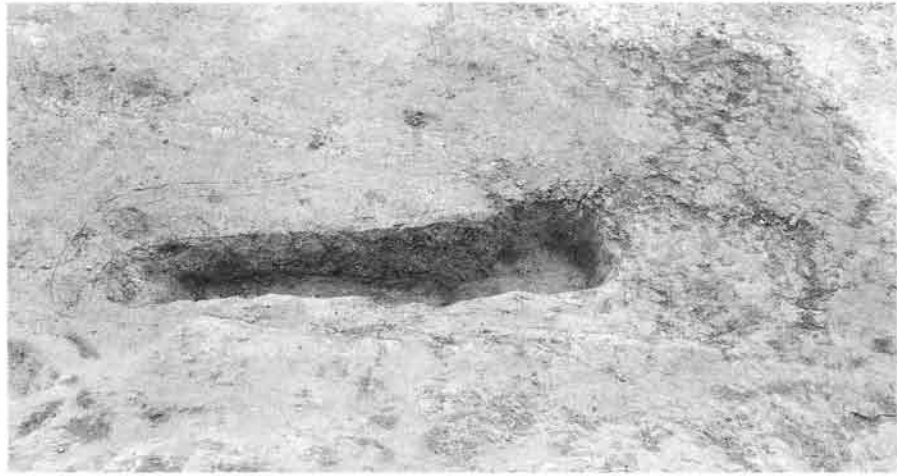


4号墳南西部
土器出土状況
(壺、高杯が中心)



高杯出土状況





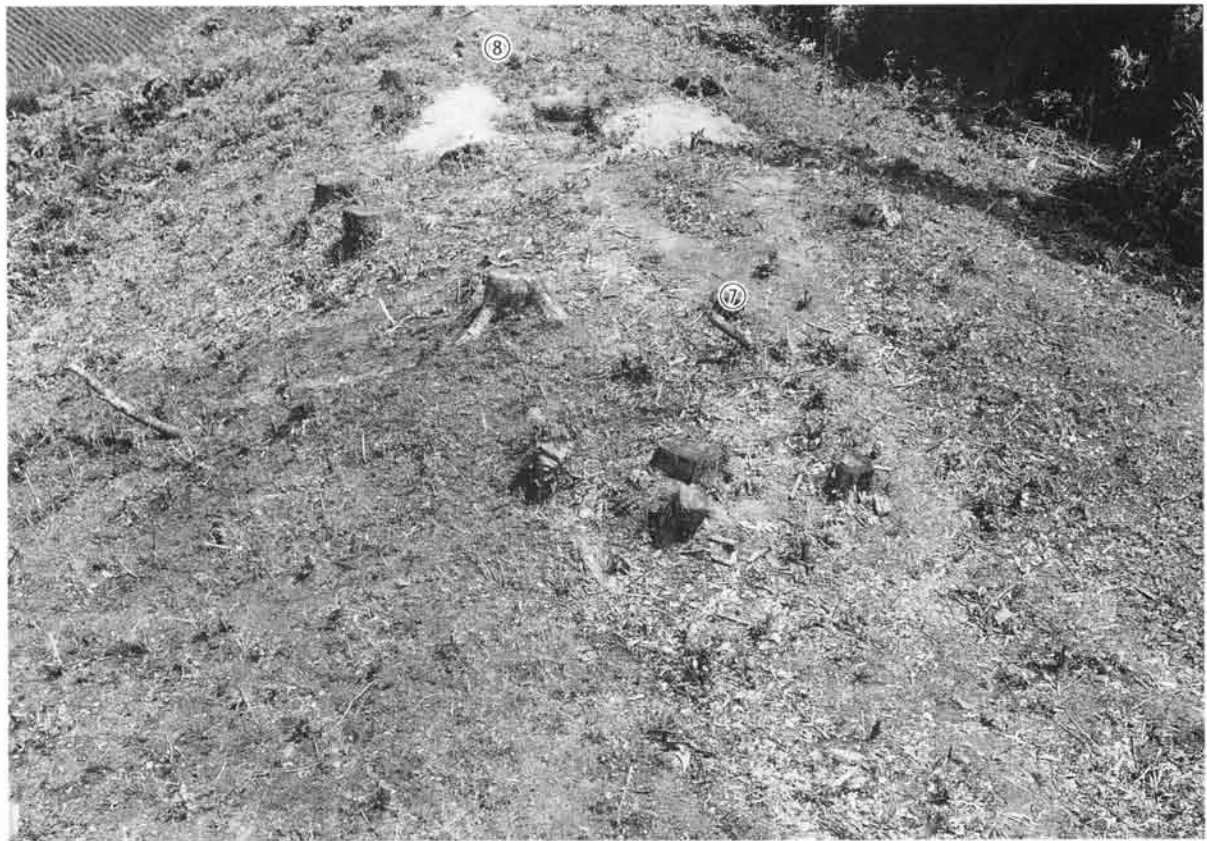
(西より)



(東より)



(南々西より)





5号墳



6号墳



10号墳

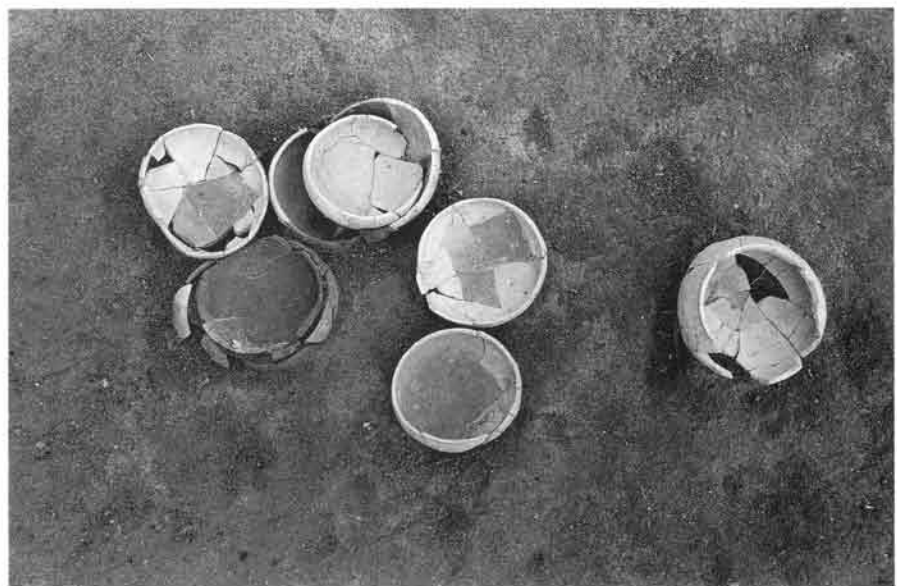
8号墳／7号墳
(西より)



7号墳周溝内遺物
(椀形土器中心)

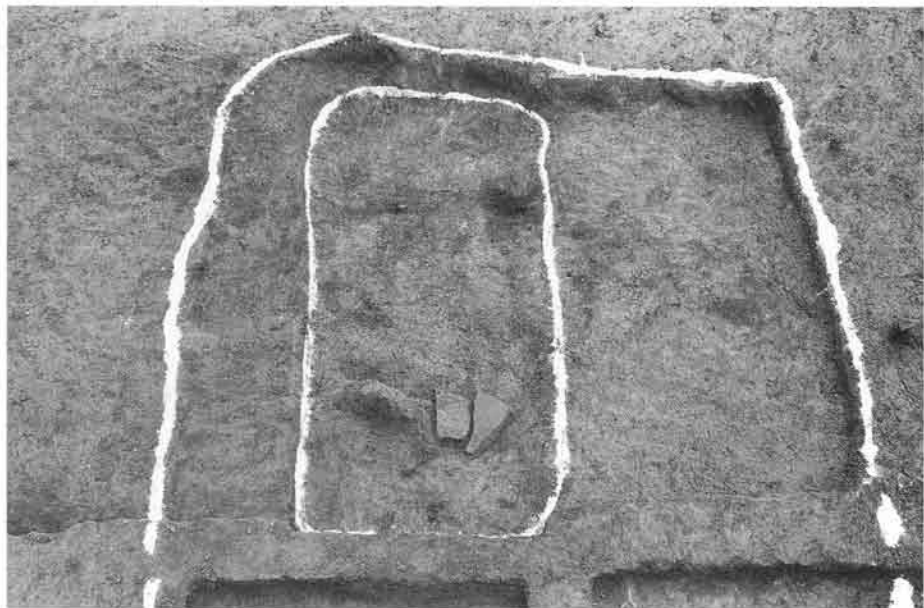


椀形土器出土状況





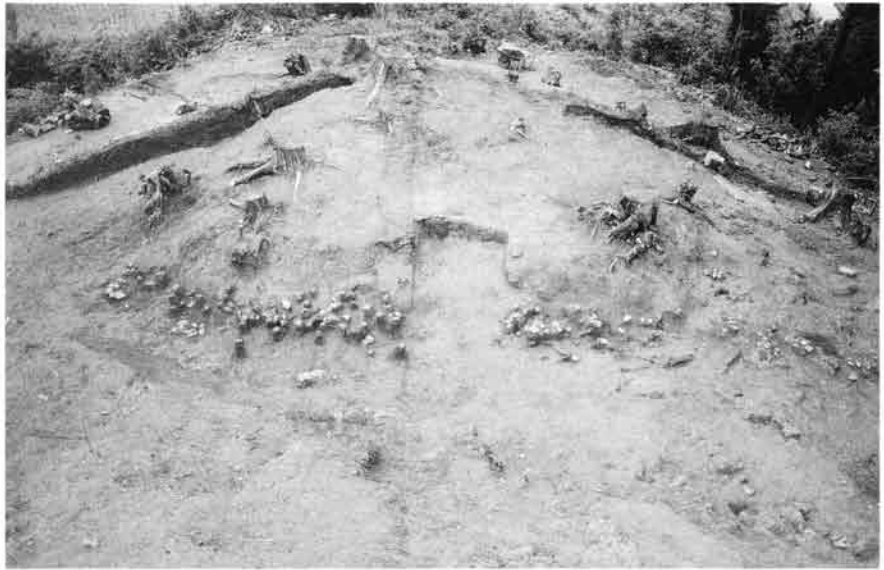
(南より)



(北より)



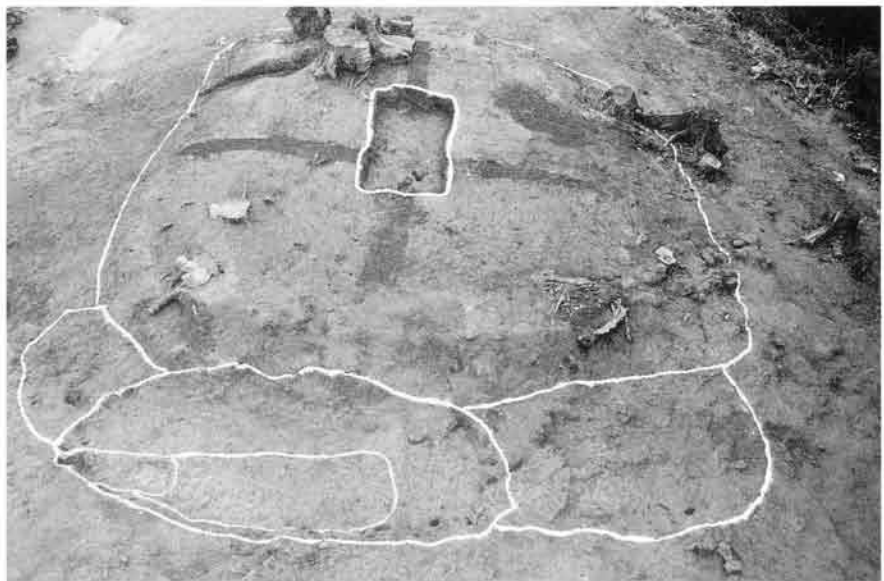
珠文鏡



全景（南々西より）



周溝墳裾遺物散布状況



主体部



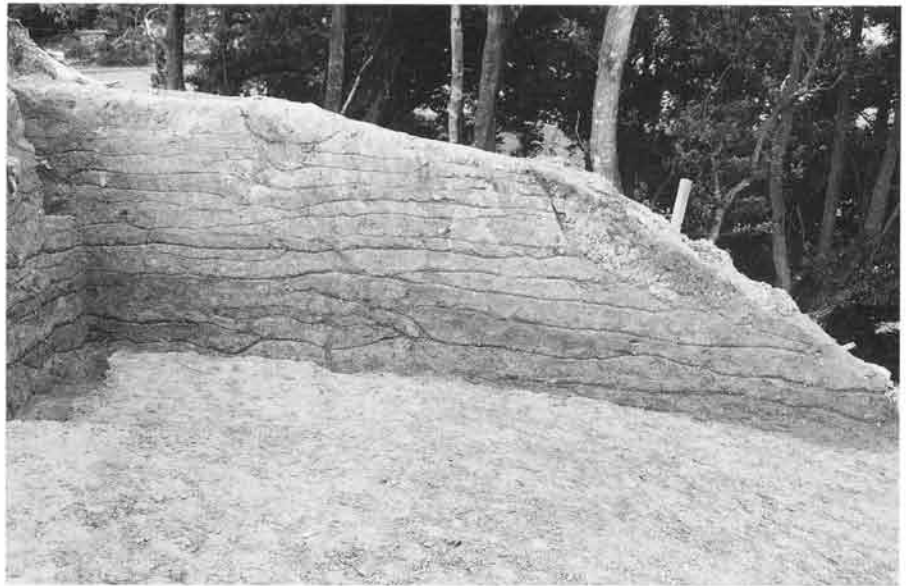
2号墳（北東より）



7号墳（東より）



4号墳（北東より）



6号墳（南西より）



4号墳（南東より）



6号墳（北東より）



羨道、羨門



玄室内



棺内



頭蓋骨



鉄刀



足部



(調査前-南東より)



(調査後)



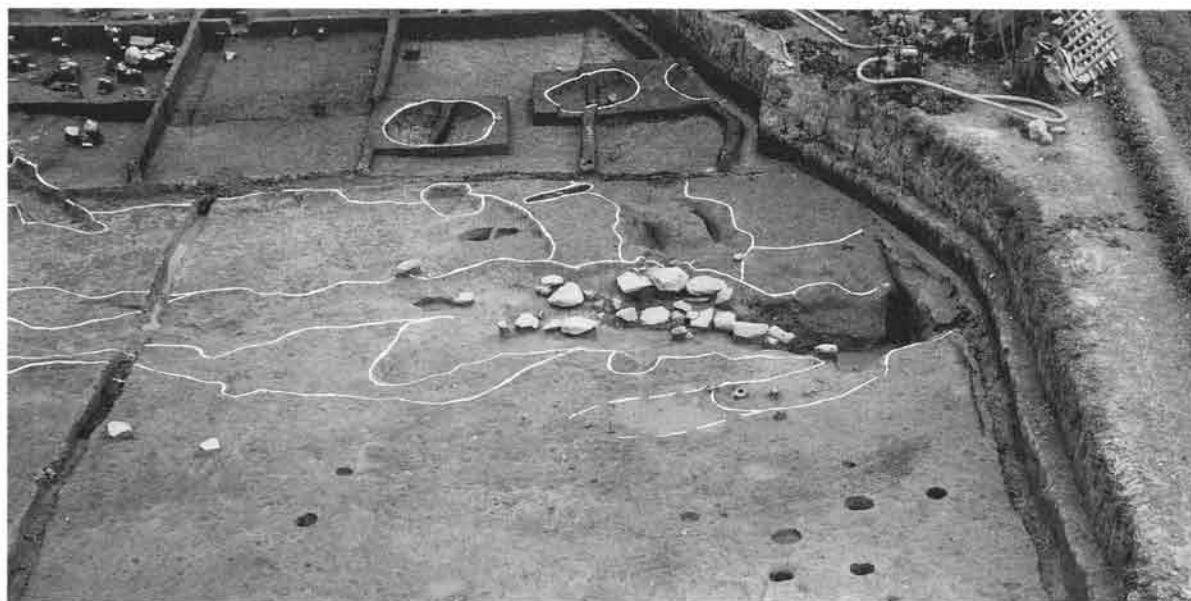
(南東より)



(西より)



遺物散布状況
(丘陵側からの流れ込み)
(西より)



流路石敷





土器溜 (古式須恵器、土師器)



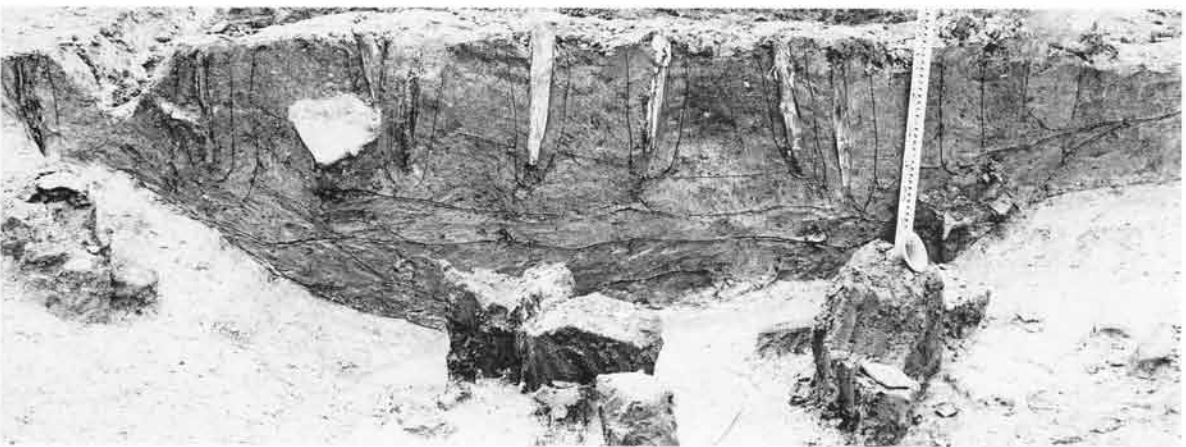
土器溜部断面



ピット群



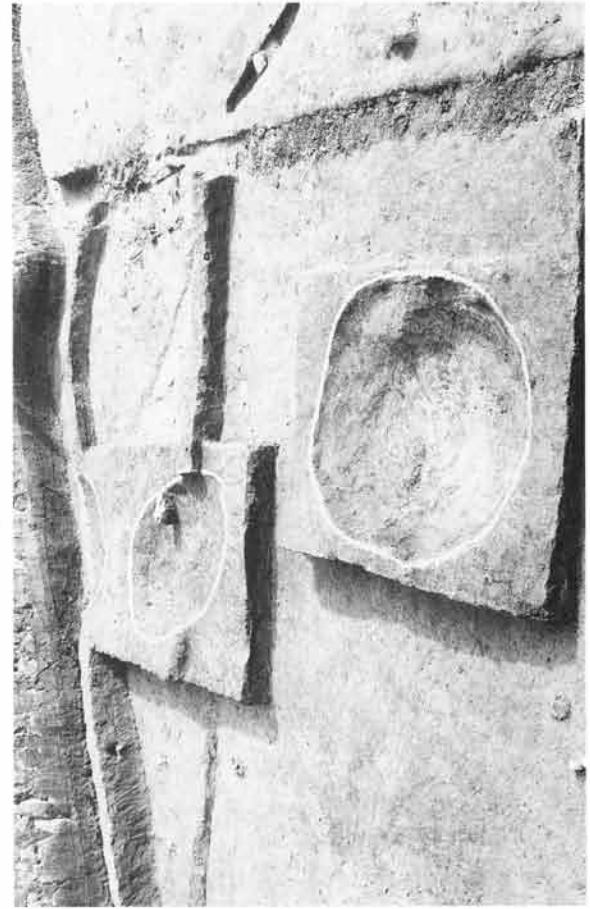
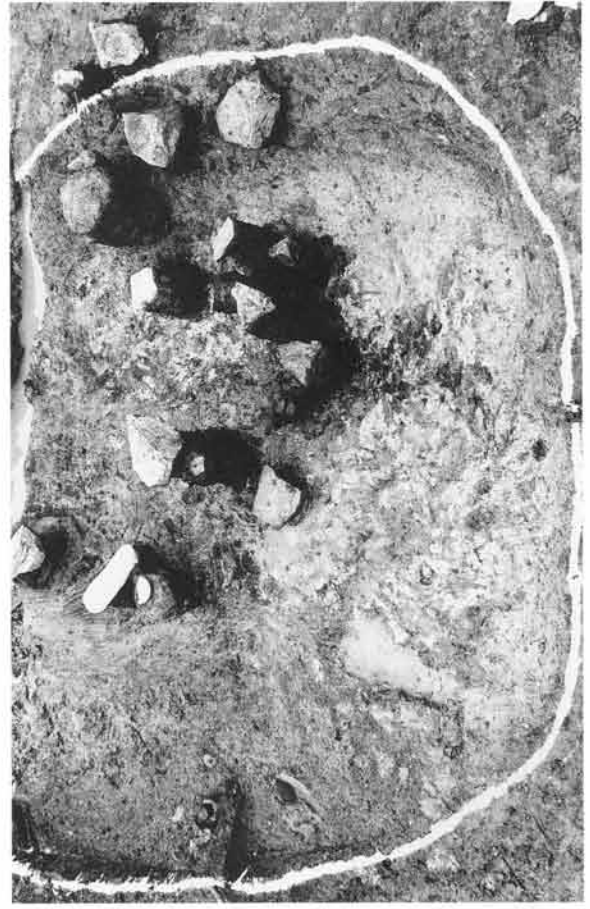
炭溜り



杭列及び水溜り部断面



土器溜り、土坑





空中写真



調査風景



北側（谷部を巡る遺構配置）



南側（小尾根部の遺構配置）

SI-19

SI-15



SI-13

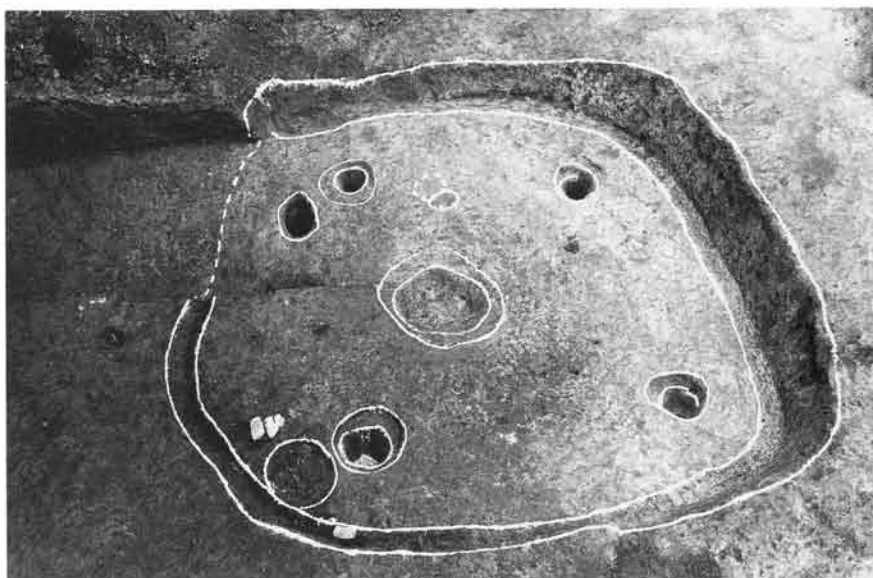
SI-14



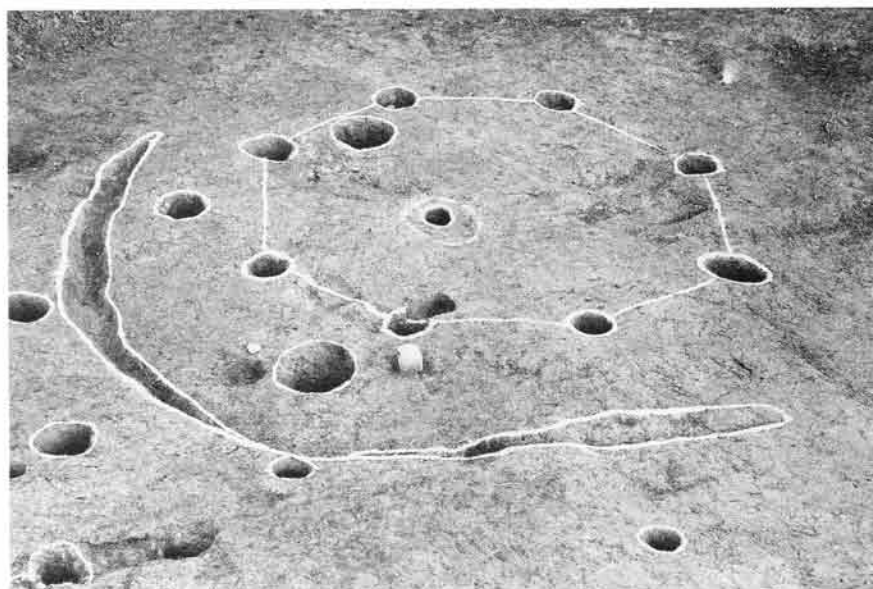
SI-17 SI-13
SI-16



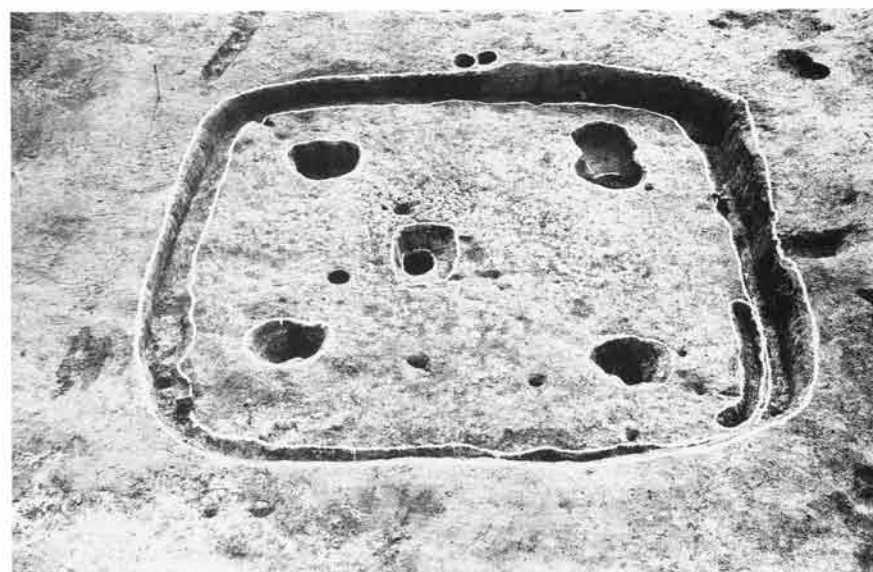
SI-01 弥生後期
(北より)



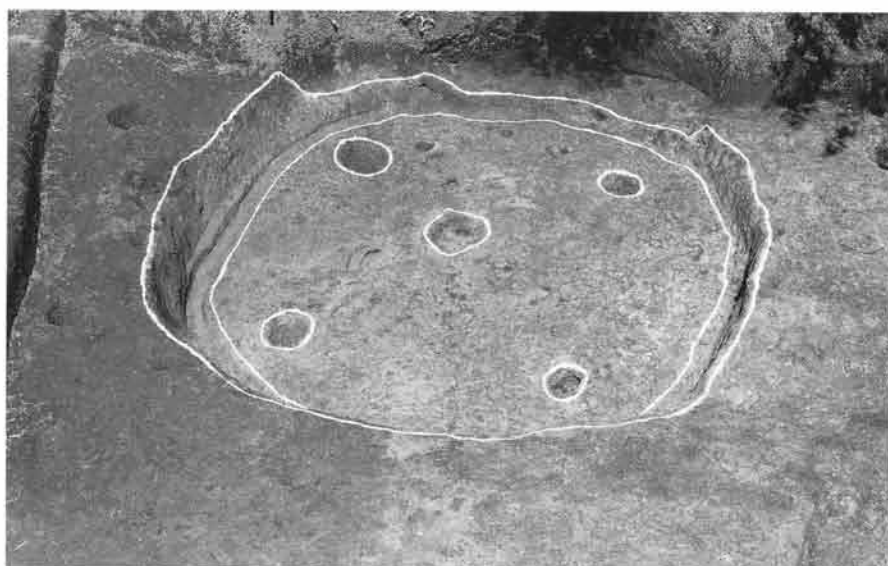
SI-03 弥生後期
SI-21 縄文?
(8本ピット)(西より)



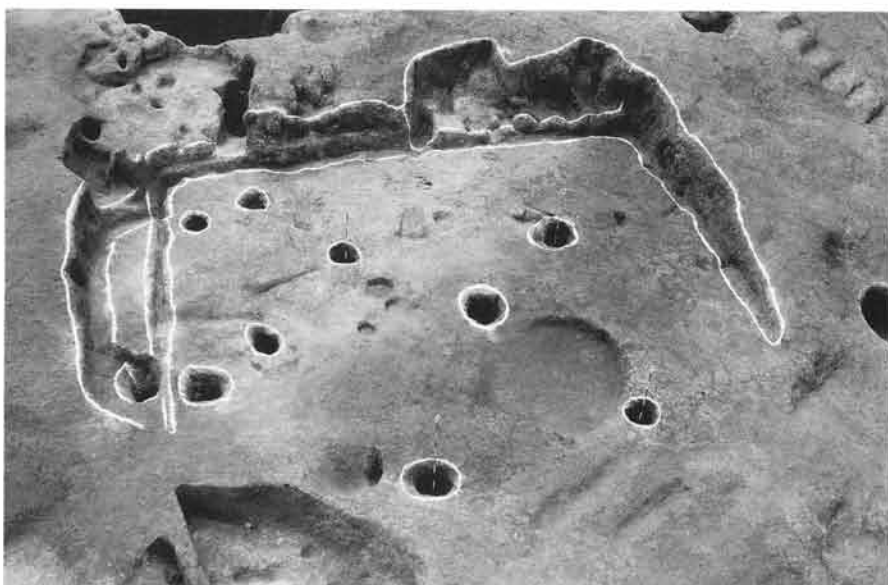
SI-02 古墳前期
(北より)



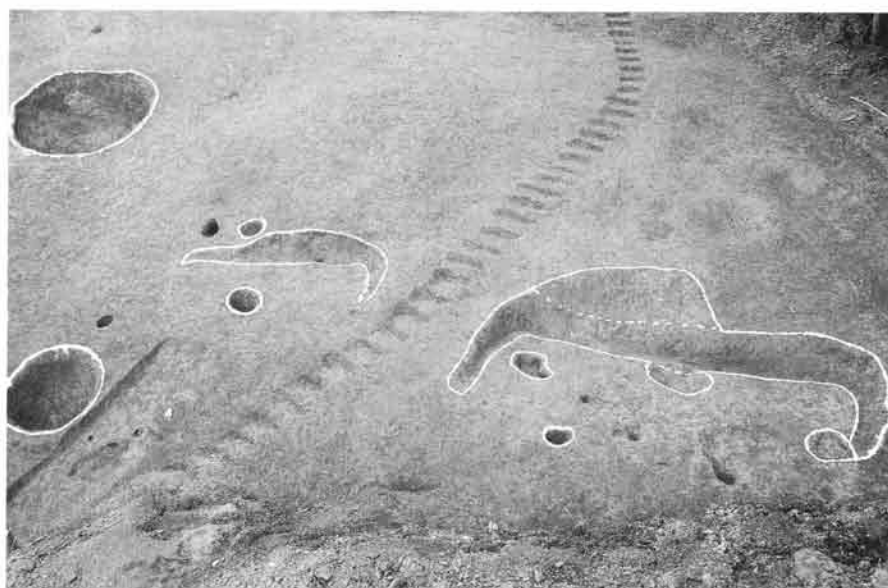
SI-17 (弥生後期)
(西より)



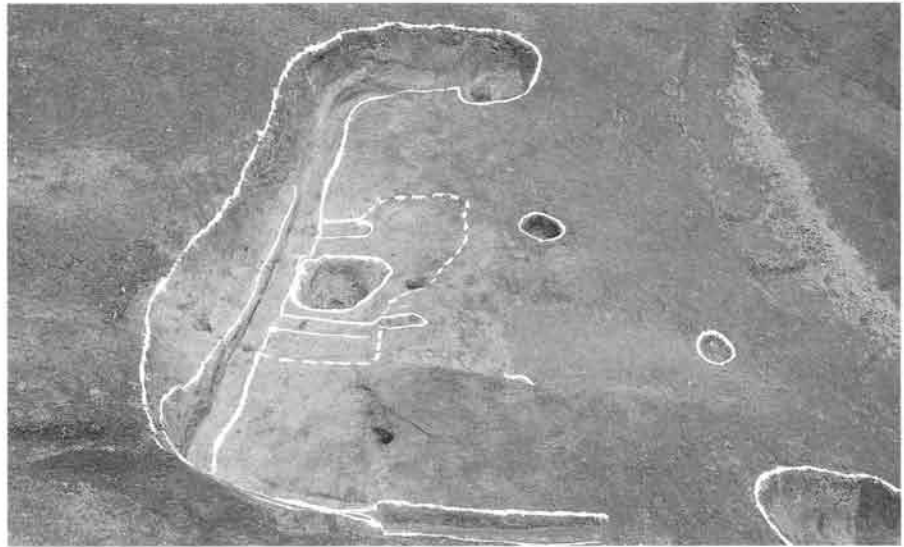
SI-08、SI-07
古墳中期
(東より)



SI-11、SI-05
古墳中期 (SI-11前期?)
(南より)



SI-12(南々東より)
(古墳時代中期前半)

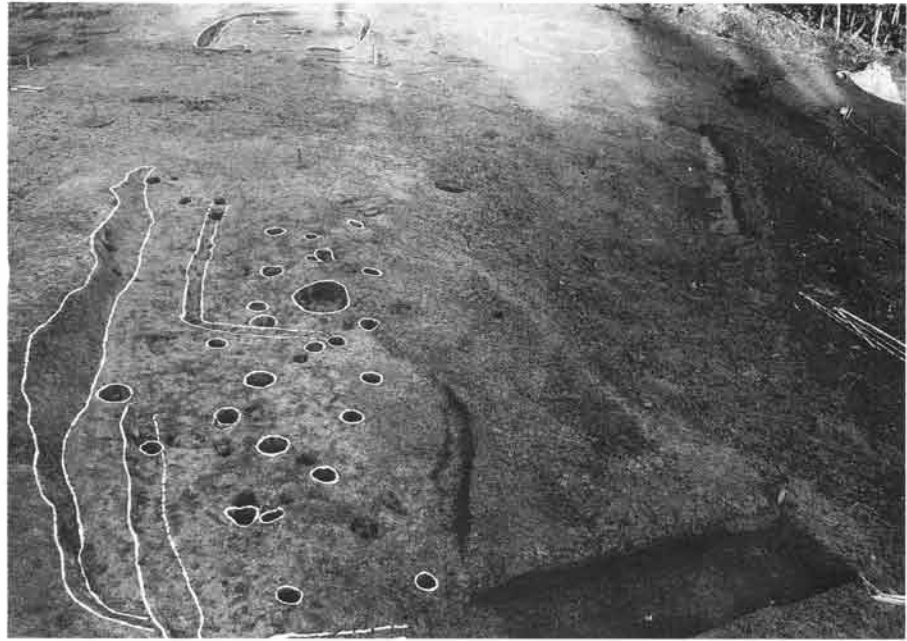


SI-15(南西東より)
(古墳時代中期後半)

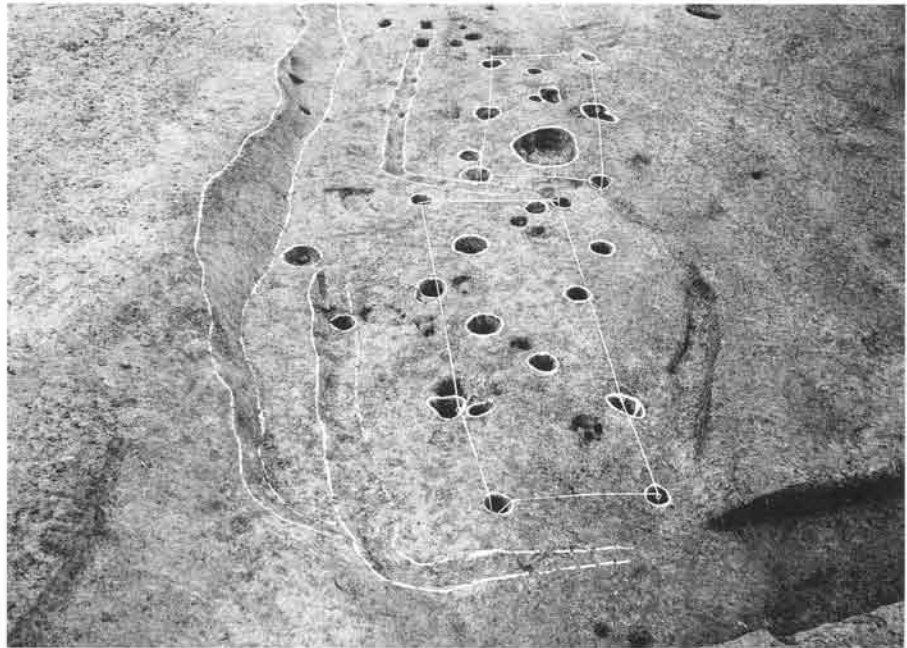


SI-16(南西より)
(古墳時代中期後半)

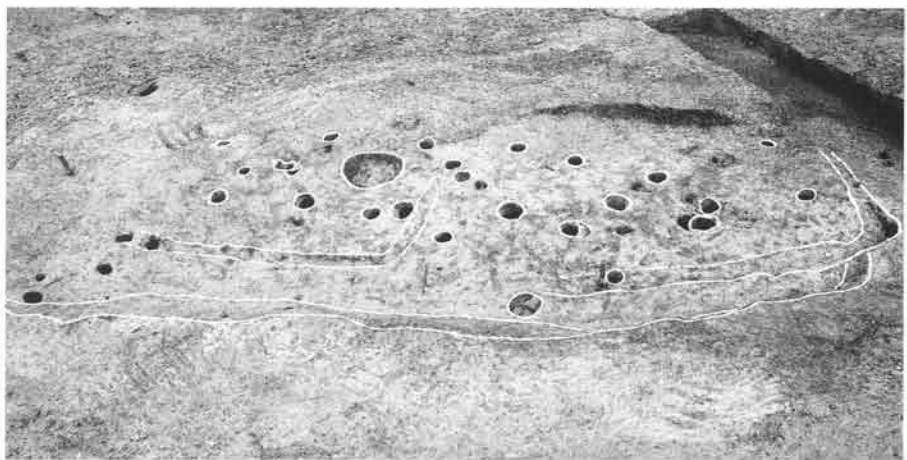




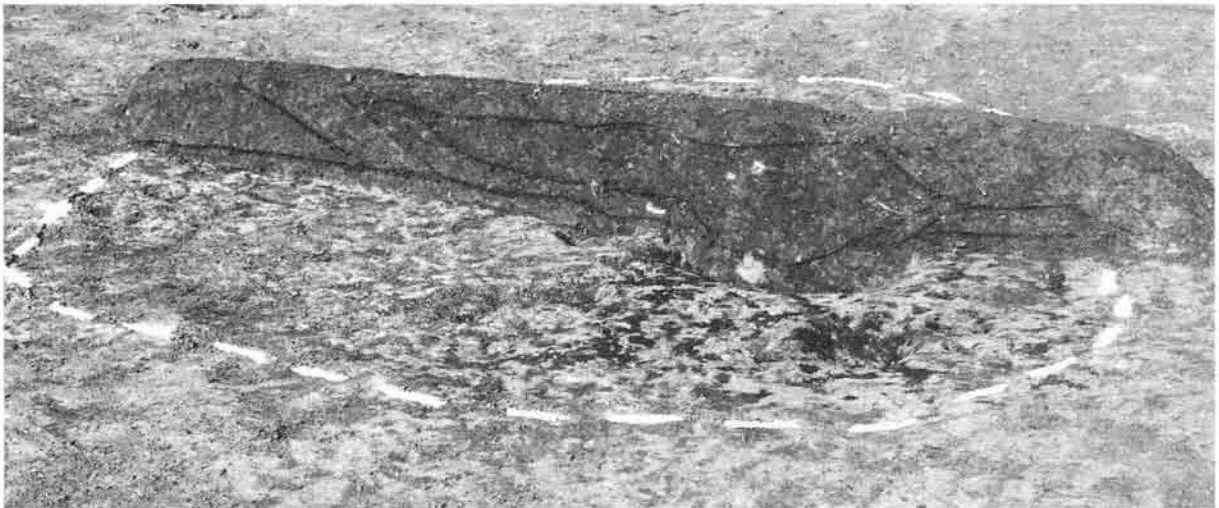
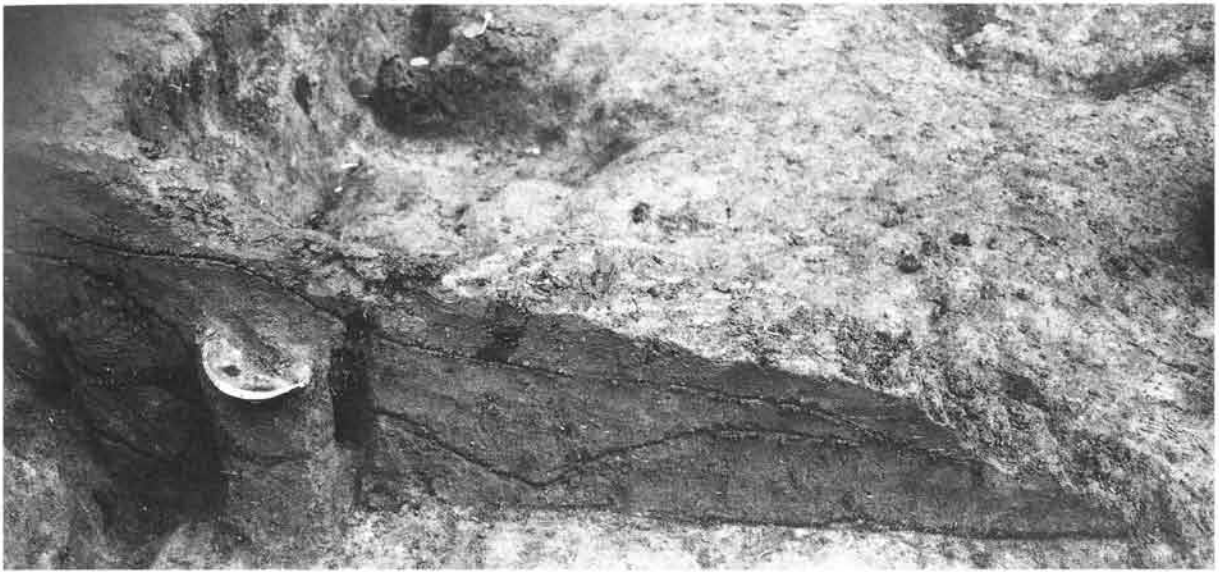
SI-04、SI-06
(SB-01、SB-02)



(南西より)



(北西より)



上：SI-05 土層断面、須恵器出土状況 下：SI-02 中央ピット断面（炭の堆積）



SI-02 遺物出土状況（南西より）



SK-07 (弥生後期)





SH-01 神社関係遺構？



石組（焚火）遺構（神社関係？）



「CT1」グリッド (D+1-C杭)



「E-2」グリッド 東面ベルト (東半)



(西より)上方は県道米子・広瀬線



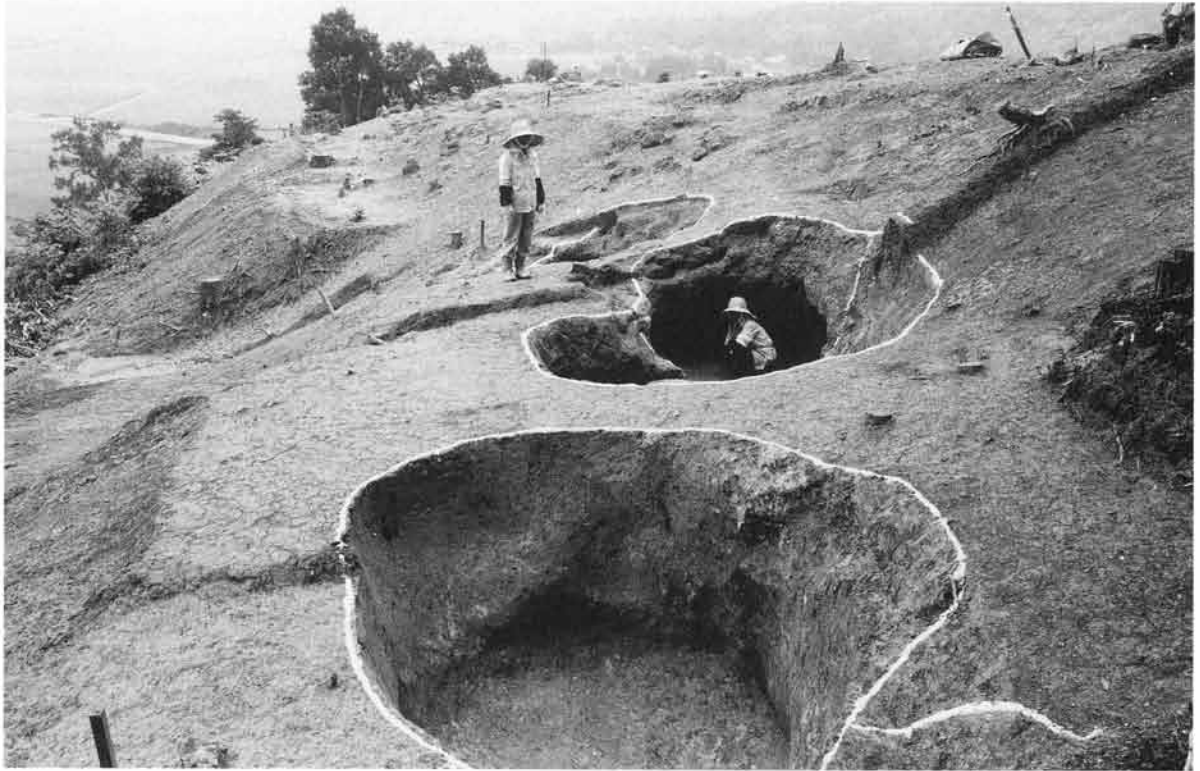
SK-09



山田3区
SK-01 古墳前期
(北より)



SK-01 上部壺出土状況



(標高約50m)



上：手前よりSK-03, SK-10, SK-02, SK01 (西より)

中左：頂部より山裾・水田を望む (南より)

中右：土坑の大きさ SK-02・SK-10

下左：手前よりSK-01, SK-02・SK-10, SK03 (東より) 下右：SK-10, SK-02 (西より)

第2テラス
遠望(北より)

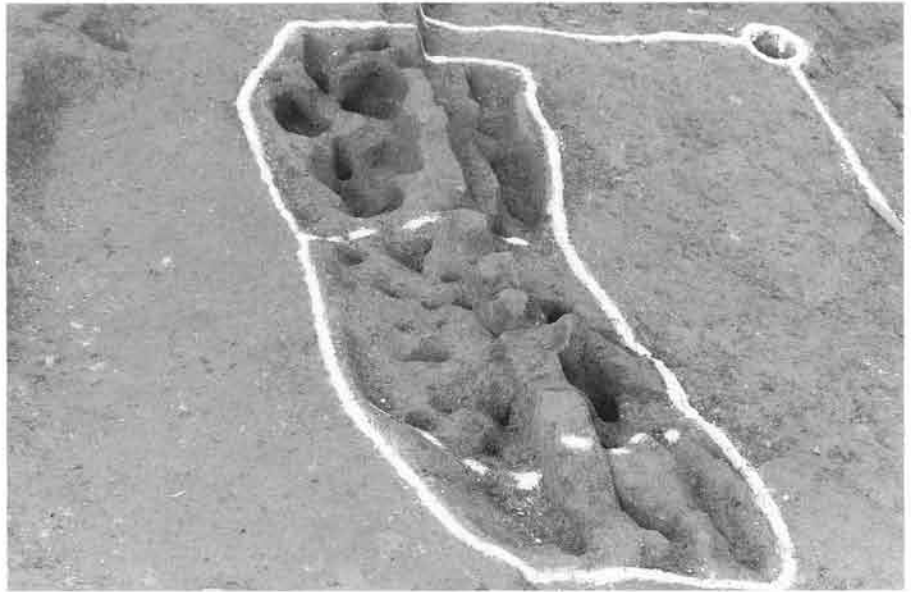


(西南西より)



SB-01とテラス
(南西より)





鍛冶炉跡



同断面図



同断面拡大

3区 (古墳・墓壇群)

2区 (弥生住居)

1区

研石山遺跡 1～3区
遠望 (南より)



→ 建物跡 (西より)

↓ (北西より)





SB-01 (北西より)



SB-02 (北より)



SI-02
SI-01
SI-04.05
(北東より)



SB-03 (北より)



(東より)



SB-03 横
遺物出土状況
須恵器、土師器鉄斧
(西より)



SS-06 (西より)



竈出土状況 (南より)



(東より)

SS-02
SD-09 SS-03
(SD-10)
(南西より)

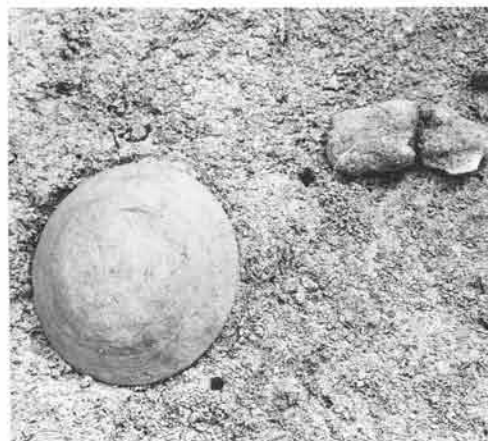


SS-03内土器
(西より)



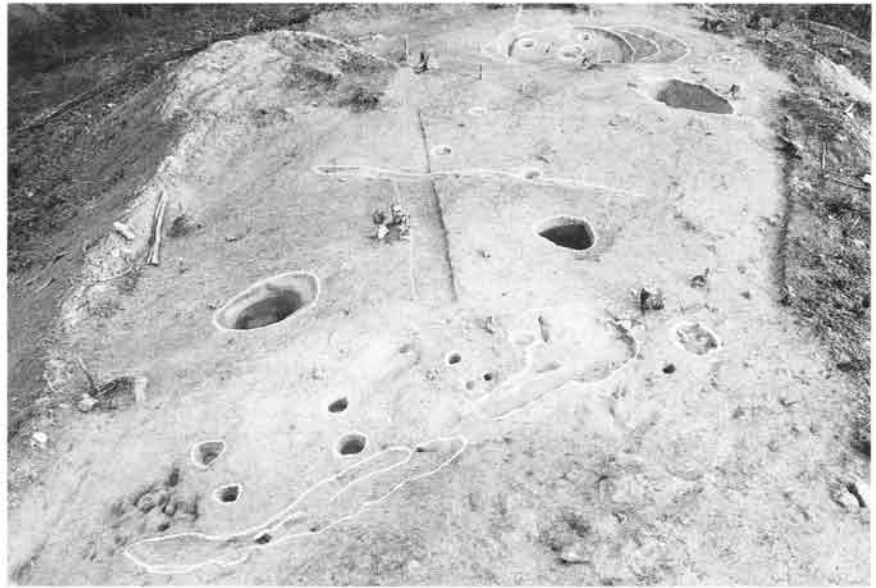
↓ (南西より)





中右：土製支脚
下右：須恵器蓋杯

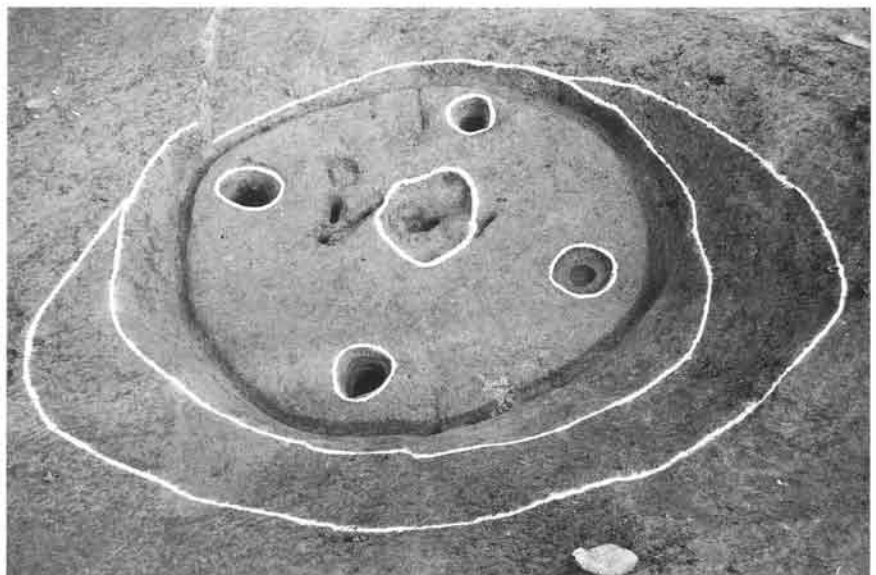
2区全景（北西より）



SB-01, 02（北西より）

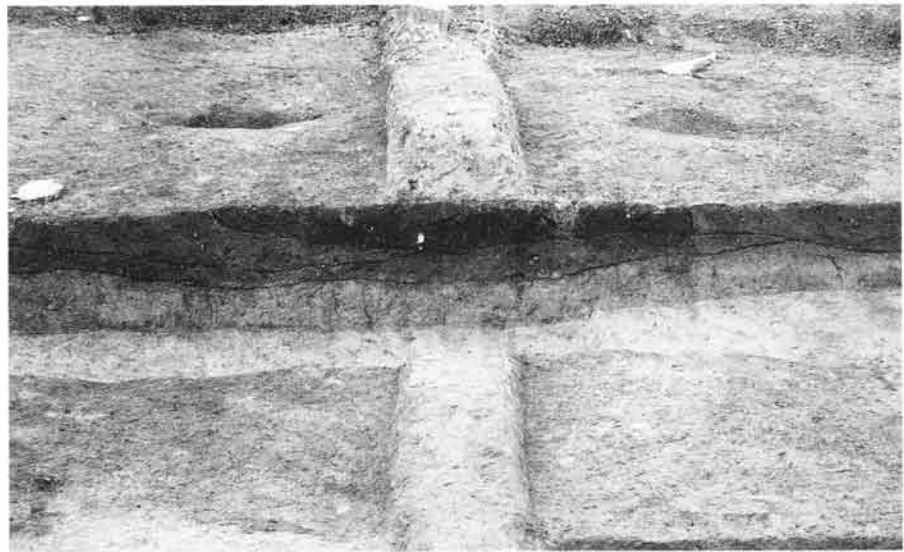


SI-01（北西より）





(北東より)



(北東より)



(北西より)



眼下は萱原集落 遠方に大山を望む



1号墳上より南東方向を望む

(西より)

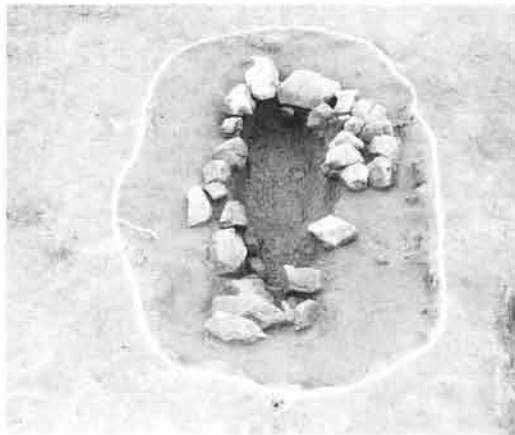


(西より)



(西より)





上 : 1号墳全景 (西より)

中左 : (北西より)

中右 : (南東より)

下左 : (南東より)

中左 : (北西より)



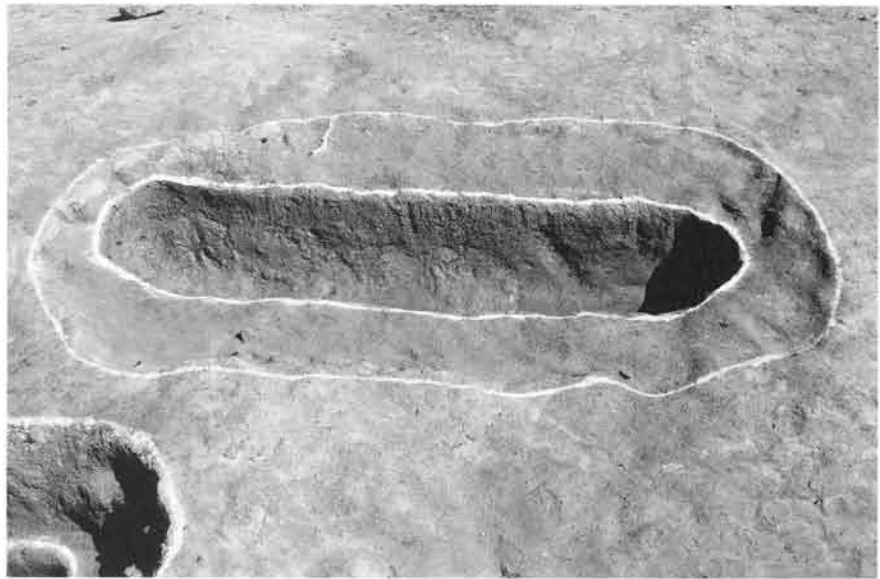
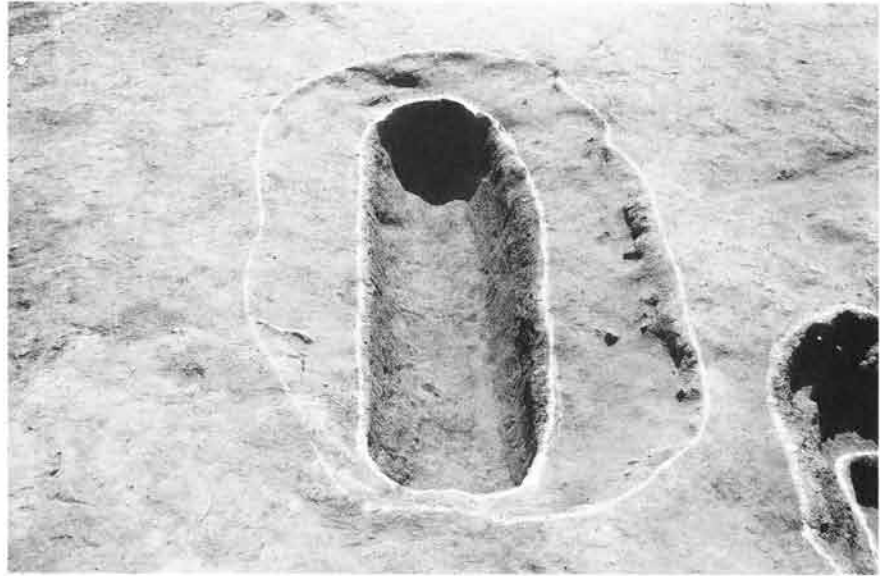
上 : (北西より)

中左 : 主体部北西部 (南東より)

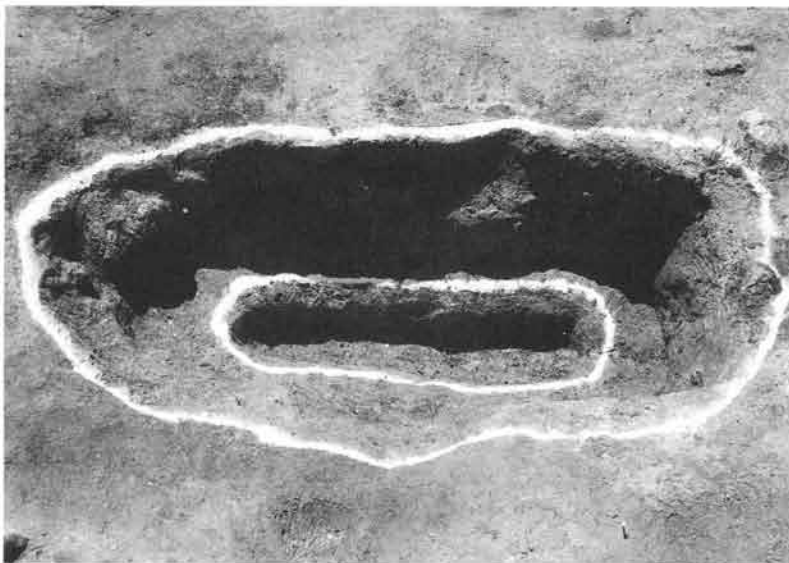
下左 : 主体部 (南西より)

中右 : 主体部北西部 (北東より)

中右 : 主体部南東部 (北西より)



上 : 第1埋葬施設
 (北西より)
中左 : 第1埋葬施設
 (南東より)
下左 : 第2埋葬施設
 (南西より)
下右 : 第2埋葬施設
 (南東より)





第4埋葬施設（南より）

第5埋葬施設（北より）



第4埋葬施設（西より）



第7埋葬施設（東より）

（南より）



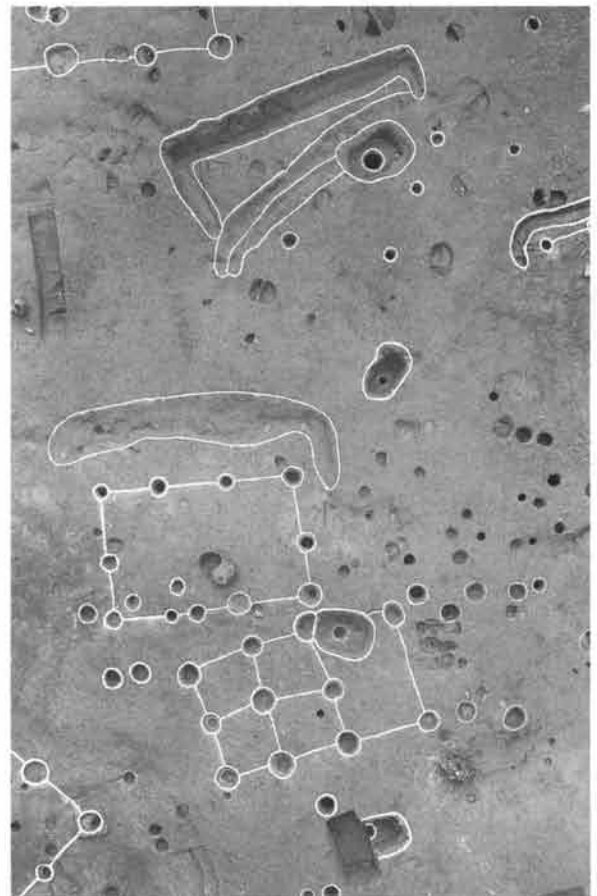
研石山遺跡（北西より）



下山遠景（手前は研石山 5 区）

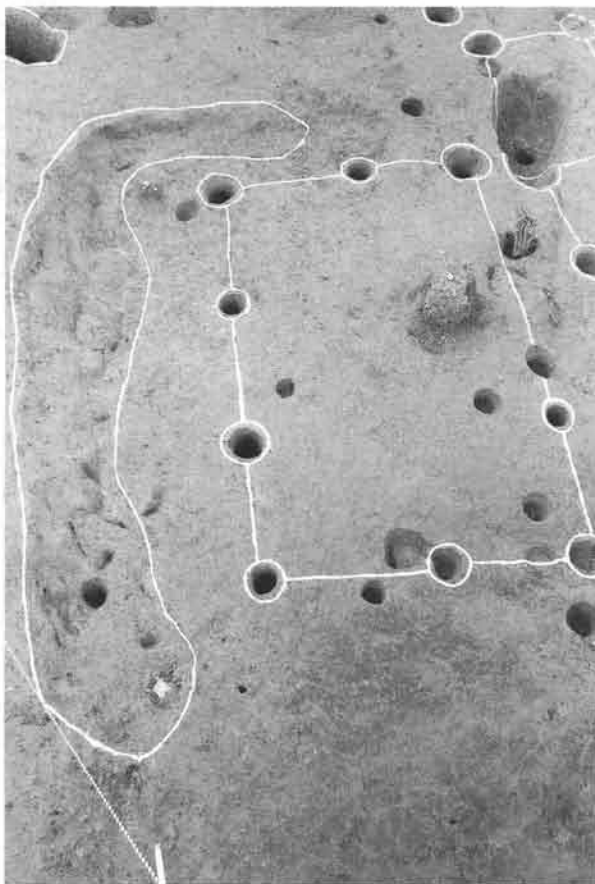


中央部の遺構分布（4～7区）





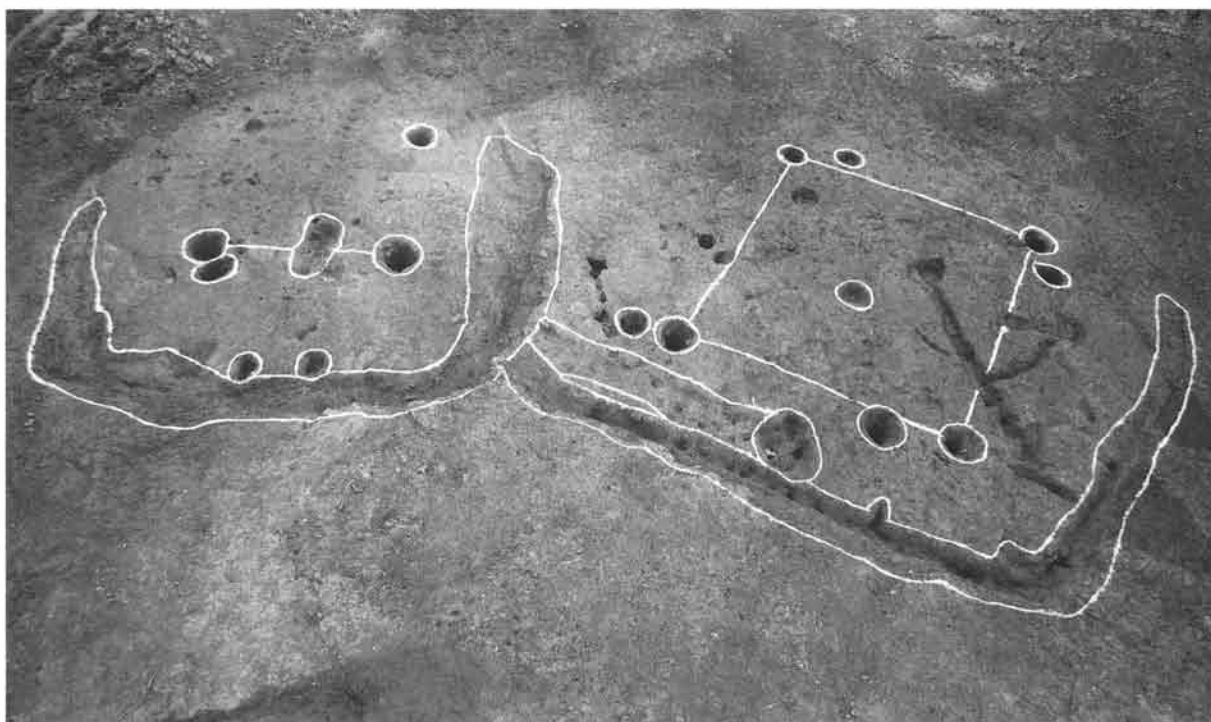
古代流路（東谷）と1～2区の遺構



SB-03



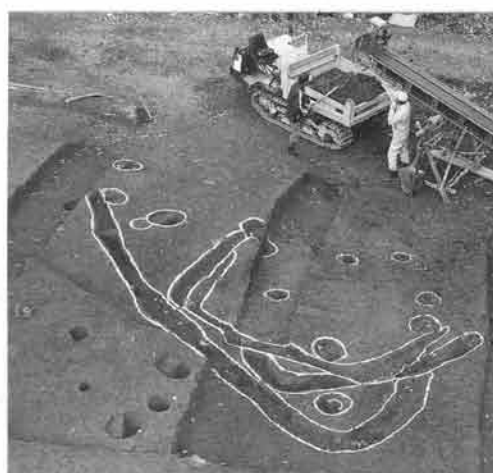
SB-04、SI17～19



SI-01(02)・03



SI-08・SB-01



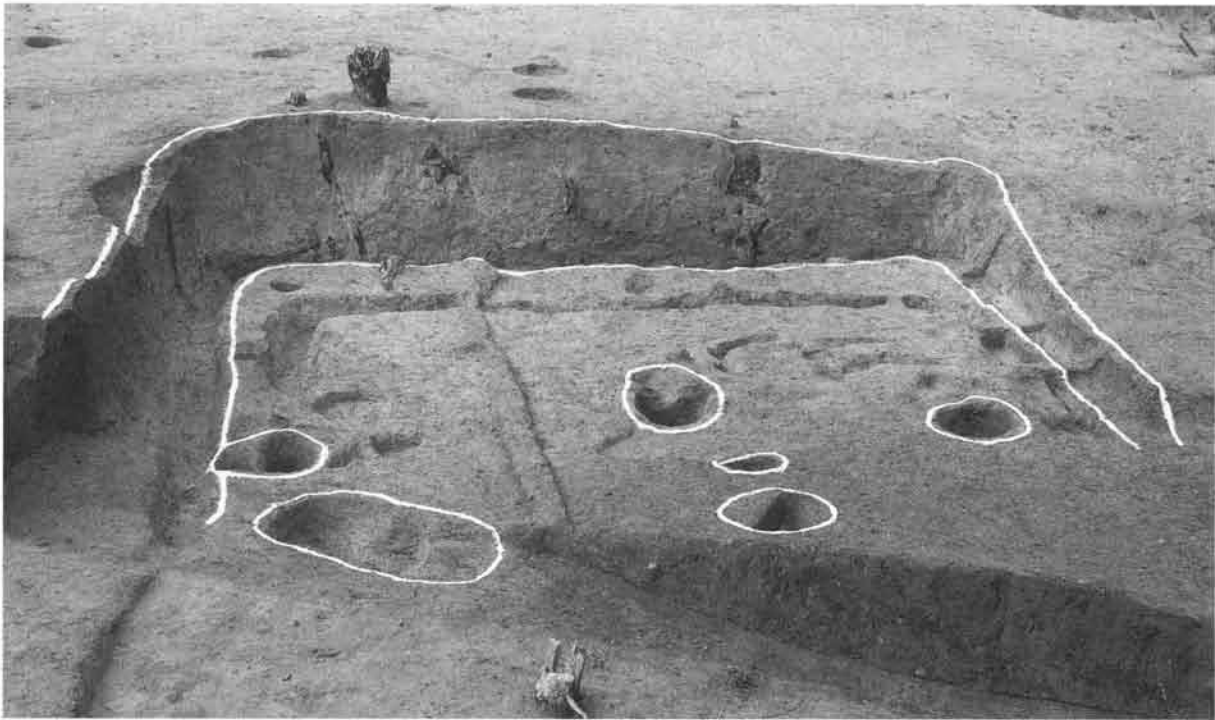
SI-17・18・19



SI-07・11



SI-12・13



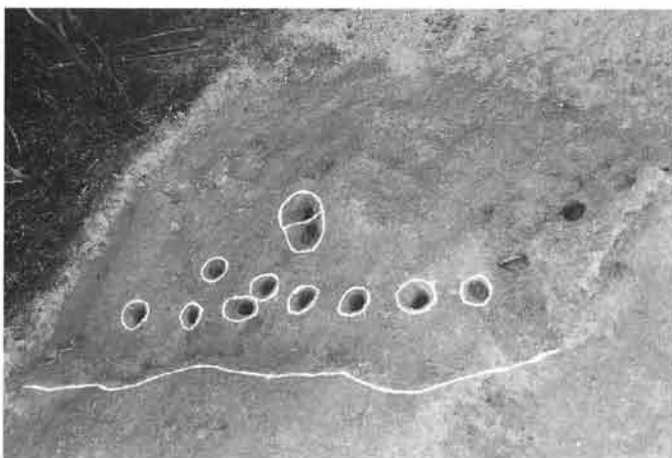
SI-16



SI-16 埋土状況 (中・上層炭化物、焼土含)



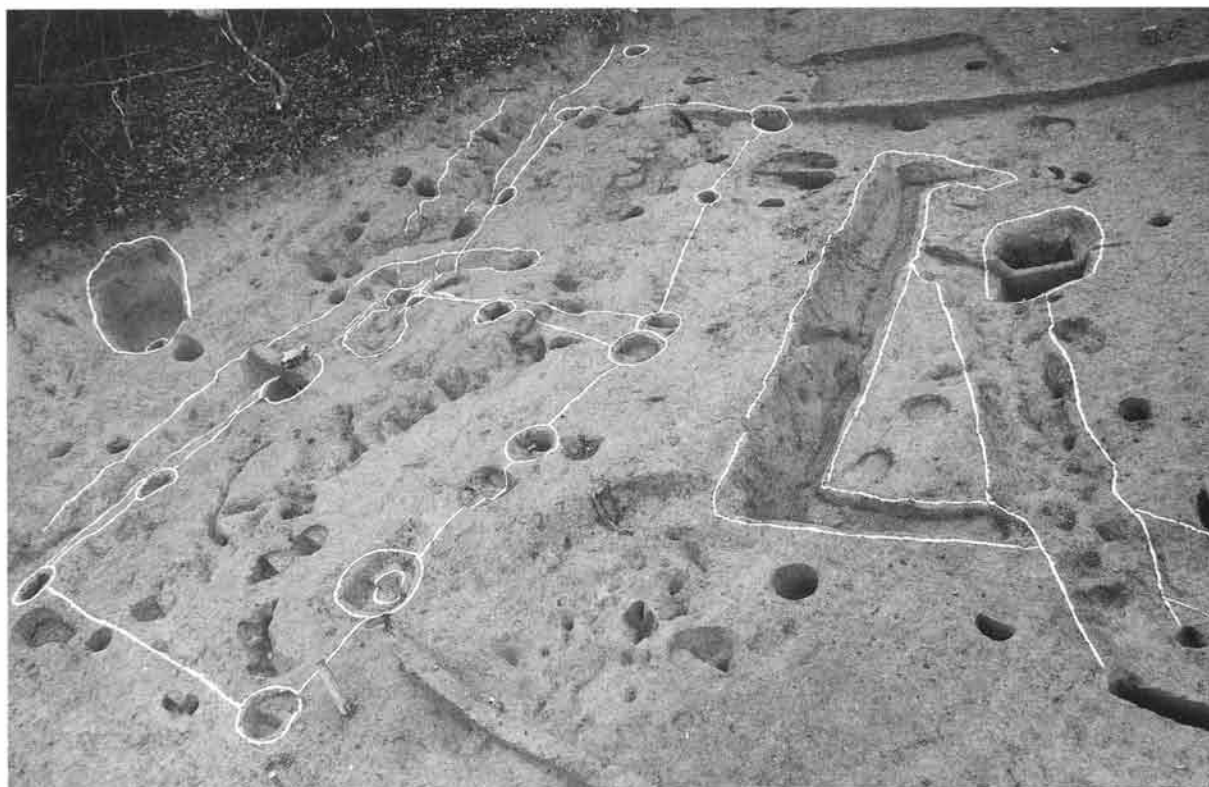
P3 (左)、P4内遺物(挿124-②、③)



SB06・07 (旧SI-05)



第1テラス



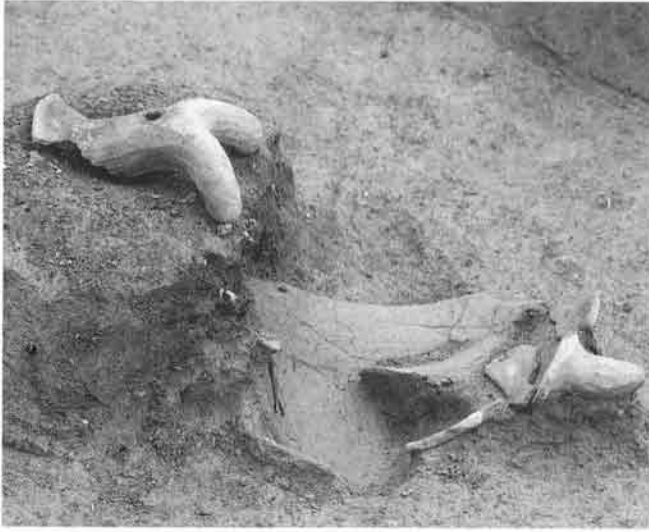
4W2区 SB-05周辺



土製紡錘車・土器（須、土師、古墳後期）



ファイゴ羽口



土製支脚とコシキ

須恵器カメ



第2テラス遺物検出状況



(南東より)



(南東より)



(南西より)



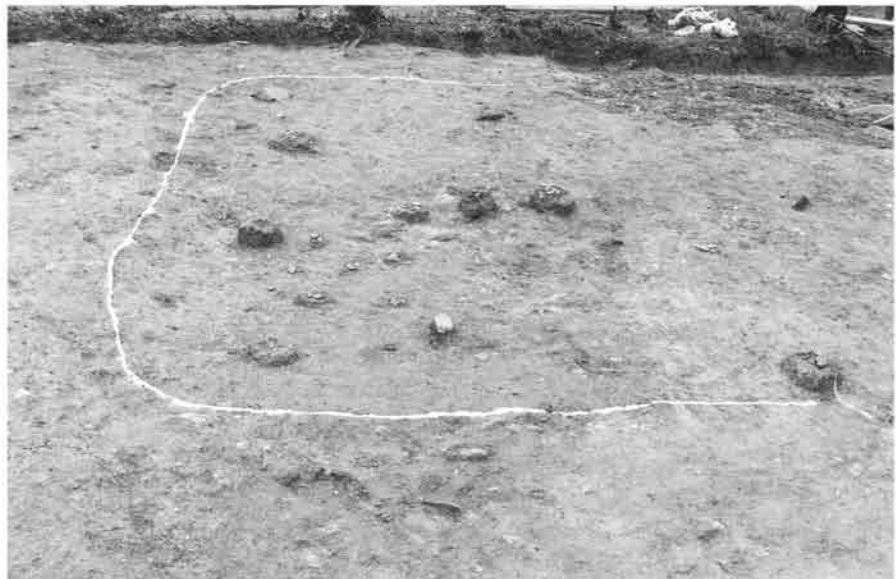
(北東より)



(北西より)



SI-03
SI-01(02)・(03)
(北東より)



SI-04 (北東より)



SI-08, SB01
(南東より)



古代流路（東谷） 3E1杭-4E1杭



古代流路（北谷） 7杭-7W1杭



流路と流木・杭（南東より）



流木集積状況



流木と古墳中期土器出土状況



杭列



古墳中期（甕・椀）



土器の出土状況

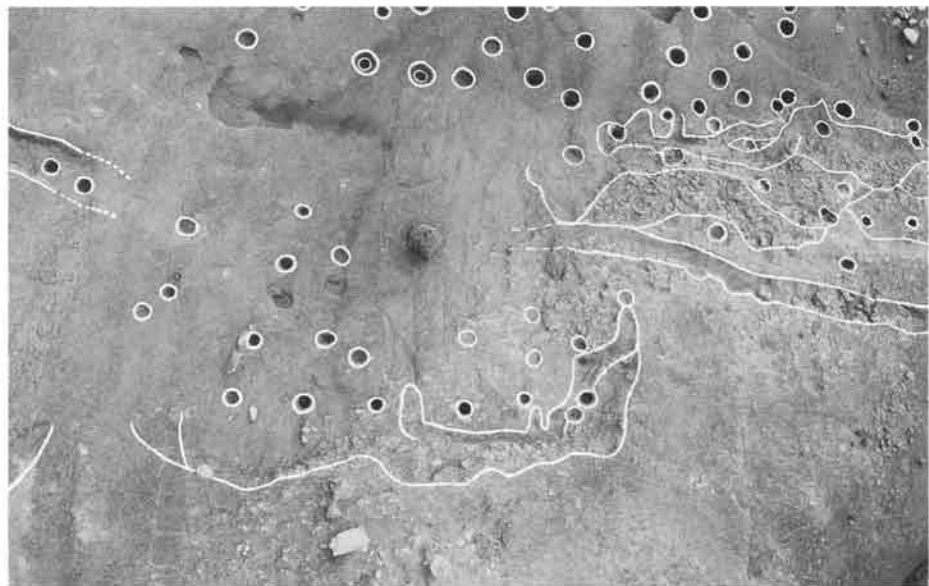
	古墳前期層	古墳前期層
古式土師器		古墳前期層
		古墳中期層
古式須恵器 高杯 (181-2) 碗 (182-13)		



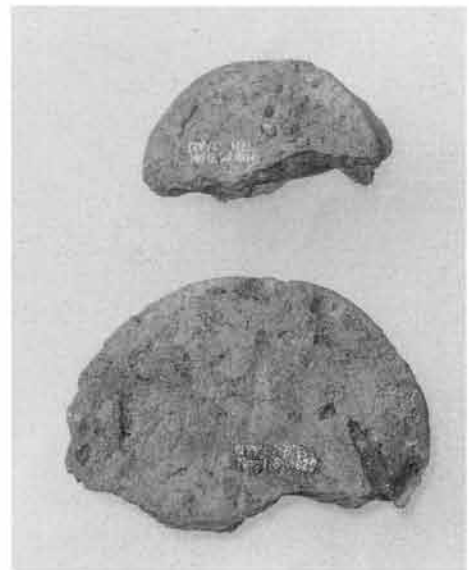
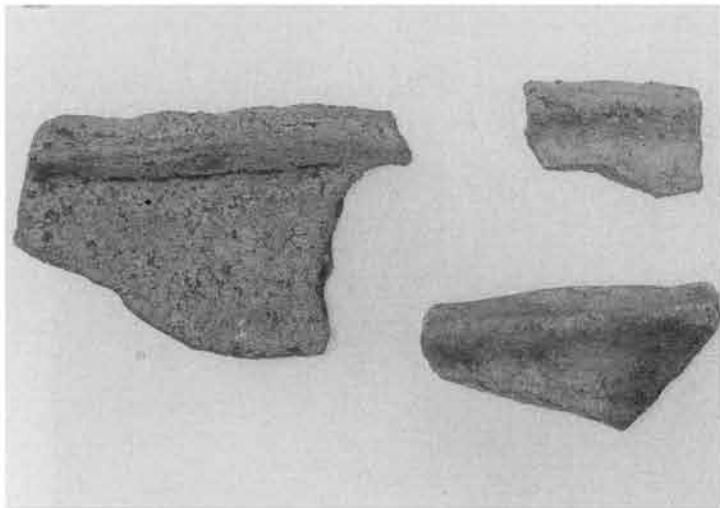
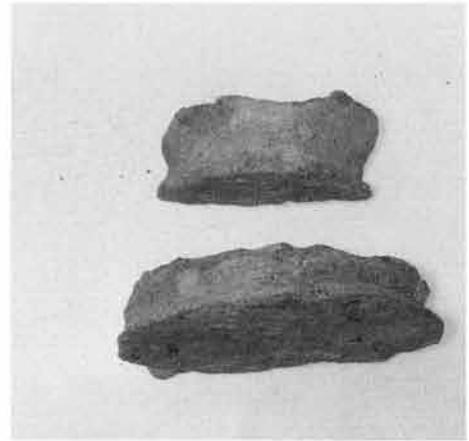
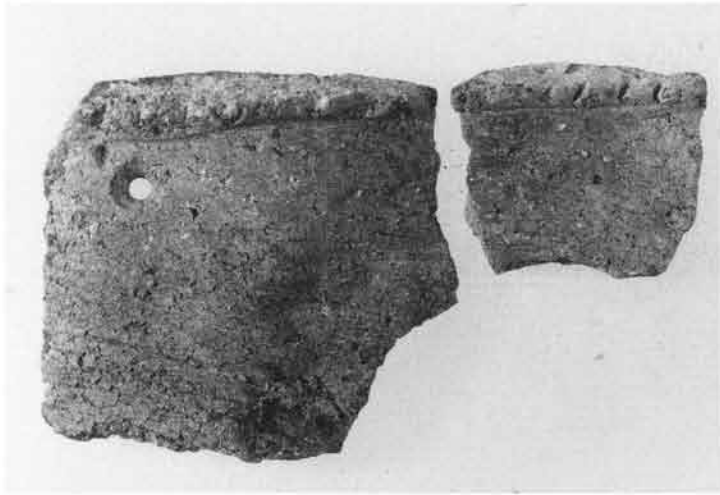
景 (南より)



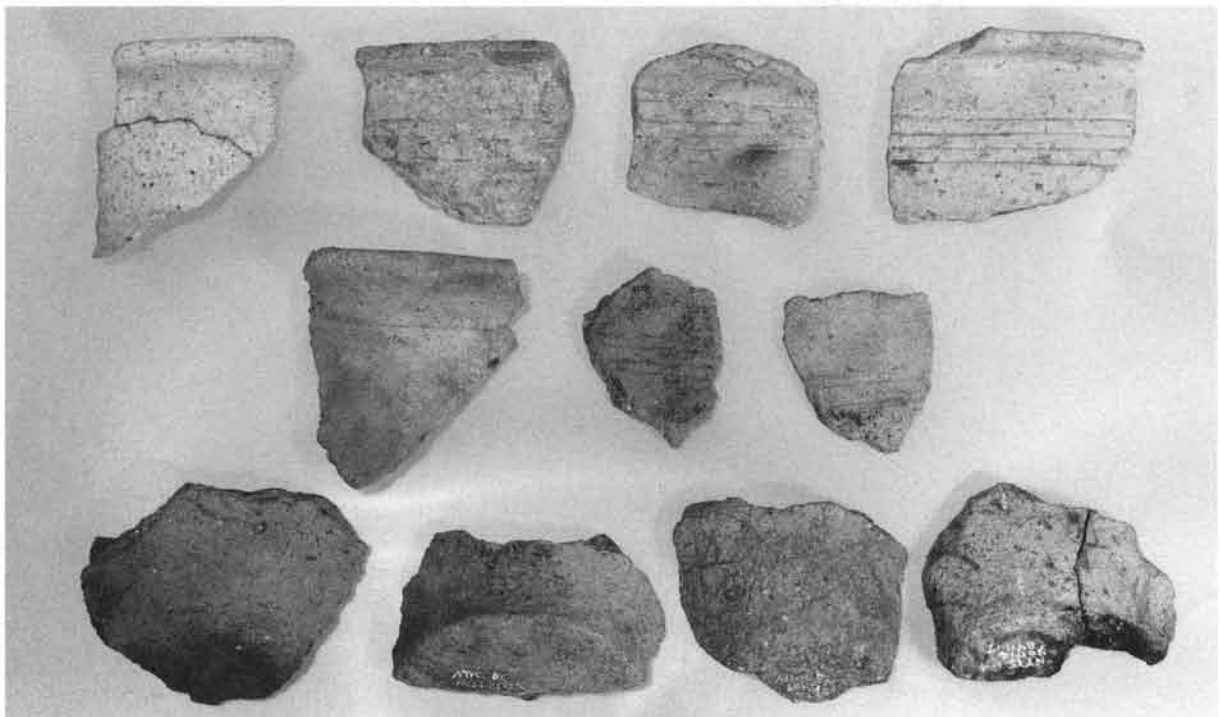
近景 (空中)



建物跡



縄文土器



弥生土器



(181-2)



(181-4)



(181-4)



(181-6)



(181-6)



(181-8)



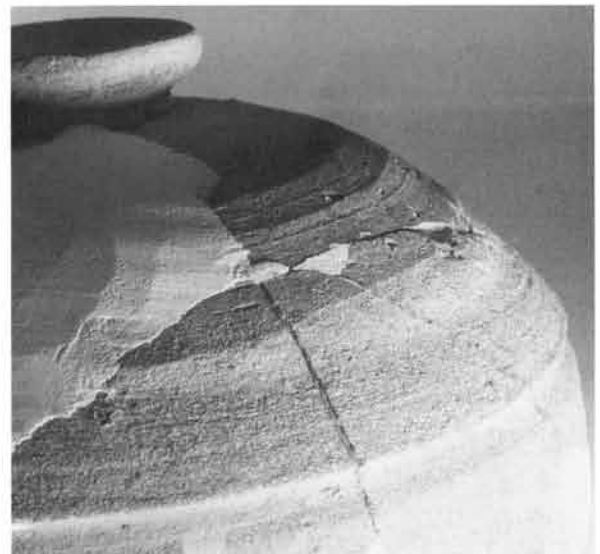
無蓋高杯 (181-8)



(180-11)



(23-13)



(180-4)



(181-22)



(182-22)



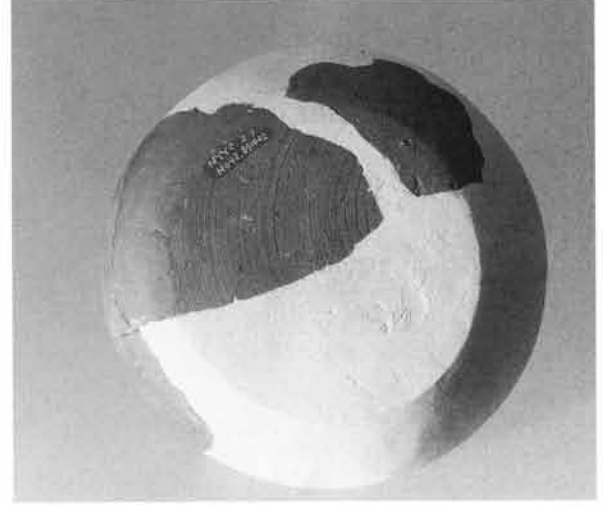
(182-24)

古式須恵器
有蓋高杯
罅(はそう)



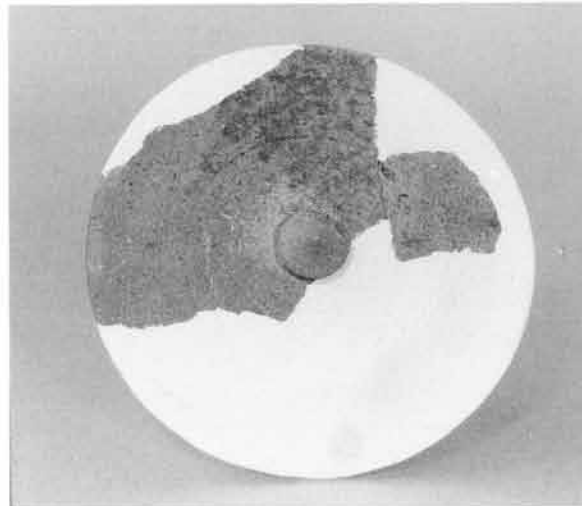
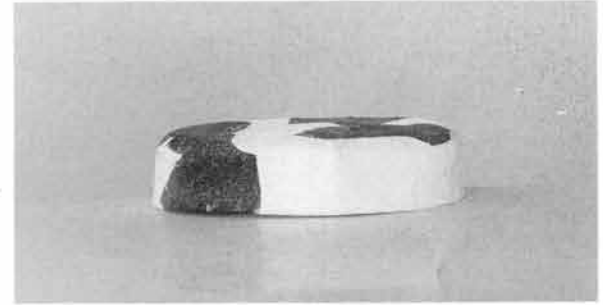
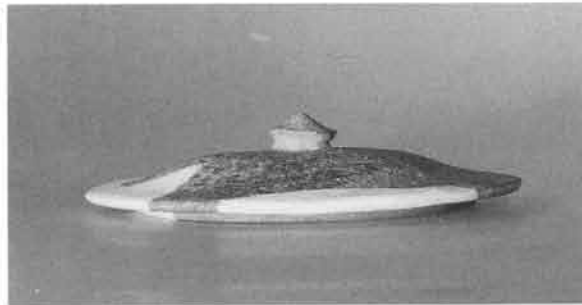
横穴出土須恵器

高杯蓋 (18-7)	高杯 (18-12)
	高杯 (18-11)
杯身 (18-9)	杯身 (18-9)
	杯身 (18-2)
杯身 (18-4)	杯身 (18-4)



(82-B)

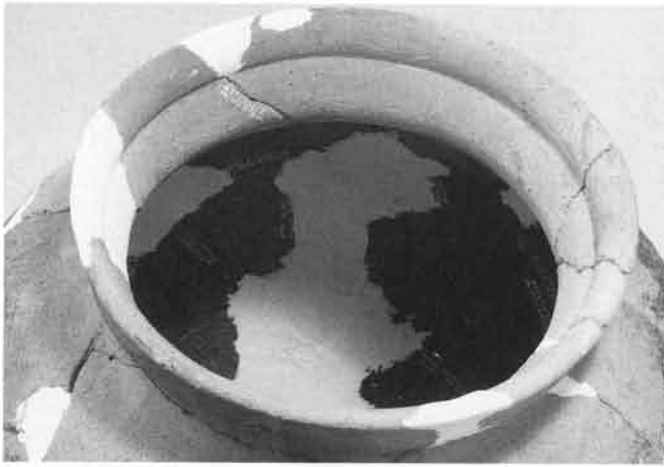
(82-11)



(82-8)

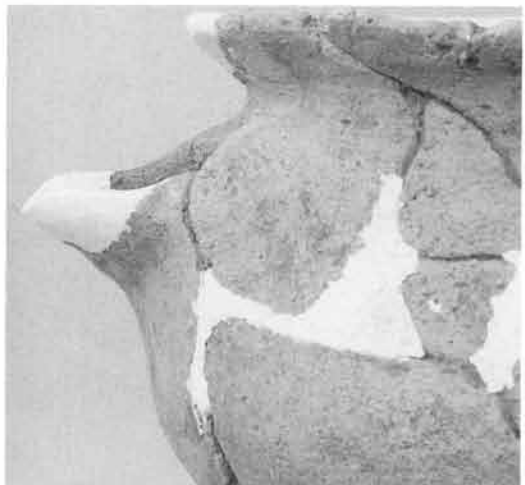
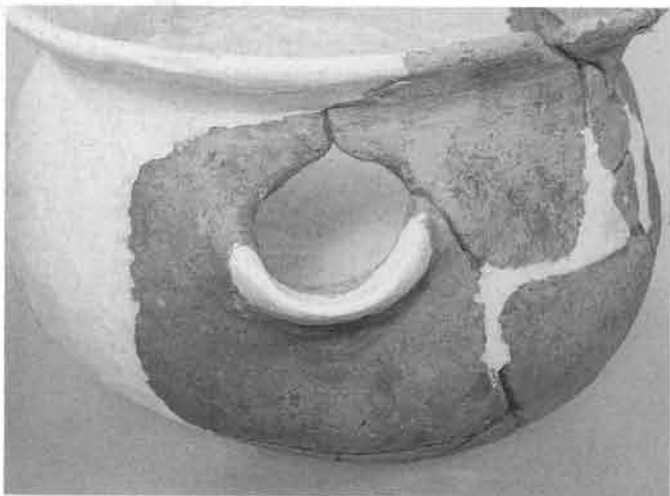
(82-7)

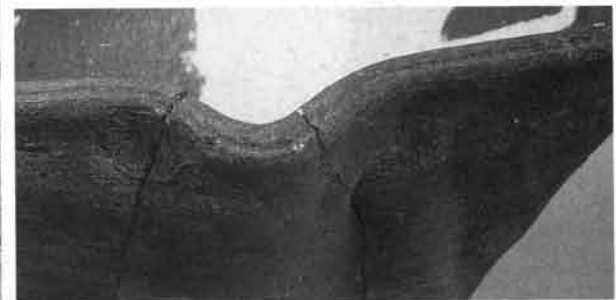
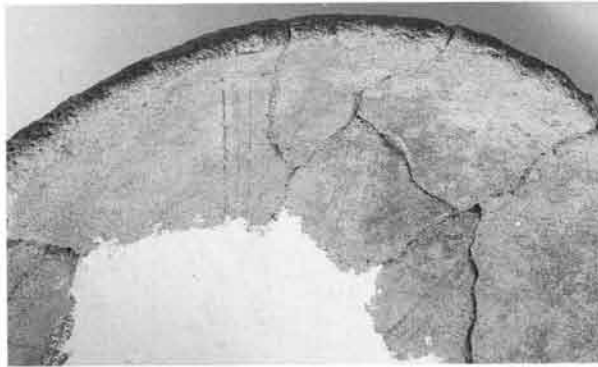
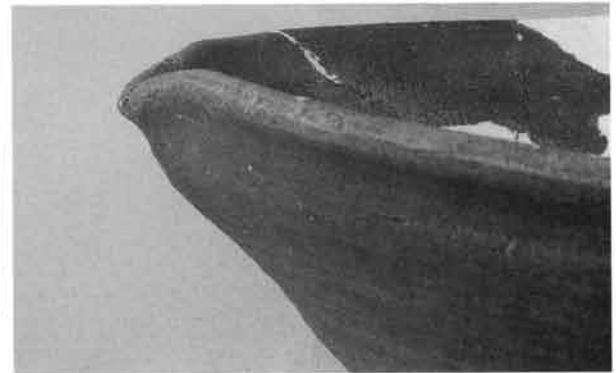
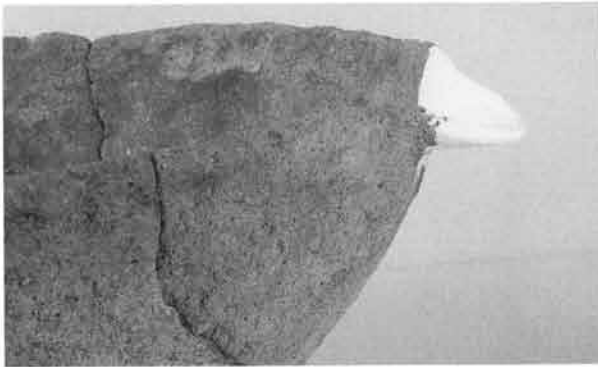
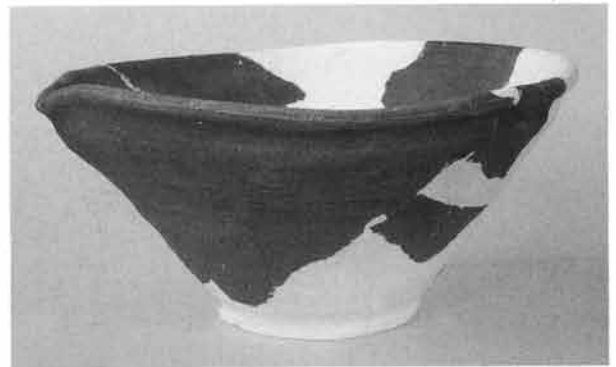
山田遺跡 第2テラス (鍛冶跡) 関係遺物



160-1

165-4
163-2

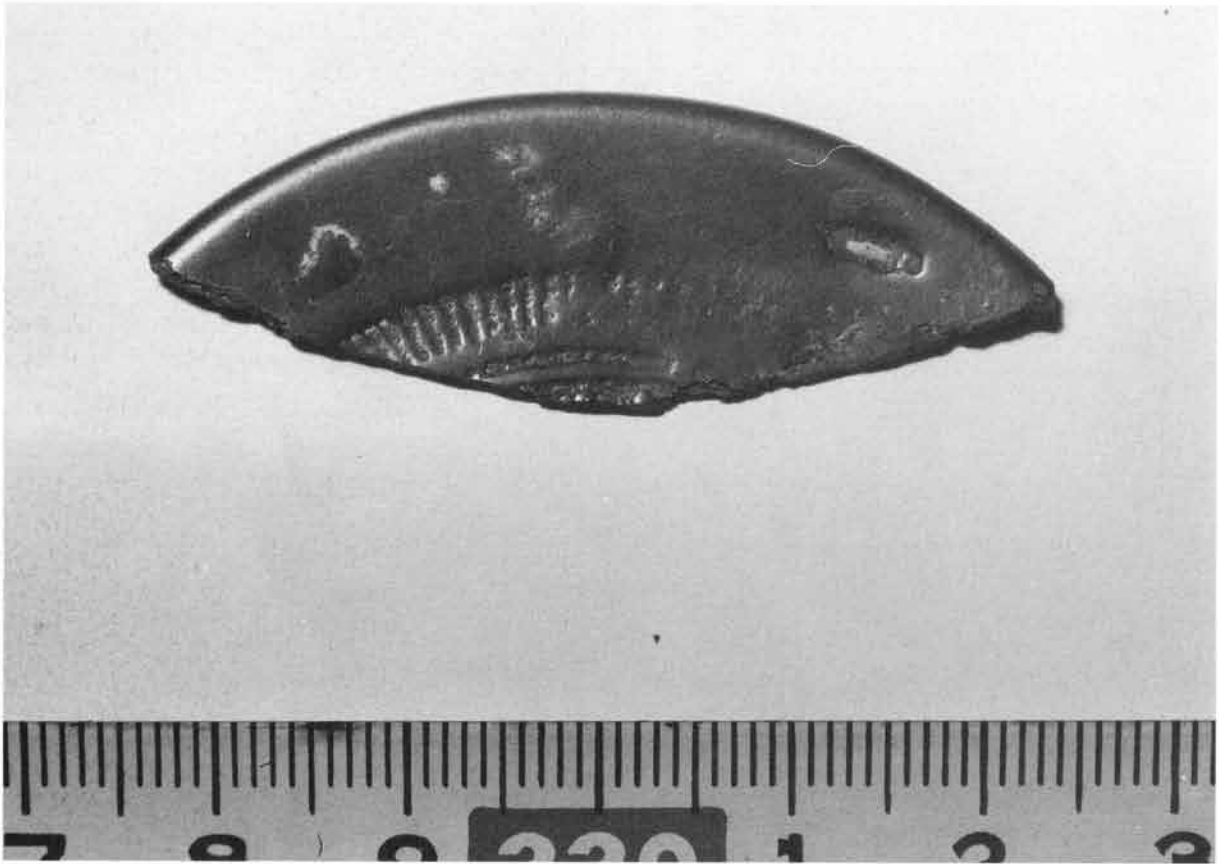




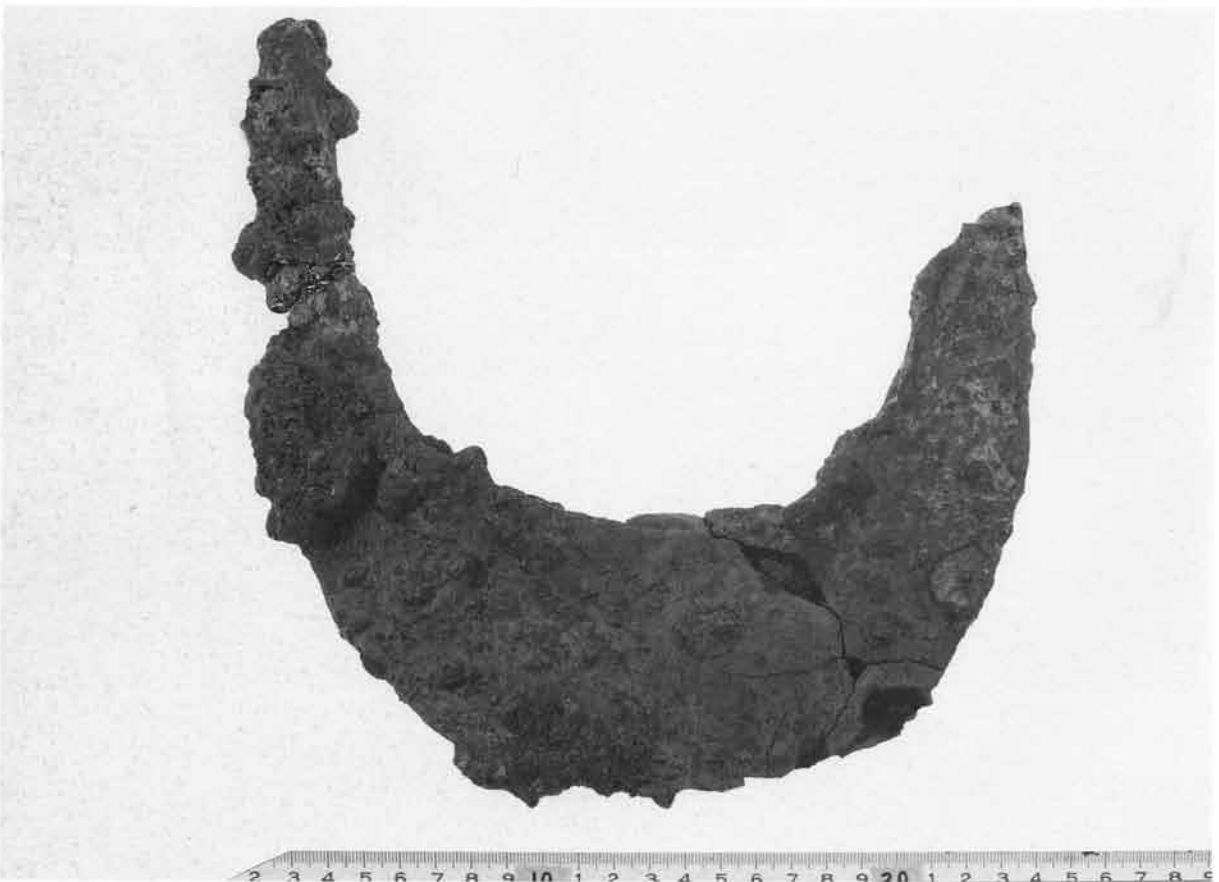
(196-2)

(196-1)

古代末~中世土器



小型仿製鏡 山田遺跡1区



鋏 先 (山田遺跡3区第2テラス・鍛冶遺構)



左上：火鑽臼（研石山5区・北谷）
右上：有孔木製品（研石山5区・北谷）
右下：鉄製紡錘車（研石山5区・東谷）



縦杵の検出（研石山5区・北谷）



調査参加の皆さん（1989・11 新山山田遺跡）



遺跡説明会（1990・4 新山研石山遺跡）

米子市教育文化事業団文化財報告書 7

萱原・奥陰田 I

一般国道180号道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1994年 3月発行

編集発行 財団法人米子市教育文化事業団
鳥取県米子市中町20番地
TEL(0859)22-7209

印製 刷本 有限会社 米子プリント社